朝酌川河川改修工事に伴う

西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ

（海崎地区２）

昭和63年３月

島根県土木部河川課

島根県教育委員会

朝酌川河川改修工事に伴う

西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ

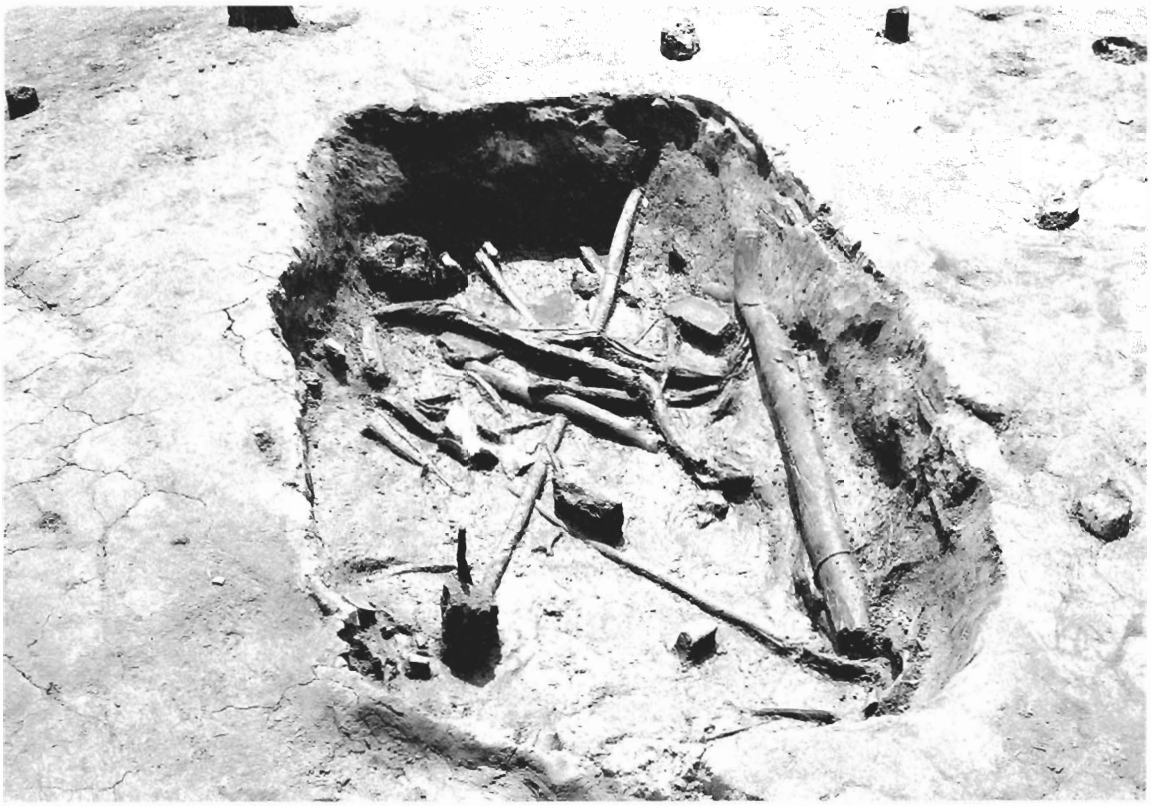
（海崎地区２）

昭和63年３月

島根県土木部河川課

島根県教育委員会

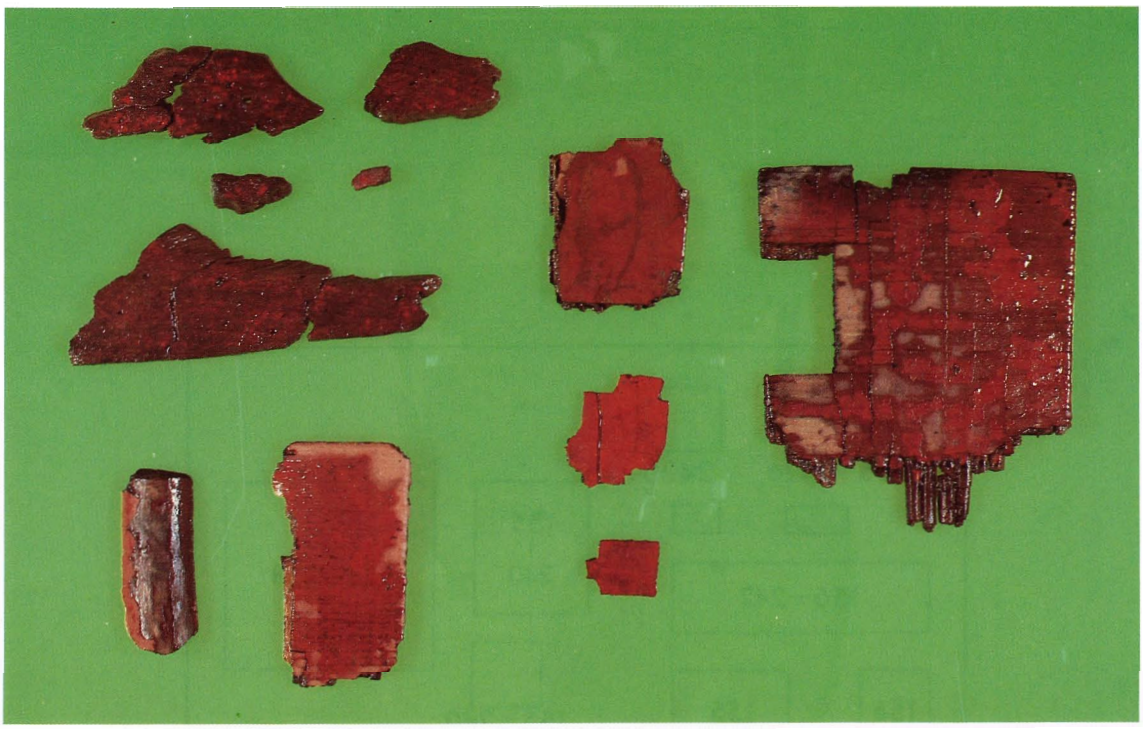
イラスト：古浦秀明



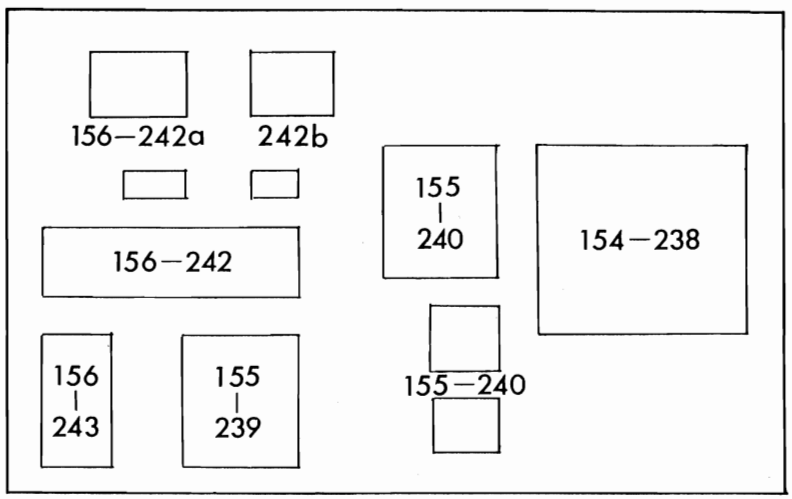
弥生時代中期の土壙（SK01）

弥生時代中期の土壙（SK01）

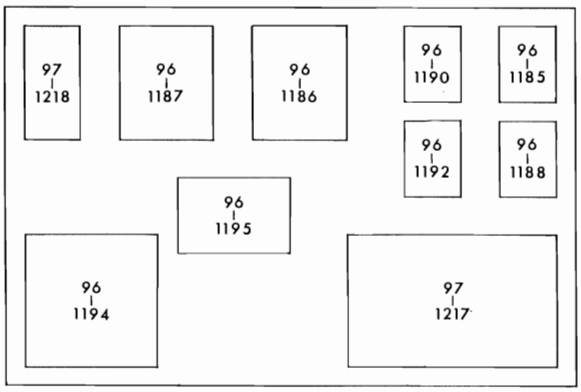
鉄　斧（弥生時代中期）

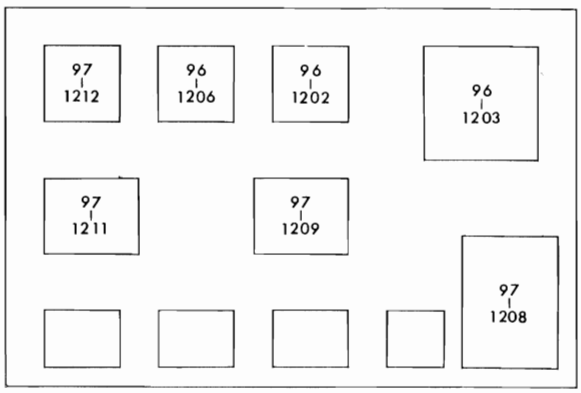


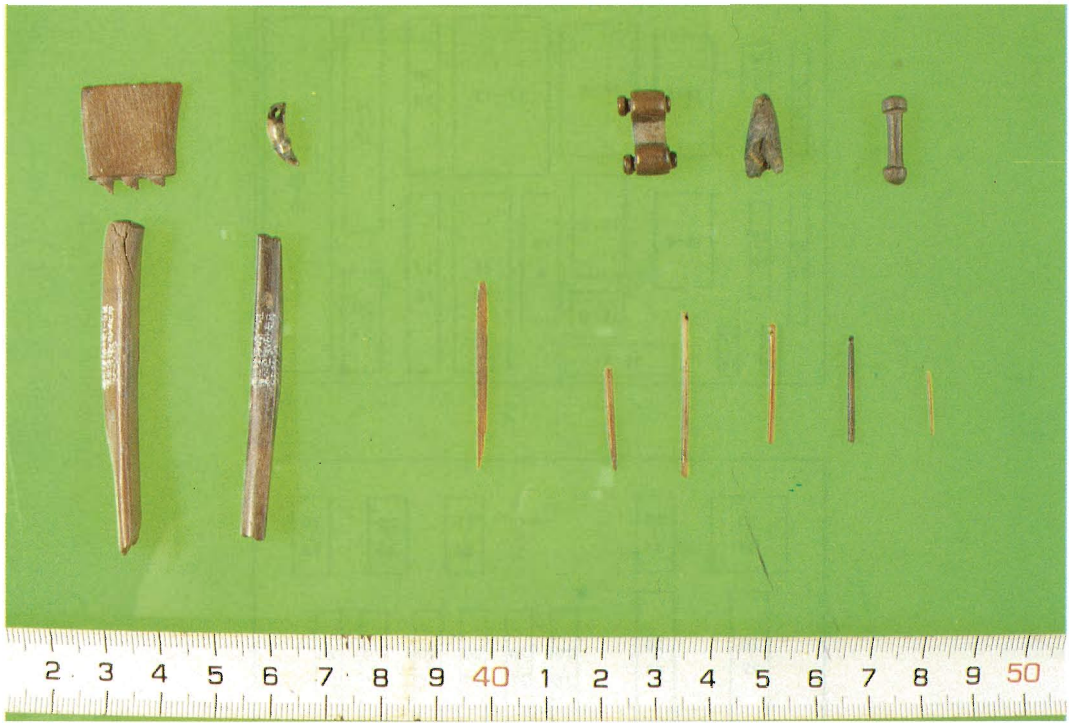
弥生時代中期の漆塗木製品


156—242a
242b
155
240
154—238
156—242
156
243
155
239
155—240

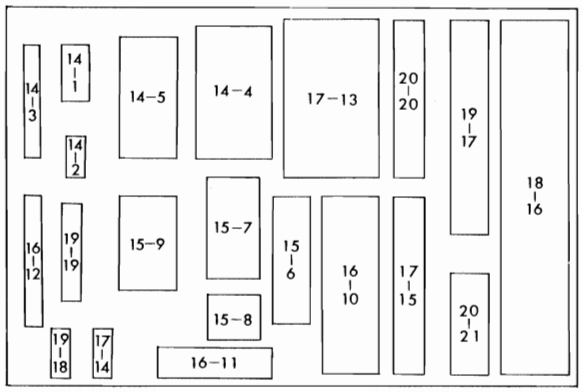
弥生時代中期の漆塗土器

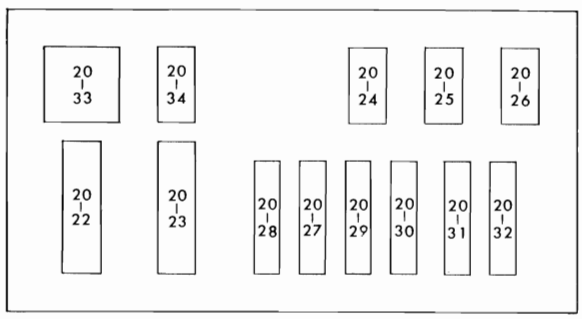

97
1218
96
1187
96
1186
96
1190
96
1185
96
1192
96
1188
96
1195
96
1194
97
1217


97
1212
96
1206
96
1202
96
1203
97
1211
97
1209
97
1208



弥生時代中期の骨角器


14-3
14-1
14-5
14-4
17-13
20-20
19-17
18-16
14-2
16-12
19-19
15-9
15-7
15-6
16-10
17-15
20-21
15-8
19-18
17-14
16-11


20-33
20-34
20-24
20-25
20-26
20-22
20-23
20-28
20-27
20-29
20-30
20-31
20-32

序

本報告書は、島根県教育委員会が島根県土木部から委託を受けて昭和59年度に実施した朝酌川河川改修工事予定地内にある西川津遺跡の埋蔵文化財発掘調査の記録です。

発掘調査では、弥生時代の木製品加工場跡やヒョウタンの貯蔵施設など貴重な埋蔵文化財が発見され、各方面より多くの関心がよせられることになりました。

本書が、広く一般の埋蔵文化財に対する御理解に多少なりとも役に立てば幸いに存じます。

昭和63年３月

島根県教育委員会

教育長　松　井　邦　友

例　　言

1　本書は昭和59年度、島根県教育委員会が県土木部の委託を受けて実施した朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡の発掘調査の概要である。

2　調査組織（昭和59年度）

調査主体　島根県教育委員会教育長　栗栖理知

事務局　文化課課長　美多定秀、課長補佐　長谷川行雄、長瀬忠治、蓮岡法暲、文化係係長　岩崎況一朗

調査指導　山本　清（島根県文化財審議員、島根大学名誉教授）、下條信行（愛媛大学法文学部教授）、田中義昭（島根大学法文学部教授）、町田　章（奈良国立文化財研究所）、大西郁夫（島根大学理学部助教授）、徳岡隆夫（同）、高安克己（同）、井上貴央（鳥取大学医学部助教授）、森川昌和（福井県立若狭歴史民俗資料館）、入江文敏（同）、網谷克彦（同）、勝部衛（玉湯町立玉作資料館）

調査員　主幹・埋蔵文化財第2係長　石井悠、文化財保護主事　宮沢明久
主事　内田律雄

調査補助員　島根県教育文化財団嘱託　桑原真治、鍛冶正彦

3　調査協力　渡辺貞幸、佐原　真、近藤喬一、片岡詩子、金子浩昌、古浦秀明、足立　力、田中和雄、斎野裕彦、田村晃一、古山　学、工楽善通
小田富士雄、小野山　節、宮本一夫、小原貴樹

4　掲載図面の作成及び遺物整理には次の者が携わった。
竹内信枝、佐藤順子、野津順子、林　健亮、小城清政、長羅　忠、古瀬岩男、藤原和子、鈴政泰子、増原泰子、宮本守人、金津まり子、野田清美、佐藤綾子、吉岡玄一、岡田昌子、若佐裕子、川上登志江、真野啓子、為西あや子、基常明美、栂瀬さきえ、野津英治、土井由美子、片山礼子、有富千恵、川本桂子、岡本登見雄、高木知恵子、見崎千里、永田桂子、永田かおり、青木紀子、呉　立山、江川幸子、須藤聖子、瀬田明子

5　本報告書の執筆は渡辺正巳、井上貴央、片岡詩子、内田律雄が行った。

6　本報告書の編集は上記調査員や指導者の協力を得ながら、内田律雄が行った。

目　　次

Ⅰ　調査の概要…… 1

1　遺　構…… 2

（1）　弥生時代中期の遺構…… 2

①　掘立柱建物跡…… 2

②　土壙（ＳＫ）…… 2

③　ウッドサークル…… 8

④　貝層…… 11

⑤　溝状遺構…… 12

（2）　弥生時代後期の遺構…… 13

2　遺　物…… 18

（1）　弥生時代中期の遺物…… 18

（2）　弥生時代後期の土器…… 111

（3）　古墳時代前期の土器…… 133

（4）　土錘・石錘…… 137

（5）　紡錘車…… 137

（6）　弥生時代中期の木製品…… 142

（7）　弥生時代後期の木製品…… 202

（8）　古墳時代前期の木製品…… 214

（9）　石器…… 215

Ⅱ　自然科学的分析…… 243

1　松江市西川津遺跡出土木製品の樹種について…… 244

2　西川津遺跡弥生中期相当層から検出された動物遺存体について…… 261

Ⅲ　写真図版…… 275

Ⅰ 調 査 の 概 要

昭和59年度・60年度に発掘調査の対象としたのは、昭和58年度に引き続きその南西側、幅25.0m×100.0mの範囲である。発掘は調査区が広範囲にわたり朝酌川に沿ってあり、水田下2.0m以上掘り下げる必要があると思われたので、作業の安全を第1に考慮し調査対象範囲の外側より安全勾配でもってオープンカットし、表土および遺物包含層の一部をあらかじめ調査員立会いのもとに掘削して行った。また、調査区の内側には土層観察を兼ねた排水溝を周囲に掘り込み、水中ポンプで24時間排水を行いながらできるだけ発掘作業が土の乾いた状態でできるようにした。

発掘調査によって確認された層序は次のようである。

表土（耕作土）
古墳時代前期（遺物包含層）
弥生時代後期（遺構＋遺物包含層）
弥生時代中期（遺構＋遺物包含層）
弥生時代前期（遺構）＋縄文時代後・晩期（遺物包含層）

このうち、弥生時代中期層が最も安定しており、多くの遺構、遺物が検出された。特に、2×3間の掘立柱建物跡、土坑、木製農耕具に関わる施設と考えられるウッドサークル群等は本県ではじめて確認されたものであり、遺物では本報告で図示したような多量の木製品が出土し、多方面より多くの関心がよせられることとなった。

弥生時代前期においては、朝酌川の旧河道と考えられる溝状の遺構があり、中期にも引き続き存在しており、縄文時代晩期の土器が共伴して出土したことが注目された。また、遺物には10個体以上にもおよぶ土笛、貝層から出土した各種の骨角器、多量の動植物の遺存体、緑色凝灰岩を材料とした管玉作り等、当地方においていくつもの新発見があった。

古墳時代前期層では遺構は発見されなかったが、本県ではこれまでこの時代の木製遺物は皆無に近い状態であったが、豊富な木製品の種類が明らかになった。

このように、本遺跡の発掘調査によって、縄文時代から古墳時代にいたる期間の多くの新しい情報を入手することができた。ただし、調査区のほぼ中央部が後世の開発によって削平されており、昭和58年度調査区で検出した縄文時代前期～前期末の遺物包含層との関係をつかめなかったのが惜しまれた。以下は、主として、昭和59年度調査区の発掘調査の概要である。

1. 遺　　構

弥生時代中期の遺構

弥生時代中期の遺構は、掘立柱建物跡群（ＳＢ01～ＳＢ04）、土坑群（ＳＫ01～ＳＫ03）、ドングリの貯蔵庫（ＳＫ04）、ウッドサークル群（ＳＺ01～ＳＺ023）、貝層、溝状遺構を検出した。これらの遺構は大別して調査区内北側の一群と中央部の一群との二群に分けられるが、その中間にあたる部分は本来その地形が東側丘陵にむかい高くなっていたのを、水田の開発によって水平に削平されたものと考えられる。従って、この空間には例えば、竪穴住居跡とか水田跡のような遺構が、あるいは存在していたかもしれない。

掘立柱建物跡

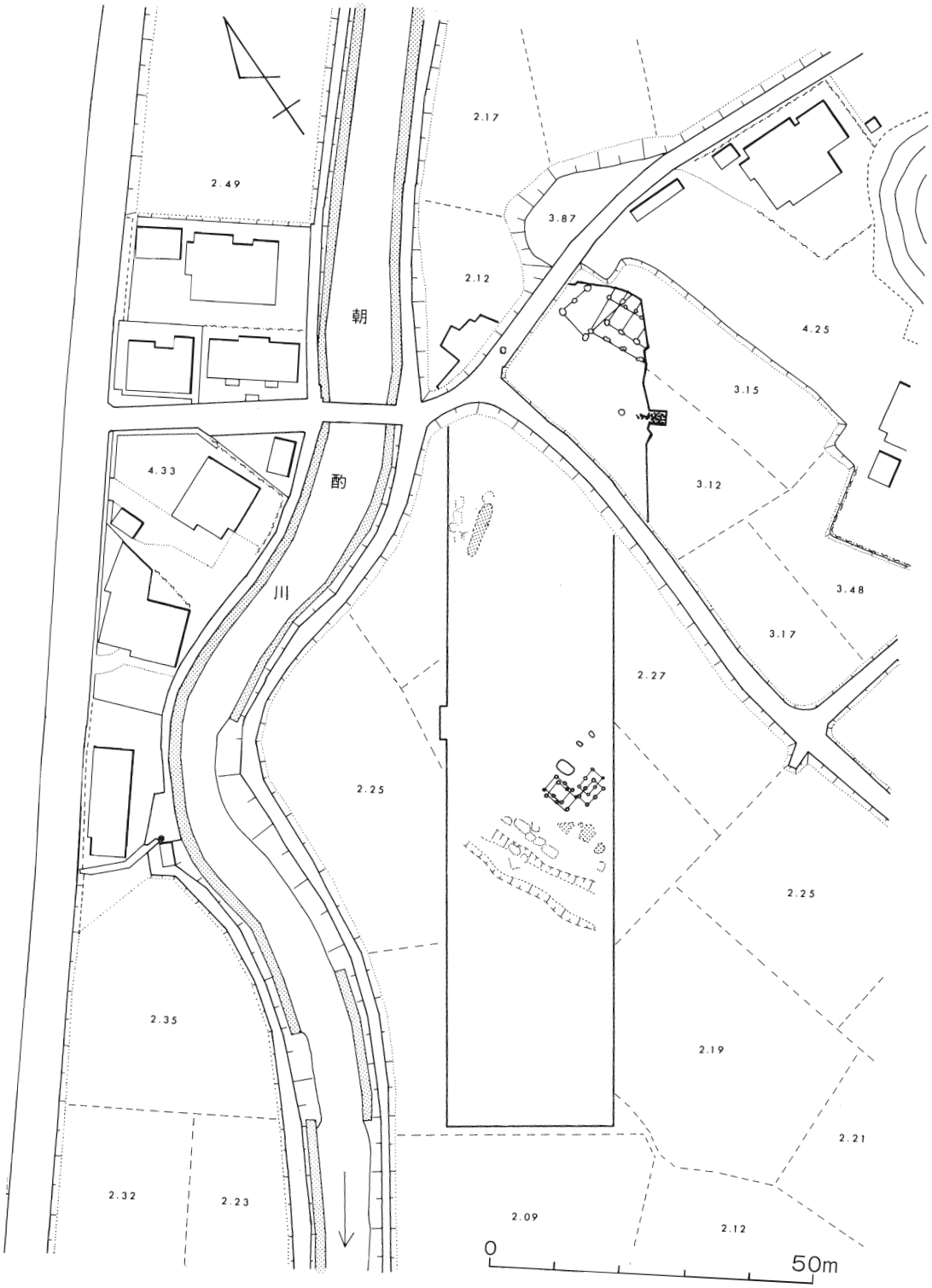
掘立柱建物跡は、発掘調査区のほぼ中央東壁よりに土坑群と共に発見された無数の柱穴群の中から（図版１）、ＳＢ01、ＳＢ02、ＳＢ03、ＳＢ04の４棟を確認した（第３図、図版２）。いずれも１×２間の構造で、それぞれ2.42×3.08ｍ、2.68×3.73ｍ、1.82×3.31ｍ、1.79×2.92ｍの規模である。

これら掘立柱建物跡群の柱穴は、径20.0～40.0㎝、検出面からの深さ20.0～30.0㎝の規模のものである。柱穴の中には、板やその他の木材が充填してあり、中には柱根が残存している例もあった（第４図、図版３）。これは遺跡のある場所が当時から水分を多く含み、むしろ、掘立柱建物を建てるにはあまり適さない条件であったことを示していると思われる。逆に、この種の建物がこうした場所に設置されなければならない理由があったと考えられ、後述する加工途中の木製品との関係が注目されるところである。柱穴の中の木材は、例えば、静岡県登呂遺跡の柱穴内にみられる礎板と同様な機能をもつものであろう。(註１)

検出された掘立柱建物跡は、ＳＢ01とＳＢ02が切りあい関係にあり、同様に切りあい関係にあるＳＢ03とＳＢ04よりやや規模の大きなものである。さらに、ＳＢ02とＳＢ03はそれぞれＰ17とＰ４が重複して発見されているので、ＳＢ01とＳＢ03、ＳＢ02とＳＢ04はそれぞれセットとして「Ｌ」字状に配置され、同時期に存在していた可能性が高い。これら大・小の掘立柱建物に囲まれるように、ヒョウタンの種子を出土したＳＫ01が検出されたこともこれを裏づけるものであろう（第２図）。

土坑（ＳＫ）

ＳＫ01　掘立柱建物跡に囲まれた位置に検出されたＳＫ01はヒョウタンの貯蓄施設であったと考えられる（第５図、カラー図版１）。規模は長さ2.70ｍ、幅1.50ｍ、検出面より中央部での深さ0.70ｍを測る。北隅を一部欠くがもとは隅丸長方形の整った平面プランで



第1図　西川津遺跡海崎地区発掘調査区

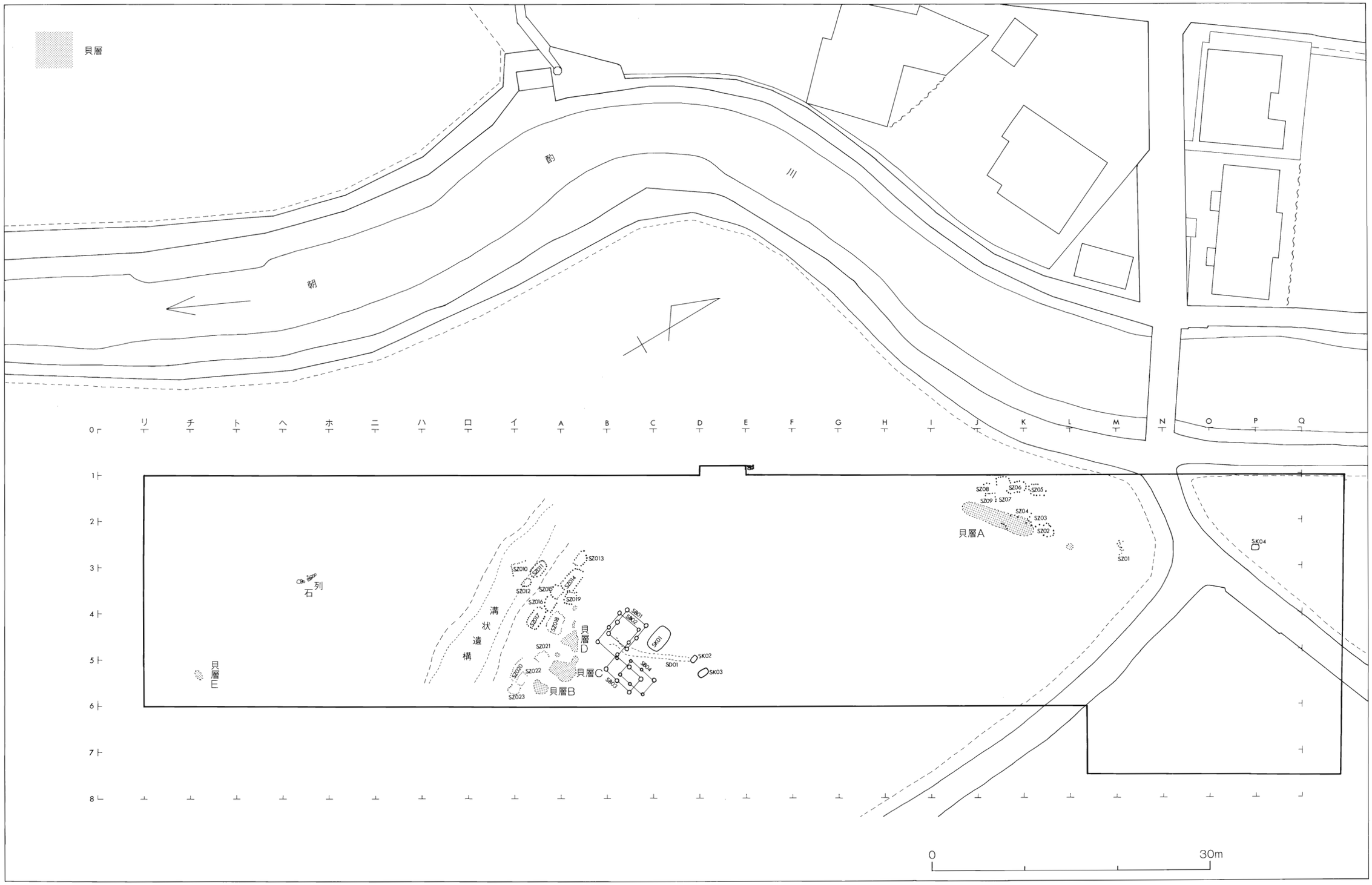
あったことが知られる。底は舟底形を呈している。第5図に示したa層は茶黒色有機質土で、この層の直上の層との間には部分的にムシロ状の植物質のものが認められた。このa層を取り除くと多数の木材が検出されたが、それらはこの土坑を覆っていた上屋構造の木材であったと考えられる。その上屋がどのような構造のものであったのかは即断しかねるが、第142図165はその木材の一つを図示したものであり、頭部が二股の自然木を長さ約1.6mに切断して使用していることから、地表上へはせいぜい30～40cmほど高くさせた簡単な施設であったと考えられる。このことより、第5図a層はこの土坑の上屋構造が陥没したものと考えられる。土坑内からは石斧片や木製農具が発見されたが、いずれも完成品が破損したものであった。この他に弥生土器や獣骨の小片が混在していた。特徴的であったのは、3個体のヒョウタン（第5図では粗いスクリーントーンで示した）とa層から多量のヒョウタンの種子が出土したことである。その自然科学的な分析は次年度で報告する予定である。

SK02　土坑SK01の東側約3.5mに検出された長さ1.25m、幅0.55m、深さ0.13mのほぼ南北方向に長い長方形の土坑である（第6図、図版4）。底はほぼ水平で、東壁に接して第120図41に示したような木製鍬（完成品・使用痕あり）があった。

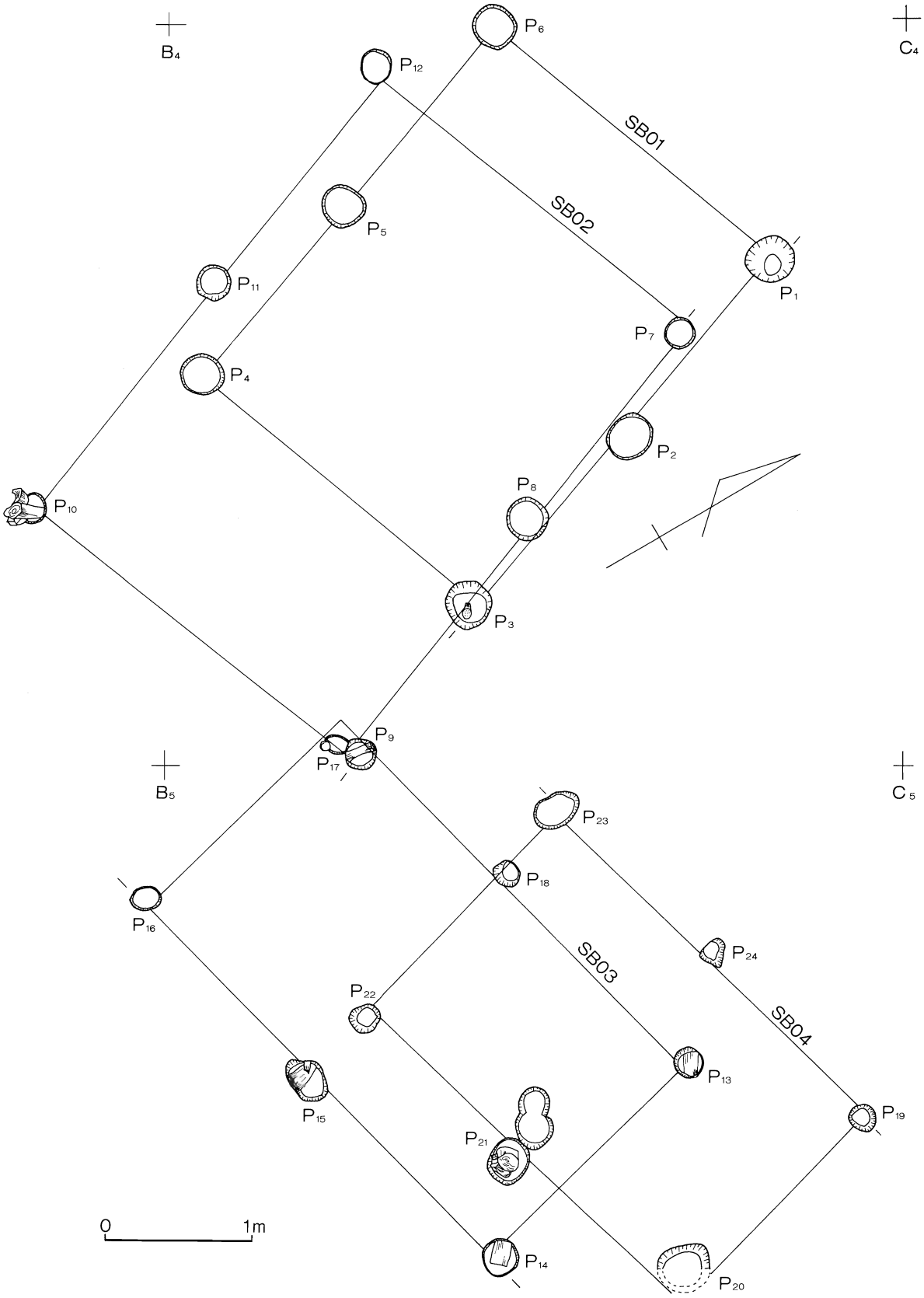
SK03　SK02のさらに東側、約1.2mの位置にSK02に類似した土坑を検出した（第6図、図版5）。南北1.2m、東西0.8m、深さ0.12mを測るが北側の一部は弥生時代前期の貝層に掘りこまれている。床は水平でなく北東にむかい高くなっている。土坑内には板状の木製品が二枚あったが、このうち加工痕のあるものを第145図177に示した。田下駄等の未成品と考えられる。

SK01、SK02、SK03はその主軸方向をほぼ南北にとっており、これらの西側～南側に検出された柱穴群や掘立柱建物跡群と一連の遺構であったと考えられる。つまり、土坑群も掘立柱建物跡群もある程度、計画的に設置されたと思われる。

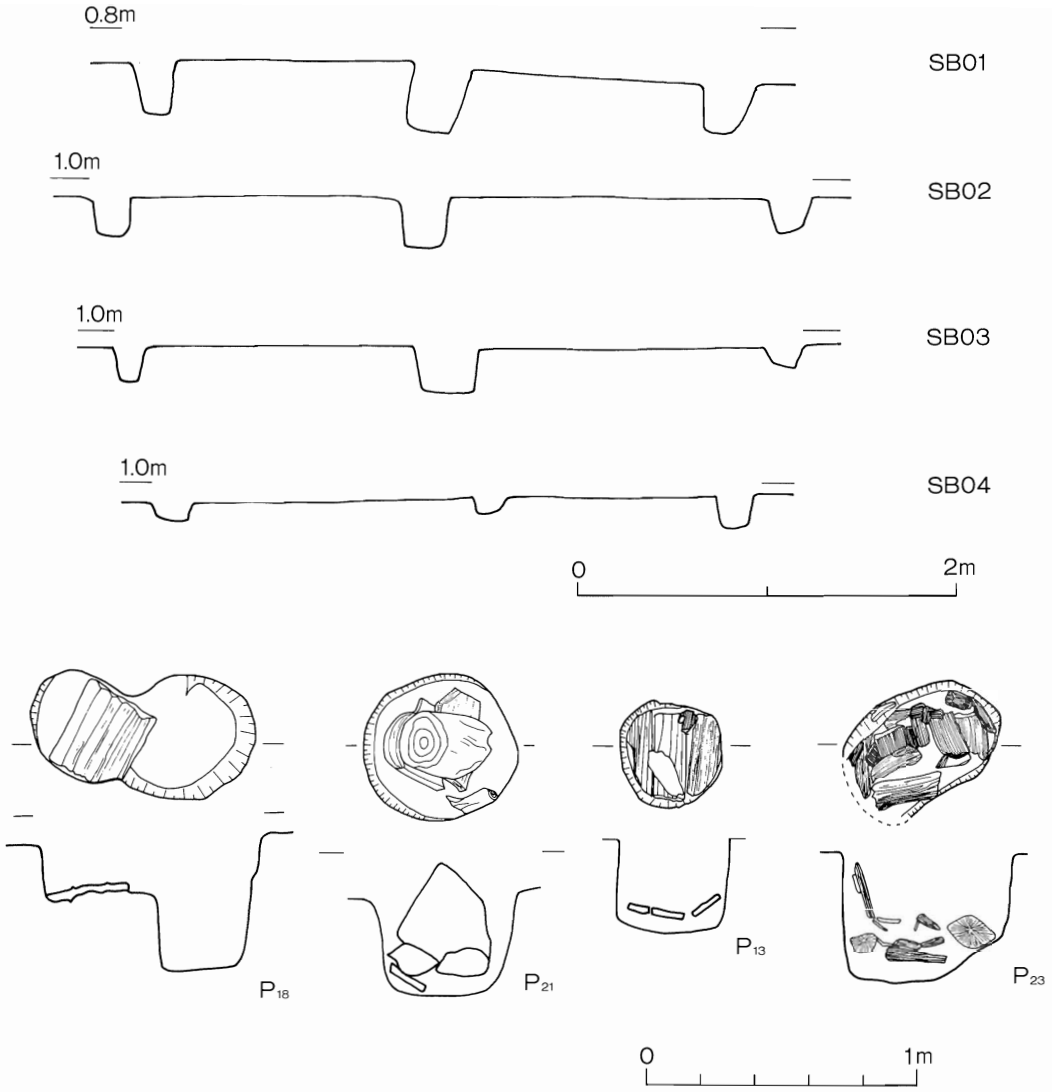
SK04　発掘調査区の北側に検出された土坑でドングリの貯蔵庫である（第7図、図版6）。0.7×0.7mのほぼ正方形の平面プランで、基底部10～15cmは縄文前期層に掘りこまれ、その上は弥生時代の微砂粒に覆われていた。床は水平で、床直上からドングリの種子がまとまって出土した（図版6）。土坑の内側周囲は長さ約50cmの檜皮を壁面に貼り付けたものであるが、床近くにはこの土坑を覆っていたと考えられる同様な檜皮が陥没した状態で発見された。ドングリの種子の詳しい同定は別に報告する予定である。島根県内におけるこの種の遺構は、松江市手角町寺ノ脇遺跡(註2)や同柳瀬遺跡(註3)の二か所がこれまで知られているが、それらは縄文時代のものであり、また素掘りの土坑である。現在のところ、弥生


貝層
酌
川
朝
リ
チ
ト
ヘ
ホ
ニ
ハ
ロ
イ
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
0
1
2
3
4
5
6
7
8
SZ08
SZ06
SZ05
SZ09
SZ07
SZ04
SZ03
SZ02
貝層A
SZ01
SK04
SZ013
SZ010
SD011
SZ012
SZ015
SZ014
SZ016
SZ019
SZ017
SZ018
溝状遺構
貝層D
SZ021
SK01
SK02
SD01
SK03
SZ020
SZ022
貝層C
SK05
貝層B
SZ023
貝層E
0
30m

第2図　遺　構　配　置　図



第3図　掘立柱建物跡平面図

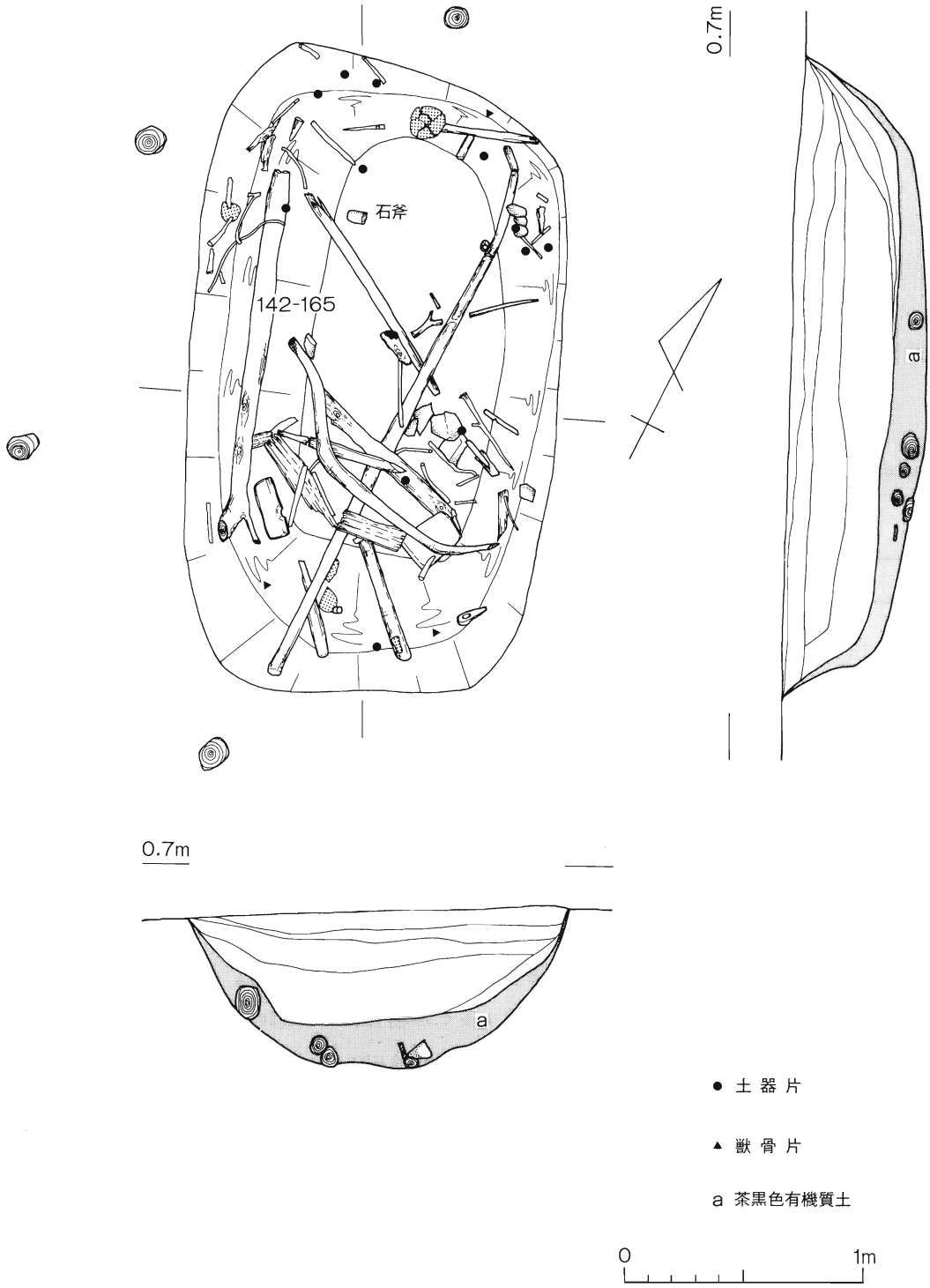


第4図　掘立柱建物跡柱穴断面図

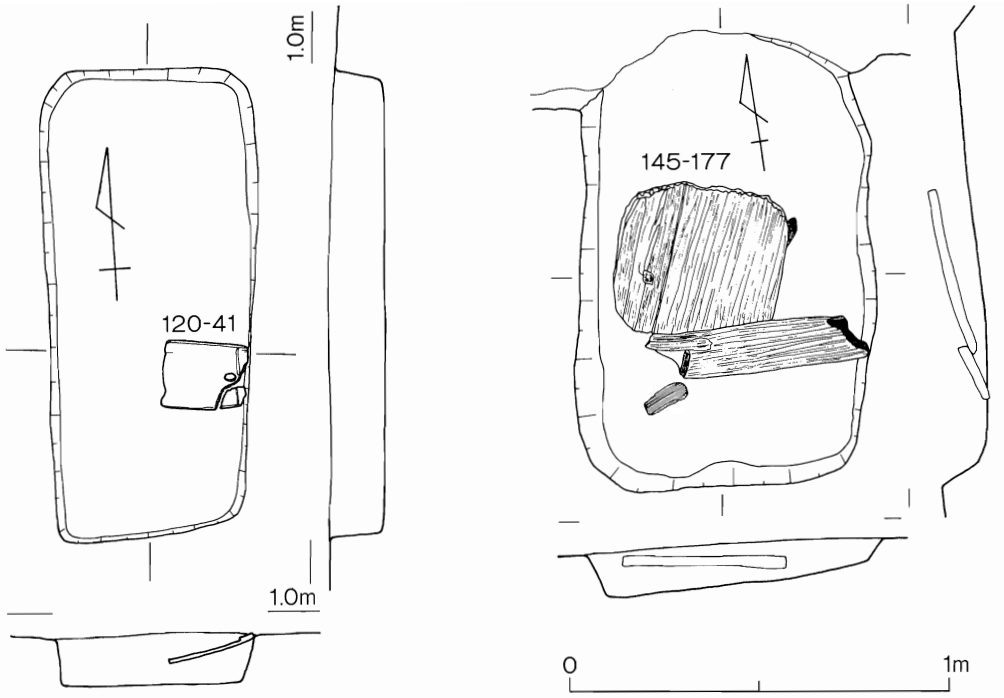
時代の遺構としては他に例をみないものである。

ウッドサークル（ＳＺ）

発掘調査区の北側、朝酌川岸に近いあたりと、調査区のほぼ中央に発見された旧河道と考えられる溝状遺構に沿うて、多くのウッドサークル（wood-circle）を検出した。その北側の一群（ＳＺ01～ＳＺ09）は、ほぼ東西に、つまり現在の朝酌川左岸と同じ方向で、同時に貝層Ａもこれらの南側に接して発見された（第8図、図版8）。発掘区の中央部の一群（ＳＺ010～ＳＺ023）は、ほぼ南北に溝状遺構に沿うており、同様に貝層Ａ～Ｄがその東に存在していた（第9図～第11図、図版7、図版9～17）。



第5図　SK01 実測図



第6図　SK02・03 実測図

これらのウッドサークルの構造は、径1.0mの小規模のものから、2.5m×1.0mのものまで各種ある。いずれも、自然木の先端を尖らせたものと板材を再利用したと考えられる杭が混在して用いられており、後者の方が多い。最長のもので1.25mを測るが、もとは今少し長い杭が用いられていたと思われる。

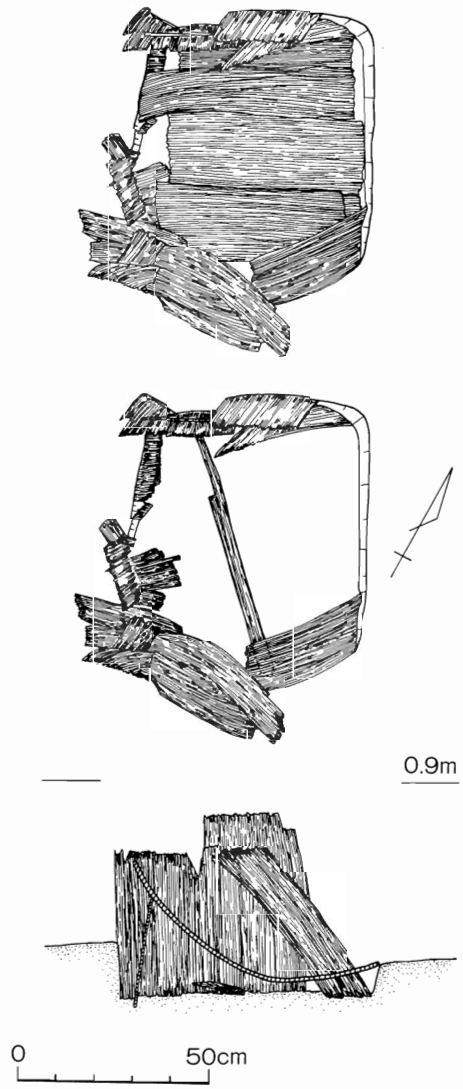
ウッドサークルの平面プランは、径が1.0m前後の比較的小規模なものは不整形のようにみえるが、方形プランを意識していると考えられる。これより大規模なものは長方形プランであり、その典型はSZ017（第10図、図版13）にみることができる。杭の先端は40～50cmほど弥生時代以前の層に打ち込まれており、多くの場合、その層の上面より40～50cmの部分が残存していた。弥生時代前期にも同様な施設を検出しているが、その場合横木をわたし杭に蔓で縛った例がある。SZ013（第10図、図版11）、SZ014（第9図、図版11、12）にみられるような例からすると、杭列は横木を固定された構造になっていた可能性がある。杭は自然木のものは変形したものが多い。これは打ち込む時、あるいは土厚によって変形してしまったと考えられる。断面が三角形の板材の再利用と思われる杭が多いのは、自然木が構造上あまりウッドサークルに適さない為であったかもしれない。

さて、第111図～第156図に示した多量の木製品は、その多くがこのウッドサークルの

周辺から出土したものである。そのほとんどは鋤・鍬を中心とする木製農耕具の未成品であった。従ってこれらのウッドサークルと木製農耕具の未成品は何らかの関係にあるものと思われる。福岡県板付市板付遺跡や、兵庫県神戸市玉津田中遺跡(註4)では、溝状遺構の縁に土坑を穿ち、その中に加工途中の木製農耕具を納めた弥生時代の遺構が知られているけれども、西川津遺跡においては、ここで報告したウッドサークルが同様な機能を有していた施設であったと考えておきたい。ＳＺ017（第10図）はまさにそのような木製農耕具の製作工程の初期段階を示す好例としてとらえることができよう。とすれば旧河道に沿うて発見された二群のウッドサークル群は、通常水中に没していたことが考えられ、当地方における弥生時代木製農耕具製作工程を具体的に知ることのできる遺構として注目されよう。

貝　層

ウッドサークル群に沿うようにいくつかの貝層も検出された。ＳＺ01～ＳＺ09の南に接した貝層Ａは、最大幅2.0ｍ、長さ約8.0ｍに及ぶ細長いもので、これより約4.0ｍ東にも径0.5ｍほどの貝層のブロックがあった。また、中央で発見された貝



第７図　ドングリの貯蔵庫

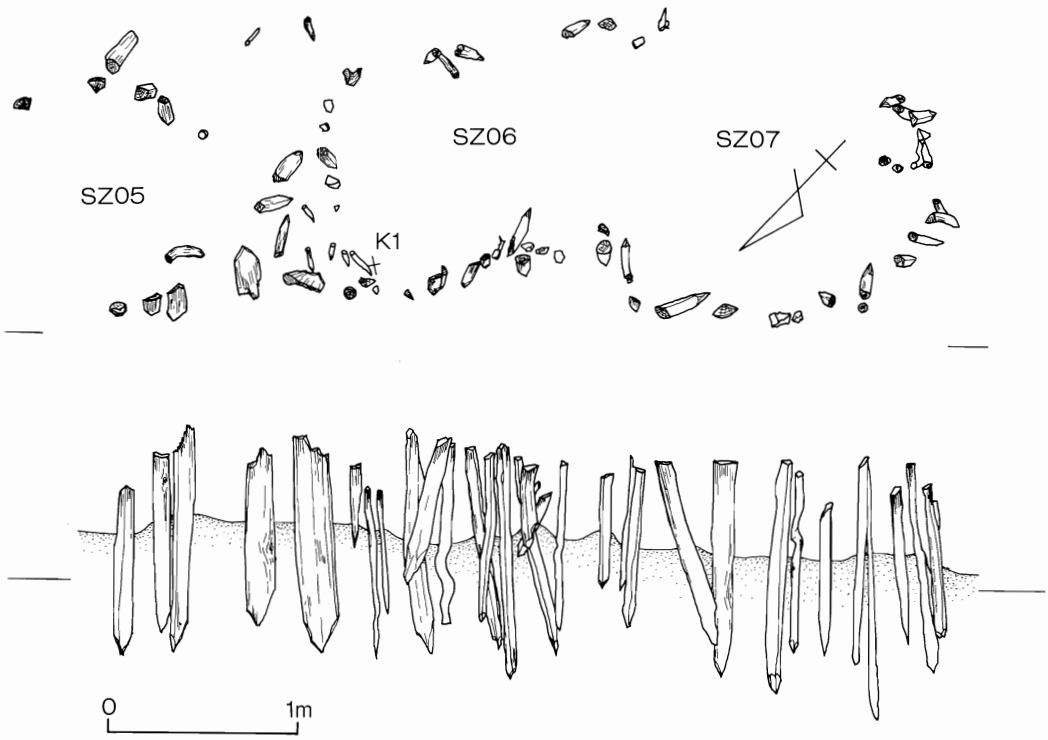
層は、南より貝層B、貝層C、貝層Dがほぼ南北方向に溝状遺構やウッドサークル群に沿うかたちであった。いずれも不整形で径は2.0m～5.0mあり、その周囲には径0.3m内外の小ブロックがいくつかみられた。他の遺構のありかたからして、この貝層A～貝層Dが位置するあたりを、本遺跡における弥生時代中期の旧河道の水際と考えている。

これらの貝層を構成する主な貝類は、汽水産のヤマトシジミである。ヤマトシジミの貝層は、本遺跡に近いところでは縄文時代前期の鹿島町佐太講武貝塚(註5)がある。弥生時代の貝塚は出雲地方ではこれまでその西部において、多門院貝塚(註6)などが知られているが、東部においてははじめての遺跡例となった。このヤマトシジミの貝層群は、少なくとも弥生時代中期には宍道湖が現在のような汽水湖になっていたことを示しており、当時の自然環境を復元する貴重な資料となった。貝層は原則として、全て取り上げ、これを水洗いし微細な遺物も検出するよう努めた。その結果は、弥生土器、シカやイノシシといった獣骨、それらで製作された釣針をはじめとする骨角器、魚骨、時には使いすてられた木製農耕具や容器類、石器片、炭化米、貝製小玉、カワニナのような淡水産の貝類、サザエ、アワビなど磯の生物等々豊富な資料を得ることができた。このうち、獣骨や魚骨についてはⅡ章で報告されているとおりであるが、他の遺物や貝層の詳しい分析は、来年度報告される予定である。

溝状遺構及びＳＤ01

発掘調査区の中央よりやや西側にほぼ南北方向に、上場幅5.0～7.0mの溝状遺構が検出された（第２図、図版７）。この溝状遺構の西側は高さ1.5mの堤状となっている。その溝の西側斜面には、無数の杭が打ち込まれているのとともに、多数の人頭大の自然石がこれを覆うように存在し、東側の遺構群とは対象的なあり方を示していた。溝の西側の施設はその状況から、簡単な護岸工事のようなものが行なわれたともうけとれる。溝は弥生時代中期以前の遺物しか含まない砂礫層で埋っており、溝の埋没した時期もそのころと考えられる。調査区の北側に検出された貝層Aやウッドサークル群（ＳＺ01～ＳＺ09）が現在の朝酌川左岸にあたることを考え合わせると、この溝状遺構としたのは弥生時代中期の旧河道と考えられよう。因に、この溝状遺構は昭和60年度の調査において、弥生時代前期から生活に使用されていたことが判明している。

ＳＤ01（第２図、図版１）は、ＳＫ02やＳＢ01、ＳＢ02によって切られているので、それらより古い時期と考えられるが、弥生時代中期の中での先後関係を示している。これによって、土坑や掘立柱建物跡群より以前の遺構であることが知られるが、その性格は不明である。



第8図　SZ05・06・07 実測図

弥生時代後期の遺構

列石遺構

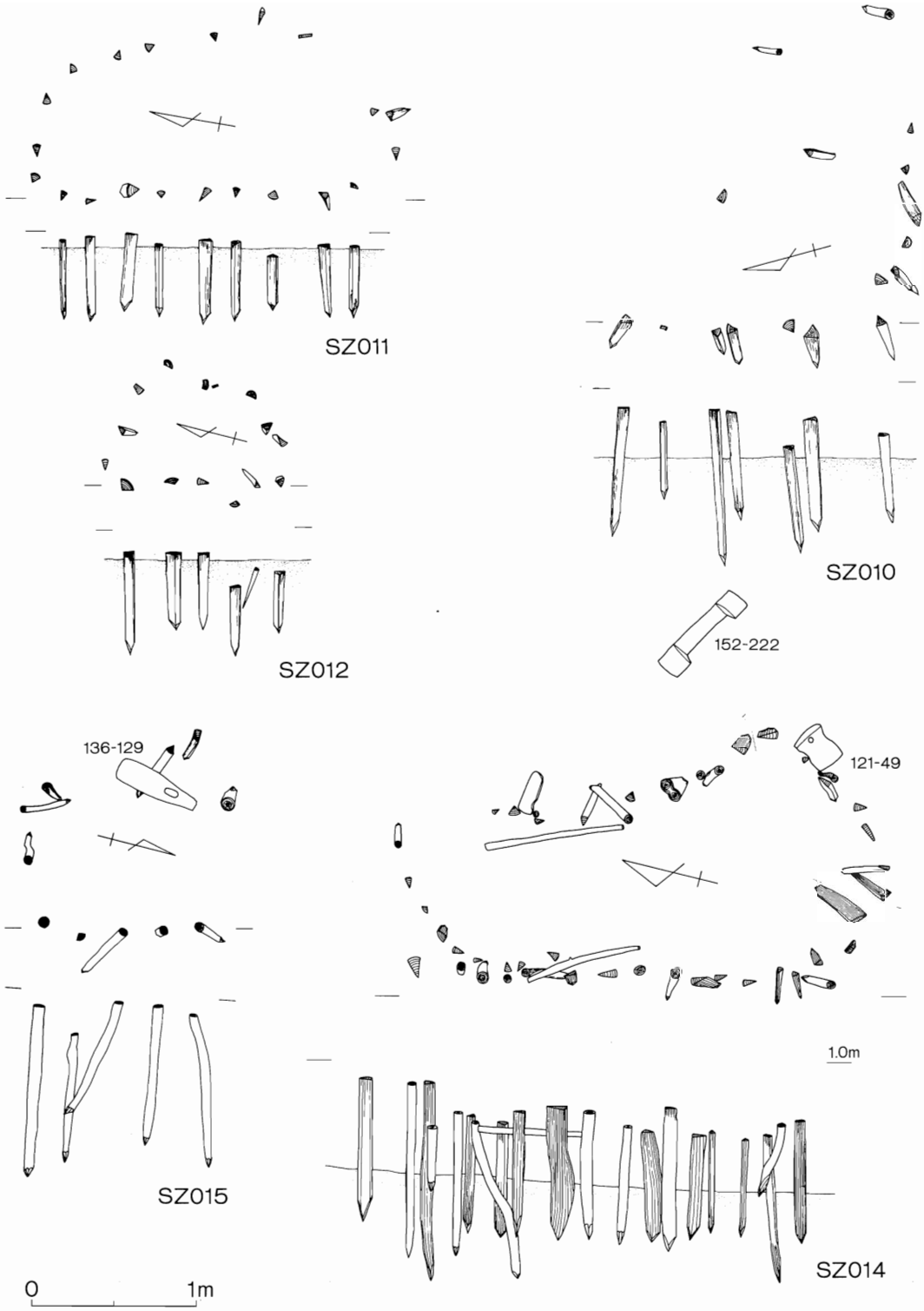
弥生時代中期の溝状遺構のあるあたりから、西に約20mの位置に弥生時代後期の列石を検出した（第12図、図版18）。それは南北方向に長さ2.3m、幅0.6mの短いものであったが、川の氾濫をうけ付近に散乱している石や遺物の状態から元来、かなり長く構築されていたと思われるふしがある。石は20.0～40.0cmの自然石で、東高西低の緩斜面に築かれている。

貝　層

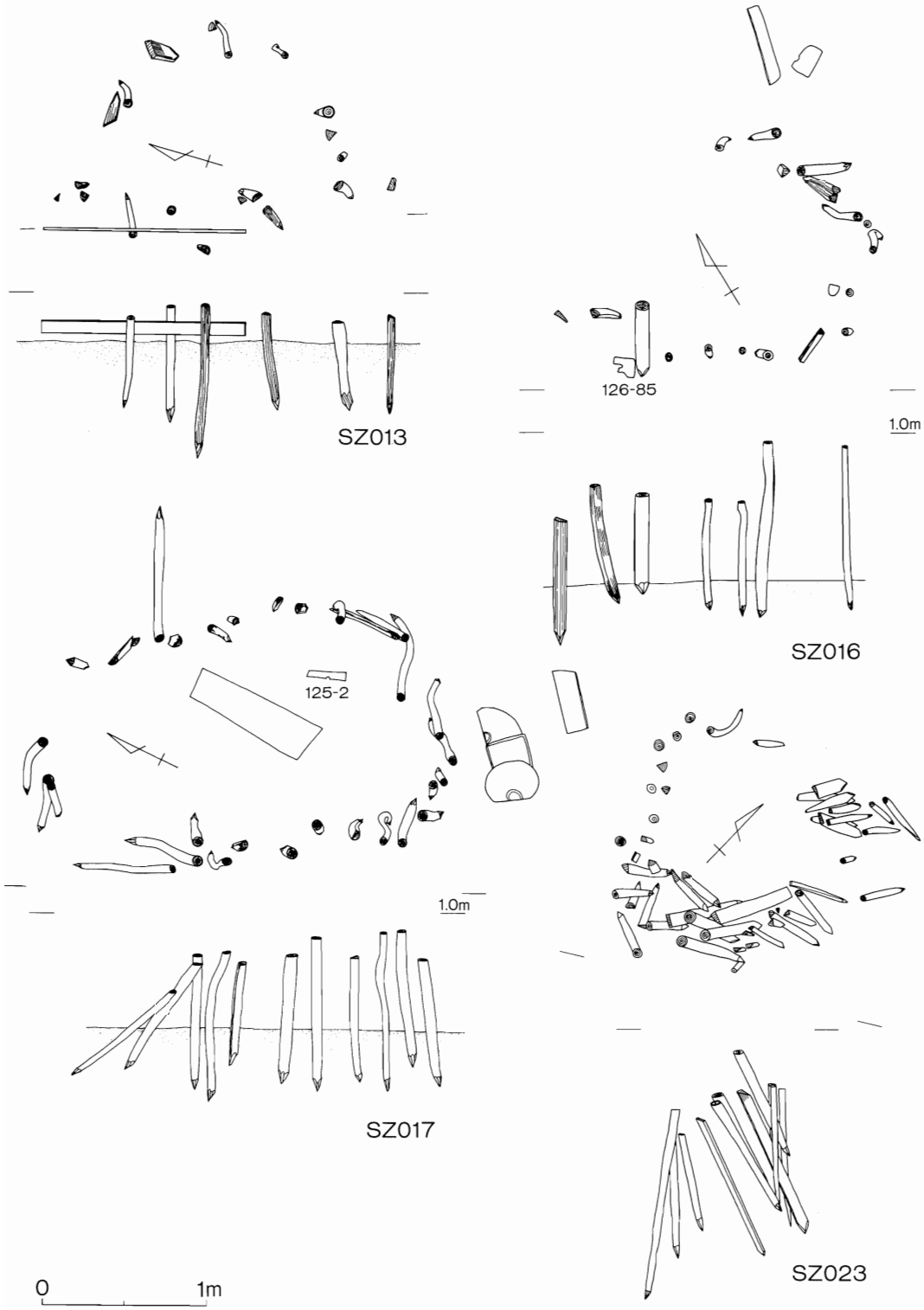
列石遺構の南約15.0mの位置に径1.0mほどの薄い貝層があった（貝層E、第2図）。中に含まれている土器片から列石遺構と同様に、弥生時代後期のものと考えた。

これらの列石遺構と貝層Aとを結んだ線は、ほぼ、弥生時代中期の溝状遺構やウッドサークル群等発掘調査区中央の遺構の方向に沿うている。弥生時代中期の貝層が旧河道の水際に形成されていることから、列石遺構と貝層Eを結んだあたりよりさらに西側は、弥生時代後期の旧河道であった可能性が高い。

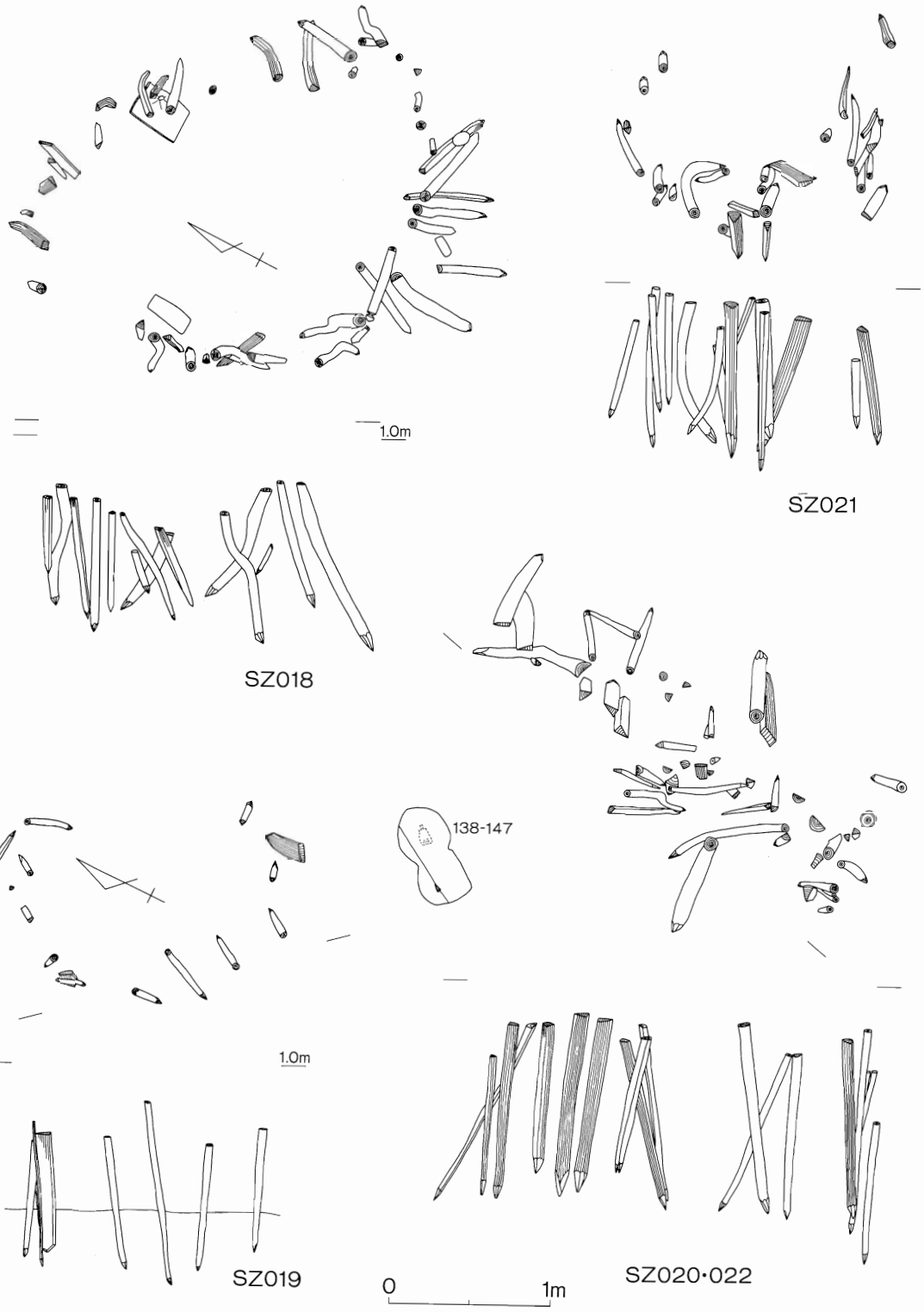
以上のような、弥生時代中・後期の遺構のありかたから、弥生時代の朝酌川の歴史を知



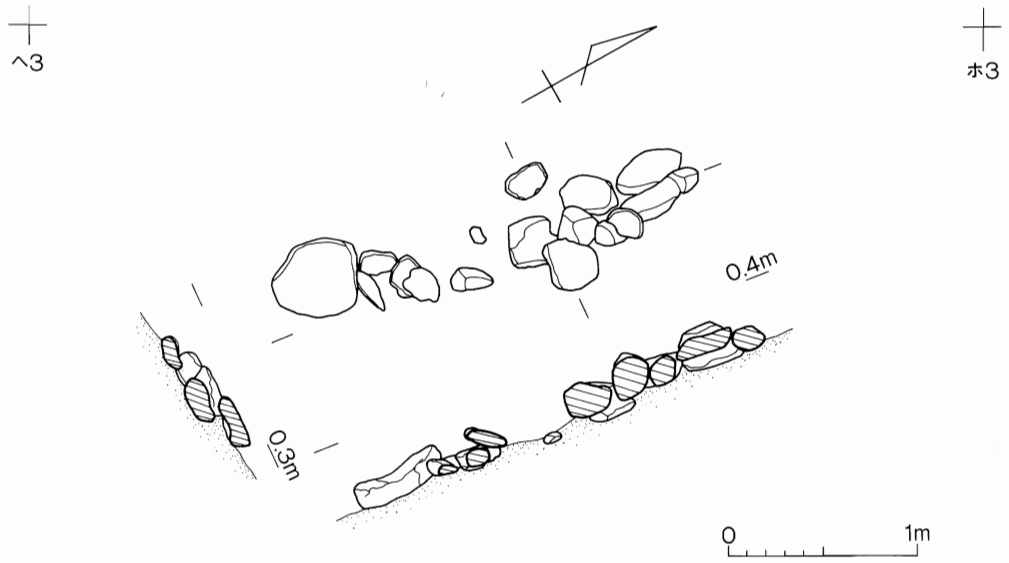
第9図　SZ010・011・012・014・015 実測図



第10図　ＳＺ013・016・017・023 実測図



第11図　ＳＺ018・019・020・021・022 実測図



第12図　列石遺構実測図

ることができよう。まず、発掘調査区の北東部（朝酌川の上流部）においては、旧河道は現在の朝酌川に沿うかたちでその水際を貝層Aのあたりに考えることができる。そしてそれは、第2図に示された現在の朝酌川が蛇行しているあたりから、旧河道も現在よりは、さらに急カーブを描きほぼ南北方向を南に流れていた（溝状遺構）と考えられる。これは弥生時代中期のことである。次に、この旧河道（溝状遺構）が埋まり、弥生時代後期には、発掘区のほぼ中央部を流れていた川は、西側下流部に流路を移動し、現在の朝酌川に少し近づいていったようである。

尚、弥生時代の層の上に古墳時代前期の遺物包含層があったが、遺構は発見することができなかった。

註1　『登呂』昭和35年

2　近藤　正『寺の脇遺跡』島根県松江土木事務所　昭和44年3月

3　恩田　清氏調査

4　深井明比古氏の御教示による。

5　山本　清『鹿島町誌』昭和37年

6　東森市良他『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』島根県教育委員会　昭和55年3月

2. 遺　　物

第21図～第192図に示したのは、前項の遺構や各時期の層から出土した遺物である。各遺構や土層の時期決定の基準としたのは編年研究の進んでいる土器によってである。それ以外の遺物についてはそれ自体で未だ詳しい時期決定をすることは困難である。従って木製品や石器といった土器以外の遺物の中には、ここでは一応時期別に分類しているけれども、いくばくかはそれ以前の時代のものが混在しているかもしれない。例えば弥生時代後期として分類した木製品の中には前期のそれが混在する場合もあろう。しかし、大方においては土器の示す年代に他の遺物も等しいと考えて差し支えはないと思われる。以下は、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺物の概略であるが、一部には便宜上、明らかに弥生時代前期の遺物であっても載せることにした。また、動植物の遺存体については弥生時代中期の遺物であっても、都合によって次回に報告する予定のものもある。

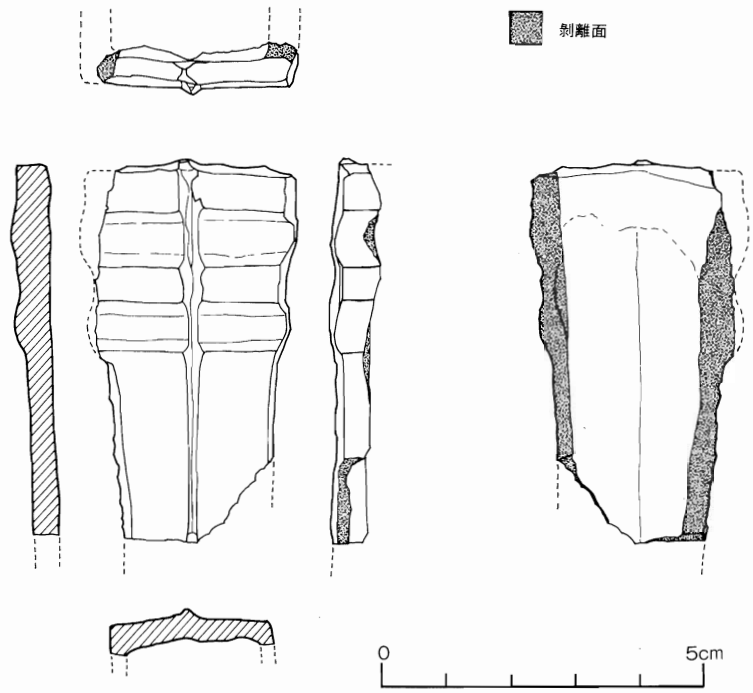
（1）弥生時代中期の遺物

鉄斧　発掘調査区のほぼ中央にある貝層C付近より第13図に示したような鉄斧片が出土した（カラー図版2上）。現存部長さ6.0㎝、最大幅3.0㎝を測る。横方向に幅約1.0㎝、高さ3㎜の二条の突帯があり、その中央を縦方向に鋳型の合わせ目痕が走っているので、袋状鋳造鉄斧の側面であることがわかる。平均的な厚みは4㎜である。全体に錆化しており部分的に緑錆がみられる。重さは31.0ｇを測る。弥生時代における同種の資料は福岡県行橋市下稗田遺跡等九州北部に多く(註1)、大陸では中国東北部から韓半島北部に分布がある。西川津遺跡出土資料は、直接的にせよ、九州北部を経るとしても、大陸から日本海沿いにもたらされたものとして注目される。弥生時代後期の木製品の中には、この種の柄が出土している（第162図278）。下稗田遺跡出土例（弥生時代中期前葉～中葉）を参照にこの鉄斧を復元すると全体の長さ15.0㎝、幅8.0㎝ほどになると思われる。

骨角器　骨角器には釣針、銛、箆、簪等の装身具類、縫針、矢筈等がある（第14図～第20図、カラー図版4）。いずれも、鹿角製か猪牙製かのどちらかである。

釣針には4種がある。A類は小形で逆刺のないもので、第14図1・2がこれにあたり鹿角製である。1は長さ3.1㎝。B類は長さが5.0㎝以上で逆刺が外側につけられたもので、第14図3・4・5、第15図6がそれで、いずれも鹿角製である。完成品の4は長さ7.1㎝、幅4.2㎝を測る。C類は逆刺は内側に向かい合って2か所設けられたもので、第15図7と8がこれにあたるが、前者は鹿角製、後者は猪牙製である。完形の7は長さ8.0㎝、幅1.8㎝を測る。D類は大形の結合式釣針である。第16図10、11、第17図13がそれである。こ

の種の釣針は軸部を鹿角、鉤部を猪牙製となっていて、この原則は他遺跡でも貫かれている。このうち、11は外側に2か所の逆刺が見られる鉤部の欠損品である。10、13は軸部の未成品で粗い削り痕が残る。10の長さは約11.0cmである。



第13図　鉄斧実測図

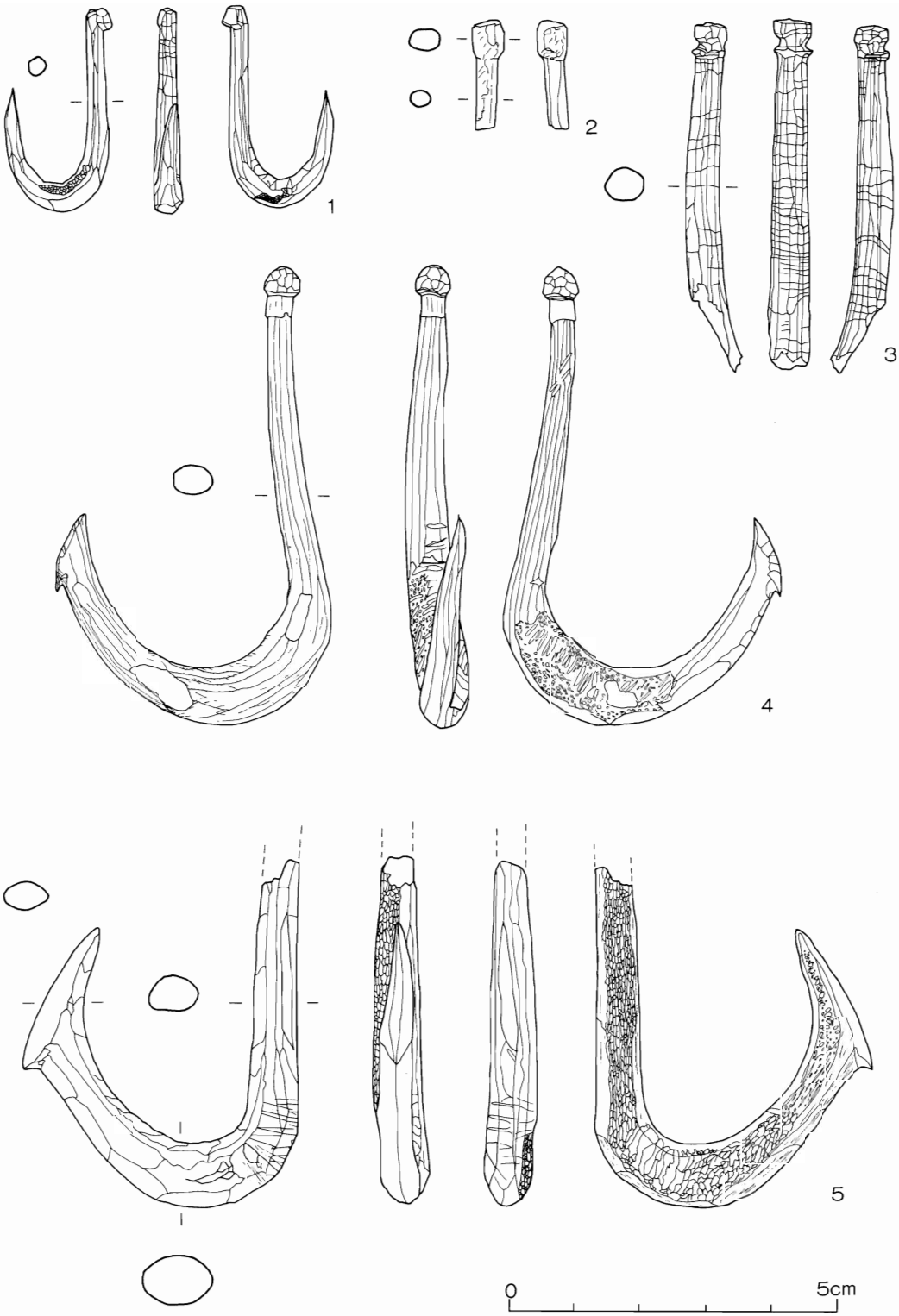
第15図9は長さ7.4cmの鹿角製品である。頭部に加工痕と中央部に孔を穿とうとした痕が認められる。加工途中なので、不明点が多いが、全体の形状からして回転式離頭銛の未成品の可能性がある。(註2)

第16図12、第17図14、第19図18、19は箆の類である。12は長さ7.9cm、径は0.5cmで先端より3.0cmあたりから基部は乳白色の接着剤と柄に緊縛した糸の痕が認められる。18はエイの刺尾、19は最大径が3mmで、3個の欠損品からなる箆であるが、復元すれば8.0cm以上の細長いものとなる。入念に磨かれている。

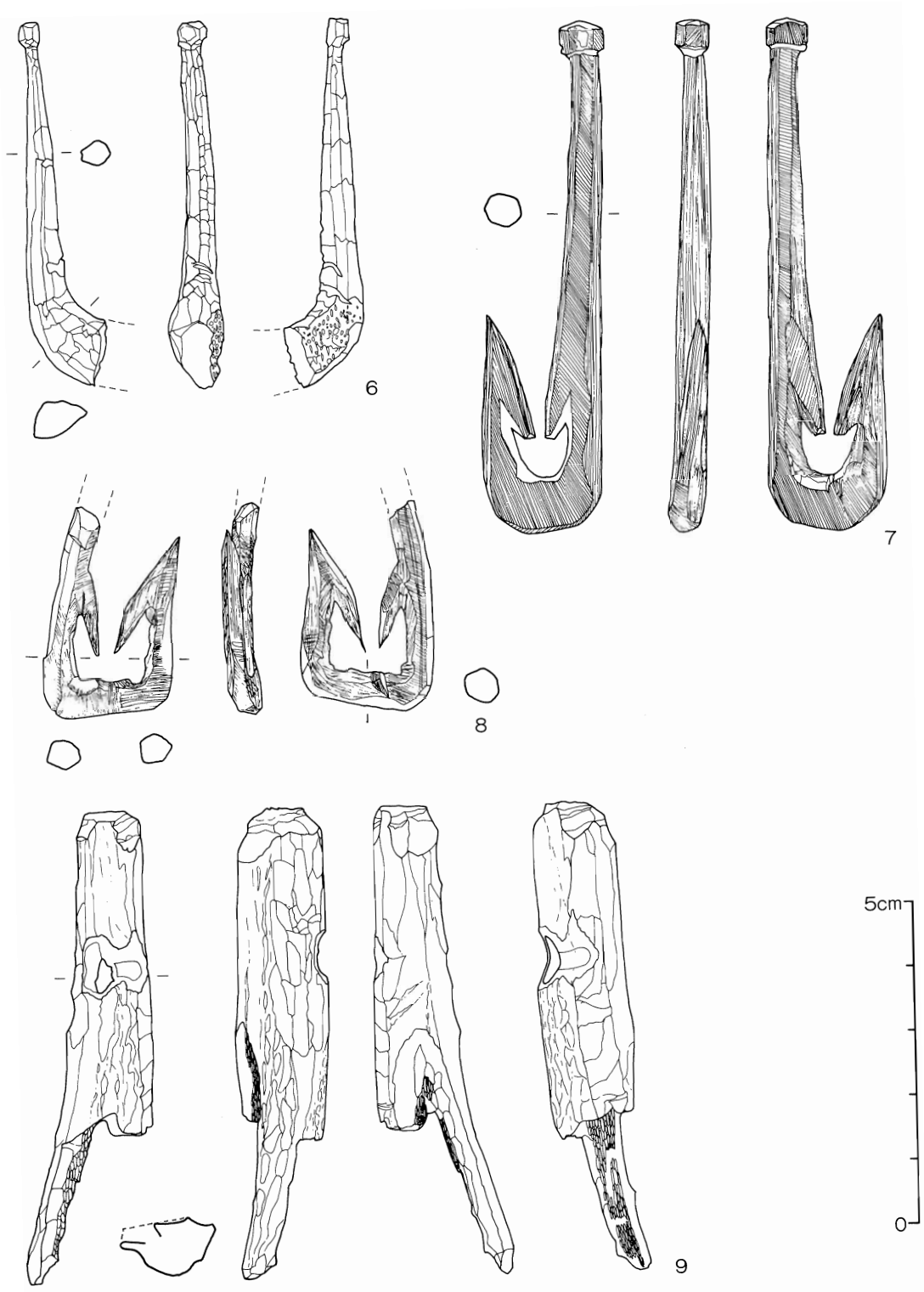
第20図25と26は矢筈の一部と考えられる。同24は不明の骨角器であるが、その製作手法は矢筈と同一であり、25や26に関係するものか、あるいは装身具と考えられる。

第20図27～32は縫針である。このうち、27と28はその未成品、29～32は完成品が欠損したものであるが、29・30・31には糸孔が残る。

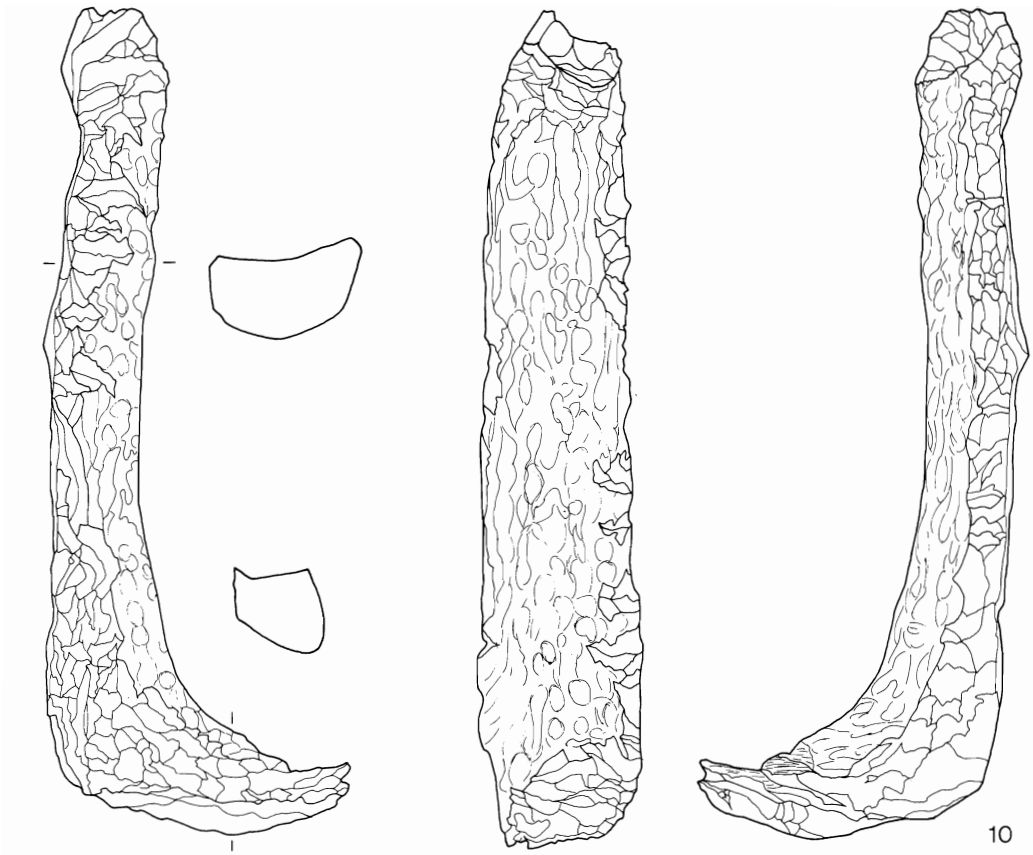
第20図33は簪で現存部は2.0×2.2cm、厚さ0.2cmの扁平でこれに3本の歯が認められるが、いずれも長さ2～3mmで折れている。第20図34は長さ1.3cmの牙玉で孔を穿つ。



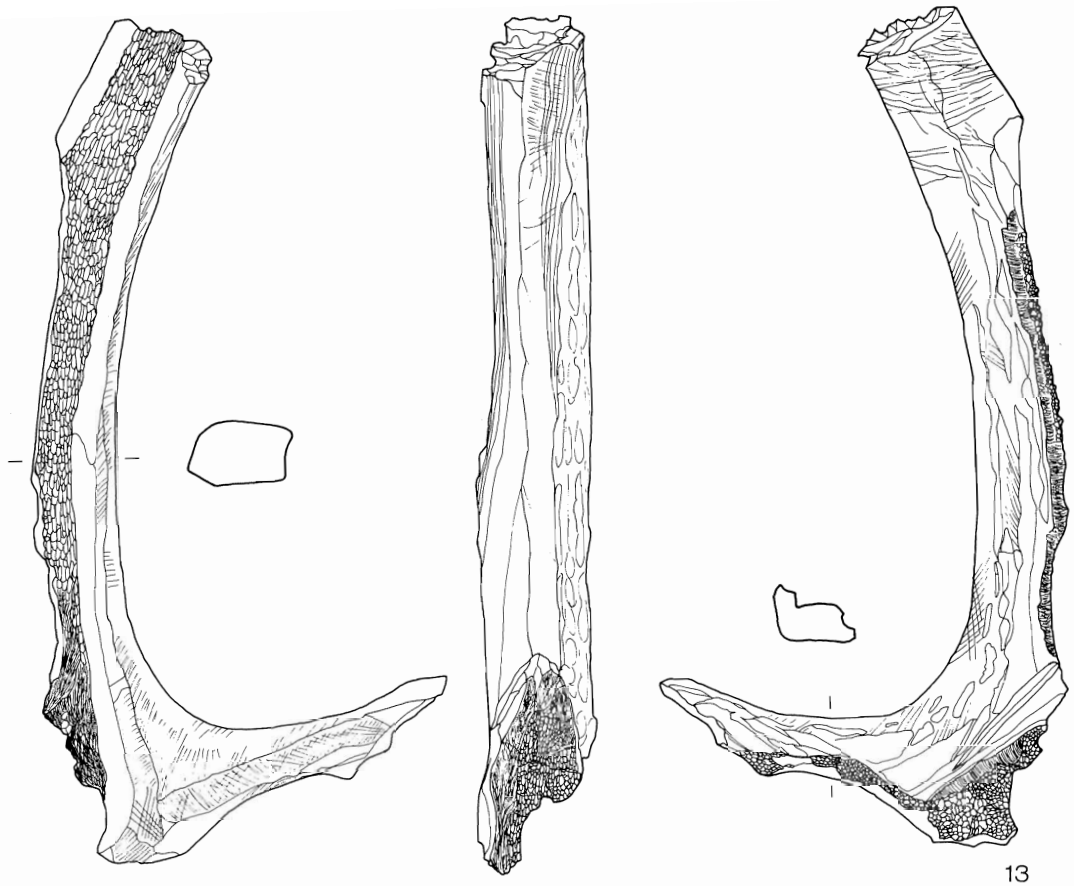
第14図　骨角器実測図(1)

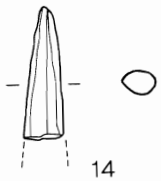


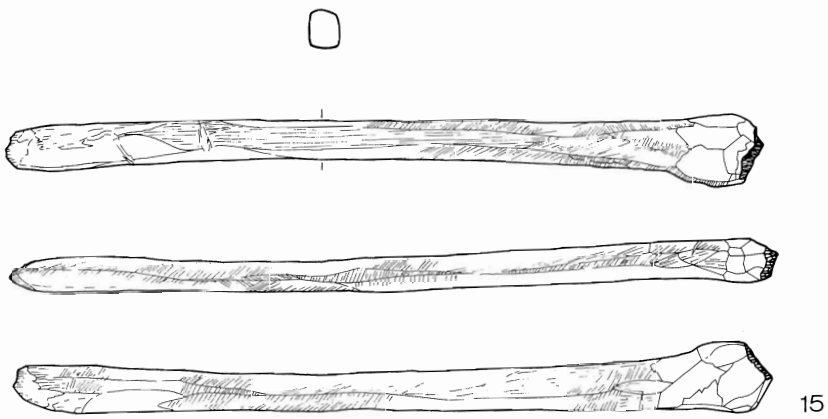
第15図　骨角器実測図(2)



第16図　骨角器実測図(3)

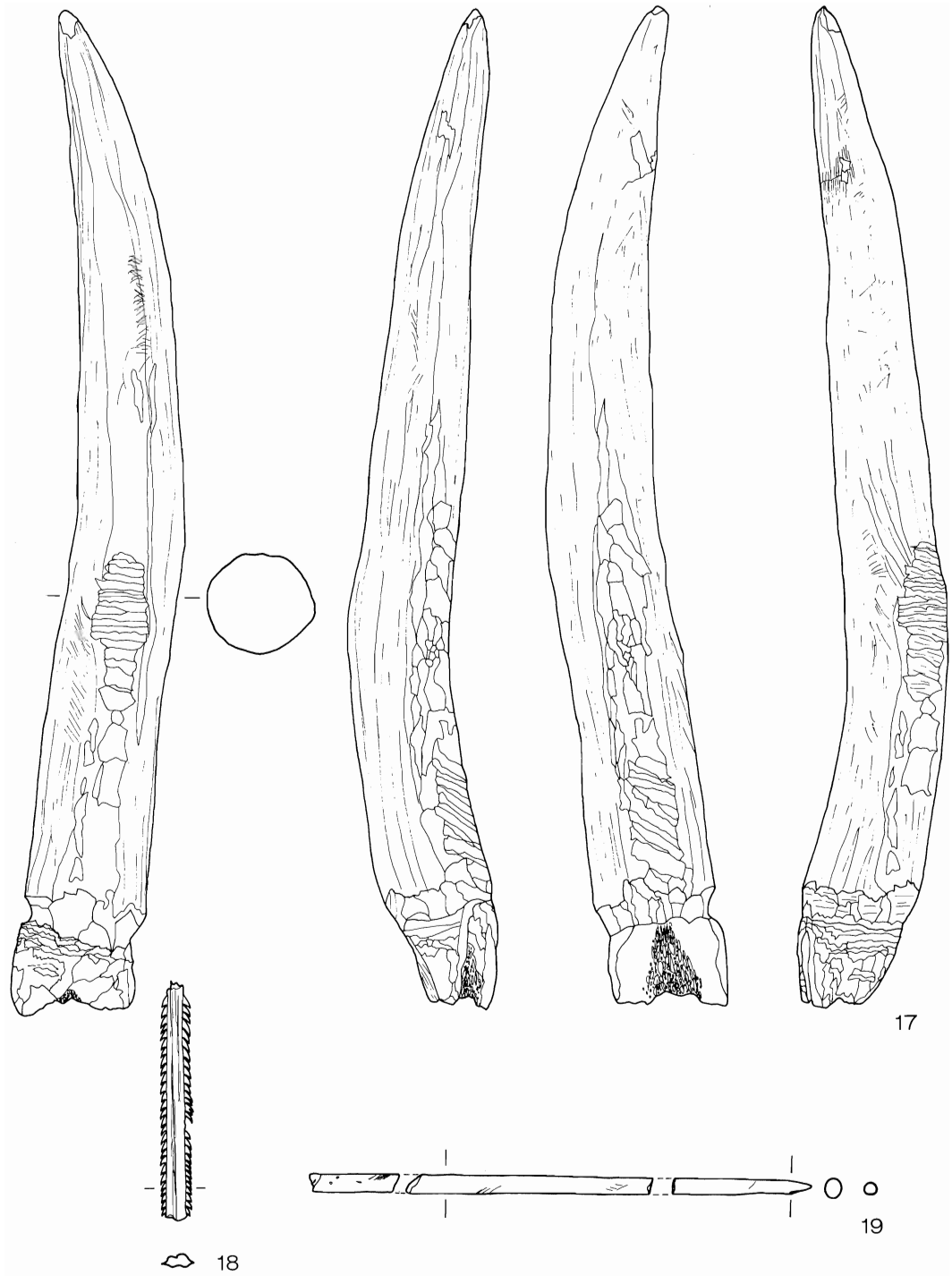




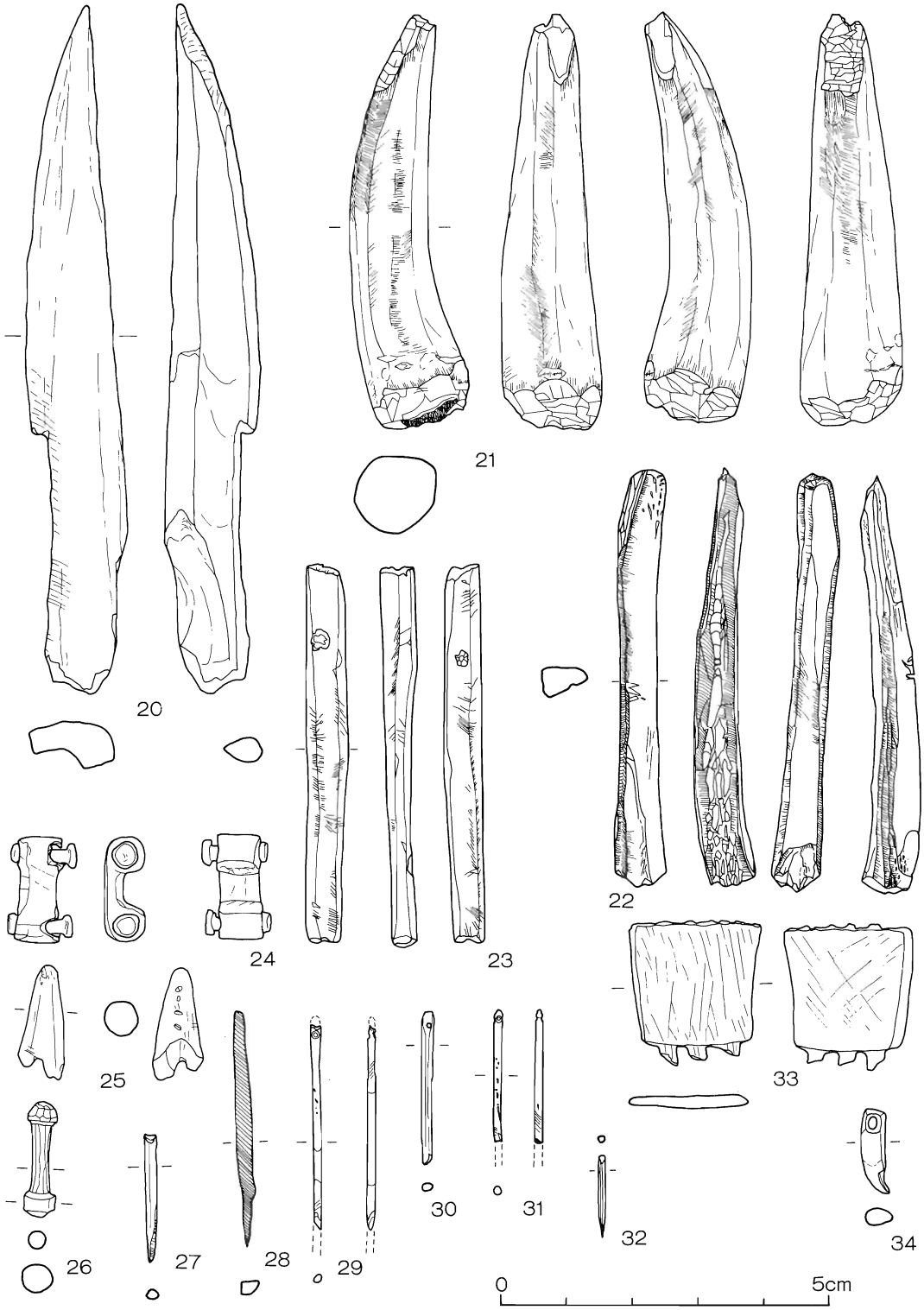


第17図　骨角器実測図(4)

第18図　骨角器実測図(5)　0　5cm



第19図　骨角器実測図(6)



第20図　骨角器実測図(7)

第17図15は長さ10.0cmで、両端がその中央部に比して幅広・扁平となっている骨角器である。使用痕があり完成品と考えられる。用途は不明だが、現在使用されている金属製の釣針はずしに似ている。

第18図16、第19図17、第20図20・21・22・23はいずれも加工途中のものである。23は小孔をあけようとしており、16は敲打と粗い削りがみられる。16・17・21は鹿角製である。

弥生時代中期の土器　第21図～第98図には弥生時代中期の土器を図示した。そのほとんどは弥生時代中期層や遺構から出土したものであるが、中には弥生時代後期層や古墳時代前期層からの出土資料も弥生時代中期の特徴的なものであれば掲載することにした。器形は、甕・壺・鉢・高坏の他に各種の土製品や分銅型土製品、土錘、紡錘車がある。

a．甕形土器

第21図～第43図は甕形土器として分類したものである。このうち、第21図７・８・９・12・14、第22図17・18・19・20・21は弥生時代前期の様相を強く残しているが、沈線はクシ描き手法によっている。口縁部上が平坦となるもの（７）と「く」の字状になるもの（８・９・12・13・14）がある。17～20も後者と思われるが、19はクシ描き沈線部に一条の突帯がある。

第21図１・２・３・４・５・10は口縁部が肥厚し平坦、もしくは断面が三角形となる一群である。このうち、１と２は口縁部直下に一条の突帯を施し、九州地方の頂玖式土器の影響を強く受けたと思われるものである。内面はヘラ磨きがみられ全体に丁寧な作りである。

以上の甕形土器以外のそれらは、いずれも原則的には口縁部が「く」の字状を呈し、胴部の最大径が中央よりやや上方にある胴長の器形である。胴部の径に対し底部径が小さくやや不安定なのも特徴の一つにあげられよう。いずれも壺に比較すると器壁は薄く、外面には煮沸時のふきこぼれと考えられる厚い炭化物が付着したものが多い。内外面ともハケ目やヘラ磨きで整形しているが、特徴的なものは外面のヘラ磨きである。すなわち、外面胴部中央より下方は縦方向のヘラ磨きの原則が貫かれている。上方にヘラ磨きを施す例はない。これに対し、内面はくびれ部より下方に横方向のヘラ磨きが施される例が若干あるが（第22図29・30、第23図39・45、第24図47・52・57、第26図73・83、第27図88・95、第30図145、第33図194、第36図232、第39図288）、多くは縦方向や斜めのハケ目調整されている。中にはハケ目調整後粗い横方向のヘラ磨きがみられるものがある（第27図92、第29図141、第30図153、第31図160・161、第36図242、第38図275）。また、内面の胴部下方全面にヘラ磨きを施す例もある。壺に比較すると装飾性は極めて乏しいが、多くは胴部中央

にクシ状工具による一条か二条の刺突文をめぐらすのが通例である。中には第21図6や第44図388・389のように壺の突帯に共通した装飾がみられるものもある。また、口唇部に刻み目を施すものと、そうでないものがある。口縁部に一条あるいはそれ以上の沈線のあるものは、中期の中でも後出のものと考えられるが、このような沈線と刻み目を組み合わせたものもある（第41図318～333）。

第42図及び第43図347～351は甕形土器の底部のうち、穿孔のみられる資料を図示したものである。いずれも焼成後に穿孔されているが、第42図334はその途中のものである。これら底部穿孔の甕形土器は甑として使用されたと考えられている。但し、第42図334及び第43図347の二例は、底部が厚く、前期のものの可能性がある。

第43図352～382は、台付の甕形土器として分類を試みたものである。この中には366のように底部を穿孔したものがある。この種の甕形土器は中期になって始めてあらわれる器形である。

以上の外に第77図814以降第83図にあげた底部の中にも多くの甕形土器が含まれているものと思われる。

b．壺形土器A

第49図456及び第71図772・773・774は弥生時代前期の特徴を残した壺形土器の頸部である。多条化した沈線と波状文はクシ状工具によってしっかりと施されている。甕形土器の第21図7・8・9・12・13・14に対応するものである。壺形土器は甕形土器に比較すると器形が変化に富んでおり、装飾も豊かなものが多い（第44図～78図）。

456以外の壺形土器は特に頸部から口唇部の形態によって、二種に大別し、それぞれを細分し次のように分類を試みた。

Ⅰ類――口縁部が短く断面が「く」の字状を呈するもの。

Ⅰa類……頸部に突帯をつけたもの。

Ⅰb類……頸部に突帯がみられないもの。

Ⅱ類――口縁部が長いもの。

Ⅱa類……頸部より上がほぼ垂直に立ち上るか、やや外傾し、口唇部内側をつまみ出したような低い突帯状となるもの。

Ⅱb類……頸部より上が逆「ハ」の字状に長くなり、その外面や口唇部が装飾されたもの。

Ⅱc類……Ⅱb類の頸部より上がさらに外側に広がるもの。

Ⅱd類……Ⅱc類の口縁が下垂し、最も装飾性に富むもの。

Ⅰａ類、第44図389～395、第45図、第46図、第47図、第48図430～439、第49図446・447・448、第50図469・472・478・479・480、第52図517・519、第53図537等がこれにあたる。甕形土器の器形に共通する部分も多いが、頸部の突帯を壺形土器の要素として重視した。その頸部に貼りめぐらされた突帯は、いずれも指頭でおさえ凹凸をつけ文様としているのが特徴である。口縁部が無文のもの（389～397、537）、刻目を入れたもの(416～439、446～448、478、480、517、519)、沈線が入るもの（425、429～439、446～448、472、478～480)、これらに円形浮文を貼りつけたもの（413、414、416、429、434、435)、下垂する突帯を貼りつけたもの（439、446)、これらが互いに混在するもの（429、430～439、446～448）があり、Ⅰａ類内においてさらに細分できる可能性がある。但し、円形浮文と下垂する突帯が共存する例はみられない。

Ⅰｂ類、第50図460、465～467、471、474～476、第51図481～484、486～493、第52図502～516、第53図520～535、第54図544～555、第59図 613～615がこれにあたる。これらは口縁部が無文のもの（481、482、490～493、501、520～522、524～532、544～555、613～615)、沈線のはいるもの（460、465～467)、それに円形浮文を貼りつけたもの（462、464)、斜格子文を施すもの（471、505、507)、クシ状工具による刺突文がみられるもの（475、501～504、506、508～516、748)、これらが組みあわさったもの（477）等があり、胴部に多条沈線や波状文、刺突文を施すものも多い。このうち、481と482は、作りは丁寧で内外面ともヘラ磨きがみられ、頸部には小孔が穿たれているので、蓋とセット関係にある比較的小形の壺形土器であり、これら以外のものとはその機能が異なり、単なる貯蔵のみの機能ではなく製作当初から例えば、漆を入れる容器としてのある目的をもって作られたものと考えられる。

Ⅱａ類、第54図541をその典型と考えた。第54図542、543の他に第51図494～500もこの一群として扱った。541は頸部に貼付突帯を有するが、これ以外にはみられない。495、497、541は口唇部に刺突文、494、500は沈線がみられる。541の場合胴部に貝殻腹縁による刺突文を施し、それより下方は内外面ともヘラ磨きがみられる。

Ⅱｂ類　第49図453、454、第52図518、512、513、第55図、第56図570～575、第58図611が相当する。Ⅱｂ類の特徴は頸部より上方が逆「ハ」の字状に長く延びるとともにその外面に刻目突帯を多条に貼り付けていることである。その突帯の上にさらに下垂する二条の突帯を貼り付けたものもみられる。(564～568、562、572)。装飾文様は円形浮文や斜格子文、波状文がある。外面に多状の突帯がみられない454、518、570はその頸部にこれを貼り付けている。

Ⅱc類　第51図485、489、第56図576～586、第57図、第58図、第59図622～628、第60図629、第61図661等その例は多い。Ⅱb類のように頸部より上方外面に刻目突帯を貼り付けたものもみられるが（581～585、599～601、605、609、610）、その本数は少ないものの方が多い。これらの口唇部の文様はⅠa類やⅡb類にみられたものと同様である。外面に多条の貼付け突帯のみられないものは、その頸部に突帯や（598、611）、沈線を入れている（593）。このうち、599は口唇部に貫通した小孔をめぐらせている。

Ⅱd類　第59図619～621、第60図、第61図、第62図、第63図、第64図、第65図、第66図、第67図、第68図（748を除く）と多い。Ⅱb類やⅡc類にみられたような刻目突帯はなく、頸部にのみ突帯が貼り付けられている。下垂した口唇の外面にはクシ状工具による斜格子文が目立ち、それは口縁部内側や外面の頸部から胴部にかけても同じ手法で飾られるものが多い。634、676、696～702、705、707、708は口縁部において最も装飾性に富んでおり、口縁上やその内側に凹凸のある突帯を貼り付けている。このうち696と707の突帯は注口状に貼り付けられた可能性がある。また、680、682とともに、この種のものには676、698、699、700等口唇部に小孔をめぐらせたものも多い。

このような壺形土器の特徴から、第69図758、759、760、764はⅡb類かⅡc類、第60図757、761～764、766～768、第74図803、804、第75図806、807、第76図812、第77図813はⅡc類、かⅡd類、第70図769、第72図791、第73図、第74図799、800はⅡd類に属するものと考えられる。

以上、壺形土器の分類を試みたのであるが、これらにあてはまらないものや、それぞれの中間様相を示すものが多いのも、これまた弥生時代中期の特色である。

c．壺形土器B

ここで壺形土器Bとしたのは、無頸壺と考えられるもので、鉢形土器に似るものもあるが、口唇部に、一孔、または二孔が対になっているものはこれに入れた。口縁部は内傾し肥厚しない。第84図951～961、第85図966～969、第86図990、993、1000、が壺形土器B類である。壺形土器Aのように派手に装飾したものは少ないが、952、954、956、959、960等は共通した文様意匠である。このうち、960は蓋の径は口縁部より小さく、壺の口唇の外に蓋が出ないものと思われ、他は皆、壺の口唇径より大きな径の蓋がセットになるものと考えられる。但し、954は口縁部上に文様があるので、無蓋の壺か、あるいは鉢形土器であろう。

d．壺形土器C

第84図947、948は長頸壺と考えられるものであるが、全体の器形は不明である。

e．鉢形土器

第85図、第86図、第87図、第88図は、壺形土器Bとしたもの以外は全て鉢形土器として分類した。この中には、さらに壺形土器B類に入れなければならないものもあるかもしれないが、第88図1028や第87図1017は全体を知ることができ、鉢形土器の典型として考えられよう。第85図や、第86図に示したものはあまり文様がみられず第87図や、第88図は壺形土器に共通した文様を施しているが、派手ではない。外面にヘラ磨きが施されるのは文様帯より下方で、その多くは縦方向である(989、997、1011、1017、1028)。第85図962、965の小形品は、中期前出土の弥生時代前期のものの可能性がある。

f．高坏

第89図、第90図、第91図、第92図、第93図、第94図、第95図1141～1153には高坏を図示した。高坏の坏部の形態から次の4種に分類した。

A類、無口縁で、口唇部は内傾するもので、1060、1061がこれにあたるが、全体は坏部の深いワイングラスの器形に近いものであろう。外面は沈線と刺突文で飾られる。

B類、1033、1062をB類とした。口唇部はA類と同様であるが、A類ほど内傾せず、口縁は広く開き浅い。1062は口唇上と外面に沈線を施し、脚部は小孔と多条沈線がある。

C類、B類より坏部がさらに広がり、口縁部は広く平坦となる。1035～1037、1047～1053、1064～1083がこれにあたる。全体の器形はB類に近いと思われるが、1075、1076、1082、1083は胴部が直線的か、あるいは逆に坏の内部にむかいわずかにカーブを描く。1082、1083は、口縁部が明確になり、「S」字状となったもので、第103図1303、1308、1309のような弥生時代後期の高坏に近い。口唇部と広く平坦な口縁部には、文様を入れたものもみられる（1037、1050、1051、1052、1054、1063、1066、1067、1068、1071、1081）。また、1065、1070、1072は口縁部に一対の小孔があり、蓋がセットとなったと思われる。当然のことながら、その口縁部には文様はみられない。

D類、C類の口縁部が外側に向かい鍔状に延びたもの、あるいはその兆しがみえるものをD類とした。1036、1038～1046、1054～1059がそれである。このうち、1054の口縁部上には文様があるが他にはみられない。1040、1041、1045は鍔状の口縁がやや下垂する。1057は全体の器形を知ることのできる好例である。脚部には文様や透しはなく、「ハ」の字状に裾が広がり、外面は坏部、脚部とも全面にヘラ磨き調整が施されている。

第92図1084以下第95図1153までは高坏の脚部を示したものであるが、1087、1088は、A～D類にあてはまらない別種のものの可能性がある。また、A類には第94図や第95図にあるような、三角形透しを有する脚部がついていたと思われる。

g．漆塗土器

第96図と第97図は、土器の内外面に黒漆が付着したものを集成した（カラー図版３）。これらの多くは壺形土器であり、高坏や鉢形土器にもみられる。これらを壺形土器の分類にあてはめると、1184～1188は壺形土器Ｂ類に、1189～1198、1201は壺形土器Ａ類のうちＩｂ類となる。従って1183は1184～1188とセット関係にあった蓋であろう。1199～1211は底部であるが、皆底部外面まで漆が認められる。1212は鉢形土器であろう。その他の1213～1217は高坏であり、1215は高坏の分類のうちＣ類の蓋付きのものに、1214はＤ類となる。1216と1217は頸部と脚部であるが、これらの中間に球状、もしくはレンズ状の坏部があったと考えられる高坏である。漆は内外面にみられるものと、外面のみにみられるものの二種があるが、前者が多い。これらによって漆は蓋付きで無口縁か、短かい口縁の壺に入れられていたことが知られるが、それは漆の性質とも符合している。但し高坏の場合は別の目的で塗装されたと考えられる。

h．朱塗土器

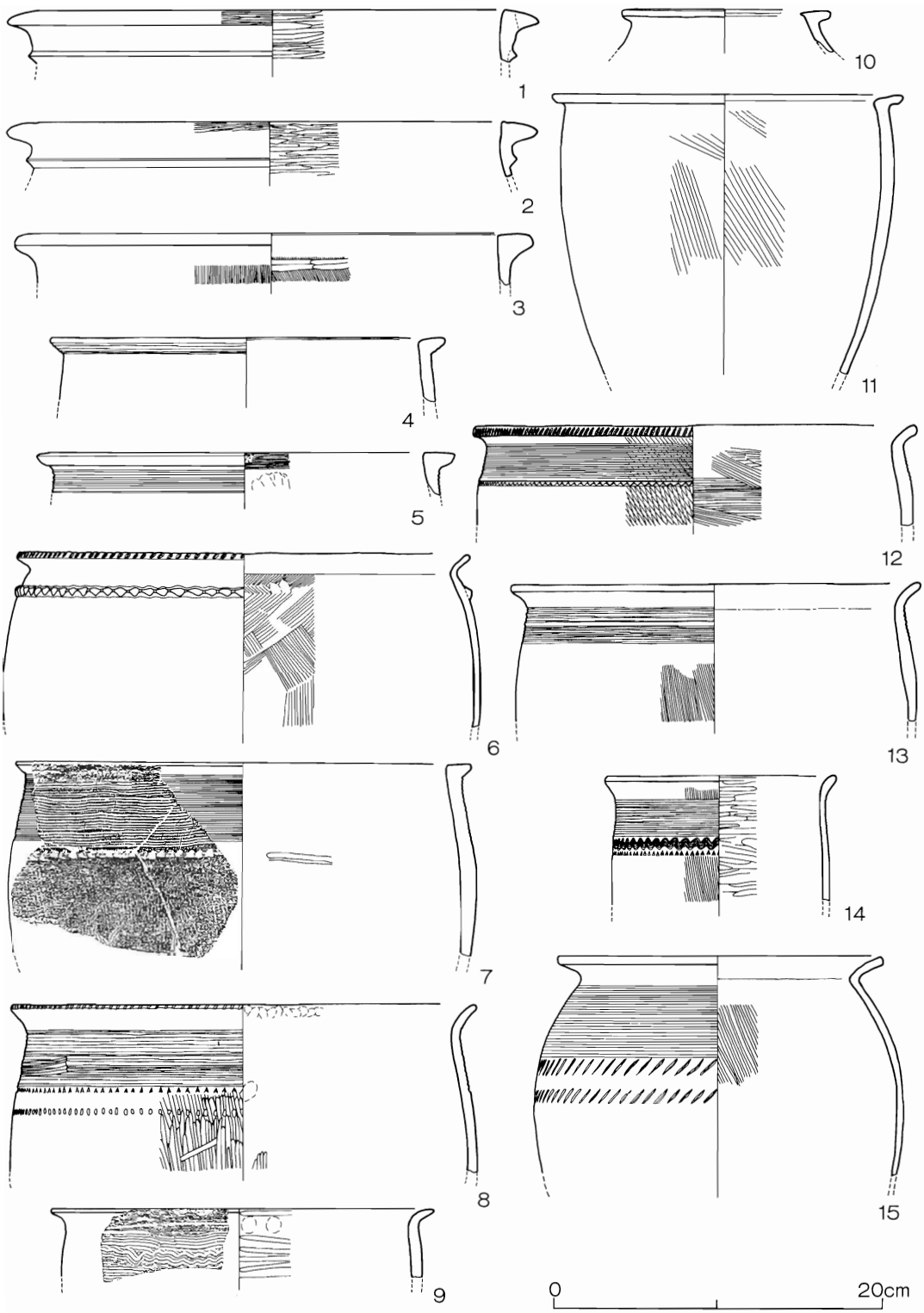
第104図1329と1332は弥生時代中期の朱塗土器である。1329は口縁部径36.7㎝、胴部径39.8㎝の大形の鉢形土器で、第84図～第87図に示したそれを含めても、最も装飾性に富んでいる。成型・調整や施文も丁寧である。文様は口縁部上面から胴部外面にかけて施されている。胴部中央に4.5㎝の幅に施されたクシ状工具による斜格子文のみを朱で塗っている。文様より下方は横方向のヘラ磨き、内面は丁寧なハケ目調整である。1333は、内外面とも朱が塗られ径13.5㎝の蓋である。口唇近くに小孔が穿たれている。

i．小形土器

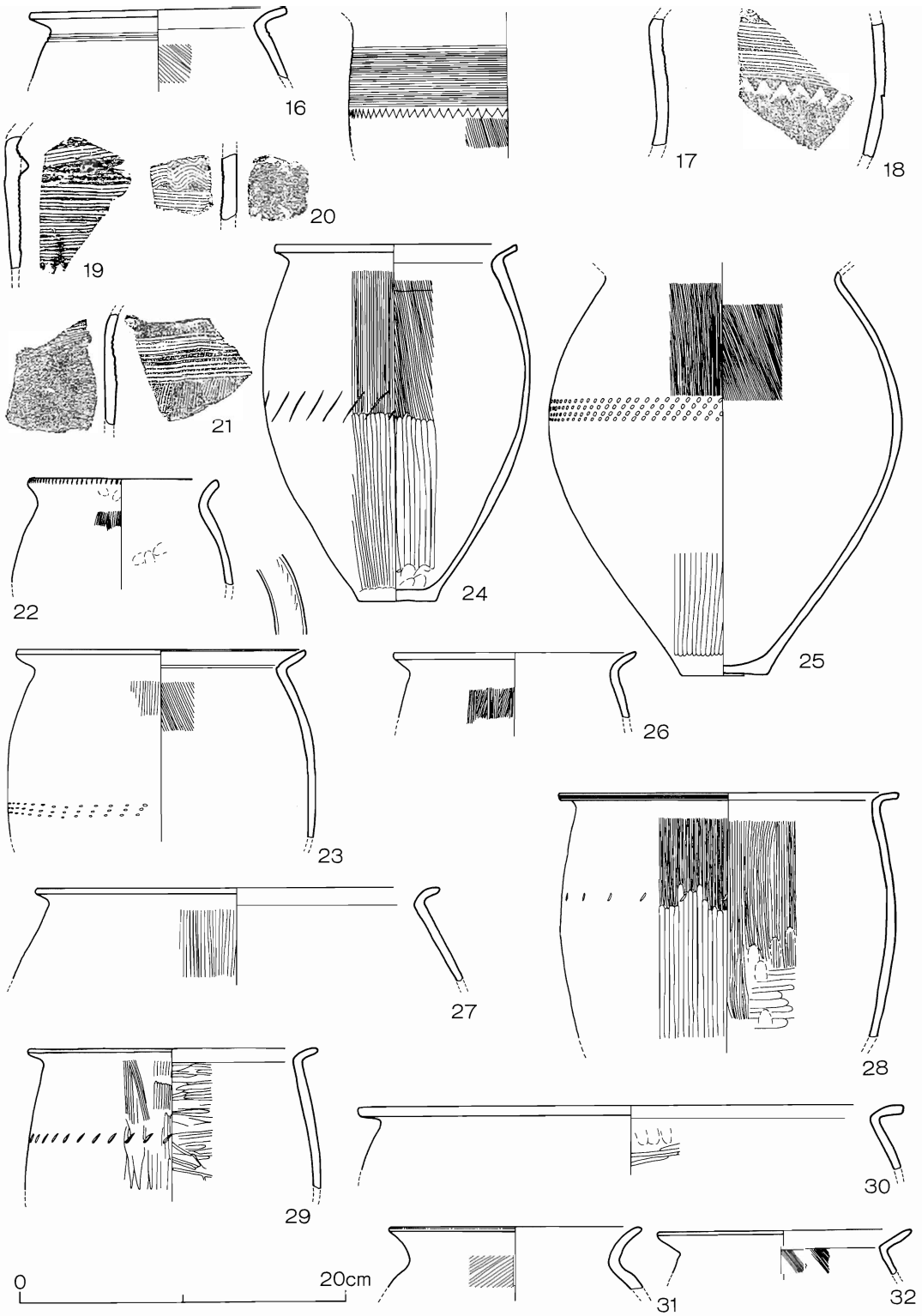
第95図1154～1175は実用には適さない小形の土器を示した。これらのうち、粗く仕上げられた1154以外は、小形であってもその成型・調整は通常のそれを忠実に守っている。但し、1160は前期のものである可能性がある。

j．土製品

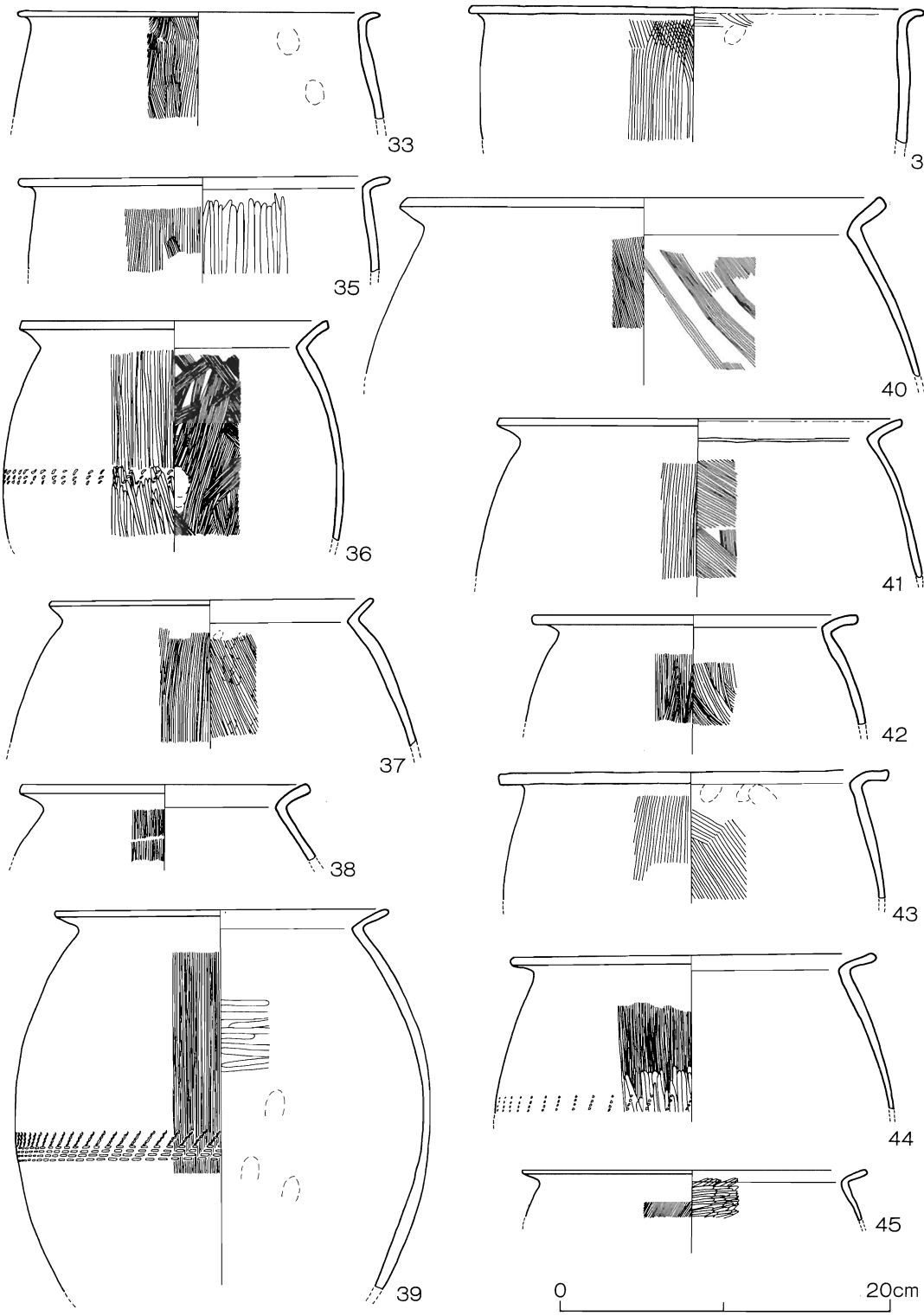
分銅型土製品　第98図には出土した全ての分銅型土製品を示した。６個体ある。1218は現存部9.5×5.7㎝、厚さ0.8㎝で６個体中最も丁寧な作りのものである。焼成も良好で堅く焼きしまっており、他の分銅型土製品とは時期や製作場所が異なるものかもしれない。文様はクシ状工具で描かれている。1219は長さ3.3㎝、厚さ1.3㎝を残すが元来小形品であったろう。文様はクシ状工具による沈線を列点文で囲むものである。1220は６個体中最大の破片で現存部は7.1×3.6㎝、厚さ1.3㎝ある。文様の手法は1219に同じで、沈線と列点文である。側面から裏面にむかい小孔が多数貫かれている。1222は現存部3.7×3.0㎝、厚さ



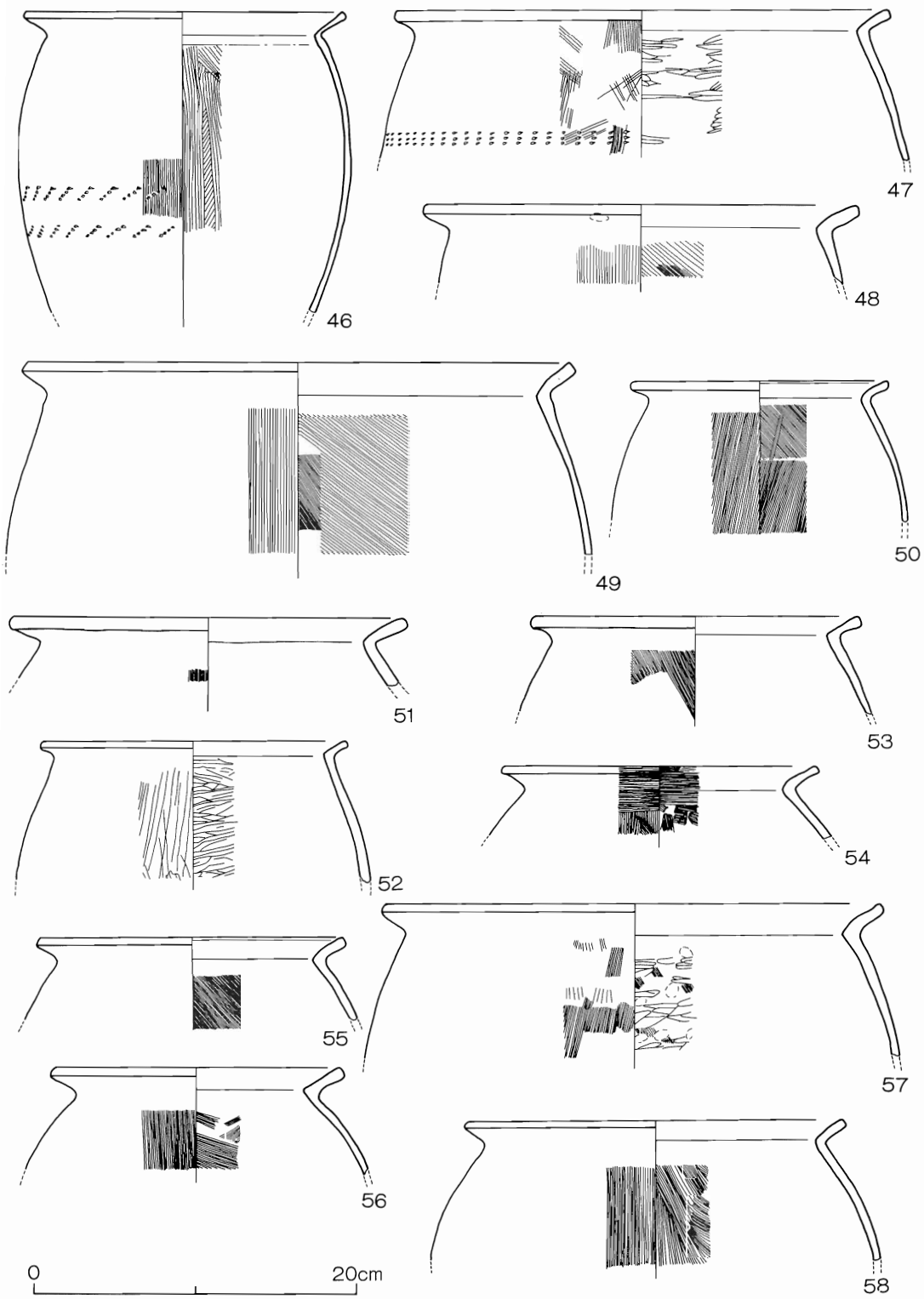
第21図　弥生土器実測図(1)



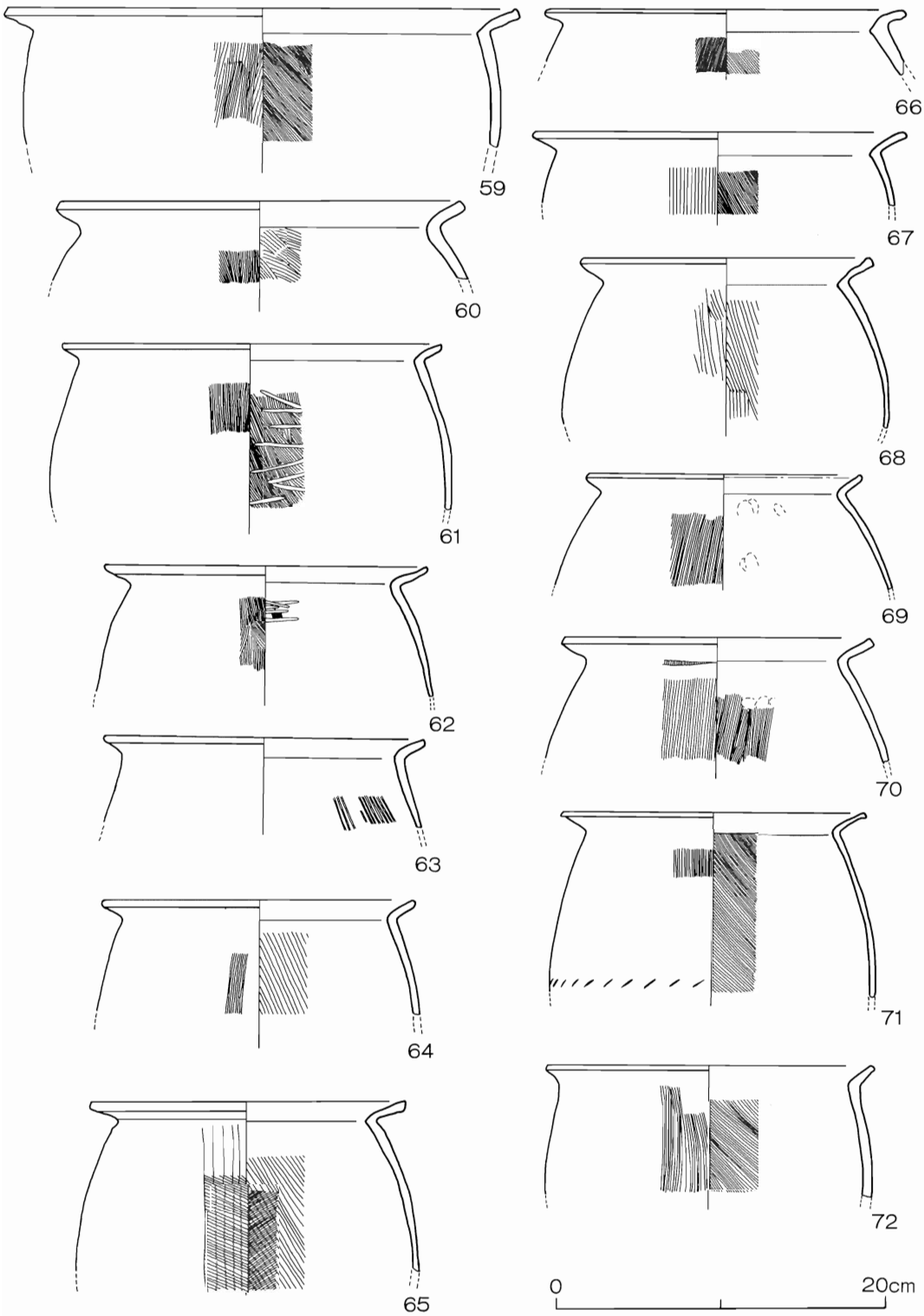
第22図　弥生土器実測図(2)



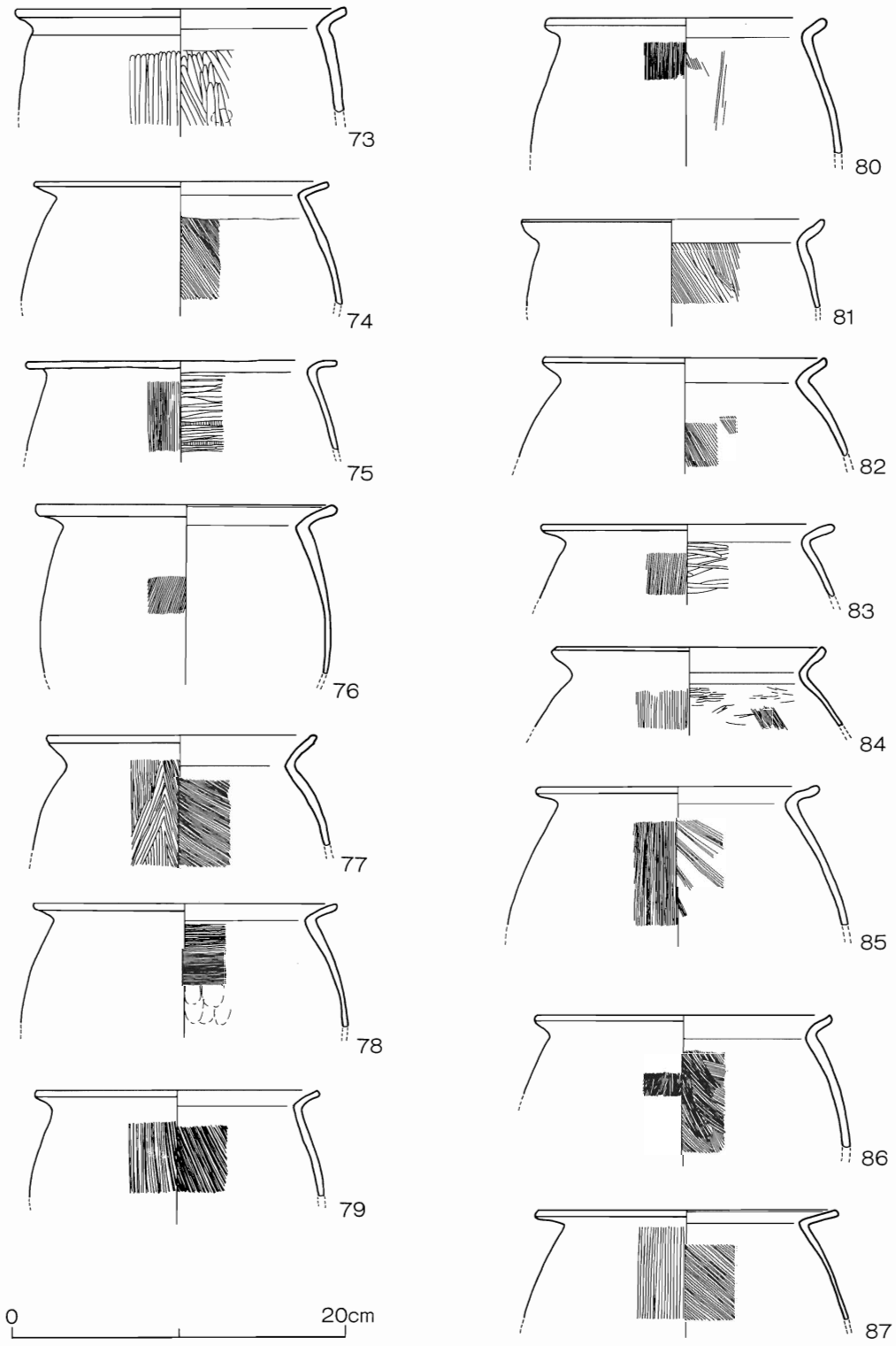
第23図　弥生土器実測図(3)



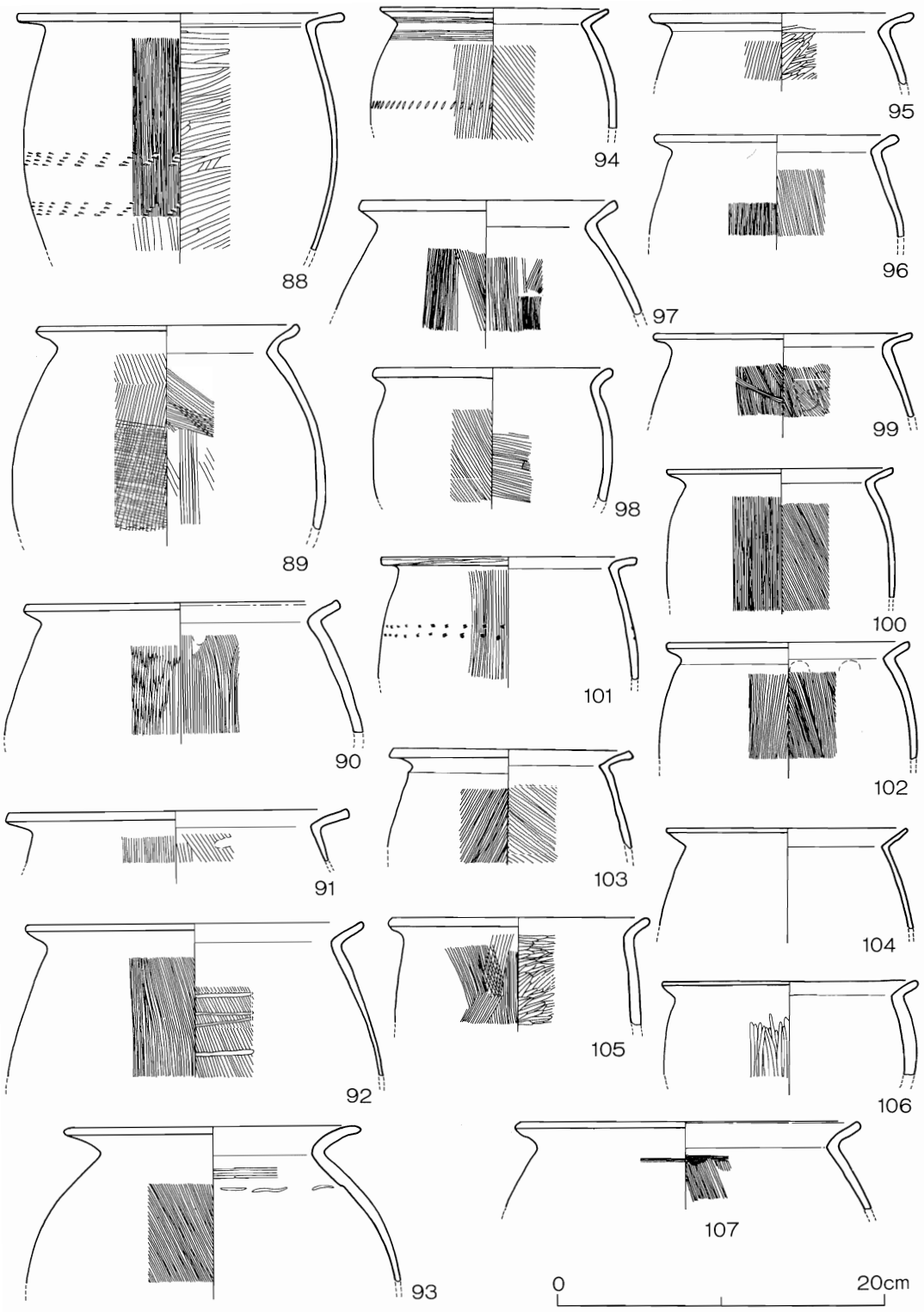
第24図　弥生土器実測図(4)



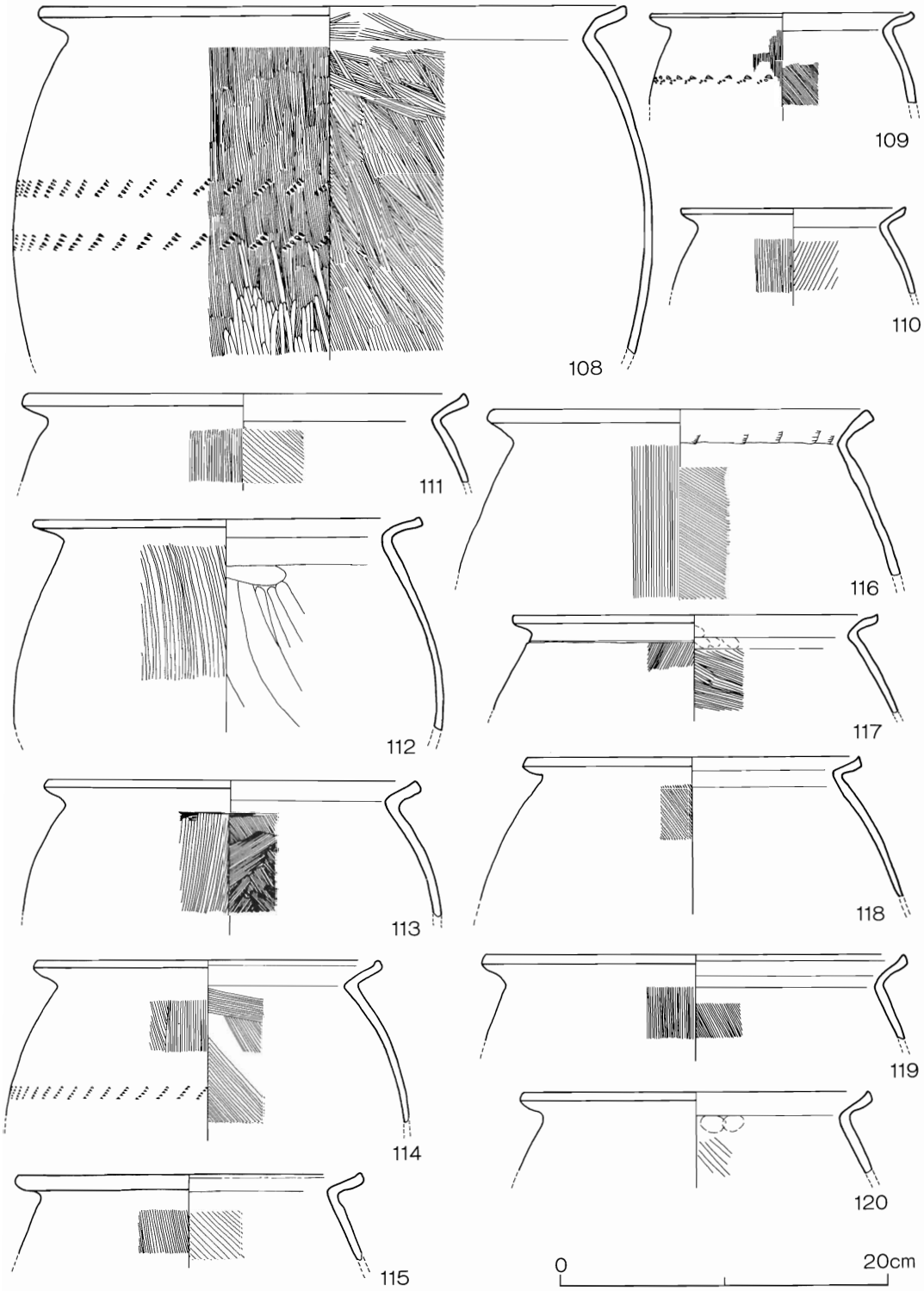
第25図　弥生土器実測図(5)



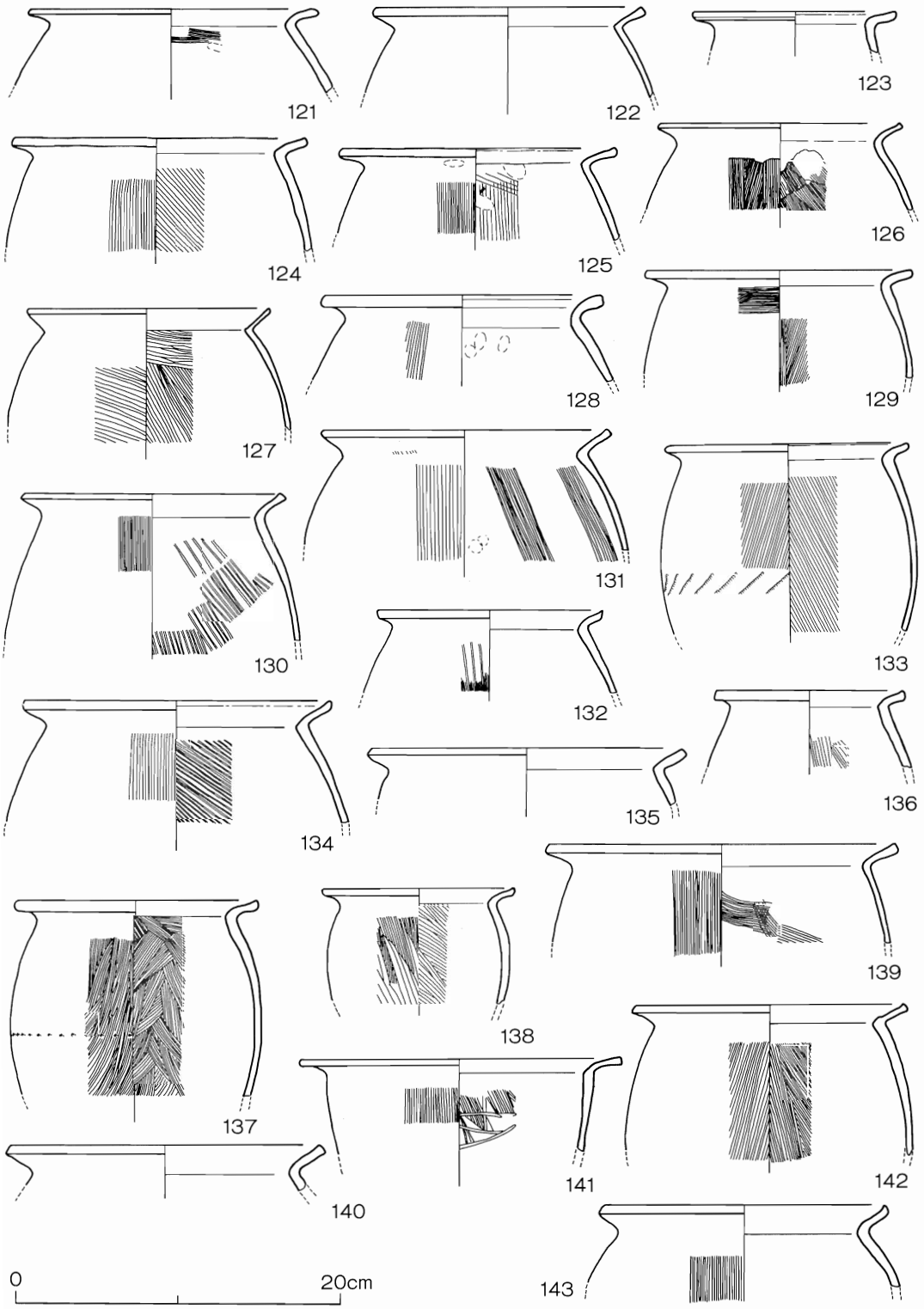
第26図　弥生土器実測図(6)



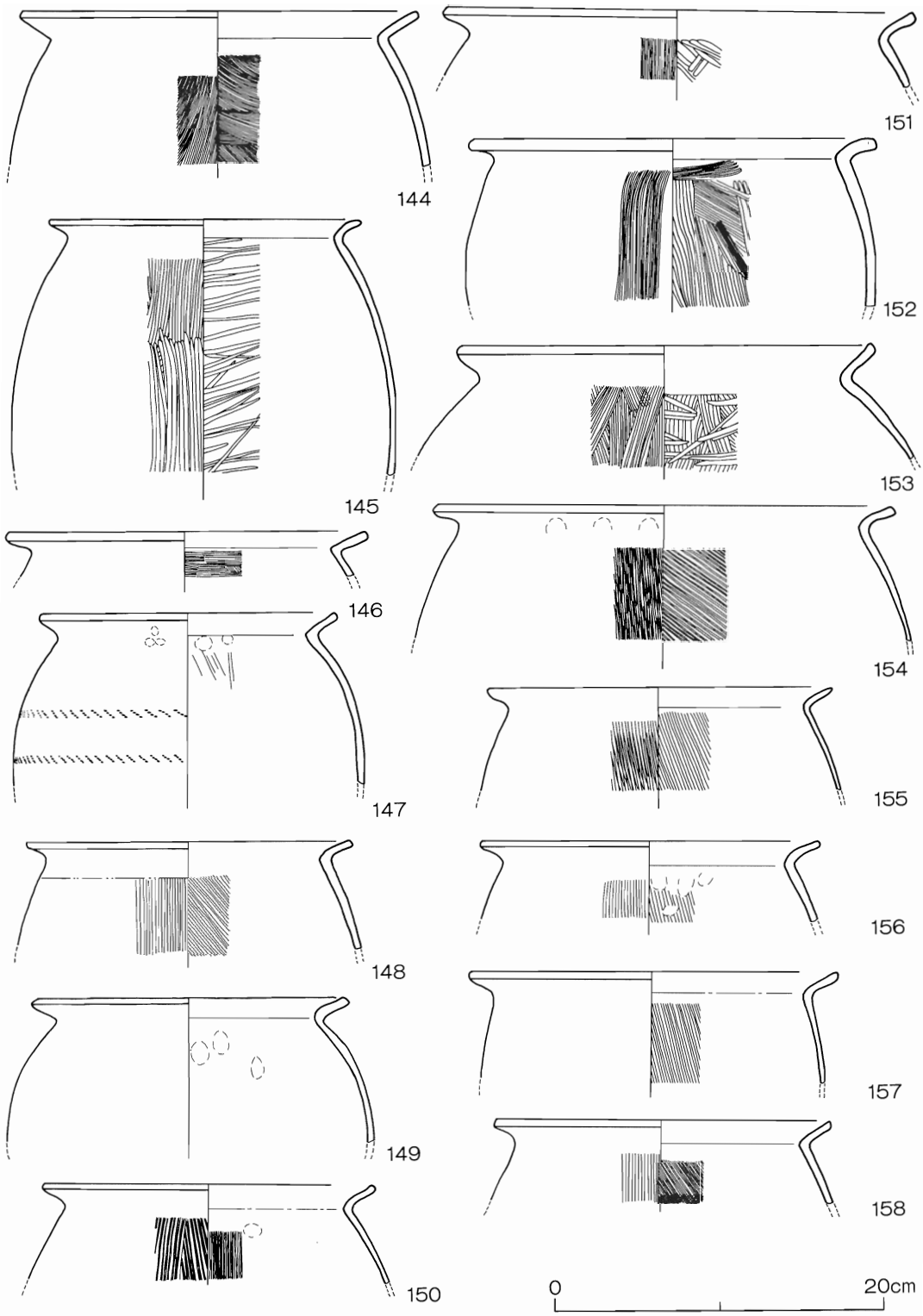
第27図　弥生土器実測図(7)



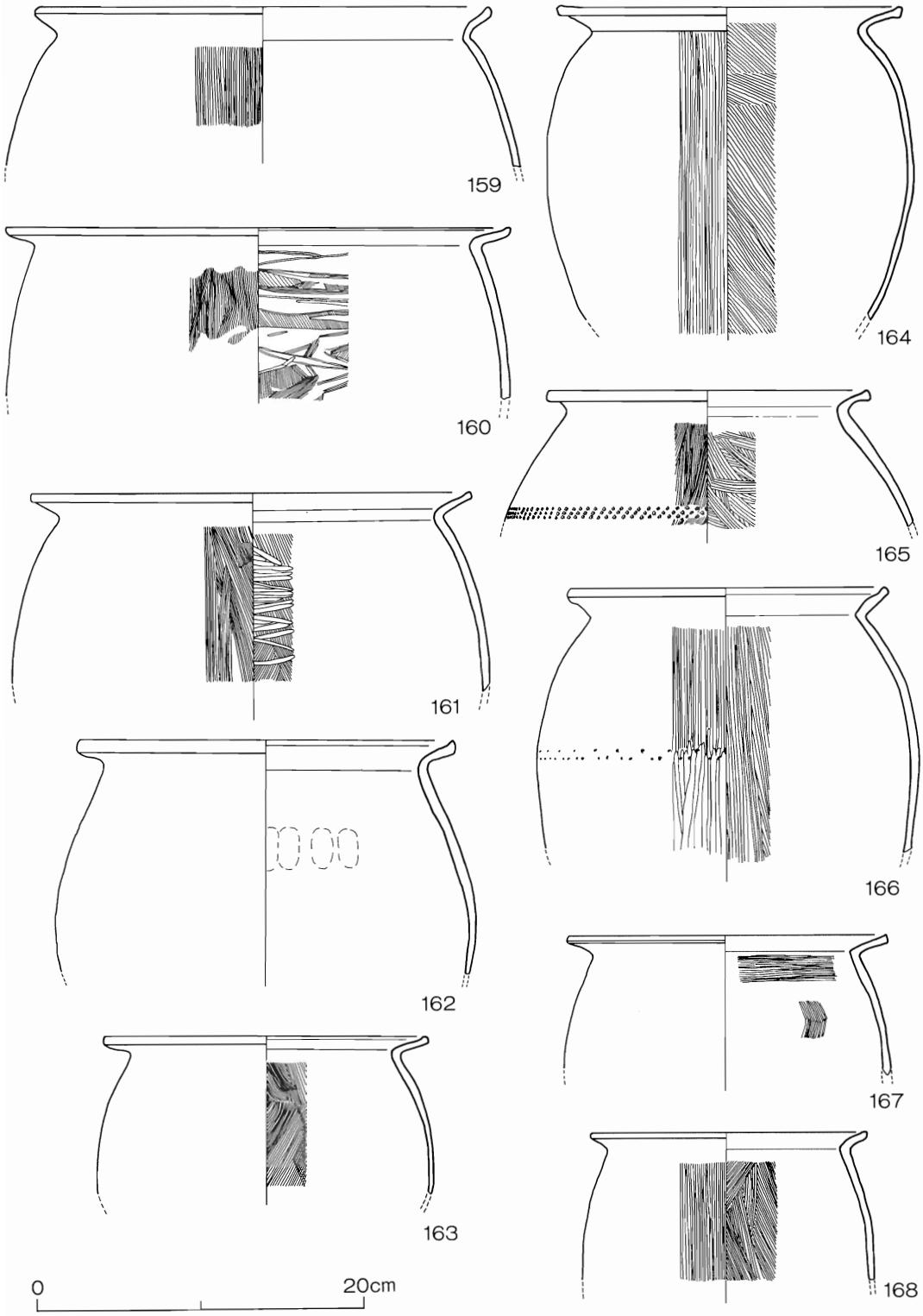
第28図　弥生土器実測図(8)



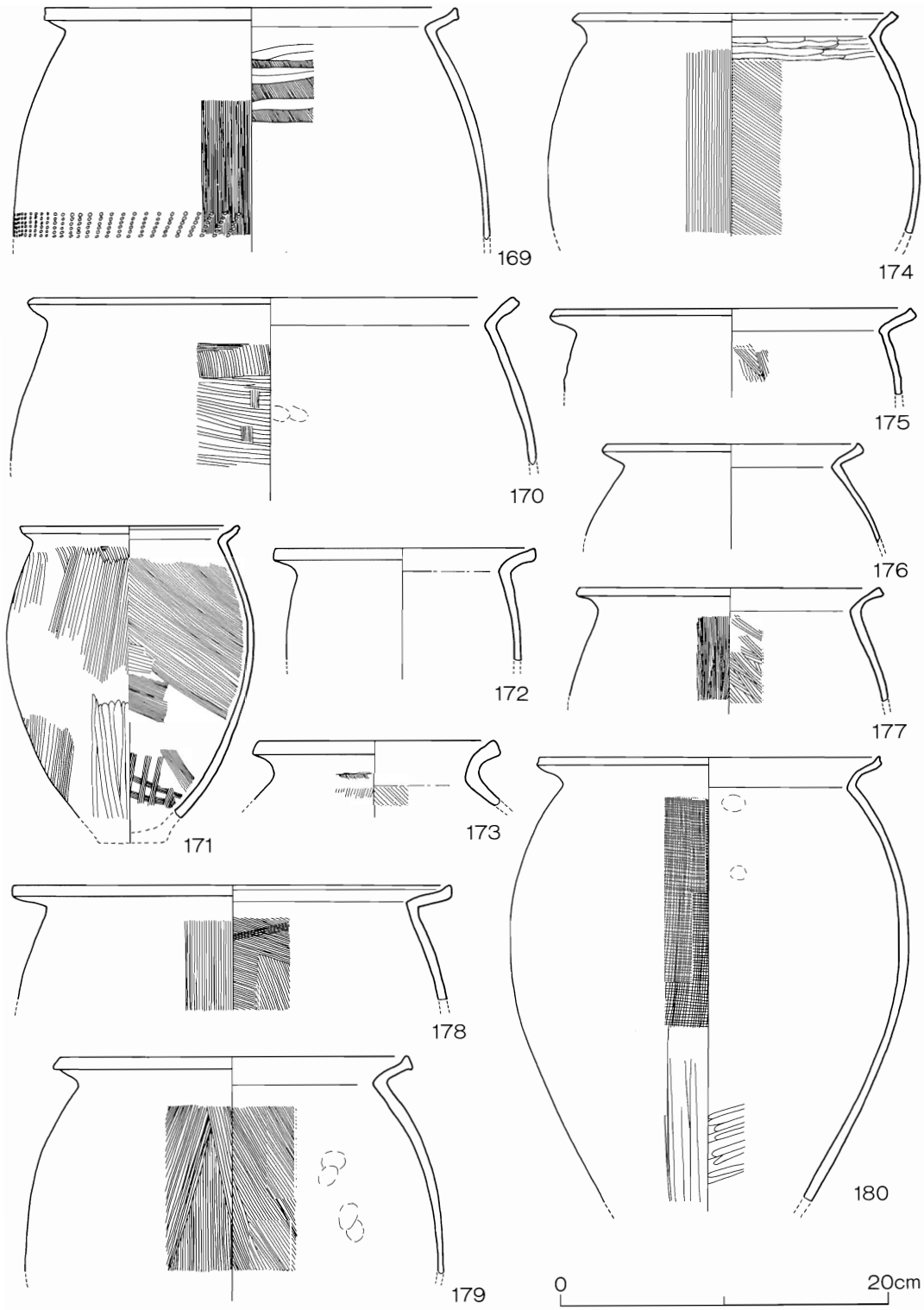
第29図　弥生土器実測図(9)



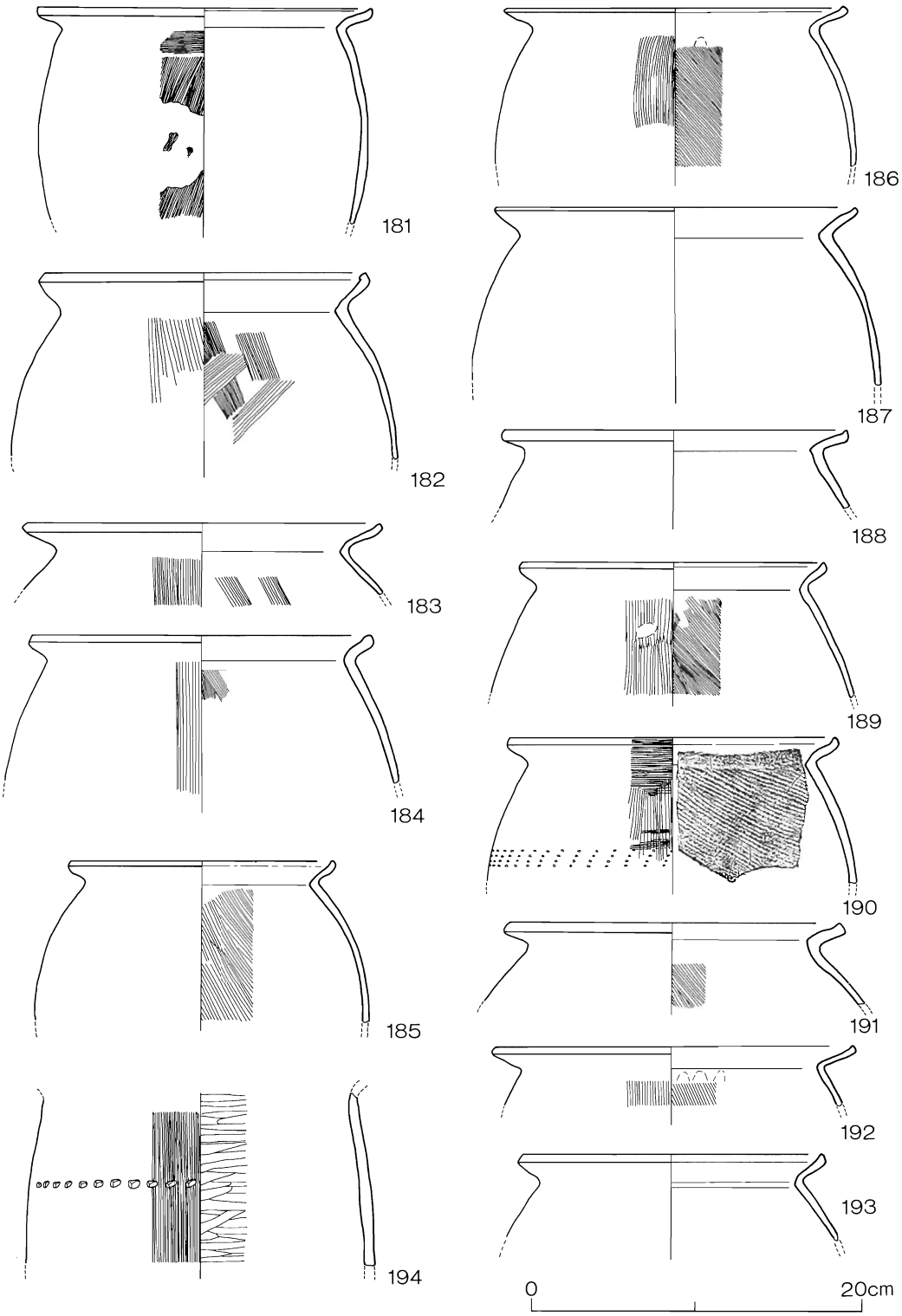
第30図　弥生土器実測図(10)



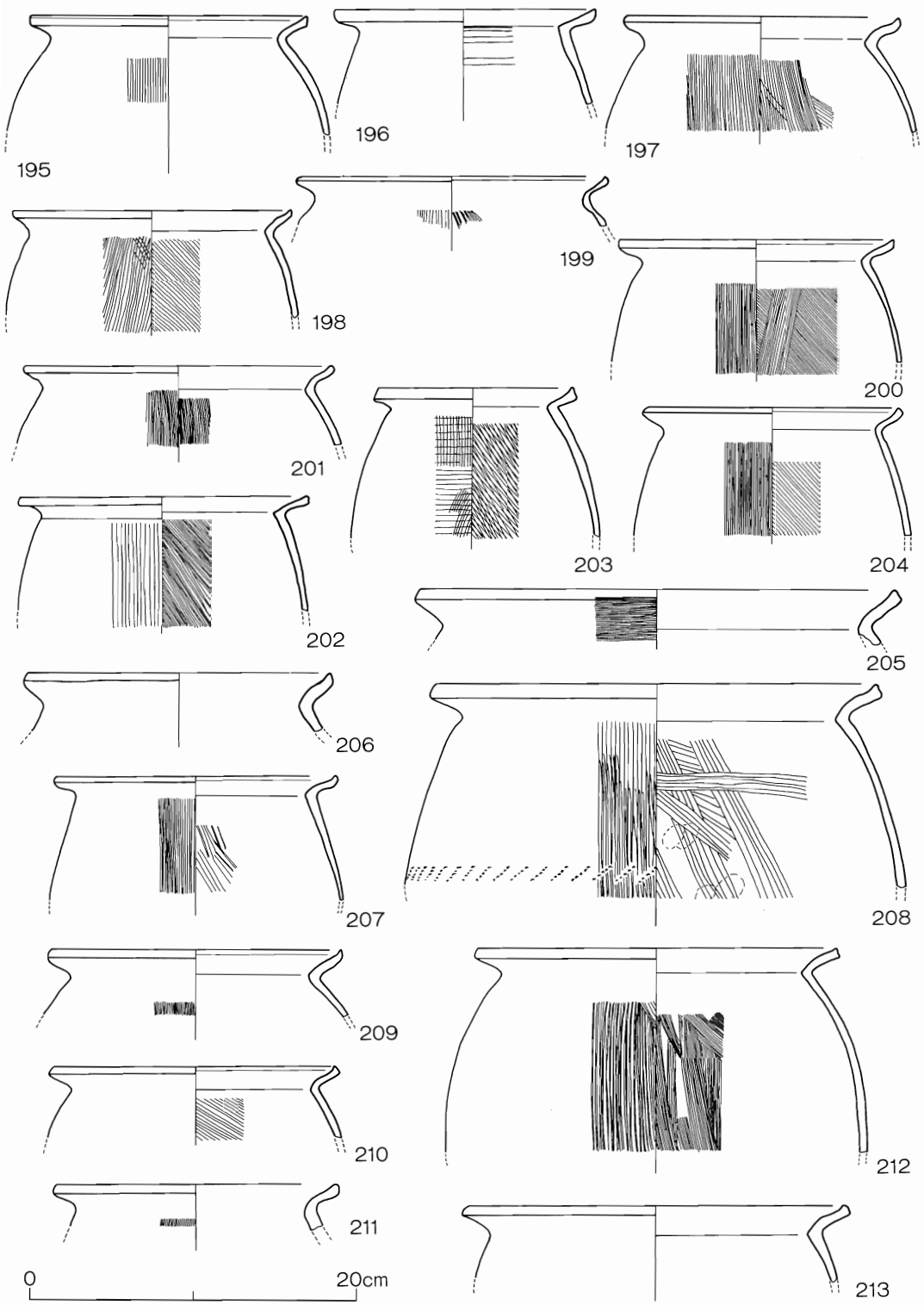
第31図　弥生土器実測図(11)



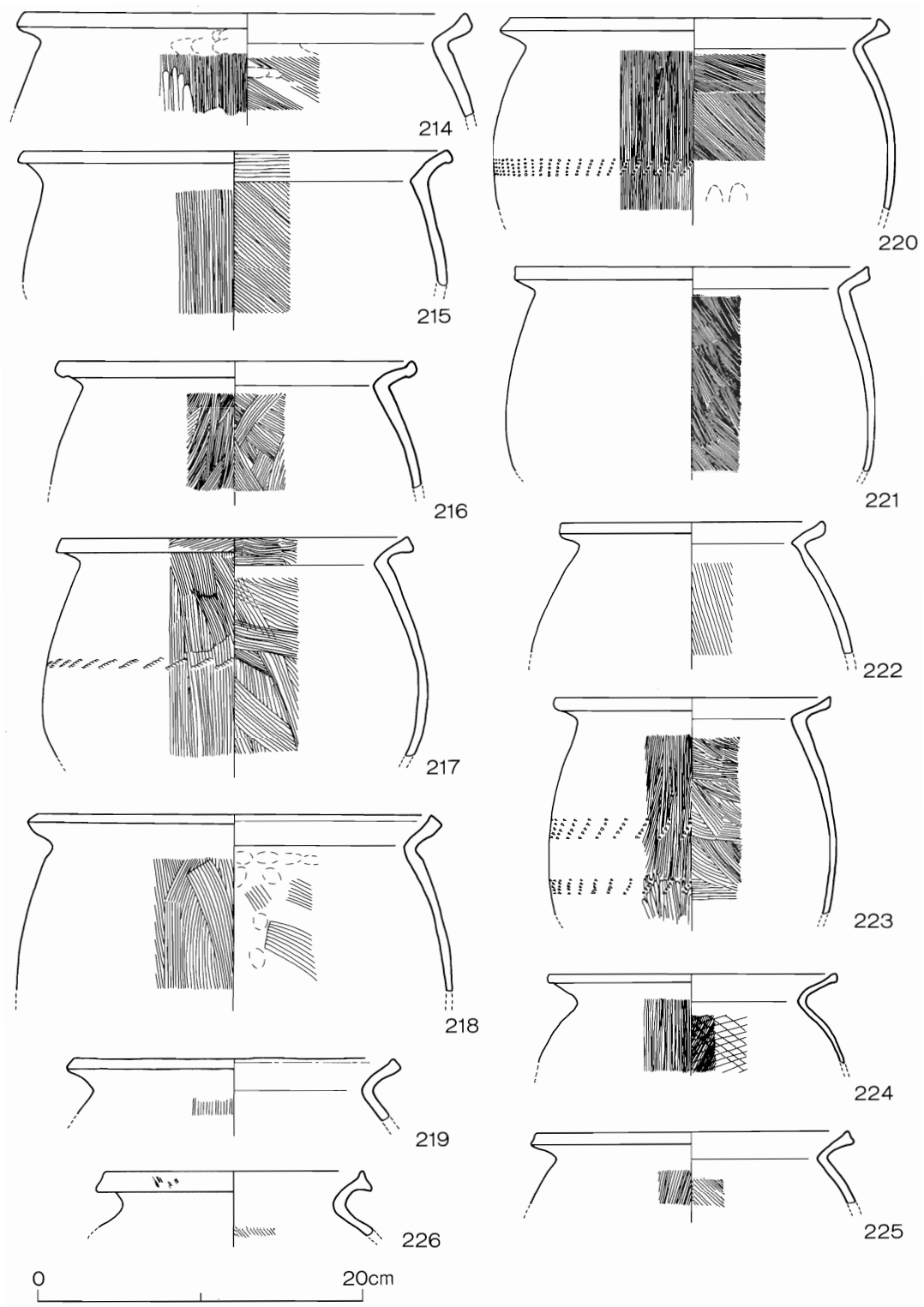
第32図　弥生土器実測図(12)



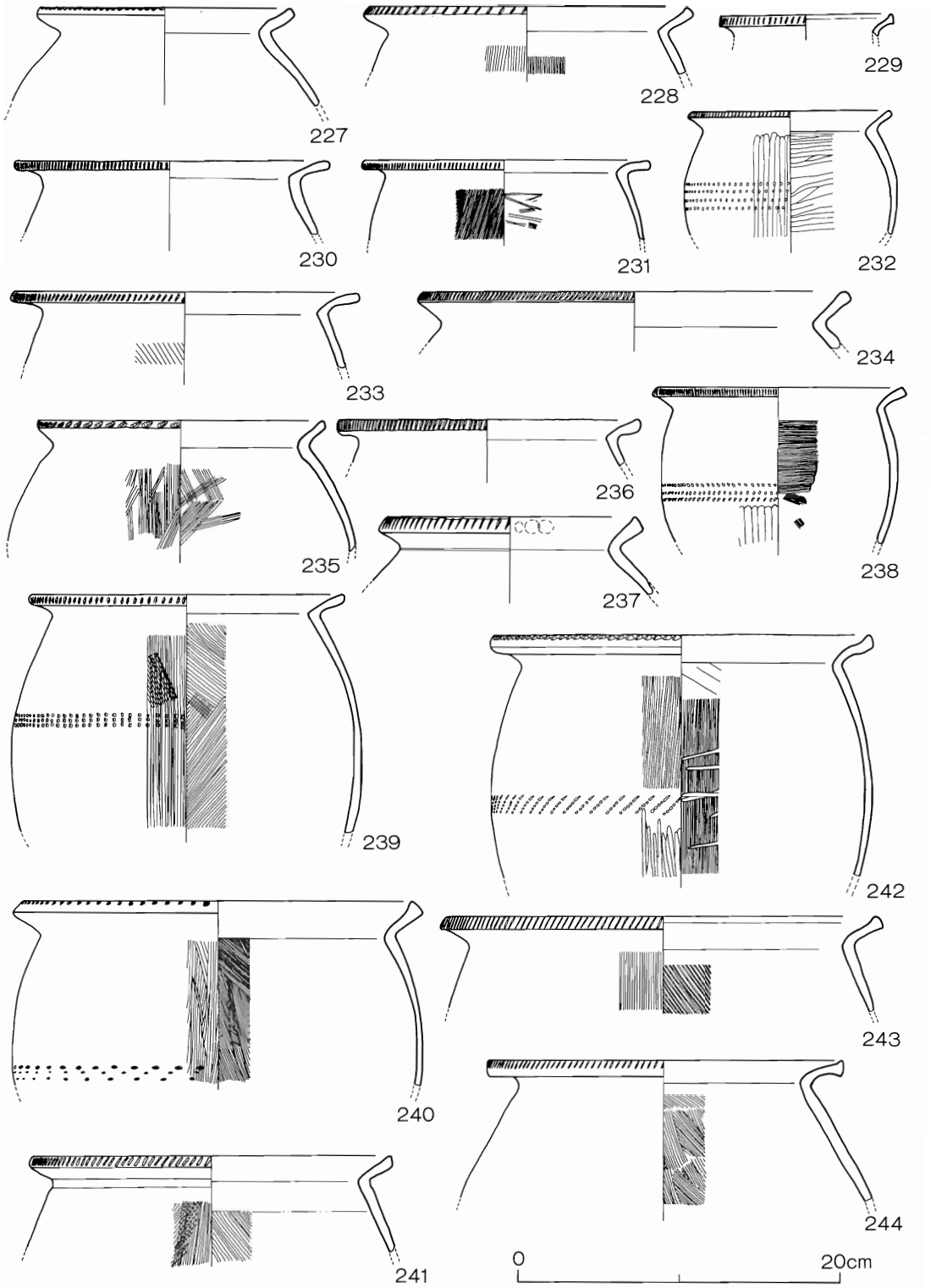
第33図　弥生土器実測図(13)



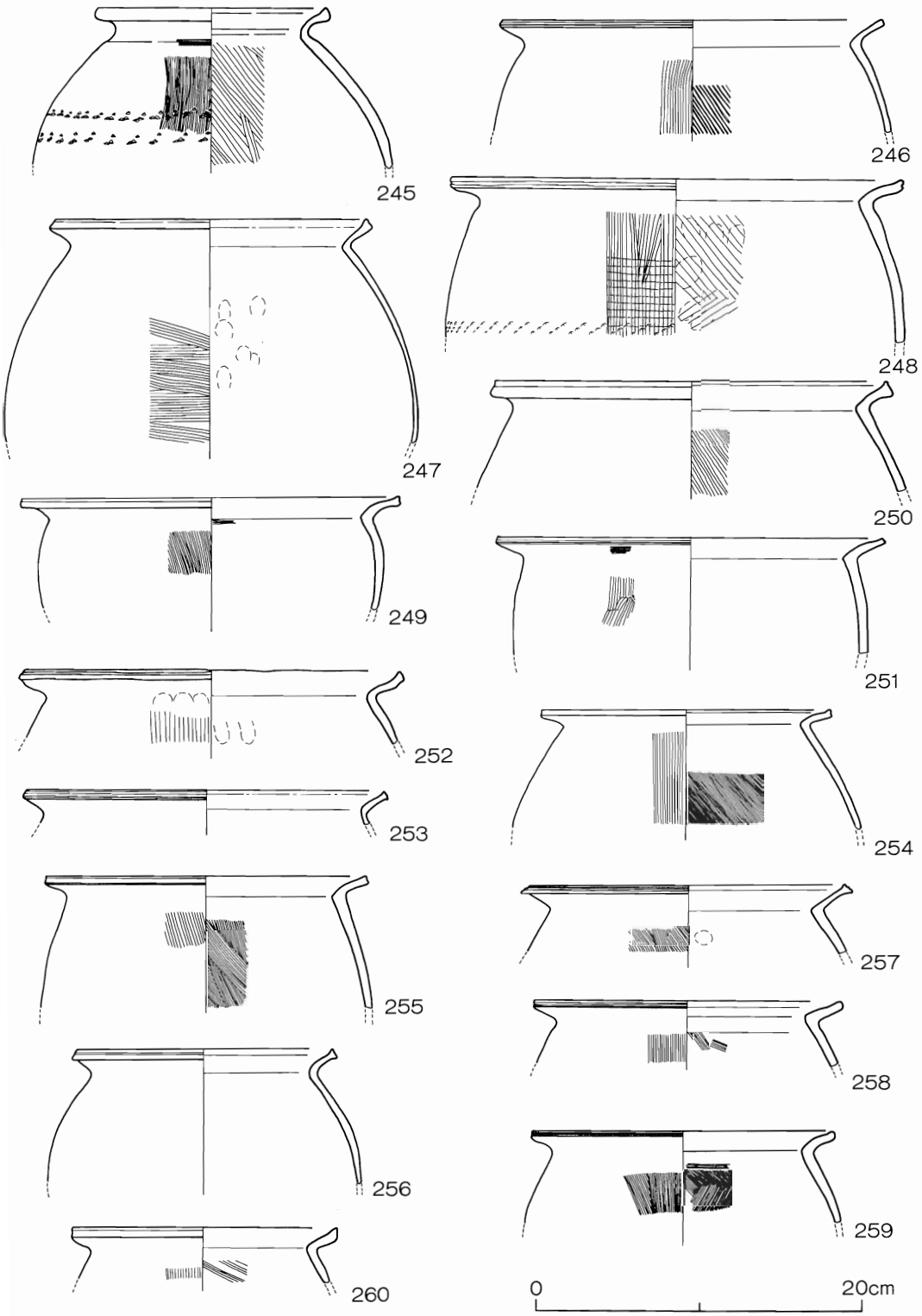
第34図　弥生土器実測図(14)



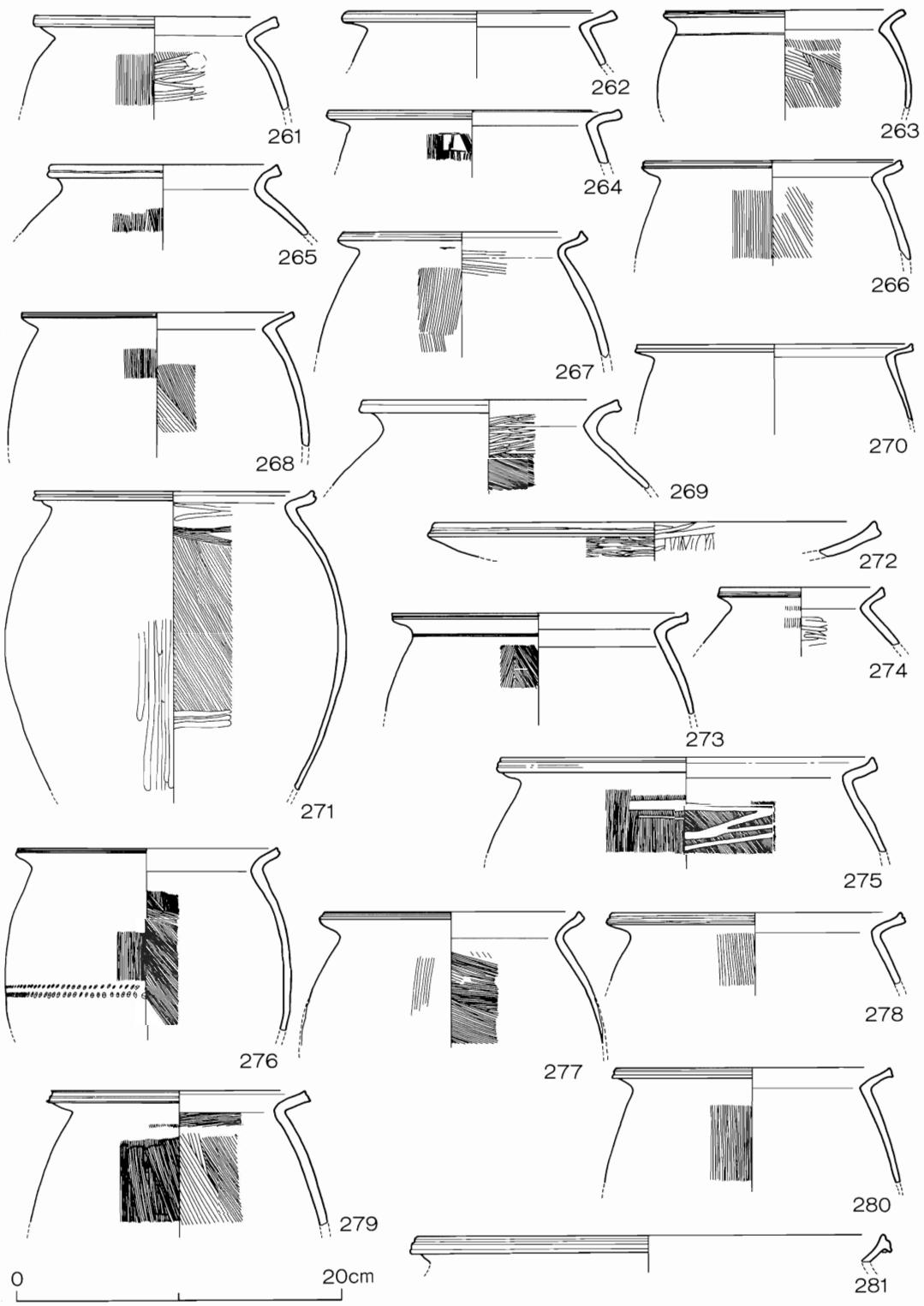
第35図　弥生土器実測図(15)



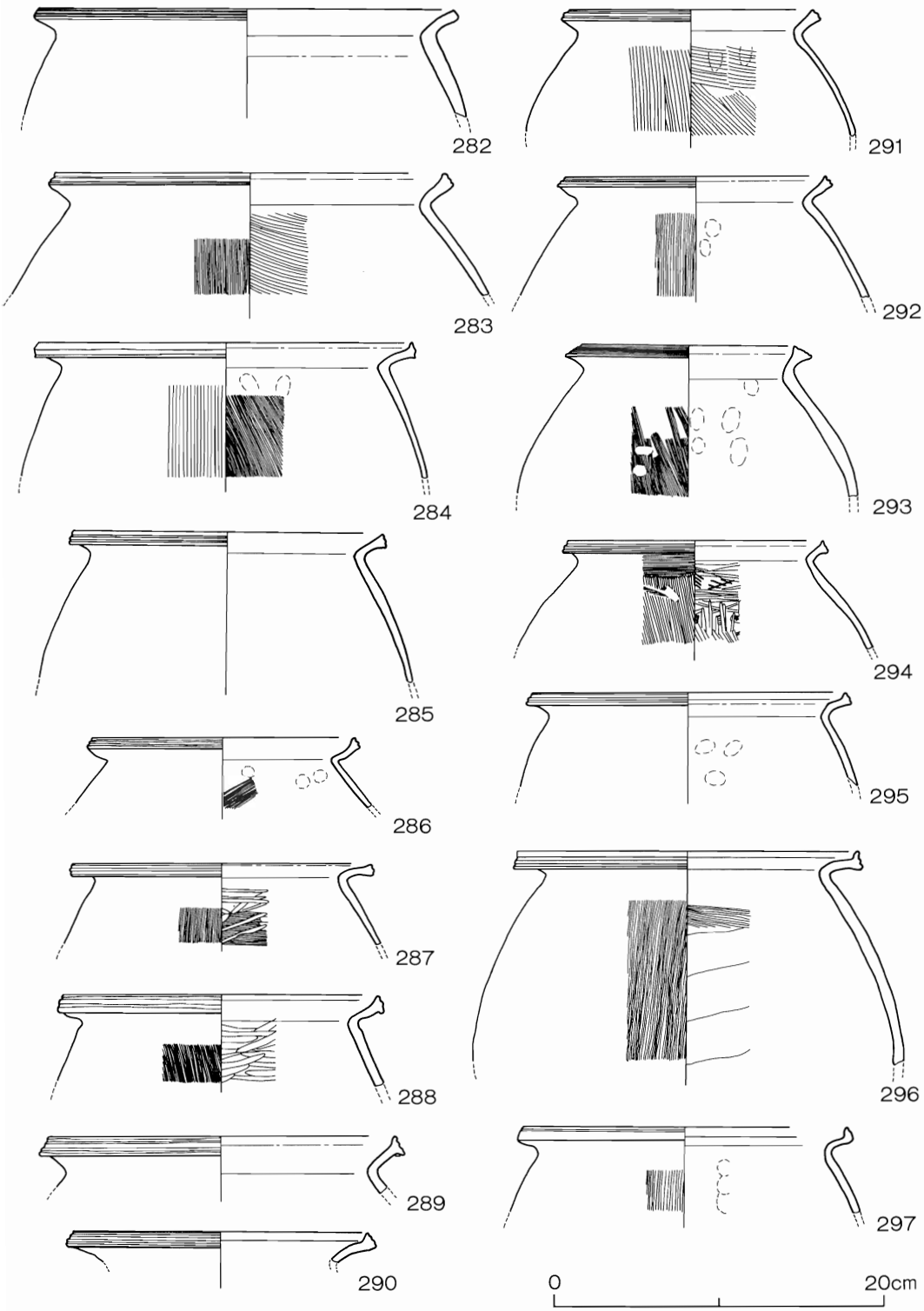
第36図　弥生土器実測図(16)



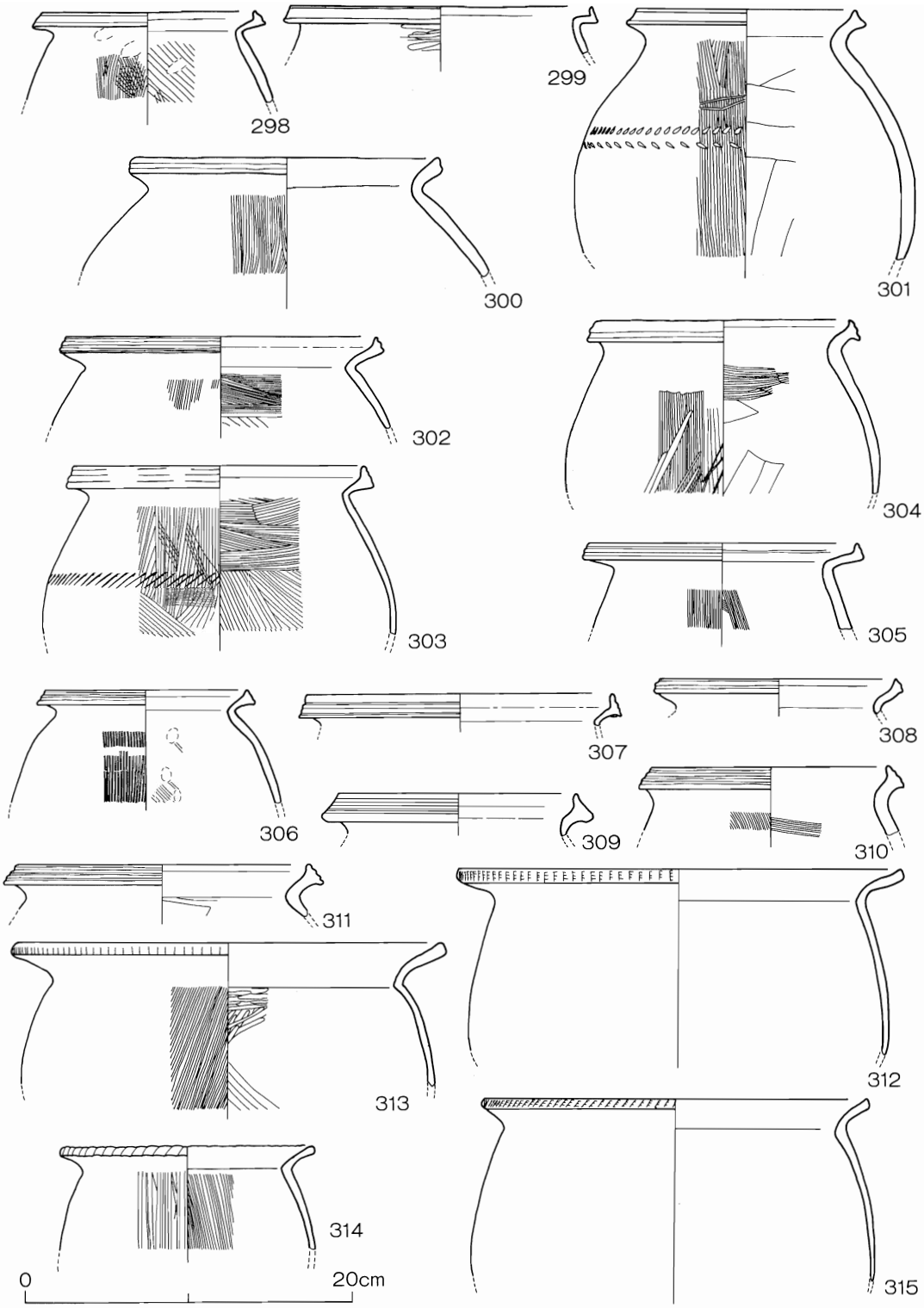
第37図　弥生土器実測図(17)



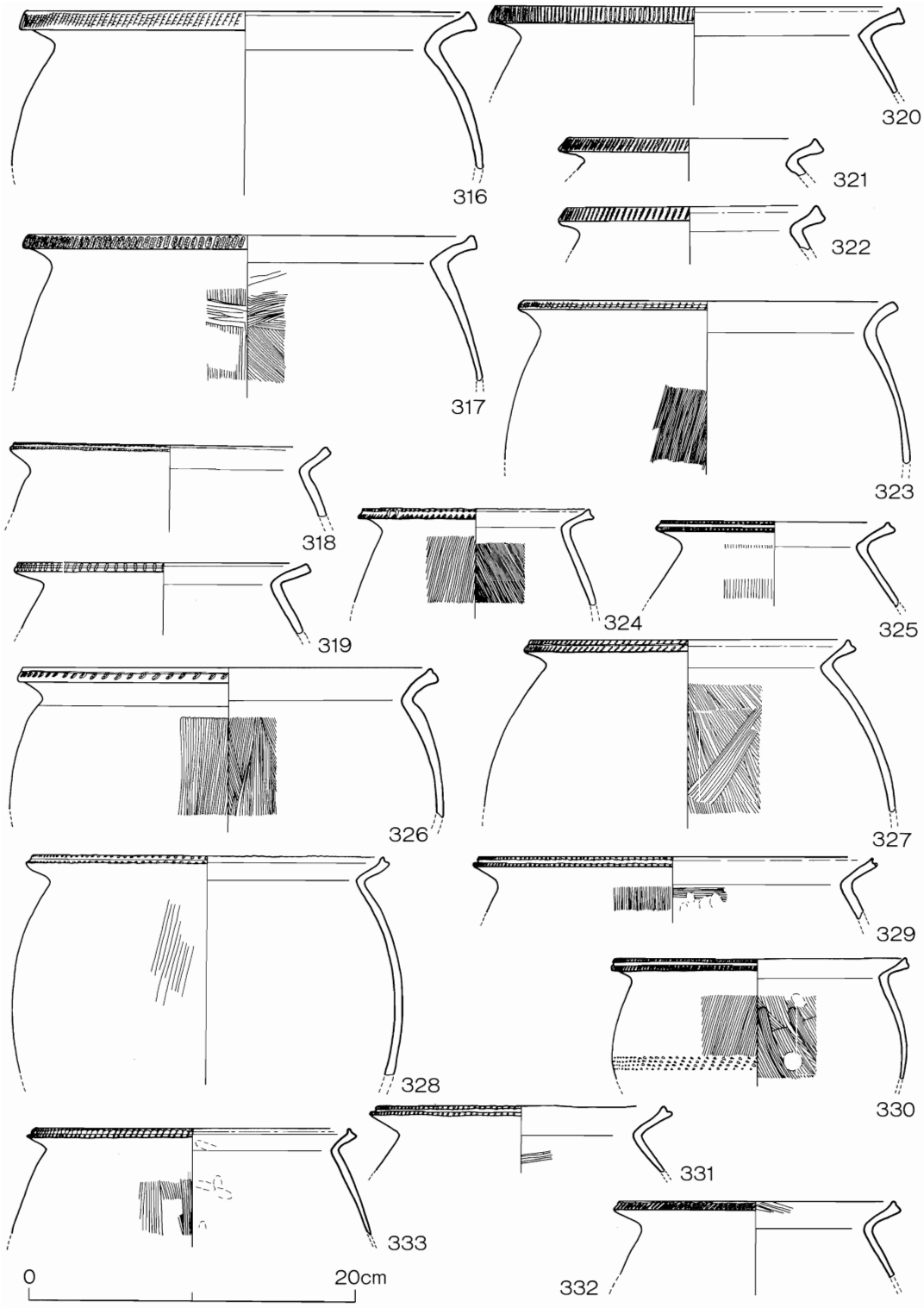
第38図　弥生土器実測図(18)



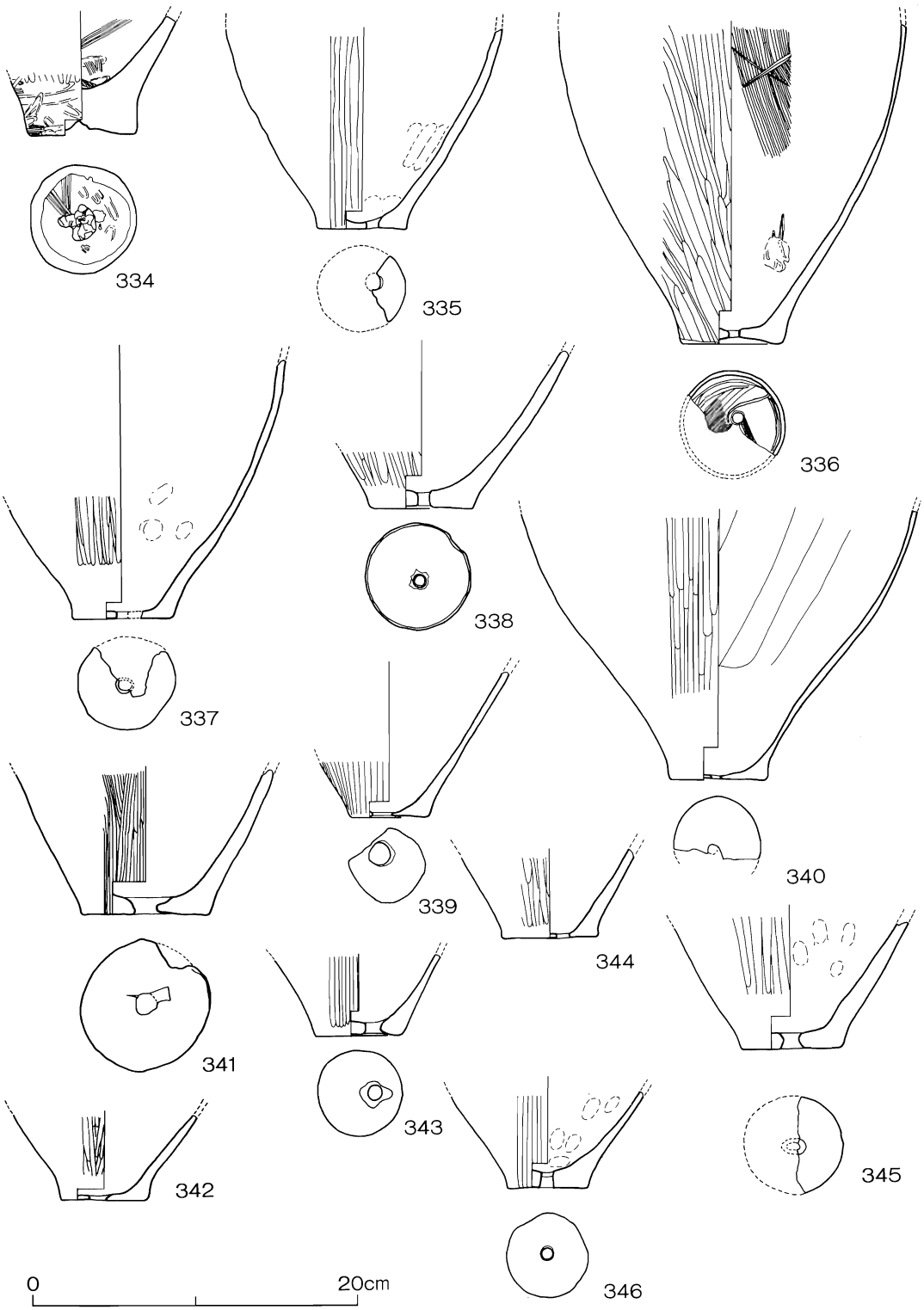
第39図　弥生土器実測図(19)



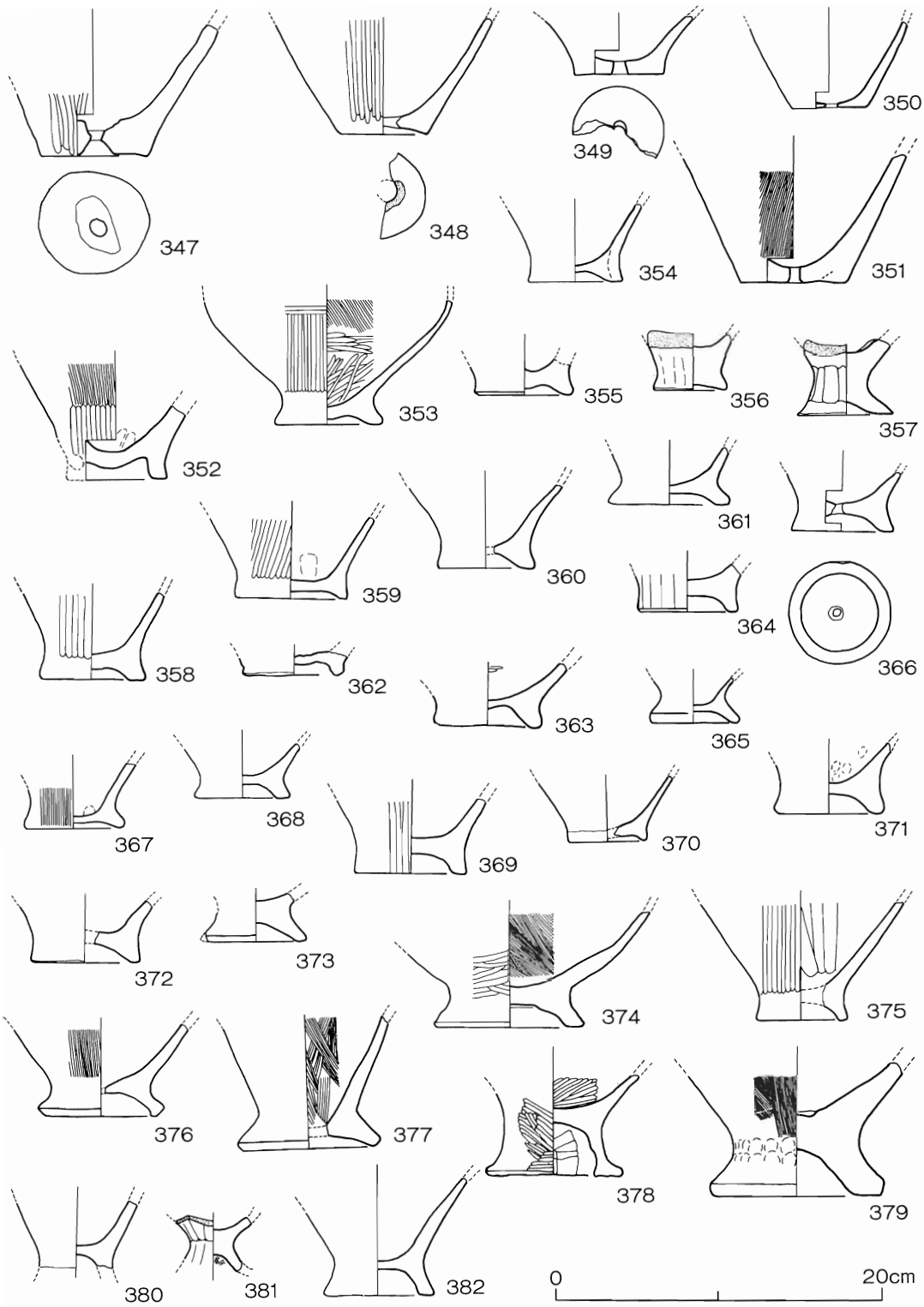
第40図　弥生土器実測図(20)



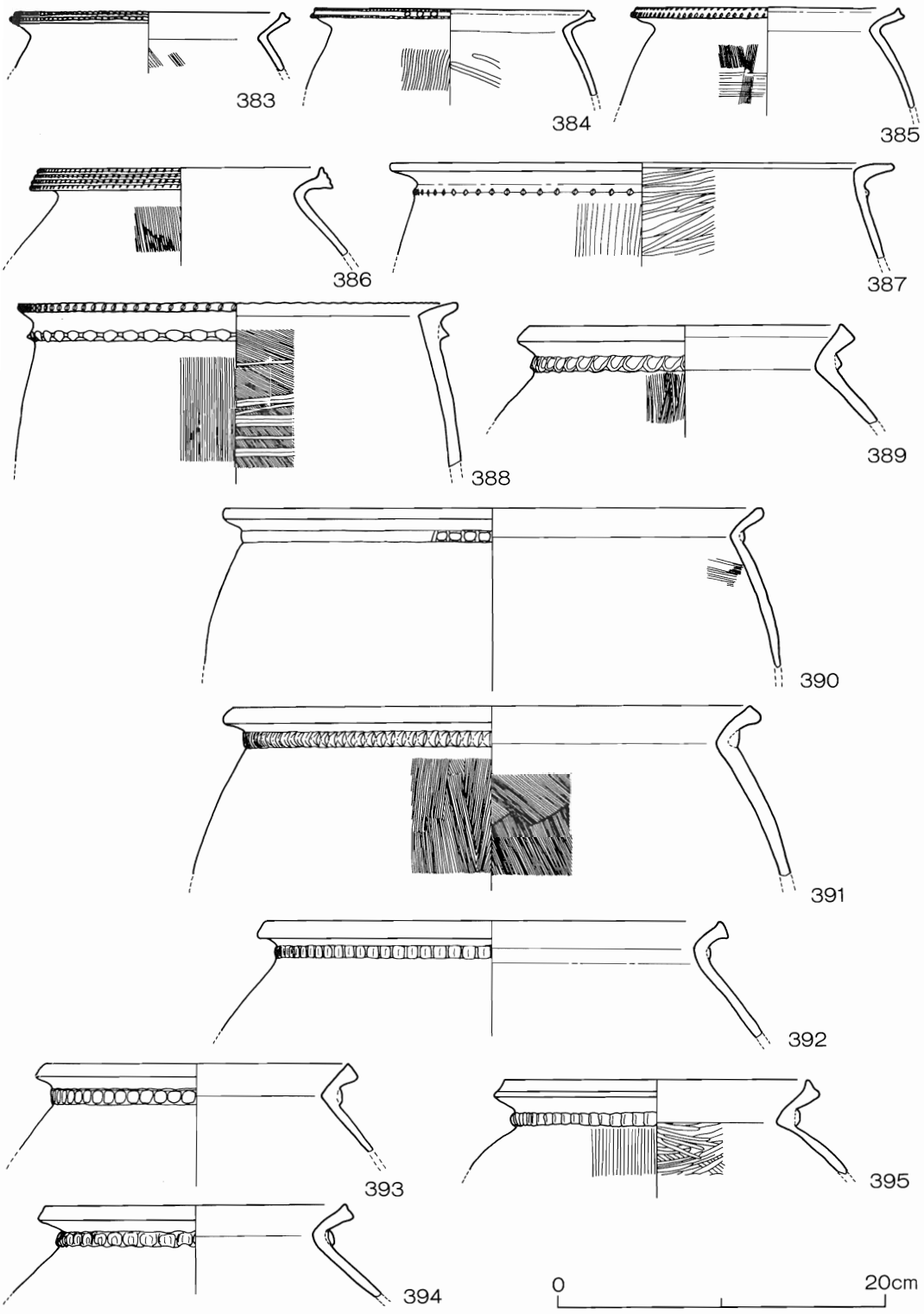
第41図　弥生土器実測図(21)



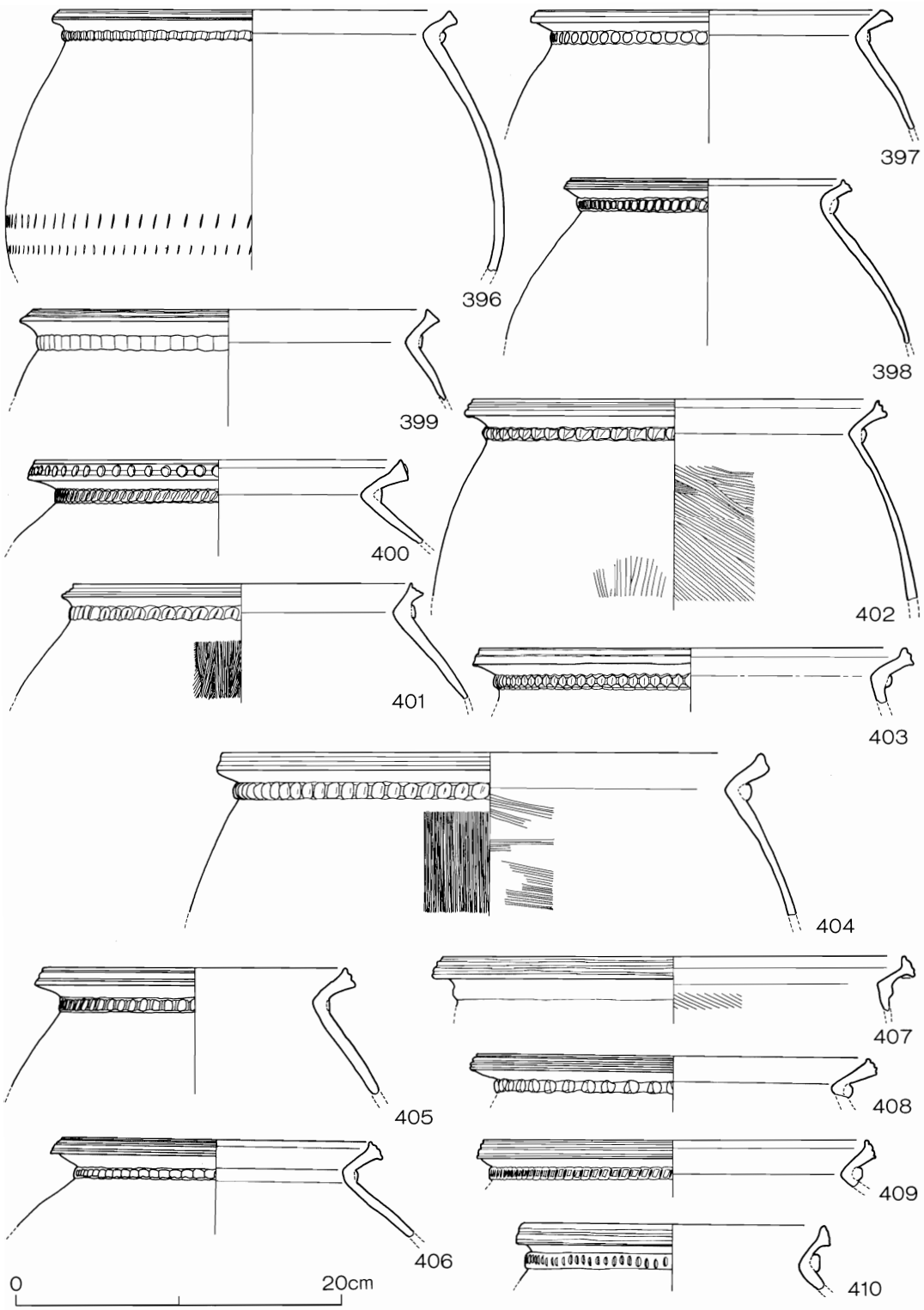
第42図　弥生土器実測図(22)



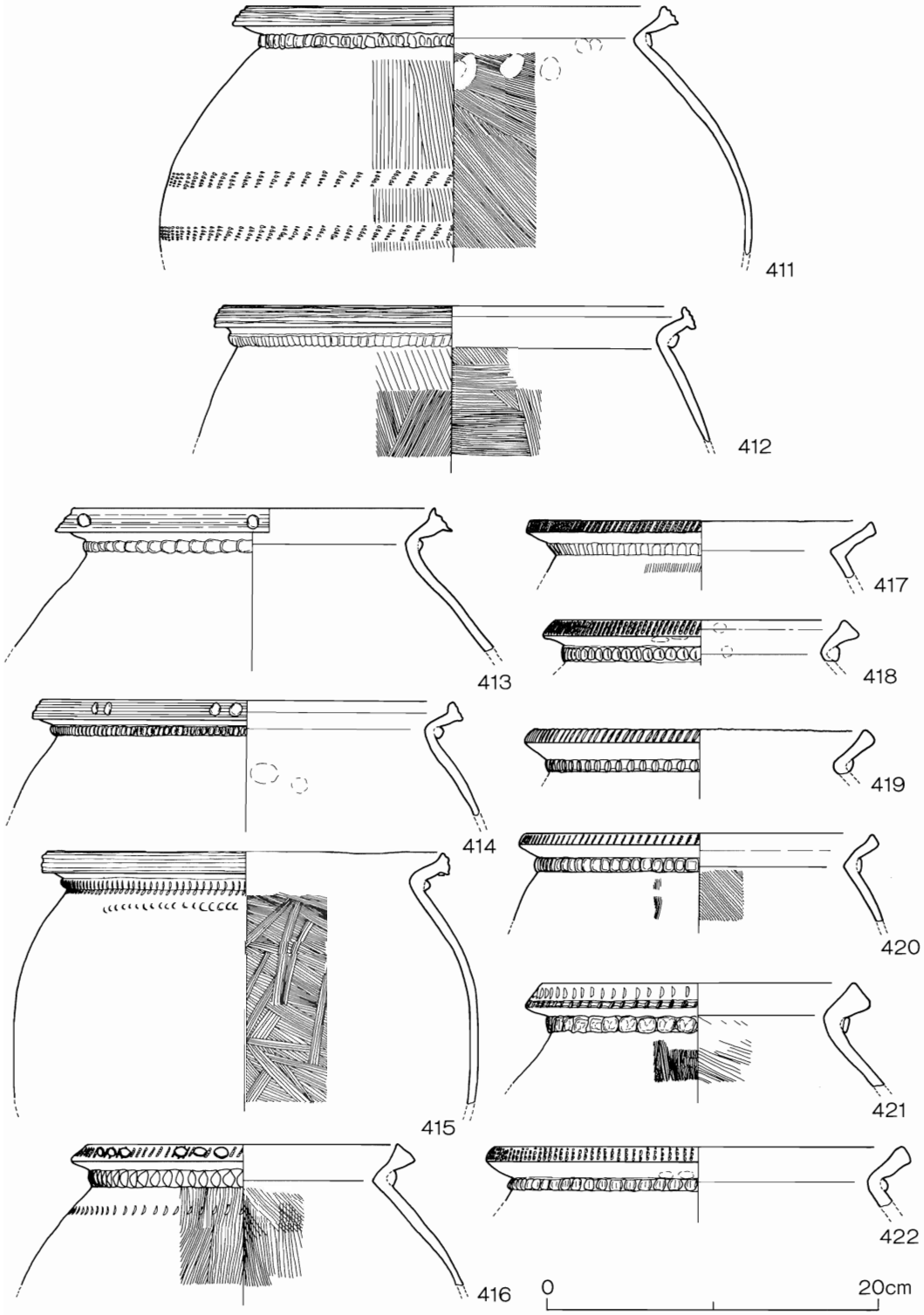
第43図　弥生土器実測図(23)



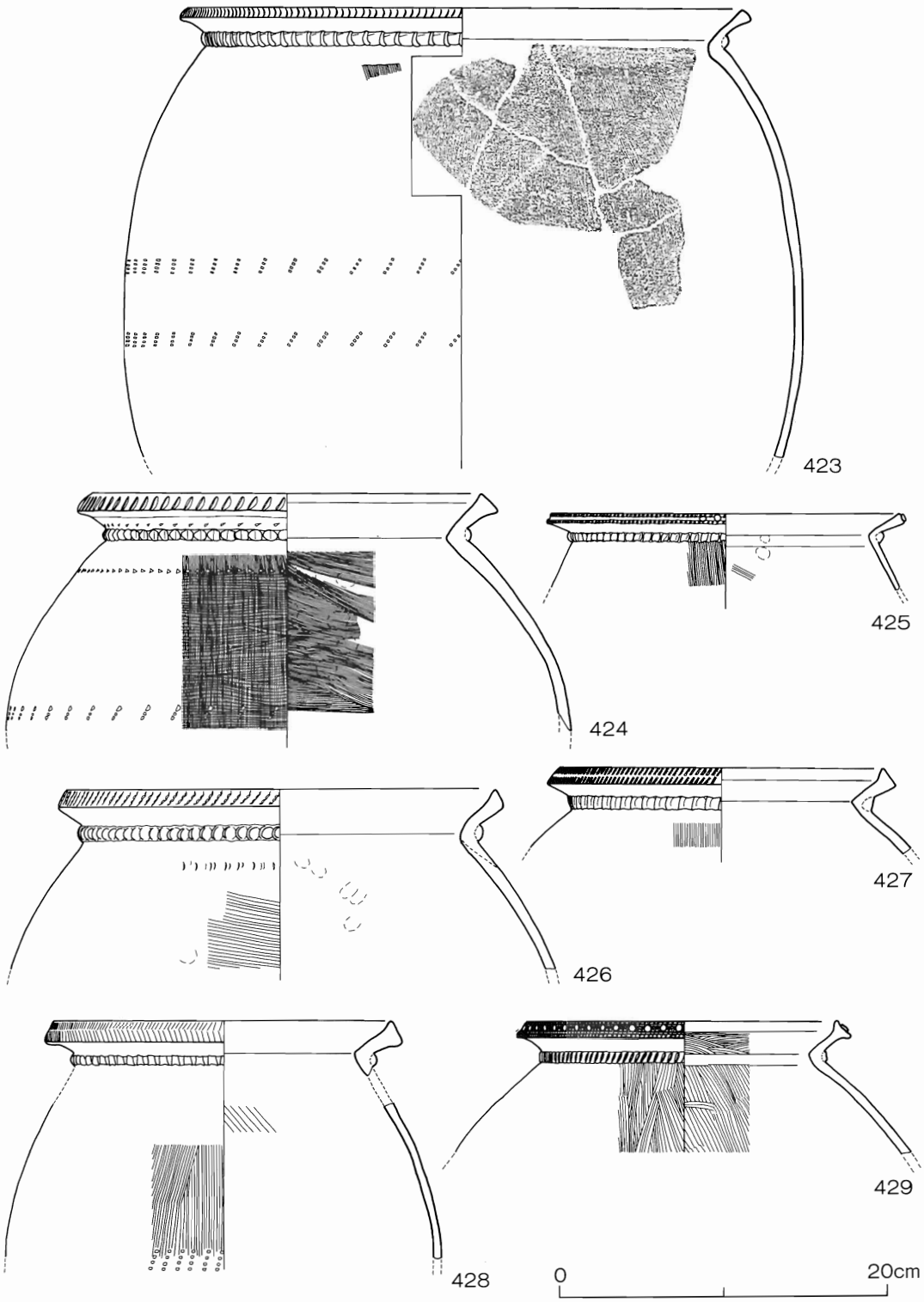
第44図　弥生土器実測図(24)



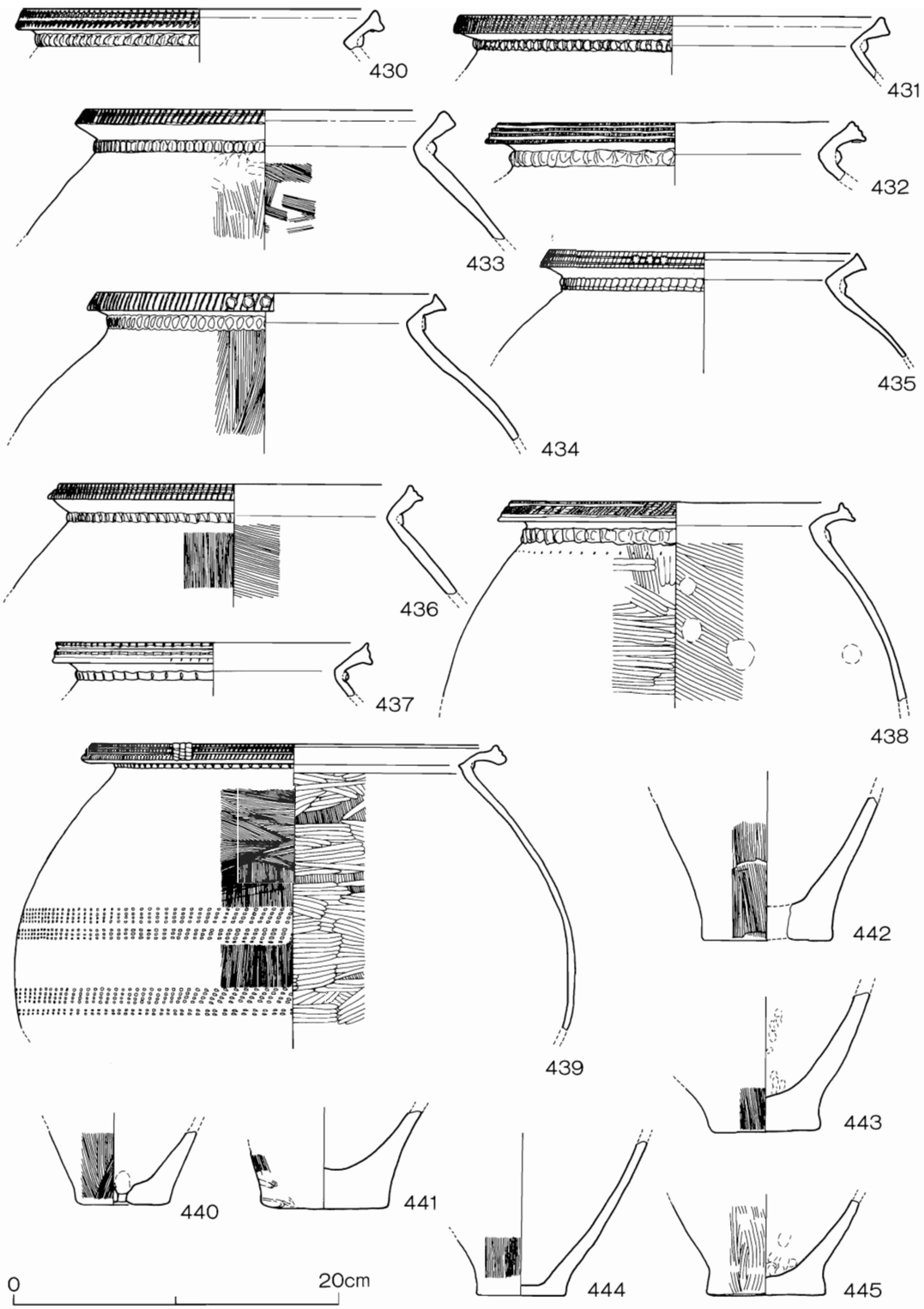
第45図　弥生土器実測図(25)



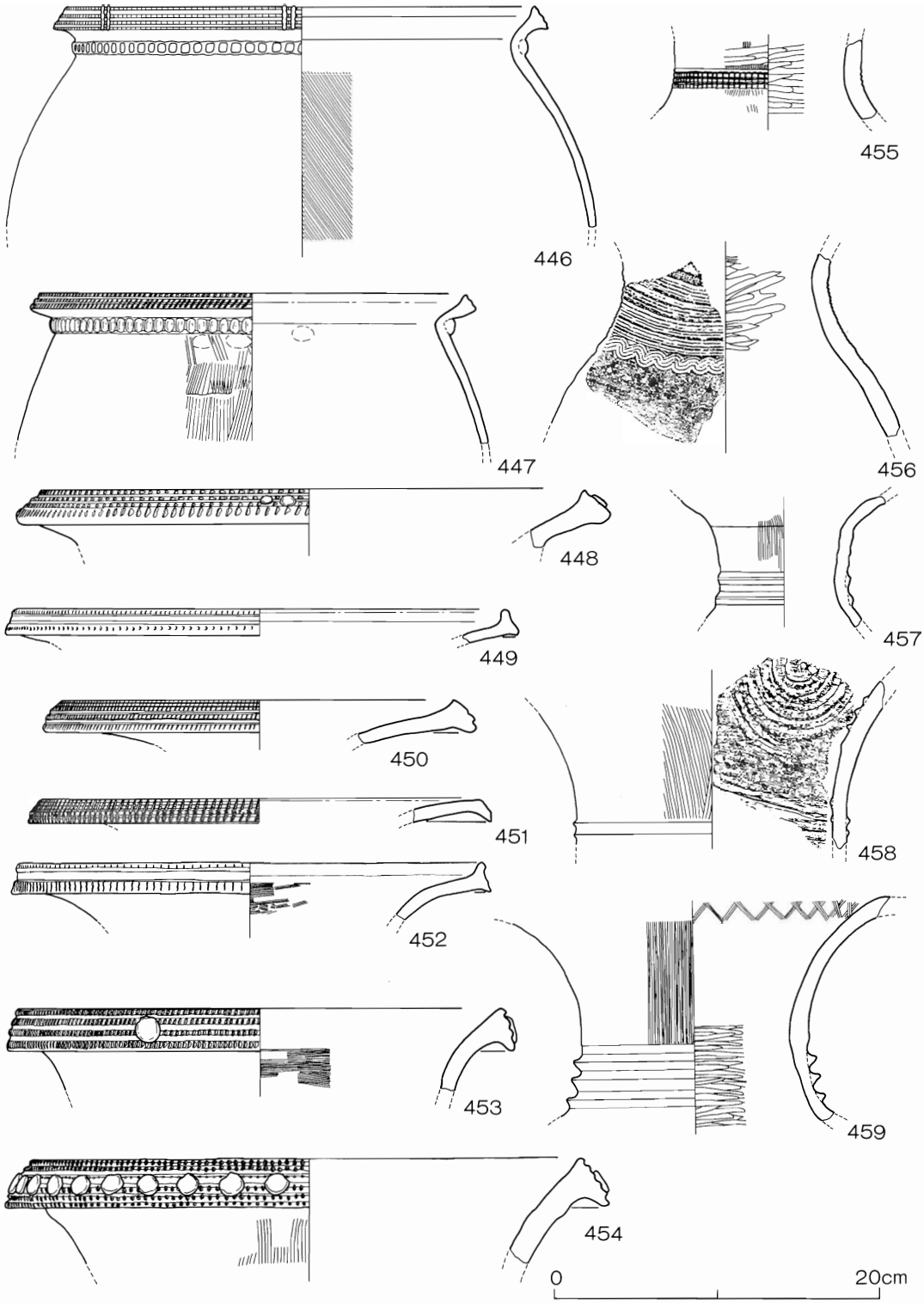
第46図　弥生土器実測図(26)



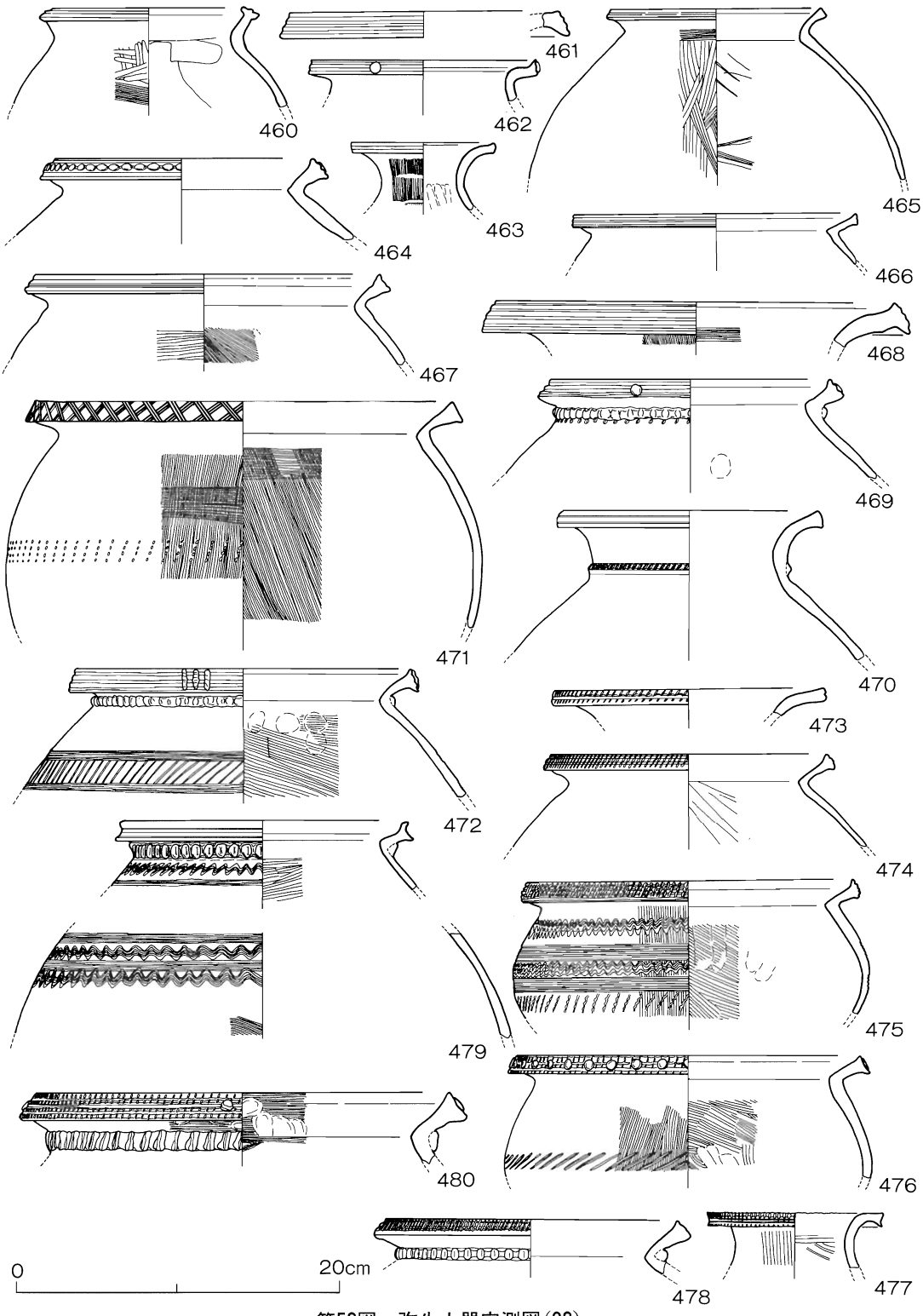
第47図　弥生土器実測図(27)



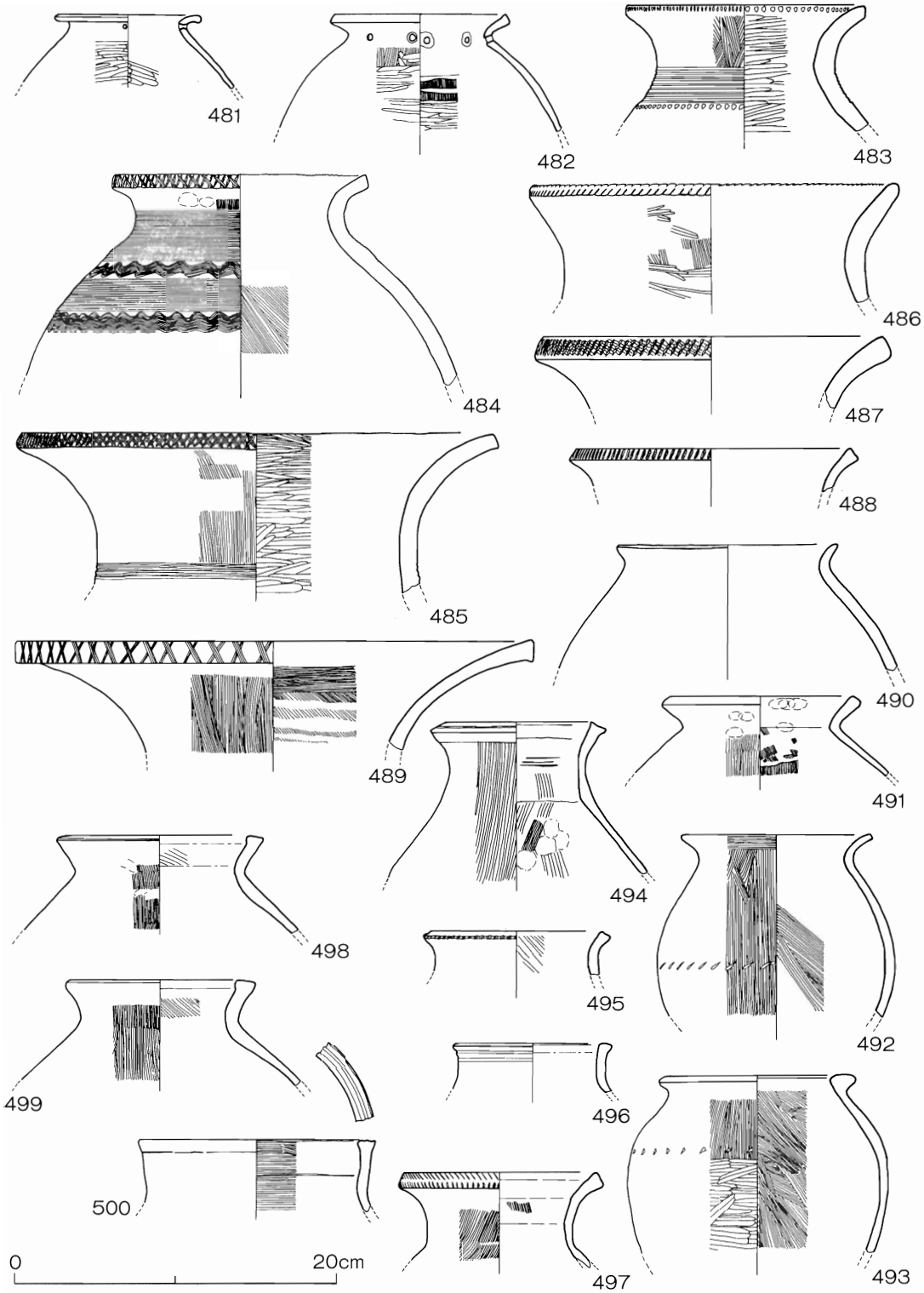
第48図　弥生土器実測図(28)



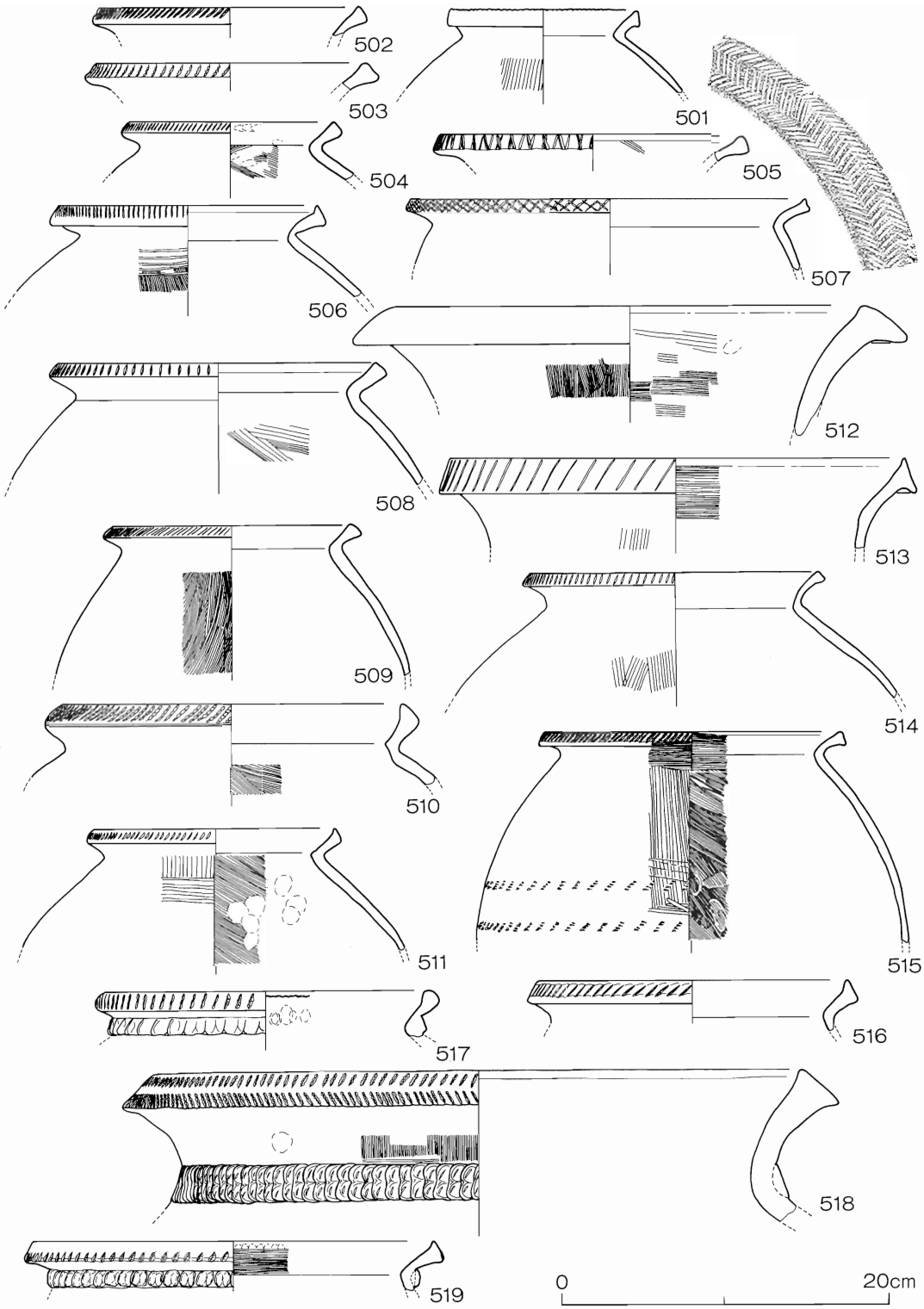
第49図　弥生土器実測図(29)



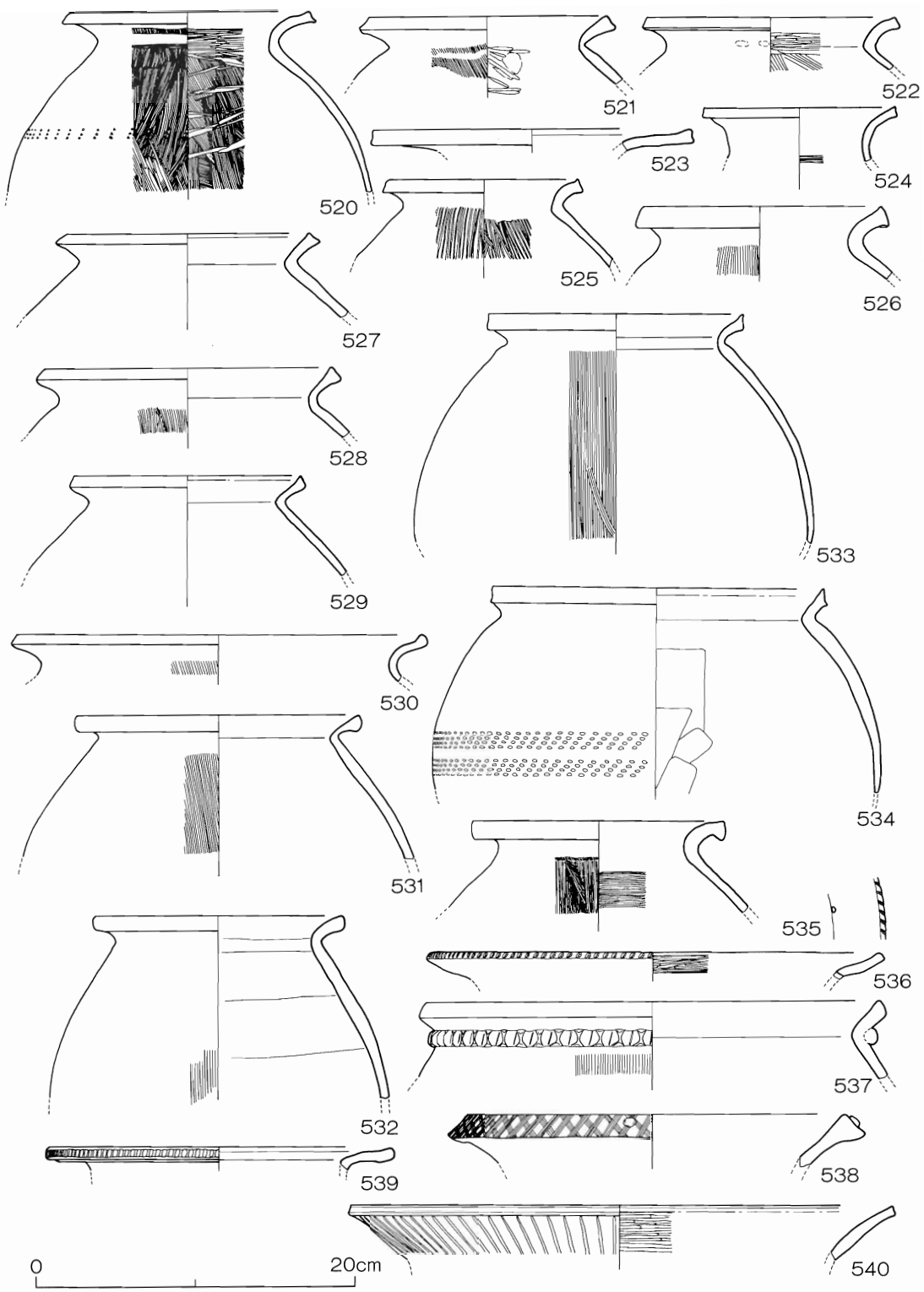
第50図　弥生土器実測図(30)



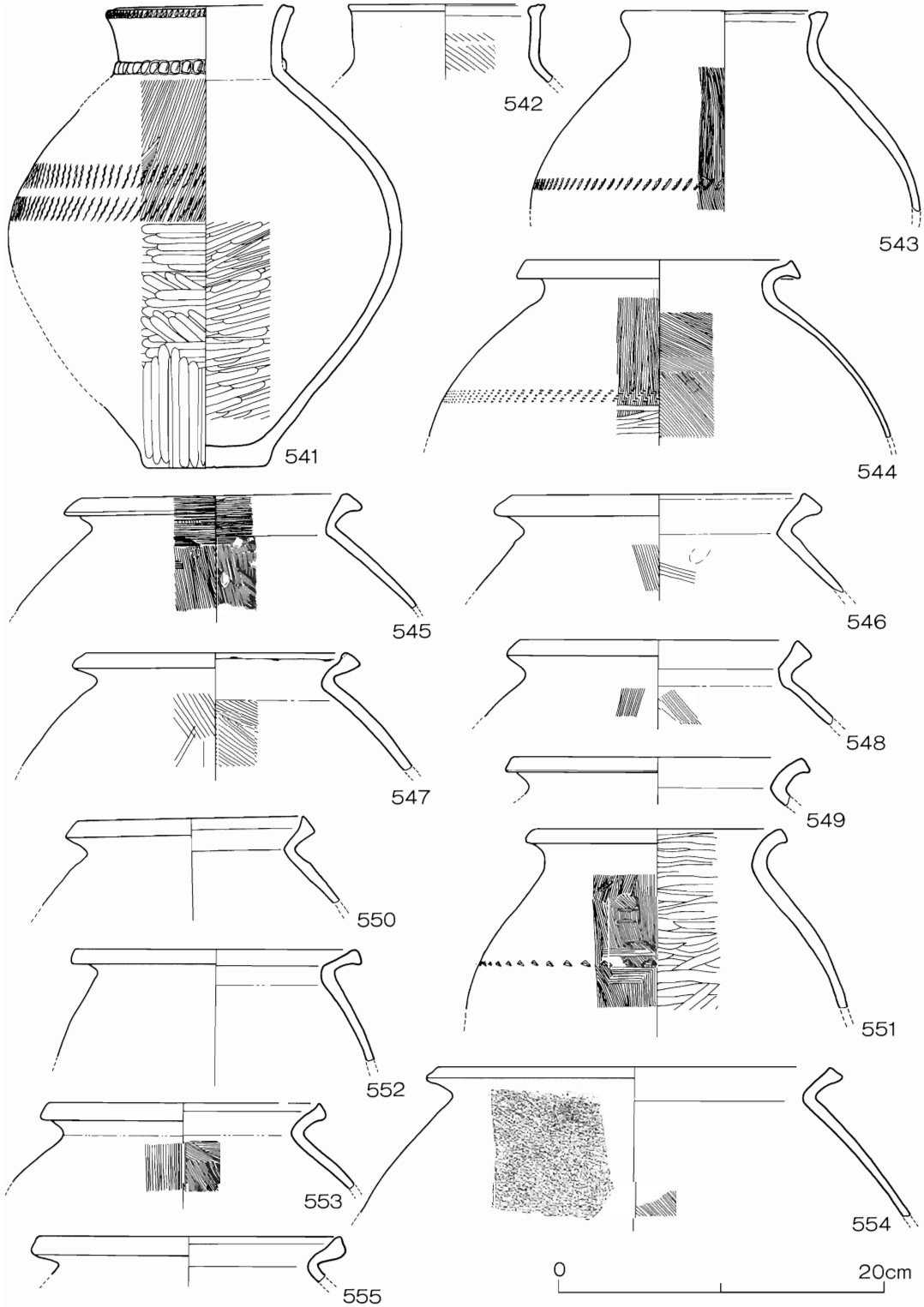
第51図　弥生土器実測図(31)



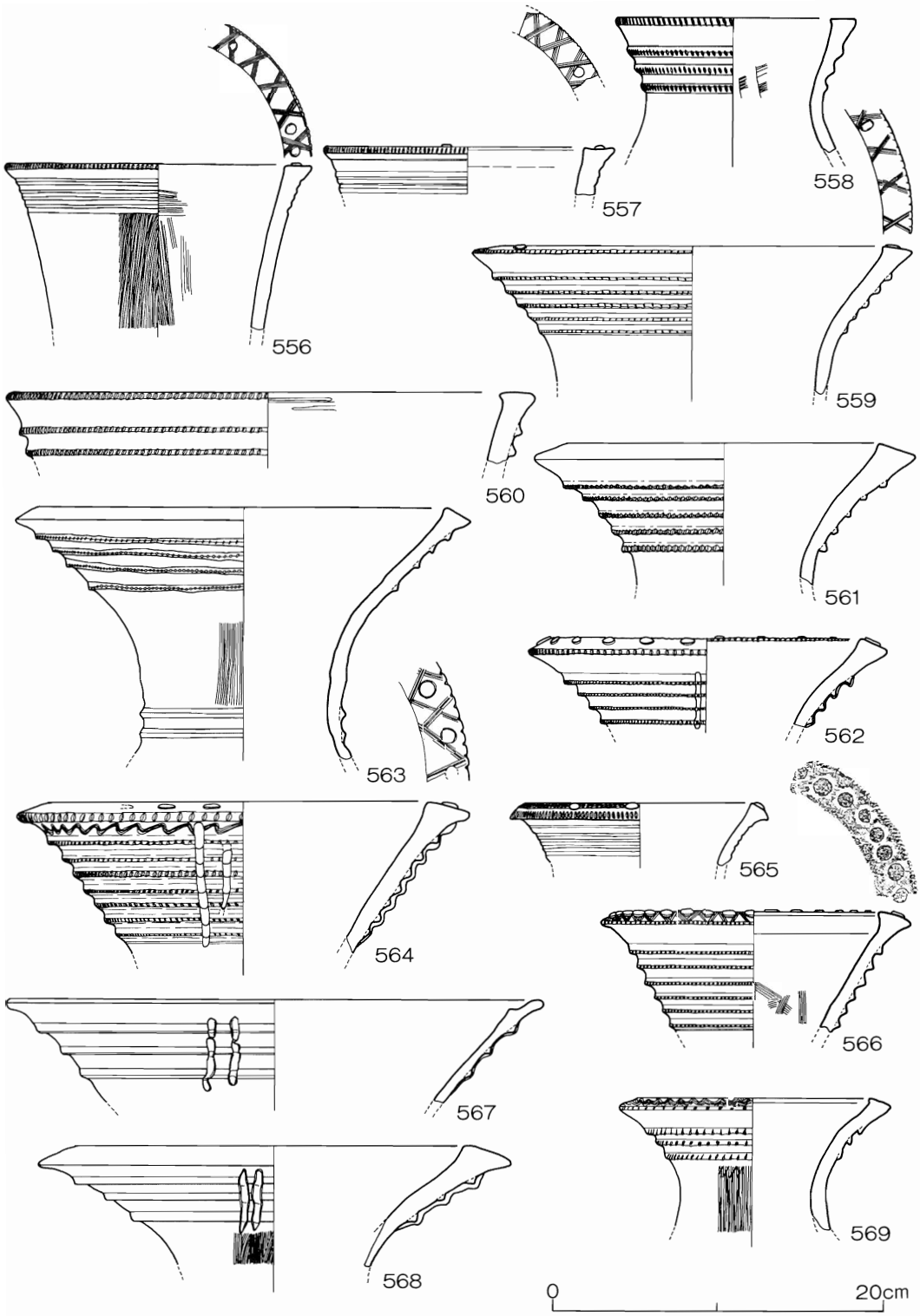
第52図　弥生土器実測図(32)



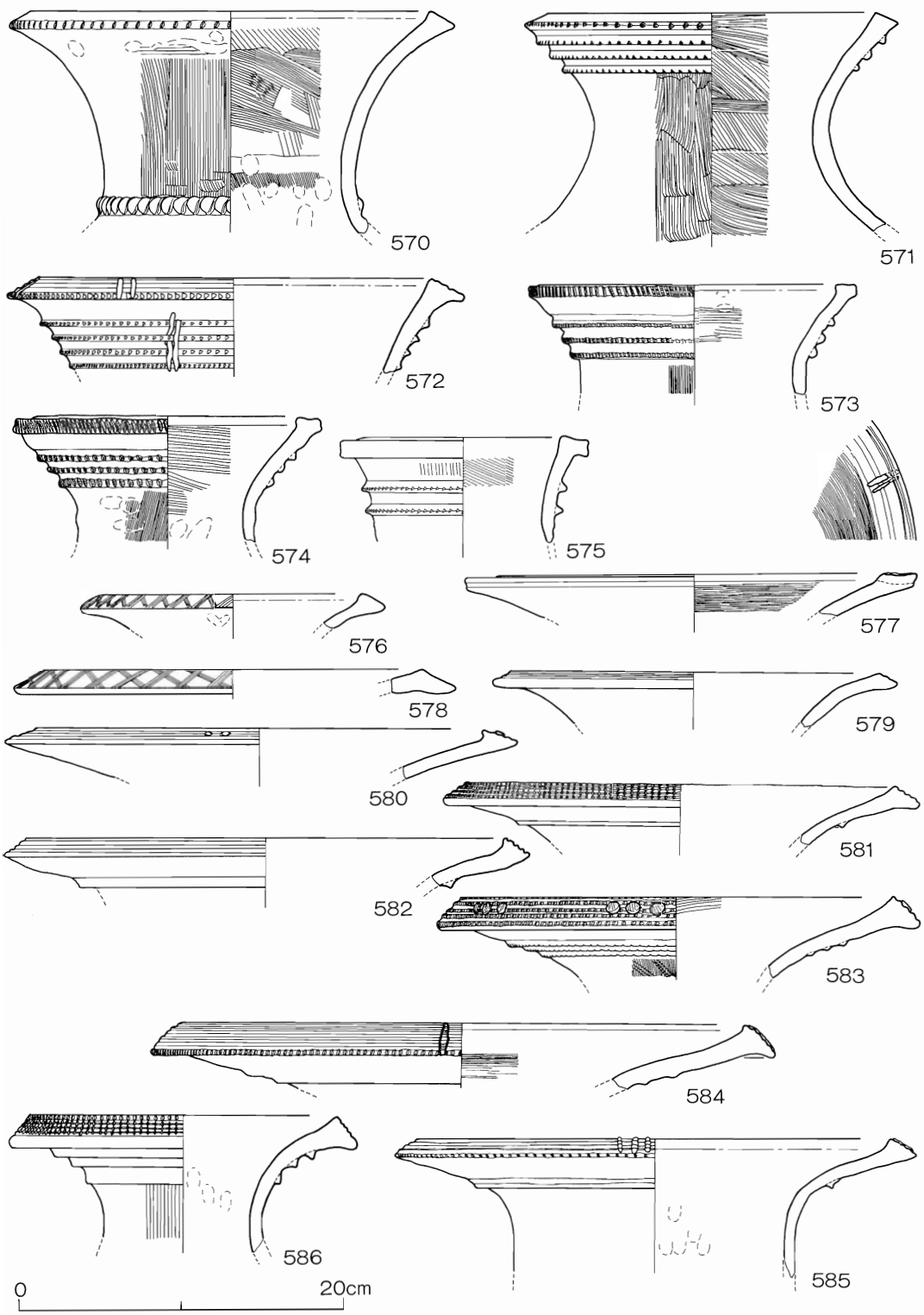
第53図　弥生土器実測図(33)



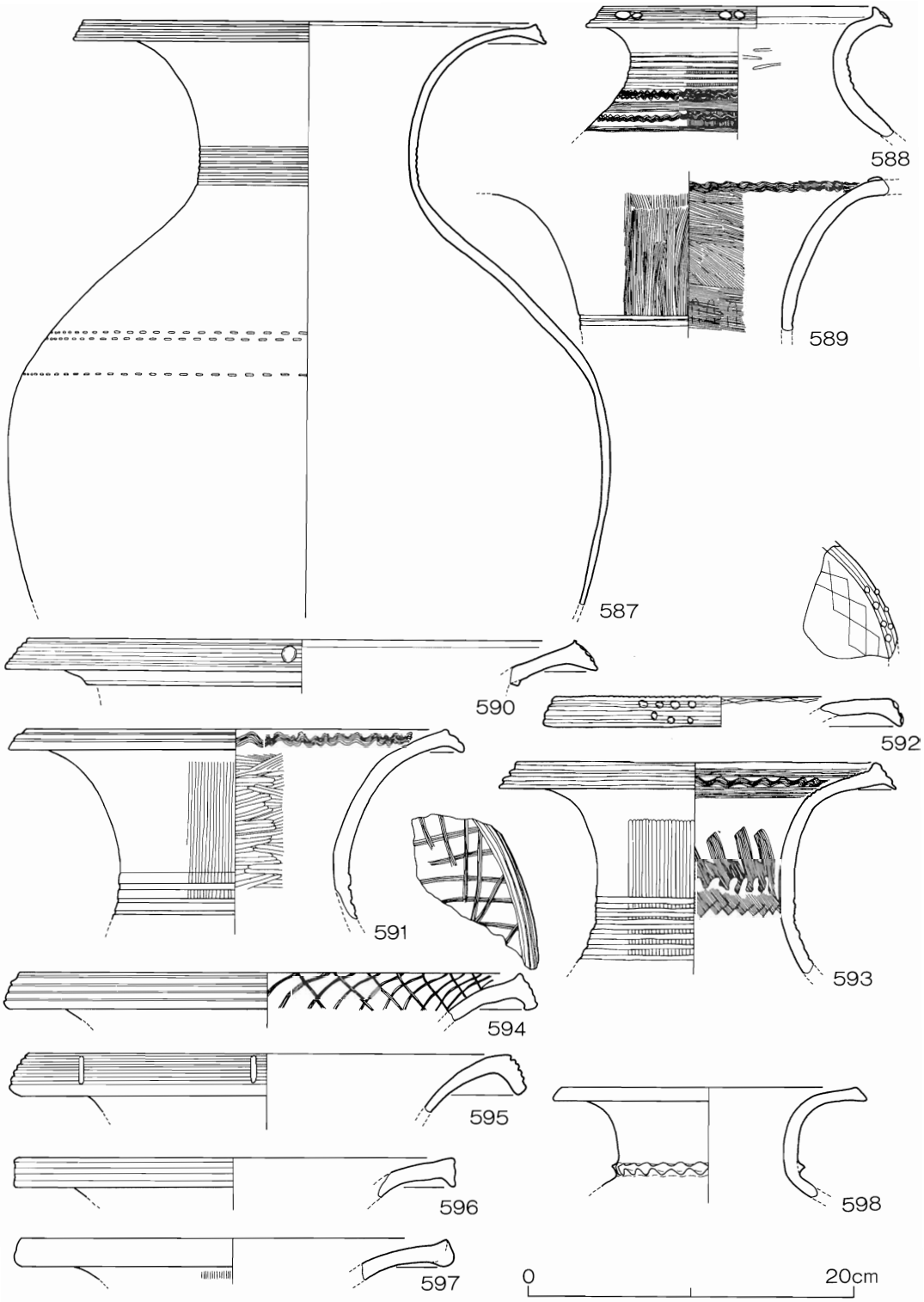
第54図　弥生土器実測図(34)



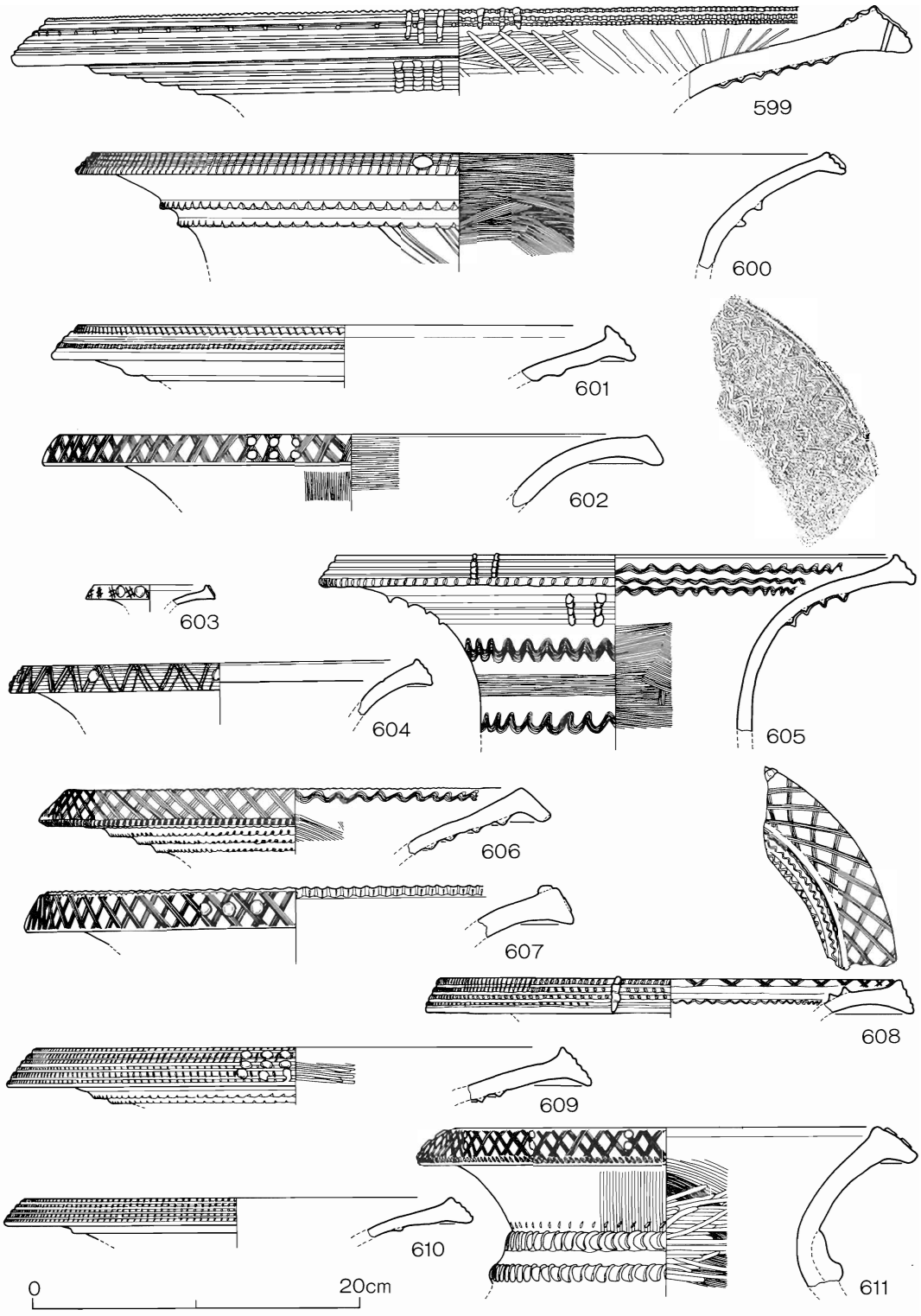
第55図　弥生土器実測図(35)



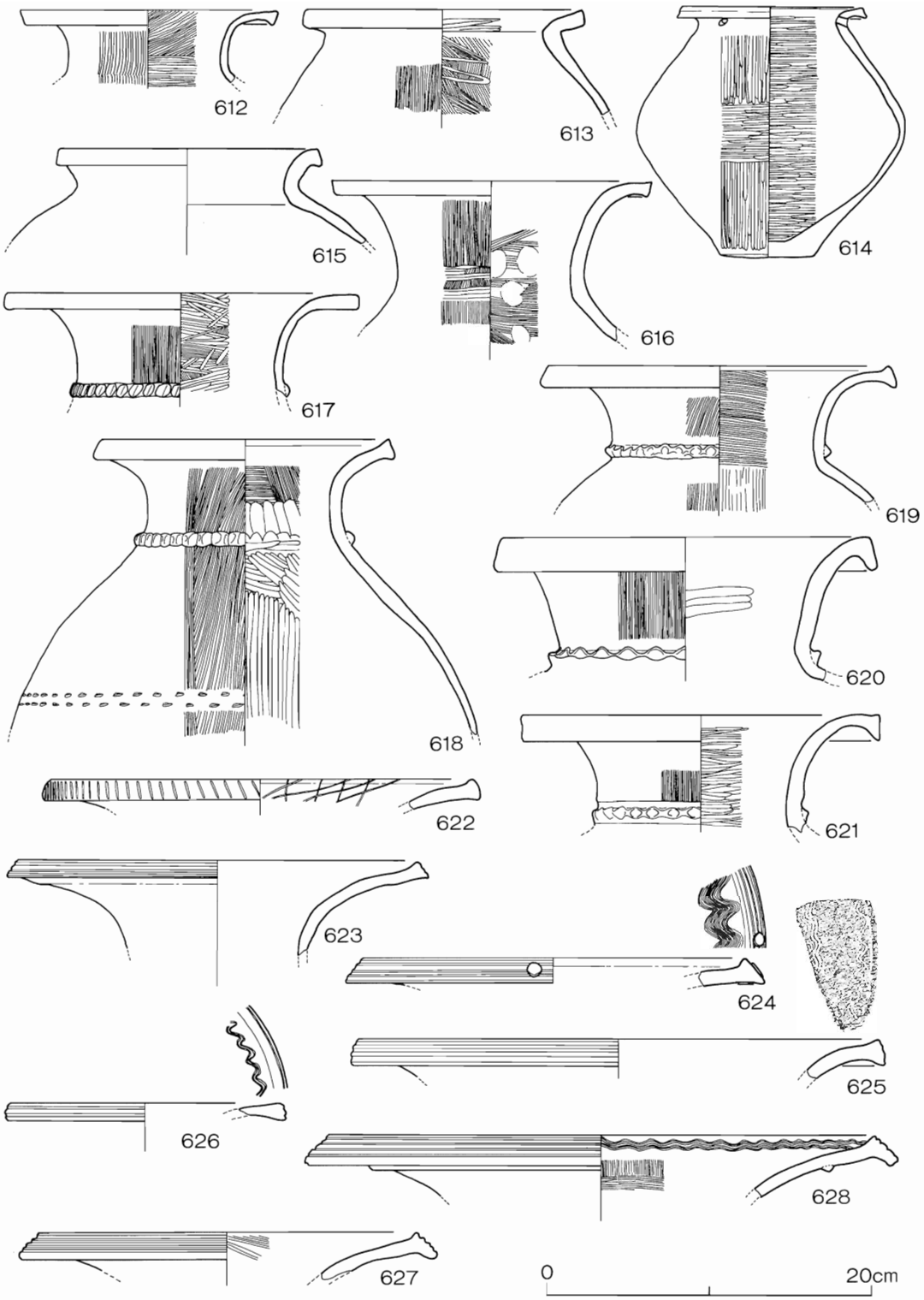
第56図　弥生土器実測図(36)



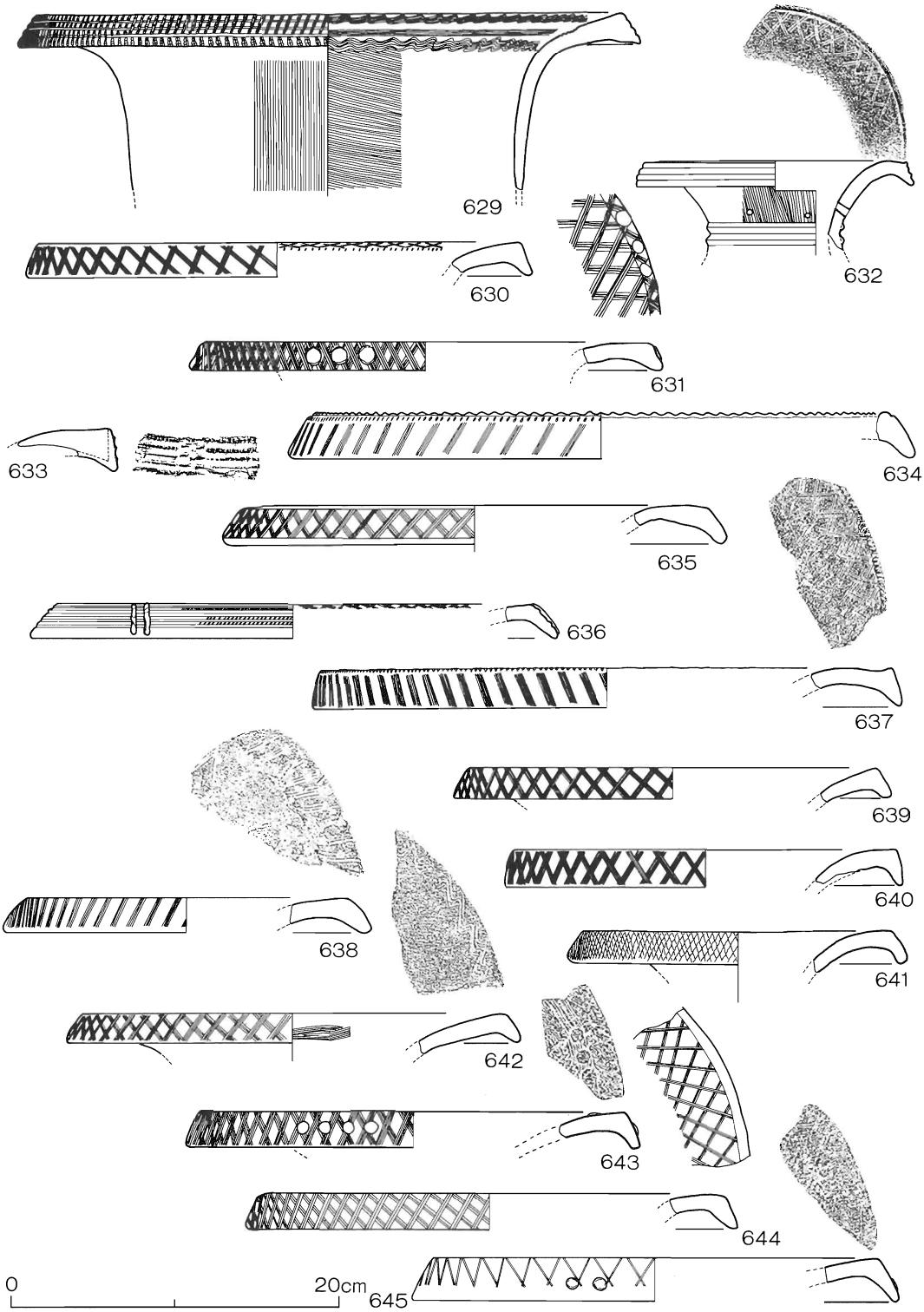
第57図　弥生土器実測図(37)



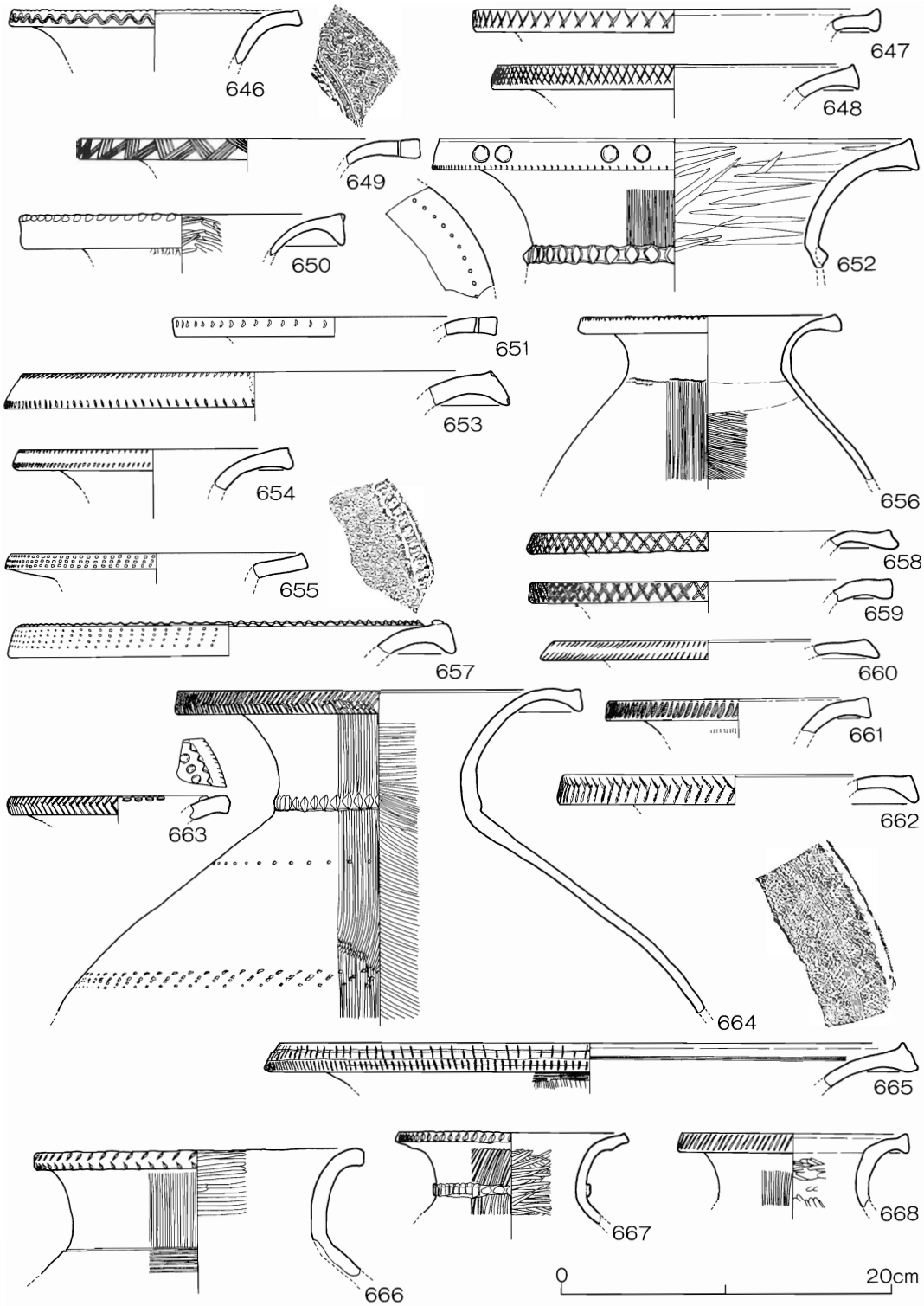
第58図　弥生土器実測図(38)



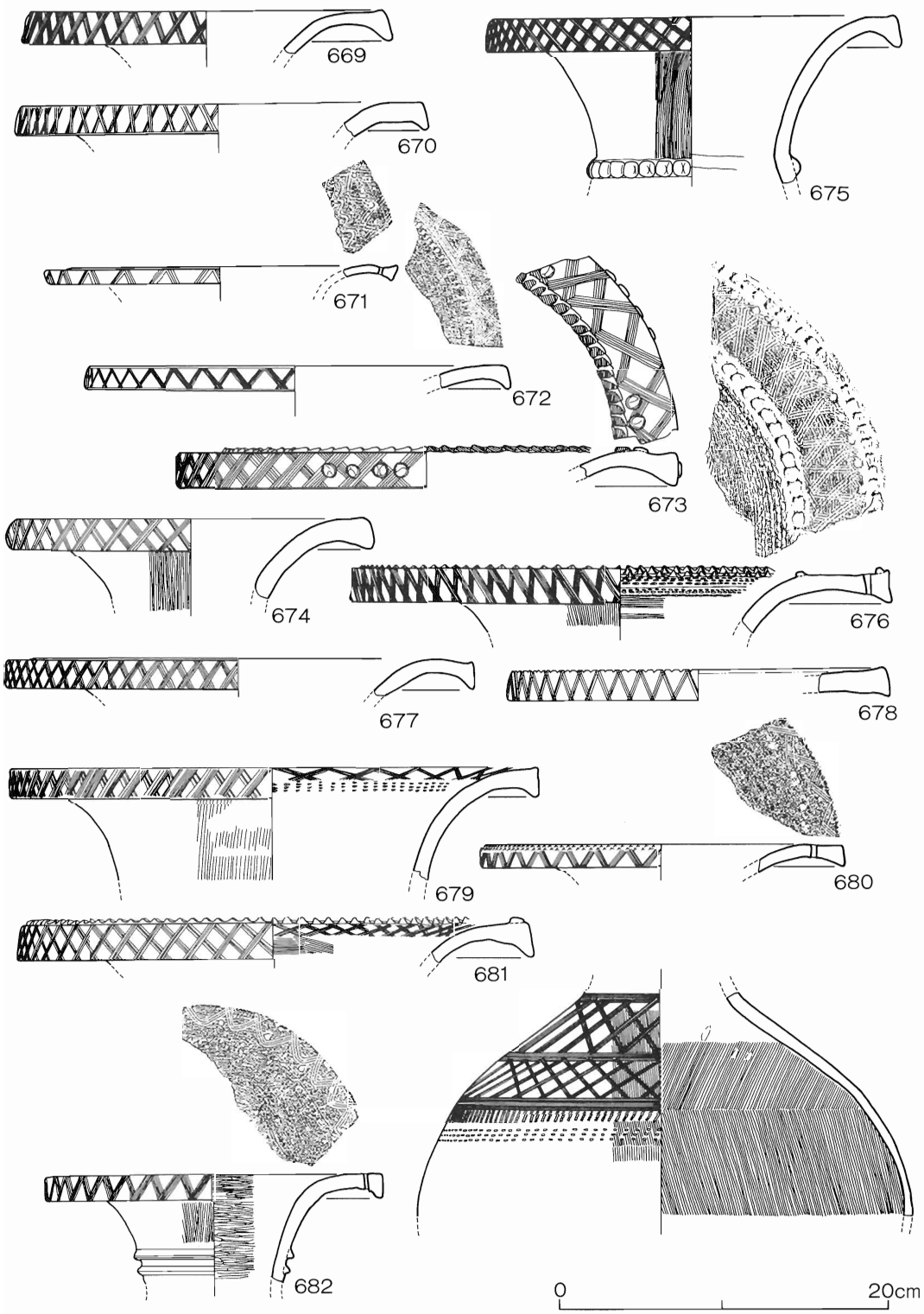
第59図　弥生土器実測図(39)



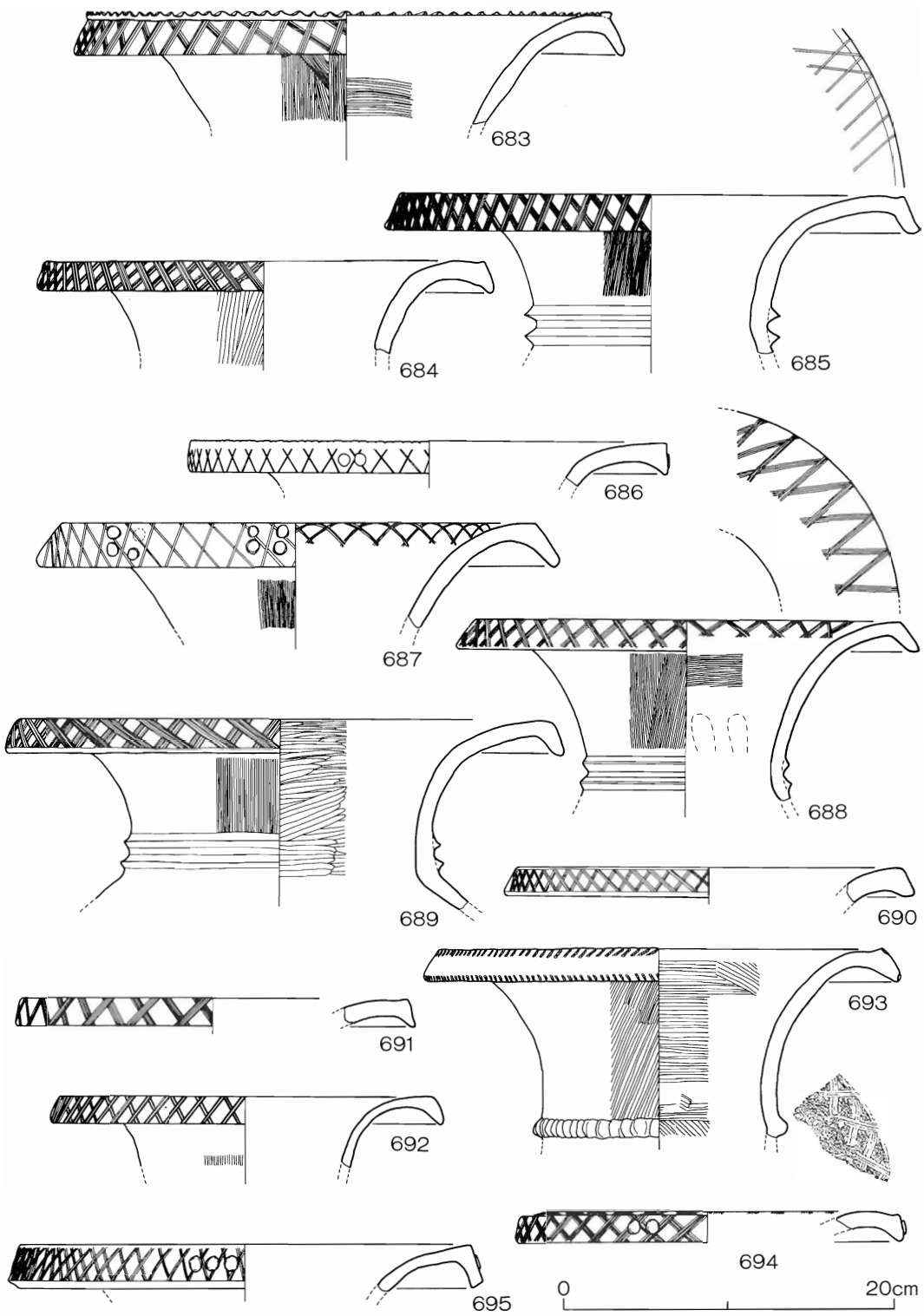
第60図　弥生土器実測図(40)



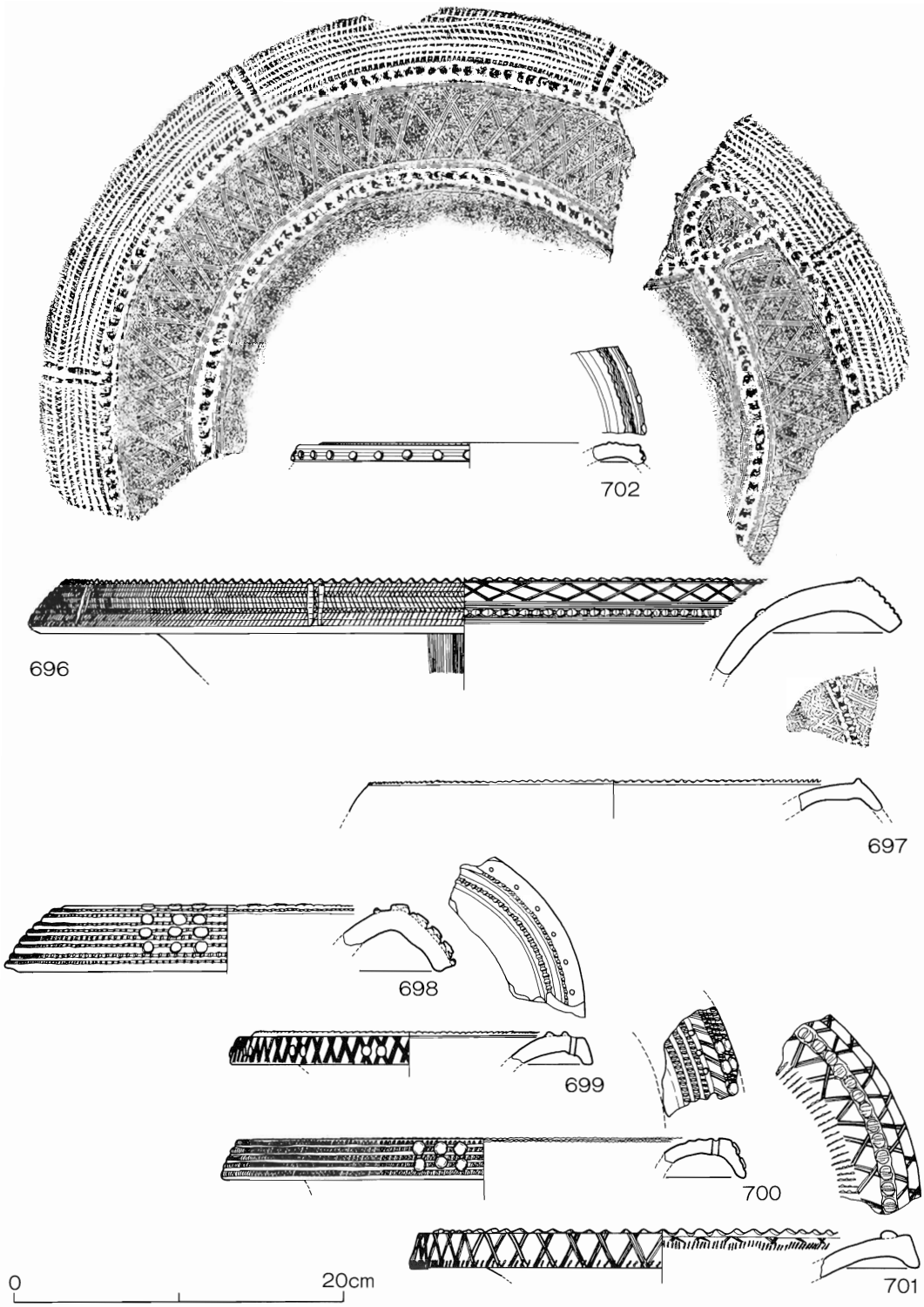
第61図　弥生土器実測図(41)



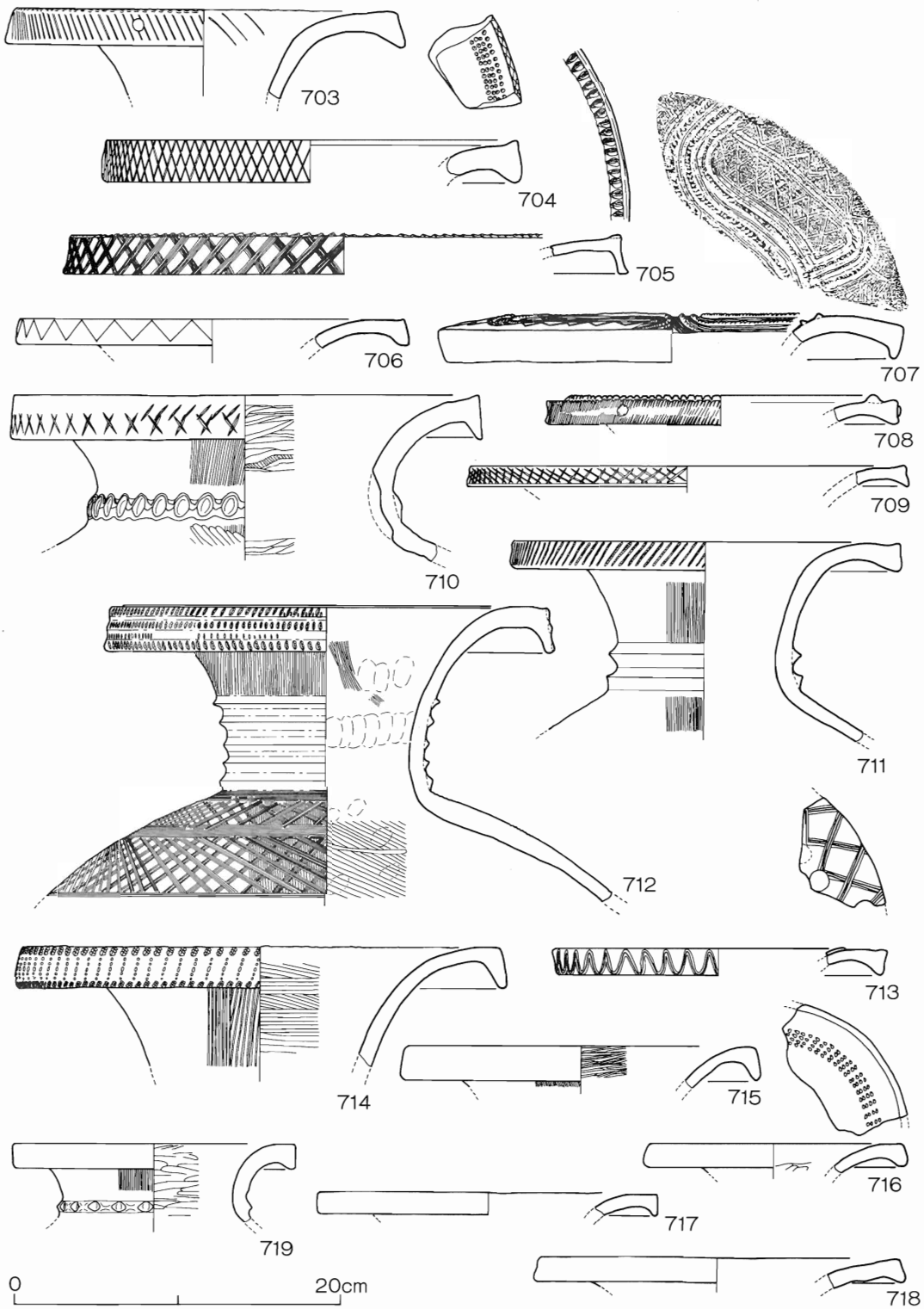
第62図　弥生土器実測図(42)



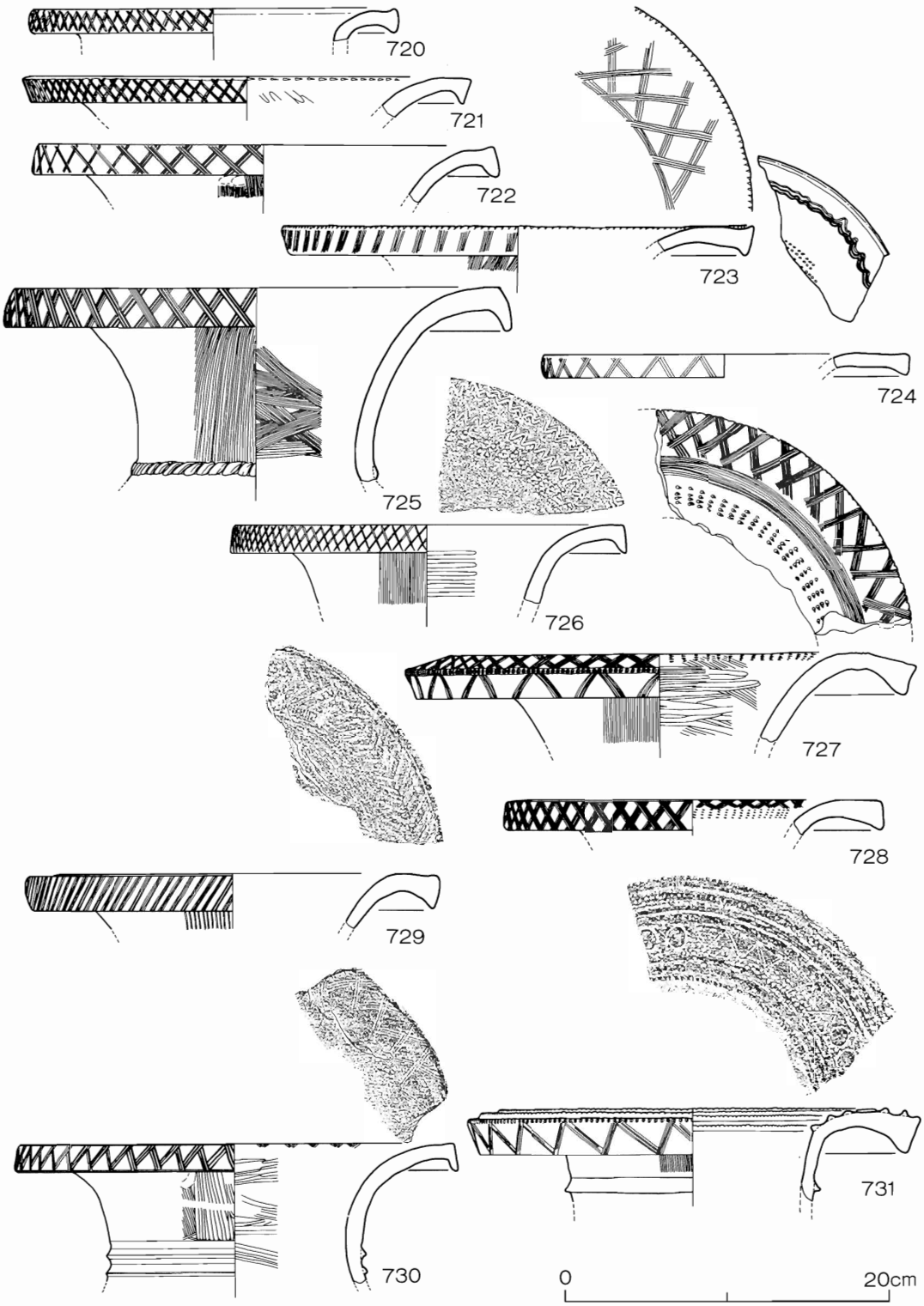
第63図　弥生土器実測図(43)



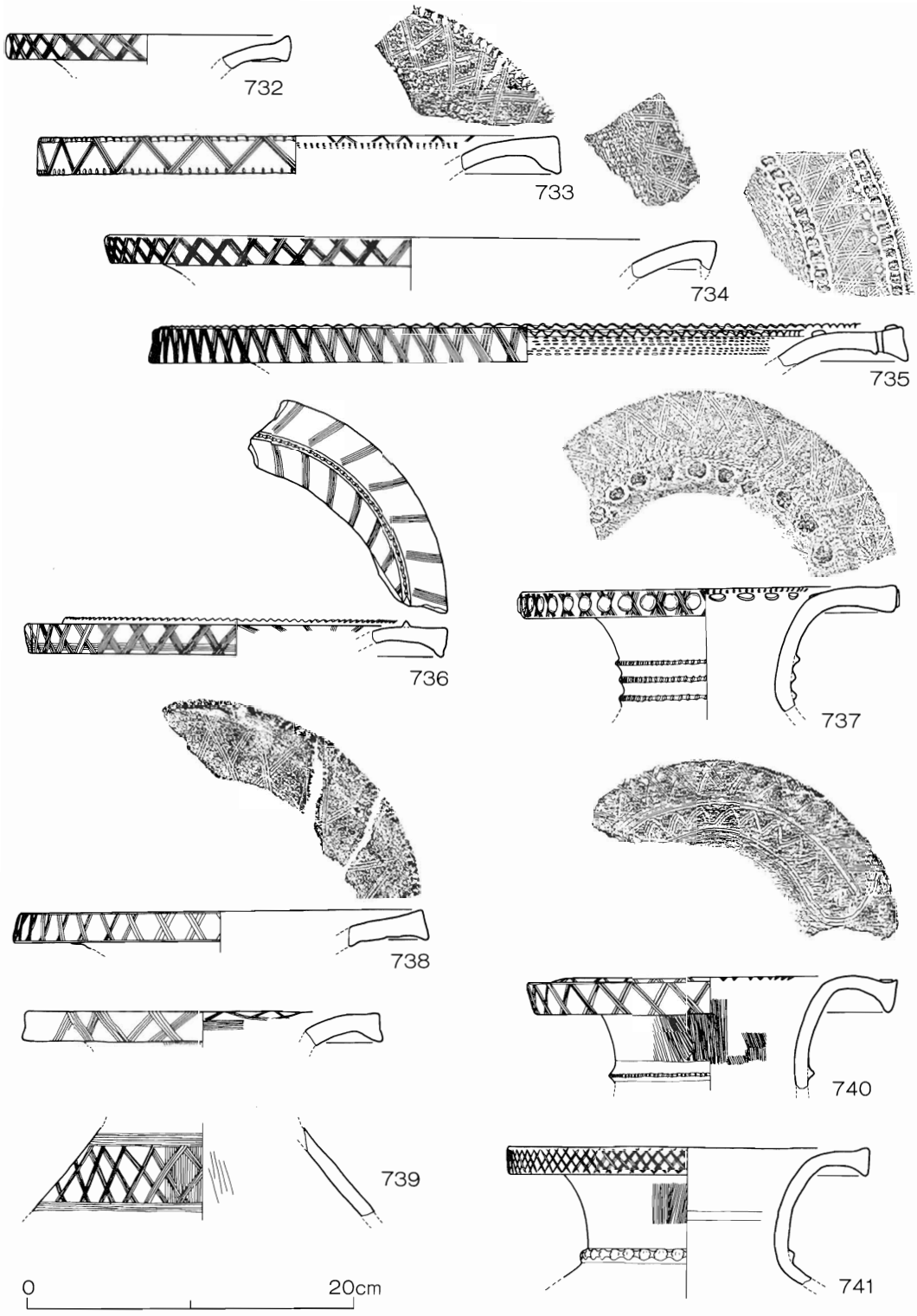
第64図　弥生土器実測図(44)



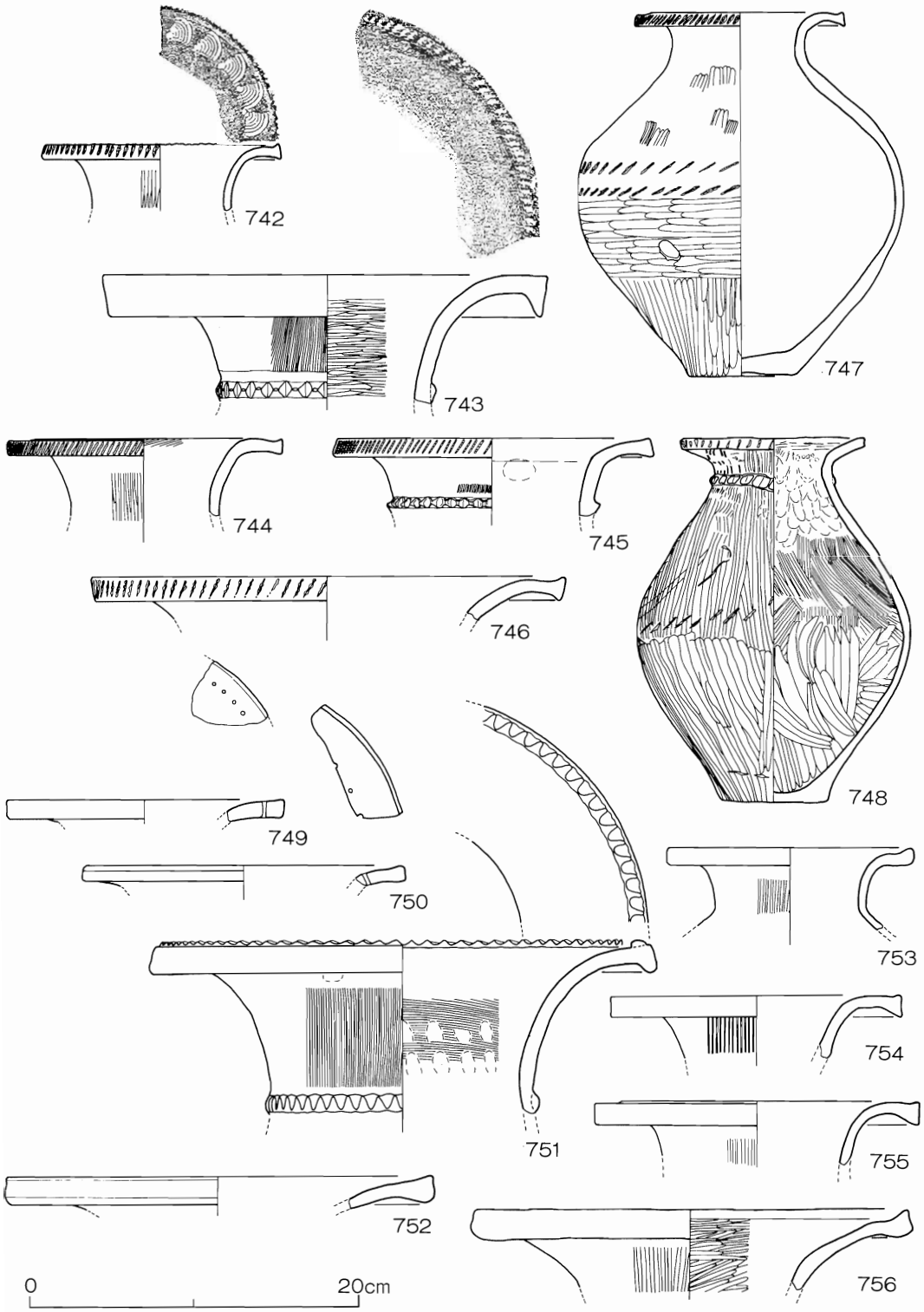
第65図　弥生土器実測図(45)



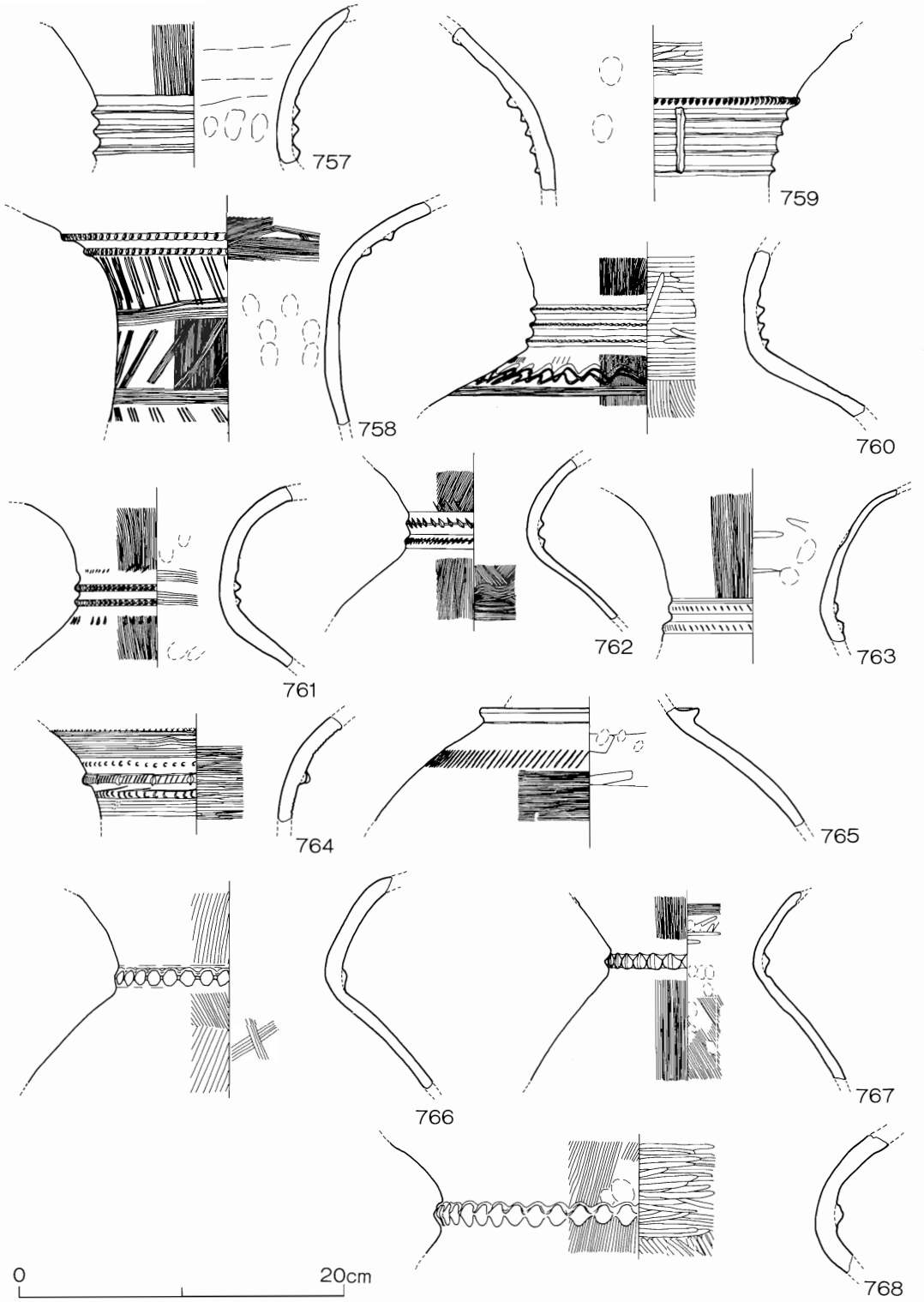
第66図　弥生土器実測図(46)



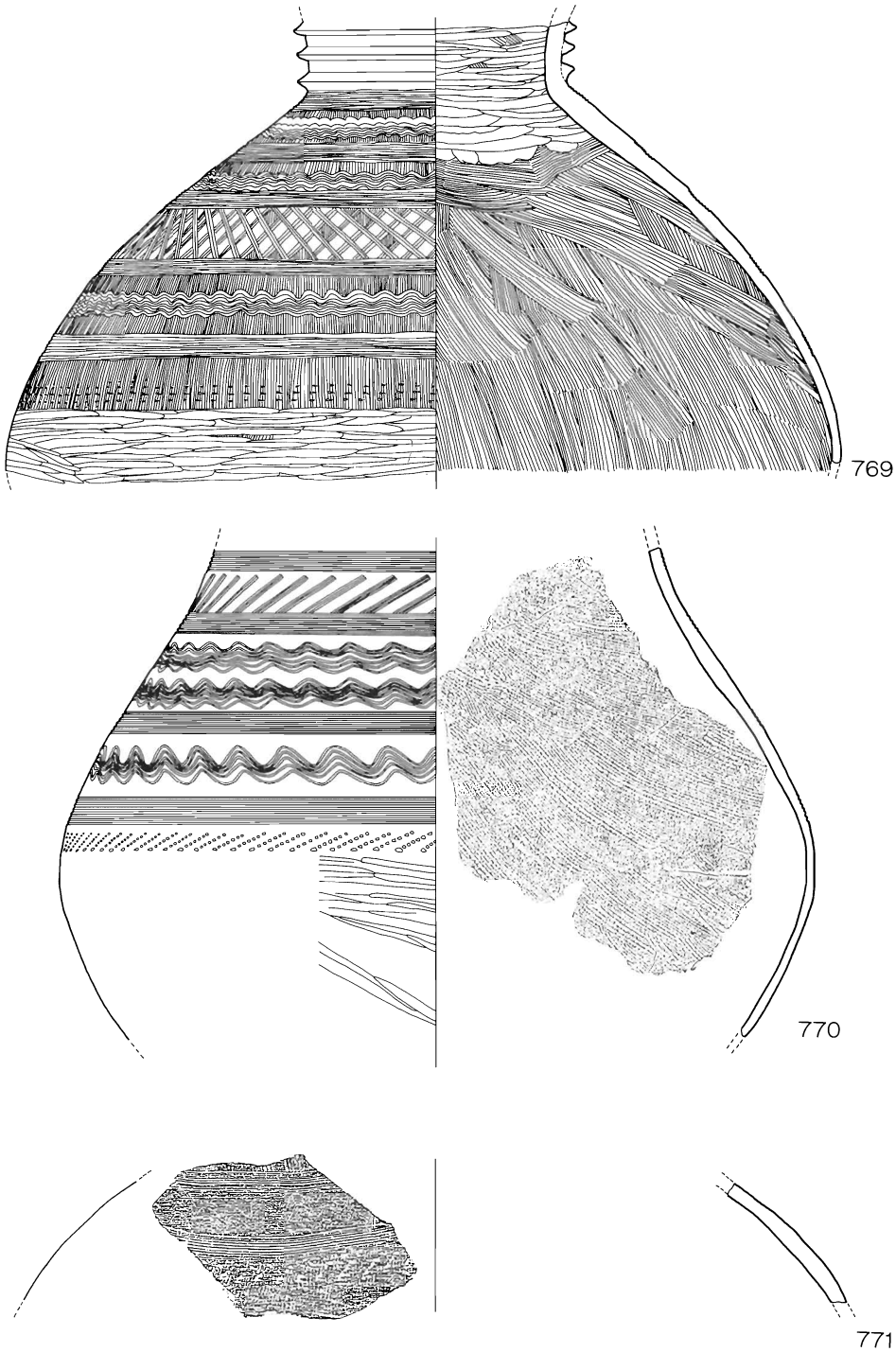
第67図　弥生土器実測図(47)



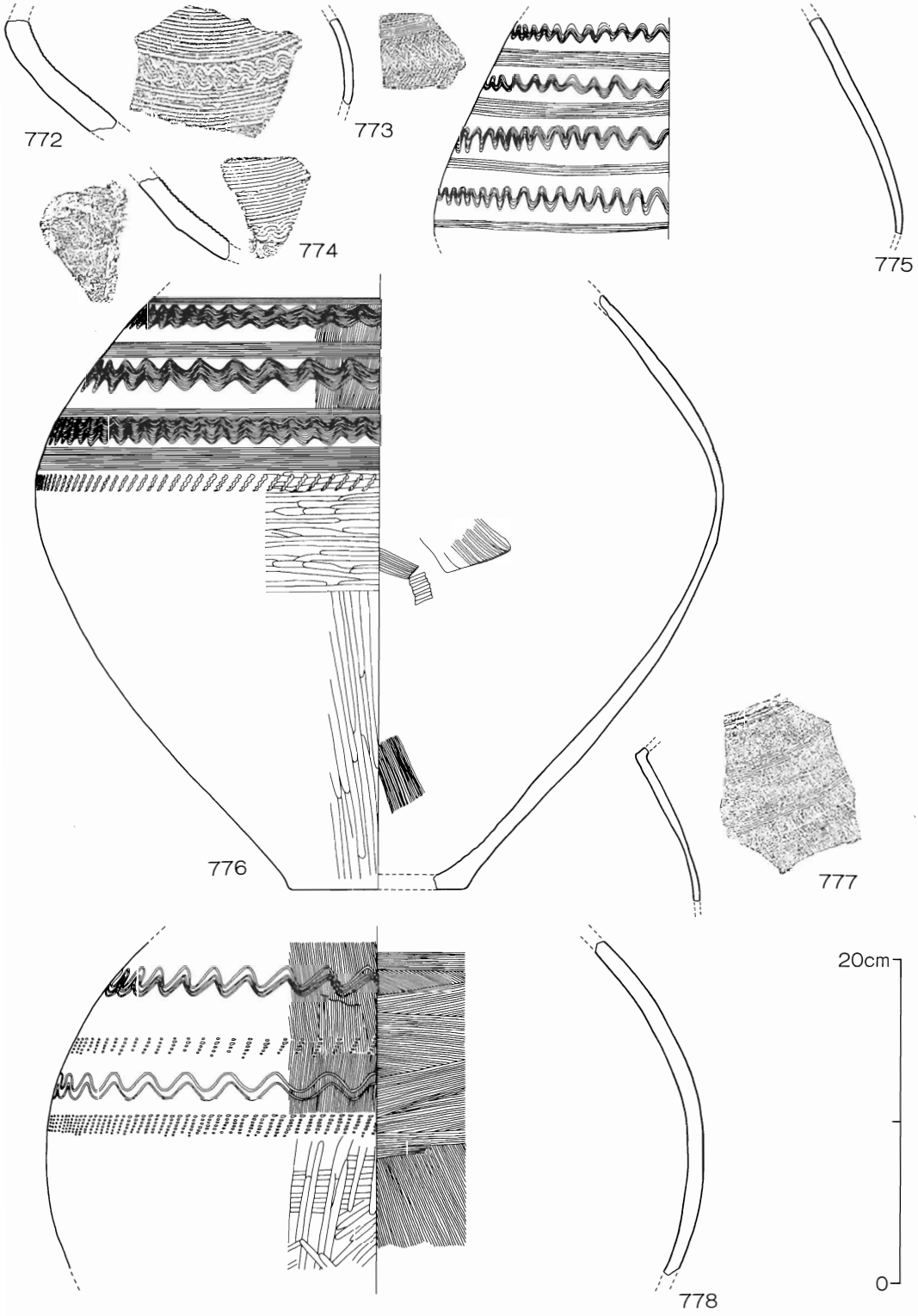
第68図　弥生土器実測図(48)



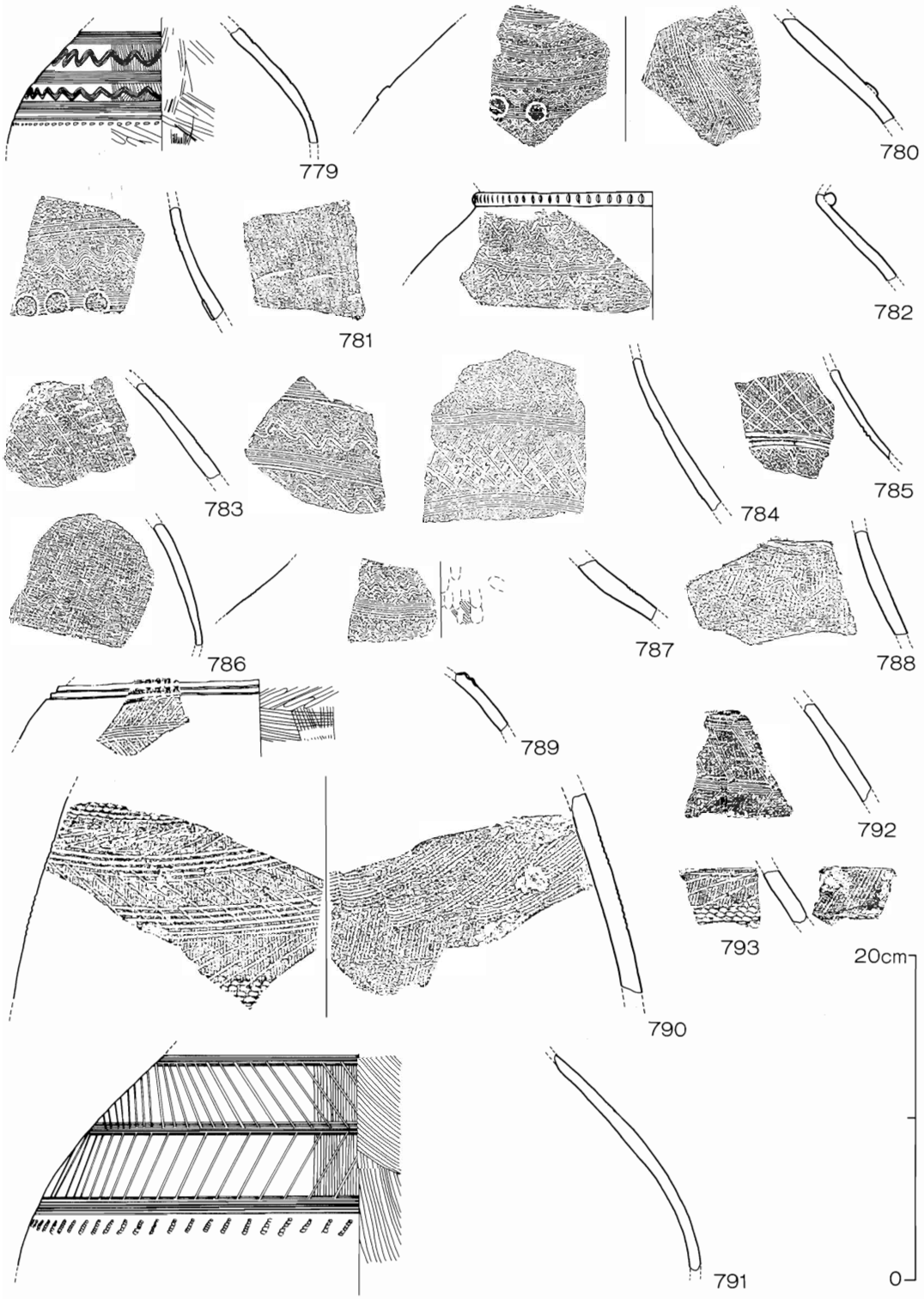
第69図　弥生土器実測図(49)



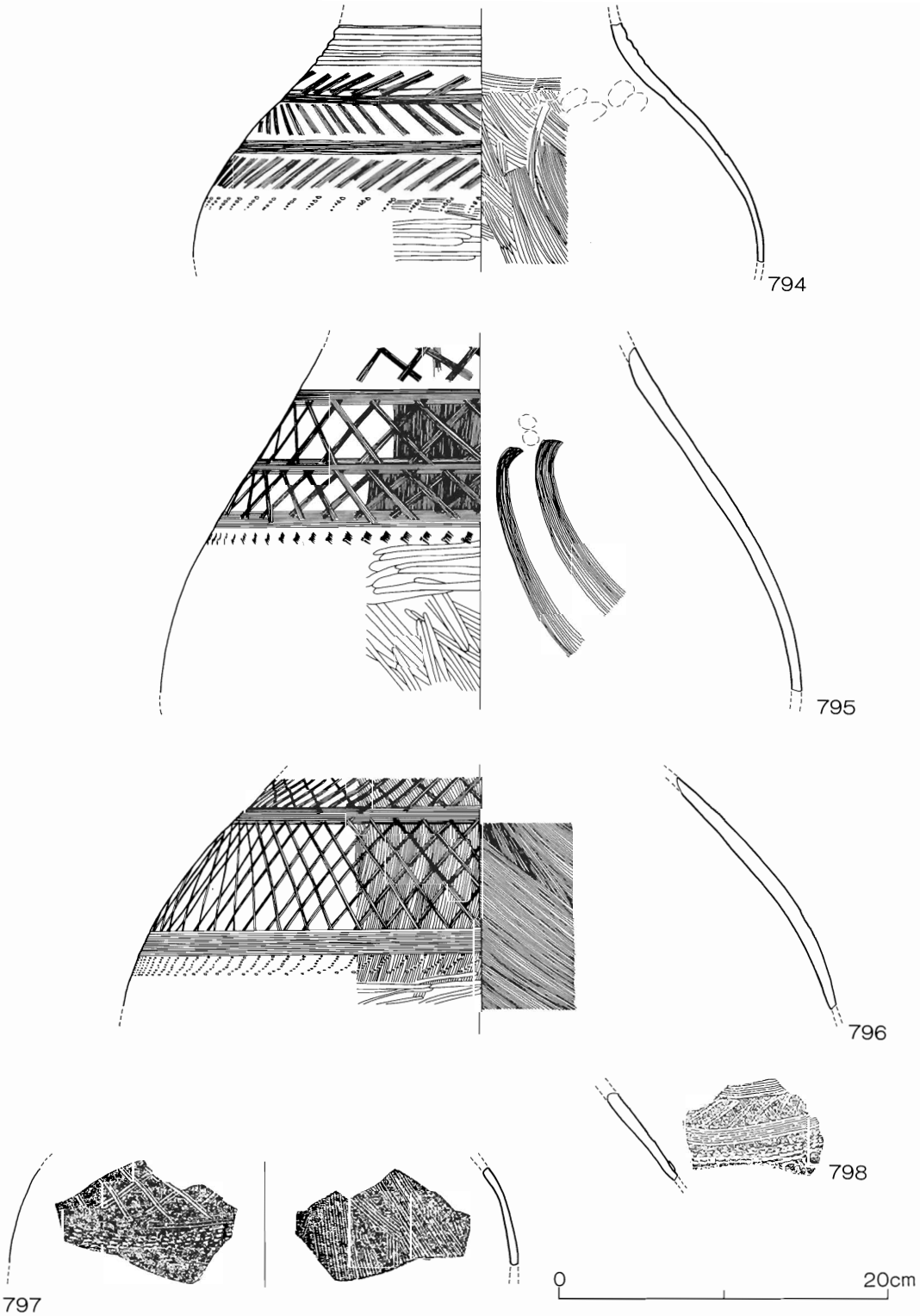
第70図　弥生土器実測図(50)



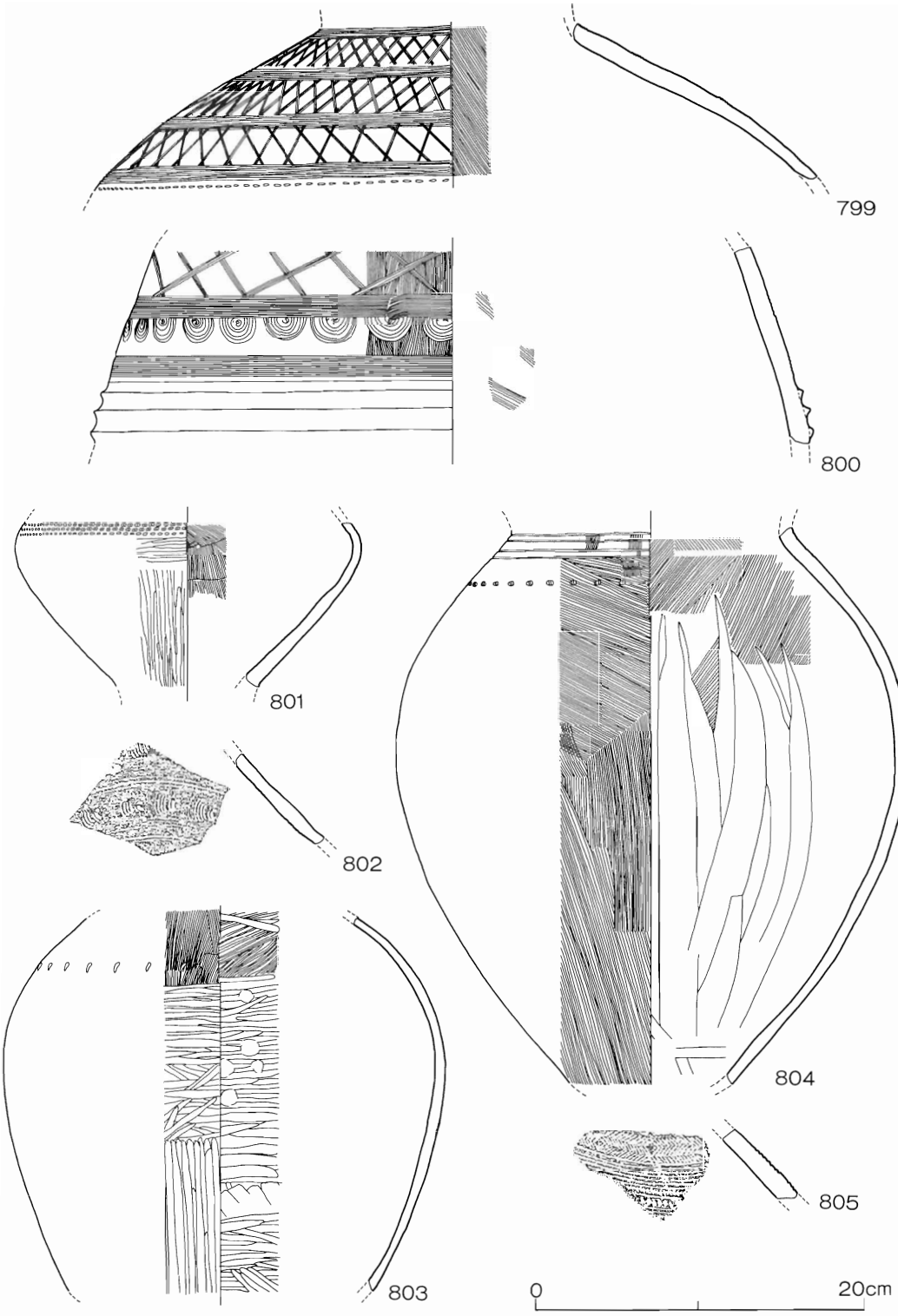
第71図　弥生土器実測図(51)



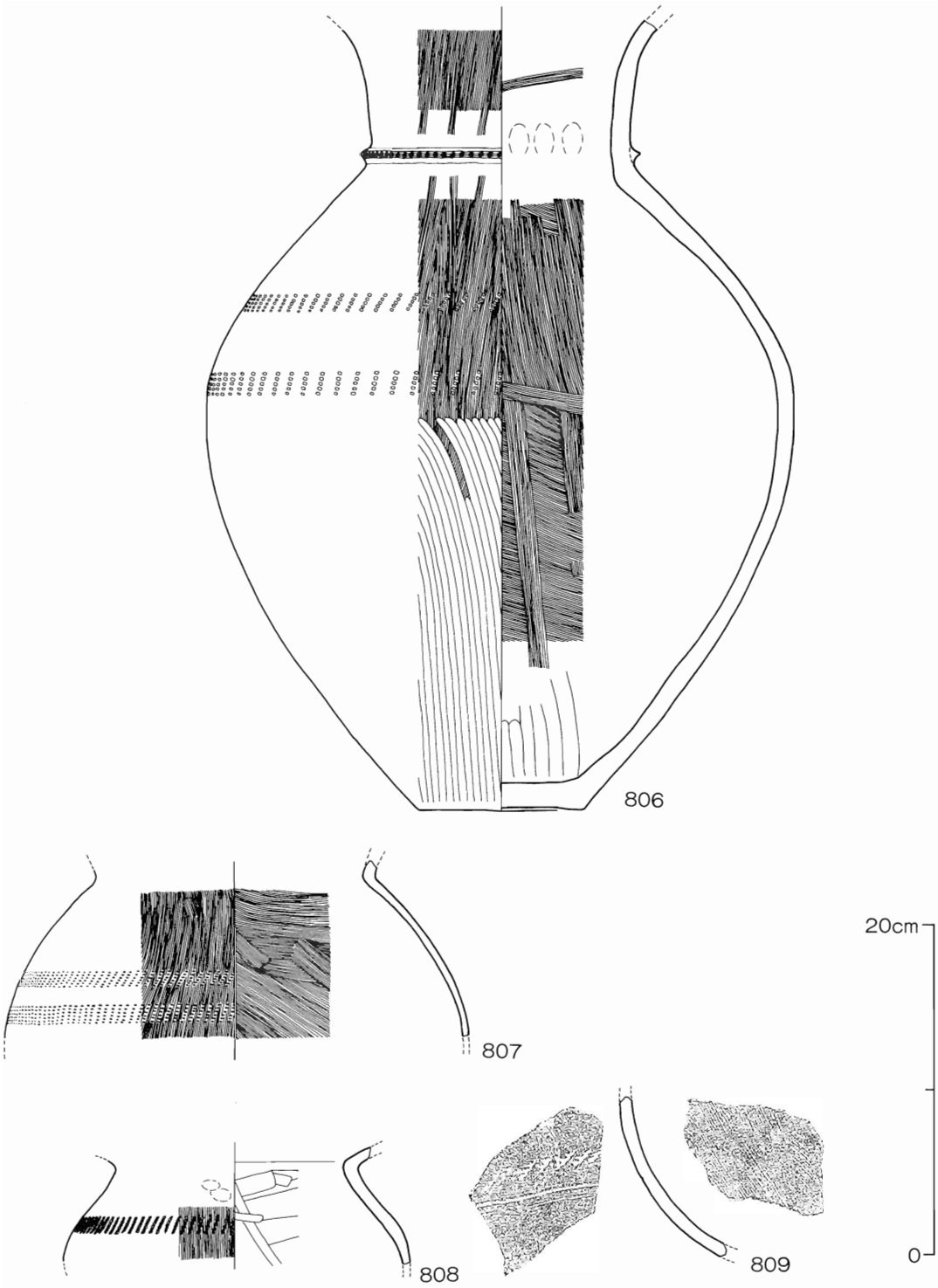
第72図　弥生土器実測図(52)



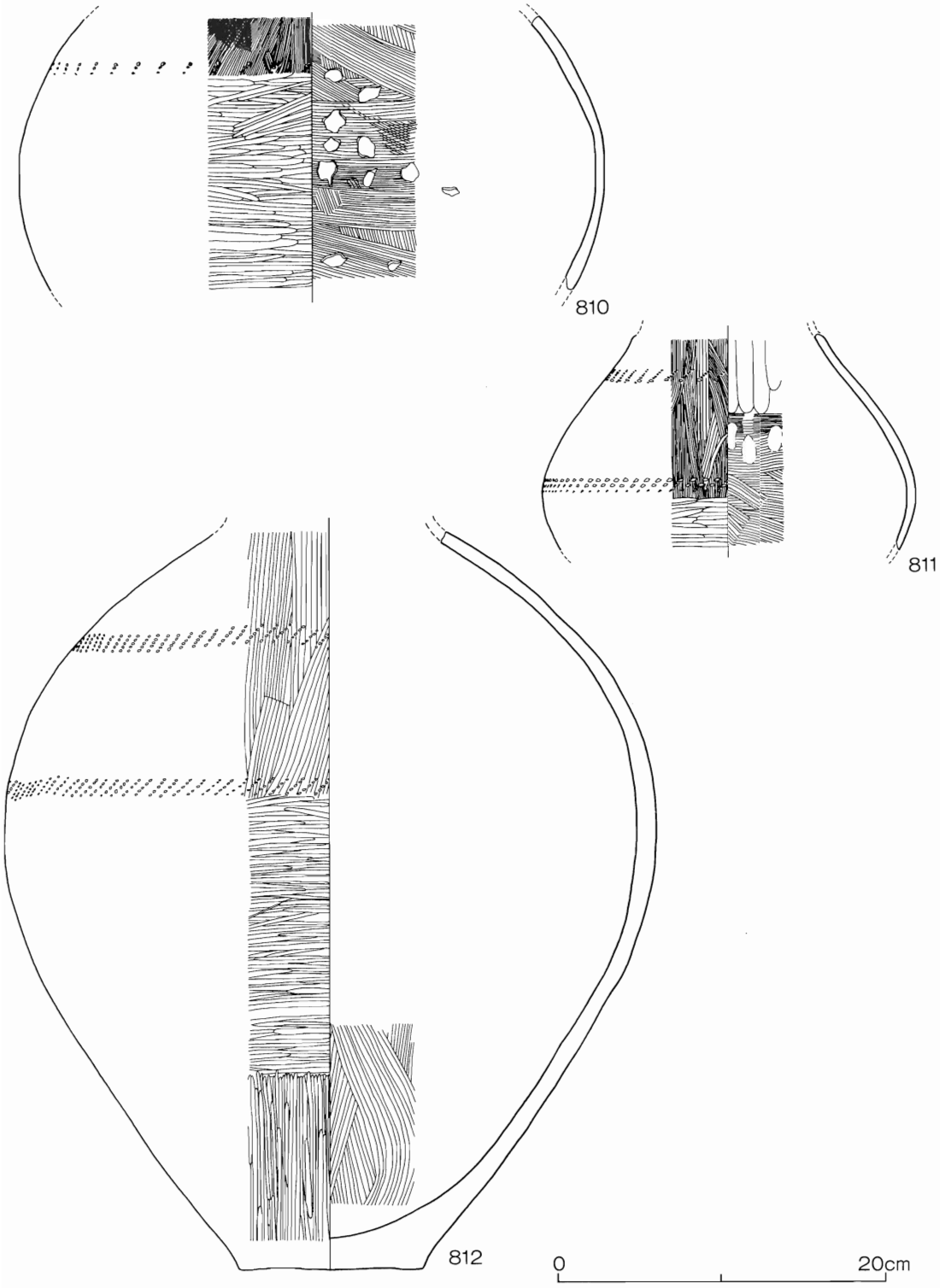
第73図　弥生土器実測図(53)



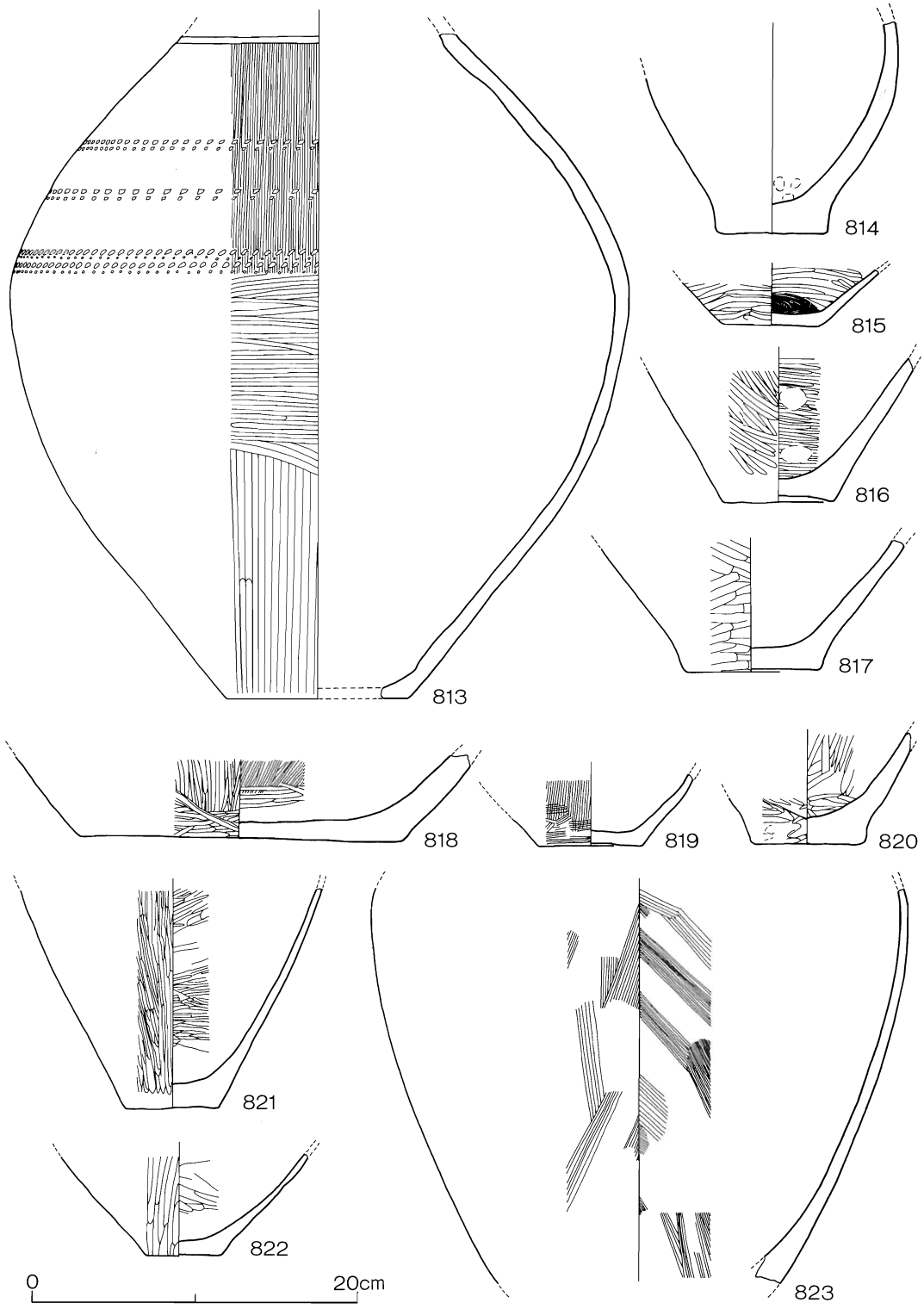
第74図　弥生土器実測図(54)



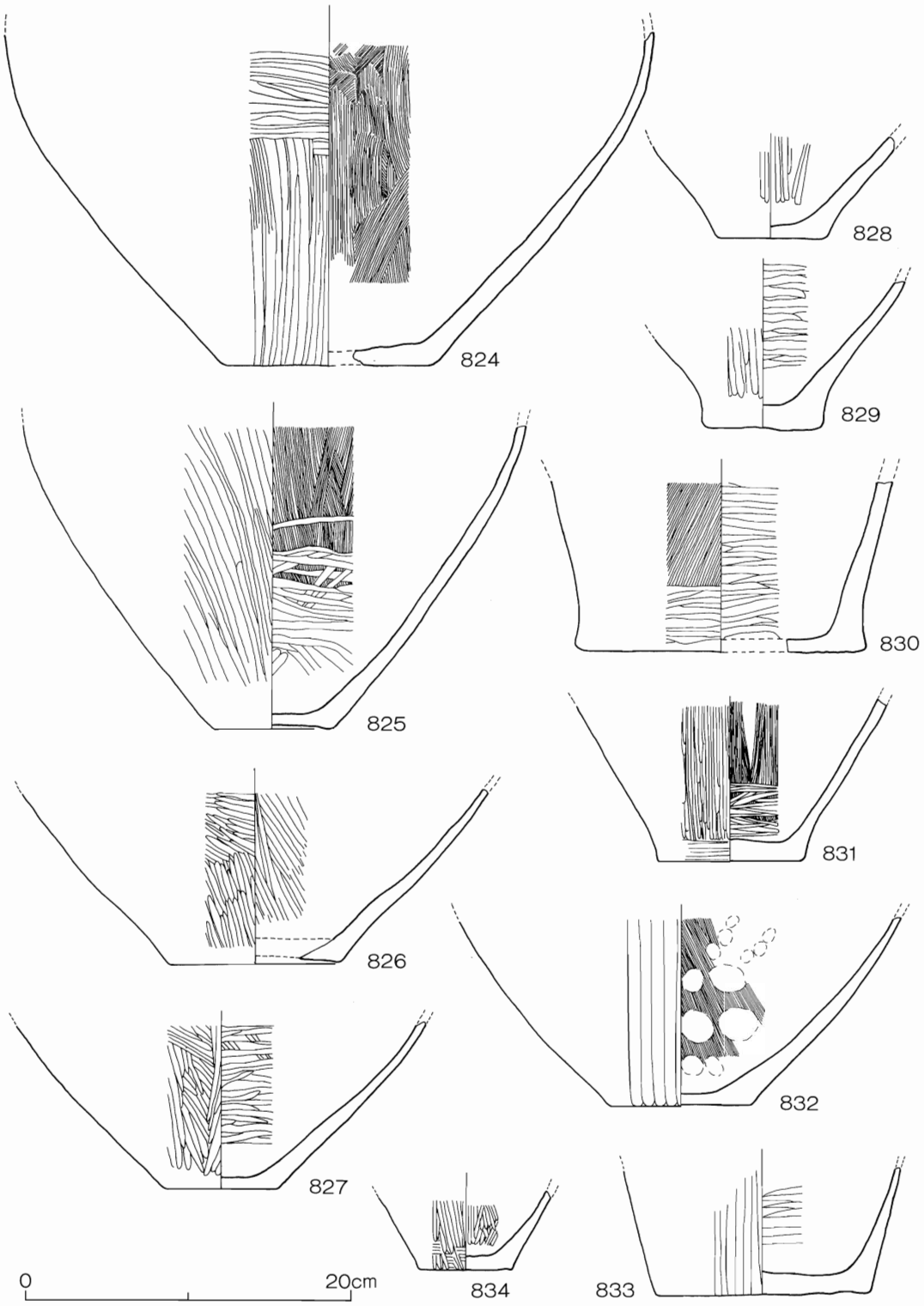
第75図　弥生土器実測図(55)



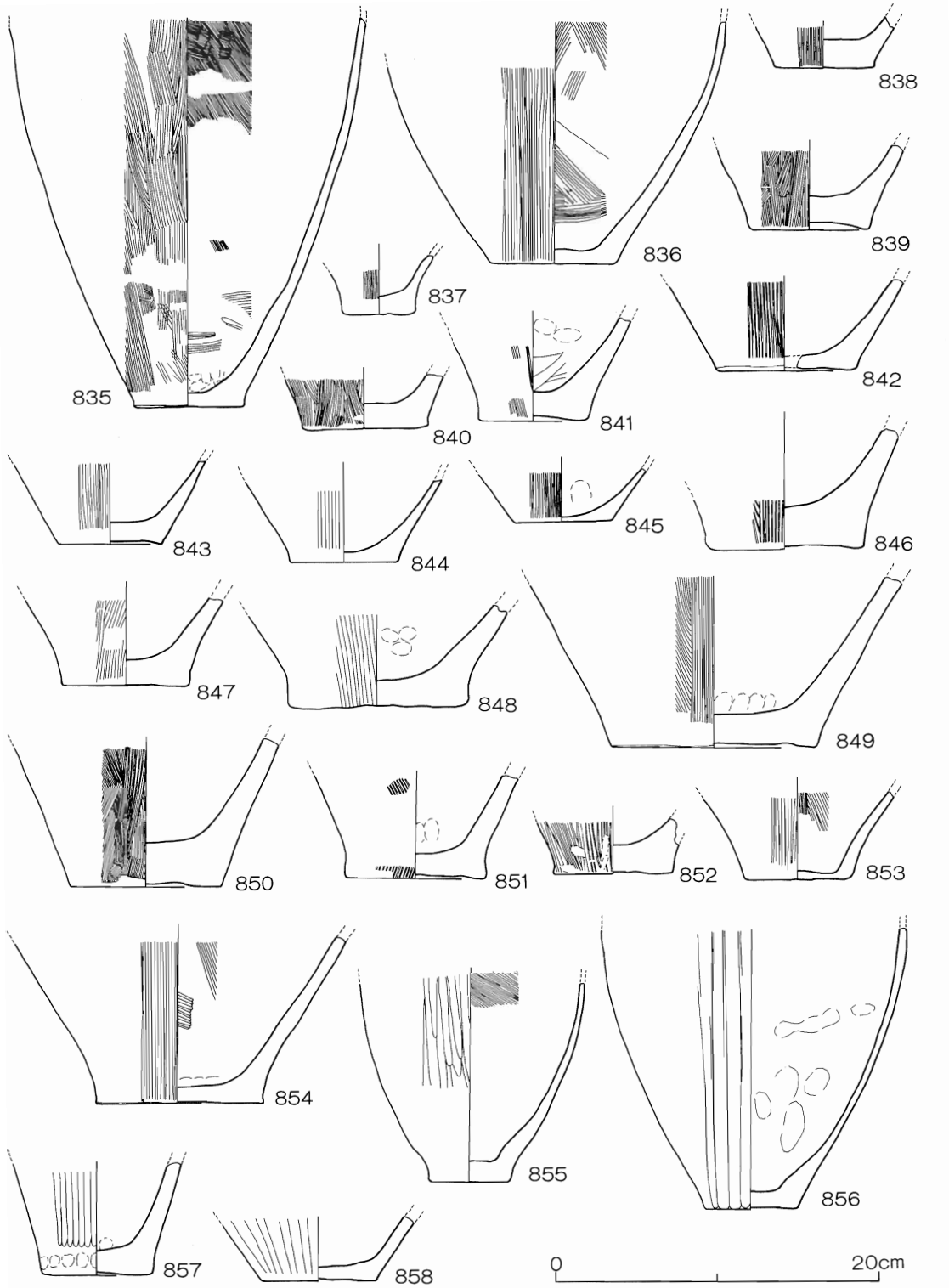
第76図　弥生土器実測図(56)



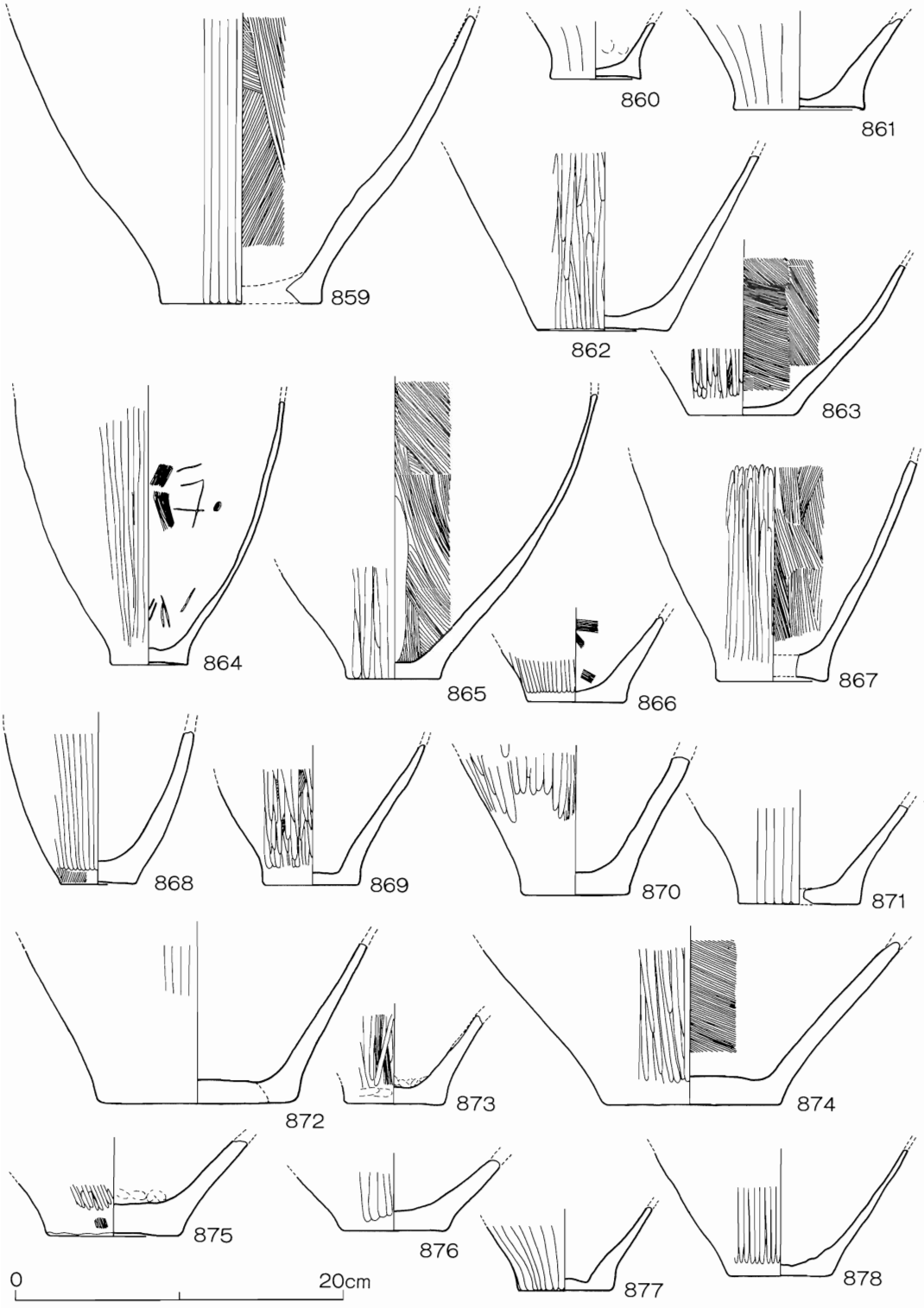
第77図　弥生土器実測図(57)



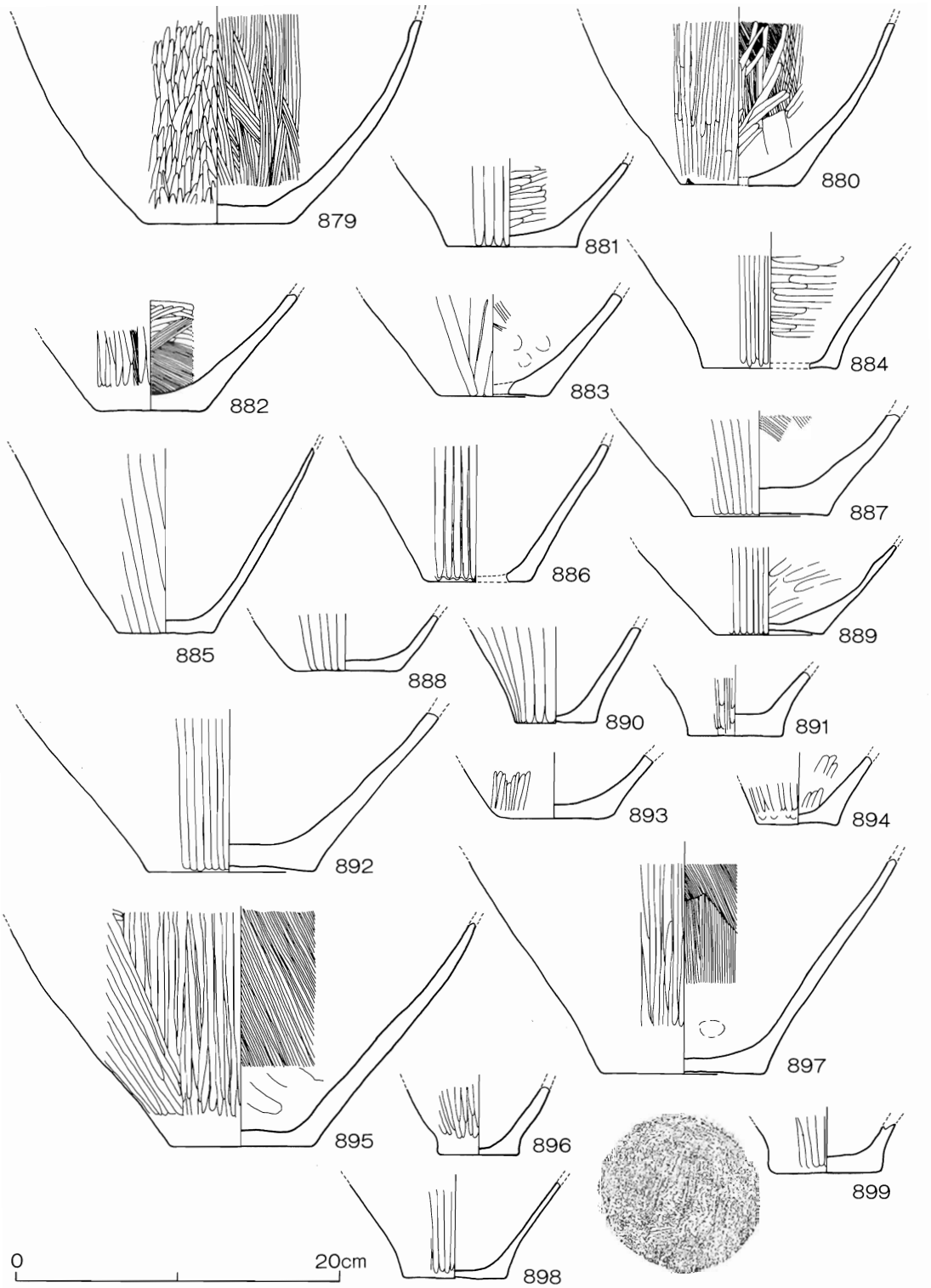
第78図　弥生土器実測図(58)



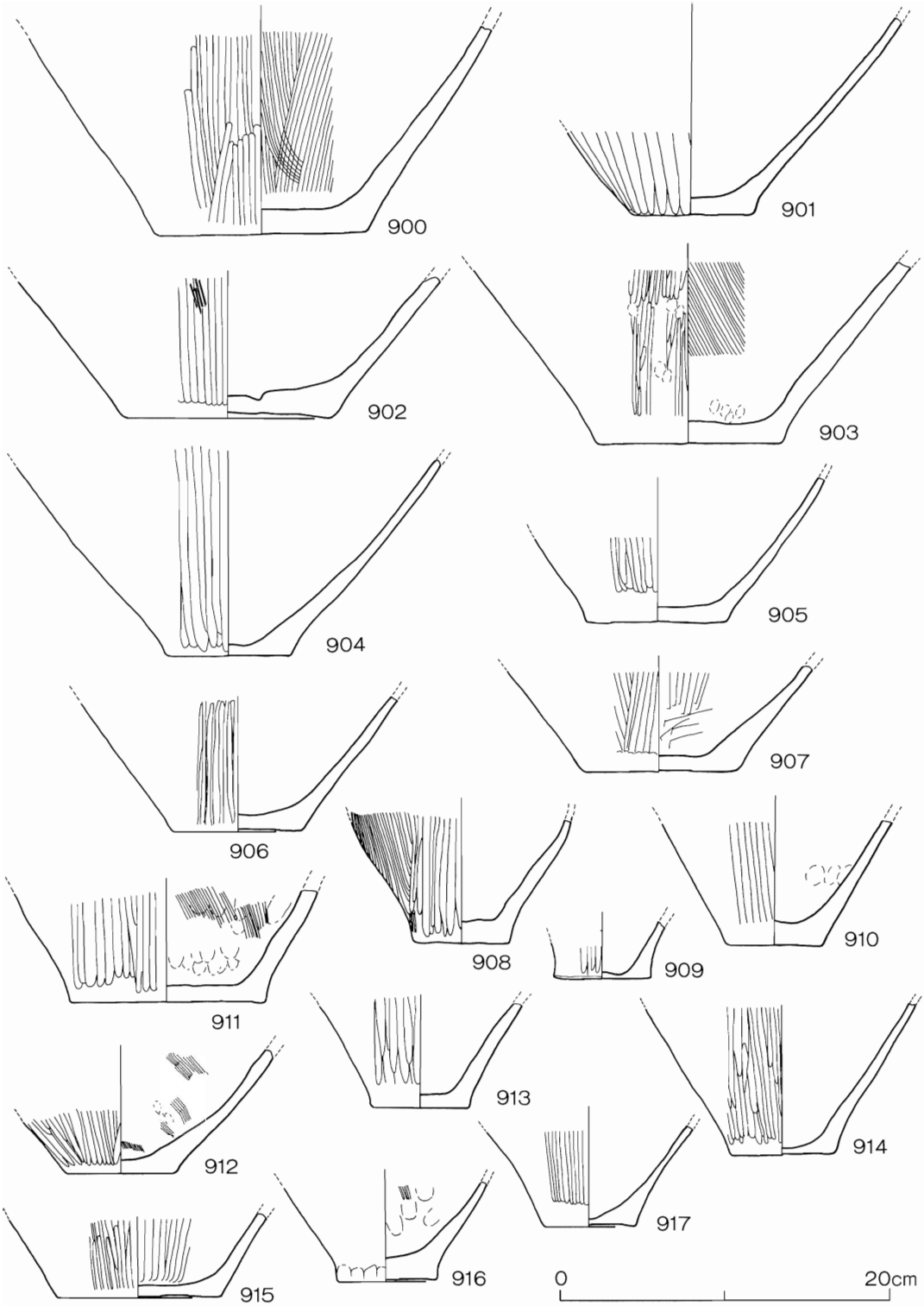
第79図　弥生土器実測図(59)



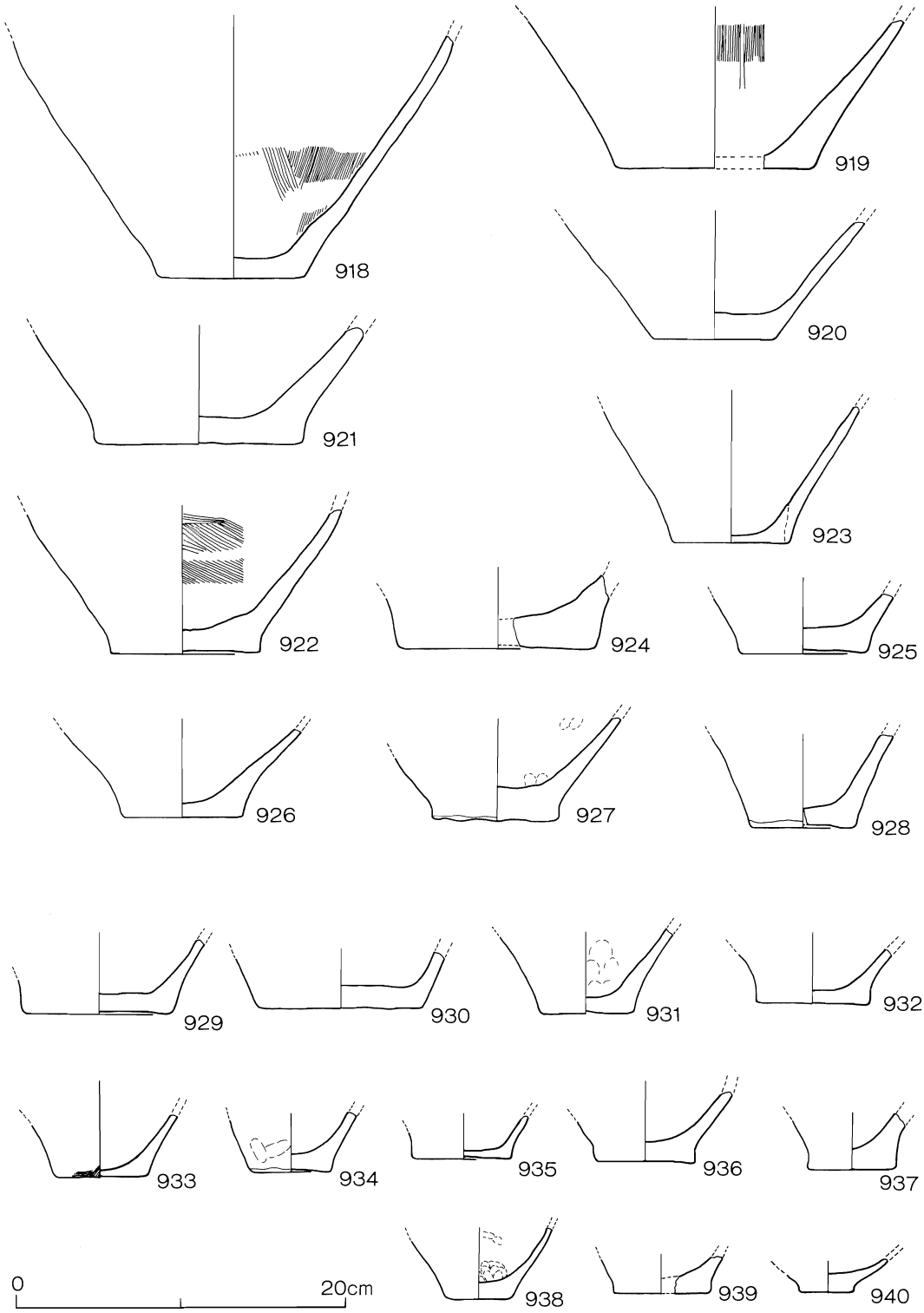
第80図　弥生土器実測図(60)



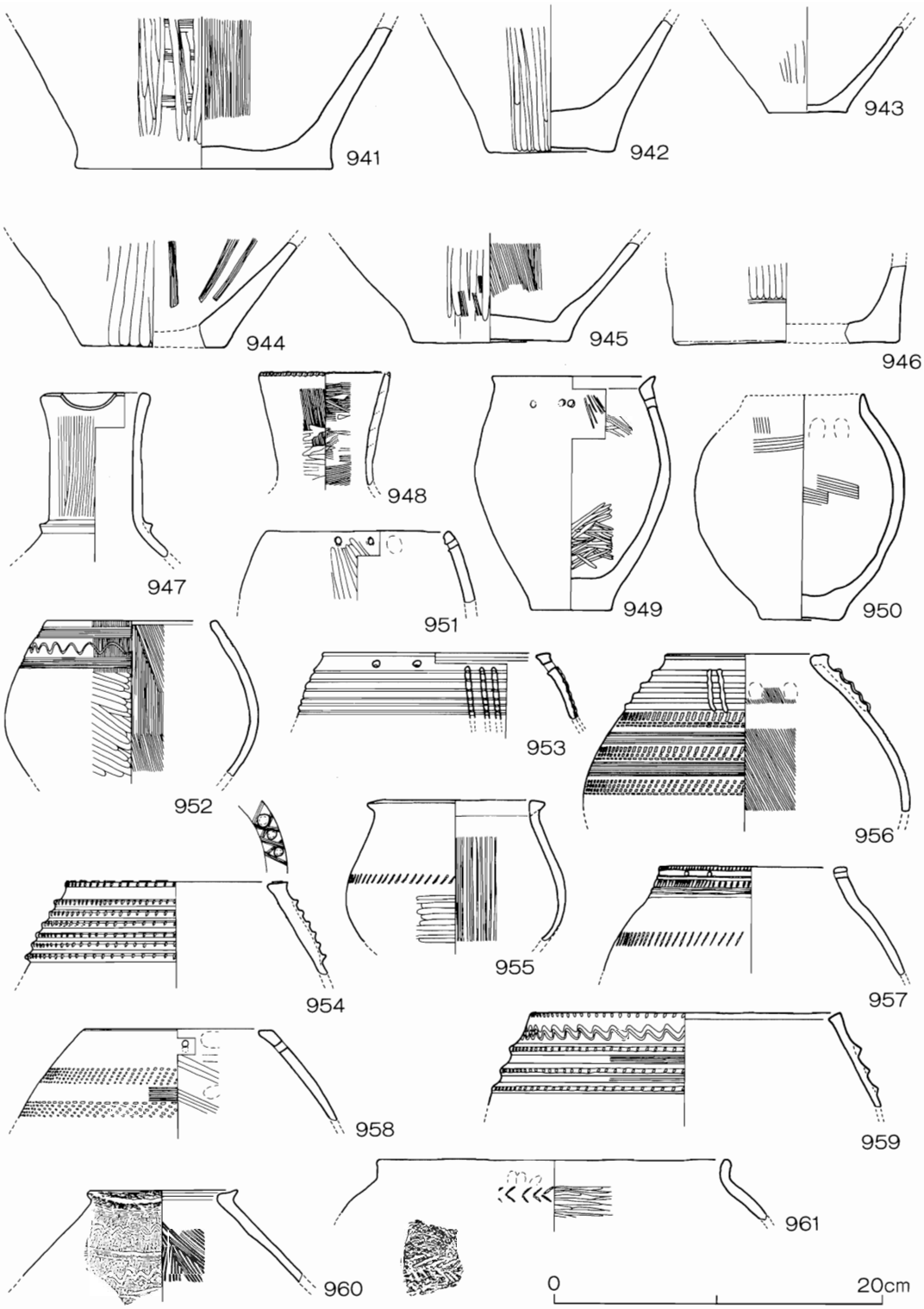
第81図　弥生土器実測図(61)



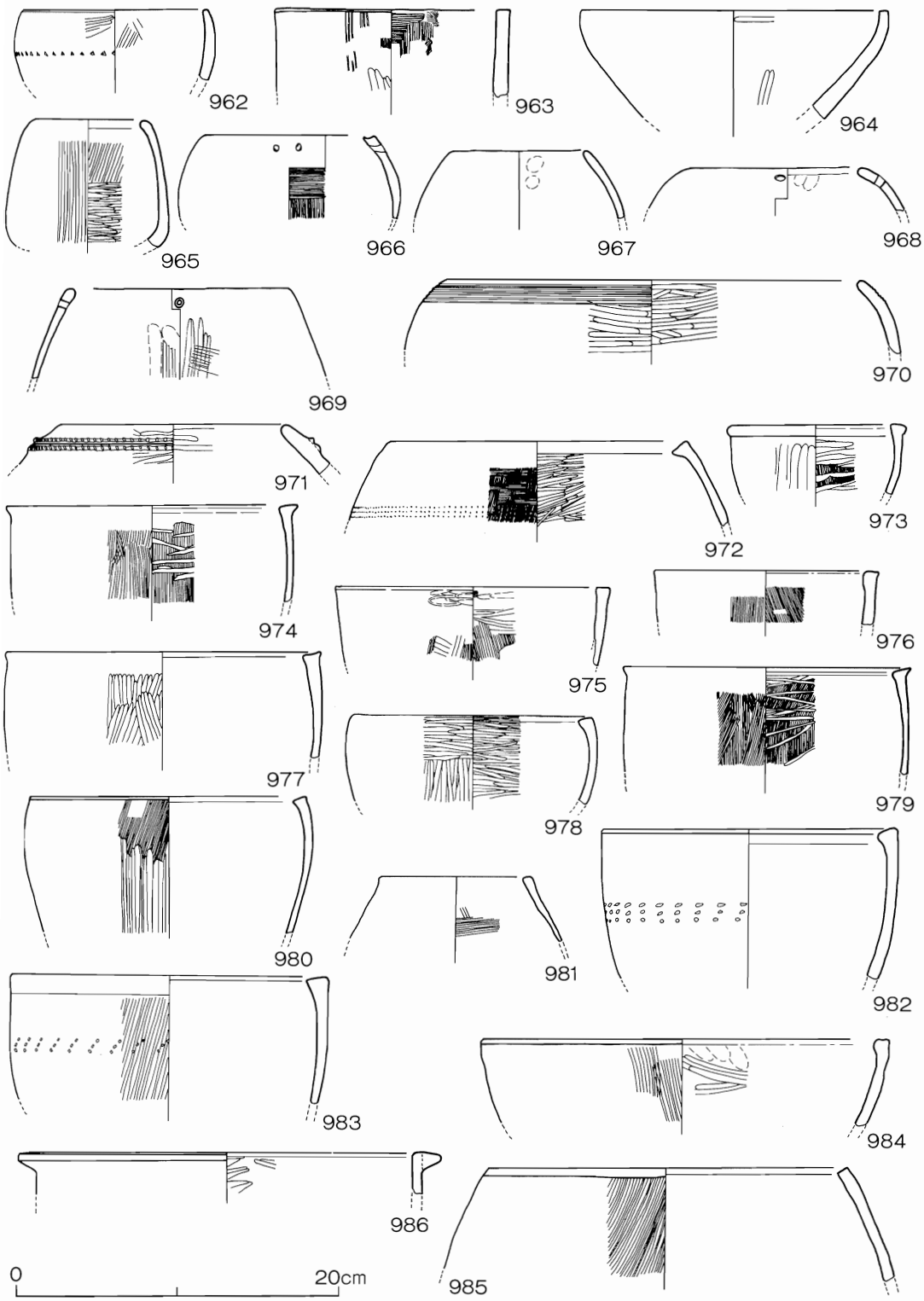
第82図　弥生土器実測図(62)



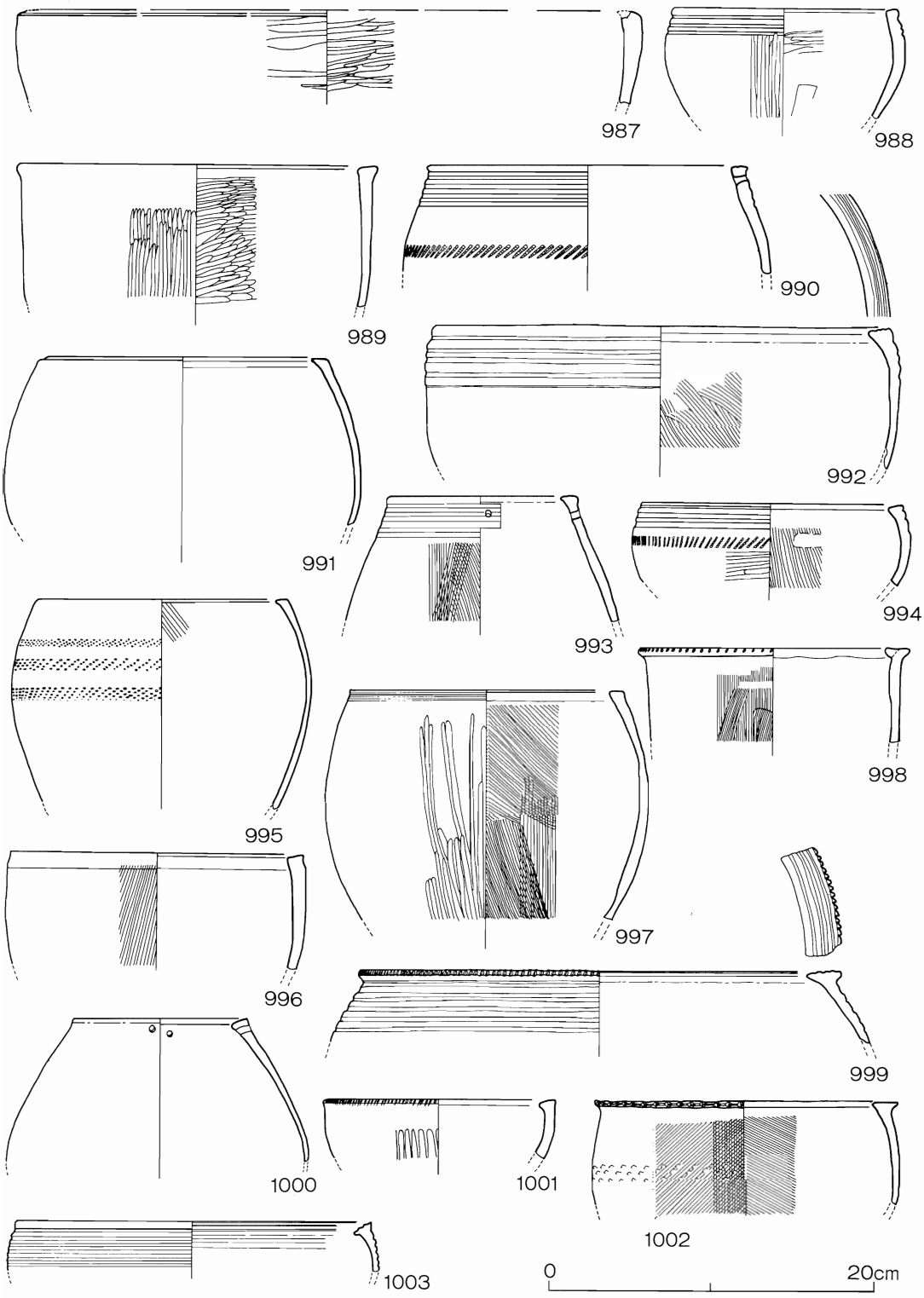
第83図　弥生土器実測図(63)



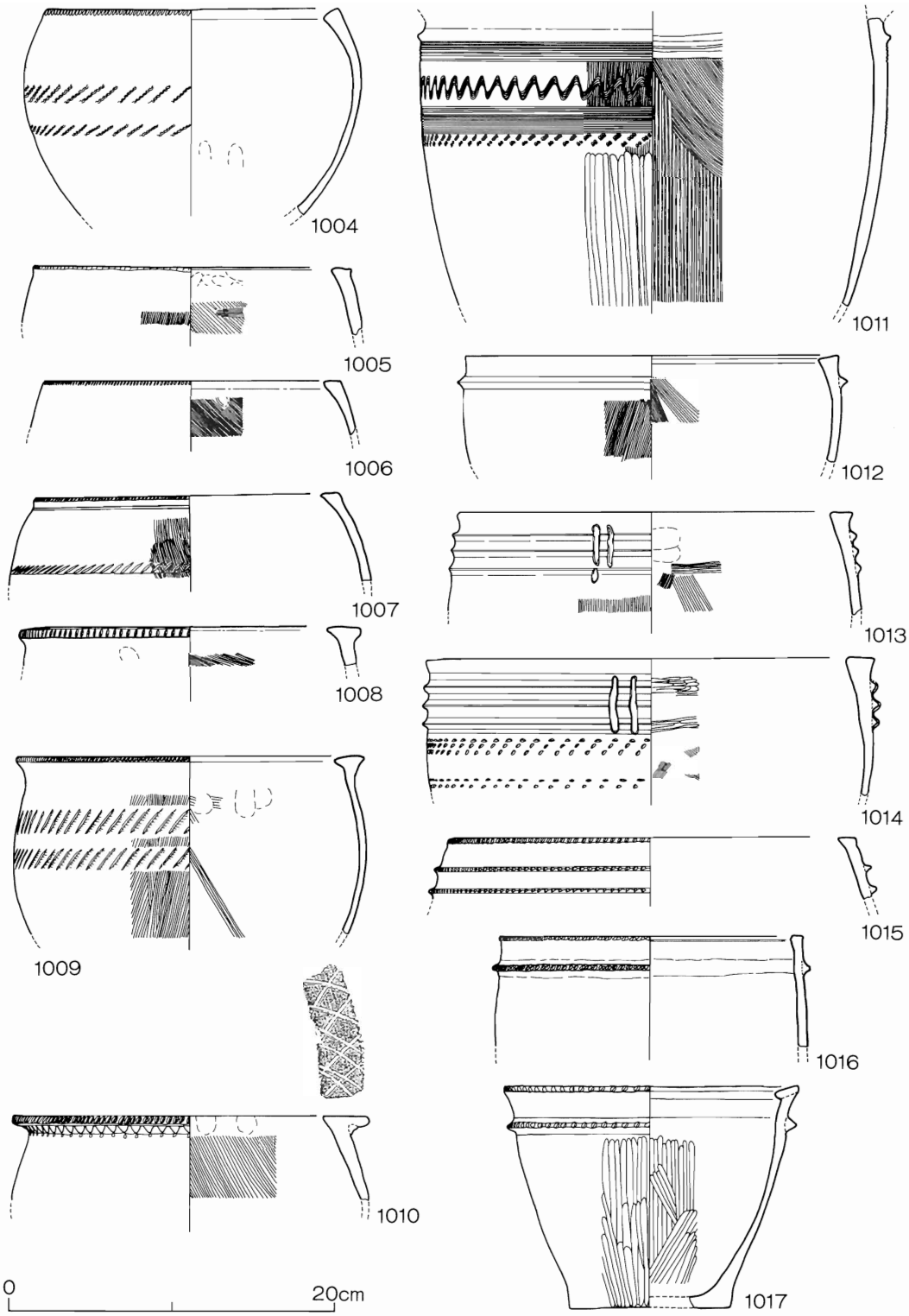
第84図　弥生土器実測図(64)



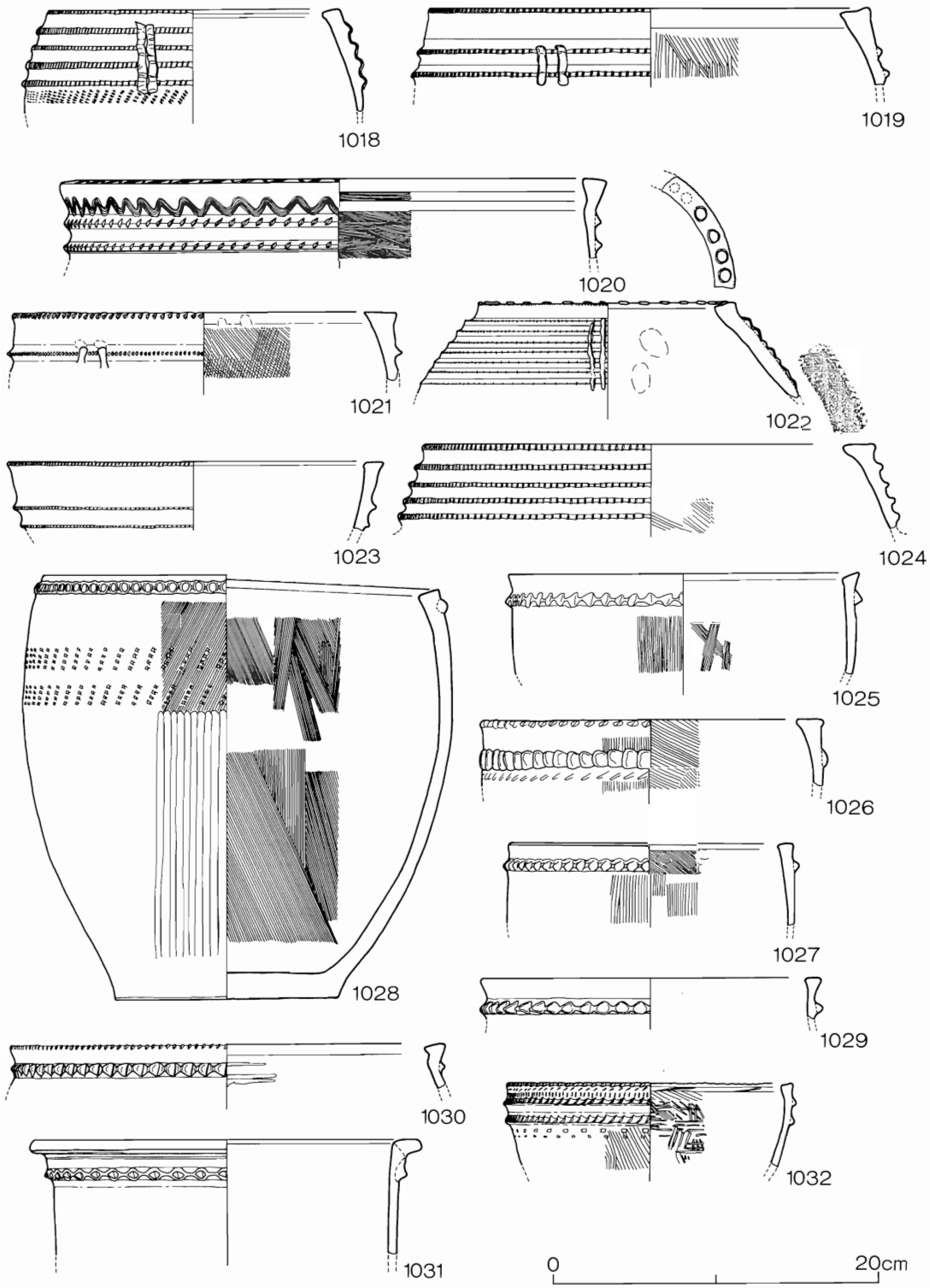
第85図　弥生土器実測図(65)



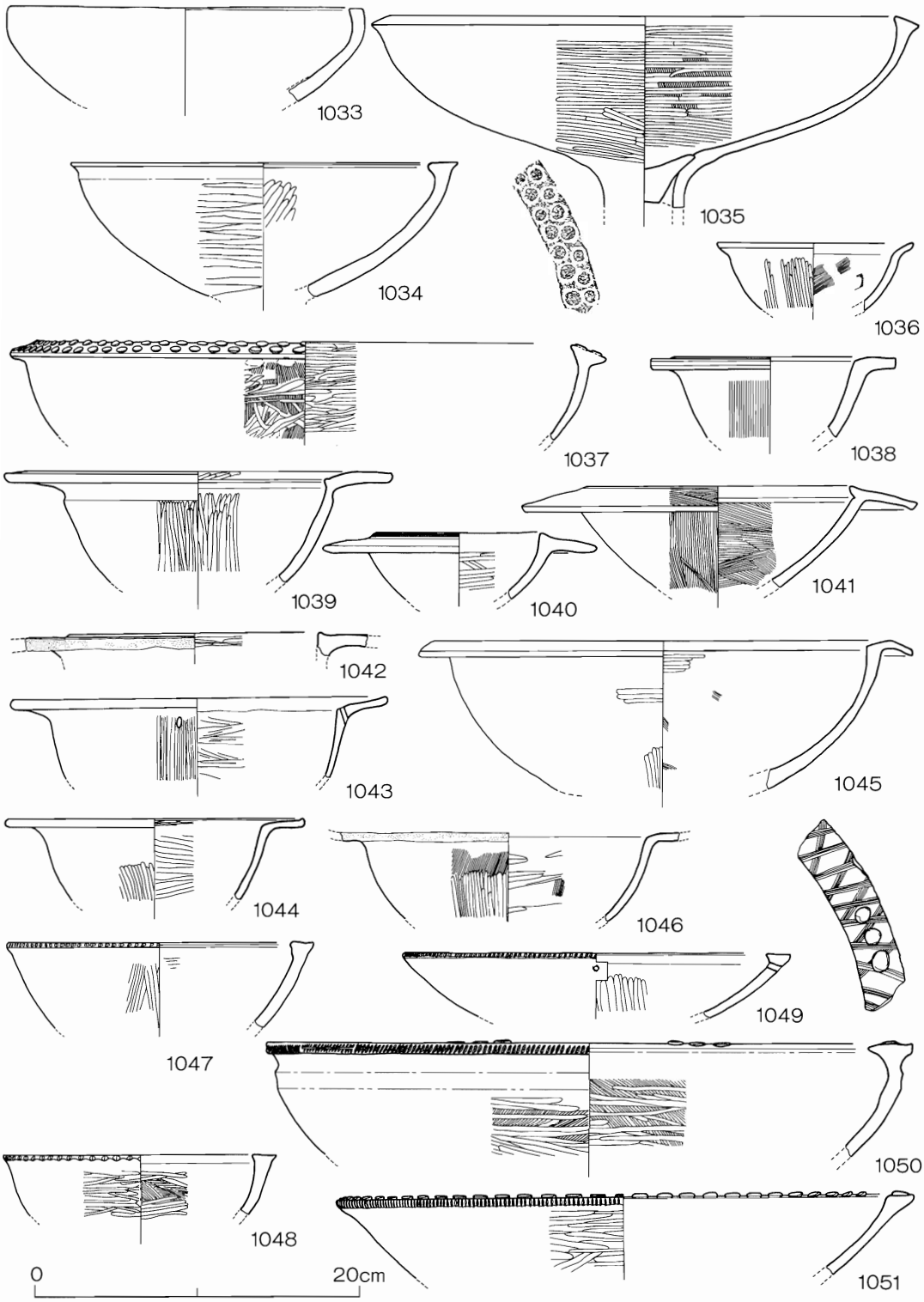
第86図　弥生土器実測図(66)



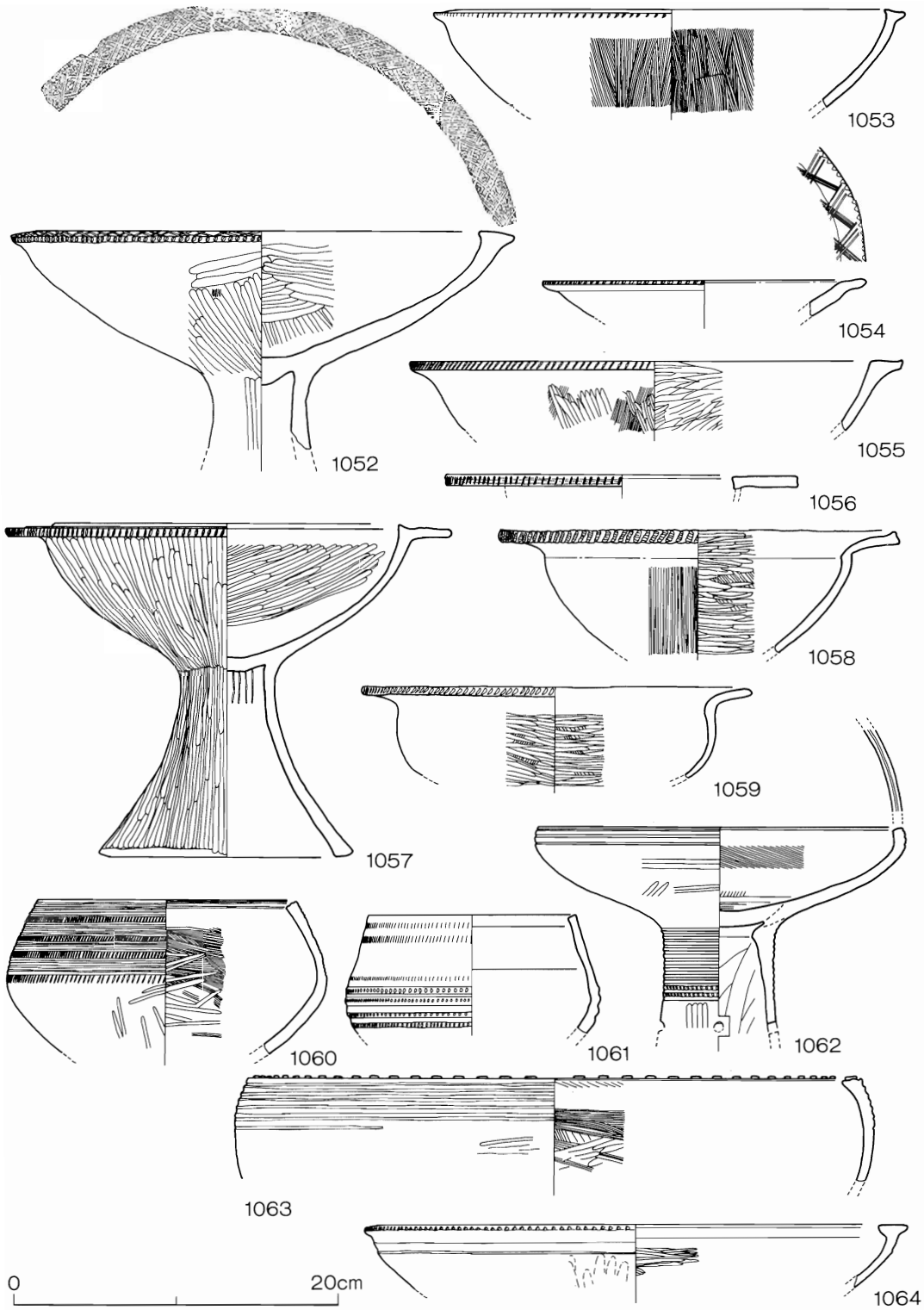
第87図　弥生土器実測図(67)



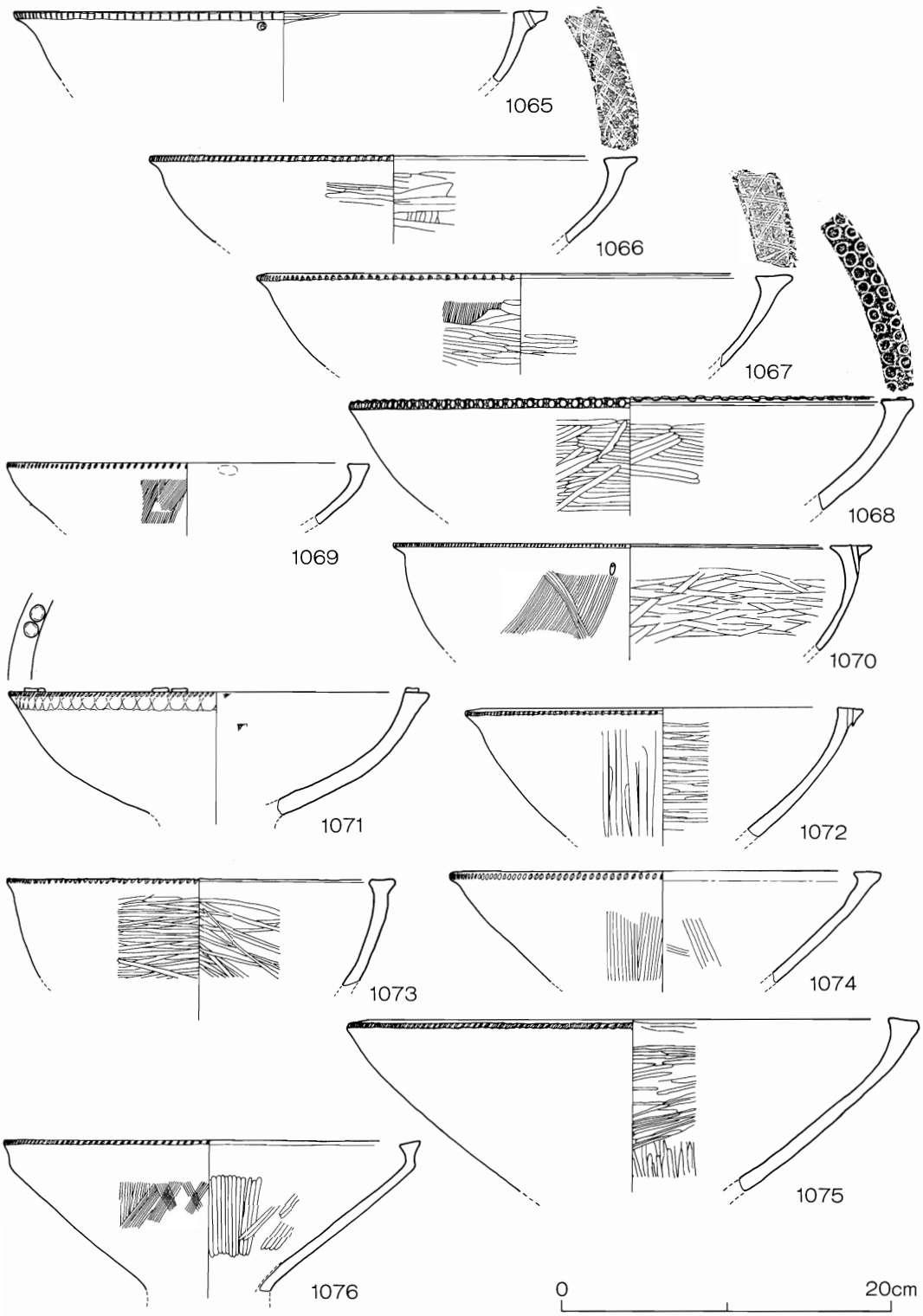
第88図　弥生土器実測図(68)



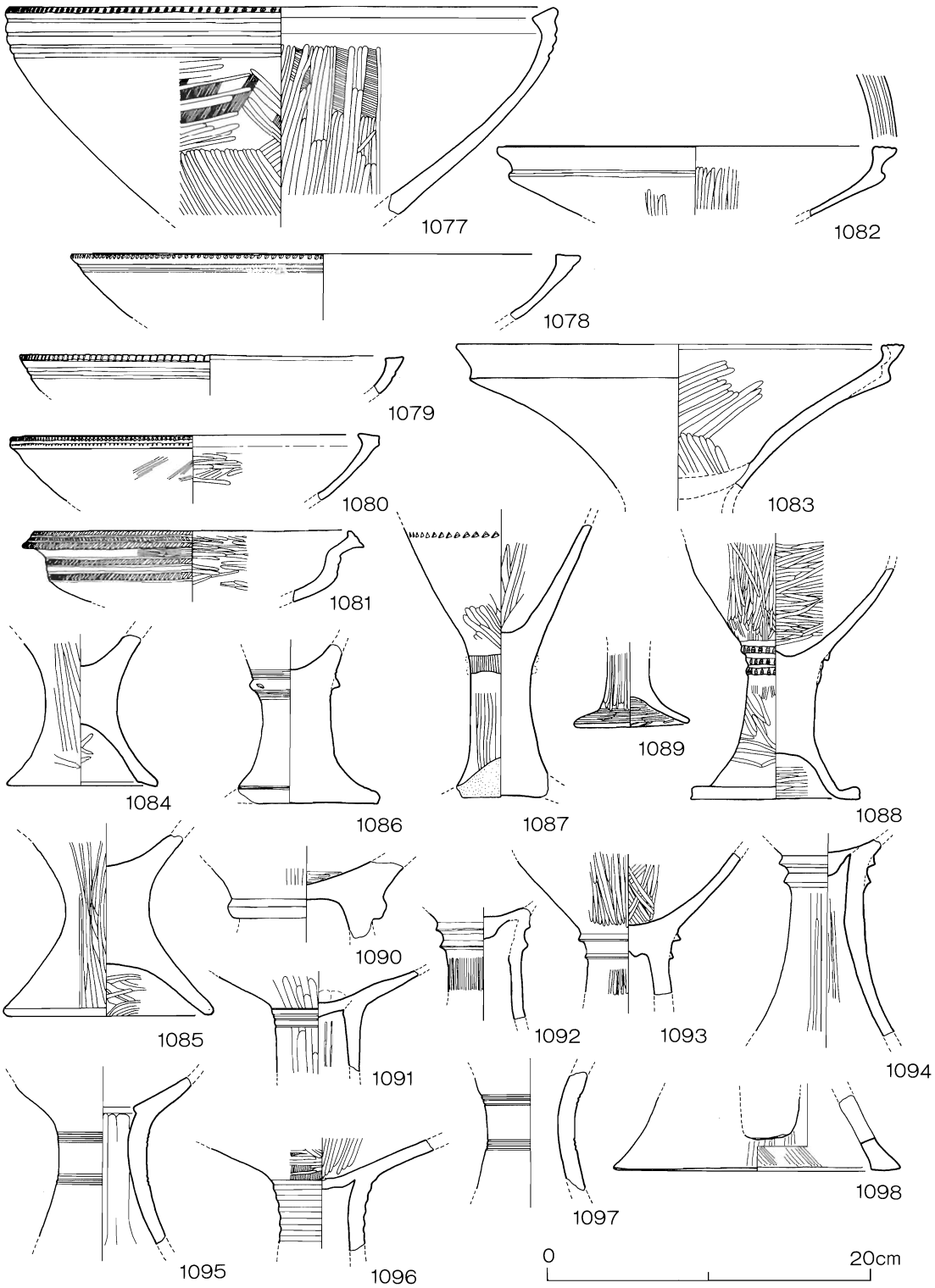
第89図　弥生土器実測図(69)



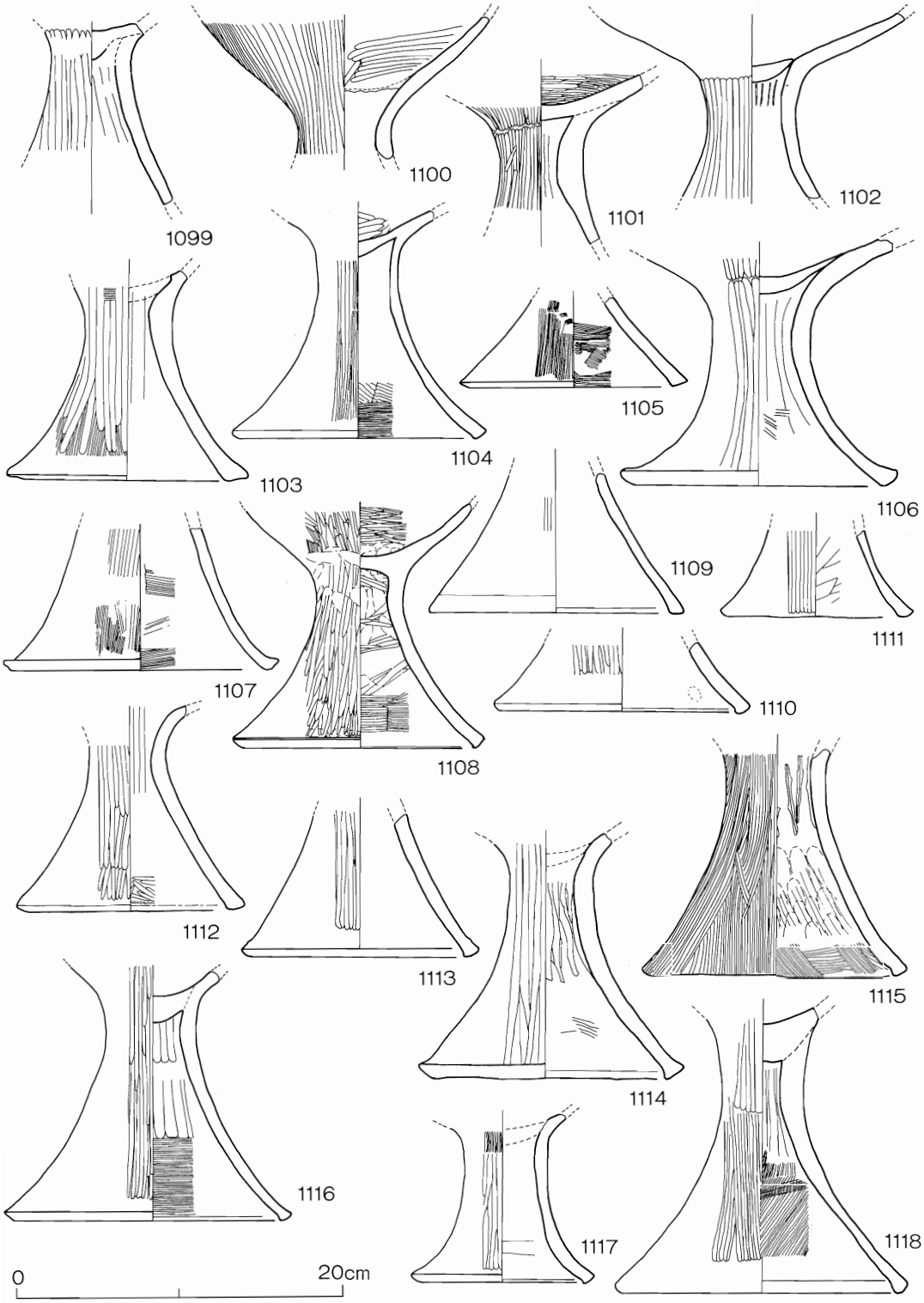
第90図　弥生土器実測図(70)



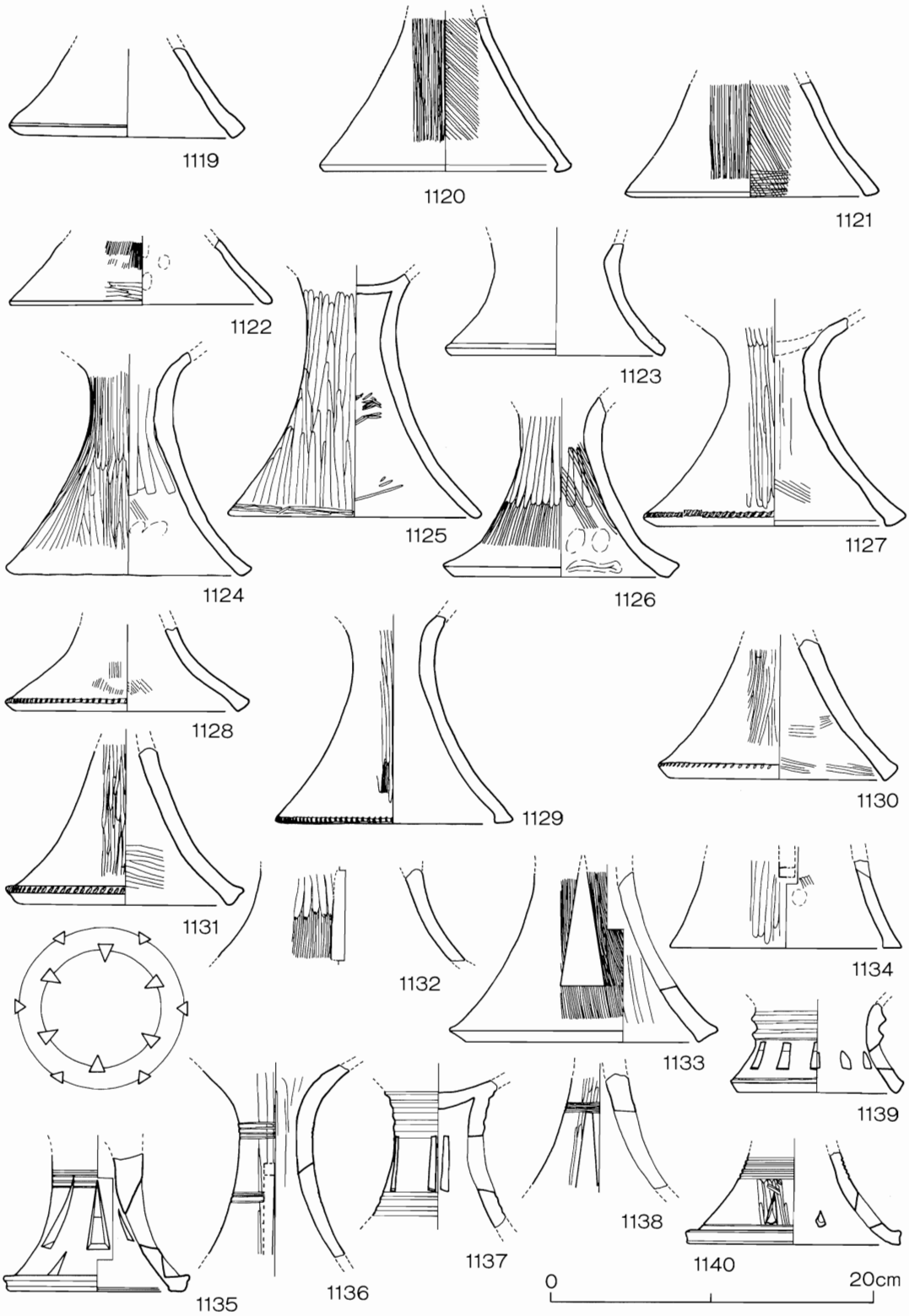
第91図　弥生土器実測図(71)



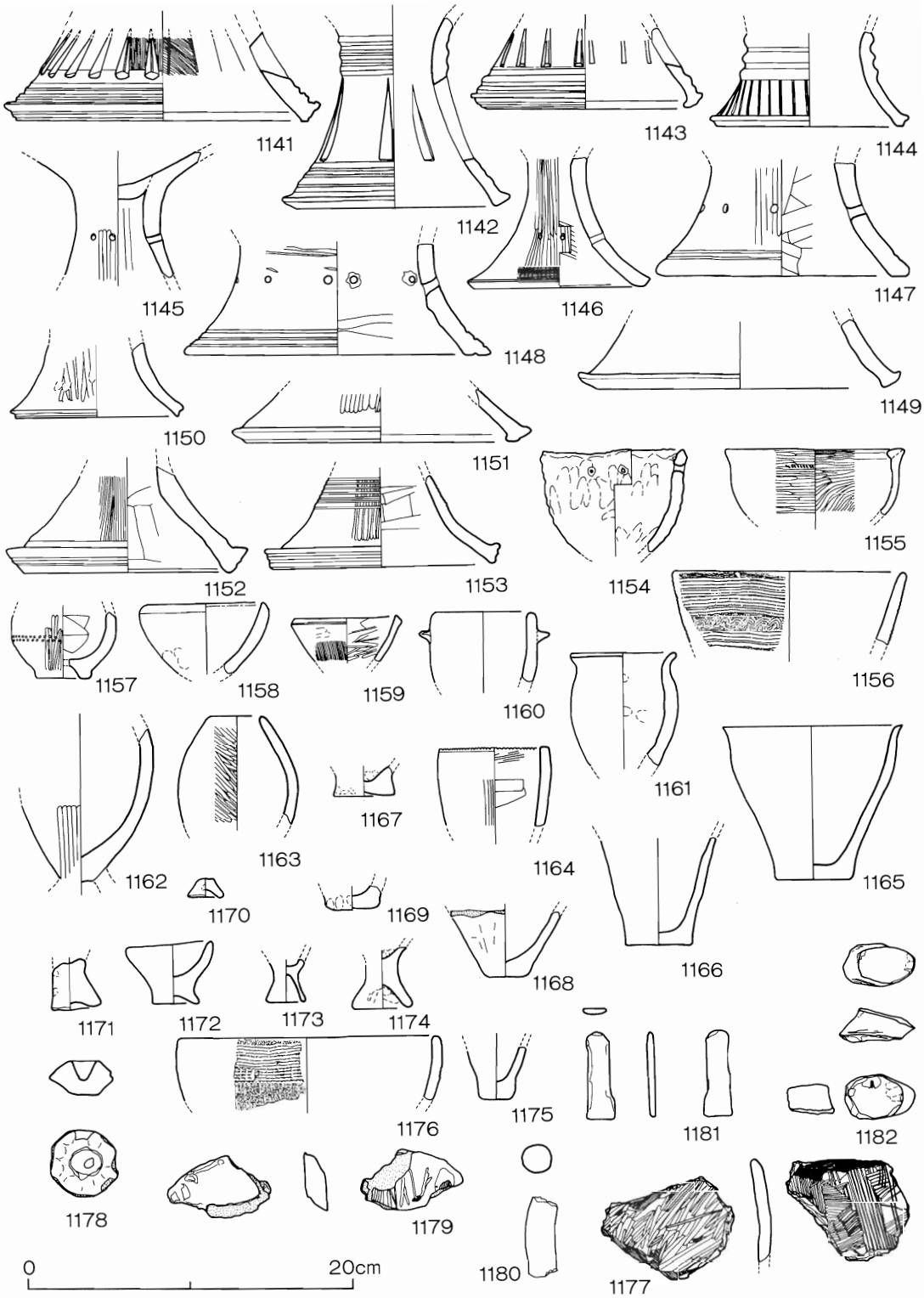
第92図　弥生土器実測図(72)



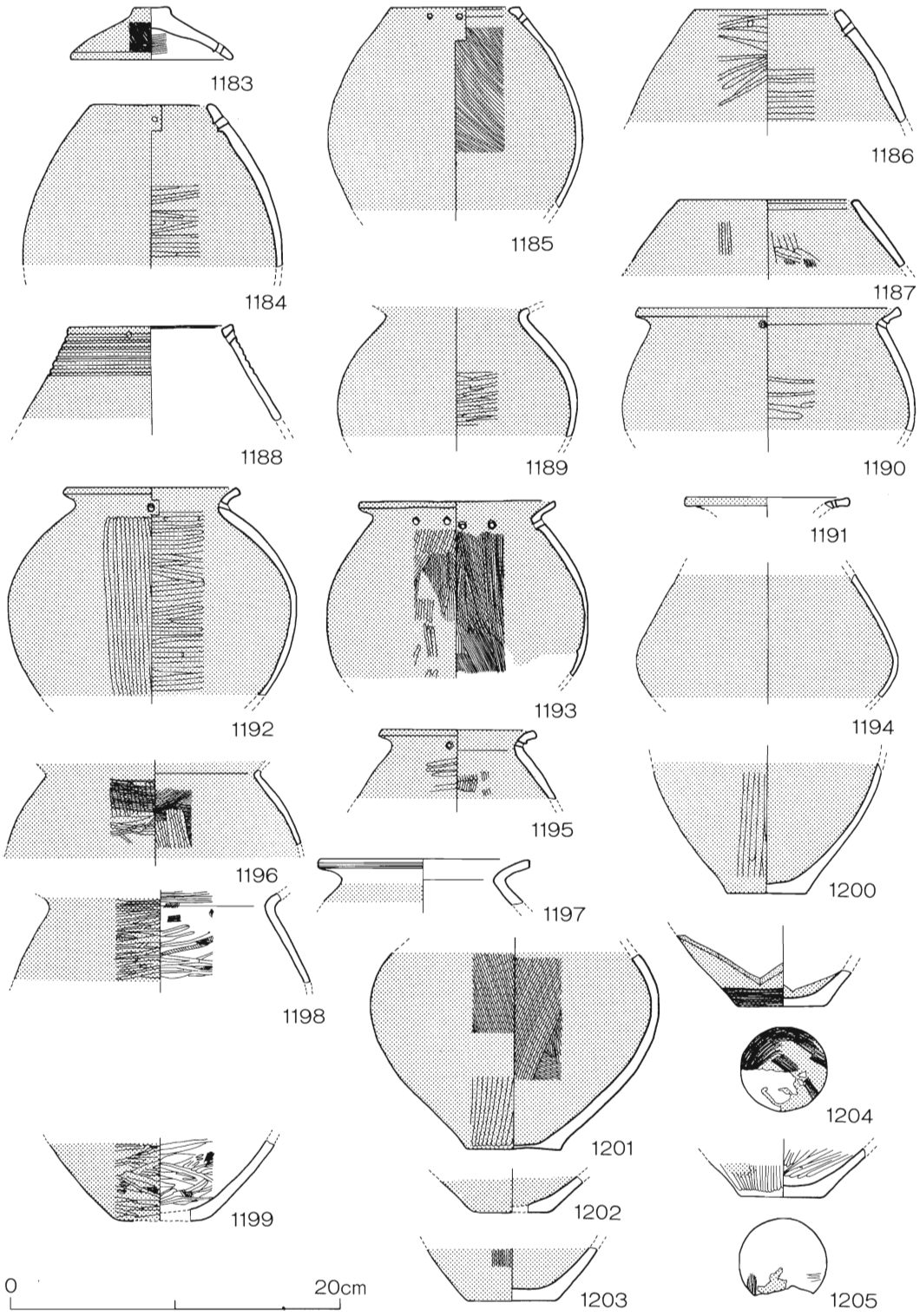
第93図　弥生土器実測図(73)



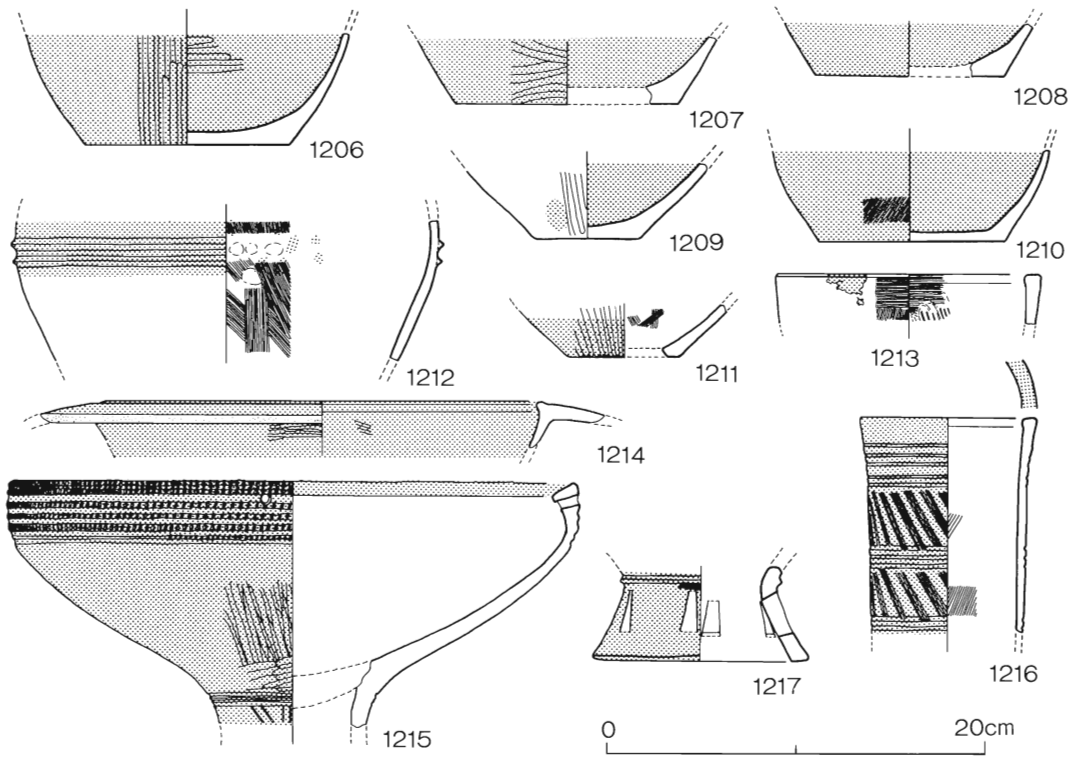
第94図　弥生土器実測図(74)



第95図　弥生土器実測図(75)



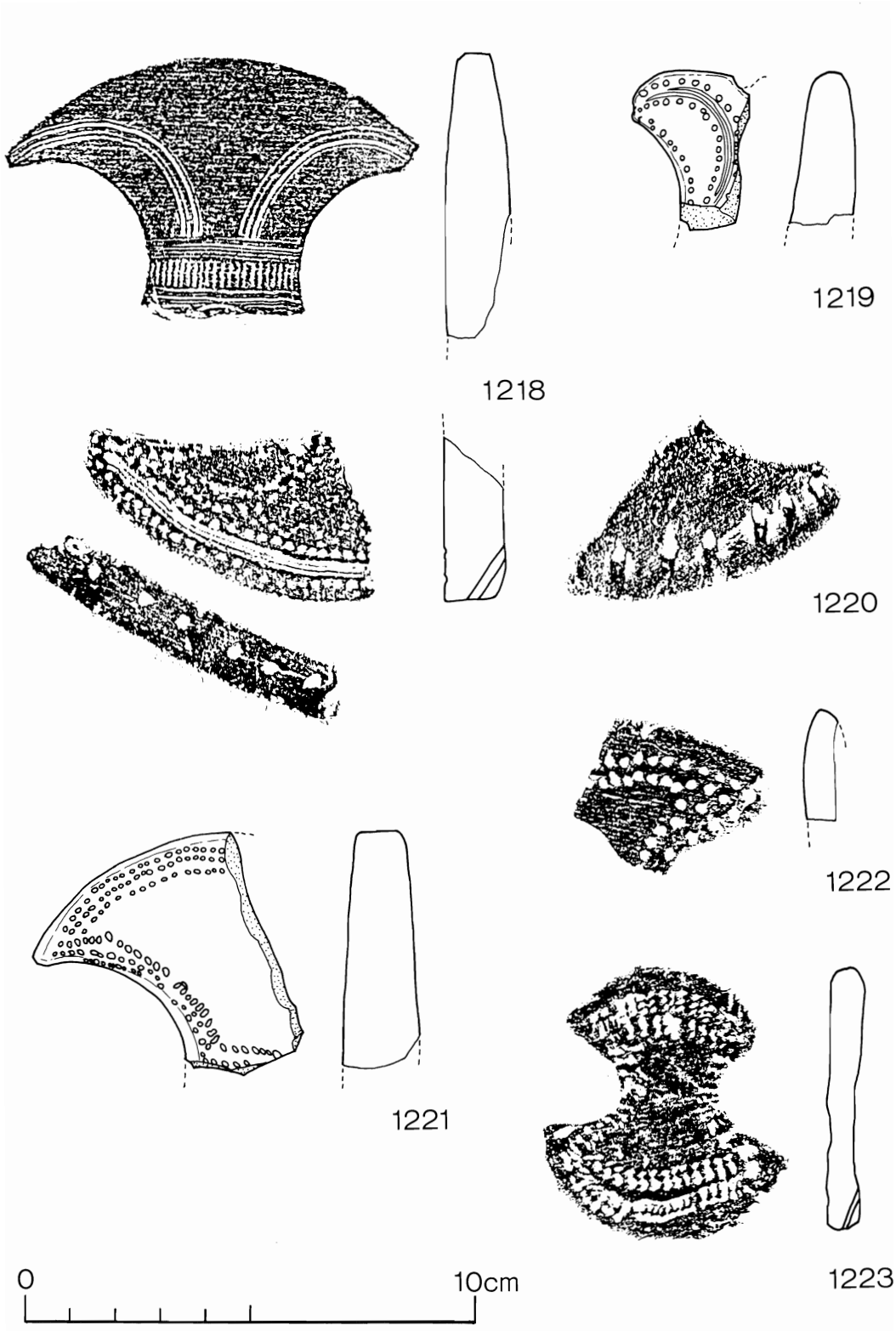
第96図　弥生土器実測図(76)



第97図　弥生土器実測図(77)

は1.0㎝あるが裏面は剝離している。文様は列点文のみで1219や1220にみられたような沈線はない。1221は現存部5.3×5.0㎝、厚さ1.7㎝を測る。文様の手法は1222に同じで、列点文のみで表わされている。1223は、唯一の完成品である。長さ5.9㎝、図示した位置での上方の幅は4.0㎝、中央のくびれ部で2.2㎝、下方で5.5㎝、厚さは0.6㎝を測る、分銅型土製品としては小形のものである。文様の手法も貝殻腹縁で刺突がなされ他と異なる。下方には、1220でみられたような側面から裏面にむかい小孔が貫かれている。最も荒い作りで22ｇある。これらは、いずれも、発掘調査区中央部に検出された溝状遺構とその周辺から発見されたものである。県内では、西川津遺跡の下流にあるタテチョウ遺跡(註3)、松江市竹矢町布田遺跡(註4)、安来市十善遺跡(註5)、出雲市矢野遺跡(註6)に出土例が知られているが、6個体は一遺跡としては最多である。文様は、その手法の違いはあるが、いずれも同じ文様が描かれている。

不明土製品　第95図1177～1182には不明土製品を掲げた。1178は径4.0㎝、厚さ2.0㎝の不整形のソロバン玉状の土製品である。中央は凹んでおり貫通していない。1179は粗い手捏で、分銅型土製品の一部かもしれない。1180は把手であろう。1181は土器片を再利用したヘラ状のもので全体に磨滅している。1182は径4.0×2.0㎝、厚さ2.0㎝の楕円形の土製



第98図　弥生土器実測図(78)

品。1177は不整形な土器片を再利用し、その二辺を磨き、刃部を作り出している。この土器片は前期の可能性もある。

（2）弥生時代後期の土器

a．甕形土器　第99図、第100図、第101図1266～1278は弥生時代後期の甕形土器として分類した。全体の器形は1235や1241に代表されるような胴部の長いものと、1275～1278のように胴部の短いものがある。いずれも、内面は頸部より下方にヘラ削りを施し、その後はハケ目調整やヘラ磨き調整はしないという特徴がある。口縁部から頸部にかけては断面が「く」の字状となるもの（第99図、第101図1267～1270、1273～1277）と二重口縁になるもの（第100図、第101図1266、1271、1272）がある。前者の多くは口縁部が内傾し、後者のそれは垂直もしくは外傾するものが多い。いずれも、口縁部外面には多条沈線を施すが、無文のもの（1267～1274）や波状文もみられる（1266、1276）。胴部外面中ほどよりやや上方に、ヘラやクシ状工具による刺突文をめぐらすものも多く（1230、1234、1236、1239、1238、1258、1275）、それが頸部近くにある例もある（1252、1268）。1276は外面胴部にクシ描波状文、1275は珍らしく半円を連続させた文様を施している。

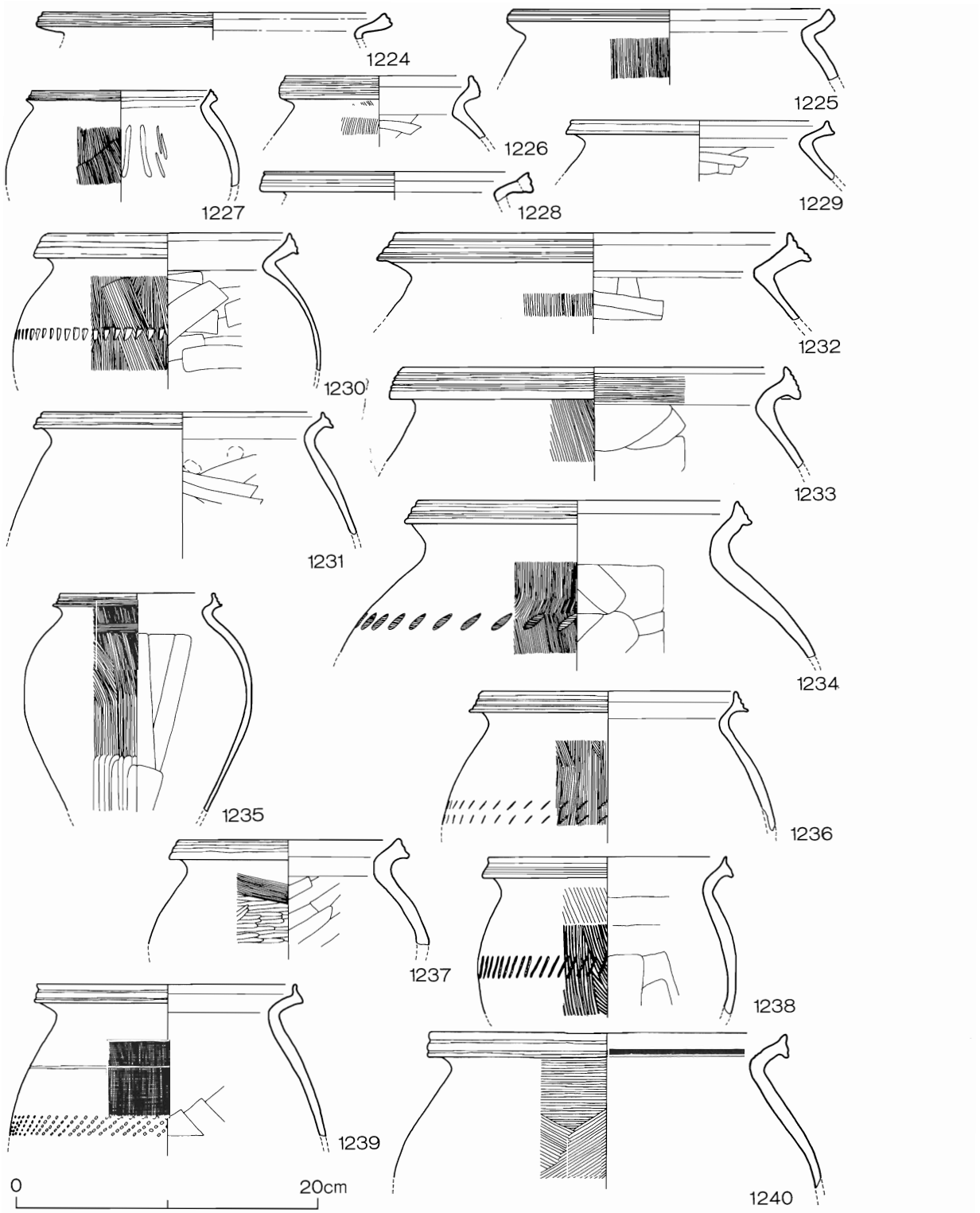
b．壺形土器　第101図1279～1288、第102図1289～1298は壺形土器として分類した。1284、1294は甕形土器の口縁部が内傾し「く」の字状とするものに対応し、同様に1282～1285は二重口縁のものに対応すると考えられる壺形土器である。1289、1290は当地方ではあまりみかけないものであり、特に1289と1290は他地域からの搬入土器の可能性もある。1286は脚がつく壺かもしれない。1287は無口縁の壺。1288は壺形土器のミニチュア土器と考えた。

c．鉢形土器　第102図1300は口縁径14.0cmの小形の鉢形土器である。内面は全体にヘラ削りを施している。

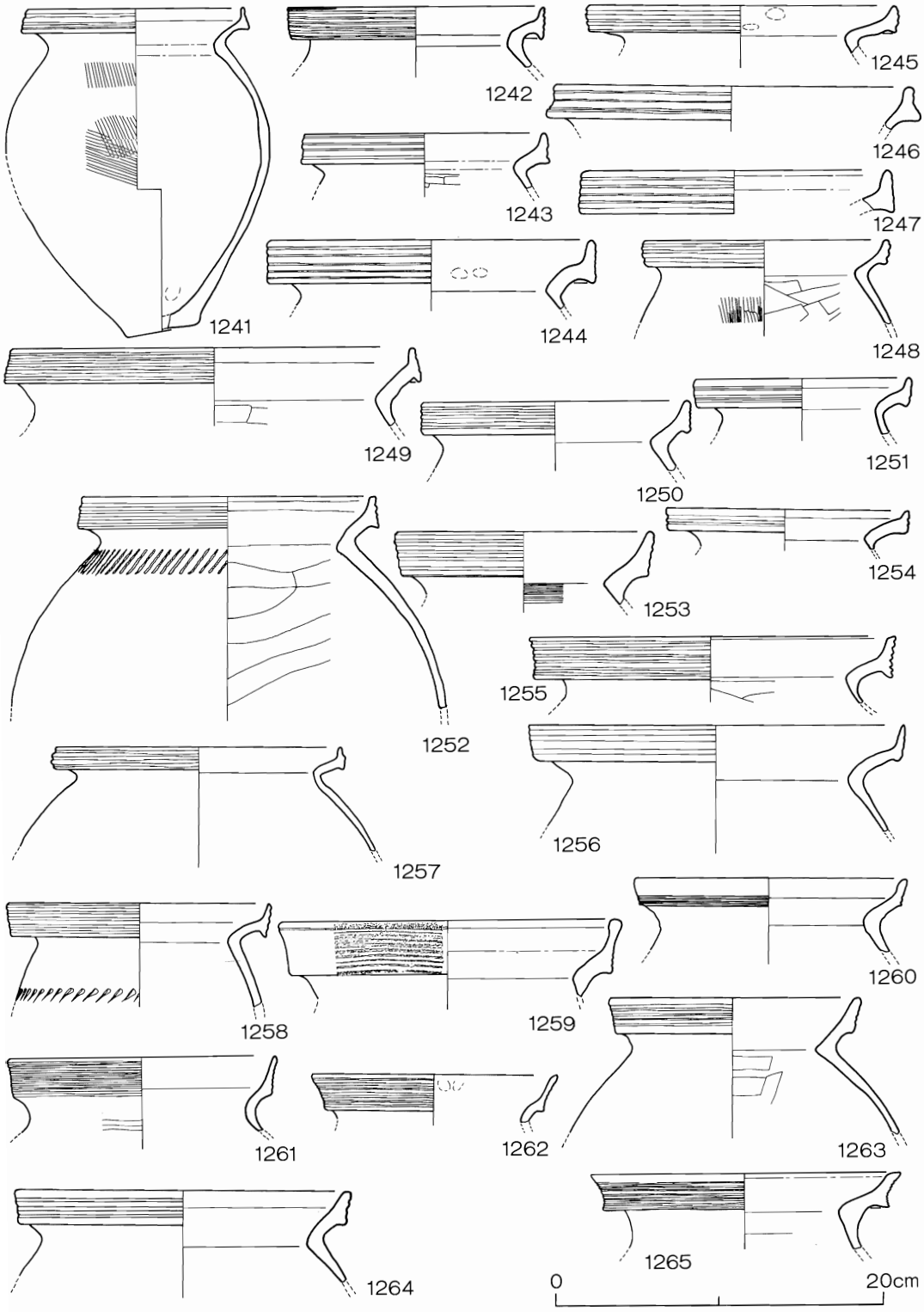
d．高坏　第103図1303～1320に高坏を図示した。坏部の形態は大別して二種ある。1303、1308、1399は弥生時代中期の高坏として分類した第92図1082、1083の系統上にあるものと、1304～1307は二重口縁を有するものの二種である。このうち1309は内外面に丁寧な放射状のヘラ磨きが観察される。

e．器台形土器　第103図1321～1325は器台形土器で、二重口縁の壺や甕に共通した1321～1323と、そうでない1324、1325がある。前二者は鼓形器台である。このうち1323は最大径約32cmを測る大形のものである。

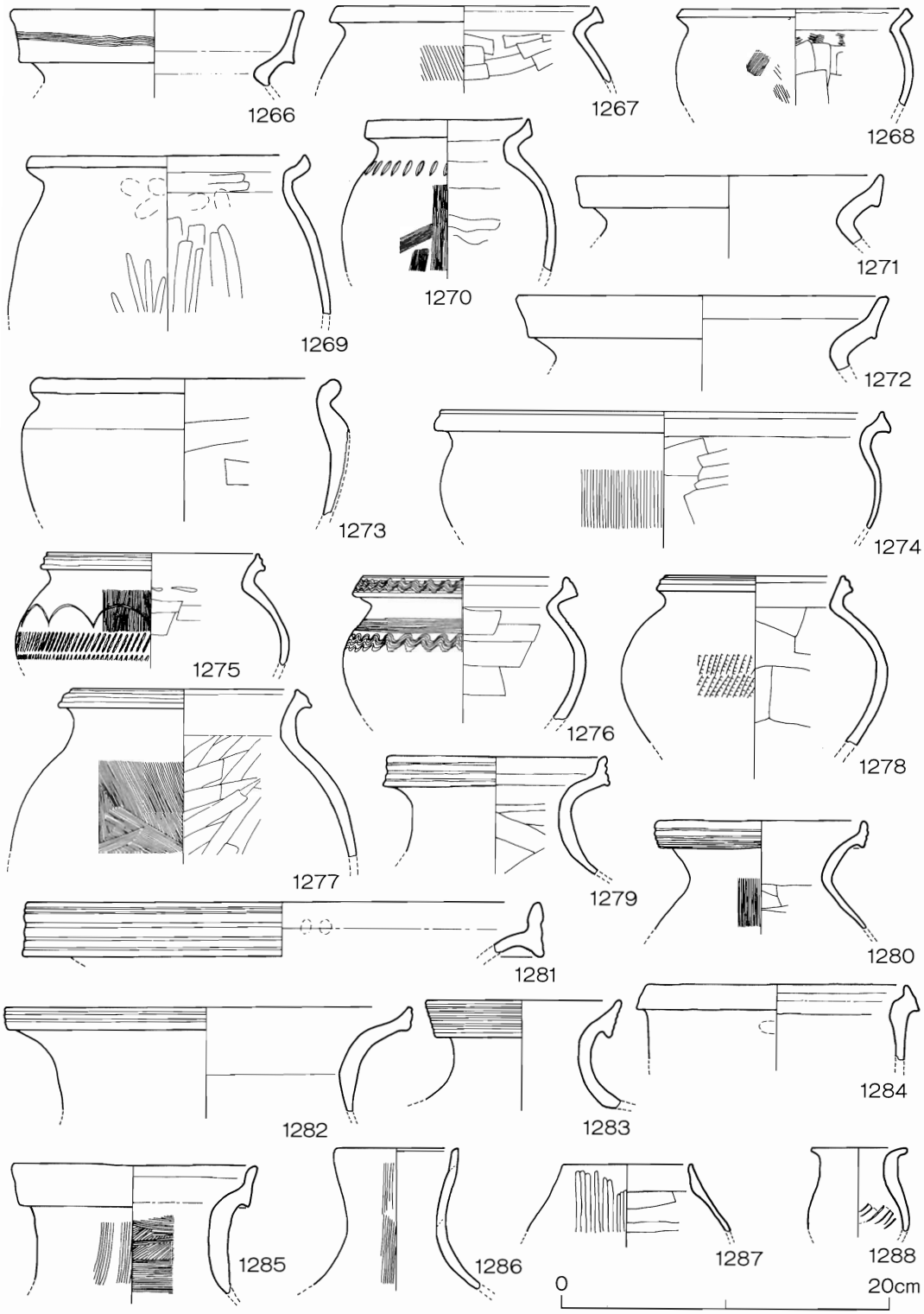
f．低脚坏　第103図1326～1328は低脚坏として分類した。このうち、1327は、高坏1303、1307、1308の一群のものに対応するものと思われる。



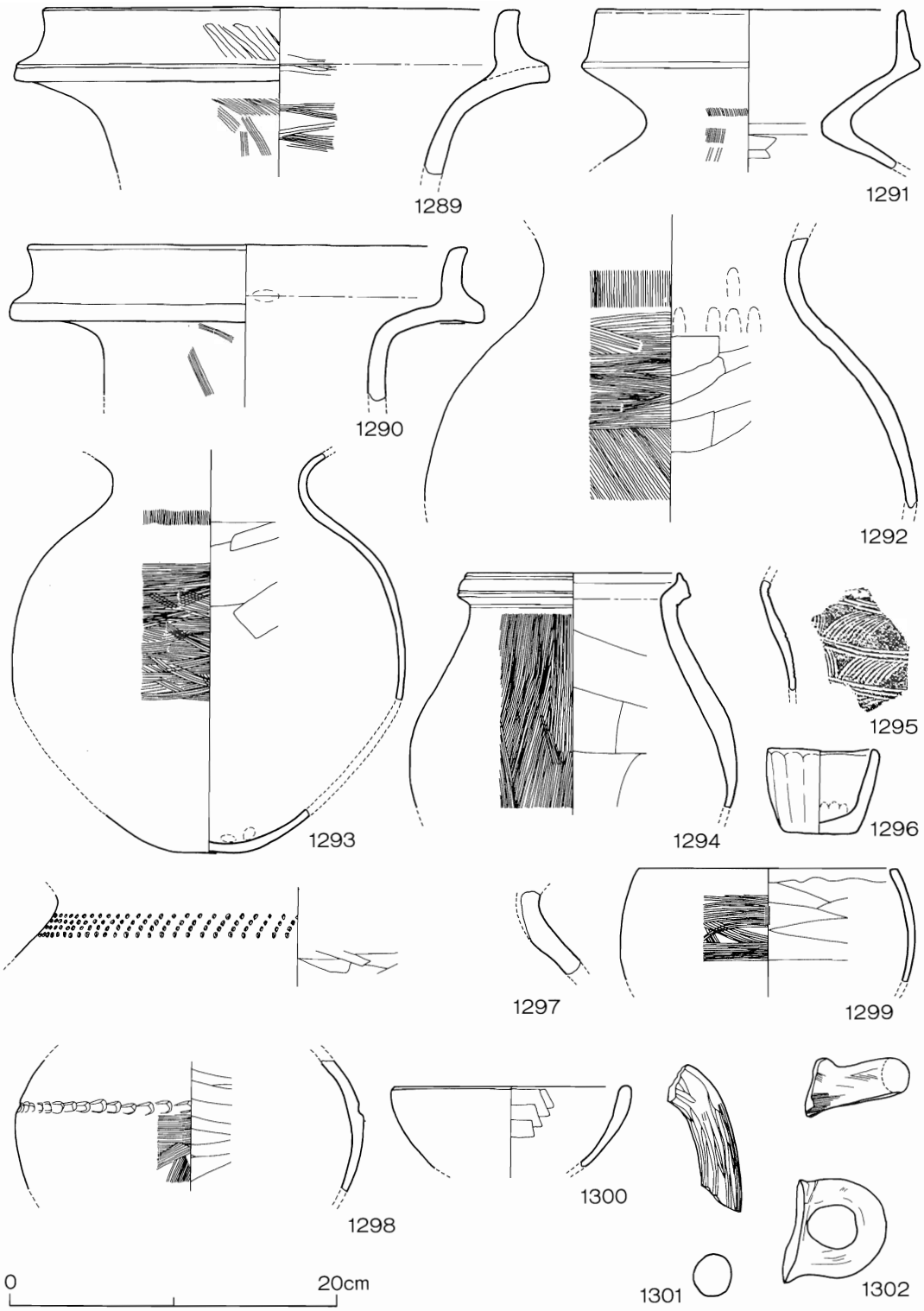
第99図　弥生土器実測図(79)



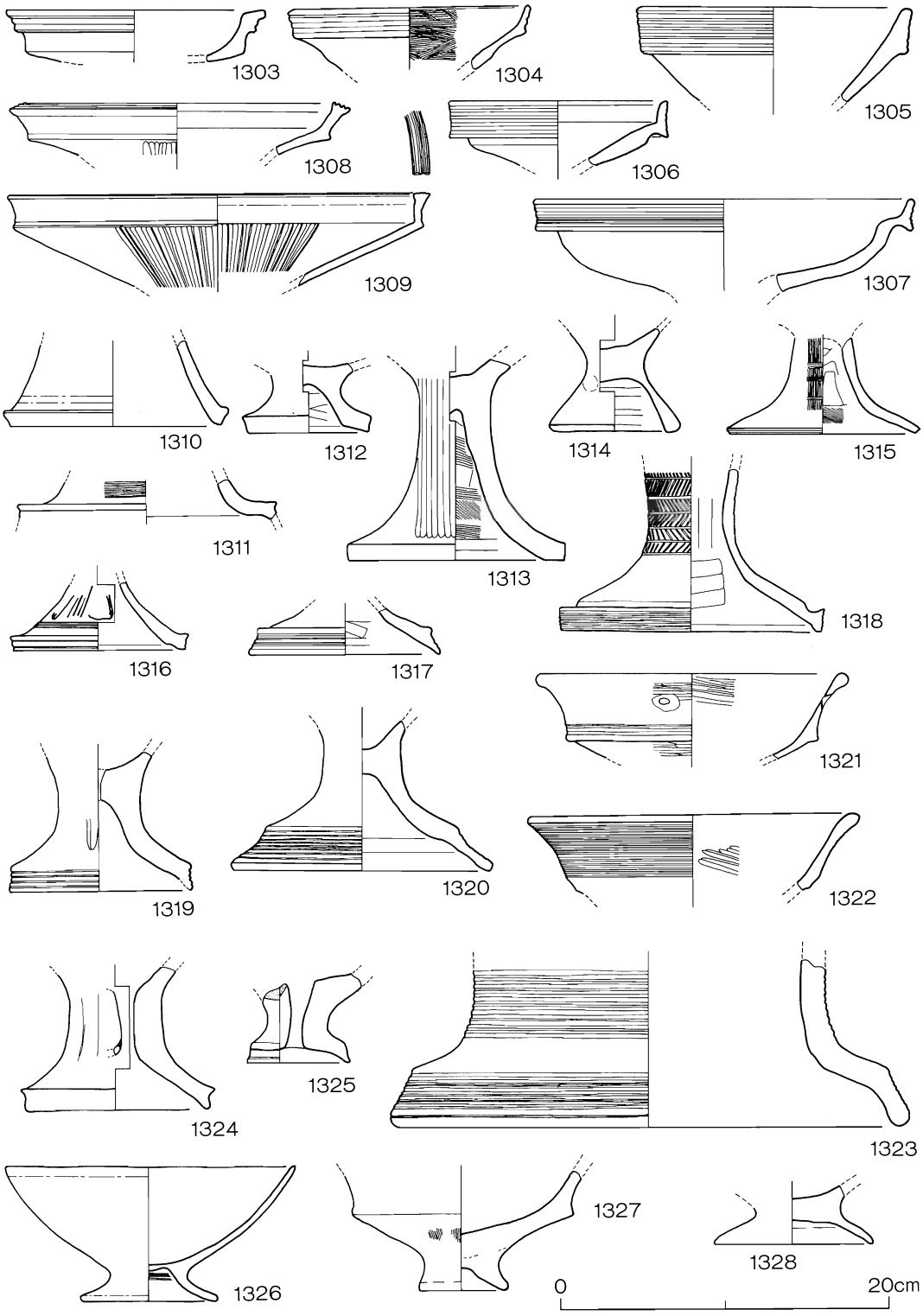
第100図　弥生土器実測図(80)



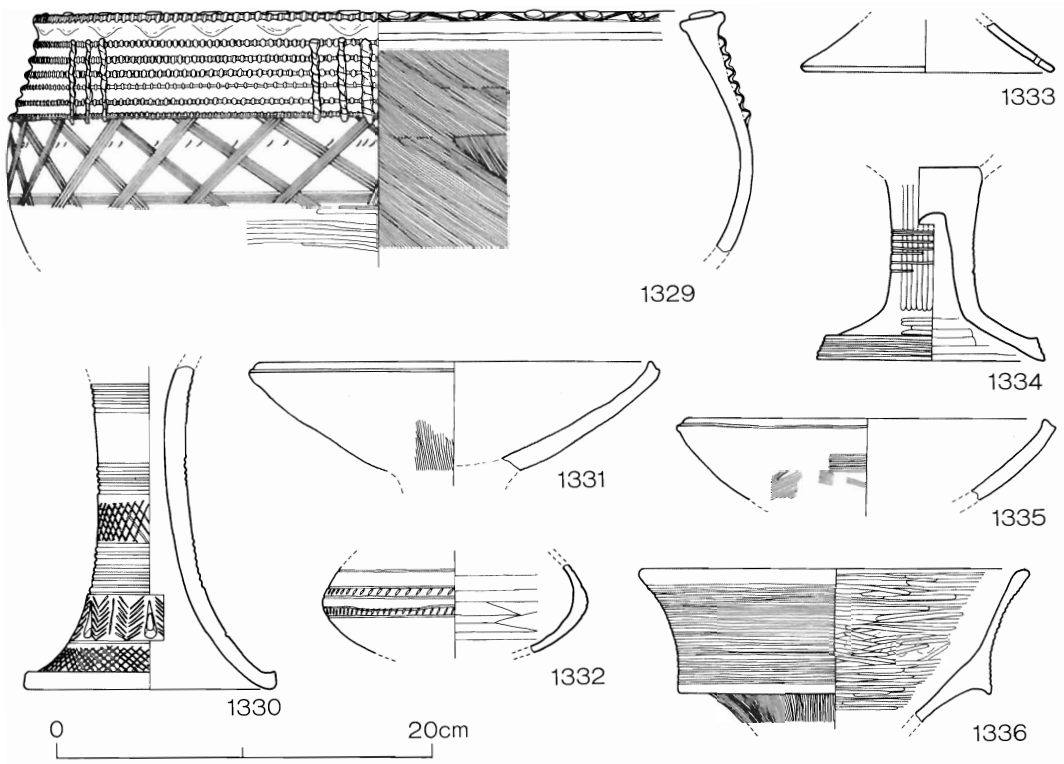
第101図　弥生土器実測図(81)



第102図　弥生土器実測図(82)



第103図　弥生土器実測図(83)



第104図　漆塗り土器実測図

g．朱塗土器　第104図1330～1332、1334～1336は朱塗土器である。1336が鼓形器台である以外は、いずれも高坏と考えられる。

h．その他　第102図1301、1302は把手。

註1　小田富士雄氏の御教示による。

2　島根・鳥取両県境の境水道に出土例がある。

3　柳浦俊一『朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅱ』島根県教育委員会　昭和62年3月

4　足立克己「布田遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅳ）』島根県教育委員会　昭和58年3月

5　山本　清「山陰」『新版考古学講座上』　昭和44年10月

6　東森市良他『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』島根県教育委員会　昭和55年3月

表1 弥生土器一覧表 (1)

挿図番号	器形	法量・特徴	出土層	備考(NKY)
21—1	甕	口径32	弥・中	1757
2	〃	〃 32	弥・中	1865
3	〃	〃 32	弥・中	945
4	〃	〃 24	弥・後	1377
5	〃	〃 22		692
6	〃	〃 28 刻目突帯	弥・中	1034
7	〃	〃 28 多条沈線	弥・中	1905
8	〃	〃 28 〃		1169
9	〃	〃 23	弥・中	1273
10	〃	〃 13	弥・中	1260
11	〃	〃 21	弥・後	1400
12	〃	〃 27	弥・中	1342
13	〃	〃 25		1386
14	〃	〃 14 波状文	弥・中	1622
15	〃	〃 20 刺突文	弥・後	1724
22—16	〃	〃 16	弥・中	1090
17	〃	鋸歯文		1303
18	〃	〃	弥・中	817
19	〃		弥・中	1699
20	〃		弥・中	1085
21	〃		弥・後	1234
22	〃	口径12	弥・中	1332
23	〃	〃 18 刺突文	弥・中	50
24	〃	〃 15 器高22	弥・中	355
25	〃	刺突文	弥・中	1461
26	〃	口径15	弥・中	214
27	〃	〃 25		1039
28	〃	〃 21 刺突文	弥・中	1821
29	〃	〃 18 刺突文	弥・中	1108
30	〃	〃 33	弥・後	1380
31	〃	〃 15	古 前	1694
32	〃	〃 16	弥・中	929
23—33	〃	〃 22		1255
34	〃	〃 27		955
35	〃	〃 23	弥中・SK01	731
36	〃	〃 19 刺突文	弥・中	208
37	〃	〃 20	弥・中	781
38	〃	〃 18	弥・中	232
39	〃	〃 20 刺突文	弥・中	1480
40	〃	〃 29	弥・中	57
41	〃	〃 24	弥・中	369
42	〃	〃 20	弥・中	404
43	〃	〃 24	弥・中	1116
44	〃	〃 22 刺突文	弥・中	960
45	〃	〃 21	弥・中	739
24—46	甕	口径20 刺突文	弥・中	269
47	〃	〃 30 〃	弥・中	768
48	〃	〃 27	弥・後	1363
49	〃	〃 34	弥・中	115
50	〃	〃 16	弥・中	68
51	〃	〃 25	弥・中	374
52	〃	〃 19	弥・後	925
53	〃	〃 20	弥・中	942
54	〃	〃 20		689
55	〃	〃 19	弥・中	67
56	〃	〃 18	弥・中	780
57	〃	〃 31	弥・中	785
58	〃	〃 24	弥中・SK01	736
25—59	〃	〃 31	弥・中	105
60	〃	〃 25	弥・中	411
61	〃	〃 23	弥・中	413
62	〃	〃 20	弥・中	1
63	〃	〃 20	弥・中	121
64	〃	〃 19	弥・中	27
65	〃	〃 19	弥中・貝層A	164
66	〃	〃 22	弥・中	78
67	〃	〃 23	弥・中	1065
68	〃	〃 18	弥・中	104
69	〃	〃 19	弥・中	858
70	〃	〃 19	弥・中	1422
71	〃	〃 19 刺突文	弥・中	306
72	〃	〃 20		742
26—73	〃	〃 20	弥中・貝層A	250
74	〃	〃 18	弥・中	308
75	〃	〃 18	弥・中	829
76	〃	〃 28	弥・中	216
77	〃	〃 16	弥中・貝層A	168
78	〃	〃 18	弥・中	420
79	〃	〃 17	弥中・貝層A	392
80	〃	〃 17	弥・中	1464
81	〃	〃 18	弥・中	741
82	〃	〃 17	弥・中	116
83	〃	〃 17	弥・中	1466
84	〃	〃 16	弥・中	118
85	〃	〃 17	弥・中	1474
86	〃	〃 18	弥・中	398
87	〃	〃 18	弥・中	1071
27—88	〃	〃 20 刺突文	弥・中	1882
89	〃	〃 16	弥・中	1487
90	〃	〃 19	弥中・貝層B	1500

表2 弥生土器一覧表 (2)

挿図番号	器形	法量・特徴	出土層	備考(NKY)
91	甕	口径21		1007
92	〃	〃 21	弥・中	1153
93	〃	〃 18		1646
94	〃	〃 14 刺突文	弥・中	24
95	〃	〃 14	弥・中	931
96	〃	〃 15	弥・中	96
97	〃	〃 16	弥・中	402
98	〃	〃 15		978
99	〃	〃 19	弥・中	255
100	〃	〃 14	弥・中	69
101	〃	〃 16 刺突文	弥・中	365
102	〃	〃 15	弥・中	1088
103	〃	〃 15	弥中・貝層A	162
104	〃	〃 15	弥・後	293
105	〃	〃 16		953
106	〃	〃 16	弥・中	1081
107	〃	〃 21		661
28— 108	〃	〃 36 刺突文	弥・中	1600
109	〃	〃 16 〃	弥・中	75
110	〃	〃 14	弥・中	282
111	〃	〃 27	弥・中	1018
112	〃	〃 24	弥・後	1887
113	〃	〃 23	弥・中	697
114	〃	〃 21 刺突文	弥・中	1520
115	〃	〃 21	弥・後	1378
116	〃	〃 24	弥中・貝層A	153
117	〃	〃 22	弥・中	838
118	〃	〃 21	弥・中	71
119	〃	〃 26	弥・中	231
120	〃	〃 24	弥・中	1155
29— 121	〃	〃 18 刺突文	弥・中	952
122	〃	〃 16		1009
123	〃	〃 12	弥・後	1310
124	〃	〃 18		1016
125	〃	〃 17	弥・中	1026
126	〃	〃 15	弥・中	1024
127	〃	〃 15	弥・中	273
128	〃	〃 17	弥・中	832
129	〃	〃 16	弥・中	419
130	〃	〃 16	弥・中	122
131	〃	〃 18	弥・中	275
132	〃	〃 14	弥・中	76
133	〃	〃 15 刺突文	弥・中	112
134	〃	〃 19	弥・中	954
135	〃	〃 20	弥・中	1069
136	甕	口径12	弥・後	1395
137	〃	〃 15	弥・中	244
138	〃	〃 12	弥・中	1822
139	〃	〃 22	弥・中	376
140	〃	〃 20	弥・後	1369
141	〃	〃 20	弥・中	172
142	〃	〃 17	弥・後	292
143	〃	〃 18	弥・後	362
30— 144	〃	〃 24	弥中・貝層A	276
145	〃	〃 19	弥・中	1671
146	〃	〃 22	弥・中	1251
147	〃	〃 18 刺突文	弥中・貝層	1049
148	〃	〃 20	弥・中	184
149	〃	〃 19	弥・後	1626
150	〃	〃 20	弥・中	1522
151	〃	〃 29	弥・中	81
152	〃	〃 25	弥・中	423
153	〃	〃 26	弥中・貝層A	254
154	〃	〃 28	弥・中	1092
155	〃	〃 21	弥・後	1393
156	〃	〃 21	弥・中	1451
157	〃	〃 22	弥中・貝層B	1494
158	〃	〃 20	弥・中	262
31— 159	〃	〃 28	弥・中	788
160	〃	〃 13	弥・中	114
161	〃	〃 27	弥・中	225
162	〃	〃 23	弥・後	54
163	〃	〃 20	弥・中	1868
164	〃	〃 21	弥中・貝層A	161
165	〃	〃 20 刺突文	弥・中	1074
166	〃	〃 20 〃	弥・中	274
167	〃	〃 20	弥・中	165
168	〃	〃 17	弥中・貝層A	288
32— 169	〃	刺突文		
170	〃	口径30	弥・中	728
171	〃	〃 13	弥・中	108
172	〃	〃 16	弥・中	430
173	〃	〃 15	弥・中	1429
174	〃	〃 20	弥中・貝層A	152
175	〃	〃 22	弥・中	23
176	〃	〃 16	弥・中	394
177	〃	〃 19	弥・中	1075
178	〃	〃 27	弥・中	70
179	〃	〃 22	弥・中	410
180	〃	〃 21	弥・中	1819

表3 弥生土器一覧表 (3)

挿図番号	器形	法量・特徴	出土層	備考(NKY)
33— 181	甕	口径20		346
182	〃	〃 20	弥・中	401
183	〃			
184	〃	口径21	弥・中	32
185	〃	〃 16	弥・後	1384
186	〃	〃 21		1863
187	〃	〃 22	弥・中	36
188	〃	〃 21	弥・中	220
189	〃	〃 19	弥・中	712
190	〃	〃 20 刺突文		677
191	〃	〃 21	弥・中	1083
192	〃	〃 22	弥・中	928
193	〃	〃 19	弥・中	111
194	〃	刺突文	弥・後	1197
34— 195	〃	口径17	弥・中	92
196	〃	〃 16	弥・中	437
197	〃	〃 17	弥・中	759
198	〃	〃 17	弥中・貝層A	156
199	〃	〃 19	弥・後	6
200	〃	〃 17	弥・中	95
201	〃	〃 19	弥・中	79
202	〃	〃 18	弥・中	169
203	〃	〃 12		888
204	〃	〃 16	弥・中	41
205	〃	〃 30		1001
206	〃	〃 19	弥・中	213
207	〃	〃 17	弥・中	815
208	〃	〃 28 刺突文	弥・中	382
209	〃	〃 18	弥・中	783
210	〃	〃 18		89
211	〃	〃 17	弥中・貝層B	1490
212	〃	〃 22	弥・中	408
213	〃	〃 24	弥・後	296
35— 214	〃	〃 28	弥中・SK01	735
215	〃	〃 27	弥・後	330
216	〃	〃 22	弥・中	237
217	〃	〃 22 刺突文	弥・中	284
218	〃	〃 25	弥・中	1778
219	〃	〃 20	弥・後	1362
220	〃	〃 24 刺突文	弥・中	1812
221	〃	〃 22	弥・後	320
222	〃	〃 16	弥・中	1587
223	〃	〃 17 刺突文	弥・中	242
224	〃	〃 18	弥中・貝層A	173
225	〃	〃 20	弥・中	1068
226	甕	口径16	弥・中	719
36— 227	〃	〃 16 口唇刻目	弥・中	77
228	〃	〃 20 〃	弥中・貝層B	1506
229	〃	〃 11 〃	弥・中	1040
230	〃	〃 19 〃	弥・後	803
231	〃	〃 18 〃	弥・中	868
232	〃	〃 13 刺突文	弥・中	1939
233	〃	〃 21 口唇刻目	弥・中	671
234	〃	〃 26 〃		1008
235	〃	〃 18 〃	弥・中	177
236	〃	〃 19 〃	弥中・貝層B	1505
237	〃	〃 16 〃	弥中・貝層	1045
238	〃	〃 15 刺突文	弥・中	307
239	〃	〃 19 刺突文	弥・中	259
240	〃	〃 24 〃	弥・中	74
241	〃	〃 22 口唇刻目	弥・中	187
242	〃	〃 23 〃	弥・中	1825
243	〃	〃 27 〃	弥・中	1243
244	〃	〃 22 〃	弥・中	417
37— 245	〃	〃 14 刺突文	弥・中	135＋159
246	〃	〃 23		834
247	〃	〃 19	弥・中	1575
248	〃	〃 27 刺突文	弥・中	941
249	〃	〃 23	弥・中	206
250	〃	〃 24	弥・中	175
251	〃	〃 23	弥・中	158
252	〃	〃 23	弥・中	1186
253	〃	〃 22	弥・中	1331
254	〃	〃 18	弥・中	55
255	〃	〃 21	弥・中	289
256	〃	〃 16	弥・中	1032
257	〃	〃 19	弥・中	1207
258	〃	〃 19	弥中・SD01	862
259	〃	〃 18	弥・中	170
260	〃	〃 16	弥・後	1315
38— 261	〃	〃 15 口唇沈線	弥・中	1423
262	〃	〃 16 〃		1000
263	〃	〃 14 〃	弥・中	1070
264	〃	〃 18 〃	弥・後	912
265	〃	〃 14 〃	弥・中	1067
266	〃	〃 16 〃	弥・中	8613
267	〃	〃 15 〃	弥・後	98
268	〃	〃 17 〃	弥・中	200
269	〃	〃 16 〃	弥・後	1361
270	〃	〃 17 〃	弥・中	399

表4 弥 生 土 器 一 覧 表 (4)

挿図番号	器 形	法 量・特 徴	出 土 層	備 考 (NKY)
271	甕	口径17 口唇沈線	弥・中	1959
272	〃	〃 27 〃		1149
273	〃	〃 18 〃	弥・中	166
274	〃	〃 10 〃	弥・中	1601
275	〃	〃 23 〃	弥・中	1021
276	〃	〃 16 刺突文	弥・中	60
277	〃	〃 16 口唇沈線	弥・中	1418
278	〃	〃 18 〃	弥・後	1285
279	〃	〃 15 〃	弥・後	1239
280	〃	〃 17 〃	弥・後	1224
281	〃	〃 29 〃	弥・中	1257
39— 282	〃	〃 25 口唇沈線	弥・中	283
283	〃	〃 24 〃	弥・中	799
284	〃	〃 23 〃	弥・中	1597
285	〃	〃 17 〃	弥・中	128
286	〃	〃 16 〃	弥・後	1307
287	〃	〃 18 〃	弥・中	1435
288	〃	〃 19 〃	弥・中	1249
289	〃	〃 21 〃	弥・中	1327
290	〃	〃 18 〃	弥・後	350
291	〃	〃 15 〃	弥・後	1388
292	〃	〃 16 〃	弥・後	1399
293	〃	〃 13 〃	弥・後	1562
294	〃	〃 15 〃	弥・中	702
295	〃	〃 19 〃	弥・中	1264
296	〃	〃 20 〃	弥・後	1938
297	〃	〃 20 〃	弥・中	1033
40— 298	〃	〃 13	弥・中	1037
299	〃	〃 19	弥・後	1163
300	〃	〃 18 口唇沈線	弥・中	391
301	〃	〃 13 刺突文	弥・後	1927
302	〃	〃 19 口唇沈線	弥・後	1390
303	〃	〃 18 〃	弥・中	1774
304	〃	〃 16 〃	弥・中	1653
305	〃	〃 16 〃	弥・中	867
306	〃	〃 12 〃	弥・中	1241
307	〃	〃 19 〃	弥・後	1410
308	〃	〃 14 〃	弥・中	1261
309	〃	〃 14 〃	弥・後	1303
310	〃	〃 14 〃	弥後・貝層E	1565
311	〃	〃 18 〃	弥後・貝層E	1569
312	〃	〃 27 口唇刻目	弥・後	322
313	〃	〃 26 〃	弥・後	326
314	〃	〃 15 〃	弥・中	1788
315	〃	〃 23 〃	弥・後	318
41— 316	甕	口径27 口唇刻目	弥・後	333
317	〃	〃 27 〃	弥・中	298
318	〃	〃 19 〃	弥・後	1374
319	〃	〃 18 〃	弥・中	1192
320	〃	〃 24 〃	弥・中	248
321	〃	〃 15 〃	弥・中	1110
322	〃	〃 15 〃	弥・中	1072
323	〃	〃 22 〃	弥・中	5
324	〃	〃 14 〃	弥・中	1427
325	〃	〃 14 〃	弥・中	1325
326	〃	〃 25 〃	弥・中	229
327	〃	〃 19 〃	弥中・SZ017	1666
328	〃	〃 21 〃	弥・中	1877
329	〃	〃 24 〃	弥・中	784
330	〃	〃 17 刺突文	弥・中	1596
331	〃	〃 18 口唇刻目	弥・中	968
332	〃	〃 17 〃	弥・中	1786
333	〃	〃 19 〃	弥・中	1424
42— 334	〃	底部径 6 底穿孔	弥・中	669
335	〃	〃 6 〃	弥・後	30
336	〃	〃 6 〃	弥・中	375
337	〃	〃 6 〃	弥中・貝層A	218
338	〃	〃 6 〃	弥・中	85
339	〃	〃 5 〃	弥・中	14
340	〃	〃 6 〃	弥・後	1219
341	〃	〃 8 〃		839
342	〃	〃 5 〃	弥・中	1706
343	〃	〃 〃		
344	〃	〃 6 〃	弥・後	1364
345	〃	〃 5 〃		357
346	〃	〃 5 〃	弥・中	1962
43— 347	〃	〃 7 〃	弥・中	1947
348	〃	〃 5 〃	弥・後	1299
349	〃	〃 6 〃	弥・中	1618
350	〃	〃 5 〃	弥・中	18
351	〃	〃 6 〃	弥・中	1892
352	〃		弥・中	962
353	〃	底部径 7	弥・中	1584
354	〃	〃 6	弥・中	19
355	〃	〃 6	弥・後	337
356	〃	〃 5		1232
357	〃	〃 6	弥・中	359
358	〃	〃 7	弥・後	1796
359	〃	〃 7	弥・中	1791
360	〃	〃 6	弥・中	129

表5 弥生土器一覧表 (5)

挿図番号	器形	法量・特徴	出土層	備考(NKY)
361	甕	底部径 8	弥・中	1837
362	〃	〃 6	弥・後	1320
363	〃	〃 7	弥・中	1875
364	〃	〃 6	弥・後	338
365	〃	〃 6	弥・後	1668
366	〃	〃 6 底穿孔	弥・後	386
367	〃	〃 6		1700
368	〃	〃 6		1802
369	〃	〃 7		1800
370	〃	〃 5		1287
371	〃	〃 7	弥・中	792
372	〃	〃 7	弥・後	1339
373	〃		弥・中	1866
374	〃	底部径 9	弥・中	1940
375	〃	〃 6	弥・後	1628
376	〃	〃 7	弥・後	1469
377	〃	〃 8	弥・後	328
378	〃	〃 8	弥・中	1901
379	〃	〃 10	弥・後	1929
380	〃		弥・中	1603
381	〃		弥・中	302
382	〃	底部径 7	弥中・SZ016	1906
44— 383	壺			96
384	〃	口径17	弥・後	1735
385	〃	〃 16	弥・後	1392
386	〃	〃 17	弥・中	1814
387	〃	〃 31 頸部突帯	弥・中	1831
388	〃	〃 27 〃	弥・中	1902
389	〃	〃 19 〃	弥・後	332
390	〃	〃 32 〃	弥・後	4
391	〃	〃 32 〃	弥・後	1385
392	〃	〃 28 〃	弥・中	1183
393	〃	〃 18 〃	弥・中	90
394	〃	〃 18 〃	弥・後	1208
395	〃	〃 18 〃	弥・中	667
45— 396	〃	〃 24 頸部突帯	弥・中	797
397	〃	〃 21 〃	弥・中	329
398	〃	〃 17 〃	弥・中	73
399	〃	〃 24 〃	弥・後	370
400	〃	〃 22 〃	弥・中	72
401	〃	〃 21 〃	弥・後	341
402	〃	〃 25 〃	弥・中	1878
403	〃	〃 26 〃	弥・中	1456
404	〃	〃 33 〃	弥・中	1421
405	〃	〃 18 〃	弥・中	52
45— 406	壺	口径19 頸部突帯	弥・中	45
407	〃	〃 28 〃	弥・後	1340
408	〃	〃 24 〃	弥・中	46
409	〃	〃 24 〃	弥・中	795
410	〃	〃 18 〃	弥・中	961
46— 411	〃	〃 25 頸部突帯	弥・中	1516
412	〃	〃 28 〃	弥・中	709
413	〃	〃 22 〃	弥・中	253
414	〃	〃 25 〃	弥・後	1397
415	〃	〃 24 〃	弥・後	1624
416	〃	〃 19 〃	弥中・SZ014	1921
417	〃	〃 21 〃	弥・後	1381
418	〃	〃 17 〃	弥・後	1349
419	〃	〃 20 〃	弥・中	1076
420	〃	〃 21 〃		1004
421	〃	〃 19 〃	弥・中	717
422	〃	〃 24 〃	弥・後	1371
47— 423	〃	〃 33 頸部突帯	弥・中	31＋198
424	〃	〃 24 〃	弥・中	1949
425	〃	〃 21 〃	弥・中	1881
426	〃	〃 26 〃	弥・中	1481
427	〃	〃 20 〃	弥・中	97
428	〃	〃 21 〃	弥・中	43
429	〃	〃 19 〃	弥・中	1915
48— 430	〃	〃 22 頸部突帯	弥中・貝層B	1514
431	〃	〃 26 〃	弥・中	1134
432	〃	〃 22 〃	弥・後	1321
433	〃	〃 22 〃	弥・中	1425
434	〃	〃 21 〃	弥・中	263
435	〃	〃 19 〃	弥・後	(58＋3)
436	〃	〃 21 〃	弥・後	1221
437	〃	〃 19 〃	弥・中	725
438	〃	〃 20 〃	弥・中	1573
439	〃	〃 25 〃	弥・中	1954
440	〃	底部径 6 底穿孔	弥・中	1707
441	〃	〃 8		665
442	〃	〃 8	弥中・貝層	1060
443	〃	〃 7	弥・中	776
444	〃	〃 5	弥中・貝層A	180
445	〃	〃 7	弥・後	1318
49— 446	〃	口径28 頸部突帯	弥・後	51
447	〃	〃 26 〃	弥・中	1404
448	〃	〃 33 貼付文	弥・中	1426
449	〃	〃 30 口唇刻目	弥・中	895
450	〃	〃 24 〃	弥・後	1322

表6 弥 生 土 器 一 覧 表 (6)

挿図番号	器 形	法 量・特 徴	出 土 層	備 考 (NKY)
49— 451	壺	口径27 口唇刻目	弥・中	1473
452	〃	〃 28 〃	弥・後	1635
453	〃	〃 30 貼付文	弥・後	1182
454	〃	〃 34 〃	弥・中	1645
455	〃	格子文	弥・中	1294
456	〃	波状沈線文	弥・中	65
457	〃		弥・中	124
458	〃	渦巻状貼付文	弥・後	1705
459	〃	斜格子文	弥・中	703
50— 460	〃	口径12 口唇沈線	弥・後	1218
461	〃	〃 16 〃	弥・中	1259
462	〃	〃 14 貼付文	弥・後	327
463	〃	〃 9 口唇沈線	弥・中	1270
464	〃	〃 16 斜格子文	弥・中	1430
465	〃	〃 13 口唇沈線		345
466	〃	〃 17 〃	弥・中	1434
467	〃	〃 21 〃	弥・中	1419
468	〃	〃 25 〃	弥・後	1206
469	〃	〃 17 頸部突帯	弥・後	1623
470	〃	〃 16 〃	弥・後	1237
471	〃	〃 26 〃	弥・中	1952
472	〃	〃 21 〃	弥・後	1639
473	〃	〃 16 口唇刻目	弥・中	1036
474	〃	〃 17 〃	弥・中	1484
475	〃	〃 20 〃	弥・中	1335
476	〃	〃 21 貼付文	弥・中	698
477	〃	〃 11 口唇刻目	弥・中	1604
478	〃	〃 18 頸部突帯	弥・中	1403
479	〃	〃 18 〃	弥・後	1156
480	〃	〃 26 〃	弥・中	699
51— 481	〃	〃 9 頸部穿孔	弥・中	80
482	〃	〃 10 〃		1856
483	〃	〃 12 沈線文	弥中・貝層A	287
484	〃	〃 16 斜格子文	弥・中	1720
485	〃	〃 29 〃	弥・中	1582
486	〃	〃 22 口唇刻目		1274
487	〃	〃 21 〃	弥・中	1054
488	〃	〃 17 〃	弥・中	1066
489	〃	〃 21 斜格子文	弥・中	1784＋1785
490	〃	〃 14	弥・後	1383
491	〃	〃 11	弥・中	1104
492	〃	〃 12 刺突文	弥・中	1897
193	〃	〃 12 〃	弥・中	1903
494	〃	〃 9	弥・中	361
495	〃	〃 10 口唇刻目	弥・中	1022

挿図番号	器 形	法 量・特 徴	出 土 層	備 考 (NKY)
51— 496	壺	口径 9	弥・中	816
497	〃	〃 12 口唇刻目	弥・中	1006
498	〃	〃 11	弥・中	1462
499	〃	〃 10	弥・中	1560
500	〃	〃 14 口唇沈線	弥・中	1598
52— 501	〃	〃 11	弥・中	314
502	〃	〃 16 口唇刻目	弥中・貝層	1046
503	〃	〃 15 〃	弥中・貝層B	1507
504	〃	〃 13 〃		256
505	〃	〃 18 〃	弥・後	1324
506	〃	〃 16	弥・中	412
507	〃	〃 24 斜格子文	弥・中	720
508	〃	〃 19 口唇刻目	弥・中	34
509	〃	〃 14 〃	弥・中	323
510	〃	〃 21 〃	弥中・SK01	729
511	〃	〃 15 口唇沈線	弥・中	710
512	〃	〃 29 綾杉文	弥・中	1537
513	〃	〃 28 口唇刻目	弥・中	760
514	〃	〃 17 〃	弥・中	132
515	〃	〃 18 〃		662
516	〃	〃 19 〃		937
517	〃	〃 20 頸部突帯		948
518	〃	〃 40 〃	弥・中	1729
519	〃	〃 25 〃	弥・中	1019
53— 520	〃	〃 15 刺突文	弥・中	904
521	〃	〃 15	弥・中	163
522	〃	〃 15	弥・後	1309
523	〃	〃 20		1005
524	〃	〃 12	弥・中	251
525	〃	〃 12	弥・中	266
526	〃	〃 15	弥・中	766
527	〃	〃 15	弥・中	366
528	〃	〃 18	弥・中	756
529	〃	〃 14	弥・中	183
530	〃	〃 25	弥・中	1077
531	〃	〃 18	弥・中	133
532	〃	〃 15	弥・中	189
533	〃	〃 16	弥・中	221
534	〃	〃 21 刺突文	古 前	1680
535	〃	〃 16	弥・中	1817
536	〃	口唇刻目		
537	〃	口径28 頸部突帯	弥・中	1305
538	〃	〃 24 斜格子文	弥・中	1292
539	〃	〃 21 口唇刻目		999
540	〃	〃 34 口唇沈線		1143

表7 弥 生 土 器 一 覧 表 (7)

挿図番号	器 形	法 量・特 徴	出 土 層	備 考 (NKY)
54— 541	壺	口径10 器高29	弥・中	1346
542	〃	〃 12	弥・後	1401
543	〃	〃 11 刺突文	弥・後	1740
544	〃	〃 16 〃	弥・中	1862
545	〃	〃 16	弥・中	696
546	〃	〃 18	弥・中	1448
547	〃	〃 16	弥・中	281
548	〃			
549	〃	口径18	弥・中	1301
550	〃	〃 14	弥・中	1792
551	〃	〃 15 刺突文	弥・中	1829
552	〃	〃 17		279
553	〃	〃 17	弥・中	290
554	〃	〃 24	弥・中	1073
555	〃	〃 18		117
55— 556	〃	〃 17 斜格子文	弥・中	1961
557	〃	〃 16 〃	弥・中	847
558	〃	〃 13 刻目突帯	弥・中	1486
559	〃	〃 23 〃	弥・後	1245
560	〃	〃 30 〃	弥中・貝層B	1501
561	〃	〃 19 〃	弥・中	1159
562	〃	〃 19 〃		1809
563	〃	〃 25 〃	弥・後	39
564	〃	〃 23 〃	弥・後	1571
565	〃	〃 14 貼付文	弥・中	1654
566	〃	〃 16 〃	弥・中	119
567	〃	〃 31 突帯	弥・中	53
568	〃	〃 23 〃	弥・後	368
569	〃	〃 14 刻目突帯	弥・中	240
56— 570	〃	〃 24 頸部突帯	弥・中	1526
571	〃	〃 20 刻目突帯	弥・中	265+25
572	〃	〃 24 〃	弥・中	235
573	〃	〃 18 〃	弥・中	1593
574	〃	〃 16 〃	弥・中	1956
575	〃	〃 12 〃	弥・中	120
576	〃	〃 16 斜格子文		1356
577	〃	〃 24 内面沈線	弥・後	1228
578	〃	〃 23 斜格子文	弥・中	826
579	〃	〃 22 口唇沈線	弥・中	794
580	〃	〃 27 〃	弥・中	1184
581	〃	〃 26 口唇刻目	弥・中	1799
582	〃	〃 29 口唇沈線	弥・中	1820
583	〃	〃 26 刻目突帯	弥・中	1524
584	〃	〃 34 口唇沈線	古・前	1629
585	〃	〃 29 〃		1542

挿図番号	器 形	法 量・特 徴	出 土 層	備 考 (NKY)
56— 586	壺	口径19 口唇刻目	弥・中	1718
57— 587	〃	〃 28 口唇沈線	弥・中	127
588	〃	〃 16 〃	弥・後	1632
589	〃		弥・中	1606
590	〃	口径33 口唇沈線	弥・中	1276
591	〃	〃 26 〃	弥・中	1923
592	〃	〃 21 〃	弥・中	825
593	〃	〃 22 〃	弥・中	1529
594	〃	〃 29 〃	弥・中	772
595	〃	〃 30 〃	弥・中	179
596	〃	〃 27 〃	弥・中	1438
597	〃	〃 26 〃	弥中・SD01	863
598	〃	〃 18 頸部突帯	弥・中	1445
58— 599	〃	〃 50 刻目突帯	弥・中	1971+716 +1677
600	〃	〃 44 〃	弥・中	1873
601	〃	〃 32 〃	弥・中	823
602	〃	〃 36 斜格子文	弥・後	1171
603	〃	〃 7 〃	弥・中	1041
604	〃	〃 34 〃	弥・中	1203
605	〃	〃 28 波状沈線	弥・中	1968
606	〃	〃 30 斜格子文	弥・後	1633
607	〃	〃 30 〃	弥・中	791
608	〃	〃 28 〃	弥・中	1650
609	〃	〃 32 口唇刻目	弥・中	1428
610	〃	〃 26 〃	弥・中	1437
611	〃	〃 26 斜格子文	弥・中	1592
59— 612	〃	〃 16	弥中・貝層A	155
613	〃	〃 17	弥中・貝層A	280
614	〃	〃 11 器高16	弥・中	1787
615	〃	〃 16	弥・中	303
616	〃	〃 19	弥・中	400
617	〃	〃 22 頸部突帯	弥・中	246
618	〃	〃 17 〃	弥・中	694+771
619	〃	〃 21 〃	弥・中	695
620	〃	〃 23 〃	弥・後	1741
621	〃	〃 22 〃	弥・中	1576
622	〃	〃 26 口唇沈線	弥・中	855
623	〃	〃 24 〃	弥・後	351
624	〃	〃 23 〃	弥・中	1477
625	〃	〃 32 〃	弥・後	915
626	〃	〃 17 〃	弥・中	1038
627	〃	〃 23 〃	弥・後	1391
628	〃	〃 34 〃	弥・後	342
60— 629	〃	〃 36	弥・後	1742
630	〃	〃 29 斜格子文	弥・中	812

表8 弥 生 土 器 一 覧 表 (8)

挿図番号	器 形	法 量・特 徴	出 土 層	備 考 (NKY)
60— 631	壺	口径27	弥・中	396
632	〃	〃 16 頸部穿孔	弥・中	1945
633	〃		弥・中	675
634	〃	口径34	弥・後	1357
635	〃	〃 28 斜格子文	弥・中	21
636	〃	〃 29	弥・中	1472
637	〃	〃 35	弥・後	1352
638	〃	〃 20		1229
639	〃	〃 25 斜格子文	弥・後	1172
640	〃	〃 23 〃	弥・中	802
641	〃	〃 18 〃	弥中・貝層A	228
642	〃	〃 26 〃	弥・後	1354
643	〃	〃 〃		
644	〃	〃 28 〃	弥・中	403
645	〃	〃 27 〃	弥・中	82
61— 646	〃	〃 17	弥・中	245
647	〃	〃 24 斜格子文	弥・中	934
648	〃	〃 22 〃	弥中・貝層B	1503
649	〃	〃 21 山形沈線	弥・中	1884
650	〃	〃 20	弥中・SK01	730
651	〃	〃 20	弥・中	977
652	〃	〃 28 頸部突帯	弥・中	110
653	〃	〃 28	弥・中	773
654	〃	〃 16	弥・中	211
655	〃	〃 18	弥・中	37
656	〃	〃 15	弥・中	260
657	〃	〃 26	弥・中	1459
658	〃	〃 22 斜格子文	弥中・貝層	1047
659	〃	〃 22	弥・中	1267
660	〃	〃 19	弥・中	857
661	〃	〃 16	弥・中	1453
662	〃	〃 21		1003
663	〃			
664	〃	口径24	弥・中	252
665	〃	〃 38	弥・中	663
666	〃	〃 20	弥・後	1227
667	〃	〃 14 頸部突帯	弥・中	241
668	〃	〃 14	弥・中	770
62— 669	〃	〃 21 斜格子文	弥・中	93
670	〃	〃 24 〃	弥・中	723
671	〃	〃 22 〃		87
672	〃	〃 25 〃	弥・中	943
673	〃	〃 30 〃	弥・中	726
674	〃	〃 21 〃	弥中・貝層A	222
675	〃	〃 24 〃	弥中・貝層B	1510
62— 676	壺	口径32 斜格子文		1141
677	〃	〃 28 〃	弥・後	1358
678	〃	〃 23 〃	弥・中	212
679	〃	〃 32 〃		
680	〃	〃 22 〃	弥・中	91
681	〃	〃 31 〃	弥・中	1483
682	〃	〃 21 〃	弥・中	1853
63— 683	〃	〃 32 斜格子文	弥・中	425
684	〃	〃 27 〃	弥・中	268
685	〃	〃 30 〃	弥・中	102
686	〃	〃 29 〃	弥・中	397
687	〃	〃 29 〃	弥・中	243
688	〃	〃 26 〃	弥・中	1871
689	〃	〃 32 〃		1511
690	〃	〃 23 〃	弥・中	219
691	〃	〃 23 〃	弥・中	748
692	〃	〃 23 〃	弥・中	134
693	〃	〃 27	弥・中	705
694	〃	〃 23 斜格子文	弥・後	1366
695	〃	〃 27 〃	弥・中	44
64— 696	〃	〃 48 突帯文	弥中・SZ014	584
697	〃	〃 29	弥中・貝層B	1492
698	〃	〃 20	弥・中	774
699	〃	〃 21	弥・後	1747
700	〃	〃 30	弥・中	1195
701	〃	〃 29	弥・中	762
702	〃	〃 20	弥中・SK01	738
65— 703	〃	〃 23	弥・中	389
704	〃	〃 25	弥・中	381
705	〃	〃 29	弥・中	727
706	〃	〃 24	弥・後	9
707	〃	〃 28 突帯文	弥・中	1976
708	〃	〃 21	弥・中	354
709	〃	〃 26	弥・中	22
710	〃	〃 28	弥・中	1960
711	〃	〃 24	弥・中	264
712	〃	〃 27	弥・中	305
713	〃	〃 20	弥・中	348
714	〃	〃 29	弥・中	1719
715	〃	〃 21	弥・後	1350
716	〃	〃 15	弥・中	347
717	〃	〃 21	弥・中	1080
718	〃	〃 22	弥・中	1044
719	〃	〃 17	弥・中	1683
66— 720	〃	〃 20	弥・中	261

表9 弥生土器一覧表 (9)

挿図番号	器形	法量・特徴	出土層	備考 (NKY)
66— 721	壺	口径27	弥・中	1452
722	〃	〃 27	弥・中	715
723	〃	〃 29	弥中・貝層A	271
724	〃	〃 22	弥・中	353
725	〃	〃 30	弥・後	317
726	〃	〃 24	弥・中	1790
727	〃	〃 31	弥・中	1609
728	〃	〃 23	弥・中	1467
729	〃	〃 25	弥・後	1225
730	〃	〃 26	弥・中	714
731	〃	〃 27	弥・中	1893
67— 732	〃	〃 17	弥・後	1226
733	〃	〃 31	弥・中	787+674
734	〃	〃 37	弥・中	1196
735	〃	〃 45	弥・中	1607
736	〃	〃 26	弥・中	1768
737	〃	〃 23 貼付文	弥・中	1846
738	〃	〃 24	弥・後	29
739	〃	〃 21	弥・中	871・872
740	〃	〃 22	弥・中	711
741	〃	〃 22		1688
68— 742	〃	〃 14 半々同心円文	弥・中	1951
743	〃	〃 27	弥・中	1180
744	〃	〃 17	弥・中	393
745	〃	〃 19		902
746	〃	〃 29	弥・中	721
747	〃	〃 13 器高22 胴部穿孔	弥・中	722
748	〃	〃 11 〃 22	弥・中	352
749	〃	〃 17	弥中・SD01	865
750	〃	〃 19	弥・中	380
751	〃	〃 30 押捺突帯	弥・中	1835
752	〃	〃 26	弥・中	939
753	〃	〃 15	弥・後	1387
754	〃	〃 18	弥・中	1685
755	〃	〃 20	弥・中	64
756	〃	〃 26	弥・中	670
69— 757	〃	頸部多条突帯	弥・中	372
758	〃		弥中′SZ017	1676
759	〃	頸部多条突帯	弥・後	1665
760	〃	頸部多条刻目突帯	弥・後	1669
761	〃	〃	弥中・貝層	1058
762	〃	〃	弥・中	301
763	〃	〃		414
764	〃		弥・後	1769
765	〃		弥・後	1644
69— 766	壺	頸部押捺突帯	弥・中	294
767	〃	〃	弥・中	840
768	〃	〃	弥・中	1519
70— 769	〃	波状多条沈線	弥中・貝層A	249
770	〃	〃	弥・中	1832
771	〃	多条沈線	弥・中	160
71— 772	〃	波状多条沈線文	弥・後	1675
773	〃	〃	弥・中	1475
774	〃	〃	弥・中	1084
775	〃	〃	弥・中	106
776	〃	〃	弥・中	1979
777	〃	底部径11	弥・中	1444
778	〃	波状多条沈線	弥・中	1838
72— 779	〃	多条沈線	弥・中	1840
780	〃	沈線文・貼付文	弥・中	1122
781	〃	〃	弥・中	1823
782	〃	頸部刻目突帯	弥・中	1330
783	〃		弥・中	1485
784	〃	斜格子条痕	弥・中	1631
785	〃	斜格子文	弥・中	1174
786	〃	波状文	弥・中	191
787	〃	〃	弥中・貝層	1061
788	〃	〃	弥中・貝層A	300
789	〃	綾杉文		949
790	〃	〃	弥・中	1772
791	〃	綾杉文・刺突文	弥・中	424
792	〃	条痕文・	弥・中	800
793	〃		弥・後	1191
73— 794	〃	綾杉多条沈線文	弥・中	1978
795	〃	斜格子多条沈線文	弥・中	1900
796	〃	〃	弥・中	1975
797	〃	〃	弥・中	33
798	〃	〃		1854
74— 799	〃	斜格子多条沈線文	弥・中	331
800	〃	半同心円文		1785+1784
801	〃	刺突文	弥・中	1805
802	〃		弥・後	1667
803	〃	刺突文	弥・中	421
804	〃	刺突文、沈線	弥・中	1730
805	〃	綾杉文	弥・後	1224
75— 806	〃	底部径10 刺突文	弥・中	1701
807	〃	〃	弥・中	1830
808	〃	〃	弥・後	1212
809	〃	〃	弥・後	1304
76— 810	〃	刺突文	弥・中	1589

表10 弥 生 土 器 一 覧 表 (10)

挿図番号	器 形	法 量・特 徴	出 土 層	備 考 (NKY)
76— 811	壺	刺突文	弥・後	1663
812	〃	底部径11 〃	弥・中	1759
77— 813	〃	〃 11 刺突文	弥・中	1848
814	〃	〃 7	弥・中	1946
815	〃	〃 6	弥・中	88
816	〃	〃 7	弥・中	1281
817	〃	〃 8		1298
818	〃	〃 20		1057
819	〃	〃 6	弥・中	1017
820	〃	〃 7		779
821	〃	〃 6	弥・中	1015
822	〃	〃 5	弥・中	1446
823	〃			107
78— 824	〃	底部径13	弥・中	1824
825	〃	〃 7	弥・中	1953
826	〃	〃 10	弥・中	233
827	〃	〃 7	弥・中	285
828	〃	〃 7	弥・中	384
829	〃	〃 7	弥・中	286
830	〃	〃 18	弥・中	1859
831	〃	〃 9	弥・中	416
832	〃	〃 9	弥・中	304
833	〃	〃 14	弥・中	1861
834	〃	〃 6	弥・中	209
79— 835	甕	〃 7	弥・中	1030
836	〃	〃 8	弥・中	778
837	〃	〃 5	弥・後	56
838	〃	〃 6	弥・中	849
839	〃	〃 7	弥・後	1605
840	〃	〃 8	弥・中	747
841	〃	〃 7	弥・中	1277
842	〃	〃 8	弥・中	1328
843	〃	〃 6	弥・中	247
844	〃	〃 7	弥・中	35
845	〃	〃 6	弥・後	1202
846	〃	〃 10	弥・中	1864
847	〃	〃 8	弥・後	1382
848	〃	〃 9	弥・中	1282
849	〃	〃 13	弥・中	1279
850	〃	〃 9	弥・後	1296
851	〃	〃 9	弥・後	1314
852	〃	〃 7	弥・中	746
853	〃	〃 7	弥・中	944
854	〃	〃 10	弥・中	1254
855	〃	〃 5	弥中・貝層A	199
79— 856	甕	底部径 6	弥・中	319
857	〃	〃 7	弥・後	1162
858	〃	〃 7		197
80— 859	〃	〃 10	弥・中	321
860	〃	〃 6	弥・中	336
861	〃	〃 8	弥・中	196
862	〃	〃 8	弥・後	1306
863	〃	〃 7	弥中・貝層A	185
864	〃	〃 5	弥・中	204
865	〃	〃 6	弥中・貝層A	195
866	〃	〃 6		344
867	〃	〃 7	弥・中	239
868	〃	〃 5	弥・中	1329
869	〃	〃 6	弥中・貝層A	181
870	〃	〃 7	弥中・貝層A	188
871	〃	〃 8	弥・中	451
872	〃	〃 12	弥・中	20
873	〃	〃 6	弥・中	777
874	〃	〃 11	弥・中	207
875	〃	〃 8	弥・後	1345
876	〃	〃 6	弥・中	42
877	〃	〃 6	弥・中	316
878	〃	〃 6	弥・中	1521
81— 879	壺	〃 9	弥・中	215
880	〃	〃 7	弥・中	1828
881	〃	〃 8	弥・中	309
882	〃	〃 7	弥・中	193
883	〃	〃 7	弥・中	335
884	〃	〃 8	弥・中	130
885	〃	〃 6		880
886	〃	〃 7	弥・中	270
887	〃	〃 8	弥・後	1313
888	〃	〃 7	弥・中	379
889	〃	〃 7	弥・中	334
890	〃	〃 5	弥・中	315
891	〃	〃 6	弥・中	1087
892	〃	〃 10	弥・後	1311
893	〃	〃 7	弥中・SK01	733
894	〃	〃 5		708
895	〃	〃 9	弥中・貝層A	205
896	〃	〃 5	弥中・貝層A	202
897	〃	〃 10	弥・中	1443
898	〃	〃 6	弥・中	1523
899	〃	〃 7		704
82— 900	〃	〃 13		1810

表11 弥 生 土 器 一 覧 表 (11)

挿図番号	器 形	法 量・特 徴	出 土 層	備 考 (NKY)
82— 901	壺	底部径 7	弥・中	1813
902	〃	〃 12	弥・中	1326
903	〃	〃 11		790
904	〃	〃 8	弥・後	339
905	〃	〃 8	弥・後	1343
906	〃	〃 8	弥・中	257
907	〃	〃 9	弥・中	194
908	〃	〃 6	弥・中	364
909	〃	〃 6	弥・後	1365
910	〃	〃 6	弥・中	40
911	〃	〃 12	弥・中	371
912	〃	〃 7		343
913	〃	〃 6	弥中・貝層A	203
914	〃	〃 6	弥・中	745
915	〃	〃 10		1107
916	〃	〃 6	弥・中	360
917	〃	〃 6	弥・後	1297
83— 918	甕 or 壺	〃 9	弥・中	15
919	〃	〃 12	弥・中	83
920	〃	〃 7	弥・中	17
921	〃	〃 12	弥・後	1611
922	〃	〃 9		1804
923	〃	〃 7	弥・中	16
924	〃	〃 12		1351
925	〃	〃 8	弥・中	1094
926	〃	〃 7	弥・中	84
927	〃	〃 8	弥・後	1344
928	〃	〃 6	弥・後	1317
929	〃	〃 9	弥・中	1347
930	〃	〃 10	弥・中	1436
931	〃	〃 6	弥・中	822
932	〃	〃 7	弥・中	62
933	〃	〃 6	弥・後	11
934	〃	〃 5		1194
935	〃	〃 6	弥・中	48
936	〃	〃 6	弥・後	101
937	〃	〃 5		1053
938	〃	〃 4	弥・後	1312
939	〃	〃 6		1042
940	〃	〃 3	弥・中	1714
84— 941	〃	〃 16	弥中・貝層A	186
942	〃	〃 8		830
943	〃	〃 5	弥・中	2
944	〃	〃 9	弥・中	373
945	〃	〃 10	弥・中	1599
946	甕 or 壺	底部径13.6 14	弥・中	930
947	壺	口径 7		1997
948	〃	〃 8	弥・中	1580
949	〃	〃 10 器高14	弥・中	272
950	〃	底部径5.0		1803
951	〃	口径11 口縁穿孔	弥中・A層B	1499
952	〃	〃 10	弥・中	1717
953	〃	〃 14 頸部穿孔	弥・中	1969
954	〃	〃 13	弥・中	1928
955	〃	〃 9	弥・後	1748
956	〃	〃 10	弥・中	1879
957	〃	〃 11 口縁穿孔	弥・中	1265
958	〃	〃 12 〃	弥・中	1586
959	〃	〃 19	弥・中	1839
960	〃	〃 9	弥・中	1896
961	〃	〃 22		946
85— 962	鉢	〃 11 刺突文	弥・中	1833
963	壺	〃 14	弥・中	1062
964	鉢	〃 19		1808
965	〃	〃 7	弥中・貝層A	256
966	〃	〃 10 口縁穿孔	弥・中	804
967	〃	〃 8	弥・中	1152
968	〃	〃 10 口縁穿孔	弥・中	1250
969	〃	〃 14	弥・中	1160
970	〃	〃 26	弥・中	1096
971	〃	〃 14	弥・後	967
972	〃	〃 18	弥中・SK01	737
973	〃	〃 10		603
974	〃	〃 18	弥・中	1064
975	〃	〃 17		684
976	〃	〃 14	弥・中	959
977	〃	〃 19	弥・中	226
978	〃	〃 15		1561
979	〃	〃 17	弥・中	238
980	〃	〃 17	弥・中	1615
981	〃	〃 9	弥・中	98
982	〃	〃 18 刺突文	弥・中	278
983	〃	〃 20 〃	弥・中	7
984	〃	〃 25		
985	〃	〃 22	弥・中	224
986	甕	〃 26	弥・中	853
86— 987	鉢	〃 38		657
988	〃	〃 14 沈線	弥・後	1932
989	〃	〃 22	弥中・SK01	734
990	〃	〃 20 口縁部穿孔	弥・後	1770

表12 弥 生 土 器 一 覧 表 (12)

挿図番号	器 形	法 量・特 徴	出 土 層	備 考 (NKY)
86— 991	鉢	口径18	弥・後	8
992	〃	〃 28	弥・中	1533
993	〃	〃 12 口縁穿孔	弥・中	1458
994	〃	〃 16	弥・中	1834
995	〃	〃 15	弥・後	311
996	〃	〃 18	弥・中	223
997	〃	〃 17	弥・中	1904
998	〃	〃 16	弥・中	1591
999	〃	〃 30	弥・後	1664
1000	〃	〃 11 口縁穿孔	弥・後	385
1001	〃	〃 14	弥・中	1188
1002	〃	〃 19 刺突文	弥中・貝層A	154
1003	〃	〃 22	弥・中	828
87—1004	〃	〃 18	弥・中	1710
1005	〃	〃 19		986
1006	〃	〃 18	弥・中	1025
1007	〃	〃 19	弥・中	167
1008	〃	〃 21		1010
1009	〃	〃 21	弥・後	1231
1010	〃	〃 22	弥・中	1704
1011	〃		弥・中	1880
1012	〃	口径23	弥・中	234
1013	〃	〃 24	弥・中	724A
1014	〃	〃 27	弥・中	713
1015	〃	〃 25	弥・中	1471
1016	〃	〃 18	弥・中	171
1017	〃	〃 18	弥・中	1711
88—1018	〃	〃 18	弥・後	911
1019	〃	〃 27	弥・中	103
1020	〃	〃 34	弥・中	1974
1021	〃	〃 24		1012
1022	〃	〃 16	弥・後	387
1023	〃	〃 23	弥・後	913
1024	〃	〃 28	弥・中	859
1025	〃	〃 21	弥・中	267
1026	〃	〃 21	弥・中	818
1027	〃	〃 18	弥・中	1217
1028	〃	〃 24 器高26	弥中・貝層A	149
1029	〃	〃 21	弥・中	957
1030	〃	〃 27	弥・中	1028
1031	〃	〃 24	弥・後	1684
1032	〃	〃 18	弥・中	1836
89—1033	高 坏	〃 22	弥・後	1655
1034	〃	〃 24	弥・中	358
1035	〃	〃 31	弥・中	1891
89—1036	高 坏	口径12	弥・中	1089
1037	〃	〃 33 貼付文	弥・中	1020
1038	〃	〃 15		1806
1039	〃	〃 24	弥中・貝層A	291
1040	〃	〃 10	弥・中	1578
1041	〃	〃 16	弥・中	1894
1042	〃	〃 15	弥・中	1059
1043	〃	〃 23 頸部穿孔	弥・中	192
1044	〃	〃 18	弥・中	217
1045	〃	〃 28	弥・中	1794
1046	〃		弥・中	1078
1047	〃	口径19	弥・中	809
1048	〃	〃 17	弥・中	236
1049	〃	〃 24	弥・中	1420
1050	〃	〃 39 貼付文	弥・中	1670
1051	〃	〃 35 〃	弥・中	1455
90—1052	〃	〃 31	弥中・SZ014	1944
1053	〃	〃 28	弥・中	1777
1054	〃	〃 20	弥・後	969
1055	〃	〃 30		779
1056	〃	〃 21	弥・後	1359
1057	〃	〃 22 器高20	弥・後	1167
1058	〃	〃 24	弥中・貝層A	176
1059	〃	〃 24	弥中・貝層A	178
1060	〃	〃 16	弥・後	1642
1061	〃	〃 13	弥・中	126
1062	〃	〃 22	弥・後	1781
1063	〃	〃 38 貼付文	弥・後	1636
1064	〃	〃 33	弥・後	1179
91—1065	〃	〃 32 口縁穿孔	弥・中	718
1066	〃	〃 30	弥中・SZ017	1672
1067	〃	〃 32	弥・中	1442
1068	〃	〃 34	弥・中	1972
1069	〃	〃 22	弥・中	1258
1070	〃	〃 29	弥・中	174
1071	〃	〃 26 貼付文	弥・中	295
1072	〃	〃 24	弥・中	1482
1073	〃	〃 24	弥・中	182
1074	〃	〃 26	弥・後	1405
1075	〃	〃 35	弥・後	1798
1076	〃	〃 25		1548
92—1077	〃	〃 34	弥・中	1886
1078	〃	〃 32	弥・中	1447
1079	〃	〃 24	弥・中	1269
1080	〃	〃 23	弥・後	1394

表13 弥 生 土 器 一 覧 表 (13)

挿図番号	器 形	法 量・特 徴	出 土 層	備 考 (NKY)
1081	高 坏	口径18	弥・後	1551
1082	〃	〃 25	弥・後	1674
1083	〃	〃 28	弥・後	1745
1084	〃	底部径 9.2		1889
1085	〃	〃 13.0	弥・中	1827
1086	〃	〃 10.8		1527
1087	〃		弥・中	1860
1088	〃	底部径10.4	弥・中	1517
1089	〃	〃 7.2	弥・中	1771
1090	〃		弥・後	1955
1091	〃		弥・中	1130
1092	〃		弥・中	1336
1093	〃		弥中・貝層A	299
1094	〃		弥・中	1810
1095	〃		弥・中	131
1096	〃		弥・中	1457
1097	〃		弥・中	49
1098	〃	底部径18.0	弥・後	1348
93—1099	〃		弥・中	66
1100	〃		弥・中	405
1101	〃		弥・中	1789
1102	〃		弥・中	407
1103	〃	底部径14.8	弥・中	1579
1104	〃	〃 14.8	弥中・SZ015	1919
1105	〃	〃 12.4	弥・中	1023
1106	〃	〃 15.2	弥・中	1935
1107	〃	〃 15.6	弥・中	1433
1108	〃	〃 14.0	弥・中	724B
1109	〃	〃 15.4	弥・後	12
1110	〃	〃 14.6	弥中・貝層A	230
1111	〃	〃 10.6	弥・後	1535
1112	〃	〃 12.4	弥・中	1648
1113	〃	〃 13.2	弥・後	312
1114	〃	〃 14.2	弥・中	1876
1115	〃	〃 14.8	弥・中	356
1116	〃	〃 16.4	弥・中	415
1117	〃	〃 10.0	弥・中	1931
1118	〃	〃 16.8	弥・中	1843
94—1119	〃	〃 13.2	弥・中	325
1120	〃	〃 14.4	弥中・貝層A	210
1121	〃	〃 14.4	弥・中	324
1122	〃	〃 16.0	弥・中	1029
1123	〃	〃 12.8	弥・中	113
1124	〃	〃 14.2	弥・中	125
1125	〃	〃 15.2	弥・中	109
94—1126	高 坏	底部径13.2	弥・中	388
1127	〃	〃 14.4	弥・後	1941
1128	〃	〃 13.8	弥・中	1031
1129	〃	〃 14.4	弥・中	1736
1130	〃	〃 13.4	弥・中	59
1131	〃	〃 13.0	弥・中	390
1132	〃		弥・中	973
1133	〃	底部径14.4 透し	弥・後	1558
1134	〃	〃 14.0 透し	弥中・貝層B	1491
1135	〃	〃 11.0 透し	弥・中	13
1136	〃	方形透し		1690
1137	〃	方形透し	弥・中	1450
1138	〃	方形透し	弥中・貝層B	1498
1139	〃	底部径 9.6 透し	弥・後	1712
1140	〃	〃 13.0 透し	弥・中	824
95—1141	〃	〃 17.6 透し	弥中・SZ16	1910
1142	〃	〃 12.0 透し	弥・中	1973
1143	〃	〃 12.4 透し	弥・中	1898
1144	〃	〃 11.4	弥・中	1682
1145	〃		弥・中	1525
1146	〃	底部径10.4	弥・中	1177
1147	〃	〃 15.6	弥・後	1643
1148	〃	〃 19.0	弥・後	1964
1149	〃	〃 17.8	弥・後	1341
1150	〃	〃 9.6	弥・中	1027
1151	〃	〃 16.0	弥・中	1244
1152	〃	〃 12.8	弥・後	1937
1153	〃	〃 13.6	弥・後	1441
1154	小型土器	口 径 9	弥・中	123
1155	〃	〃 11	弥・中	1602
1156	〃	〃 14	弥・中	1687
1157	〃	底部径 3.2	弥中・SZ16	1908
1158	〃	口 径 7	弥・後	1657
1159	〃	〃 6	弥・中	1353
1160	〃	〃 6		852
1161	〃	〃 6	弥・中	1271
1162	〃		弥・中	1963
1163	〃	口 径 3	弥・中	1105
1164	〃	〃 7	弥・中	1883
1165	〃	〃 11 器高10	弥・後	310
1166	〃	底部径 4.0	弥・中	1841
1167	〃	〃 3.8		876
1168	〃	〃 2.6		1256
1169	〃	〃 3.2		920
1170	〃	〃 2.0器高 1	弥・後	970

表14 弥 生 土 器 一 覧 表 (14)

挿図番号	器 形	法 量・特 徴	出 土 層	備 考 (NKY)
1171	小形土器	底部径 3.2	弥・後	971
1172	〃	〃 2.8器高 4	弥・後	1396
1173	〃	〃 2.4	弥・中	1709
1174	〃	〃 3.6	弥・中	844
1175	〃	〃 2.0	弥・中	1895
1176	〃	口 径16		1208
1177	不明土製品		弥・中	744
1178	〃		弥中・貝層B	1920
1179	〃		弥・中	811
1180	〃		弥・中	1142
1181	〃		弥・中	1583
1182	〃		弥・中	851
96—1183	蓋	口 径10器高 3.2 丹塗	弥・中	1889
1184	壺	〃 7 丹 塗	弥・中	1594
1185	〃	〃 8 〃	弥・中	1966
1186	〃	〃 9 〃	弥・中	1907
1187	〃	〃 11 〃	弥中・SK01	732
1188	〃	〃 10 〃	弥中・SZ017	1912
1189	〃	〃	弥・中	1454
1190	〃	口 径16 〃	弥・中	1852
1191	〃	〃 10 〃	弥・中	94
1192	〃	〃 11 〃	弥・中	2187
1193	〃	〃 12 〃	弥・中	2137
1194	〃	〃	弥・中	1844
1195	〃	口 径10 〃	弥・中	1412
1196	〃	〃	弥・中	1967
1197	〃	口 径13 〃	弥・中	814
1198	〃	〃	弥・中	700
1199	〃	底部径 5.4 〃	弥・中	701
1200	〃	〃 5.0 〃	弥・中	2163
1201	〃	〃 5.8 〃	弥・後	1826
1202	〃	〃 4.8 〃	弥・中	1247
1203	〃	〃 5.4 〃	弥・中	848
1204	〃	〃 5.2 〃	弥・中	10
1205	〃	〃 5.0 〃	弥・中	47
97—1206	〃	〃 10.8 〃	弥・中	1925
1207	〃	〃 11.6 〃	弥・中	1649
1208	〃	〃 10.0 〃	弥中・貝層B	1508
1209	〃	〃 5.6 〃	弥・中	2139
1210	〃	〃 9.8 〃	弥・中	1698
1211	〃	〃 5.8 〃	弥・中	227
1212	〃	〃	弥・中	2144
1213	〃	口 径14 〃		690
1214	高 坏	〃 23 〃	弥・後	1756
1215	〃	〃 30 〃	弥・中	1970+1439
97—1216	高 坏	口 径 9 丹塗		1137
1217	〃	底部径11.4 〃	弥・中	2136
98—1218	分銅型	沈線文		
1219	土製品			
1220	〃			
1221	〃			
1222	〃			
1223	〃			
99—1224	甕	口 径22	弥・中	923
1225	〃	〃 21	弥・後	1164
1226	〃	〃 12	弥後・貝層E	1568
1227	〃	〃 12		1609
1228	〃	〃 17	弥・中	860
1229	〃	〃 17	弥後・貝層E	1566
1230	〃	〃 16	弥・後	1773
1231	〃	〃 18	古・前	1617
1232	〃	〃 26	弥・後	1855
1233	〃	〃 25	弥・後	1691
1234	〃	〃 21	弥・後	1697
1235	〃	〃 10	弥・後	1739
1236	〃	〃 17	弥・後	1625
1237	〃	〃 14	弥後・貝層E	1559
1238	〃	〃 16	弥・後	1295
1239	〃	〃 17	弥・後	1801
1240	〃	〃 24	弥・後	1732
100-1241	〃	〃 13 器高20	弥・後	1564
1242	〃	〃 16	弥・後	363
1243	〃	〃 14	弥・後	1406
1244	〃	〃 20	弥・後	926
1245	〃	〃 18	弥・後	1190
1246	〃	〃 22	弥・後	964
1247	〃	〃 19	弥・後	921
1248	〃	〃 15	弥・後	1240
1249	〃	〃 24	弥・後	1210
1250	〃	〃 16	弥・後	1283
1251	〃	〃 13	弥・後	1176
1252	〃	〃 18	弥・後	1757
1253	〃	〃 16	弥・後	1161
1254	〃	〃 15	弥・後	914
1255	〃	〃 22		1647
1256	〃	〃 23	弥・後	340
1257	〃	〃 17	弥・中	821
1258	〃	〃 16	弥・後	1193
1259	〃	〃 21	弥・後	1465
1260	〃	〃 16	弥・後	38

表15 弥 生 土 器 一 覧 表 (15)

挿図番号	器 形	法 量・特 徴	出 土 層	備 考 (NKY)
100-1261	甕	口 径16	弥・後	1098
1262	〃	〃 15	弥・後	927
1263	〃	〃 15	古・前	1528
1264	〃	〃 20	弥・後	61
1265	〃	〃 19	弥・後	1547
101-1266	〃	〃 18	弥・後	1449
1267	〃	〃 16	弥・後	1293
1268	〃	〃 14	弥・後	1780
1269	〃	〃 17	弥・後	1170
1270	〃	〃 10	弥・後	1220
1271	〃	〃 19	弥・後	377
1272	〃	〃 22	弥・後	349
1273	〃	〃 18	弥・後	1656
1274	〃	〃 29	弥・後	1930
1275	〃	〃 13 弧文	弥・後	1751
1276	〃	〃 12	弥・後	1300
1277	〃	〃 14	弥後・貝層E	1557
1278	〃	〃 11	弥・後	1933
1279	〃	〃 13	古・前	1731
1280	〃	〃 13	弥・後	1795
1281	壺	〃 31	弥・後	1407
1282	〃	〃 25		808
1283	〃	〃 12	耕作土層	1489
1284	〃	〃 16	弥・後	963
1285	〃	〃 15	弥・後	1581
1286	〃	〃 8	弥・後	1943
1287	〃	〃 8	弥・後	1761
1288	〃	〃 6		956
102-1289	〃	〃 26	古・前	1541
1290	〃	〃 27	弥・後	1409
1291	〃	〃 18	古・前	1539
1292	〃	底部径 4.4	弥・後	1807
1293	〃	口 径13		1146
1294	〃	多条沈線文	弥・後	1661
1295	〃	口 径 6 器高 5	弥・後	1750
1296	〃			1185
1297	〃			1222
1298	〃		弥後・貝層E	1570
1299	鉢	口 径16	弥・後	1652
102-1300	鉢	口 径14	弥・後	1660
1301	把 手		弥・後	1744
1302	〃		弥・後	1574
103-1303	高 坏	口 径16	古・前	1728
1304	〃	〃 14	弥・後	1767
1305	〃	〃 16	弥・後	1166
1306	〃	〃 13	弥・後	1765
1307	〃	〃 23	古・前	1727
1308	〃	〃 19	弥・後	1926
1309	〃	〃 26	弥・後	1755
1310	〃	底部径12.8	弥・後	1199
1311	〃			1127
1312	〃	底部径 7.2	弥・後	1743
1313	〃	〃 13.0	弥・後	1752
1314	〃	〃 6.8	弥・後	1733
1315	〃	〃 11.2		1689
1316	〃	〃 10.4	弥・中	819
1317	〃	〃 11.6		546
1318	〃	〃 15.6	弥・後	1554
1319	〃	〃 11.2	弥・後	378
1320	〃	〃 15.2	弥・後	63
1321	器 台	口 径19	弥・後	1563
1322	〃	〃 20	弥・後	1411
1323	〃	底部径30.4	古・前	1746
1324	〃	〃 11.2	弥・後	806
1325	〃	〃 6.4	弥・後	1205
1326	低脚坏	口径18 底部径 8 器高 8	弥・後	1536
1327	〃	底部径 5.2	弥・後	1764
1328	〃	〃 9.6	弥・後	1763
104-1329	鉢	口 径36 一部丹	弥・中	1858
1330	高 坏	底部径13.2 丹塗	弥・後	313
1331	〃	口 径20 〃	弥・後	1934
1332	壺	〃	弥・後	2195
1333	高 坏	底部径12.8 〃	弥・中	846
1334	〃	〃 11.6 〃	弥・後	1545
1335	〃	口 径19 〃	弥・後	1658
1336	器 台	〃 20 〃	弥・後	1550

（3）古墳時代前期の土器

第105図、第106図、第107図、第108図に古墳時代の土器を図示した。器形は甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏、器台形土器、低脚坏に分類し、いずれも古墳時代前期のものである。

a．甕形土器　1～35が甕形土器である。口縁部は二重口縁で底部のわかるものはかすかに底部を意識しているが丸底に近い（2、18）。器壁は薄く外面は細かなハケ目調整がなされ頸部付近に波状文（2、5、14、27、29）や刺突文（17、30）が施されるものもあるが多くは無文である。内面は頸部より下方はヘラ削りが全面になされる。1は口径32.0cmの大形のものである。

b．壺形土器　36～43。このうち、40、42は小形丸底壺。40は口径8.5cm、器高8.1cmを測る。43は長く上方に延びた二重口縁の丸底壺でクシ描波状文が胴部にみられる。口径は10.0cm、口縁部の長さは6.0cmある。39は頸部に小孔を穿った短頸壺でクシ描きの鋸歯文がみられる。これらはいずれも小形の壺形土器であるが、これらに対し、36～38、41は大形で、甕形土器と比較すると装飾性に富んでいる。41はほとんど丸底に近い。38は口縁部の小破片であるが、外面に「S」字や円形のスタンプ文が施されている。

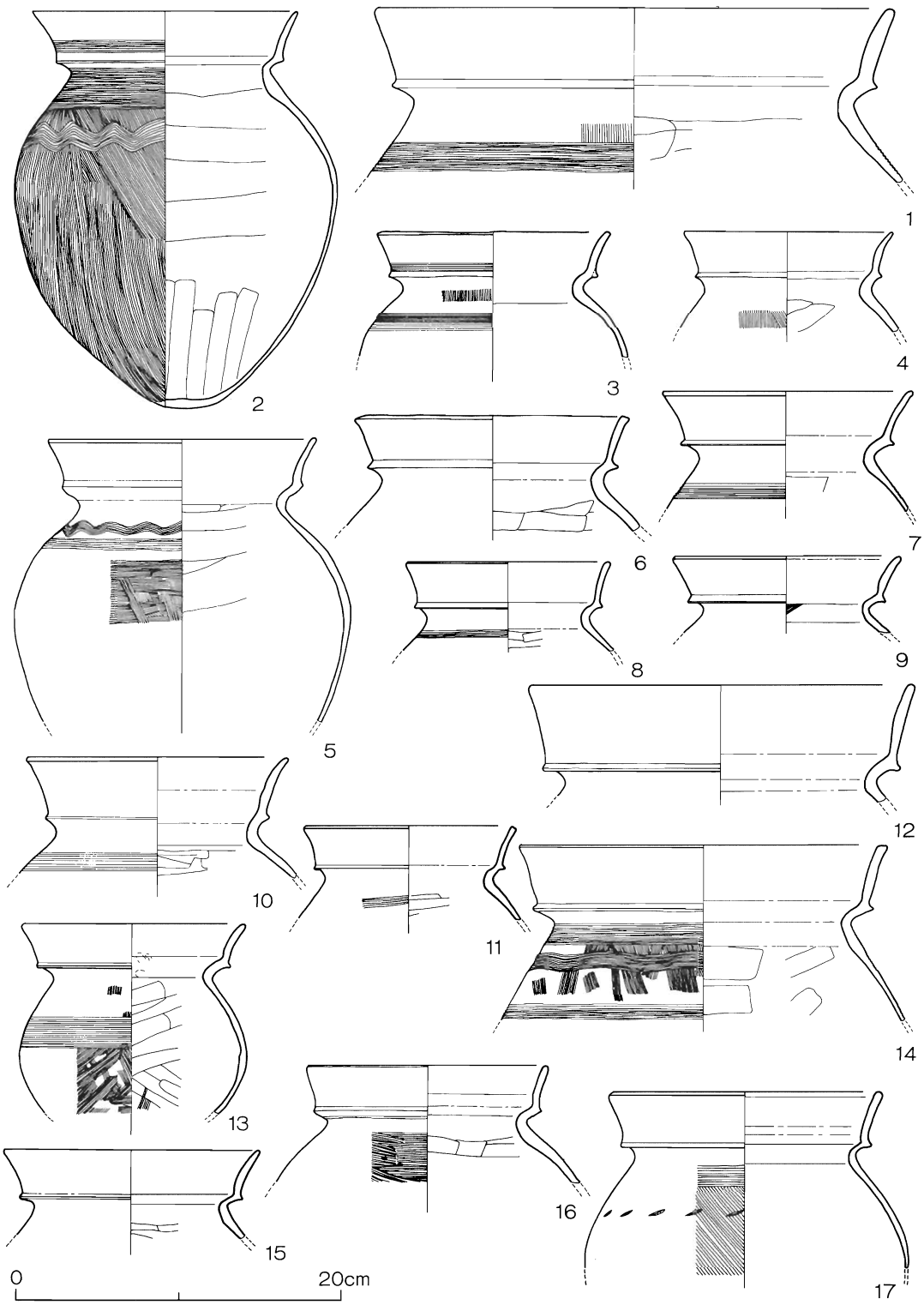
c．鉢形土器　46は鉢形土器と考えた。逆「ハ」の字状に大きく上方に開いた坏部である。復元口径は28.0cm。口唇部に焼成後、その外面を磨き片刃状の刃部が作り出されているのが注意される。体部の下方に一条の沈線がめぐるが、低い脚が付いていた可能性がある。類似のものは松江市平所遺跡に出土例がある。土器片に刃部を作り出したものは、弥生時代中期層で出土した第95図1179があるが関係は不明である。66は小形品である。

d．高坏　51～57、60は高坏であるが各種みられる。このうち、55は粗雑な手捏成型で実用品とは考えにくい。60の坏部内面には暗文状ヘラ磨きがみられる。

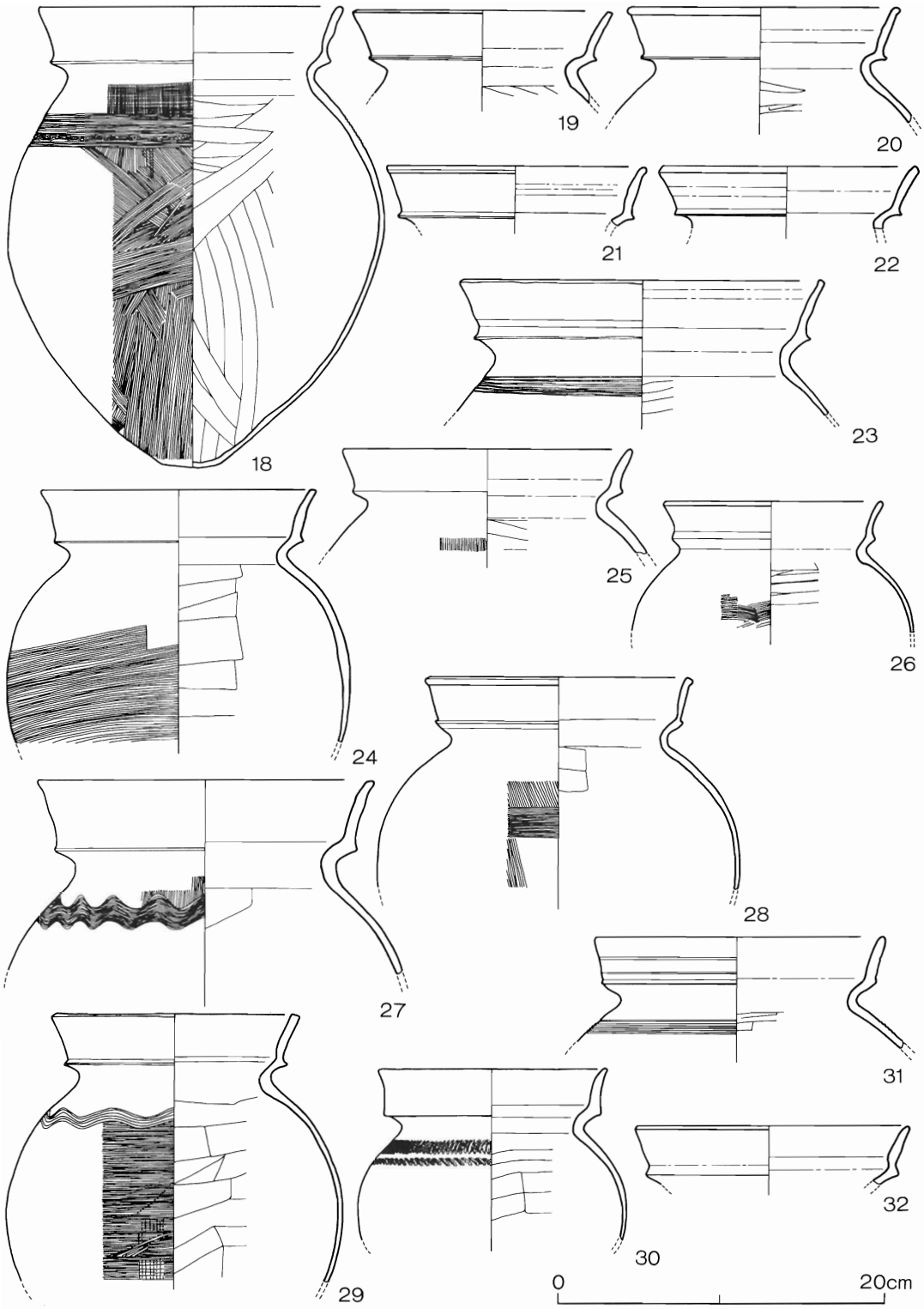
e．器台形土器　44、45は鼓形器台である。44は口径17.0cm。45は完形で器高12.0cm、口径22.5cmを測る。

f．低脚坏　坏部が碗状になる49、50と酒坏状に広く開く58、59、64、65があるが、61、62、63も後者であろう。49、50ともに口径は18.0cmで内外面のヘラ磨き調整に若干の違いがあるが互いによく似ている。59、65は丁寧なヘラ磨きが施され、65は坏内面は暗文状となる。59は口径21.0cm、器高6.0cm、65は口径21.0cmであるが坏部は59に比して深い。

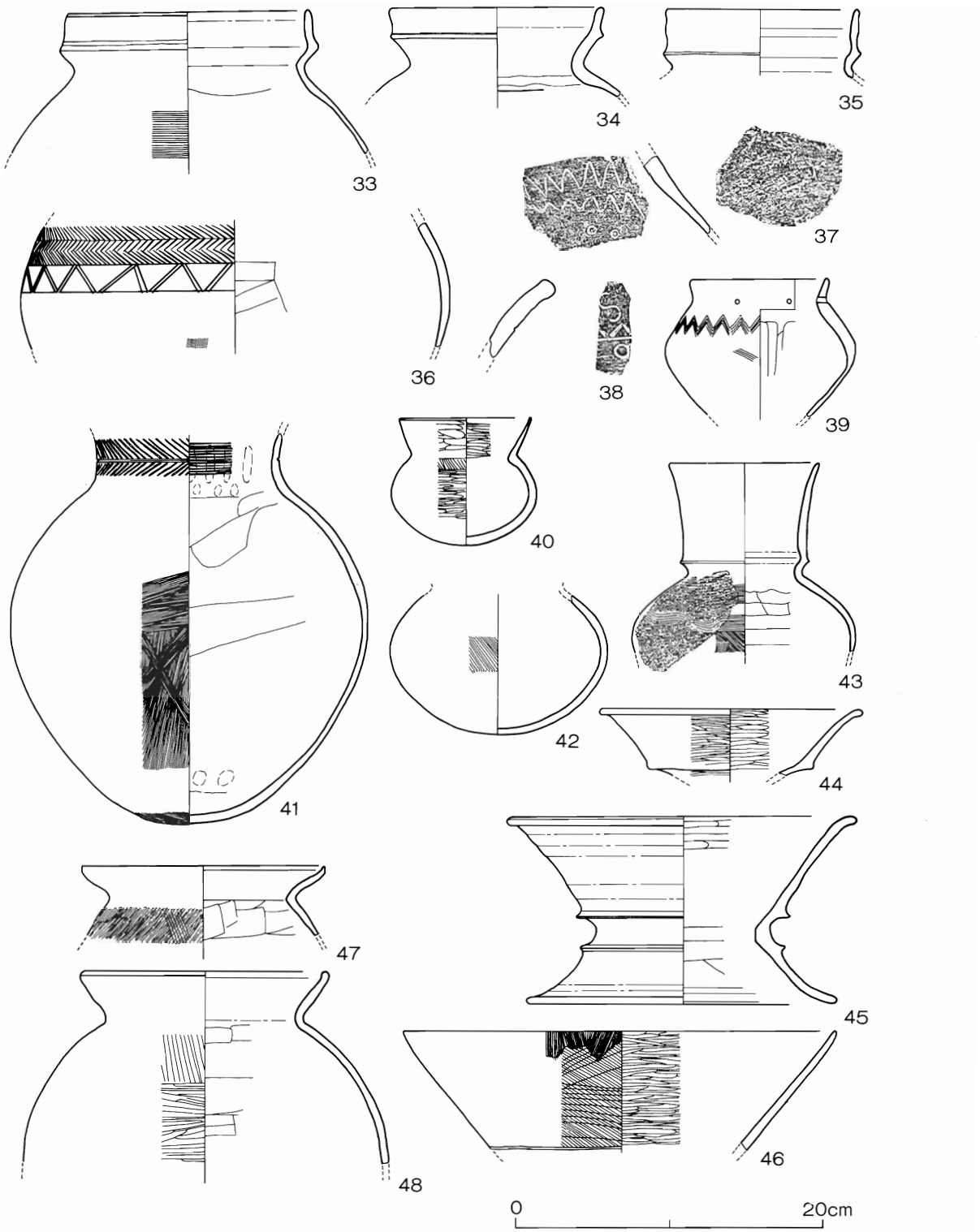
g．搬入土器　47、48は搬入土器と考えられる甕形土器である。両者とも外面は叩き痕を丁寧にナデ消している。内面は頸部より下方はヘラ削りが施されている。47は口径16.0cmで胎土は茶褐色を呈している。48は口径16.0cmである。47は庄内式、48は布留式土器に比



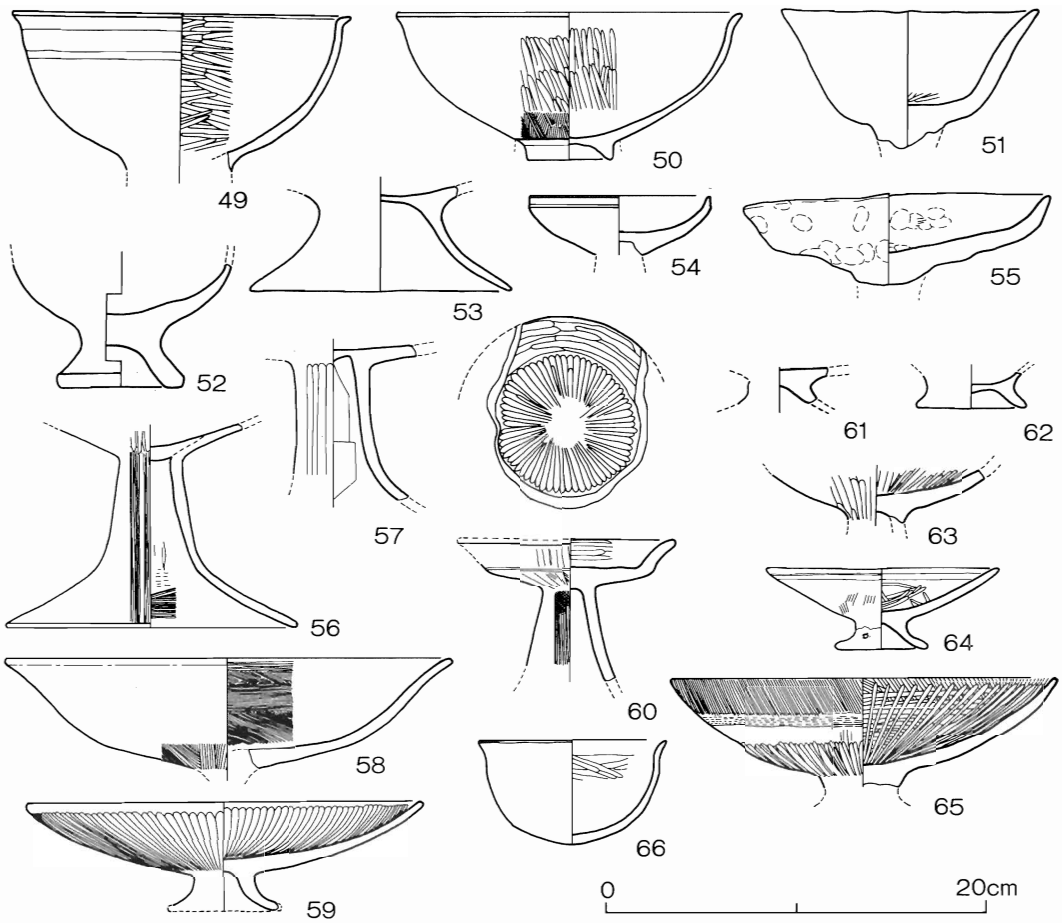
第105図　土師器実測図(1)



第106図　土師器実測図(2)



第107図　土師器実測図(3)



第108図　土師器実測図(4)

定されよう。いずれも畿内からもたされたものと推定される。

（4）土錘・石錘

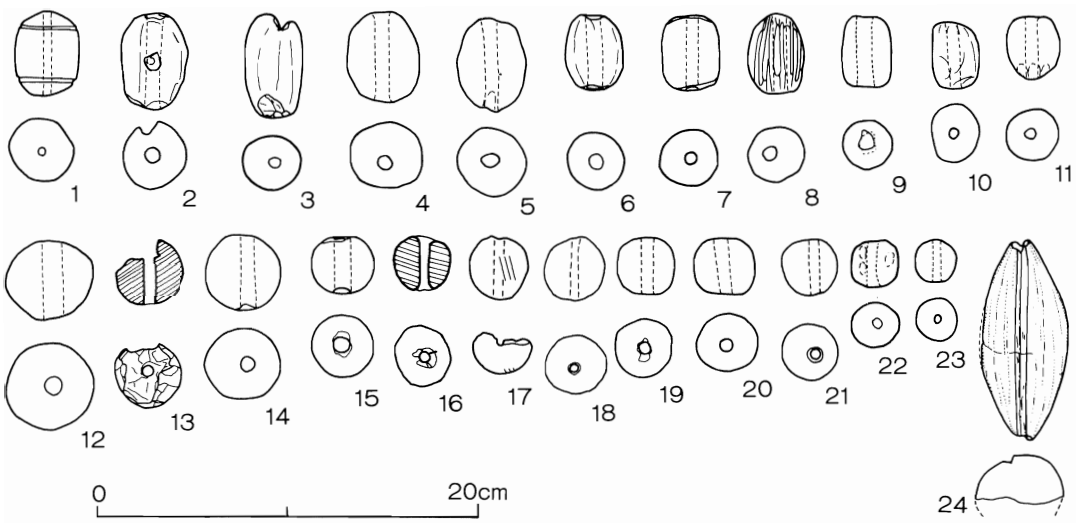
第109図は弥生時代中期～古墳時代前期層出土の土錘(1～23)と石錘(24)を示してある(表17)。1～11は長いタイプのもので、このうち、1には両端に一条の沈線がめぐらされており作りは丁寧である。8は縦方向にヘラ磨きがみられる。12～23は球形の土錘。13は二次焼成を受け破損している。17は孔より半分を失っている。前者の平均重量は43.4g、後者のそれは25.4g、平均は34.8gである。24は石錘で弥生時代後期層からの出土である。焼成を受け縦方向に半分に割れその一方を失っている。中央には縦方向に断面「V」字状の溝が一条めぐる。両端にむかい先細りとなった九州型の石錘である。表面はきれいに磨きがかけられている。

（5）紡錘車

第110図には紡錘車とその未成品と考えられる土製品を示した（表18)。56と57を除く

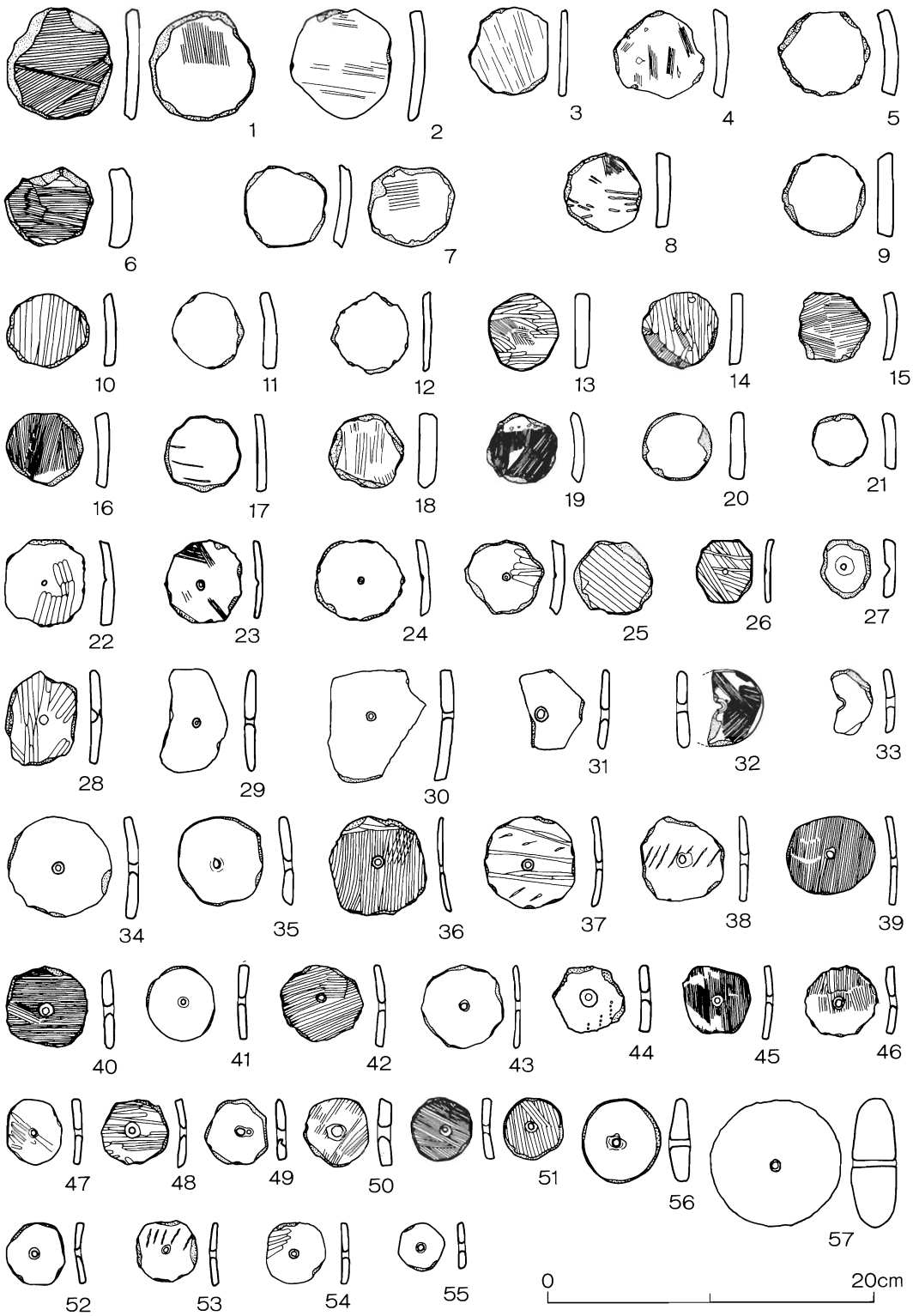
表16 土 師 器 一 覧 表

挿図番号	器 形	法 量・特 徴	出 土 層	備 考 (NKY)
105— 1	甕	口 径32	古・前	1686
2	〃	〃 16 器高24	古・前	1641
3	〃	〃 14	古・前	1125
4	〃	〃 13	古・前	1634
5	〃	〃 16 沈線文	古・前	1577
6	〃	〃 17	古・前	1616
7	〃	〃 15 沈線文	古・前	1417
8	〃	〃 12	古・前	1415
9	〃	〃 14	古・前	1147
10	〃	〃 16	古・前	1379
11	〃	〃 13	古・前	1414
12	〃	〃 24	古・前	1567
13	〃	〃 14 沈線文	古・前	1124
14	〃	〃 22 〃	古・前	1532
15	〃	〃 16 〃	古・前	1165
16	〃	〃 15	古・前	1627
17	〃	〃 17	古・前	1619
106—18	〃	〃 19 沈線文	古・前	1530
19	〃	〃 16	古・前	1138
20	〃	〃 17	古・前	1135
21	〃	〃 16	古・前	1150
22	〃	〃 15	古・前	1145
23	〃	〃 22 沈線文	古・前	1613
24	〃	〃 17	古・前	1538
25	〃	〃 18	古・前	1552
26	〃	〃 13	古・前	1416
27	〃	〃 21波状沈線	古・前	1721
28	〃	〃 16	古・前	1692
29	〃	〃 15	古・前	1695
30	〃	〃 14		1544
31	〃	〃 18	古・前	1413
32	〃	〃 17		1148
107—33	壺	〃 16	古・前	1621
107—34	壺	口 径14	古・前	1630
35	〃	〃 12	古・前	1286
36	〃		古・前	1549
37	〃		古・前	1555
38	〃		古・前	1936
39	〃	口 径 9	弥・後	1696
40	〃	〃 8 器高 8	古・前	1140
41	〃	底部径 4.0	古・前	1121
42	〃	〃 2.0		1693
43	〃	口 径10		733
44	器 台	〃 17	古・前	1553
45	〃	口径23 底部径20 器高12	古・前	1151
46		口 径28	古・前	1136
47	甕	〃 16	古・前	2198
48	〃	〃 16	古・前	1431
108—49	低脚坏	〃 18	古・前	1612
50	〃	〃 18 器高 8	古・前	1608
51	高 坏	〃 13		1572
52	低脚坏	底部径 6.4	弥・後	1678
53	高 坏	〃 13.6	古・前	1620
54	〃	口 径 9	古・前	1543
55	〃	〃 16	古・前	1793
56	〃	底部径13.0	古・前	1702
57	〃		古・前	1738
58	低脚坏	口 径24		1610
59	〃	〃 21	古・前	1638
60	高 坏		古・前	1540
61	低脚坏			947
62	〃	底部径 5.6	古・前	1640
63	〃		古・前	1126
64	〃	口径12底部径 4.8 器高 4	弥・後	1531
65	〃	口径20	古・前	1128
66	鉢	口径10 器高 6	弥・後	1662



第109図　土錘・石錘実測図

と、いずれも弥生時代中期の土器片を再利用し円形に打ちかき、磨いて作っていることが知られる。1～19は土器片を円形に打ちかいただけのもの、20、21はその周縁に磨きをかけたものである。22～27は中央に一方向から穿孔しようとした小さな凹みがみられるもの、28は両面に凹みがみられるが、貫通していないものである。29～55は小孔が貫通している完成品と考えられる。56、57はあらかじめ紡錘車として製作し焼成したものである。これらは紡錘車としては比較的古い時期のものの可能性がある。57はその径、厚さとも他に比較して群をぬいて大きい。これらの平均重量は21.3ｇである。木製の紡錘車と考えられるものに、第153図237や第166図307がある。



第110図　紡錘車実測図

表 17　土錘・石錘計測表

番号	長さcm	幅 cm	重量g	備　考	番号	長さcm	幅 cm	重量g	備　考
1	4.4	3.5	45.0	NKY-2117	13	3.5	3.5	32.0	NKY-1874
2	5.0	3.55	50.6	〃 2129	14	3.9	4.0	41.0	〃 2140
3	5.4	3.05	42.0	〃 2120	15	2.95	3.35	28.4	〃 1749
4	4.75	3.8	65.5	〃 2133	16	2.85	2.9	25.0	〃 1922
5	4.7	3.7	56.5	〃 2114	17	3.2	3.1	15.8	〃 1760
6	3.9	3.2	31.0	〃 2123	18	3.3	3.2	31.0	〃 1924
7	4.0	3.05	40.0	〃 2131	19	2.95	3.0	30.0	〃 1857
8	4.2	2.9	32.9	〃 2141	20	3.0	3.2	31.4	〃 2134
9	3.2	2.7	27.3	〃 866	21	2.9	3.0	23.2	〃 1726
10	3.5	2.5	27.5	〃 2138	22	2.4	2.5	12.0	〃 805
11	3.3	2.85	28.6	〃 2132	23	2.0	2.2	10.0	〃 2135
12	4.05	4.65	74.0	〃 2110	24	10.6	4.7	117.6	NKE- 7

表 18　紡錘車計測表

番号	縦 × 横cm	厚さcm	重量g	備　考	番号	縦 × 横cm	厚さcm	重量g	備　考
1	6.8 ×6.55	0.8	43.6	NKY-1737	30	6.78×5.2	0.7	35.0	NKY-1869
2	6.7 ×6.1	0.7	39.21	〃 1534	31	4.75×3.45	0.55	10.67	〃 1753
3	5.2 ×5.1	0.5	18.0	〃 1432	32	4.75×(2.7)	0.5	12.07	〃 1288
4	5.4 ×5.42	0.8	25.0	〃 1588	33	3.9 ×(2.2)	0.55	6.2	〃 1703
5	5.22×5.38	0.78	26.59	〃 1782	34	6.1 ×6.35	0.65	35.37	〃 1754
6	4.4 ×5.5	1.2	41.23	〃 1673	35	5.4 ×5.2	0.6	22.18	〃 2128
7	4.6 ×5.25	0.65	19.4	〃 1725	36	5.7 ×5.68	0.3	20.0	〃 1942
8	4.55×4.65	0.75	25.0	〃 1913	37	5.5 ×5.55	0.5	20.0	〃 1909
9	5.0 ×5.0	0.95	32.2	〃 1849	38	5.2 ×5.0	0.5	17.48	〃 1236
10	4.4 ×5.0	0.6	19.0	〃 1914	39	5.4 ×4.8	0.4	15.18	〃 2118
11	4.65×4.4	0.85	20.0	〃 1958	40	4.8 ×4.82	0.7	20.0	〃 1911
12	4.95×4.7	0.45	12.07	〃 1776	41	4.58×4.18	0.55	14.73	〃 2111
13	4.6 ×4.25	0.92	24.60	〃 2127	42	5.0 ×4.7	0.5	12.0	〃 1872
14	4.4 ×4.62	0.8	21.58	〃 1815	43	5.1 ×5.05	0.35	11.0	〃 1867
15	4.2 ×4.3	0.6	15.0	〃 1590	44	4.02×4.3	0.6	19.0	〃 1916
16	4.61×4.4	0.7	20.59	〃 2130	45	4.45×4.3	0.42	9.19	〃 2116
17	4.7 ×4.7	0.6	15.17	〃 2124	46	4.12×4.2	0.5	10.05	〃 1766
18	4.52×4.4	1.1	28.0	〃 1488	47	4.0 ×3.6	0.5	8.55	〃 1402
19	4.35×4.4	0.6	15.5	〃 1681	48	4.8 ×4.15	0.5	10.3	〃 2108
20	4.1 ×4.25	0.86	20.0	〃 1957	49	3.7 ×3.95	0.55	9.95	〃 2115
21	3.3 ×3.5	0.45	10.1	〃 1762	50	4.19×3.9	0.7	15.58	〃 2109
22	5.2 ×5.2	0.7	23.0	〃 1918	51	3.65×3.7	0.6	10.43	〃 1722
23	4.82×4.55	0.32	11.0	〃 1917	52	3.75×3.6	0.4	7.62	〃 2119
24	4.7 ×5.28	0.58	20.0	〃 1965	53	3.85×4.05	0.4	7.83	〃 1595
25	4.5 ×4.65	0.7	16.9	〃 1723	54	3.7 ×3.58	0.4	7.31	〃 1888
26	3.82×3.5	0.32	7.13	〃 2125	55	2.9 ×2.65	0.4	3.85	〃 2145
27	3.62×3.0	0.7	10.0	〃 1870	56	5.1×4.88	1.24	35.35	〃 2126
28	5.7 ×4.82	0.65	21.28	〃 2157	57	7.98×7.7	2.62	181.7	〃 1847
29	6.3×(3.7)	0.6	24.5	〃 1845					

（6）弥生時代中期の木製品

第111図～第156図には弥生時代中期層から出土した木製品を掲げてある（図版44～64）。西川津遺跡の木製品の中で、この中期層からの出土が最も多く、それらは主として、ウッドサークルの中やその周辺で発見されたものである。鍬・鋤を中心とする農耕具類、漁撈具、建築材、各種の容器、祭祀遺物、装身具類等がある。尚、樹種についてはⅡ章表26に示してある。

a．農耕具類

ミカン割材　第111図、第112図、第113図、第114図12、第142図166～167、169、170には各種の木製農耕具類の材料となる板状のミカン割材を示した。樹種はカシである。最大のものは長さ1.17m、幅0.29m、厚さ0.11～0.03cmであるが（第141図163）、第141図161の一木鋤の未成品例は1.50m近くある。短い例としては第113図10のような0.50mのものがあり、他はいずれもこれらの間に収まるサイズである。ミカン割材の両面は何ら加工痕のみられない割ったままの状態であり、3・9・10・12には樹皮がみられる。加工痕は両端に顕著で両面から加工しているので、161や163よりさらに長い材があったとも推測される。

第115図18、19、第116図21～24はミカン割材から木製農耕具を製作した切れ端と考えられるものである。その両端に加工痕がみられるが、一方の形状は不整形で、ミカン割材製作時のものであろう。21・24には樹皮が残る。

第114図15、13、14、第115図16、17、20は、ミカン割材から次の段階へ進んだものと思われるが、どのような製品を目的としたのかは不明である。このうち15は鋤の未成品である可能性がある。

広鍬A類　広鍬で柄つぼを穿つ舟形隆起を有し、その裏面にいわゆるゲタをつけたものを広鍬A類とした。第117図、第118図、第119図、第120図、第121図49・50・51・53。

26・27・28は、ミカン割材から切り離され、中ほどから刃部に向かい薄く削り出そうとしている。製作工程としては初期の段階のものである。26の例をとると、長さ27.0cm、幅20.0cmである。28は樹皮がついている。裏面には未だ加工痕はみられない。

29は刃部に向かい長く下垂する舟形隆起の部分が、周辺を削り出すことによって表われはじめ、26～28の次の段階のものである。舟形隆起の頂上部以外に粗い加工痕が残り、裏面にも加工が加えはじめられている。長さ27.0cm、幅21.0cm。

第118図31～34は、裏面のゲタの位置が定められ、削り出そうとする段階のものである。

全体の形が整えられ、この段階で鏃としてのサイズが決定されたと思われる。33の例をとれば長さ26.0cm、幅21.0cmである。

第119図35は、さらに削り込まれ、舟形隆起をはじめ全体の形状がさらに明確となった段階のものであるが、舟形隆起への穿孔はまだみられない。刃部へも刃を意識した加工が加えられている。長さ27.5cm、幅20.5cm、舟形隆起の長さは頭部より17.4cm、高さ2.0cmを測る。

第119図36・38・39は、以上の製作工程とは別のそれによって製作されたものである。36は、舟形隆起は刃部に向かい長く下垂する形状を明確にしているが、全体の形状は整っていない。裏面のゲタも削り出されてなく、別種の広鏃とも考えられる。長さ29.5cm、幅20.5cmとやや大形である。舟形隆起は長さ12.0cm、幅6.3cm、高さ2.0cm。

38は一部を欠くが、長さ31.2cm、最大幅24.0cmと大形で、全体の形状は中央よりやや上方で幅22.8cmと一旦くびれ、再び刃部に向かい広がる大形のものである。舟形隆起は上下両端が尖り、長さ15.0cm、幅1.4cm、高さ2.5cmを測る。その中央には孔を穿ちはじめている。裏面はゲタが付く。特徴的なのは刃部より上方約⅓の周縁が、幅約1.2cm、高さ約0.5cmと高く縁取りされていることである。これは刃部の強度を補強する為と考えられている。中央の舟形隆起に穿孔すれば完成する最終段階の広鏃であるが、弥生時代前期のものの可能性がある。

39は長さ35.5cm、幅24.5cmを測る広鏃としては最も大形品である。全体の加工は加工途中のように粗く、舟形隆起も整っていないが、既に穿孔され、その孔は仕上げられていることからこのまま使用された可能性がある。

また、第117図30は、風化破損が著しいが、後述する丸鏃のように3枚の広鏃を一度に製作したものの破片と思われる。広鏃A類の中では他に同様な資料はない。

40～53は完成品である。加工途中のものに比すると薄く、刃部の破損が目立つ。長さ27.0cm以上の大形のものと（40・50・51）、24.0cm前後の小形のもの（41・43・44・49）がある。40・44・49・50・51は中央あるいはそれより上方で幅が狭くなりくびれる。舟形隆起には両端が突るもの（40・47）と一方が刃部に向かい下垂するもの（41・43・44・45・46・48・49・50）がある。これらのうち、50と51の頭部は中央が半円状に凹む装飾となっている。49には舟形隆起の両側に小孔が一対穿たれている。42・43・46・47・53は舟形隆起の剝離したものである。

広鏃B類　一枚のミカン割材を長さ30cm前後に切断し加工を加えて広鏃とする点では広鏃A類と同じであるが、舟形隆起やゲタのみられない広鏃をB類として、第122図、第123

図、第124図、第125図70～76に示した。

第122図56は長さ1.05cm、幅24.5cm、厚さ約4.0cmのミカン割材の端から、約33.0cmの長さに広鍬の材料を切断しようとしている資料である。断面が「V」字状となった幅約3.0cm、深さ0.5cmの溝が片面のみにみられる。この部分と両端以外には加工痕はみられない。

57・58・59・60・64・67は、ミカン割材から切断した段階のもので、両端以外には、両面ともほとんど加工痕はみられない。60の場合、長さ31.0cm、幅24.0cm、厚さ3.6cmある。59・64・67は樹皮がついたままである。いずれも両端の加工痕をみると、ミカン割材の両面から溝を入れていることが判るので、56はその最も初期の段階のものと考えられる。

61・62・63・65は片面のほぼ中央をわずかに高くした段階のもので、その周辺に若干の加工痕が観察される。この段階では縦に長い61・62・63と縦と横の幅があまり差のない65とがあるが、同様なことは、57～60・64・67についても言えるかもしれない。すなわち、57～60は縦長の前者に、64・67は後者に対応する可能性がある。63は長さ31.2cm、幅21.0cm、中央での厚さ3.6cm、65は長さ23.5cm、幅22.2cm、中央での厚さ3.9cmを測る。

66・68・69はさらに加工の進んだ段階で、柄の孔を穿つ突起は低いけれども明確になり、全体の形状が整えられ、頭部は丸味を帯びる。66・68のように縦長のものと、69のように幅広のものがある。66は長さ27.0cm、幅20.5cm、中央部での厚さ2.4cm、69は長さ21.6cm、幅20.5cm、中央部の厚さ3.0cmを測る。

70～76は完成品である。縦方向に割れた破損品が多い。完形品においても柄を装着する孔の穿たれた周辺の隆起は低く、広鍬A類にみられた舟形隆起のように境がはっきりしない。70・71のように幅広のものと、72～76の縦長のものがあり、加工途中の未成品に対応している。70の場合長さ26.5cm、幅24.5cm、孔付近の厚さ1.8cmを測る。この幅広のものには未成品65や69のように70より小形のものが存在するようである。未成品のうち64や67が70に対応すると考えられる。73は柄が装着されたままで発見された唯一の例であるが、縦方向に約$\frac{1}{3}$が欠損している。柄は径約2.5cm、長さ26.7cmの短いものである。欠損したために柄も短くし、手鍬のようにして使用したのであろう。柄は隆起の側から装着されている。

狭鍬A類　長さに対し幅の狭い狭鍬のうち舟形隆起のあるものを狭鍬A類とした。

第126図86はミカン割材から狭鍬A類を製作しようとしたものである。現状での長さは約70.0cm、幅約20.0cmを測り、2枚の狭鍬が加工途中であるが、一方の端に加工痕が認められず、後に折れており、元は少なくとも3枚を作り出そうとしていた資料であることが判る。隆起部での厚さは5.4cmある。第121図52は狭鍬の完成品で、両端は欠損している。

幅は13.8cmを測る。

狭鍬B類　柄を装着する部分に明確な隆起のない狭鍬を狭鍬B類とした。第125図77・78、第126図79・80・81・82・83・84がそれである。皆完成品で、やはり欠損品が多い。全体を知ることのできる77は長さ28.0cm、幅13.0cm、厚さ1.8cm、82の場合長さ30.0cm、幅11.0cm、厚さ2.4cmある。これらの中には広鍬B類の再利用のものがある可能性もあろう。第125図73の例からすると柄の短い手鍬であった可能性もある。

叉鍬　第126図85は叉鍬の破片と考えられる。西川津遺跡の下流部の調査やタテチョウ遺跡出土例からすると歯は6本である。

丸鍬A類　刃部が直線的で、ミカン割材から、広鍬A・B類のようにあらかじめ1枚ずつ切り離した材から製作した丸鍬をA類として分類した。ミカン割材とした第112図7はその1枚にあたるかもしれない。第113図11、第128図90・91、第129図93・94はその加工途中のもので、11・90は裏面に把りを入れつつある段階のもので、91・93・94はそれより少し以前の段階のものである。いずれも端部や両面には粗い加工痕がみられる。93の場合、長さ42.0cm、幅23.5cm、隆起部での厚さ6.3cmある。第133図109はこの種の完成品であるが、全体に加工は粗い。隆起部の孔のあけ方から、鋤と同様な柄の装着方法であったことが知られる。長さは34.8cm、幅25.8cmを測る。110は孔が貫通しているが、仕上げはみられないので、穿孔途中のものが破損したと考えられる。

丸鍬B類　ミカン割材において、3枚の丸鍬をかなりの段階まで切り離さないままに加工を施した製作方法で、刃部が丸い形状のものを丸鍬B類とした。

ミカン割材を加工しはじめた例としては、第141図160、第127図88・89がある。このうち、160は長さ1.04m、幅29cmで3枚の丸鍬を製作しようとしている好例である。柄を装着する隆起を削り出し、その周辺には著しく加工痕がみられる。中央のものの両端に、「V」字状に溝を加工し切断しようとしているが、未だその裏面には何ら加工痕はみられない。しかし、長軸方向の両サイドにはそれぞれ2か所ずつ「V」字状の切れ込みを入れてあり、両端は既に丸味を帯びた加工が施してある。88・89は160より加工の進んだ段階であるが、まだ切り離しは行われていない。刃部も丸味をやや帯び、裏面の抉りがはじまっている。89の隆起部はかなり明確になっている。

ミカン割材から切り離しの行われた段階のものとしては92・95・96・97・98がある。四隅には切り離しの為の「V」字状の切れ込みが残り、両端も未だ直線的に切り離しの加工痕が残ったままである。97の例をとると長さ33.0cm、幅24.0cm、隆起部の厚さ4.5cmを測る。

98～108はほぼ全体の形状が出来上り、ミカン割材からの切り離し痕はきれいに加工さ

れ、薄くなり、いわゆる団扇状に整形された段階である。最も出土量がある。105の例をとると長さ33.0cm、幅26.5cmである。

111～114は完成品である。広鍬と同様に欠損品が多い。柄を装着した孔は、いずれも丸鍬A類のそれと同じである。これは、西川津遺跡の下流部やタテチョウ遺跡出土例も同様で、広鍬のような装着例はみられないので、丸鍬の機能はA・B類ともいわゆる鍬ではなく、むしろ鋤であったと考えられる。114には補修孔がみられる。

鋤A類　一本鋤を鋤A類とした。第141図161は未成品であるが、この種の唯一の出土例である。全長は約1.5m。身の長さ53.4cm、幅20.5cm、握りは「T」字状を呈す。第142図166・167・169・170は一本鋤の材であろう。第137図139・140はこれの完成品が破損したものであろう。140には柄と身を補強するための突帯が中央に作られている。

鋤B類　組み合わせ鋤。第134図、第135図、第136図、第137図、第138図は組み合わせ式の鋤の身と柄を示した。これらは身の形状から4種に大別される。

鋤B_1類　身が二又になった、いわゆるナスビ形の鋤。118～125がこれにあたる。

鋤B_2類　身の中ほどに二等辺三角形状の孔をもつもの。127～131がこれにあたる。115は鋤B_1類か鋤B_2類の未成品と考えられる。

鋤B_3類　身がスコップ状となる135・136・137・144・145・146を鋤B_3類とした。このうち、135・144・145・146は完成品で、柄の先端が、身の中央にくるよう、身の中央には溝がつけられているが、貫通していない。145は両側に透しがある。136、137は未成品であろう。

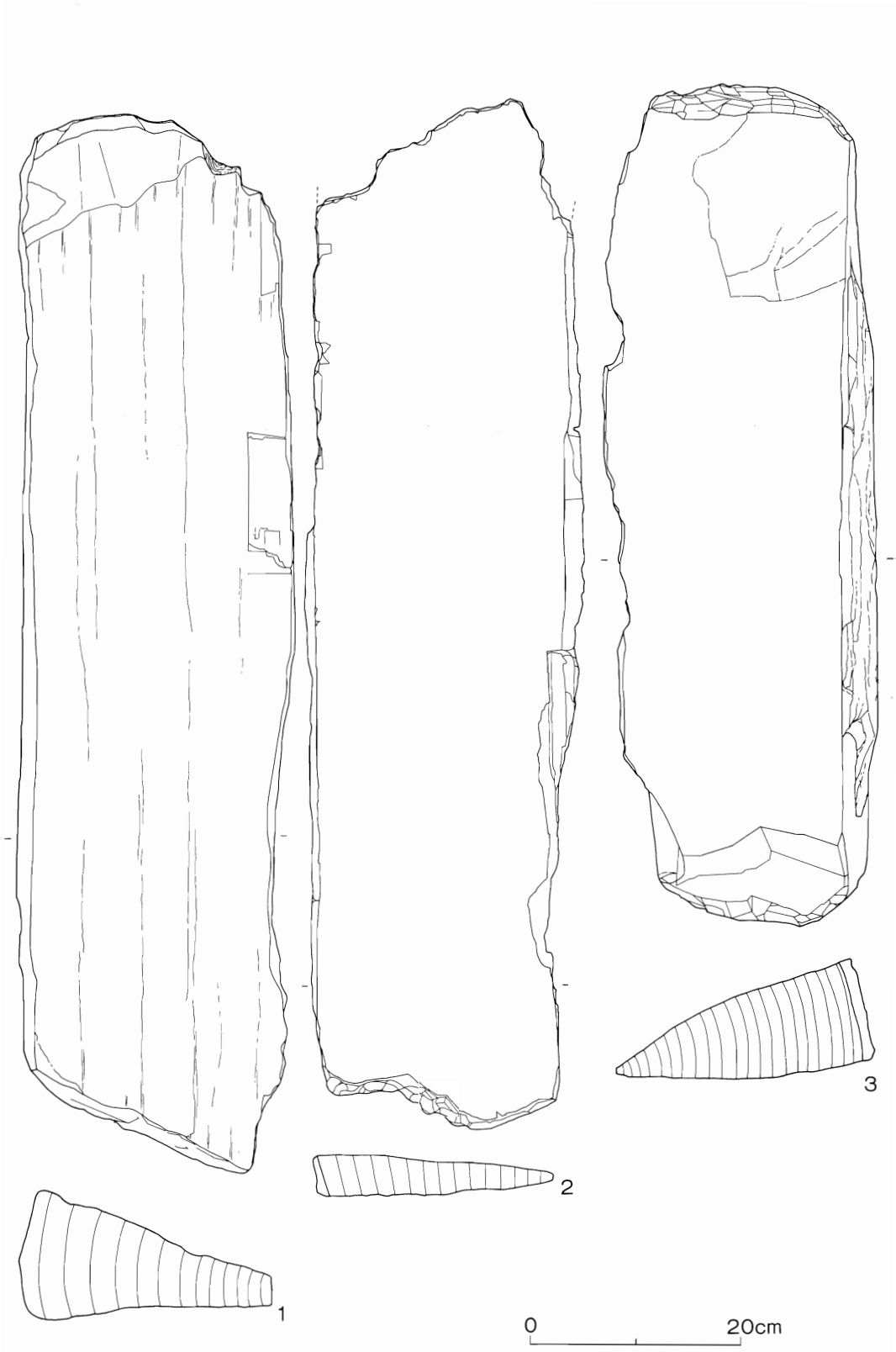
尚、141・142・143は鋤に類似しているが材質はスギやモミであり、また147はカシを使用しているが鋤として機能を果していたかは疑わしい。

116・117・132は以上の鋤の柄と考えられ、116は未成品である。また87も鍬か鋤の柄と考えられるが前者の可能性が高い。

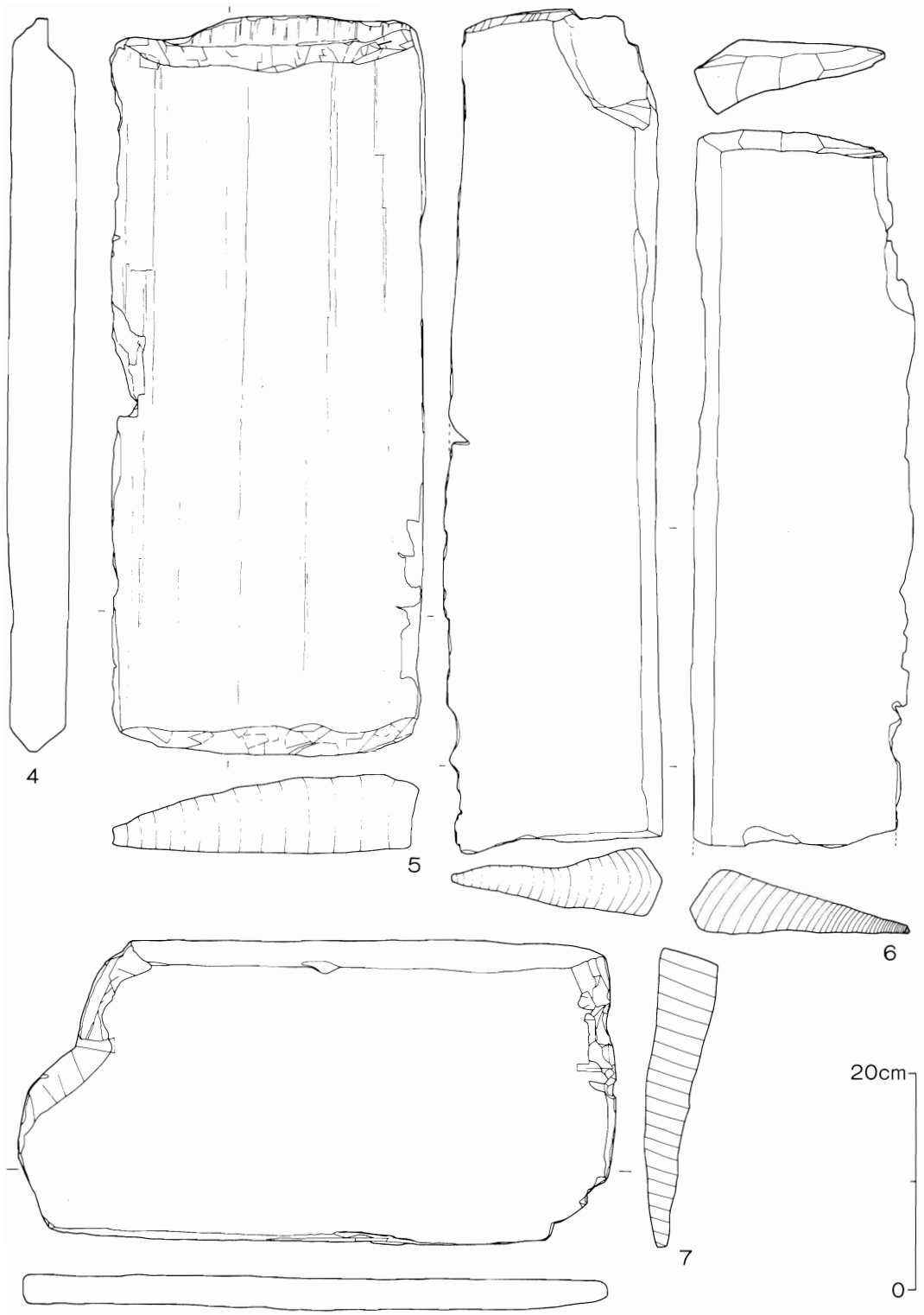
エブリ　第121図54は5本歯のエブリである。長さ27.6cm、幅9.6cm、厚さ2.0cmを測る柄を装着する孔は貫通しているが、その内側や歯の周辺は仕上げが完成されていない。

田下駄　第140図には田下駄と考えられるものを示した。このうち、155・157は大足と考えられる。第144図175や176もこの種に入るかもしれない。また、第145図の板状木製品も田下駄の未成品の可能性もあろう。材質もスギが多い。

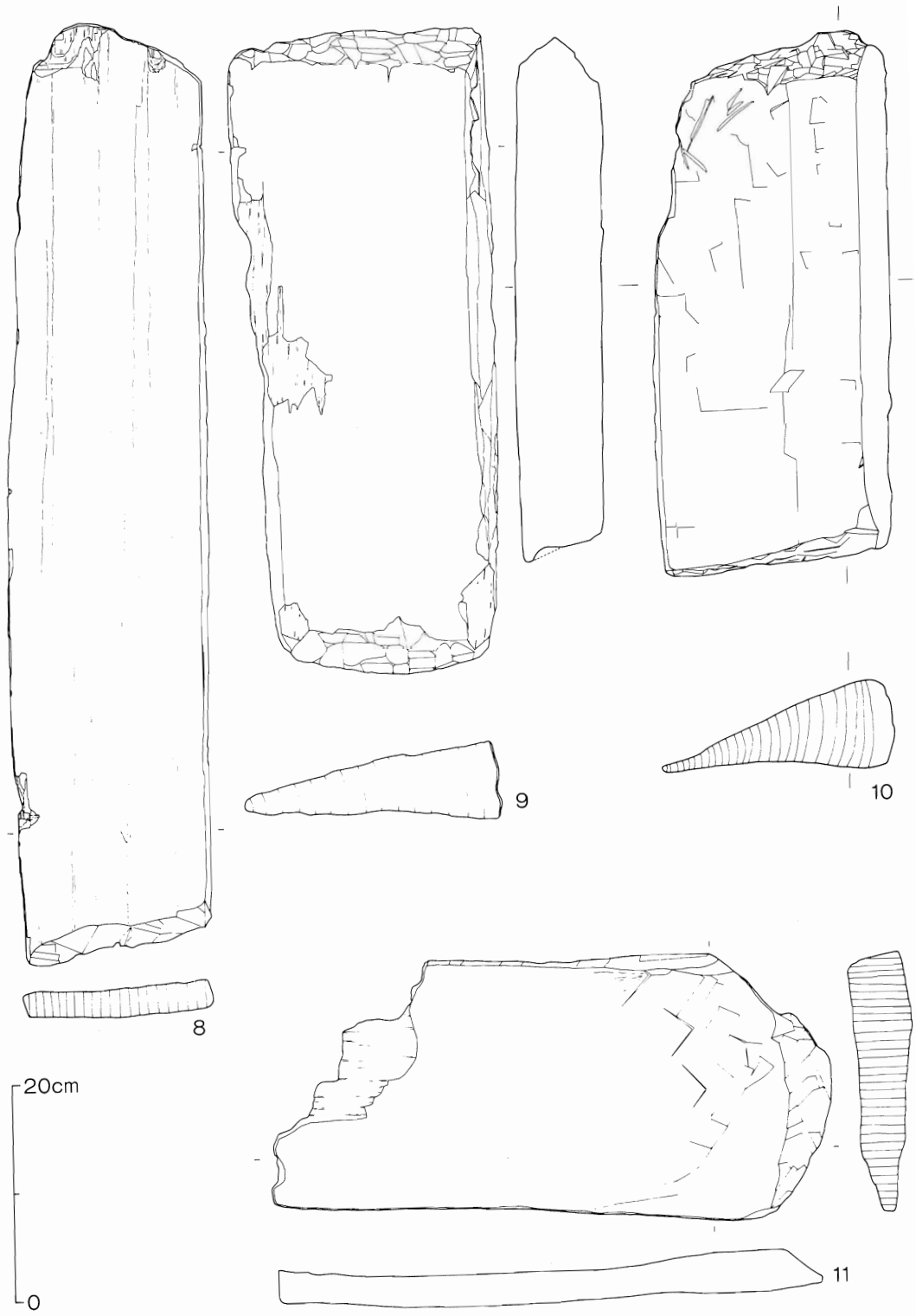
土掘具　第146図184・185は畑での種を播く時に使用する土掘具と考えた。184は長さ29.4cm、185は長さ43.2cmを測る。185を例にとれば両端とも尖らせているので、いずれの端も使用したと思われる。両者とも比較的径の小さな自然木の枝を柄とし、幹を加工して



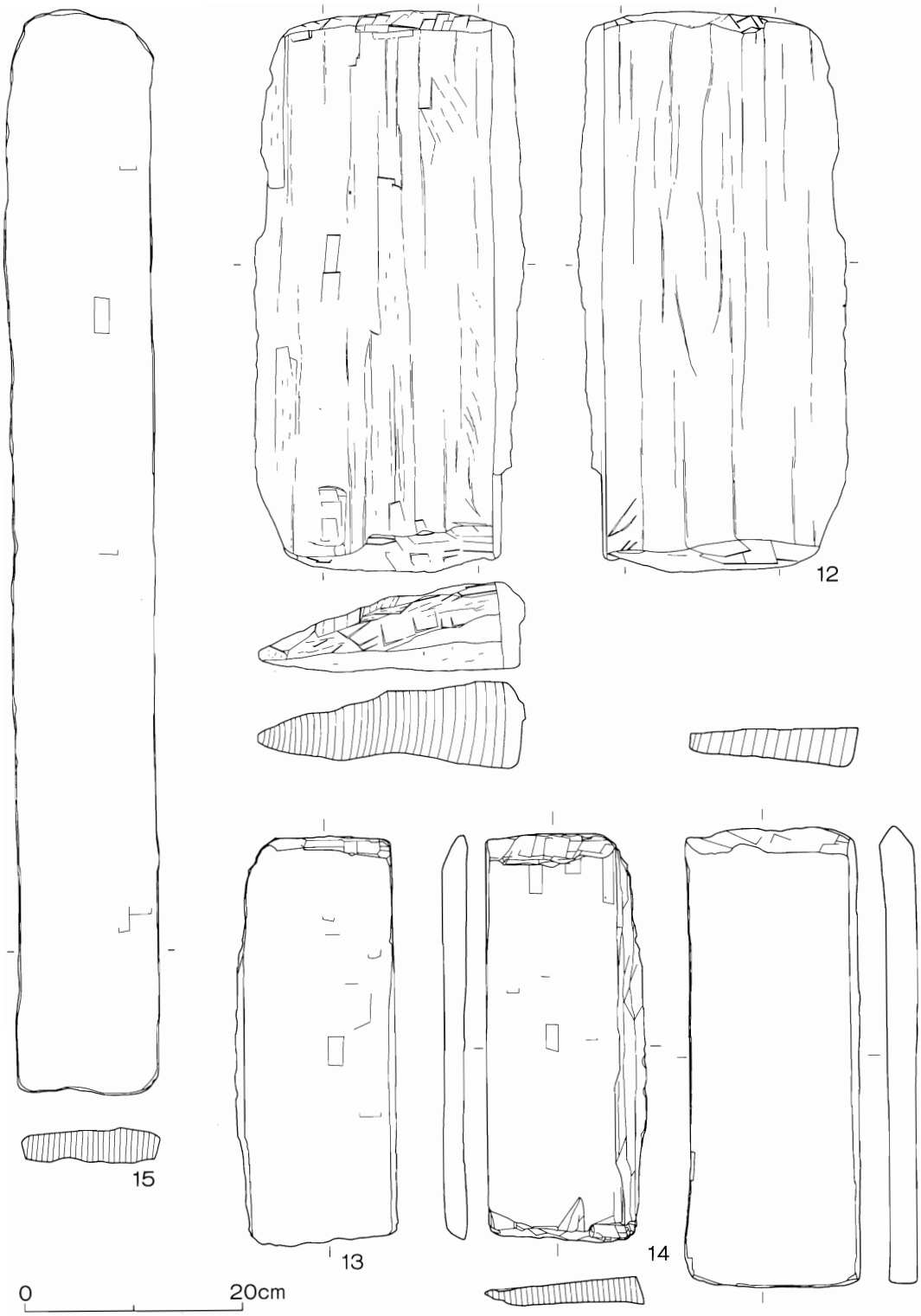
第111図　木製品実測図(1)



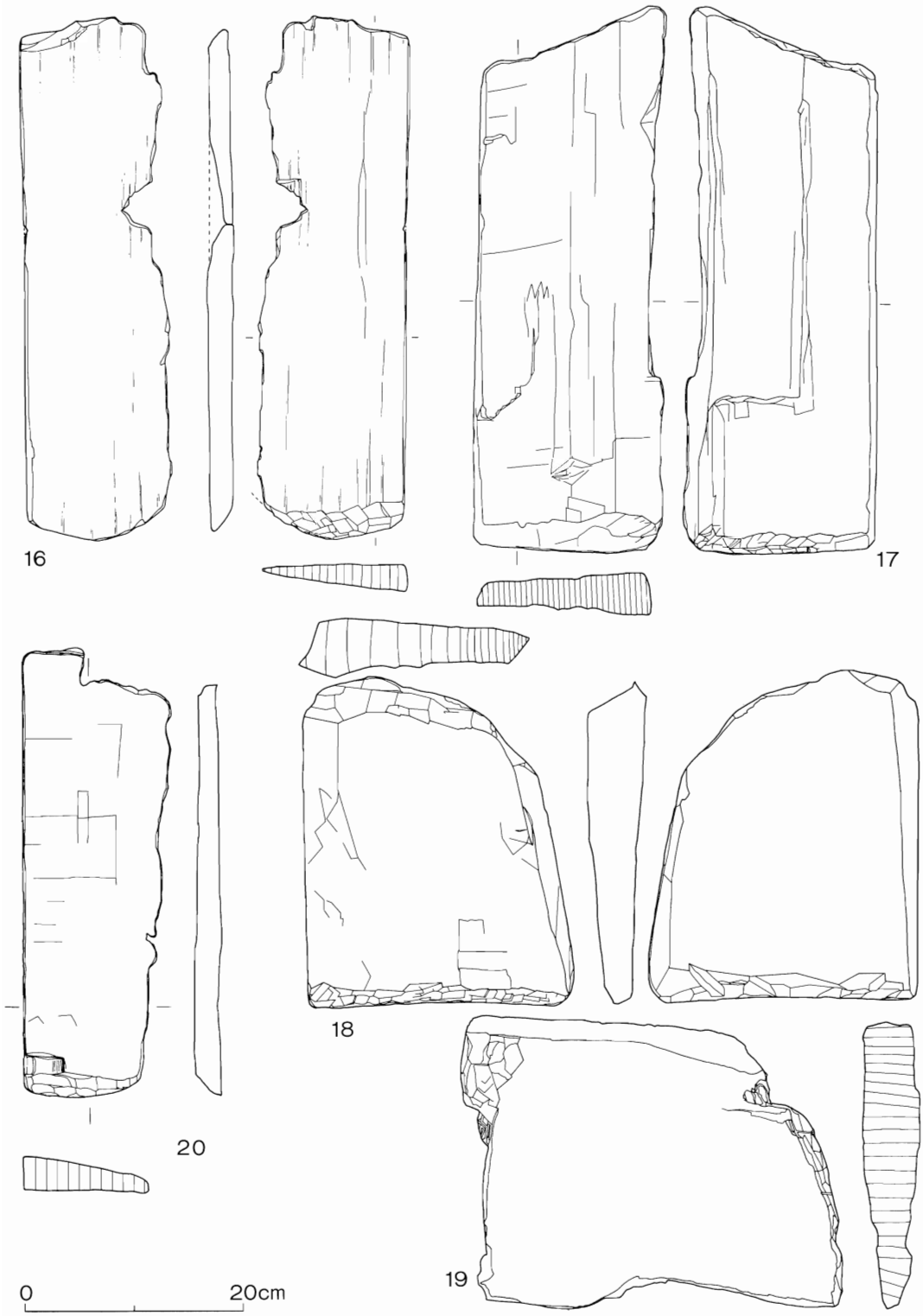
第112図　木製品実測図(2)



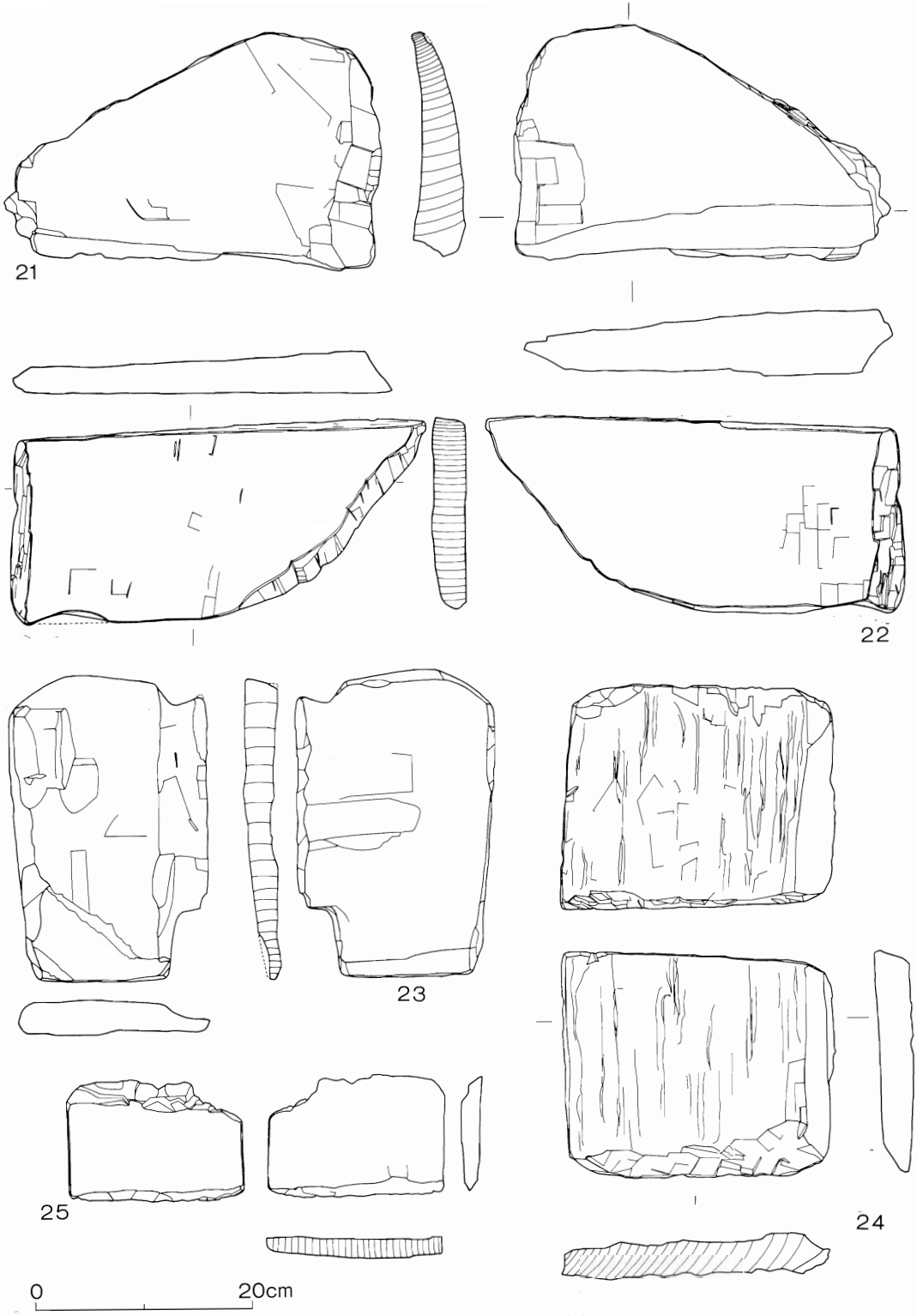
第113図　木製品実測図(3)



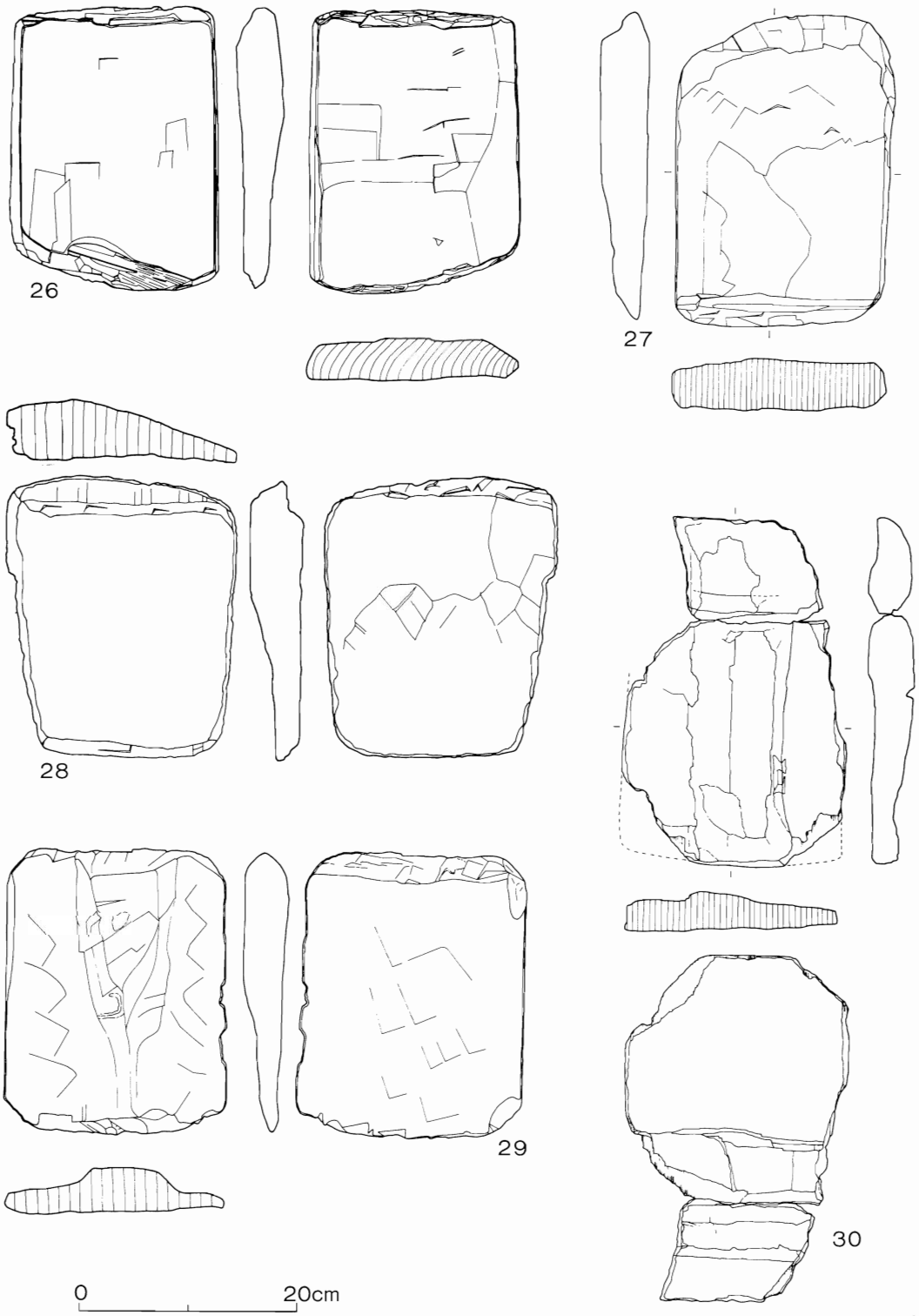
第114図　木製品実測図(4)



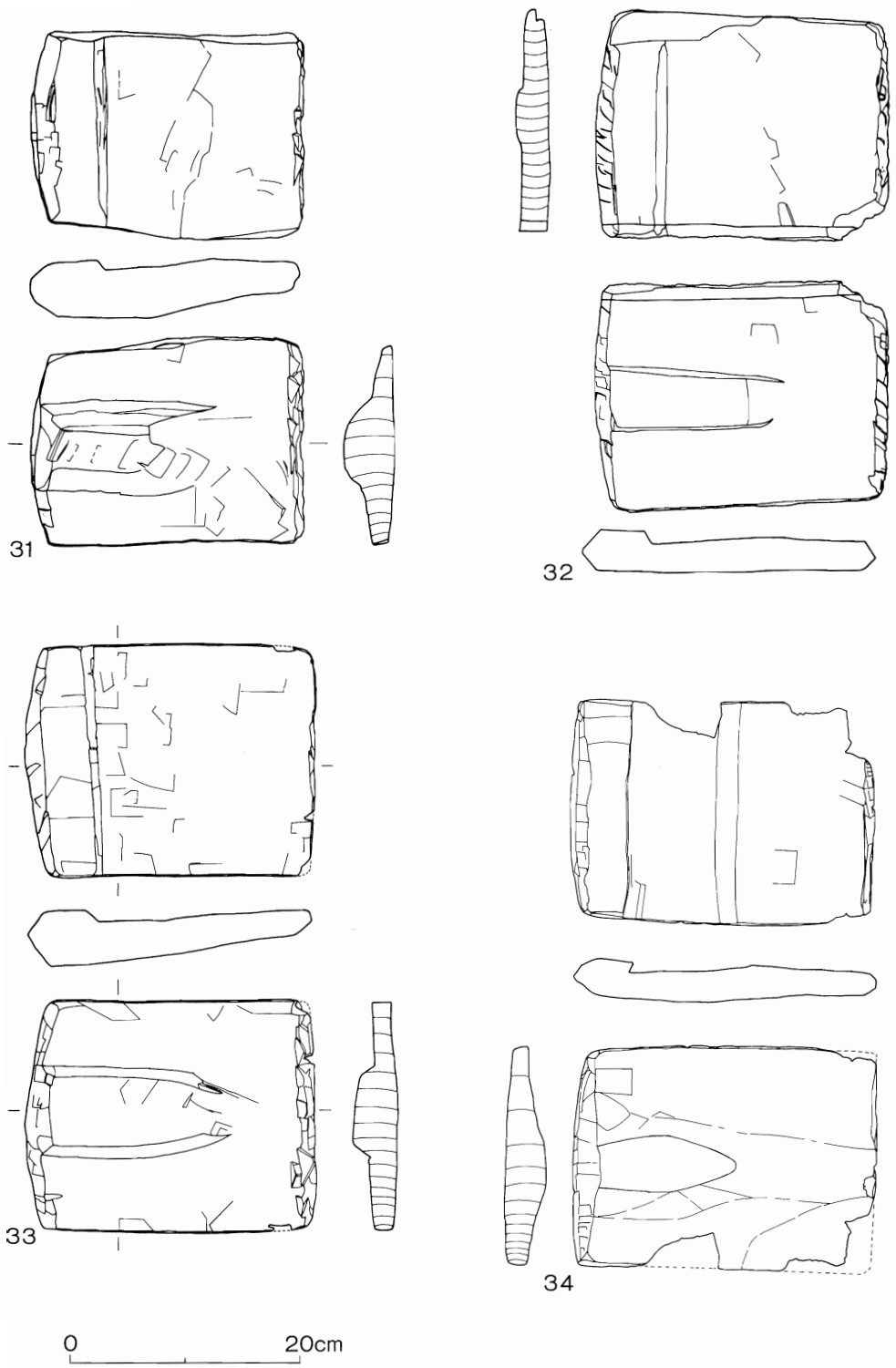
第115図　木製品実測図(5)



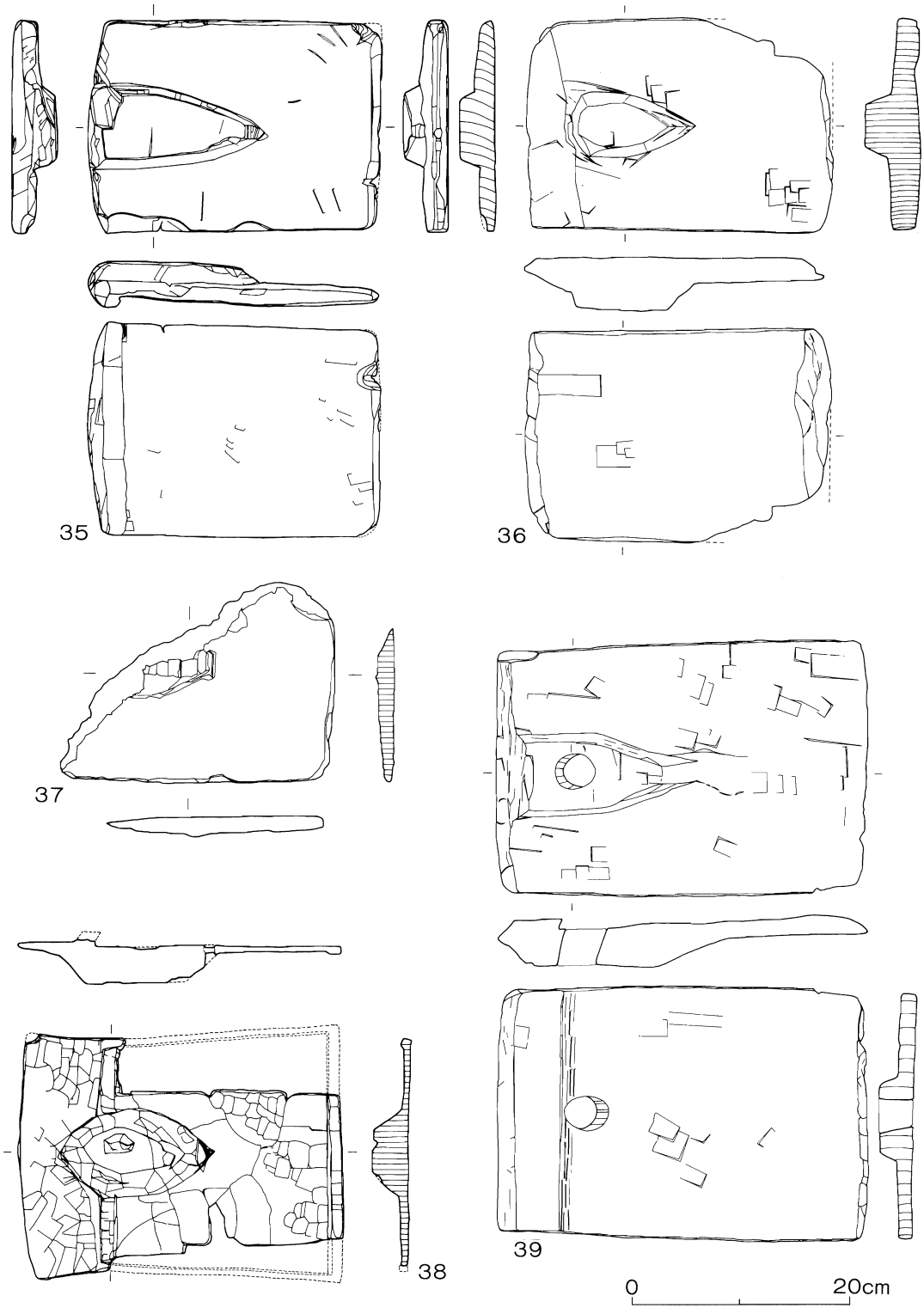
第116図　木製品実測図(6)



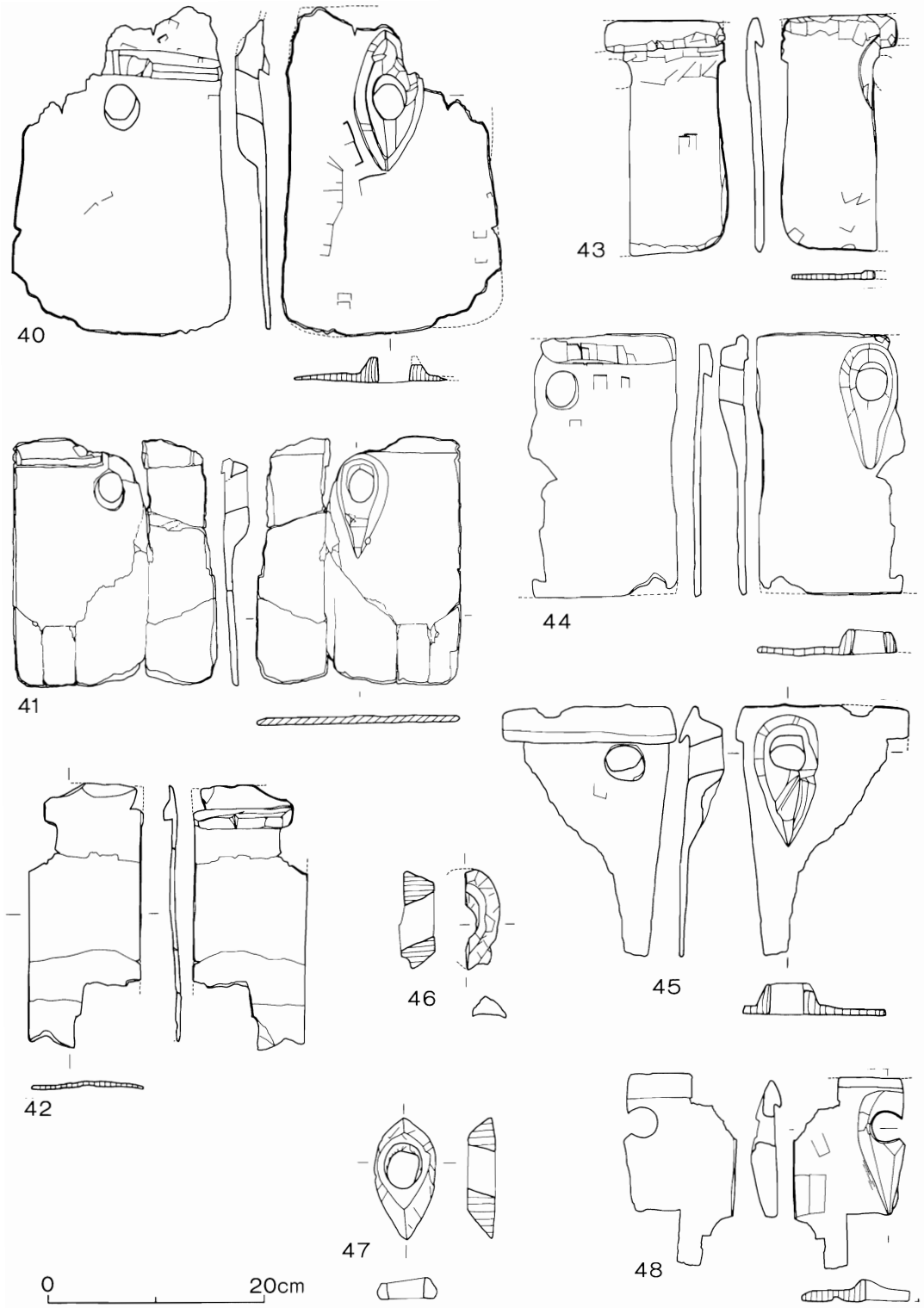
第117図　木製品実測図(7)



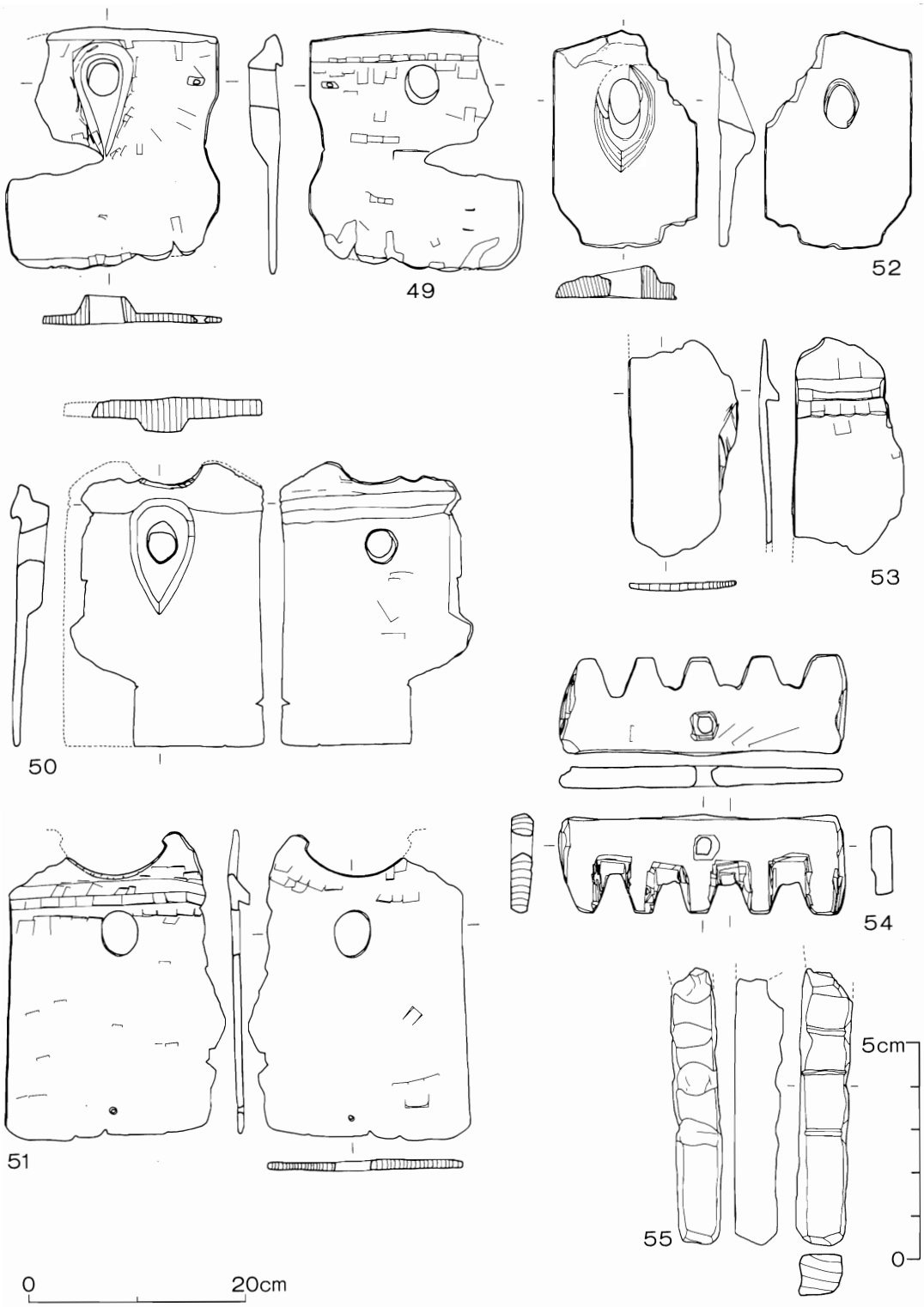
第118図　木製品実測図(8)



第119図　木製品実測図(9)

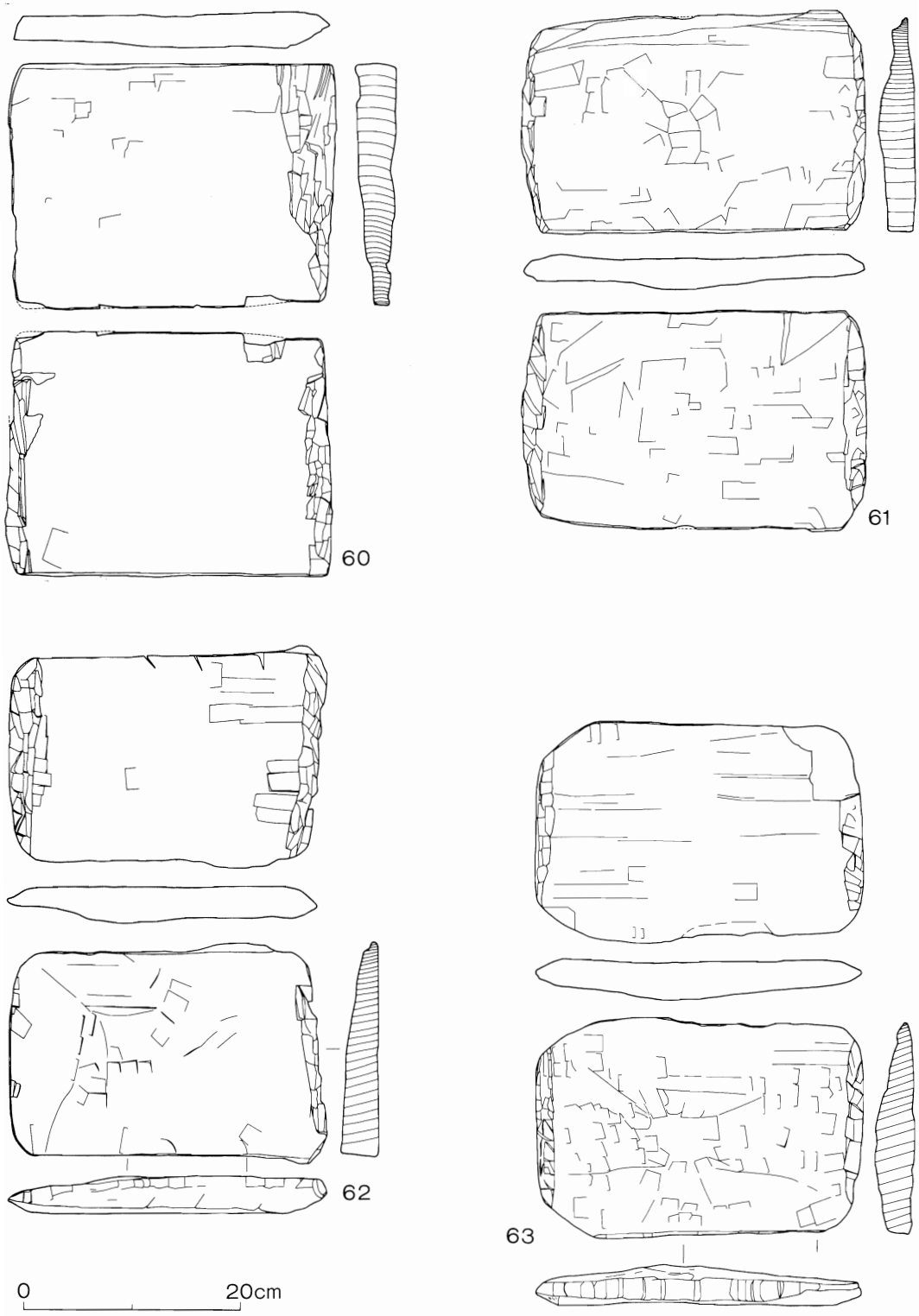


第120図　木製品実測図(10)

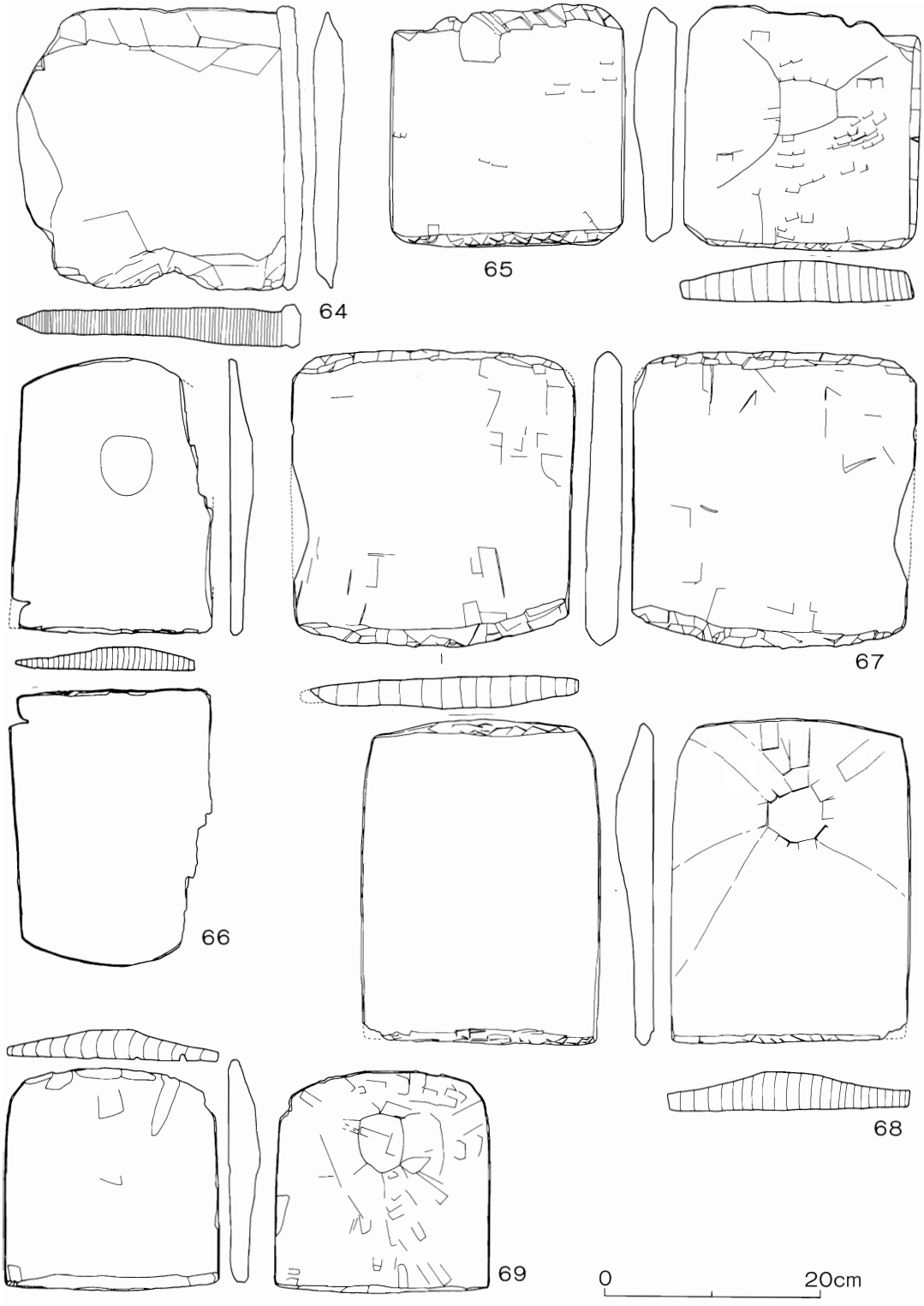


第121図　木製品実測図(11)

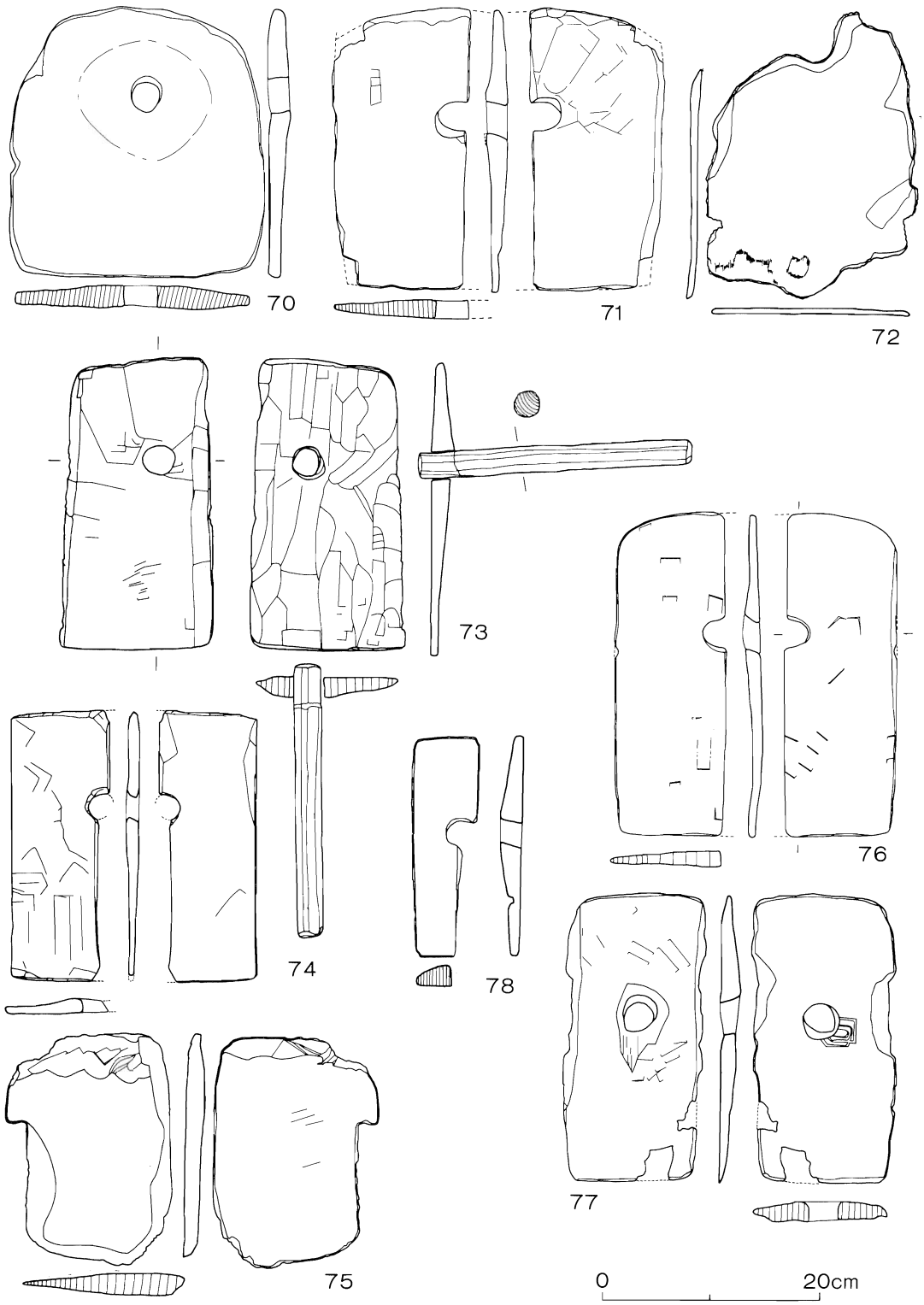
第122図　木製品実測図(12)



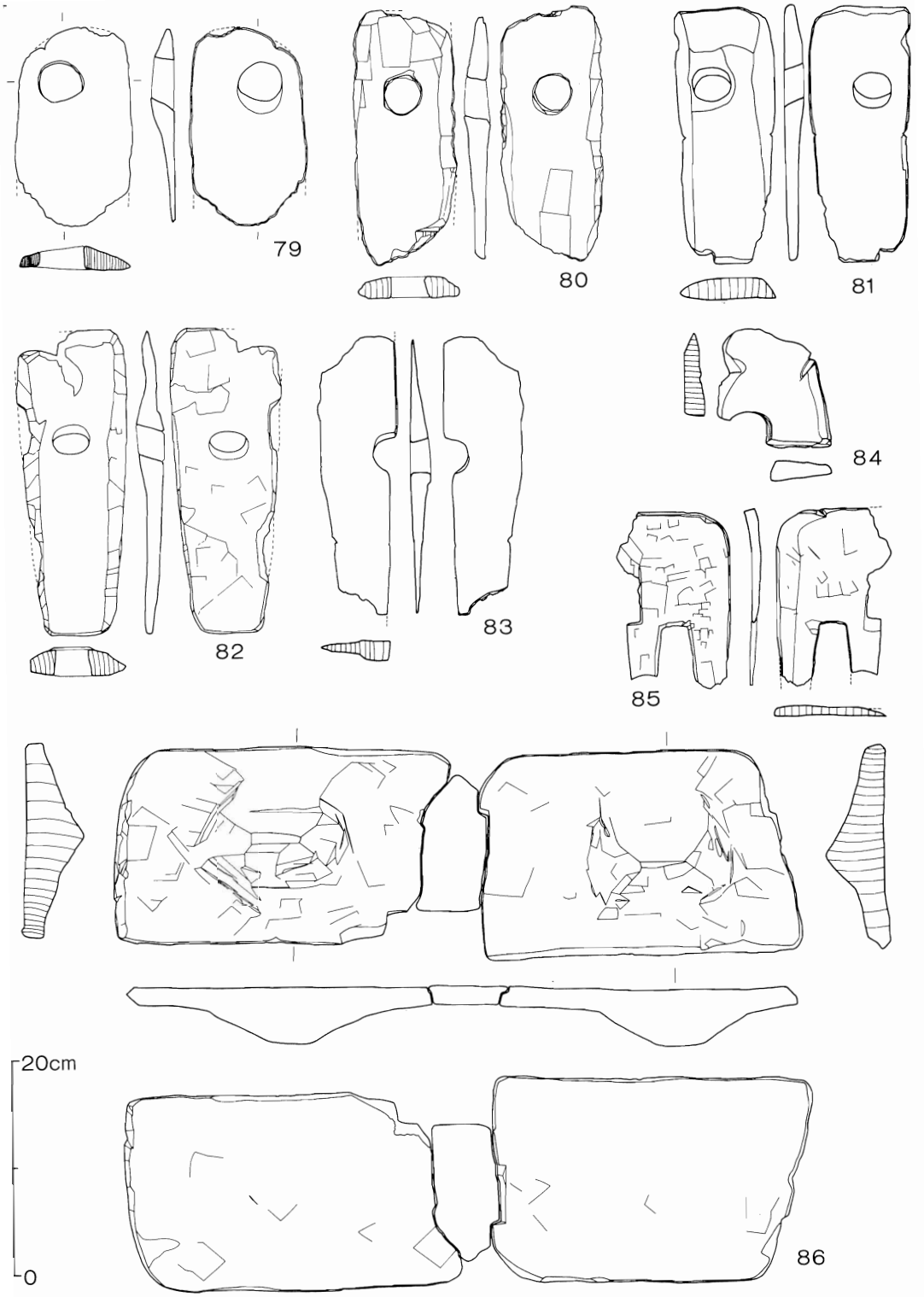
第123図　木製品実測図(13)



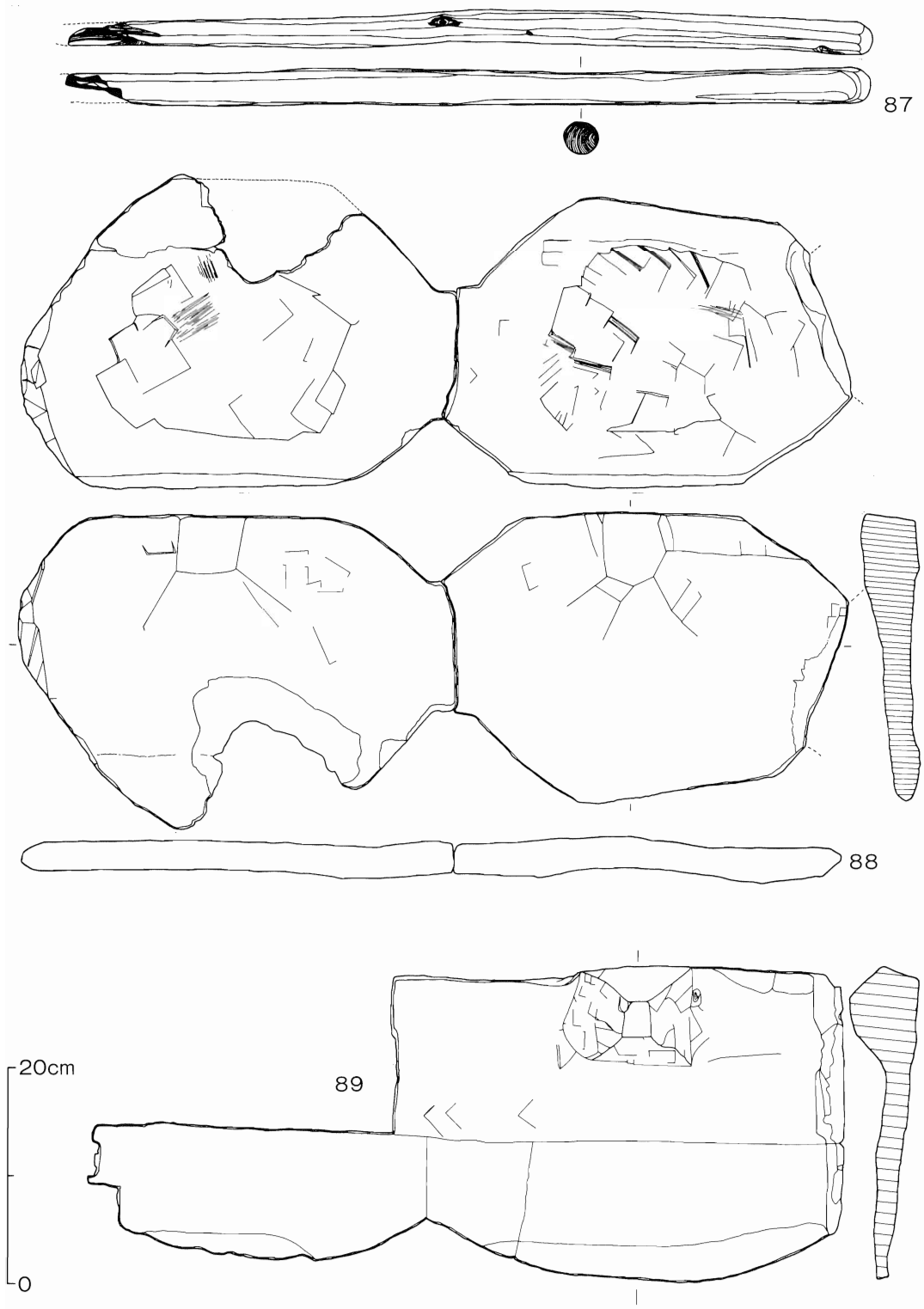
第124図　木製品実測図(14)



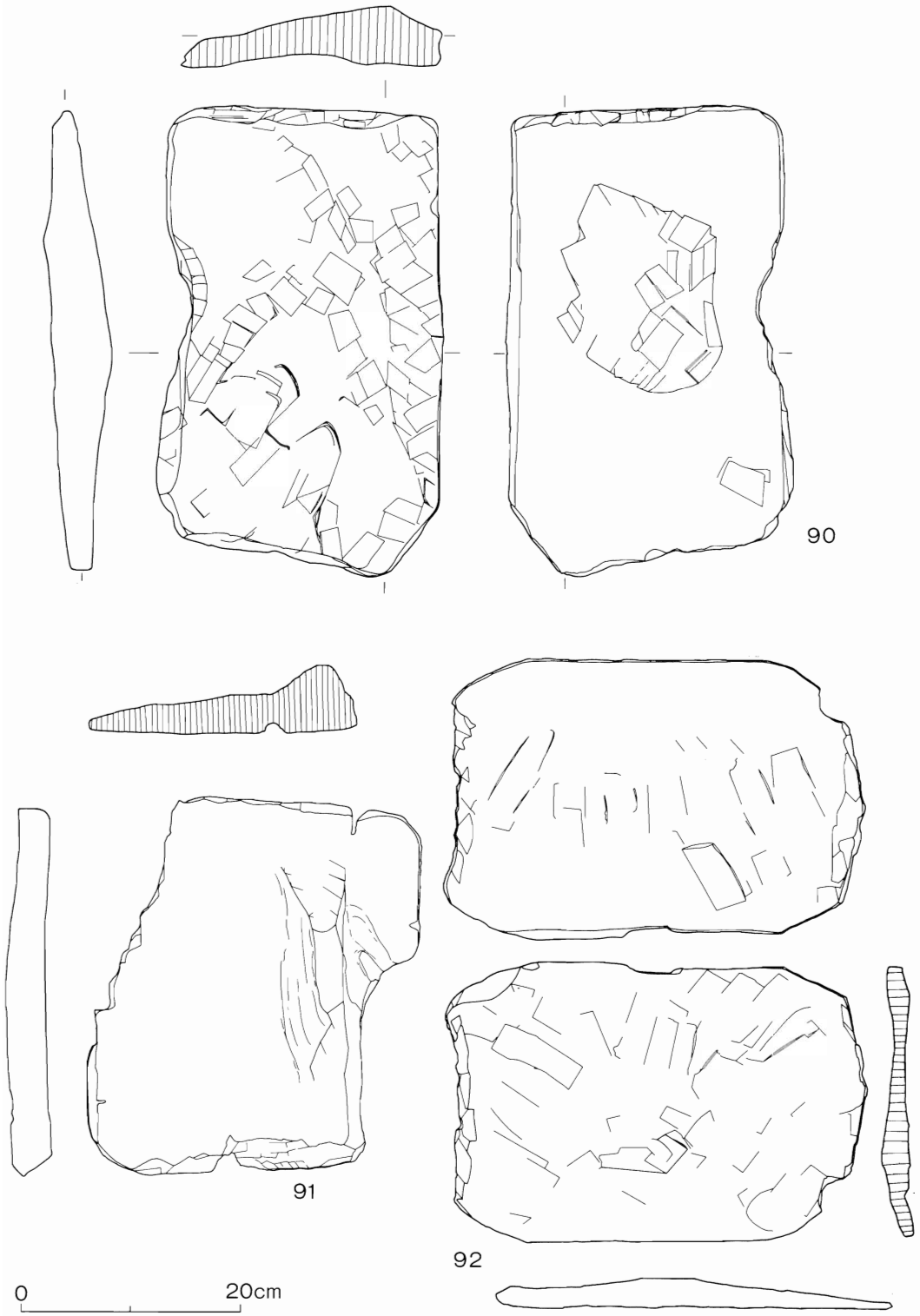
第125図　木製品実測図(15)



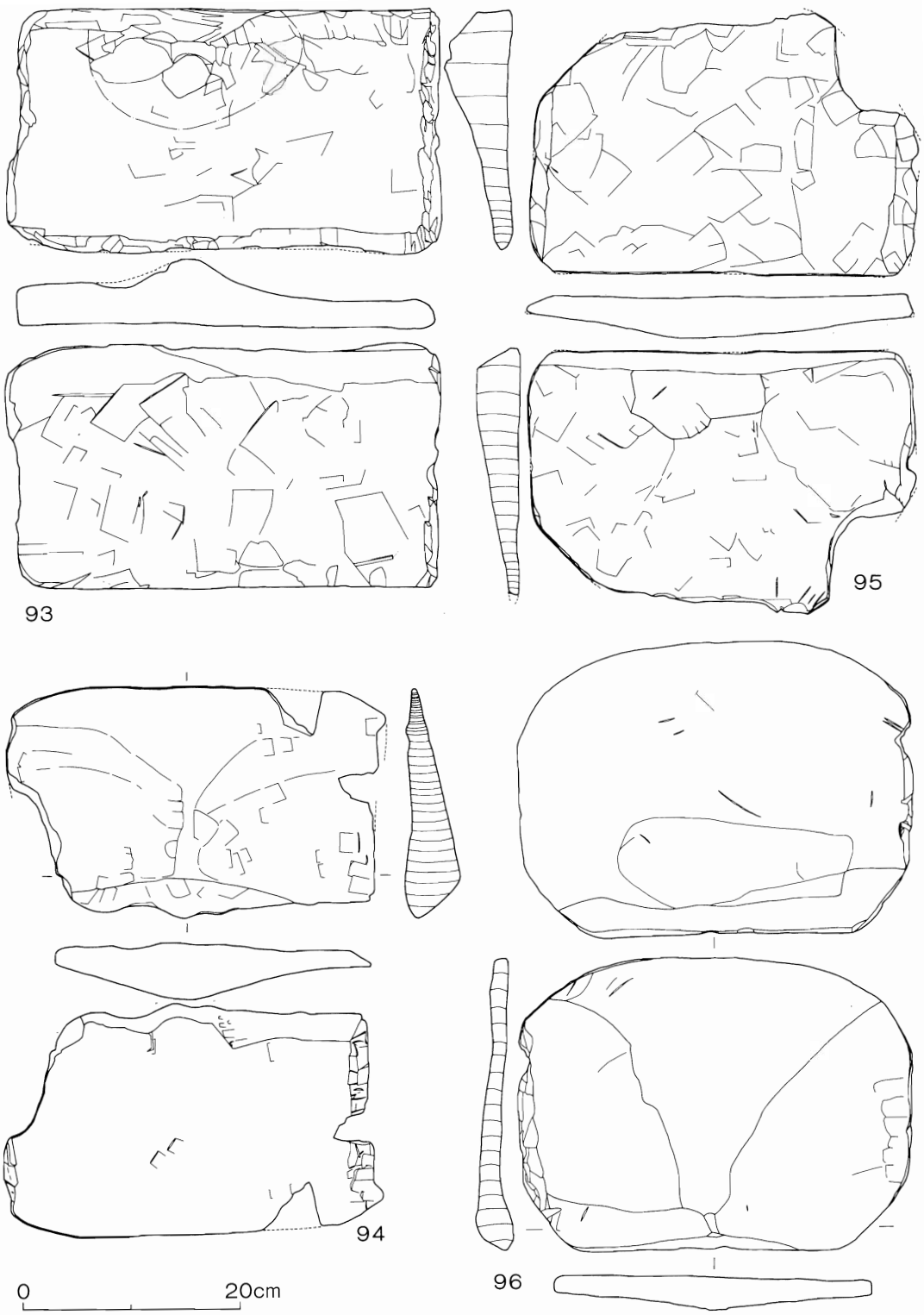
第126図　木製品実測図(16)



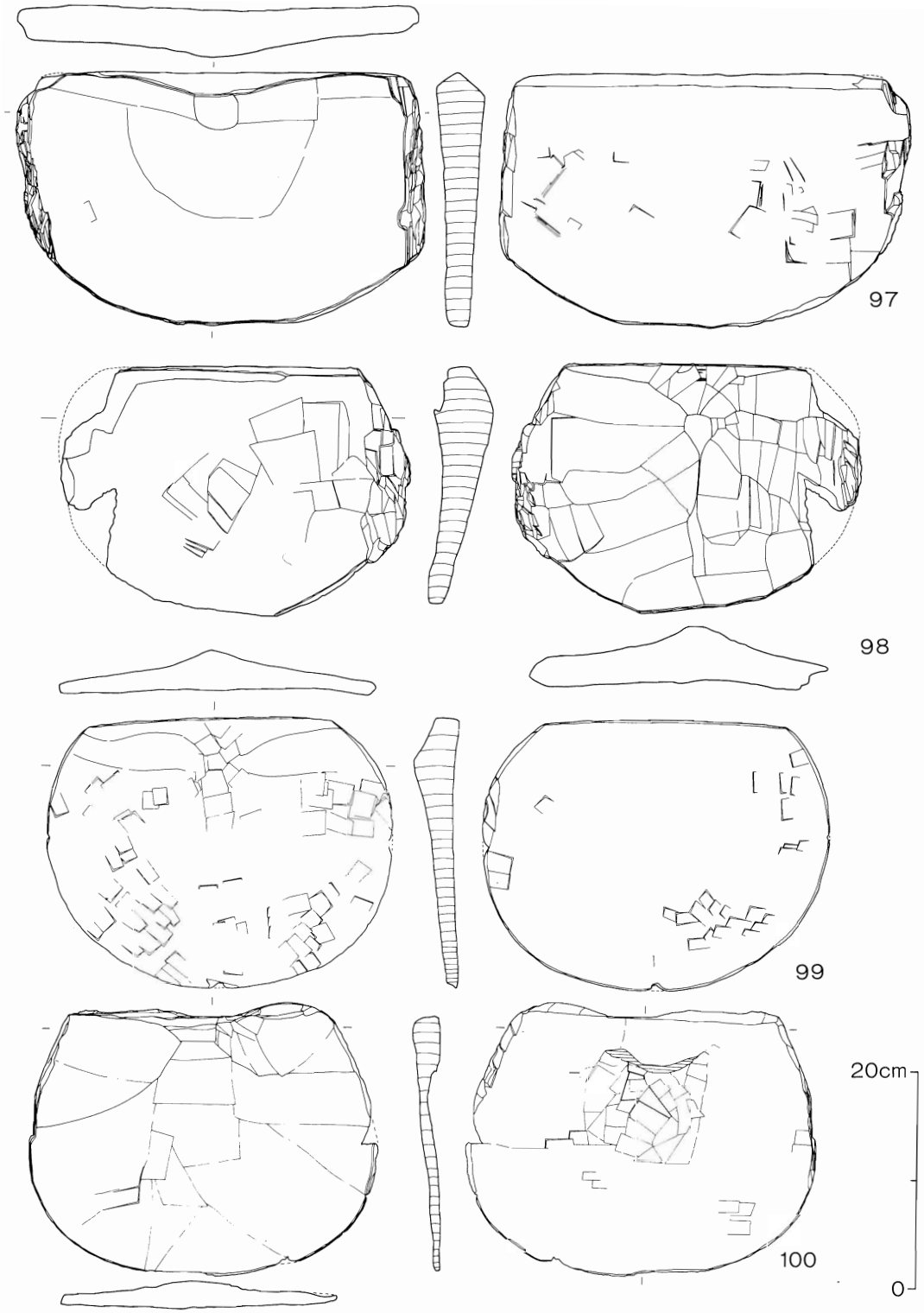
第127図　木製品実測図(17)



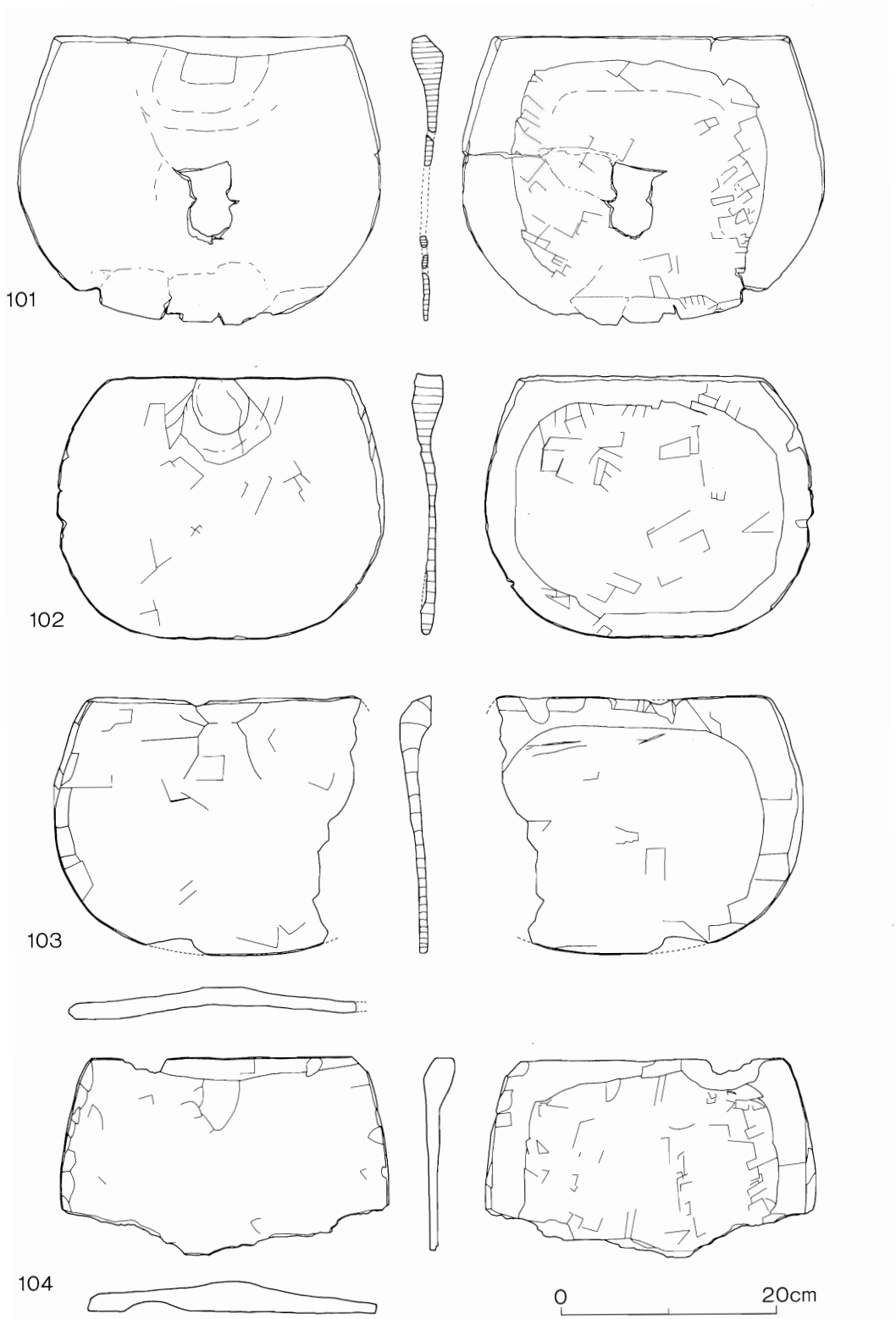
第128図　木製品実測図(18)



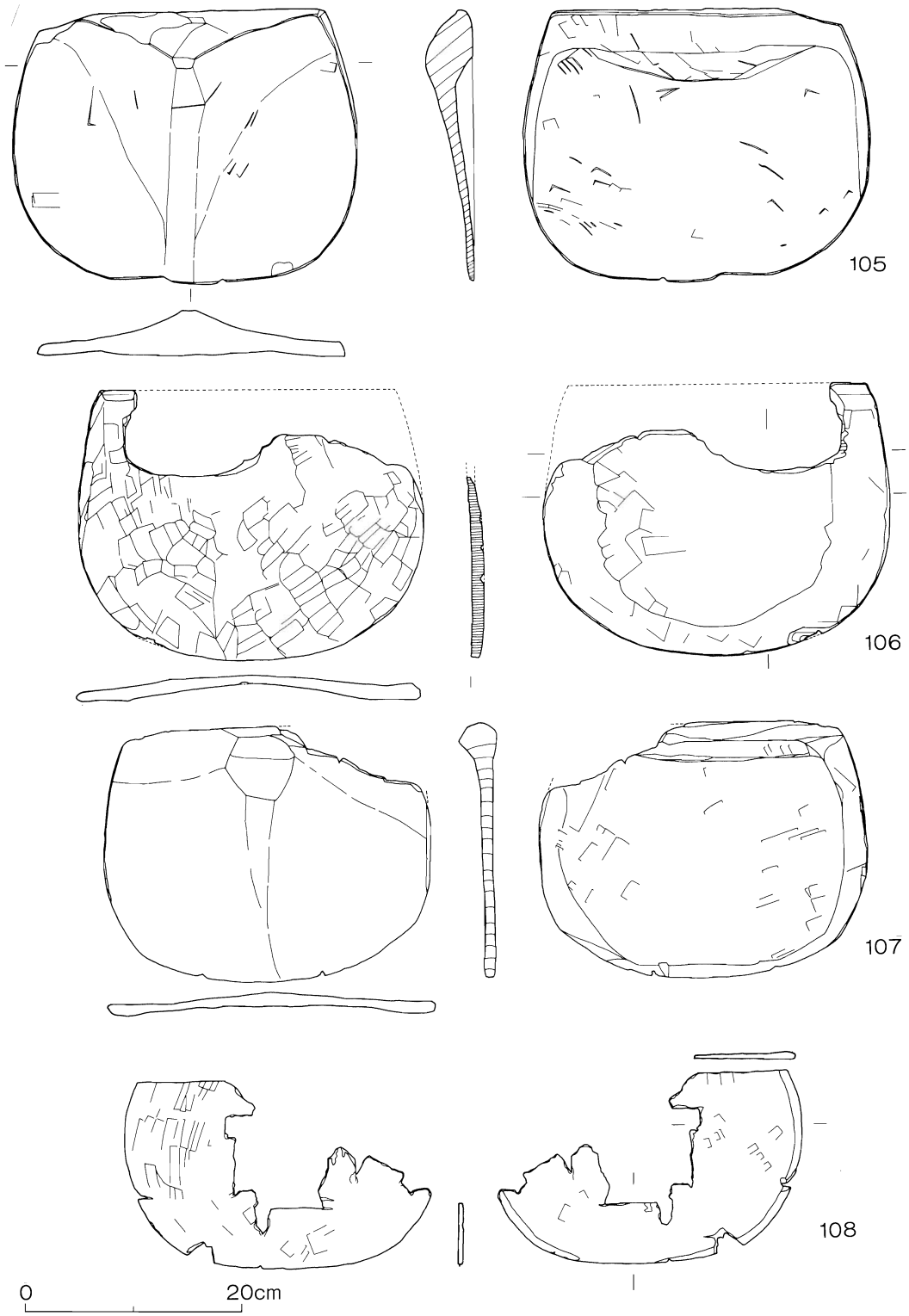
第129図　木製品実測図(19)



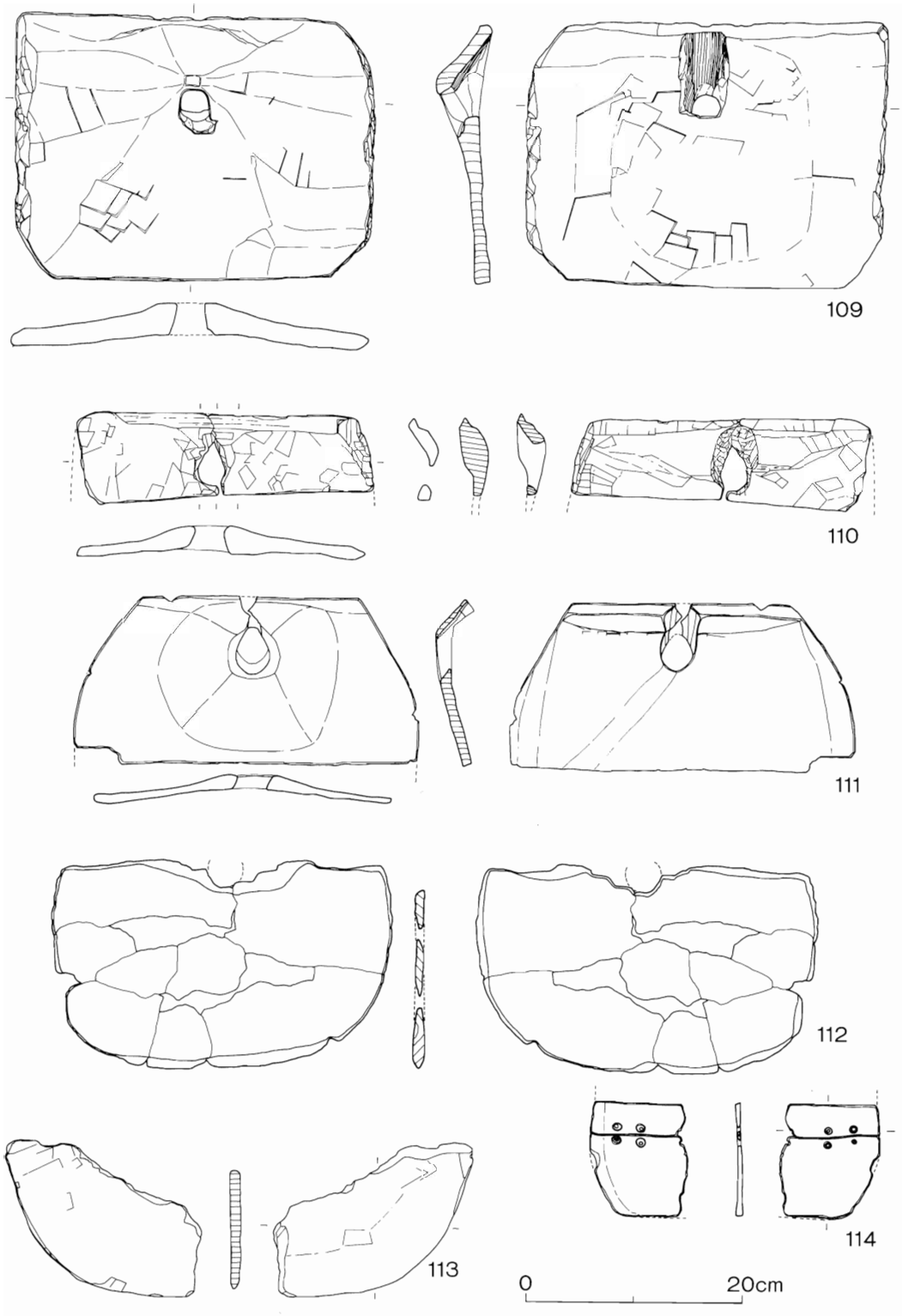
第130図　木製品実測図(20)



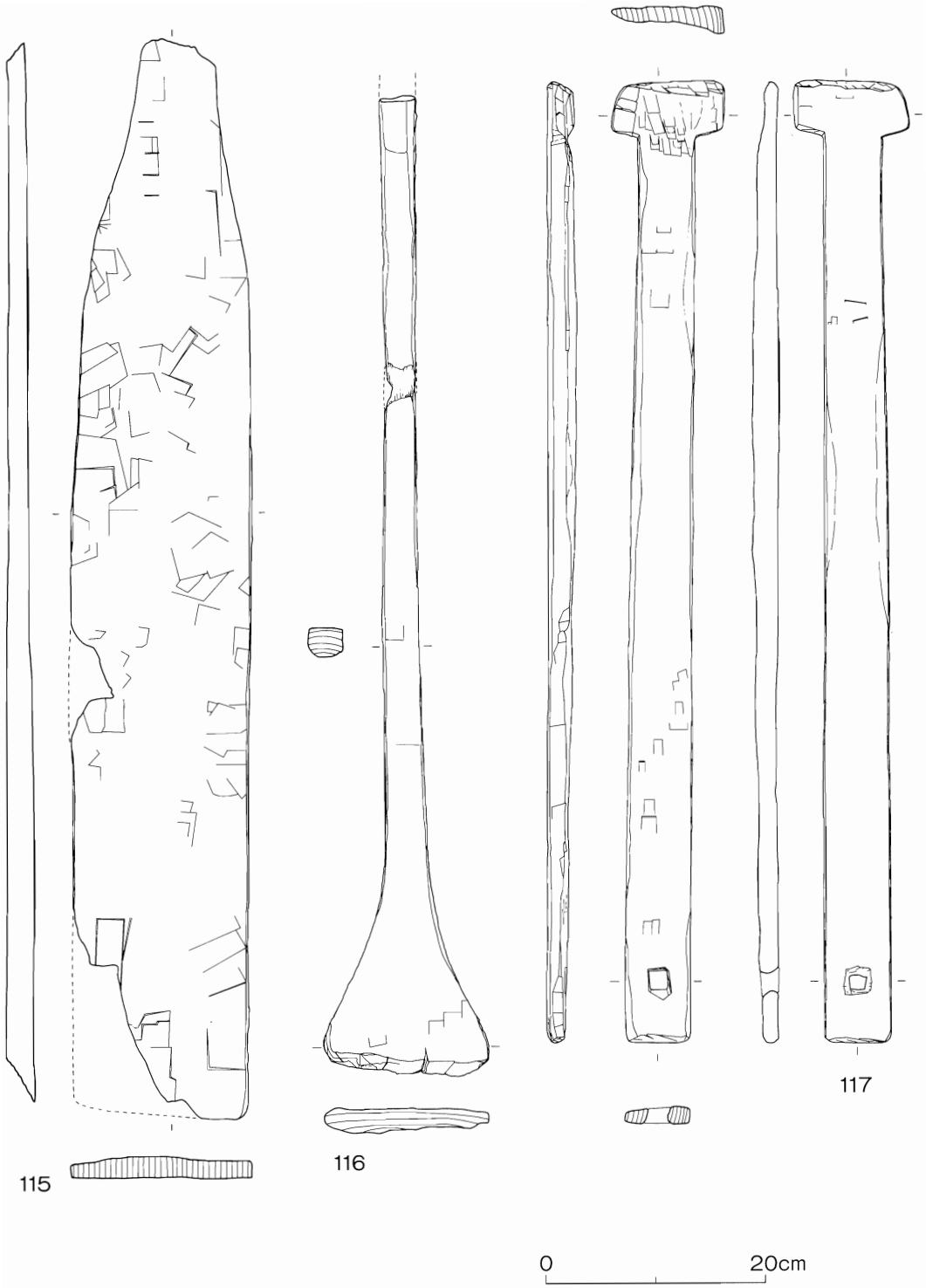
第131図　木製品実測図(21)



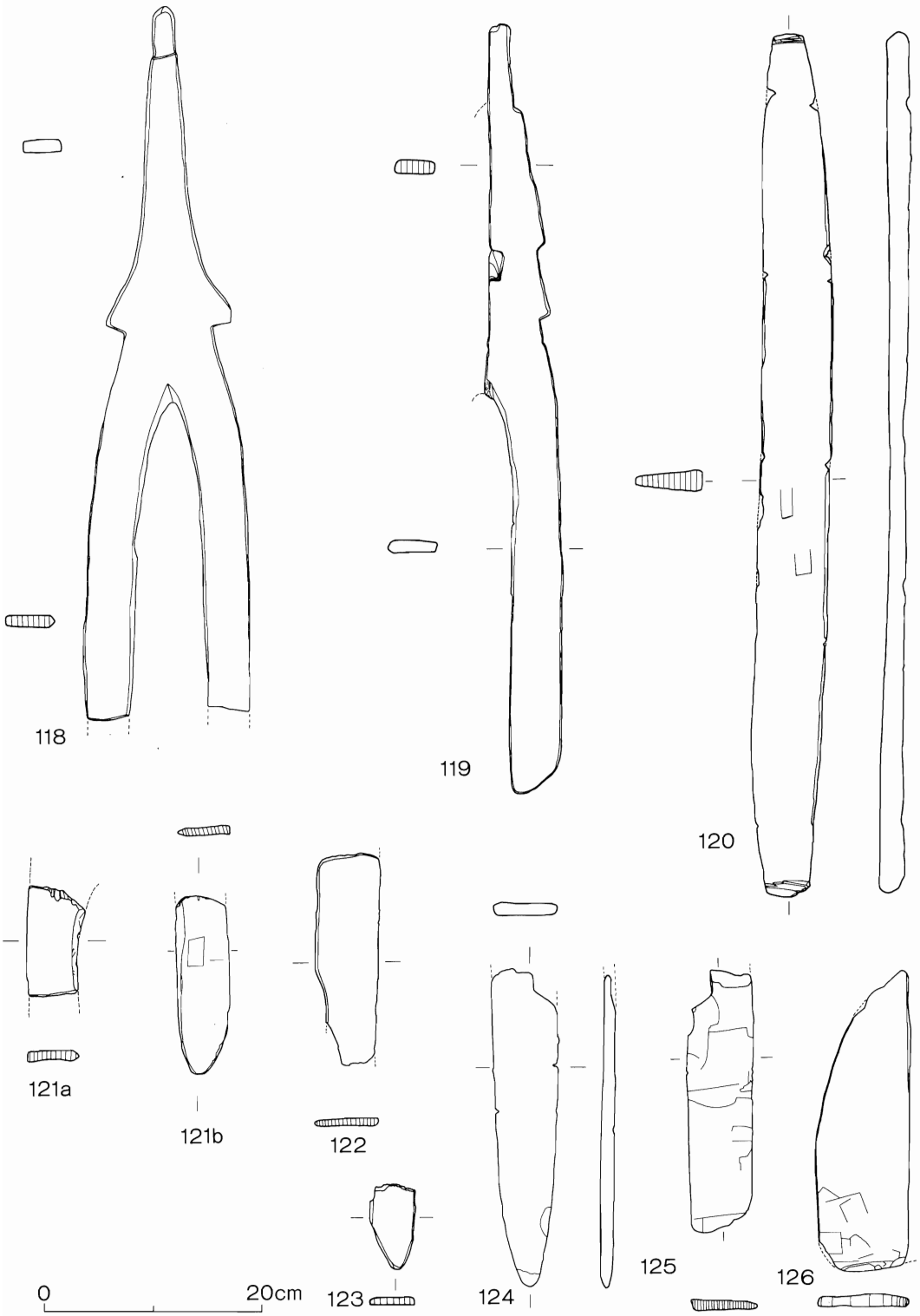
第132図　木製品実測図(22)



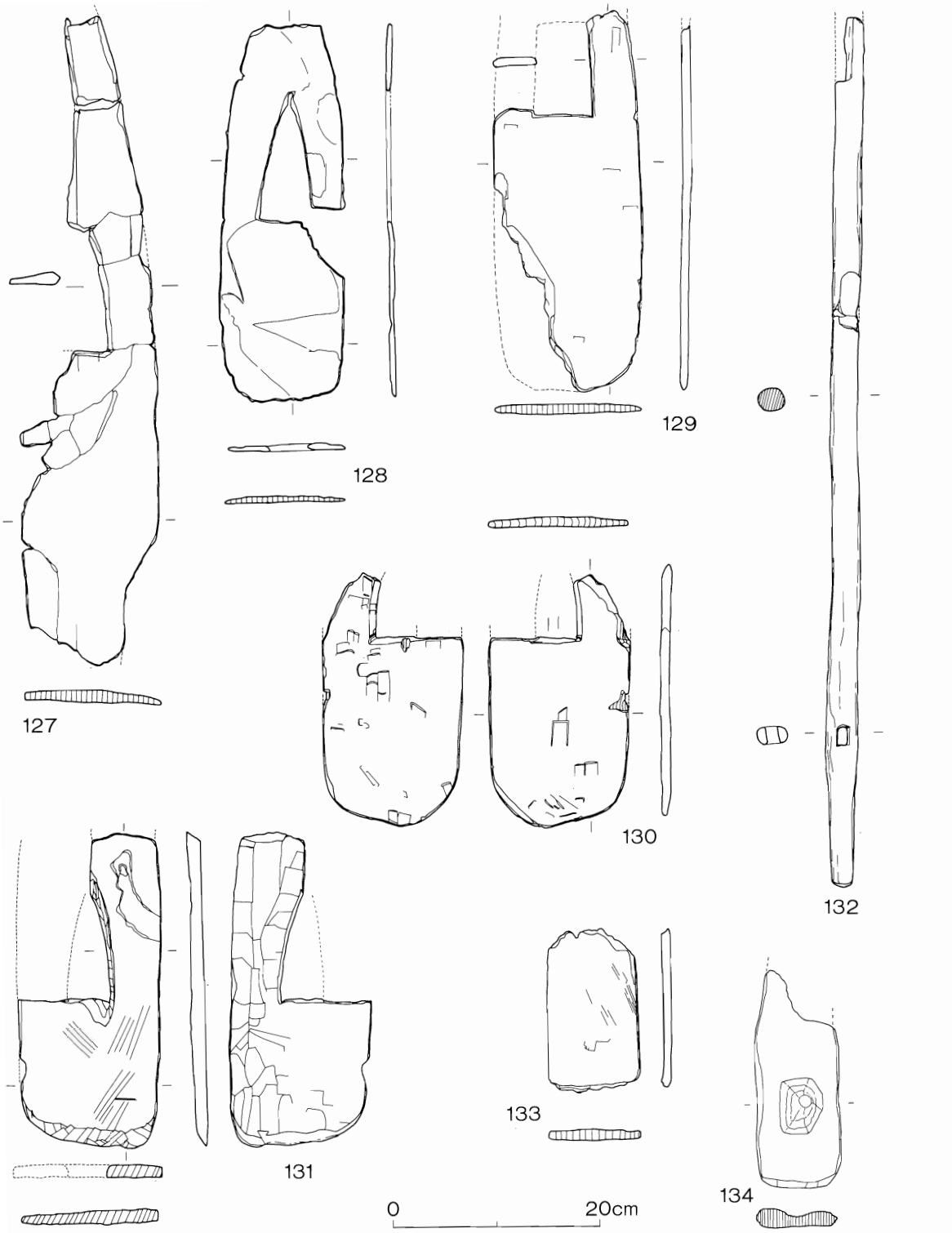
第133図　木製品実測図(23)



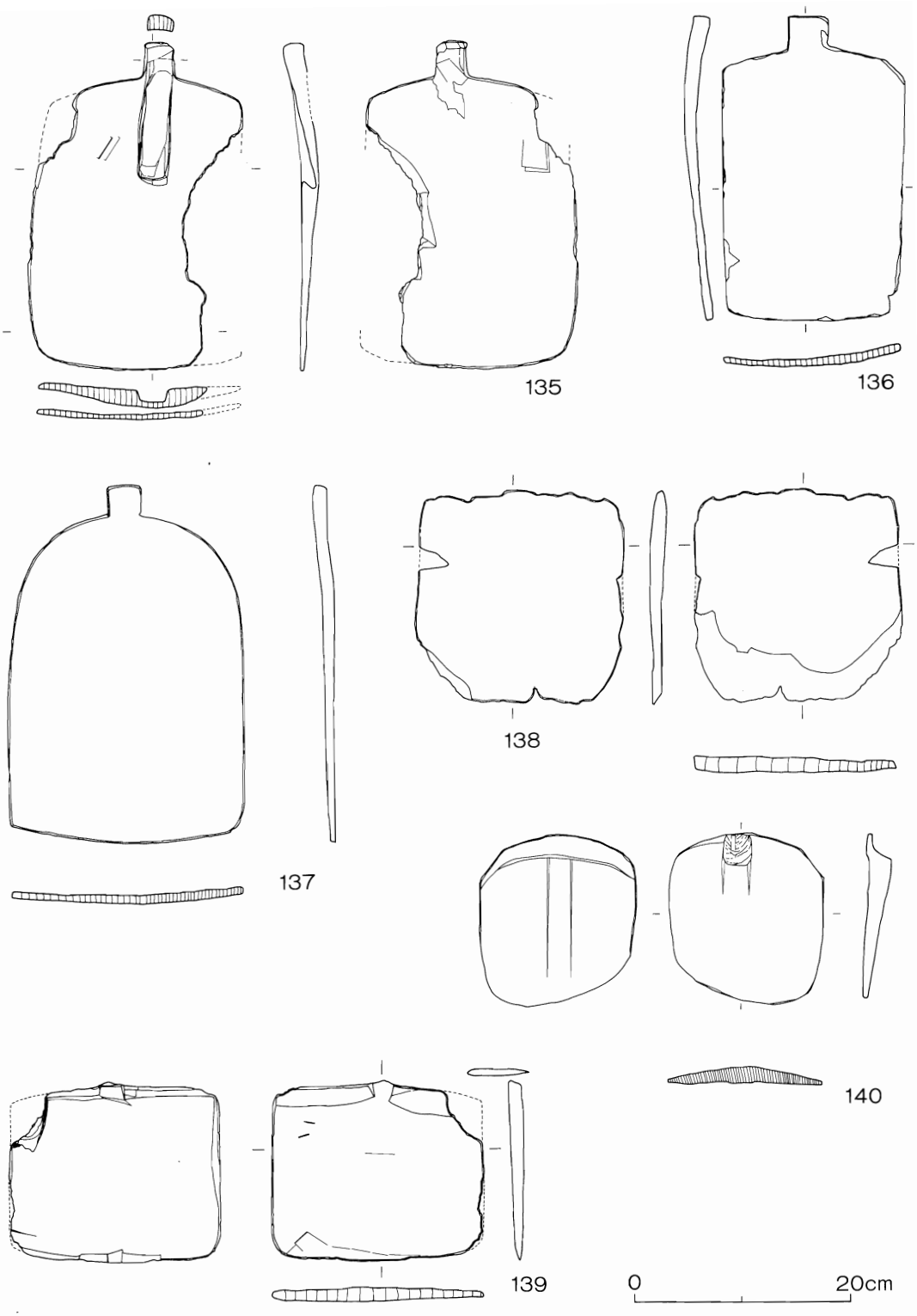
第134図　木製品実測図(24)



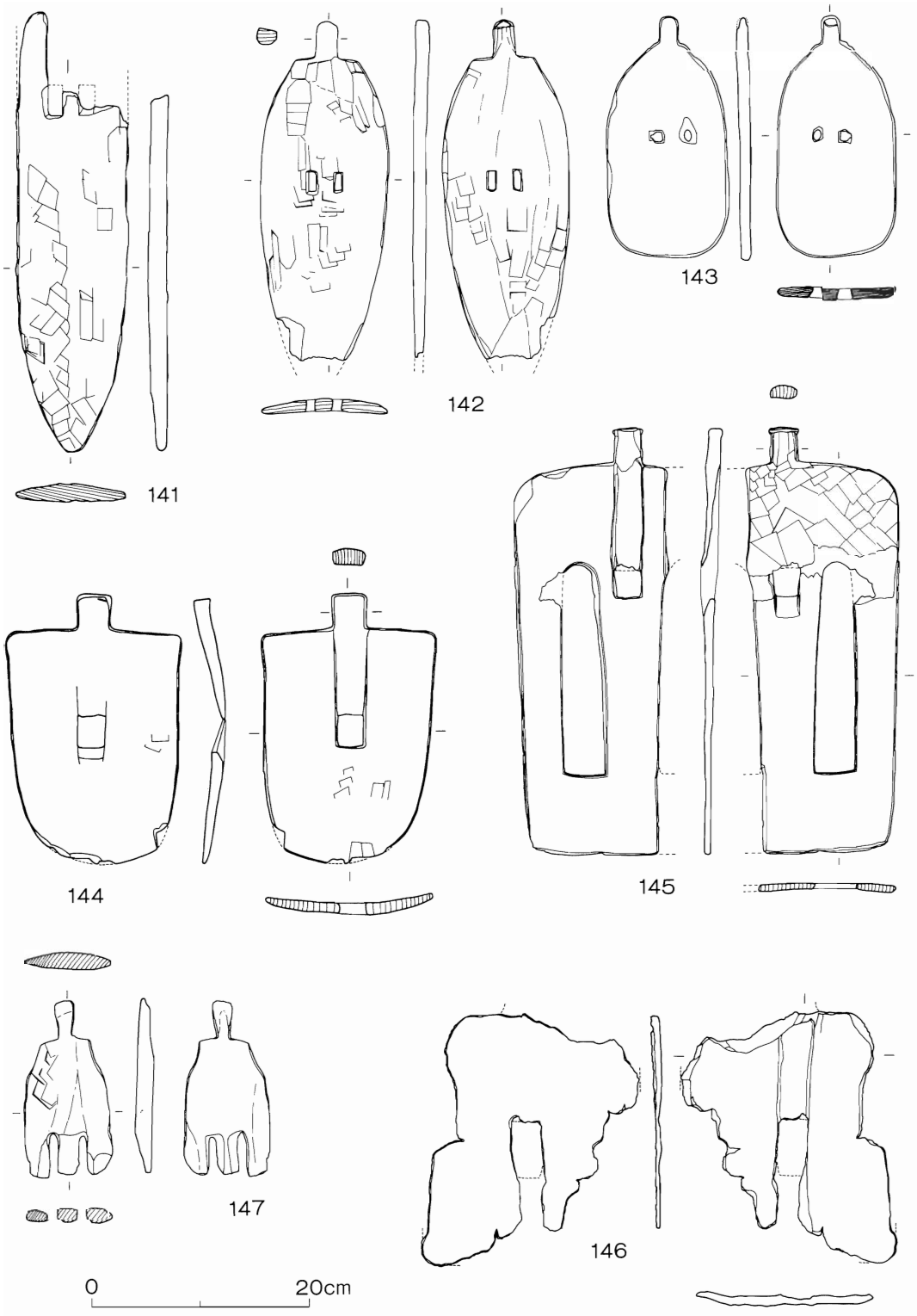
第135図　木製品実測図(25)



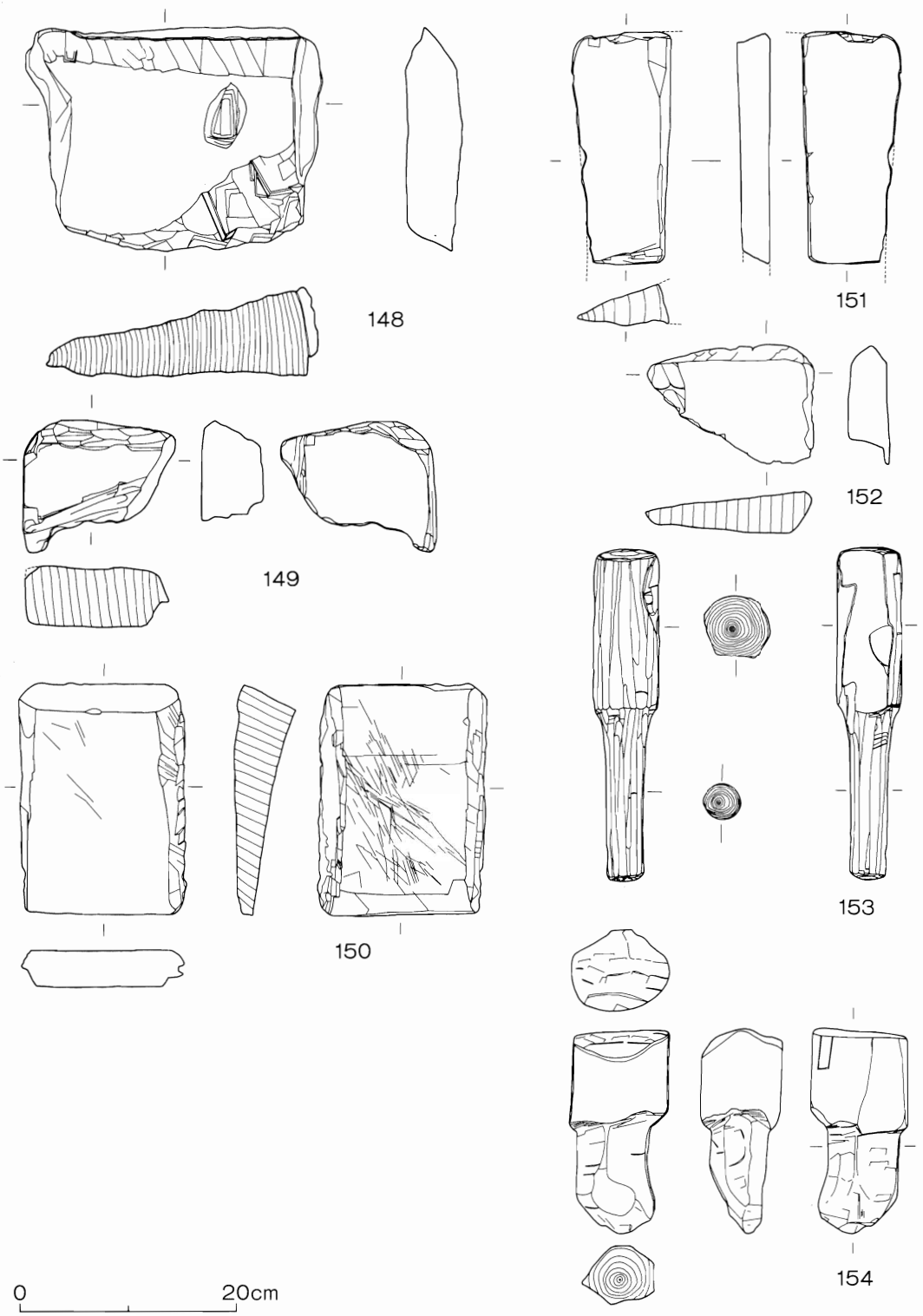
第136図　木製品実測図(26)



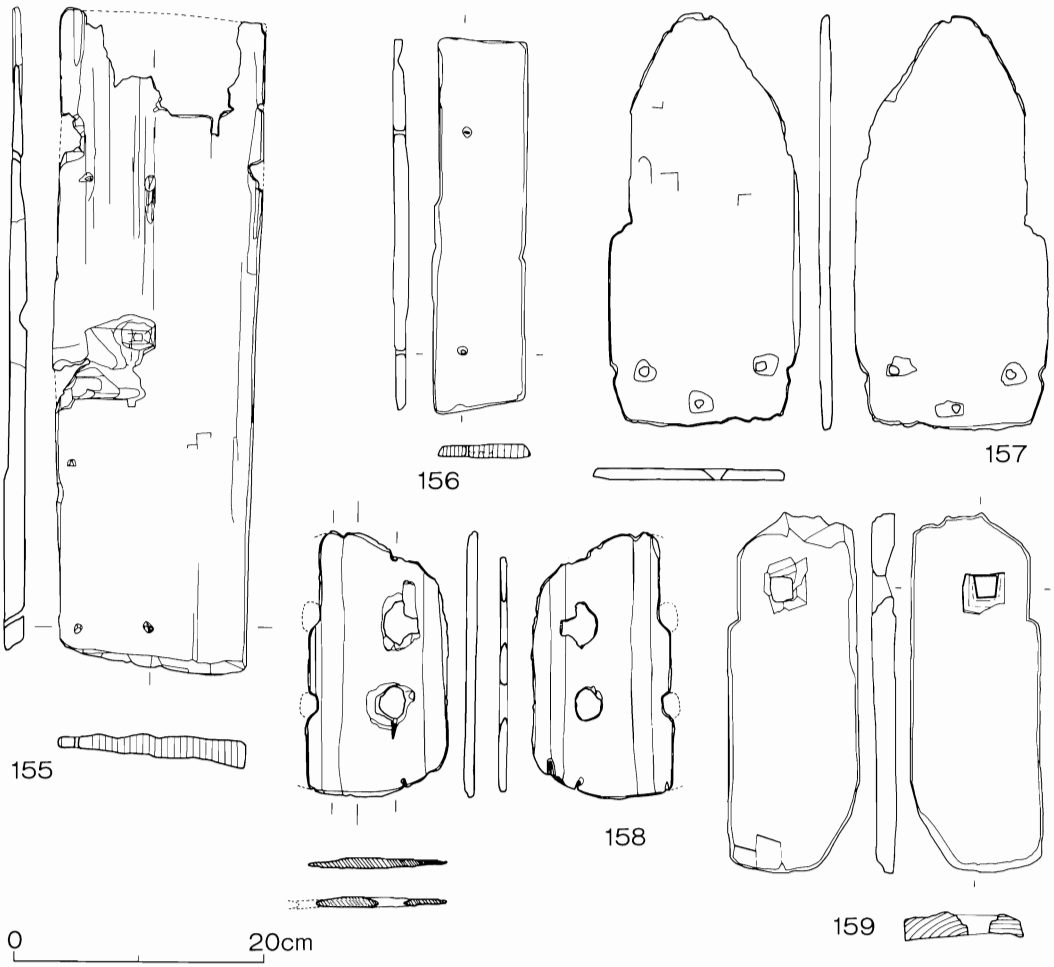
第137図　木製品実測図(27)



第138図　木製品実測図(28)



第139図　木製品実測図(29)



第140図　木製品実測図(30)

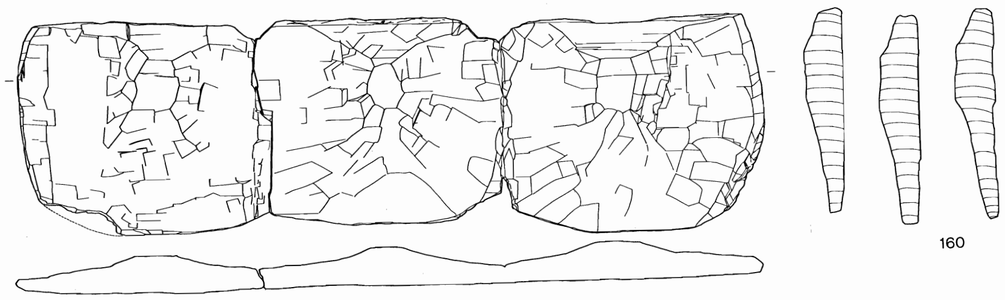
尖らせている。

砧（横槌） 153は砧の完成品で、長さは32.4cm。使用の為に一部凹みができている。154は小形の砧の未成品であろうか。砧としてはやや疑わしい。

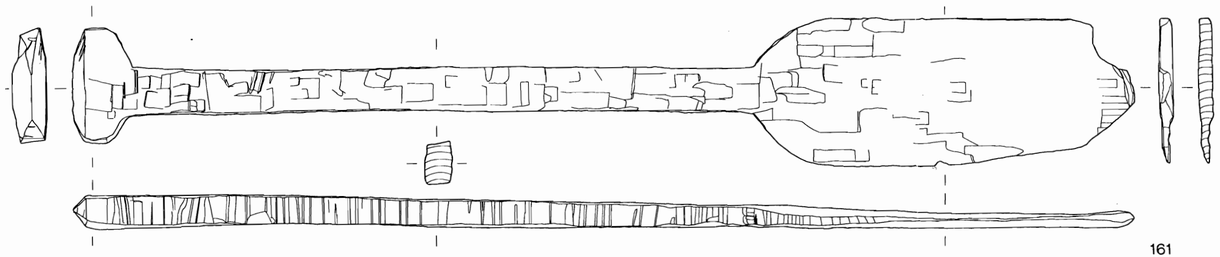
b．漁撈具

第143図171と172はタモ枠である。完成品である172は長さ56.0cm、柄は約30cmを測る。二叉の木を利用し、枝の両端を細く削り約7.0cmほど重ねて網の枠としている。重なりあう枝の先端には紐で緊縛した痕が残っている。柄の一面が平坦に削られているのは、場合によっては、さらに長い柄をつないで使用した為と考えられる。171もほぼ同様なタモ枠の未成品である。

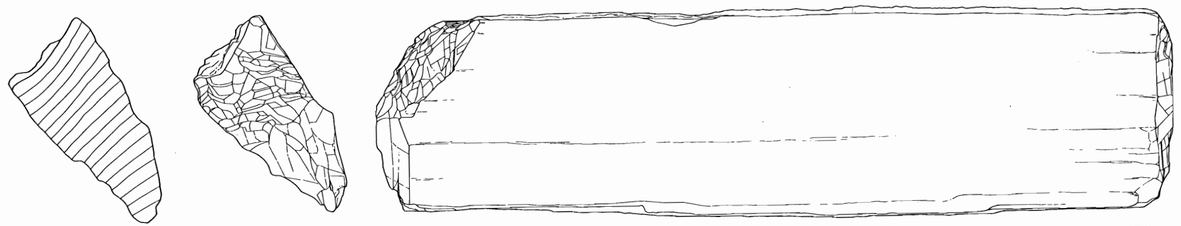
c．建築関係材



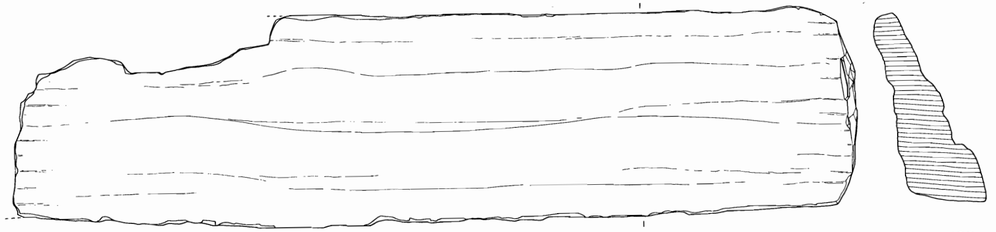
160



161



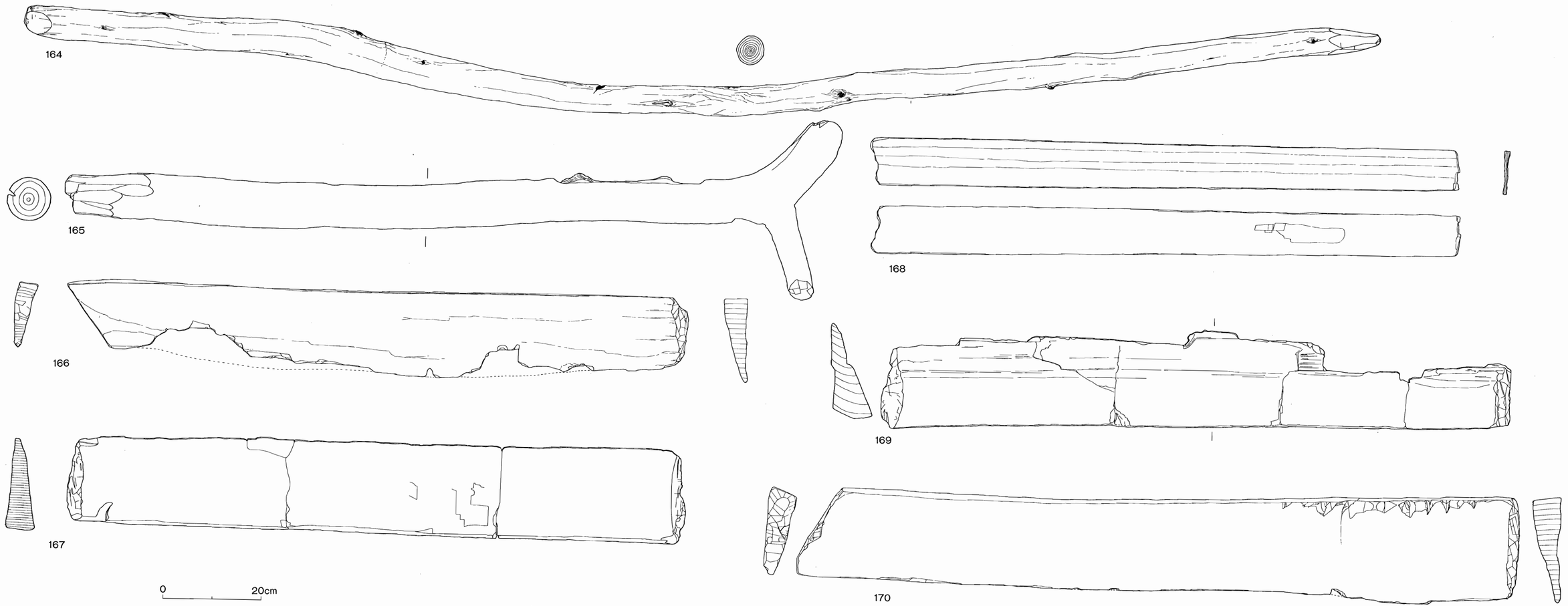
162



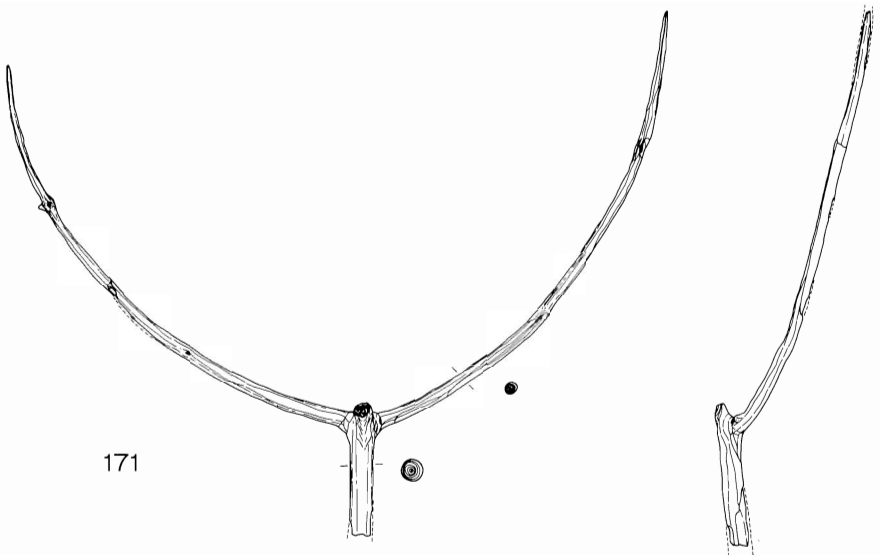
163

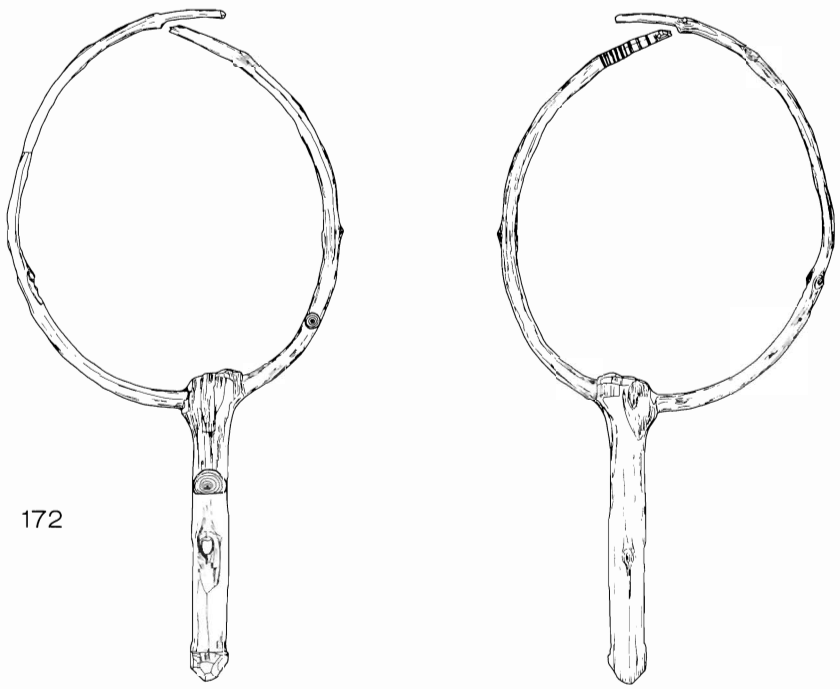
0 20cm

第141図 木 製 品 実 測 図(31)

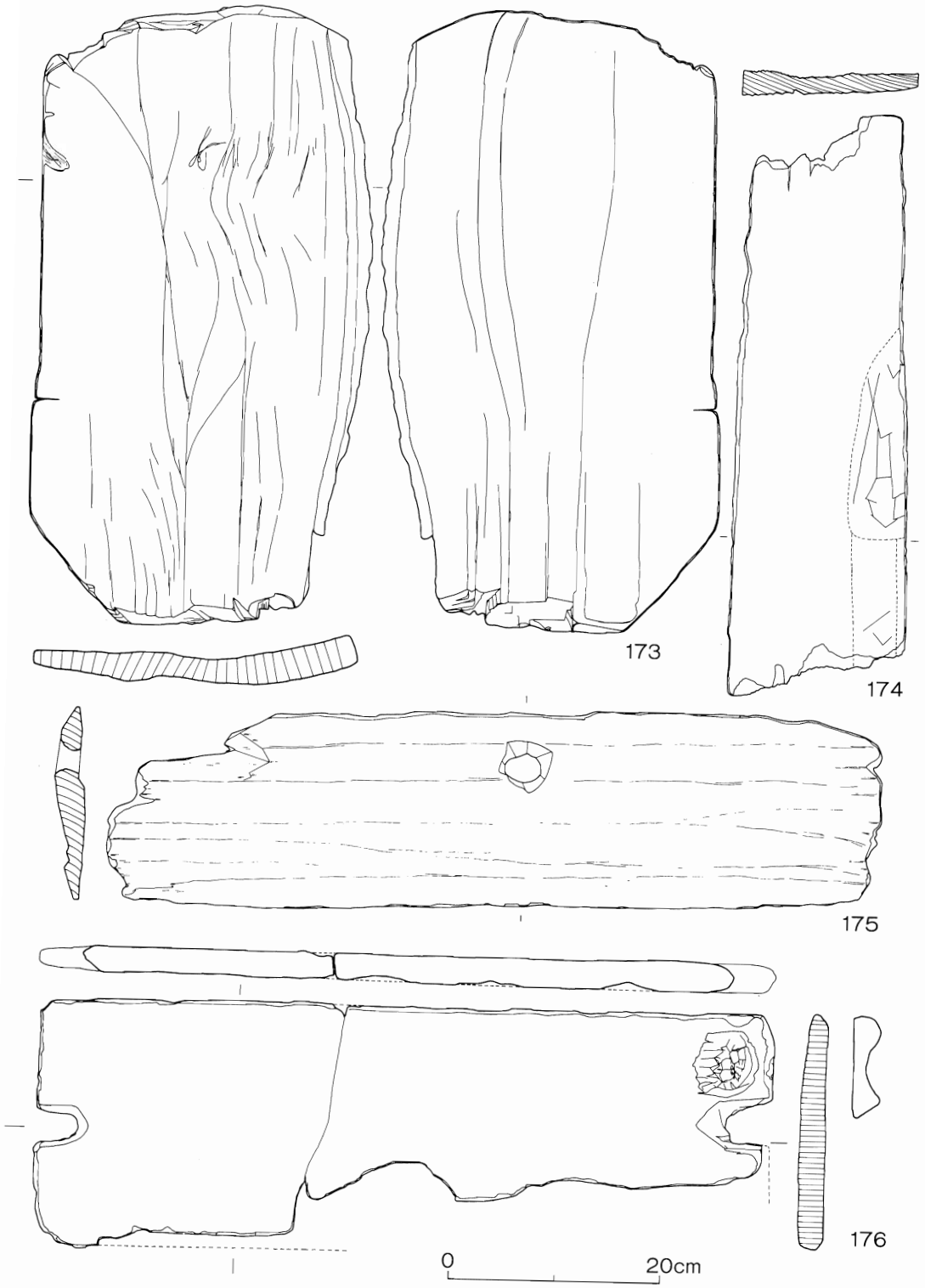


第142図　木　製　品　実　測　図(32)

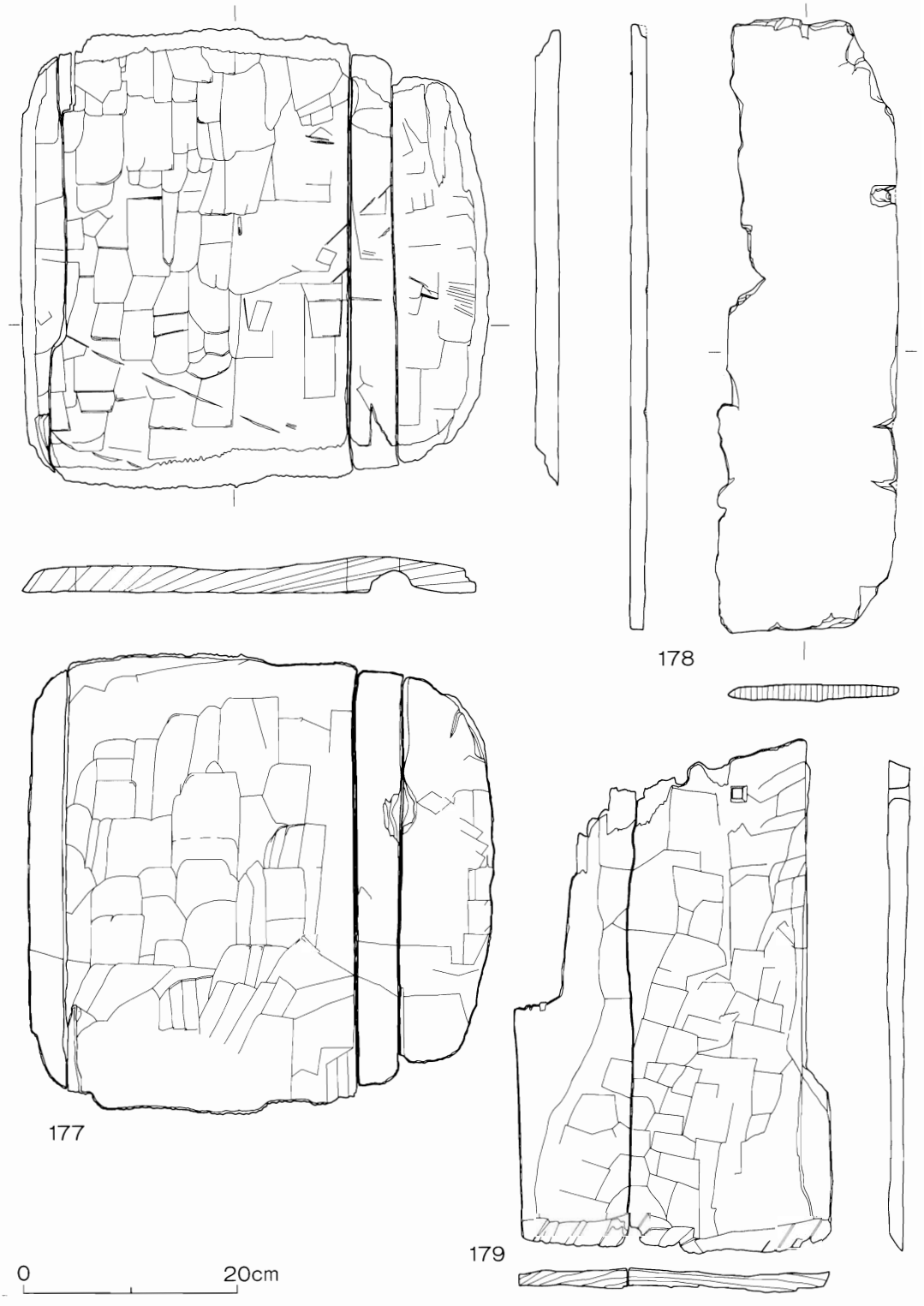




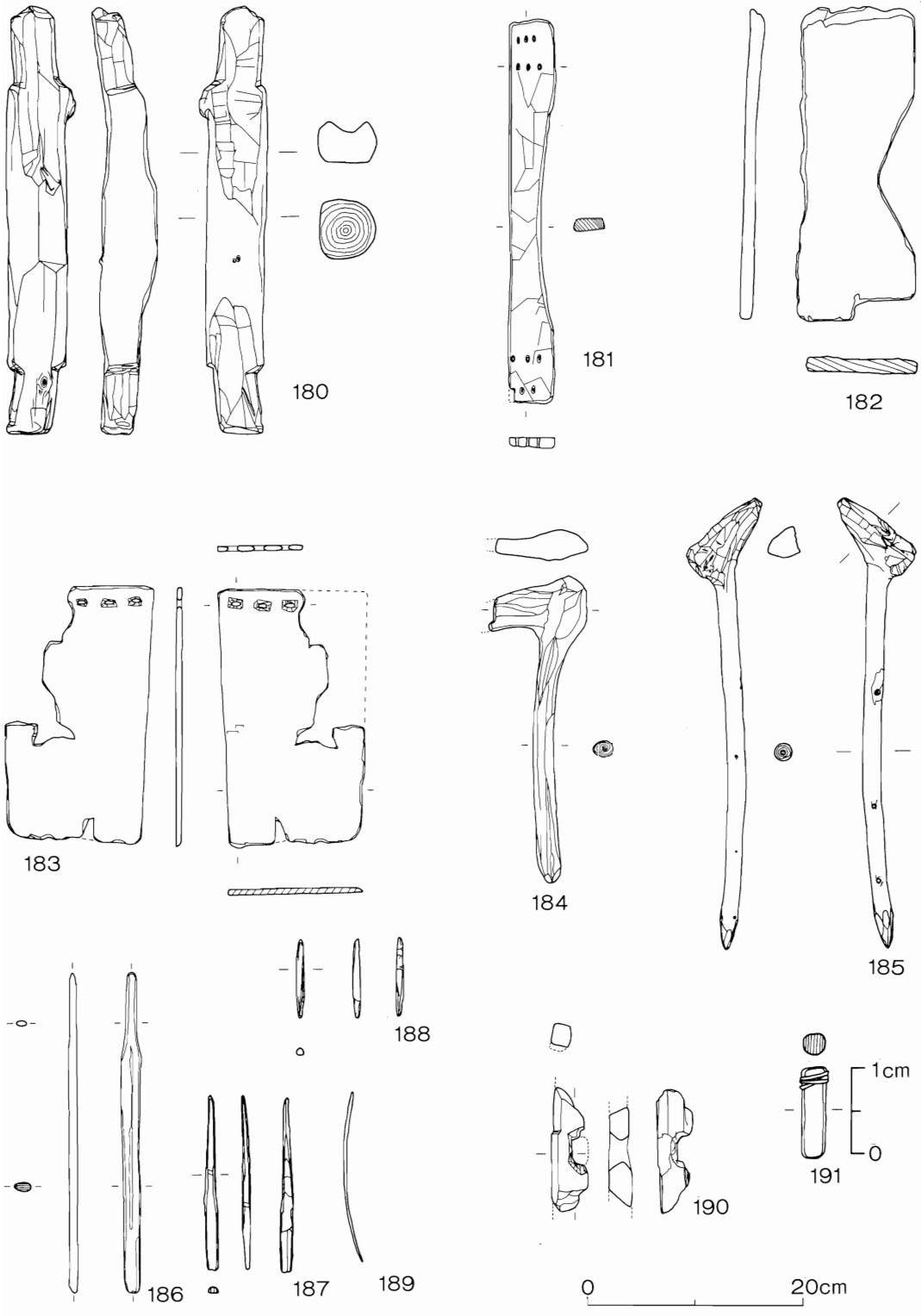
第143図　木製品実測図(33)



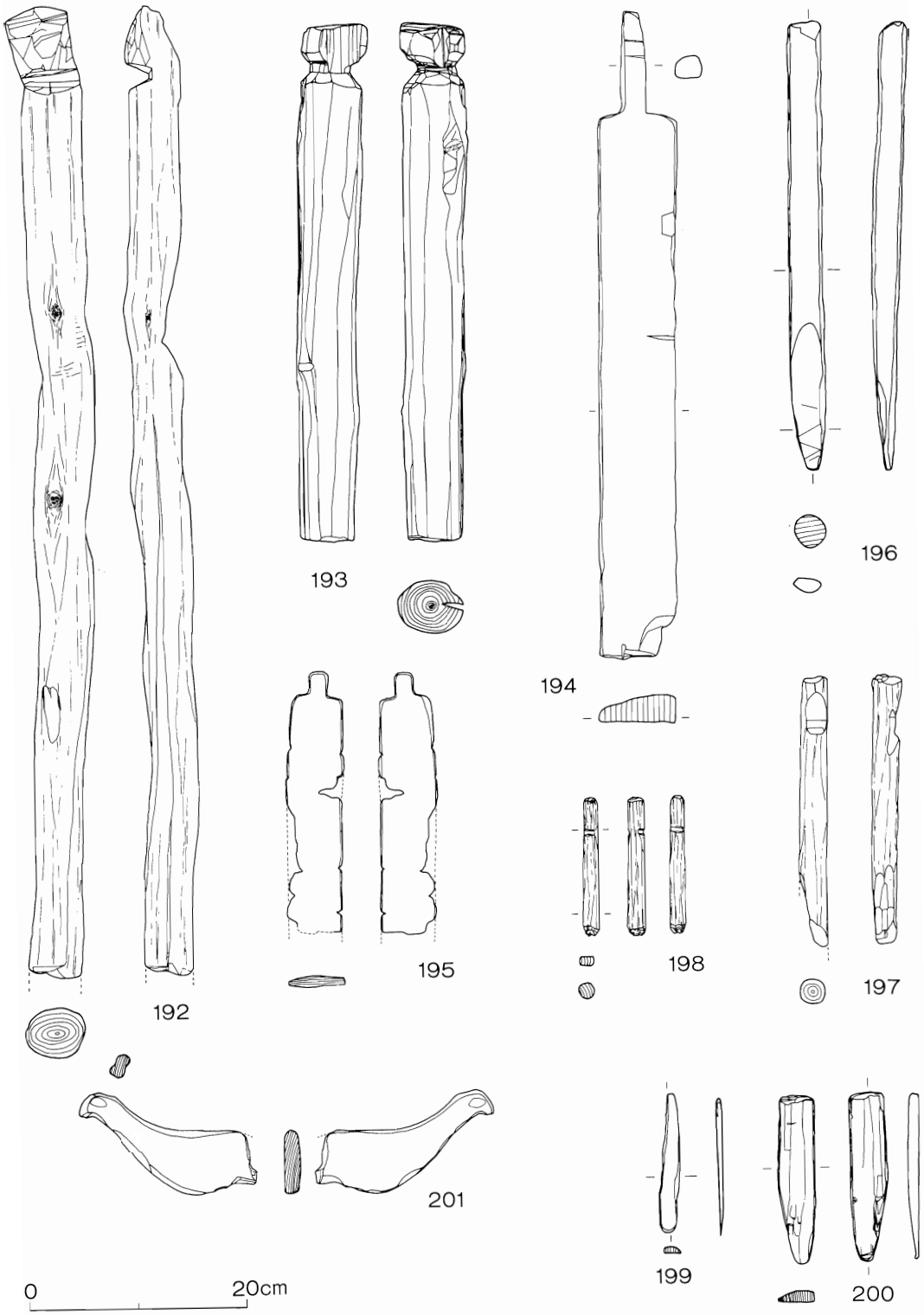
第144図　木製品実測図(34)



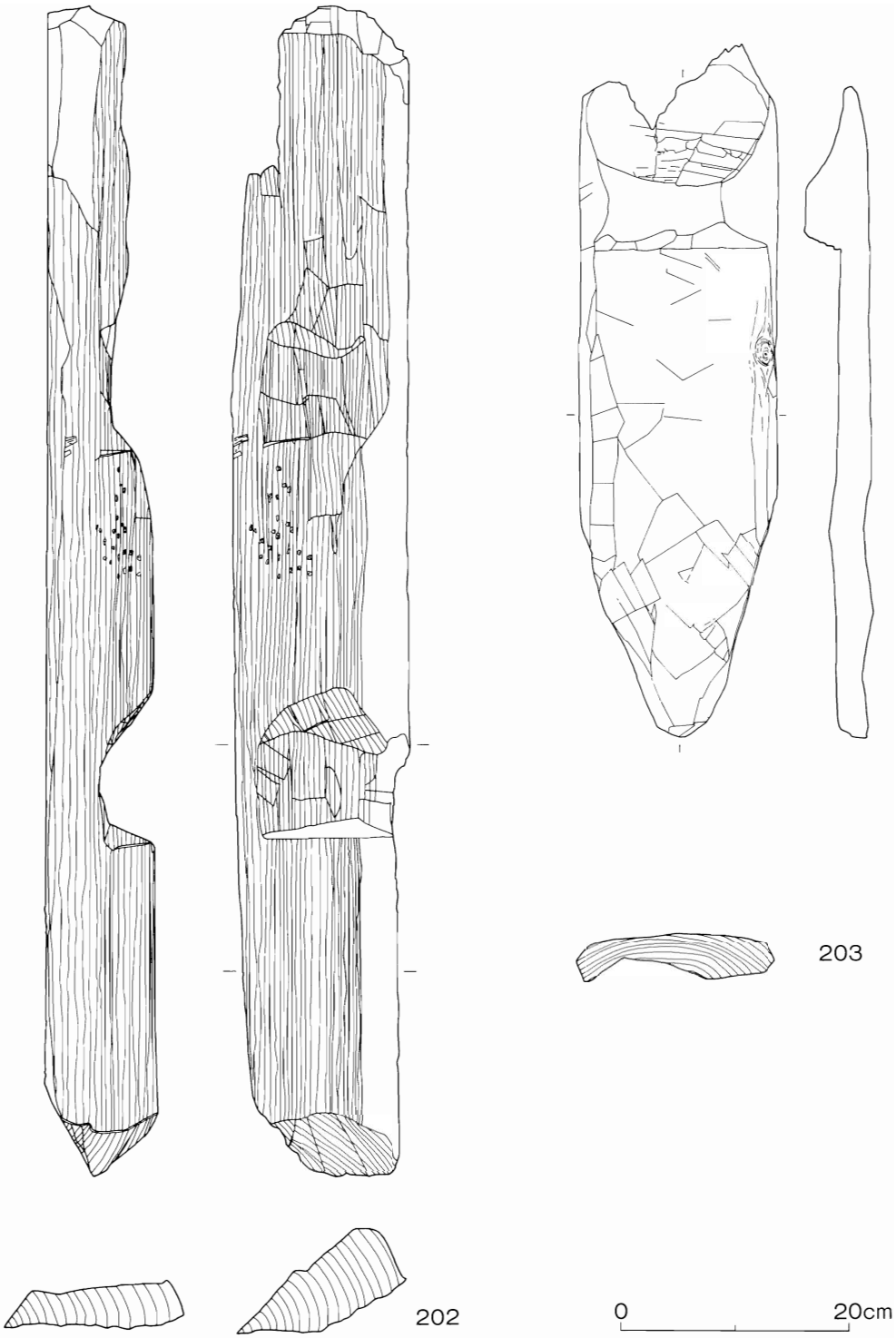
第145図　木製品実測図(35)



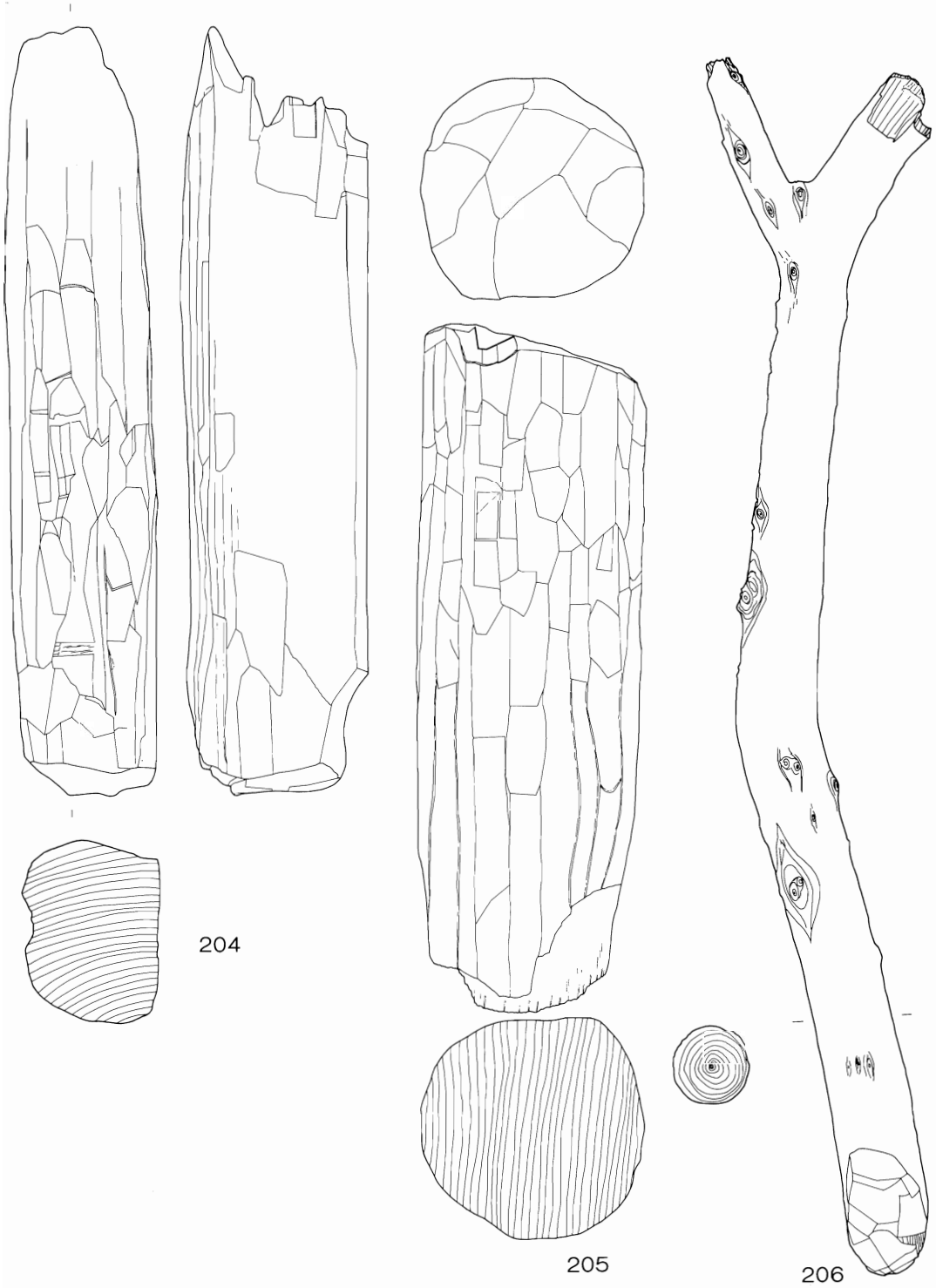
第146図　木製品実測図(36)



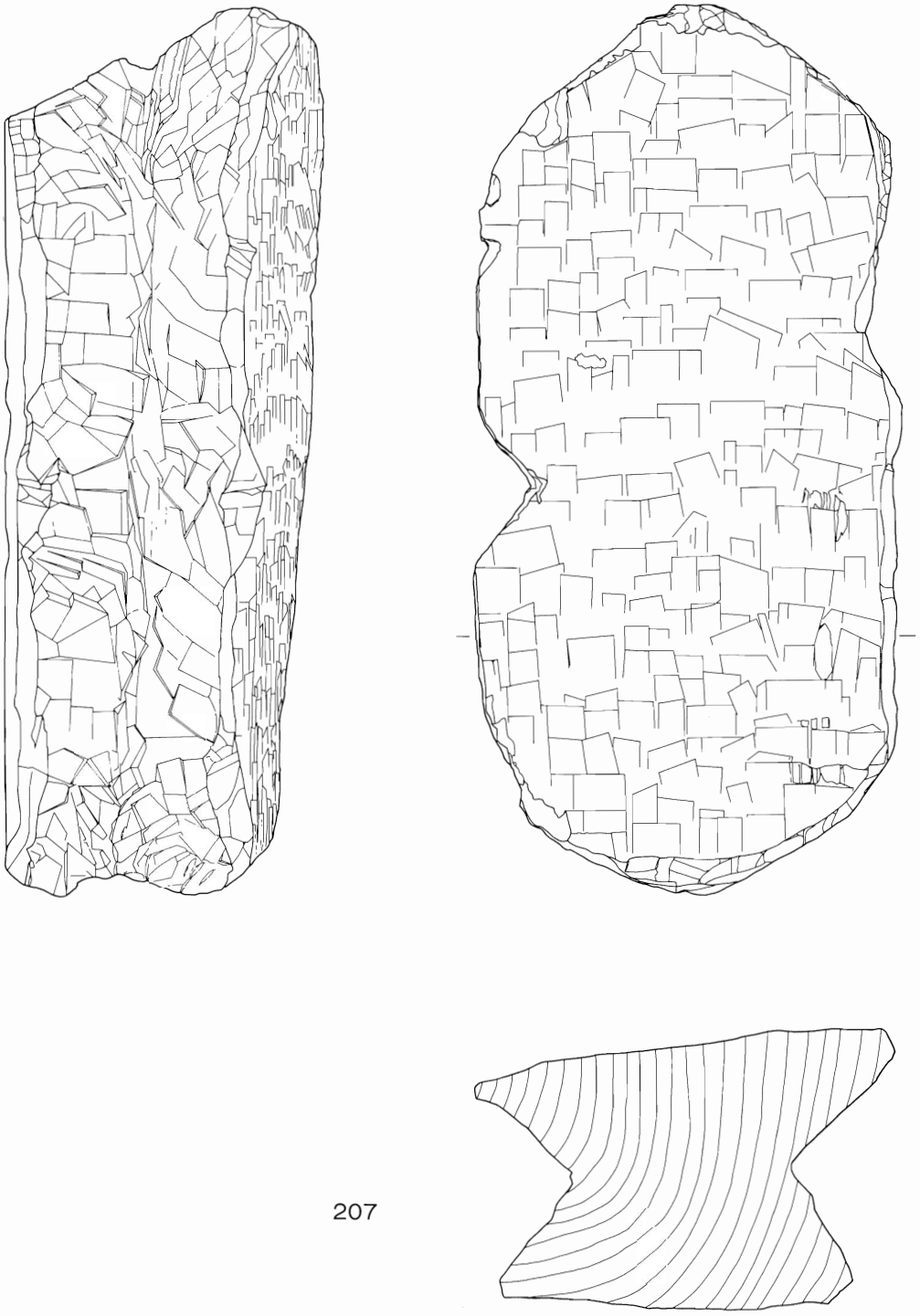
第147図　木製品実測図(37)



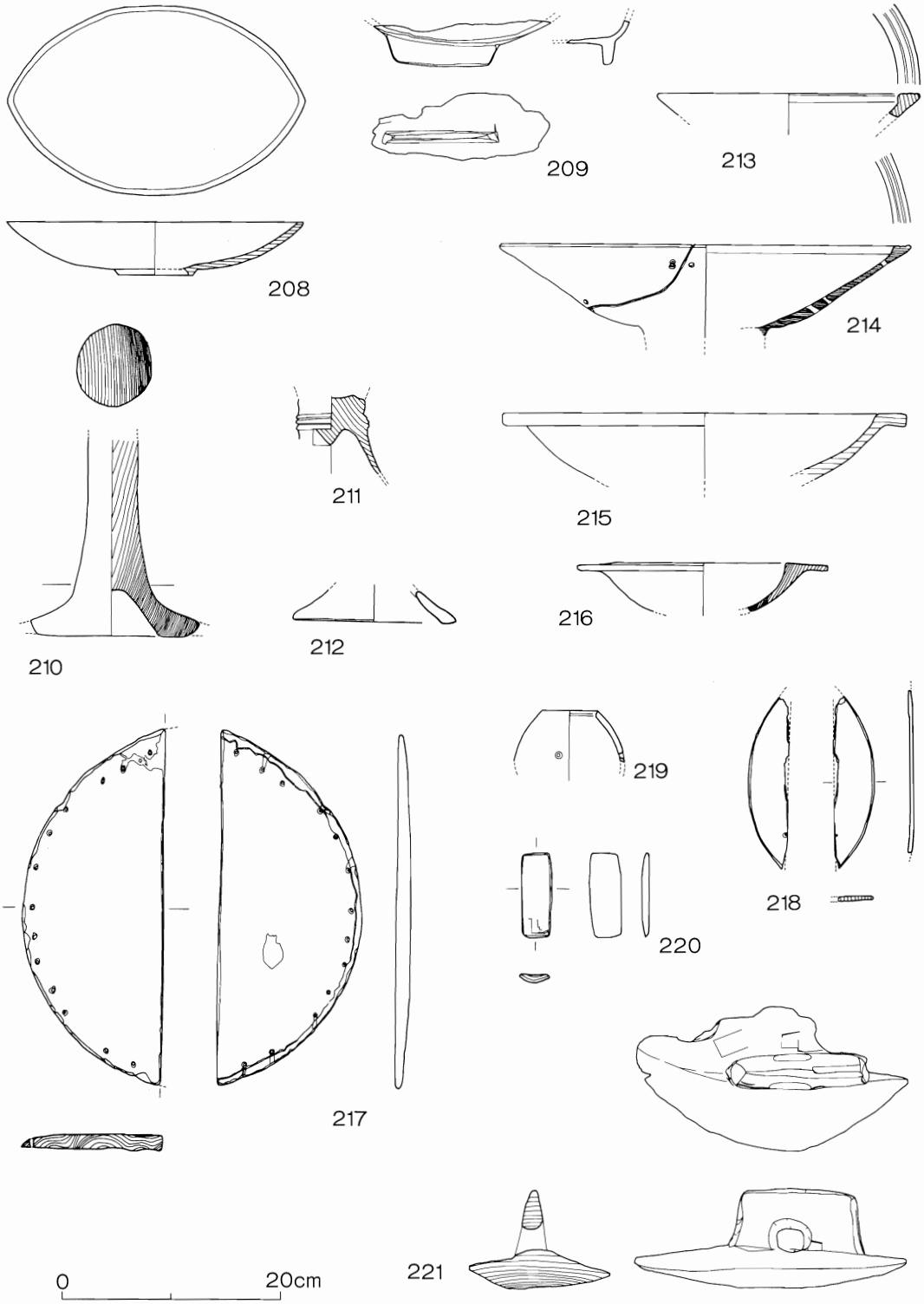
第148図　木製品実測図(38)



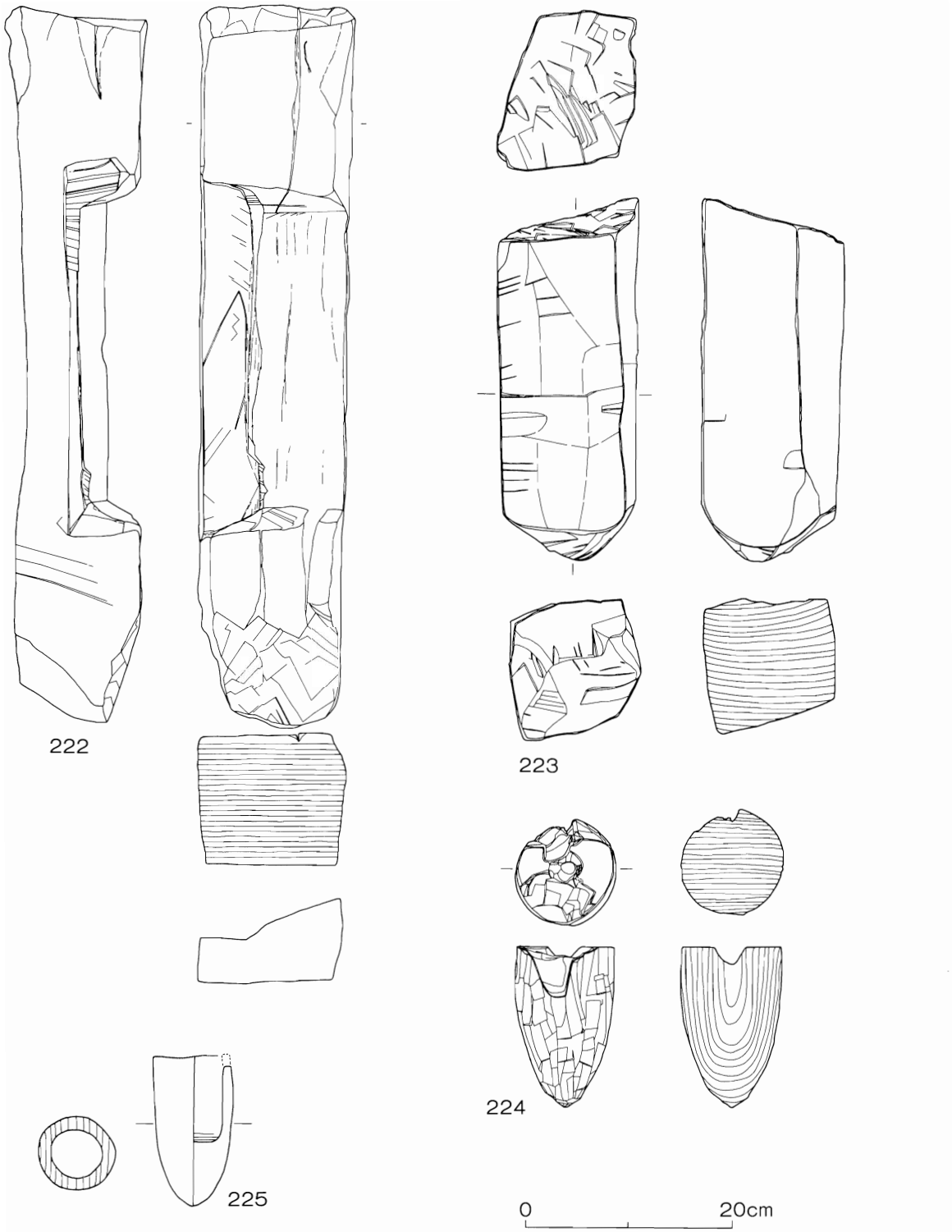
第149図　木製品実測図(39)



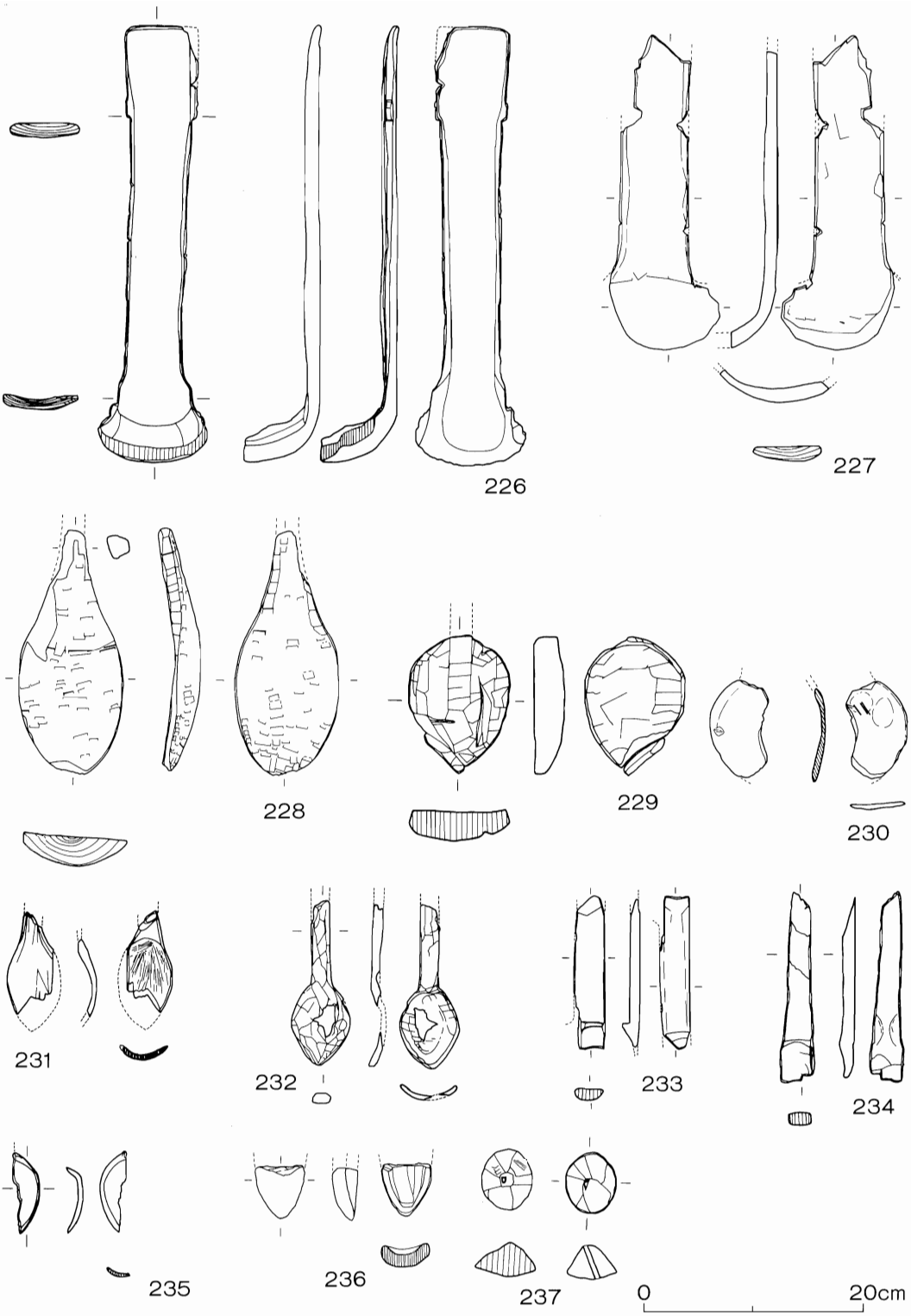
第150図　木製品実測図(40)



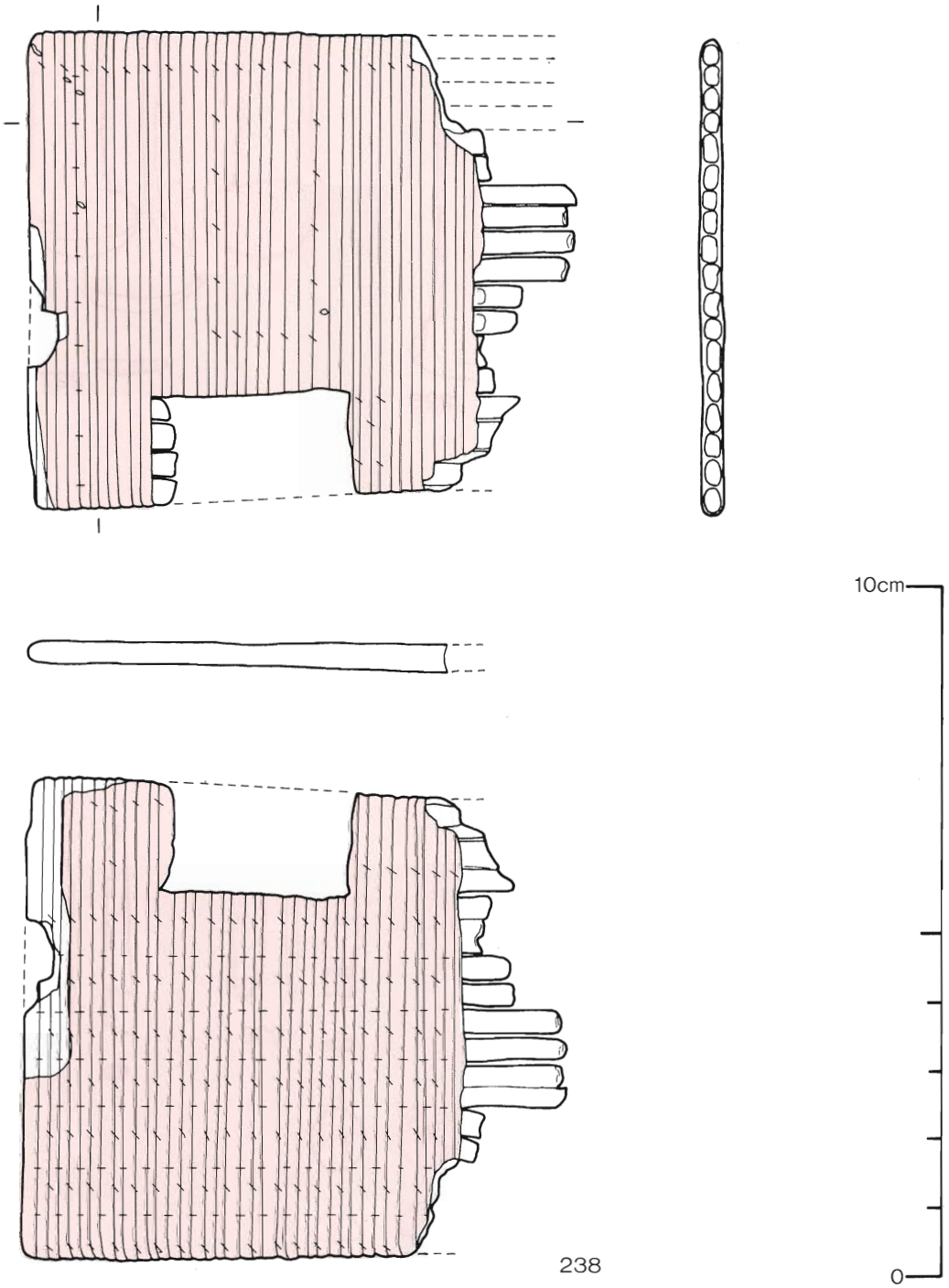
第151図　木製品実測図(41)



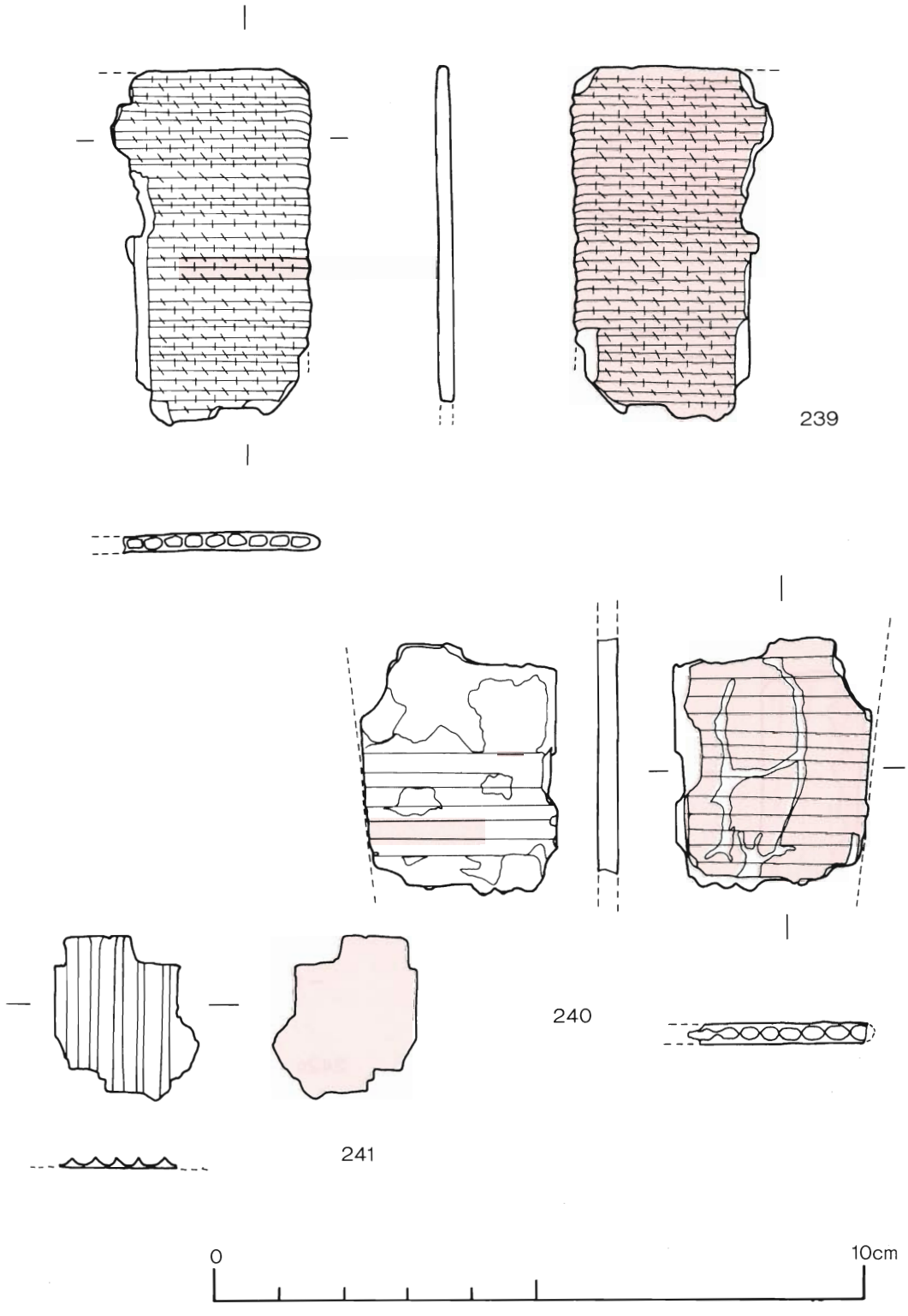
第152図　木製品実測図(42)



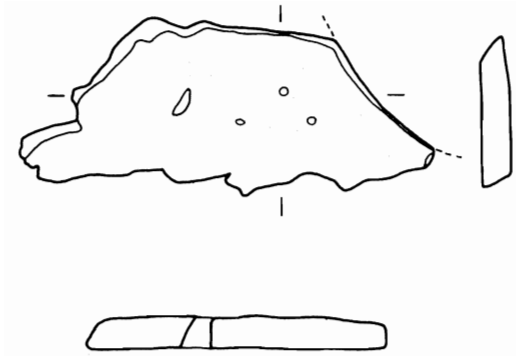
第153図　木製品実測図(43)



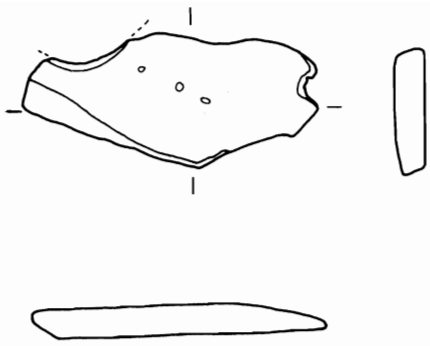
第154図　木製品実測図(44)



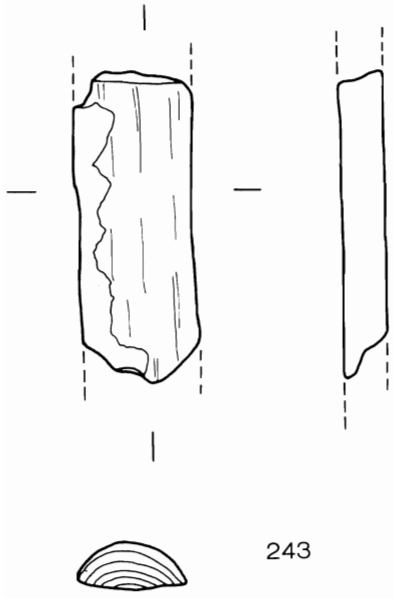
第155図　木製品実測図(45)



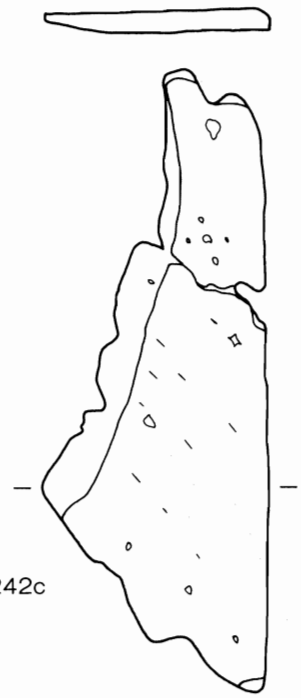
242a



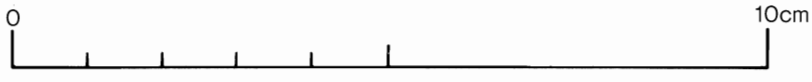
242b



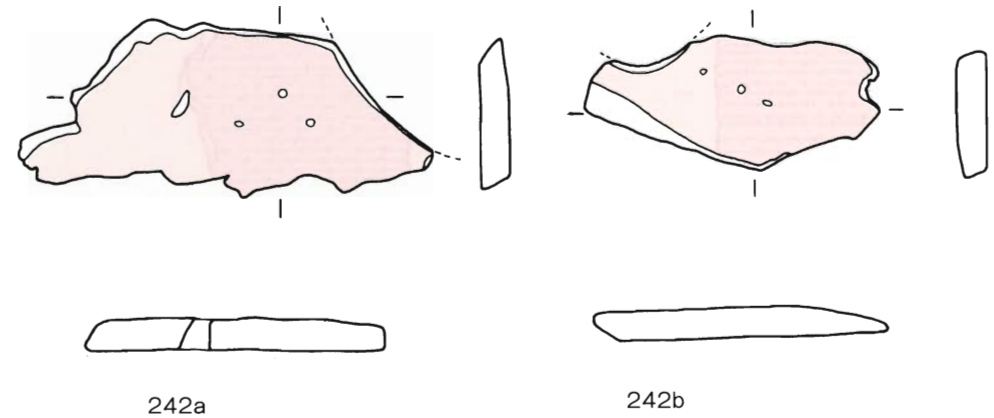
243

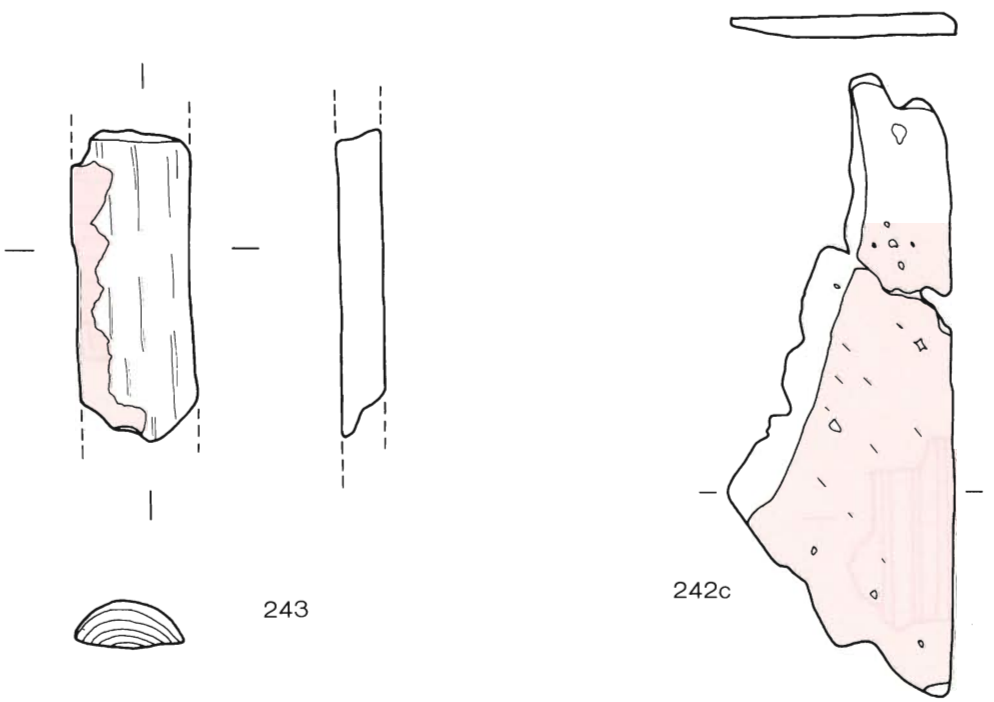


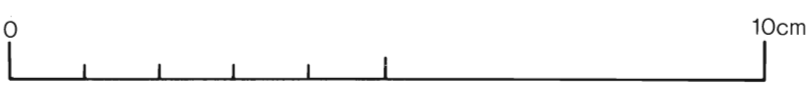
242c



第156図　木製品実測図(46)







第156図　木製品実測図(46)

第149図204・205は柱穴内に残っていた柱である。全面に粗い加工が施され、基底部にあたるところにもみられ平坦である。204は径17.5×13.0cm、長さ73.0cm、205は径21.0cm、長さ66.0cmでそれより上は朽ちて失われている。

第148図202・203は梯子である。202は現存部長さ1.1mの未成品の一部。203は成品を杭に再利用したもので現存部の長さ65.0cmある。

d．杭

第142図165、第149図206はそれぞれ長さ1.7mと1.2mの頭部が二叉となった杭である。165は先述したようにSK01の上部構造に用いられたと考えられるものである。第142図164は径7.2cm、長さ約2.94mの長い杭である。恐らくウッドサークル（SZ）に用いる為のものであろう。因に168はSZ014の横木に用いられていたと思われる板材である。

e．部材

第146図・第147図、第180～183図、第190図、第192～198図、第200図は各種の部材である。このうち180・181は樋の把手、194・195は紡織機の可能性があり、これに関連するものとして第153図237の木製紡錘車がある。192・193は有頭棒。

f．容器類

高坏　第150図207、第151図210～216は高坏である。このうち、207は長さ82.0cm、幅38,0cm、厚さ24.0cmでその断面は「エ」の字状をしている。全面に加工痕が著しい。樹種が環孔材であることと、その特異な形状から、高坏を2個体分作ろうとした未成品と考えられる。213・214は弥生時代中期の高坏形土器のうちB類に、215はC類に、216はD類に対応する。また298は脚部の内部に円錘形の突起がみられるので、金属器と轆轤を用いて製作されたものであろう。

盤　第151図208・209は台付の盤であろう。

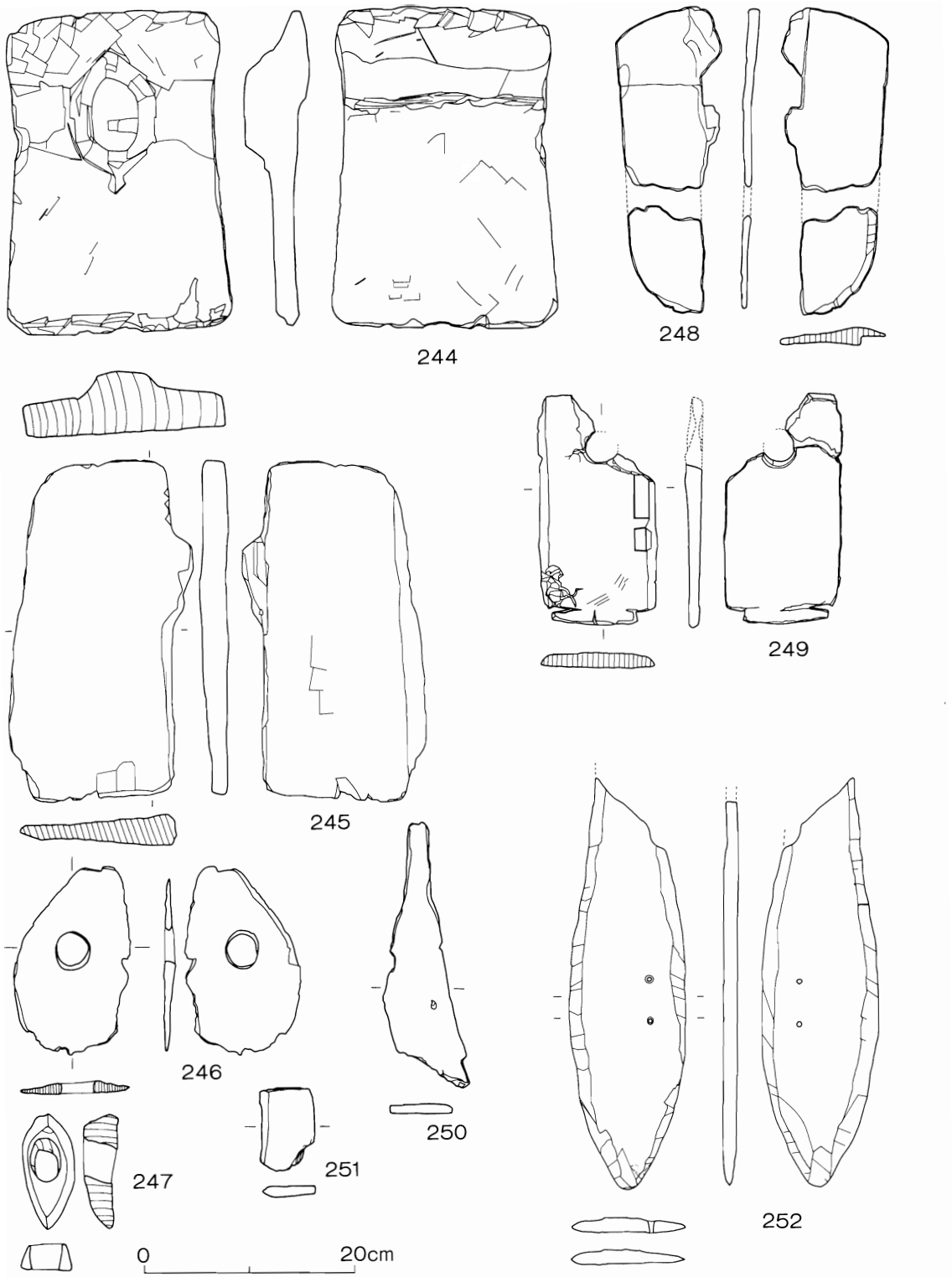
円形容器　第151図217・218は円形容器の底や蓋と考えられる。217は径34.5cmで周縁に小孔列がある。

ヒョウタン製容器　第151図219はヒョウタン製の容器片で、復元した口径5.4cm、胴部径は10.0cmで、補修孔がみられる。

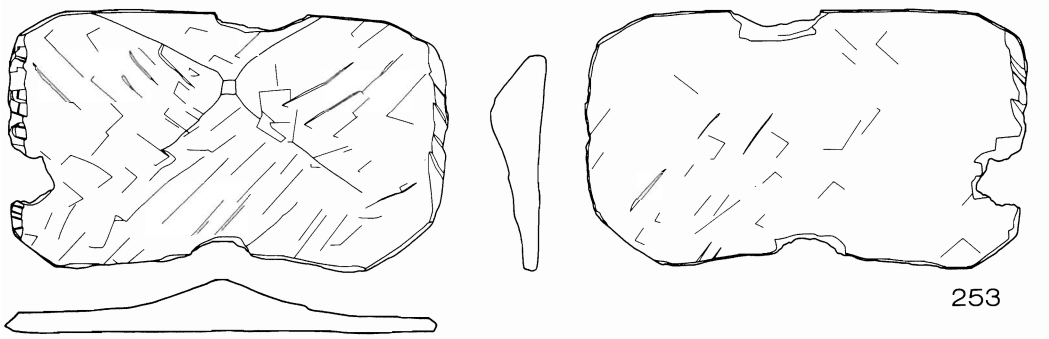
コップ型容器　第152図225は長さ15.3cm、径7.8cmの砲弾形の容器である。内部の深さは9.0cm。224はその未成品、223はこれらの材料と考えられる。

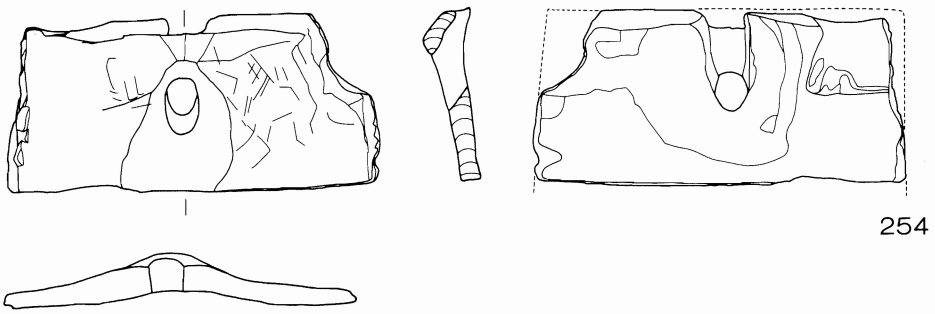
柄杓　第153図226・227は柄杓である。226は長さ42.6cmで柄の頭部に簡単な装飾が施される。第152図222はこれらの未成品と考えられる。

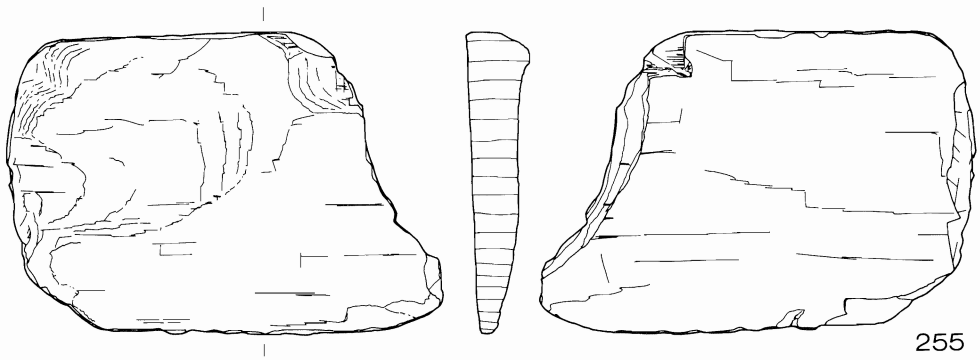
匙　第152図228～236には匙の各種を図示した。228と229は大形の未成品である。他は

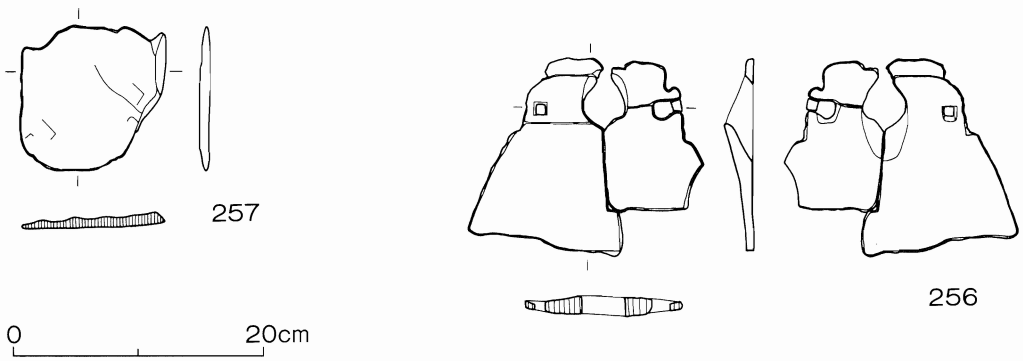


第157図　木製品実測図(47)

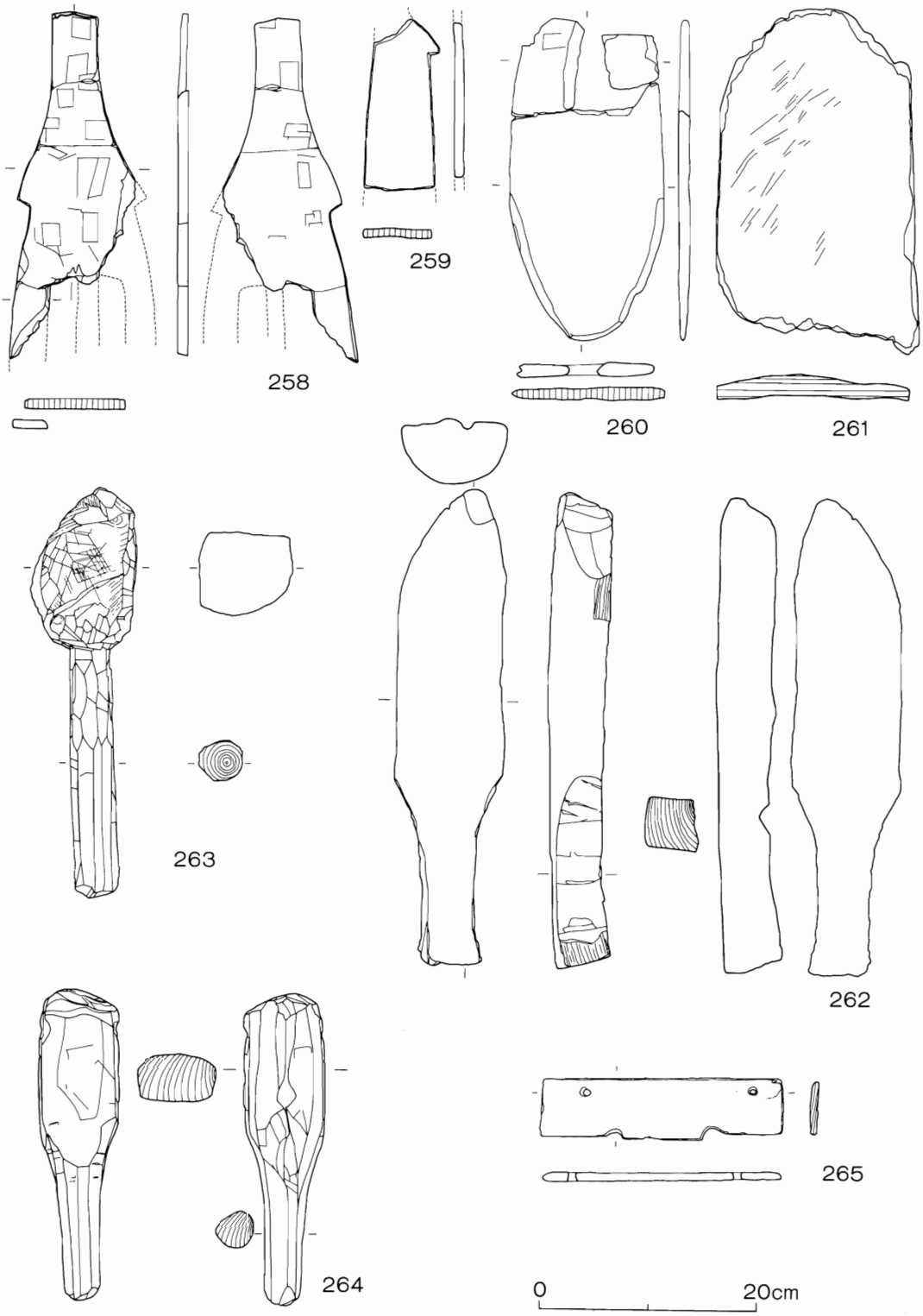




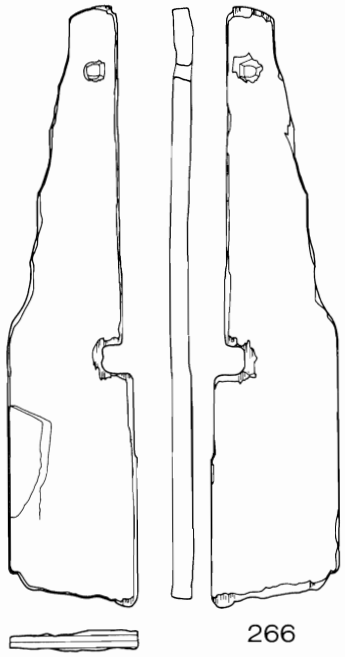




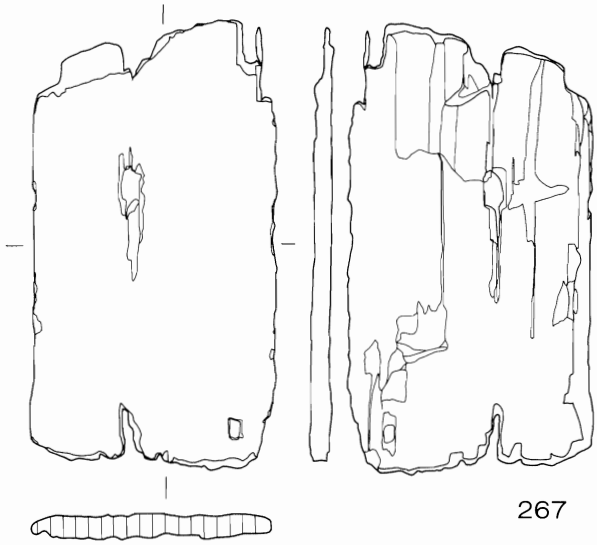
第158図　木製品実測図(48)



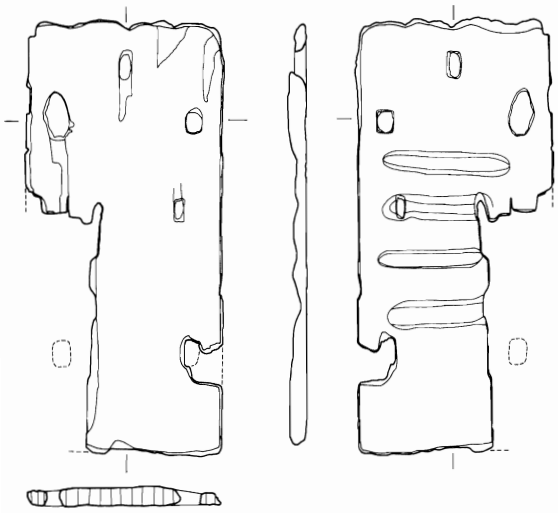
第159図　木製品実測図(49)



266



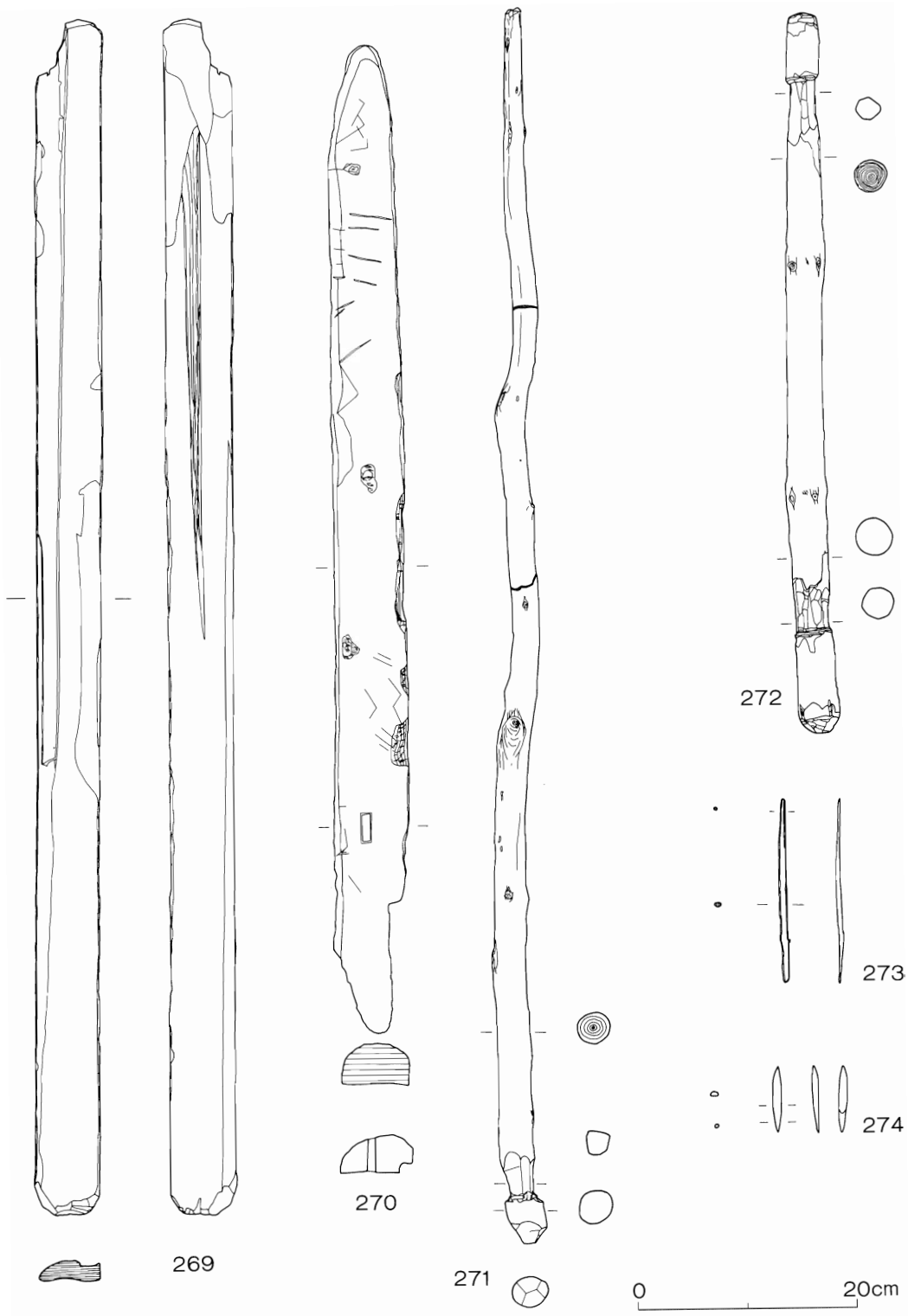
267



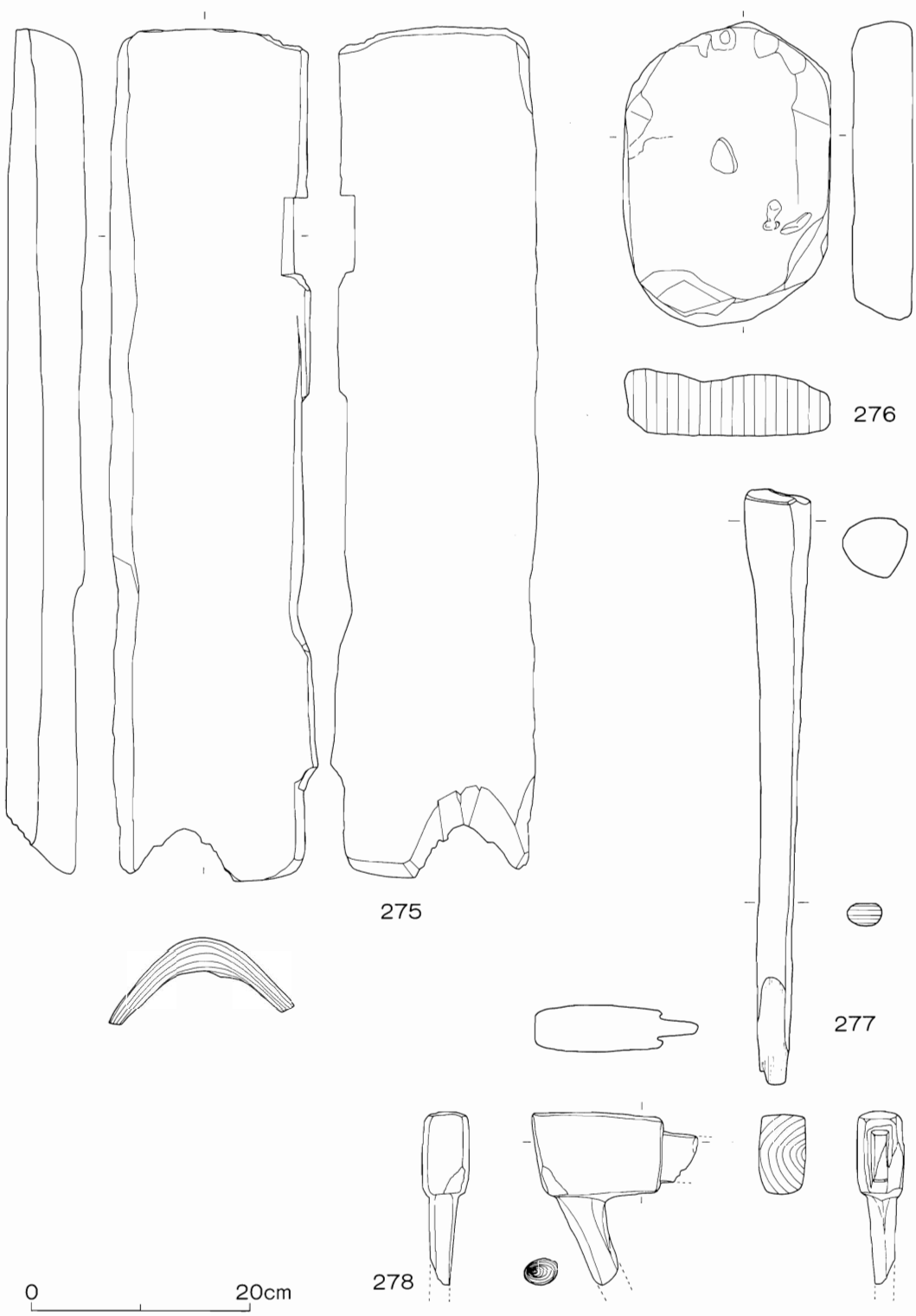
268

0 20cm

第160図　木製品実測図(50)



第161図　木製品実測図(51)



第162図　木製品実測図(52)

いずれもスプーン状の完成品であるが、欠損品が多い。このうち236は舟形木製品の可能性もある。

g．祭祀遺物

鳥形木製品　第147図は鳥形木製品の頭部から胴部にかけてのものである。板材で作られており、両眼は凹めて表わしている。現存部の長さ18.0cm、長さ1.5cmを測る。ウッドサークルの付近で出土した。

舟形木製品　第153図236は舟形木製品の一部か、あるいは匙の一部と考えられる。

h．鍬状木製品

平面は26.4×14.0cmの楕円形に近い形状をし、把手がその上につけられている。東大阪市鬼虎川遺跡の報文に従って鍬と考えた。鬼虎川遺跡の分類では鍬A類となる。

i．装身具類

第154～156図は装身具類を図示した。

櫛　238～241は木製の櫛である（カラー図版）。238の例をとると径約3mmの歯を18本、糸で緊縛したものである。いずれも頭部をその上から先に黒漆、次に赤漆を塗装して固めている。242a・b・cは同一個体と考えられるもので厚さ4mmの板に直接赤漆が塗られている。一応簪の一部と考えたが、全く別のものの可能性も捨てきれない。243は幅1.5cmの木製の釧で赤漆が塗られている。

j．刺突具

第146図、第186～189図は刺突具類であろう。

k．作業台

第139図150は22.0×16.0cm、厚さ5.4cmを測るミカン割材から作られたものであるが、表裏面に細かな直線的な傷痕が多数みられる。俎等の作業台と考えられる。

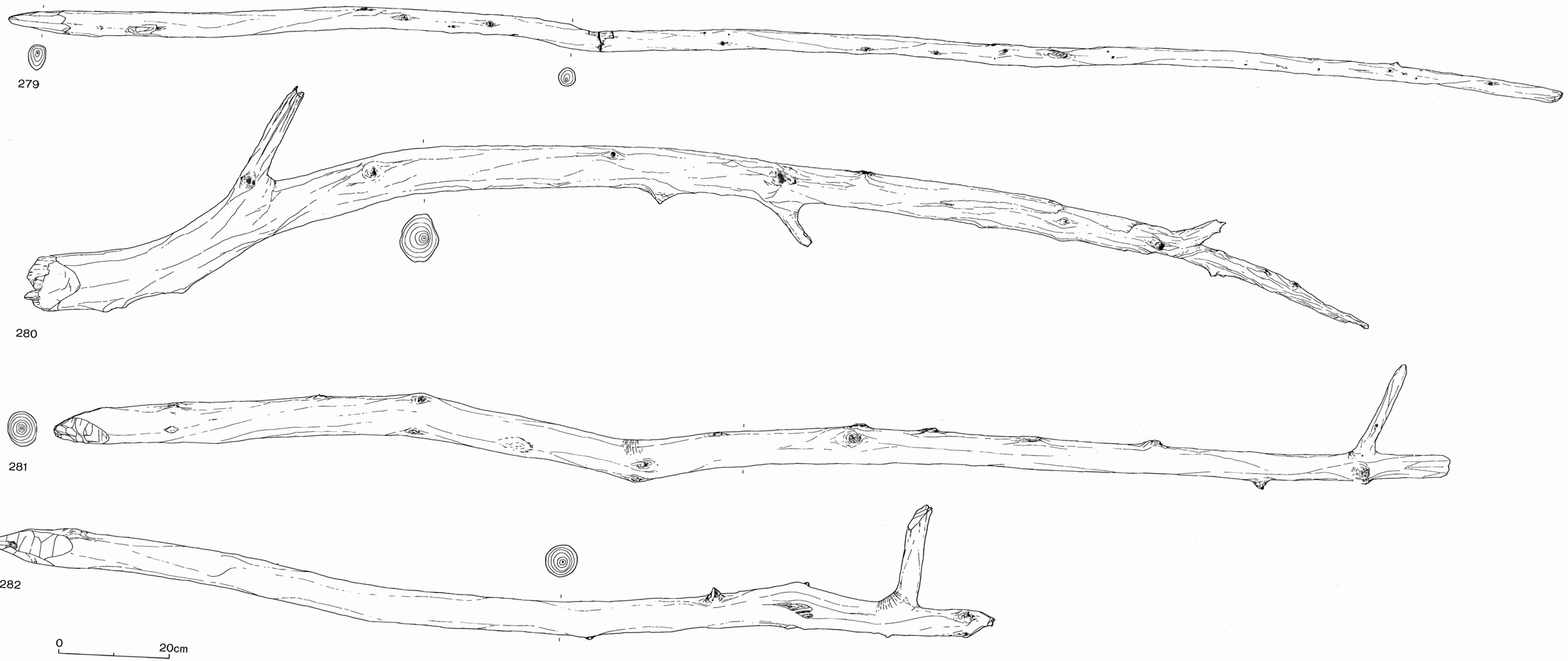
l．火鑽臼

第121図55は火鑽臼片で現存部は6.3cmあり、焼成を受け黒色をしている。

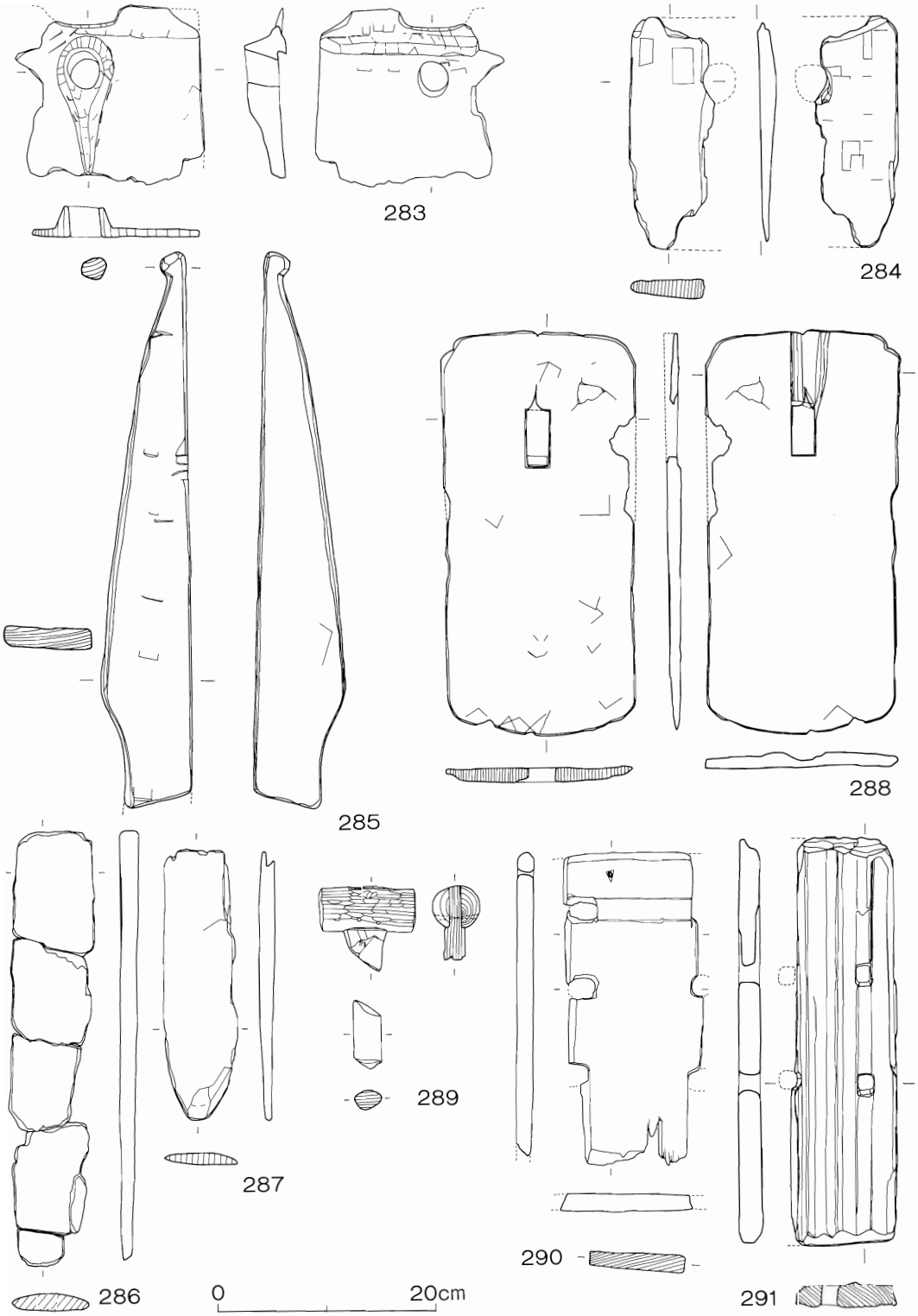
以上の他に、図版71の上に示したような籠状の編み物がある。また、図版71の下は桜の樹皮であるが、これの幅の広いものや狭いものが遺跡のいたる所で出土した。実際に使用されていた例としては、第146図191に示した長さ1.0cmの不明木製品や、弥生時代前期の甕形土器の補修に使用された例がある。恐らく漆等を入れた蓋付の壺形土器にも使用されたのであろう。東大阪市鬼虎川遺跡では石鏃の柄の装着や石剣の柄にも使用されている。

（7）弥生時代後期の木製品

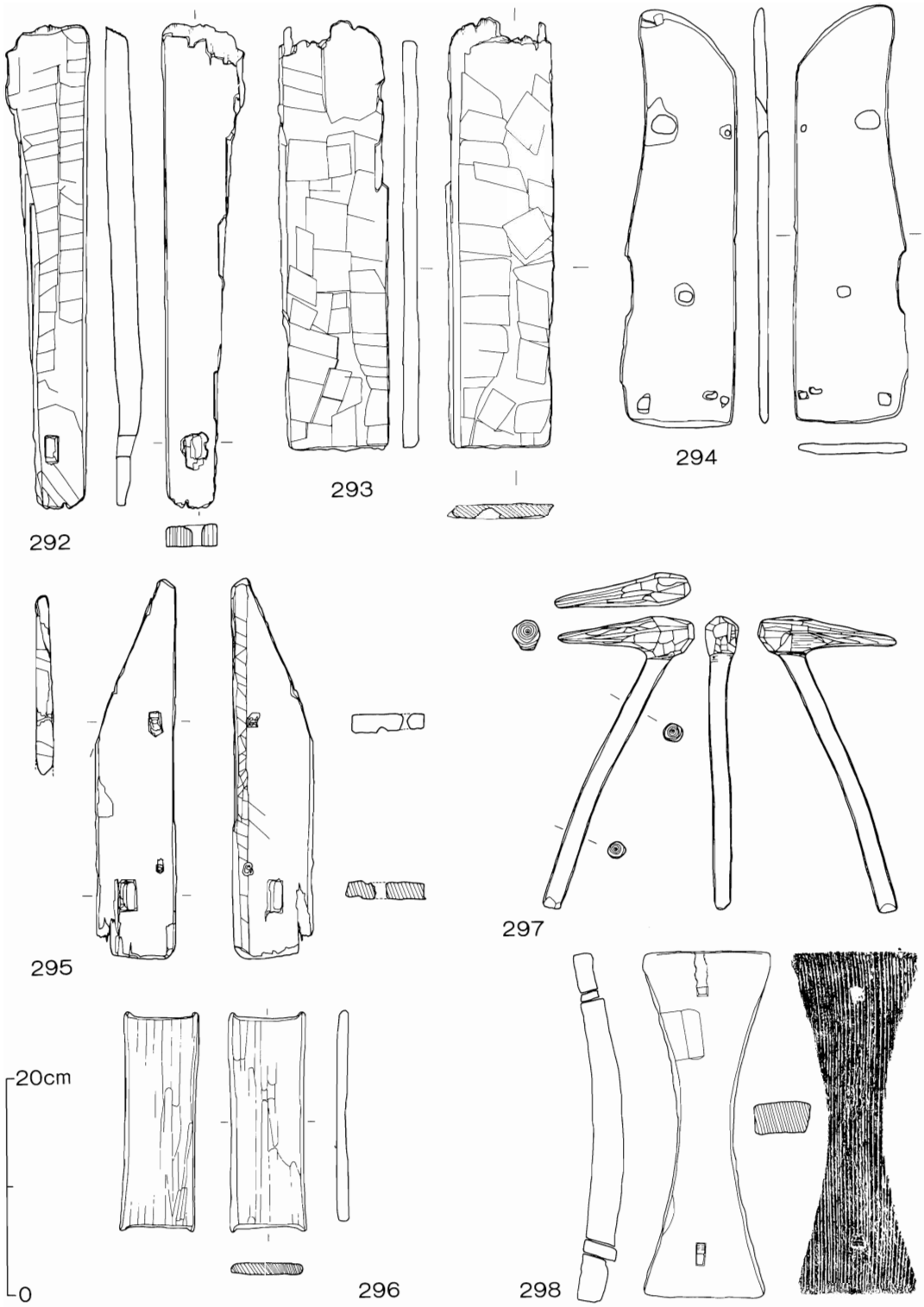
第157図～第163図は弥生時代後期層から出土した木製品である。この層はそれ以前の各



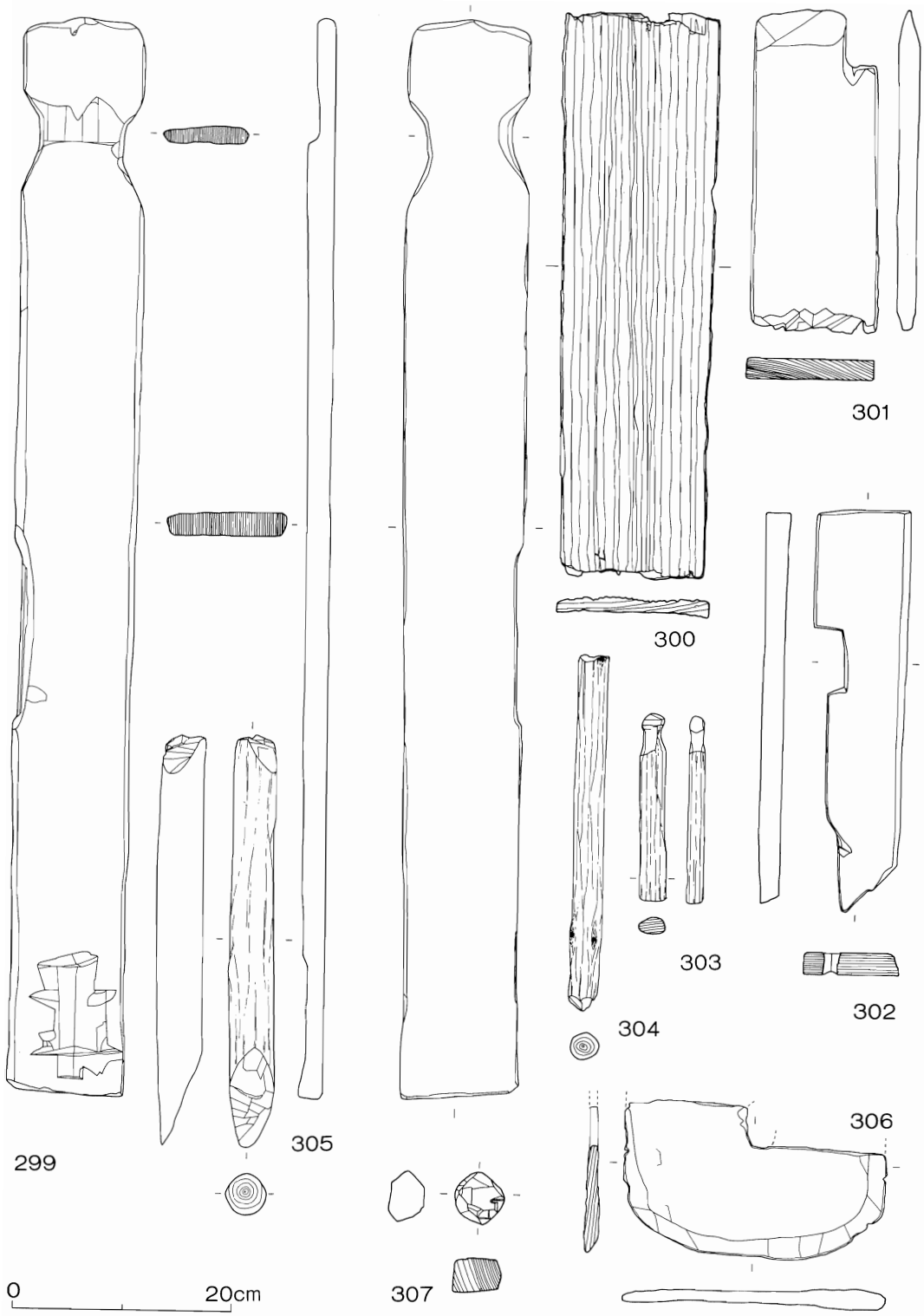
第163図　木　製　品　実　測　図(53)



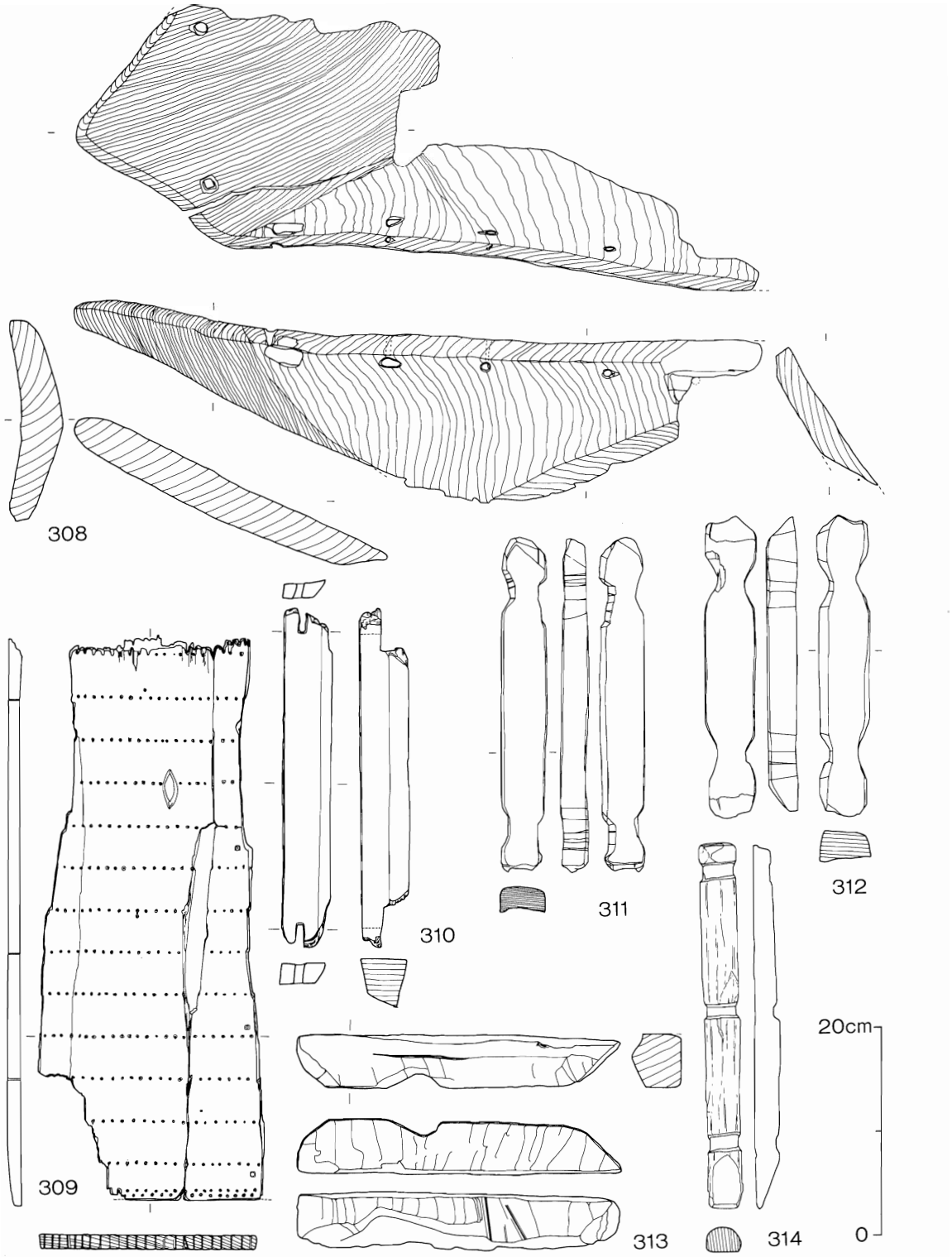
第164図　木製品実測図(54)



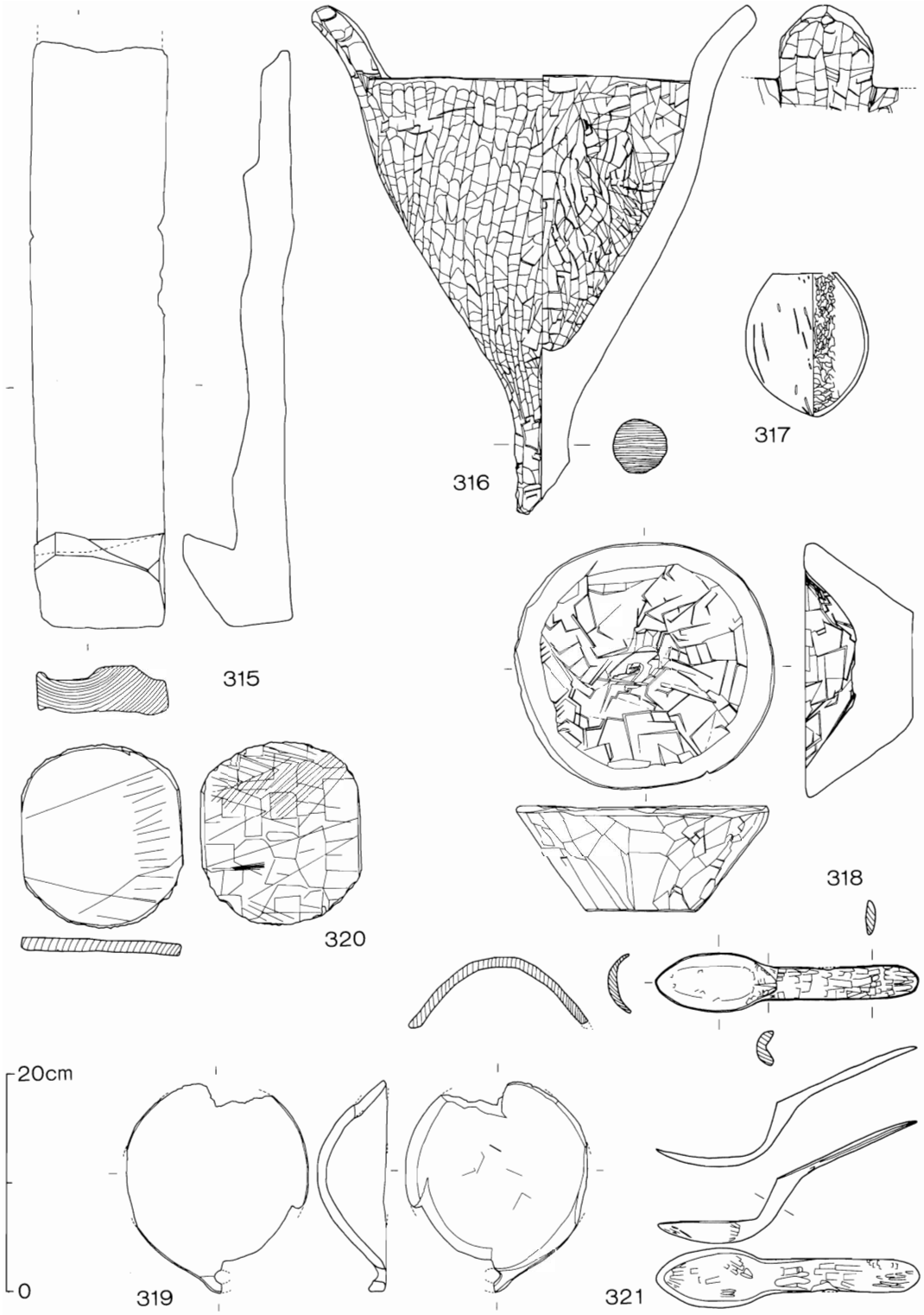
第165図　木製品実測図(55)



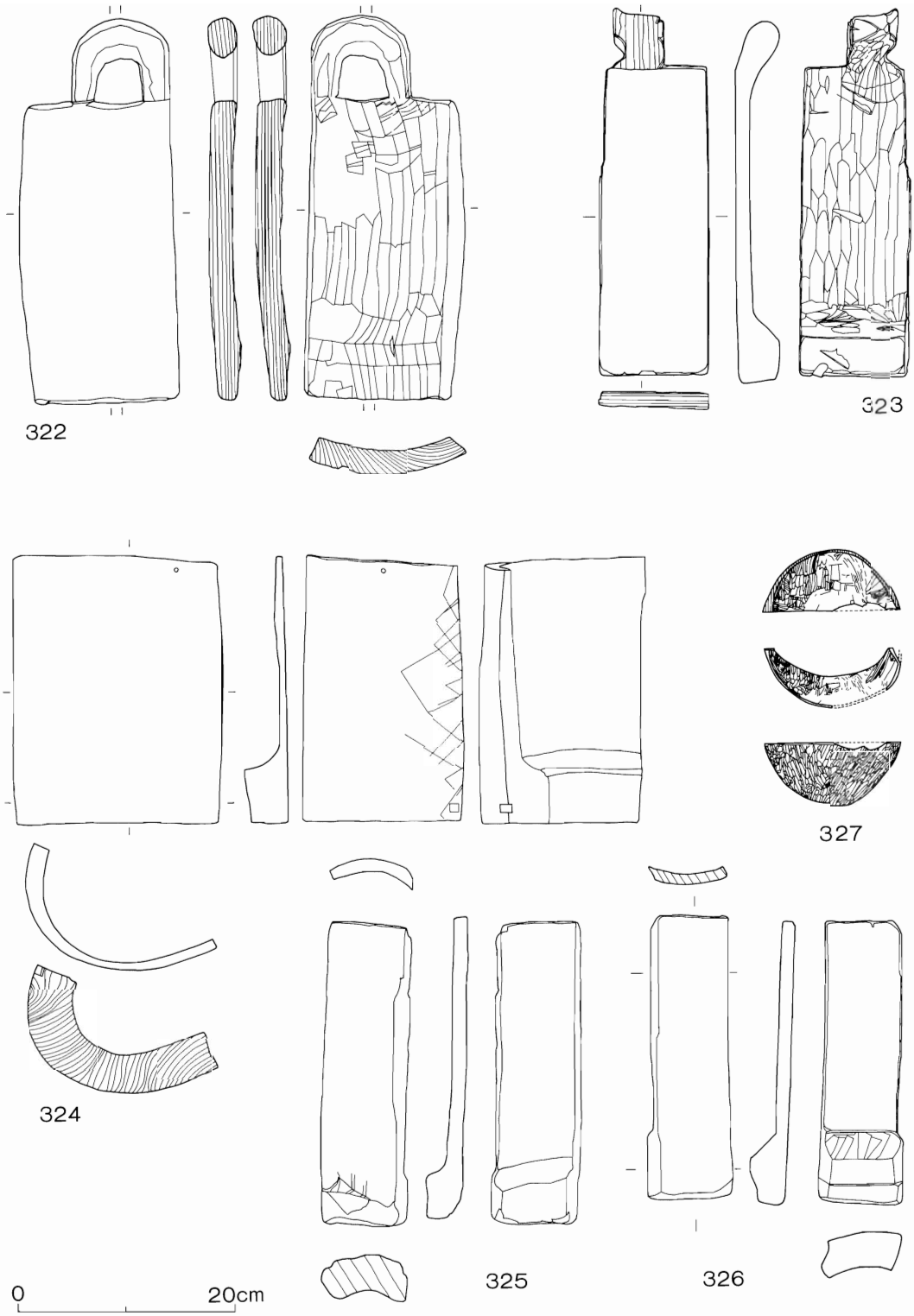
第166図　木製品実測図(56)



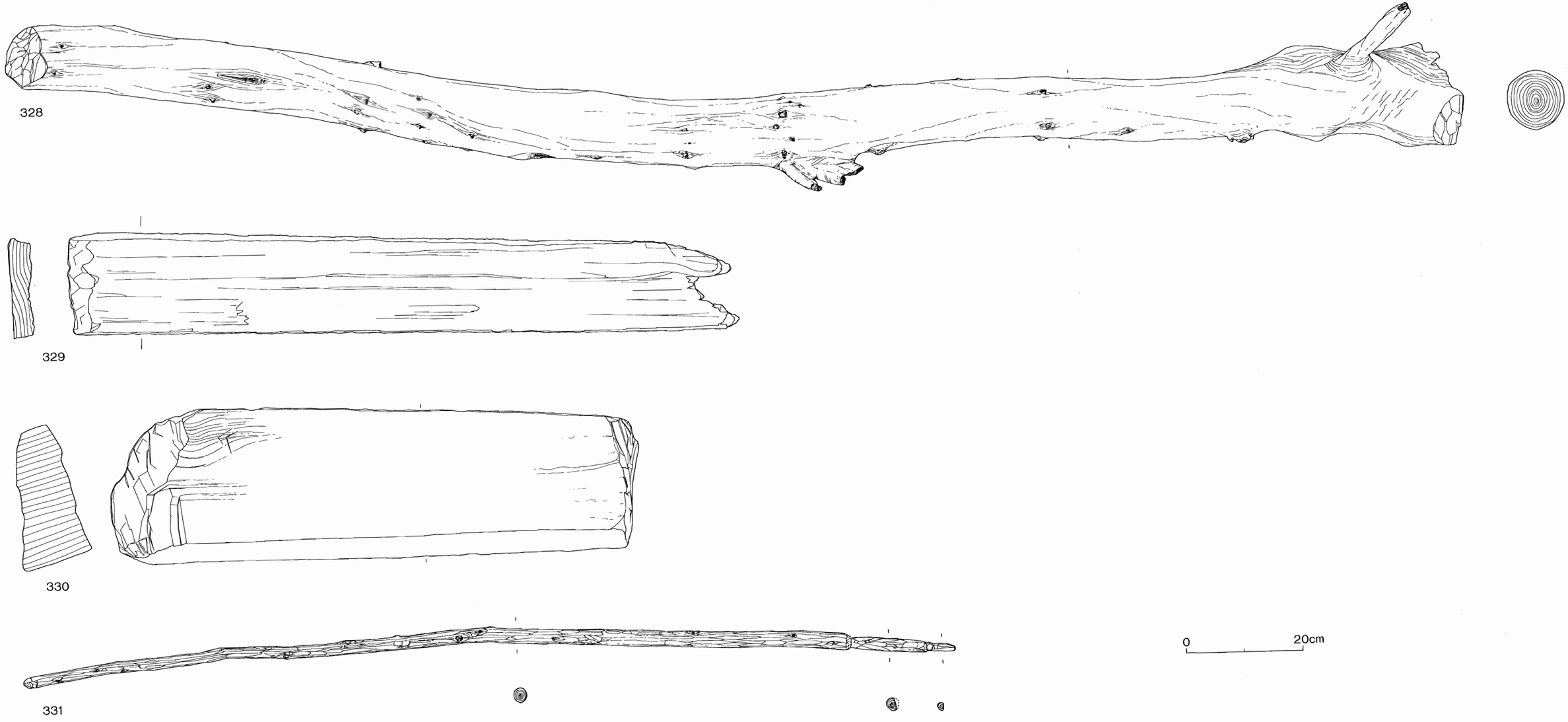
第167図　木製品実測図(57)



第168図　木製品実測図(58)



第169図　木製品実測図(59)



第170図　木　製　品　実　測　図(60)

時代の遺物を最も多く包含していた層で、遺構も大きな氾濫の為かその残存部は良好ではなかった。従って、木製品の出土量は他の層に比較して少なく、これらの中には弥生時代前期～中期のものも含まれていると思われるが、後期層出土として一括して扱うことにした。分類は中期層出土の木製品に従う。

a．農耕具類

広鍬A類　第157図244・247。244は長さ32.4cm、幅21.6cmの未成品で、舟形隆起や全体の形状は第119図38に近く、前期のものの可能性がある。247は一方が尖った舟形隆起が剝離したものである。

狭鍬B類　第157図247・249は狭鍬B類である。249は長さ22.8cm、幅11.4cm。

丸鍬A類　第158図254は丸鍬A類の完成品で刃部を欠損している。幅は30.6cmある。柄を装着する方法も中期のそれに同じである。

丸鍬B類　第158図253・255はいずれも丸鍬B類の未成品である。253の場合長さ36.0cm、21.0cm、隆起部での厚さ4.0cmを測る。

丸鍬C類　弥生時代中期層にはみられなかった形状で丸鍬C類とした。完成品で刃部とその近くを欠損する。柄はその装着される孔より、広鍬と同様であったと考えられ、丸鍬A類・B類とは異なる。その両側に方形の孔が一対穿たれているのも特徴である。

鋤B_1類　ナスビ形鋤。第157図250・251、第159図258・259がこれにあたる。

鋤B_2類　第159図260がこれにあたるが、B_1類とした251もB_2類の一部かもしれない。

鋤B_3類　第157図248は鋤B_3類の完成品が欠損したものである。

尚、第157図252は一応鋤状木製品としたが、スギ材を使用しており、中期の141～143のそれと同様なものと思われ、農耕具類ではないと思われる。

田下駄　第159図265、第160図266・267・268は田下駄である。このうち266は大足。

砧（横槌）　第159図262・263・264は砧である。264は長さ30.0cmの完成品で二面が凹み使用痕と考えられる。262はその未成品であろう。263は長さ39.6cmで木の節を頭部に枝を柄に利用したものである。これで完成品であろう。

c．建築関係材

第163図は建築材と考えられるものである。279は2.9mの長い有頭棒、281と282は長さがそれぞれ2.66mと1.9mの二叉の柱であろう。280はその未成品と思われ、長さ2.6mある。

e．部材

第161図269～272、第162図275は部材の各種である。271・272は有頭棒。270は長方形の

孔がみられる。275は樋状を呈している。

j．刺突具

第161図273・274はそれぞれ長さ18.0cmと6.6cmの刺突具である。274は2～3本を組み合わせて使用されたと思われる。

m．斧の柄

第162図277は現存部58.0cmを測る蛤刃磨製石斧の柄の欠損品と考えられる。後期のものではないと思われる。278は鉄斧の柄で、中期層より出土したようなソケット式の鉄斧が装着されたものと考えられる。

（8）古墳時代前期の木製品

第164図～第170図は古墳時代前期層から出土した木製品である。比較的安定した層であった為、これらのほとんどは土器の示す古墳時代前期のものと考えられる。分類は弥生時代中期のそれに従う。

a．農耕具類

ミカン割材　第170図330は長さ93.0cm、幅24.5cm、厚さ12.5cmのミカン割材である。

広鍬A類　第164図283は広鍬A類の完成品である。舟形隆起の一方が刃部に向かい弥生時代中・後期のそれよりさらに細く長く下垂しているのが特徴的である。

広鍬B類　第164図284は広鍬B類の欠損品と考えられる。

鋤B類　第164図285～287は鋤B_1類の一部と思われる。288は鋤B_3類の完成品である。長さ39.0cm、幅18.0cmを測る。289は握りが「T」字形をした組合せ式の鋤の柄と考えられる。握りは両面より二対の木釘によってとめられている。

田下駄　第164図290・291、第165図292～295は田下駄である。このうち第165図292～295は大足と考えられる。293以外は皆完成品である。

土掘具　第165図297は木の幹を頭部に加工し、枝を柄とした長さ30.0cmの土掘具である。弥生時代中期層出土の184・185と同様なものである。

c．建築関係材

第170図328は長さ2.6mの柱である。建築材であろう。

e．部材

第165図166、第166図（307を除く）及び第167図310～314は部材の各種である。306は丸鍬のようにみえるけれども、スギ材を使用している。303・311～314は有頭棒。

f．容器類

柄杓　第168図315は柄杓の未成品と考えられる。長さ57.0cm、幅13.0cmを測る。

ココヤシ製容器　第168図317はココヤシの種皮製の容器である。長さ13.8cm、口径6.0cm、胴部径12.0cmを測る。日本海での漂流物であろう。

椀　第168図319は径18.0cmで一方の端に小孔を穿った外耳がつけられている。318は外耳のない椀の未成品であろう。第169図は内外面に鉋の痕がみられる薄く仕上げられた優品の椀である。

桶　第168図316、第169図322～326は桶である。このうち、316は他に例をみない桶の未成品で、一対の外耳がつけられる。これには、孔が穿たれるものと思われる。下方に向かい漏斗状に凹むが、その先端はいずれ切り落とされるものであろう。現状での長さは49.0cm、口径は34.2cmを測る。他はいずれも把手の形状に若干の違いがみられるほかは同様な形態の桶である。みな完成品が欠損したものである。

匙　第168図321は完形の匙である。全体に鉋の痕がみられる。

n．紡織具

第165図296は長さ21.0cm、幅7.2cmの糸巻き。第166図307は、弥生時代中期層で出土しているような木製紡錘車の未成品であろう。

o．舟

第167図308は舟の舳先である。スギ材で作られている。先端部を除く舷には小孔が一列穿たれている。

p．盾

第167図307は木製盾である。現状は長さ56.4cmあり、両端は二列の小孔、その間は約4.0cmの等間隔に一列ずつ穿たれている。朱は塗られていない。同時期の出土例には平城京内遺跡がある。

q．弓

第170図331は木製弓である。長さは1.67m、径は2.4cmでヒノキ材を使用している。

（9）石器

第171図～第192図には、石鏃・石剣・石斧・石鎌を掲げてある（表19～24）。西川津遺跡ではこれらの石器の他に、砥石、蛤刃磨製石斧、環状石斧、石包丁等があるが次年度に報告する予定である。以下の石器類はいずれも弥生時代前期～中期の層や遺構から出土したものである。

a．石鏃　1・2は磨製石鏃で、両面に丁寧な研磨が施され、稜線がはっきりと残る。1は両端が折半している。2はやや丸味を帯びた二等辺三角形を呈す。3～86は安山岩製

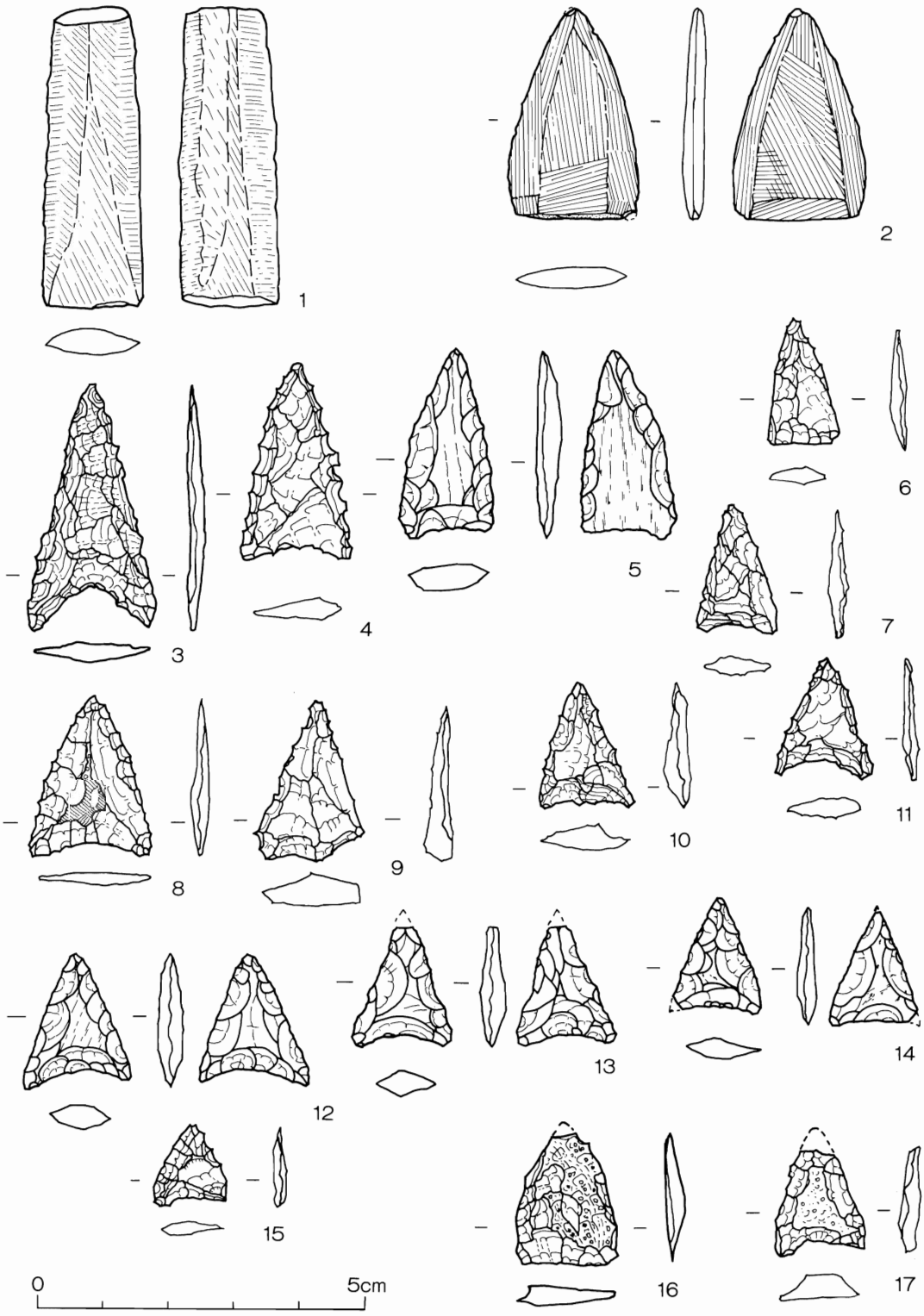
の打製石鏃である。黒曜石製のものに比べると、剝離調整が粗く雑で、主要剝離面や自然面を残す。このうち、3の両側辺部には深い交互剝離が加えられ、一側面は凹凸状をなし、鋭い刃部をもつ。これは黒曜石製石鏃37と類似する。18～80は黒曜石製である。特に18～39は長身で身幅が狭く、きれいな二等辺三角形を描き出す大形品である。刃部は鋭く、鋸歯状をなすものがほとんどだが、36のように凹凸状をなすものもある。39は他のものに比べると調整が粗く、未成品の可能性がある。40～52の形態は前者同様、二等辺三角形状を呈すが小形である。53～60は形が不定形で、調整が雑である。61～66は縄文時代の製品かと思われる。67～86は未成品で主要剝離面がみられる。8は安山岩製の局部磨製石鏃である。

b．石剣（第176図、第177図）　明らかに石剣と判るものは6点出土している（1～6）。1～3は半磨製の短剣である。3は握りを欠くが、1・2・3ともそのサイズはほぼ同じである。7はこの種のものの未成品の欠損したものと思われる。3は中央に稜を研ぎ出している。東大阪市鬼虎川遺跡では、この種の短剣に図版71の下に示したような樹皮を巻きつけた出土例がある。4は刃部の大部分を欠くが、茎を有して中央に稜がある両刃の鉄剣形の磨製石剣である。5・6も鉄剣形の磨製石剣である。5は欠損品であるが一部に孔が残る。6は全長8.6cmの小形のもので基部に一対の孔があけられている。茎のない有孔の石剣はタテチョウ遺跡に出土例がある。

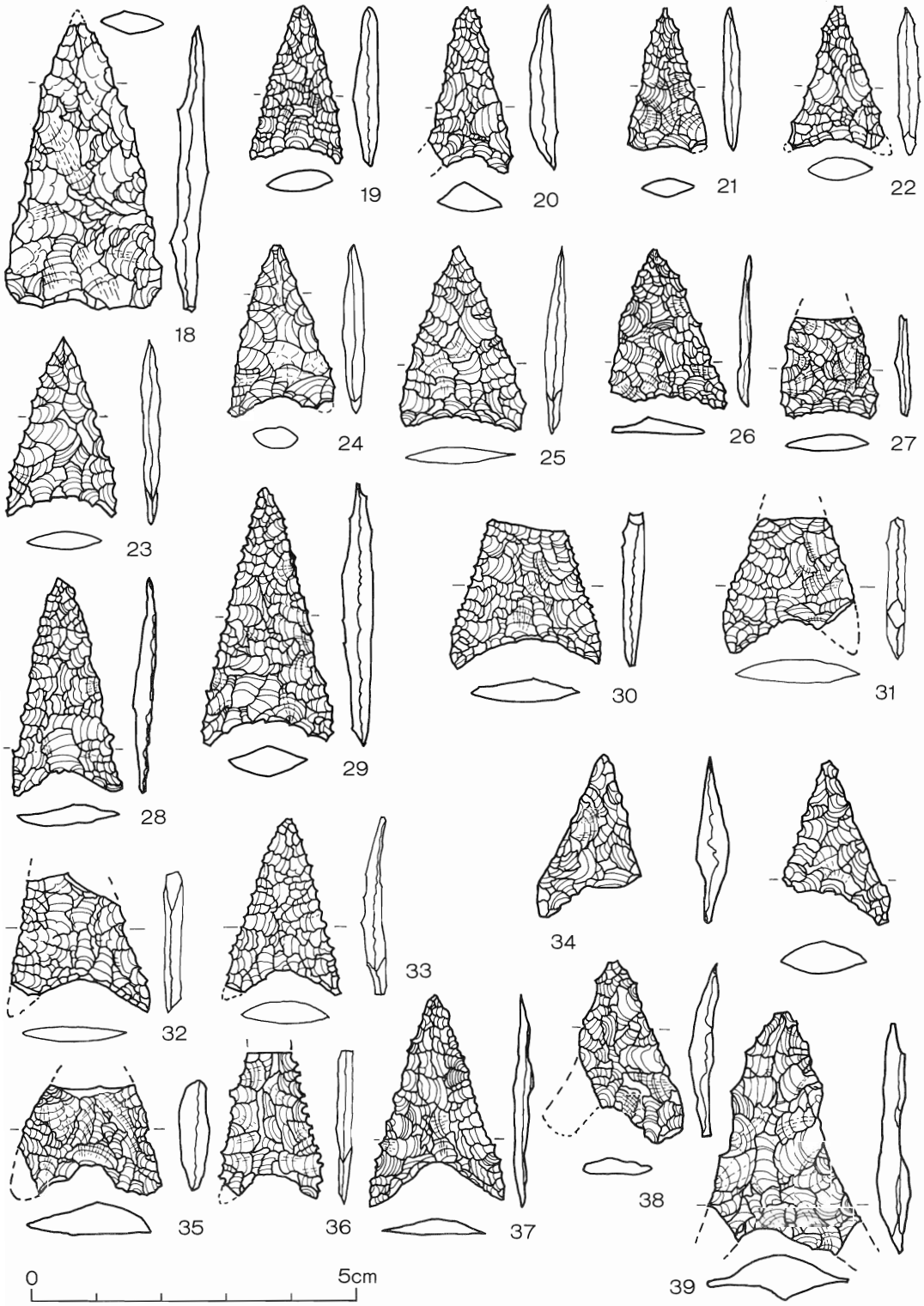
c．扁平石斧（第178図）　刃部の幅からみると次の4種がある。1～5は刃部の幅が1.0cm前後で細長で短いものである。このうち2は両刃に近く、他は片刃である。6～13は刃部の幅が3.0cm前後の一群で片刃のもの（6・7・10～13）と両刃のものと両刃に近いもの（11）がある。14～18は刃部の幅が5.0cm前後の一群である。いずれも片刃で17は完形に近い。14・16も完成品であるが、もとは17のような長さがあったと考えられる。19・20は刃部の幅がさらに広い一群で、19は両刃である。

d．抉入柱状片刃石斧（第182図～第188図）　総数は43個体あるが、このうち18個体を選び石器の製作工程から次のA・B・Cの三段階に分類した。A段階は原石を荒割りしほぼサイズを決定した段階である。1～2がこれにあたる。B段階は敲打と研磨による整形で、3～10が相当する。A段階・B段階で欠損する場合も多かったようであるが、10はほぼB段階の原形を知ることができる。C段階はさらに研磨をかけ、抉りを入れ完成させたもので、11～18がこれにあたる。11・14はほぼその全様が知られるが、他は使用時に壊れたものが多い。12・13は抉りが2か所みられる。

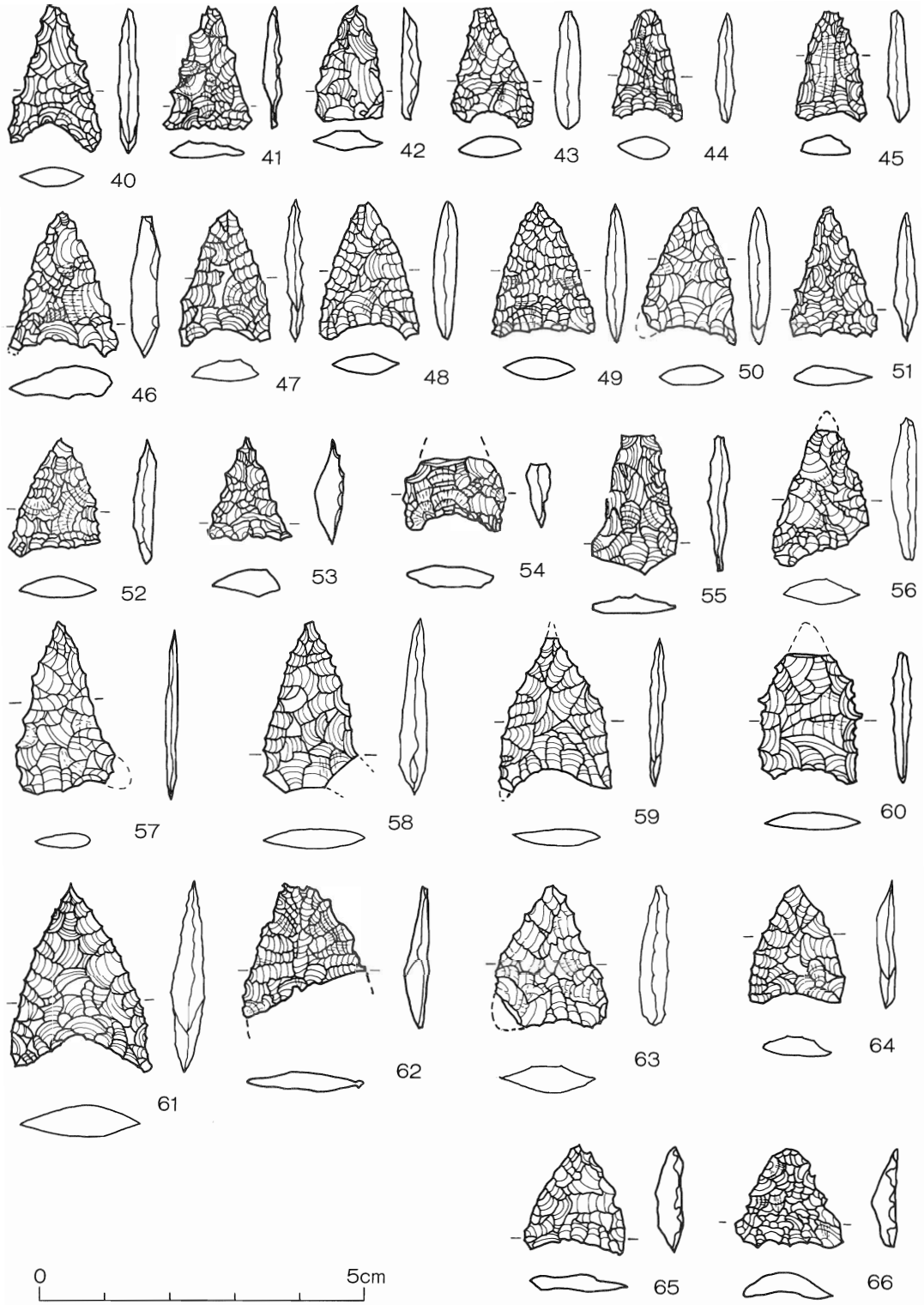
e．石錐（第189図～第192図）　13点の石錐が出土している。その内訳は局部磨製石錐



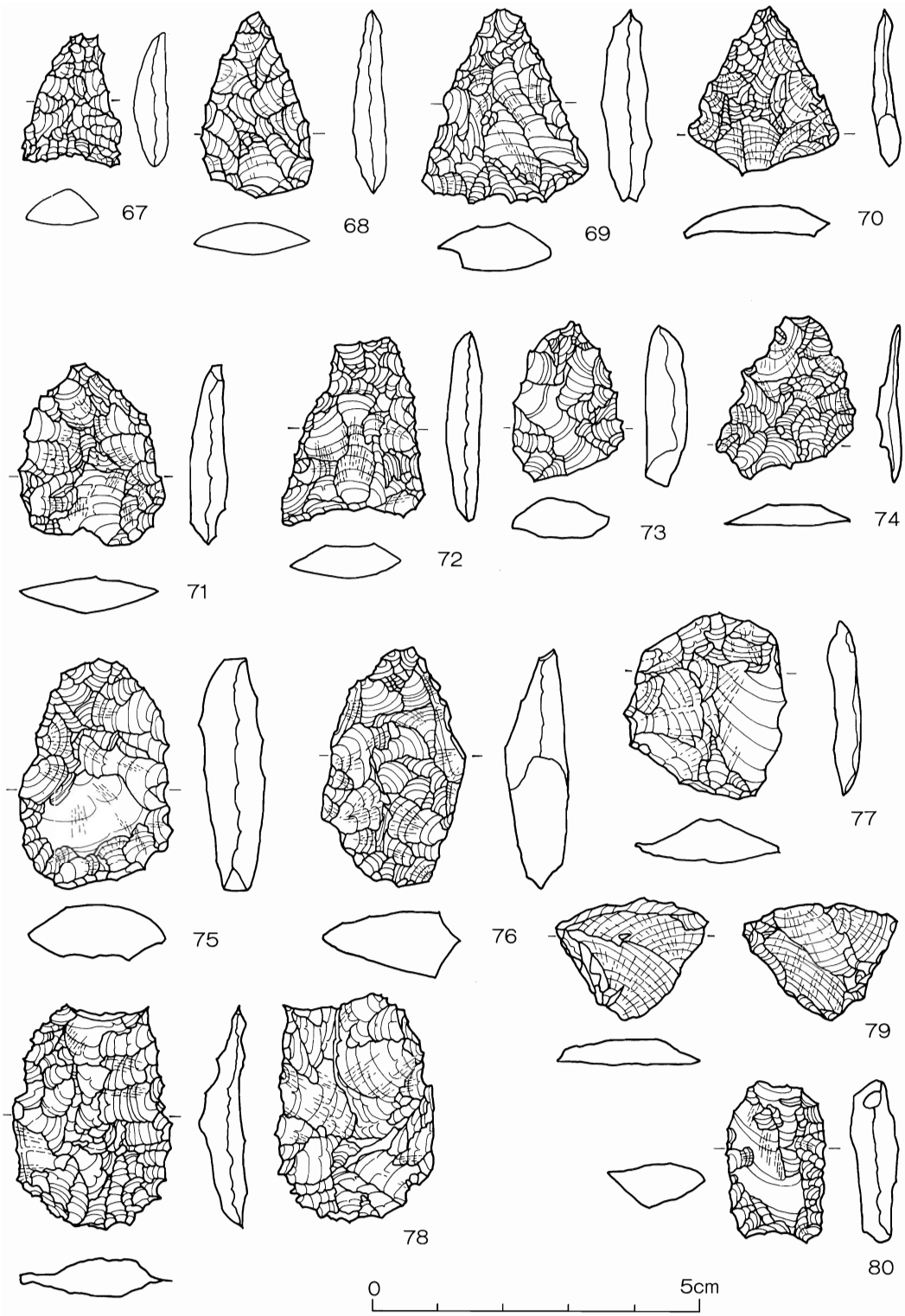
第171図　石器実測図(1)



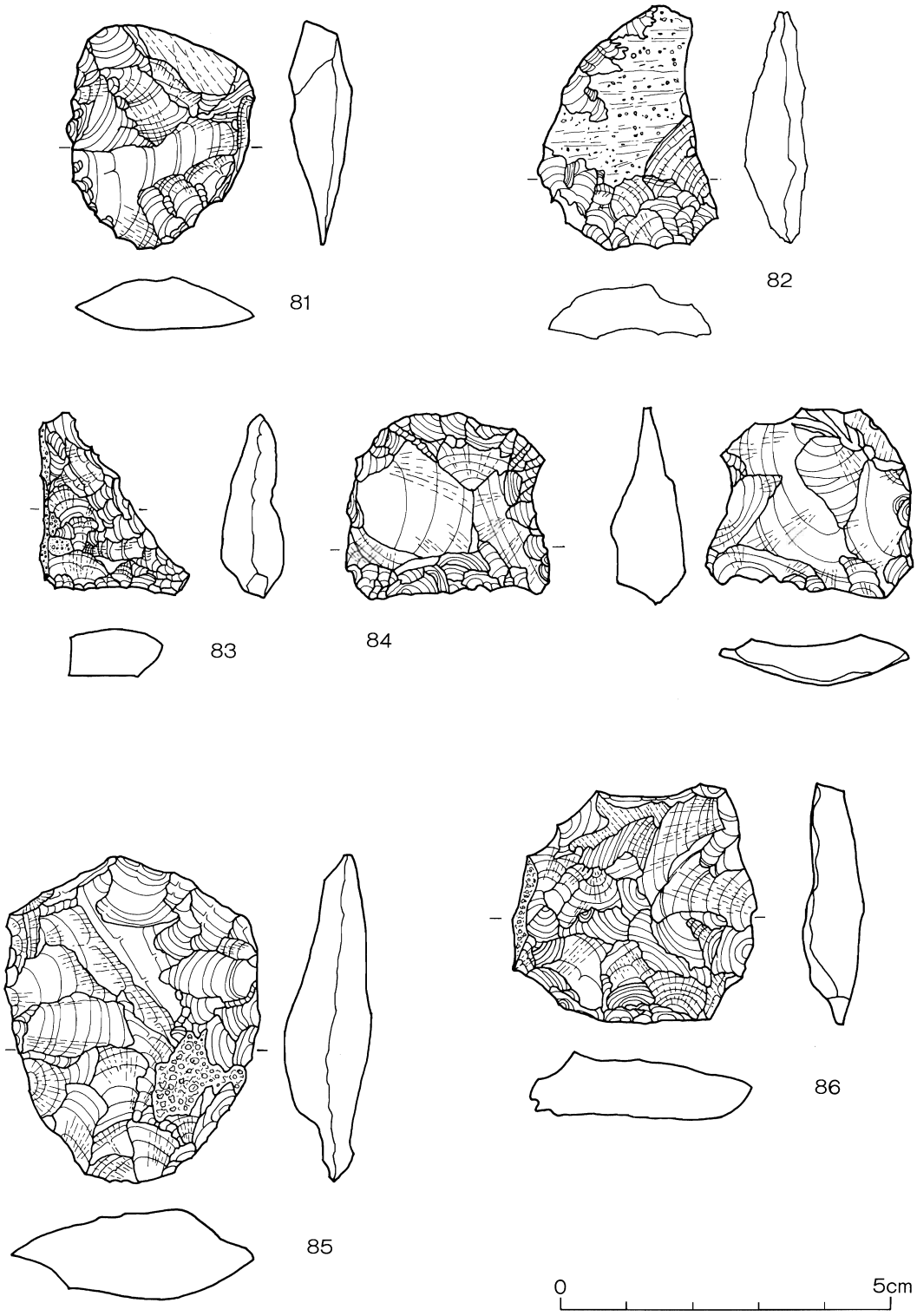
第172図　石器実測図(2)



第173図　石器実測図(3)



第174図　石器実測図(4)



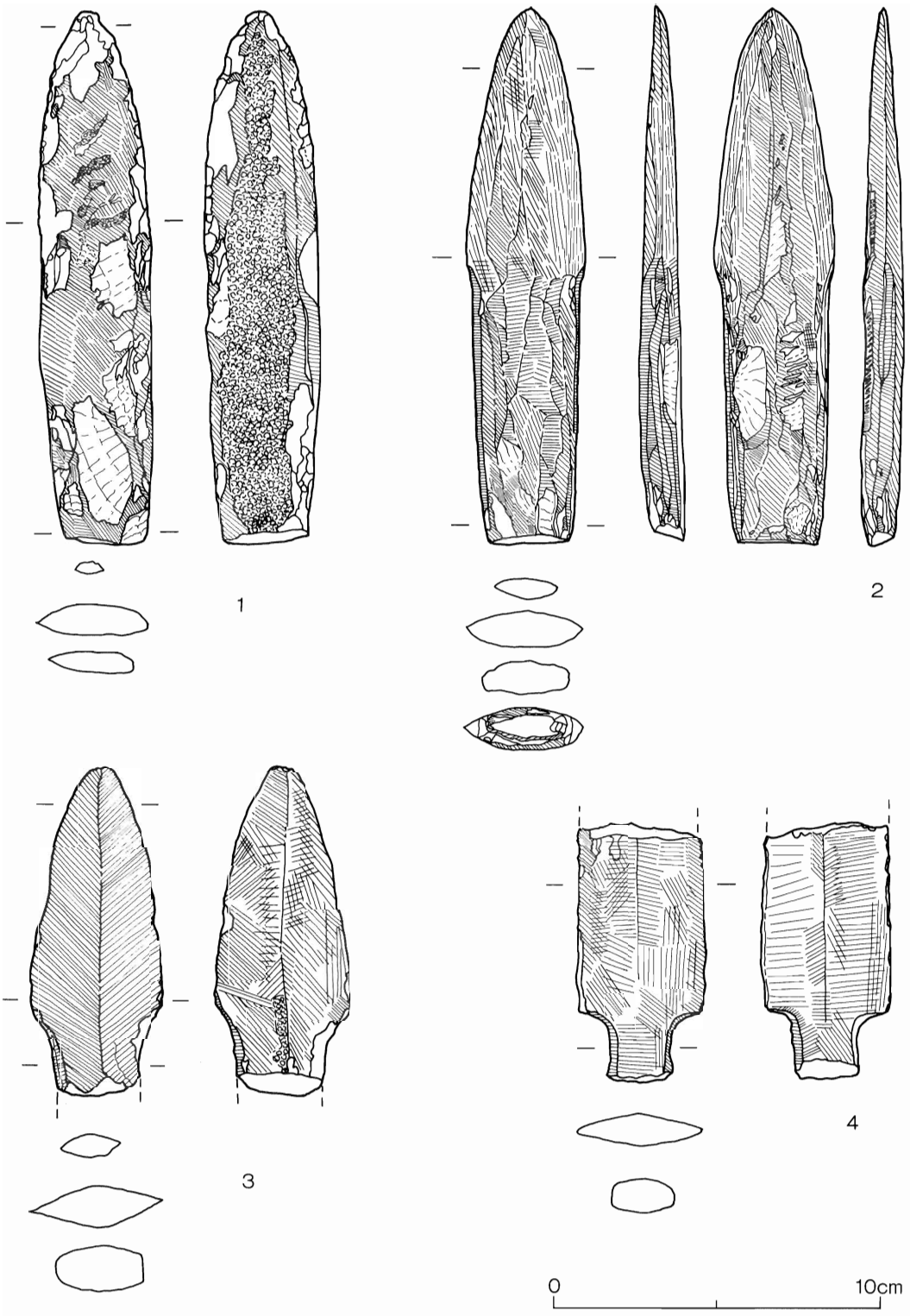
第175図　石器実測図(5)

表19 石　鏃　計　測　表 (1)

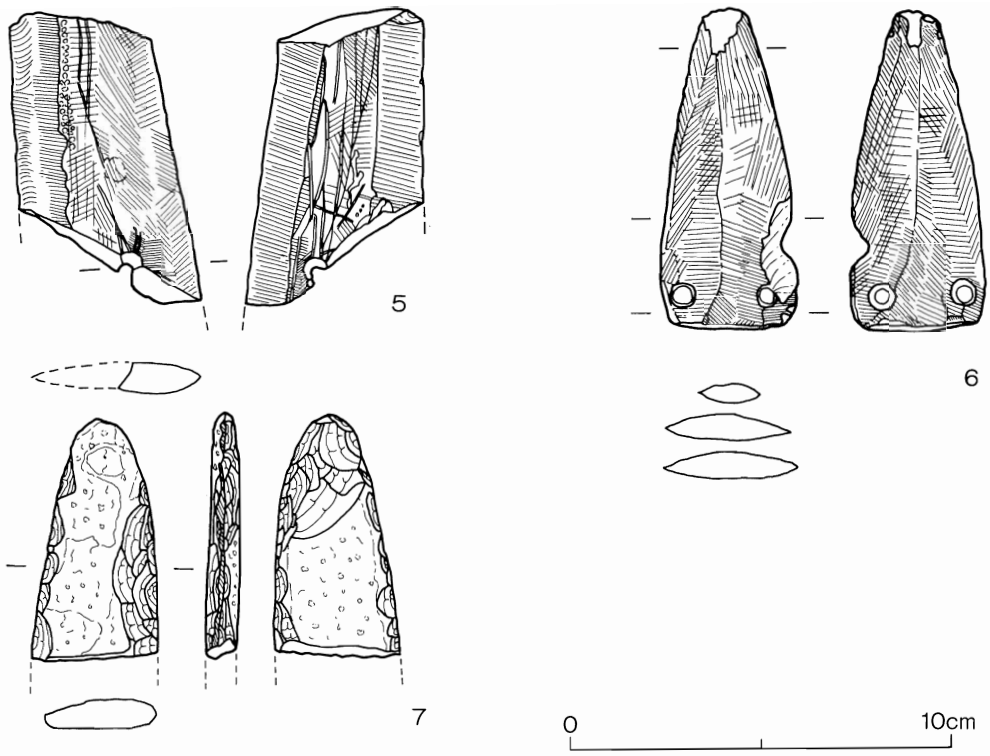
挿図番号	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量	基部の対称性	調　整	折損部	中央断面	出　土　層
1	黒色片岩	4.6	1.6	0.4	4.0			両　端		弥生中期層
2	〃	3.2	2.0	0.3	2.26			尖　端		〃
3	S N	3.0	2.0	0.3	2.1	対称	両　面	—	両　凸	—
4	S N	2.8	1.6	0.3	1.4	非　対称	〃	—	〃	弥生中期層
5	S N	2.9	1.45	0.4	1.65	〃	〃	—	〃	〃　前期貝層
6	S N	1.8	1.1	0.25	0.5	〃	〃	—	〃	〃　中期層
7	S N	1.8	1.1	0.35	0.5	ほぼ対称	〃	—	〃	〃　前期層
8	S N	2.1	1.6	0.3	0.9	—	〃	—	〃	〃　〃貝層中
9	S N	2.4	1.6	0.5	1.6	非　対称	片　面	—	やや両凸	〃　前期層
10	S N	1.8	1.5	0.35	0.8	—	〃	—	両　凸	〃　〃貝層中
11	S N	1.5	1.3	0.3	0.58	ほぼ対称	両　面	—	〃	〃　中期層
12	S N	2.00	1.65	0.35	1.0	—	〃	—	〃	〃前期貝層中
13	S N	1.8	1.5	0.4	0.9	非　対称	〃	尖　端	〃	〃　〃
14	S N	1.8	1.5	0.3	0.55	—	片　面	尖端・一端	〃	〃　〃
15	S N	1.05	1.1	0.2	0.2	非　対称	両　面	—	〃	弥生中期層
16	S N	2.0	1.5	0.3	0.9	—	片　面	尖　端	〃	〃前期貝層中
17	S N	1.6	1.3	0.3	0.75	非　対称	両　面	尖　端	片面凸	〃中期貝層B
18	o b	4.3	2.4	0.5	4.4	—	〃	尖　端	両　凸	〃中期層
19	o b	2.35	1.4	0.3	0.7	ほぼ対称	片　面	—	〃	〃
20	o b	2.5	1.2	0.45	0.7	非　対称	両　面	一　端	〃	弥生中期貝層B
21	o b	2.2	1.2	0.25	0.5	—	〃	一　端	〃	〃中期層
22	o b	2.2	1.3	0.3	0.6	ほぼ対称	〃	一　端	〃	弥生前期貝層中
23	o b	2.7	1.7	0.3	1.0	〃	〃	—	〃	〃　〃
24	o b	2.55	1.6	0.35	1.0	非　対称	〃	一　端	〃	〃　〃
25	o b	2.8	1.9	0.3	1.15	—	〃	—	〃	〃　〃
26	o b	2.2	1.7	0.2	1.0	—	〃	一　端	片面凸	弥生中期層
27	o b	1.5	1.45	0.25	0.45	—	〃	尖端1/3	両　凸	〃中期貝層B
28	o b	2.0	1.5	0.4	1.1	非　対称	〃	—	〃	〃　中期層
29	o b	3.9	2.0	0.45	2.1	ほぼ対称	〃	—	〃	〃
30	o b	2.3	2.3	0.35	1.2	対称	片　面	1/2	〃	〃
31	o b	2.1	1.95	0.3	1.0	〃	両　面	1/2・一端	〃	〃
32	o b	2.1	2.0	0.2	0.85	—	〃	1/2・一端	やや両凸	〃
33	o b	2.7	1.7	0.4	0.7	対称	〃	一　端	両　凸	〃
34	o b	2.5	1.5	0.5	1.1	—	〃	一　端	〃	〃
35	o b	1.65	2.2	0.45	1.1	ほぼ対称	〃	尖端・一端	〃	〃
36		2.2	1.6	0.25	0.85	非　対称	〃	尖端・一端	〃	弥生前期貝層中
37	o b	1.7	2.0	0.3	0.95	対称	〃	—	片　凸	〃中期層
38	o b	2.9	1.3	0.3	1.17	〃	〃	一　端	〃	〃
39	o b	2.7	2.2	0.5	3.4	ほぼ対称	〃	両　端	両　凸	〃
40	o b	2.2	1.35	0.3	0.8	非　対称	〃	—	〃	弥生前期貝層中
41	o b	1.8	1.4	0.3	0.6	—	〃	—	〃	〃中期貝層B
42	o b	1.7	1.0	0.4	0.45	—	片　面	—	〃	〃前期層
43	o b	1.8	1.2	0.3	0.5	非　対称	両　面	尖端・一端	〃	〃中期層

表20 石　鏃　計　測　表 (2)

図番号	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	基部の対称性	調　整	折損部	中央断面	出　土　層
44	ob	1.7	1.0	0.4	0.35	ほぼ対称	両　面	—	両　凸	—
45	ob	1.7	1.1	0.25	0.4	非　対称	片　面	—	〃	弥生中期層
46	ob	1.8	1.1	0.35	0.9	〃	両　面	—	〃	〃
47	ob	2.0	1.3	0.3	0.7	ほぼ対称	〃	—	〃	〃前期貝層中
48	ob	2.1	1.5	0.3	0.85	〃	〃	—	〃	〃中期層
49	ob	2.0	1.5	0.3	0.7	—	〃	両　端	〃	〃中期貝層B
50	ob	2.1	1.5	0.3	0.9	非　対称	〃	尖端・一端	〃	〃前期貝層中
51	ob	2.0	1.3	0.3	0.6	—	〃	—	〃	〃中期貝層B
52	ob	1.8	1.4	0.3	0.5	—	片　面	—	〃	〃中期層
53	ob	1.5	1.2	0.4	0.35	—	両　面	—	〃	〃中期貝層B
54	ob	1.1	1.5	0.4	0.55	ほぼ対称	〃	½	〃	〃　〃
55	ob	2.1	1.5	0.3	0.65	非　対称	〃	尖　端	〃	弥生前期層
56	ob	2.1	1.4	0.4	0.7	—	片　面	尖端・一端	〃	〃中期貝層B
57	ob	2.6	1.55	0.2	0.8	—	両　面	一　端	〃	〃前期貝層中
58	ob	2.6	1.4	0.3	0.95	—	〃	尖端・一端	〃	〃　〃
59	ob	2.3	1.7	0.3	0.85	非　対称	〃	尖端・一端	〃	〃　〃
60	ob	1.95	1.45	0.25	0.87	〃	〃	尖　端	〃	〃　〃
61	ob	2.8	2.0	0.5	1.65	対称	〃	一　端	〃	〃　〃
62	ob	1.8	2.0	0.4	0.65	—	〃	½	〃	弥生中期層
63	ob	2.15	1.7	0.4	1.1	—	〃	一　端	〃	〃
64	ob	1.8	1.3	0.3	0.5	—	〃	—	〃	弥生前期貝層中
65	ob	1.2	1.3	0.5	0.5	—	〃	—	〃	〃中期層
66	ob	1.5	1.6	0.3	0.7	—	〃	—	片面凸	〃
67	ob	1.9	1.5	0.5	1.3	非　対称	〃	—	三角形	〃
68	ob	2.7	1.6	0.45	1.85	〃	〃	—	両　凸	弥生前期貝層中
69	ob	2.9	2.5	0.7	3.7	—	〃	—	〃	弥生中期層
70	ob	2.4	2.4	0.3	1.7	対称	〃	—	片面凹	〃
71	ob	2.7	2.2	0.6	2.2	—	〃	—	両　凸	〃
72	ob	2.8	2.2	0.5	2.75	非　対称	〃	尖　端	四角形	〃
73	ob	2.1	1.6	0.6	2.79	—	〃	—	両　凸	〃
74	ob	2.5	2.1	0.3	1.45	—	〃	—	片面凸	〃
75	ob	3.4	2.3	0.8	6.0	—	〃	—	両　凸	弥生中期貝層B
76	ob	3.6	2.2	1.0	6.1	—	〃	—	〃	〃中期層
77	ob	3.0	2.4	0.5	4.68	—	〃	—	〃	〃
78	ob	3.8	2.6	0.6	5.1	—	〃	尖　端	〃	〃
79	ob	1.9	2.3	0.4	1.5	—	—	—	〃	—
80	ob	2.45	1.5	0.7	2.1	—	—	—	三角形	弥生中期層
81	ob	3.35	2.7	0.8	8.1	—	—	—	両　凸	〃
82	ob	3.0	2.2	1.0	6.12	—	—	—	〃	〃
83	ob	2.7	2.2	0.7	3.6	—	—	一　端	四角形	〃
84	ob	2.6	2.8	0.7	7.22	—	—	—	両　凸	〃
85	ob	4.9	3.7	1.4	18.9	—	—	—	〃	〃
86	ob	3.5	3.6	0.9	15.55	—	—	—	〃	〃



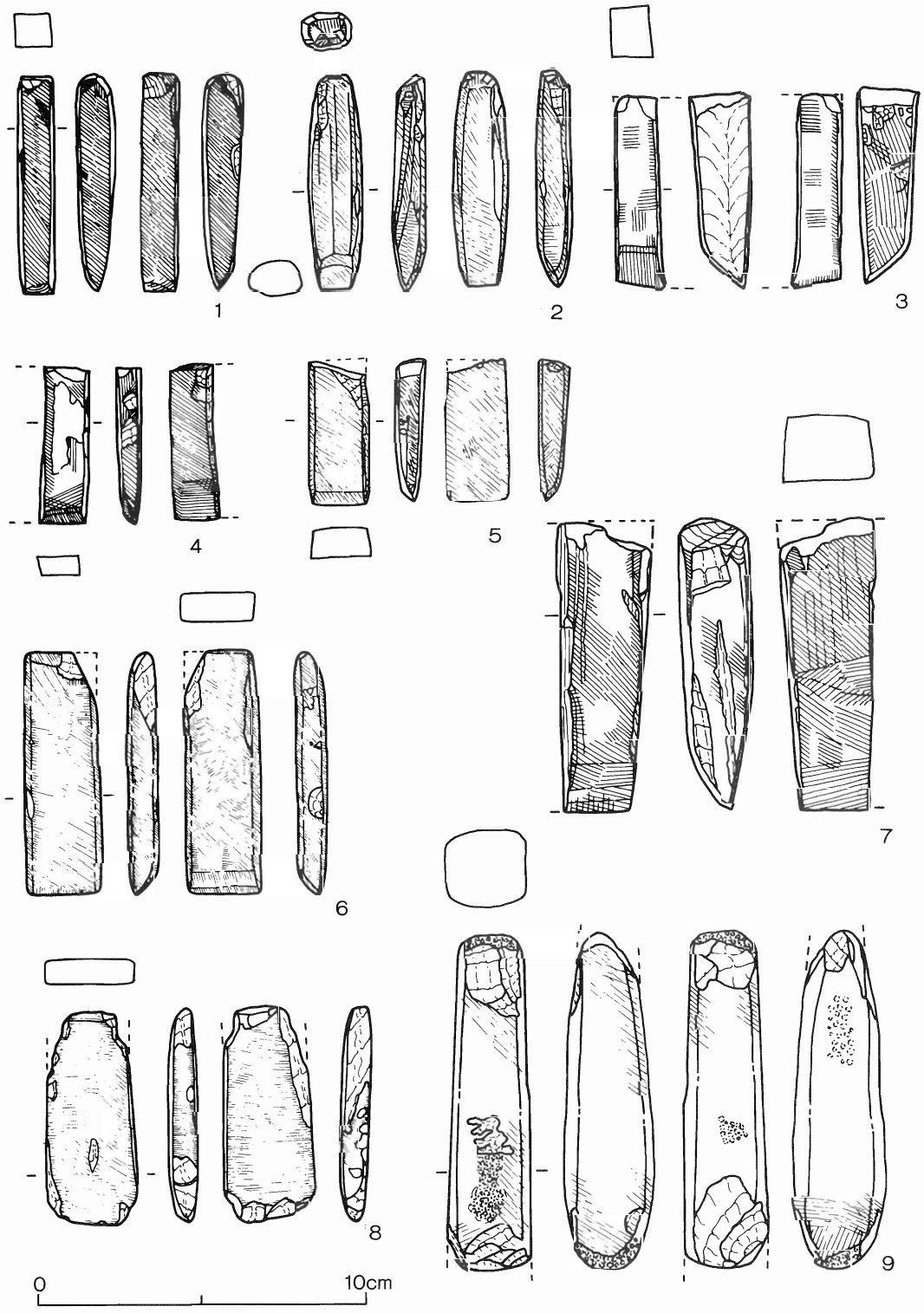
第176図　石器実測図(6)



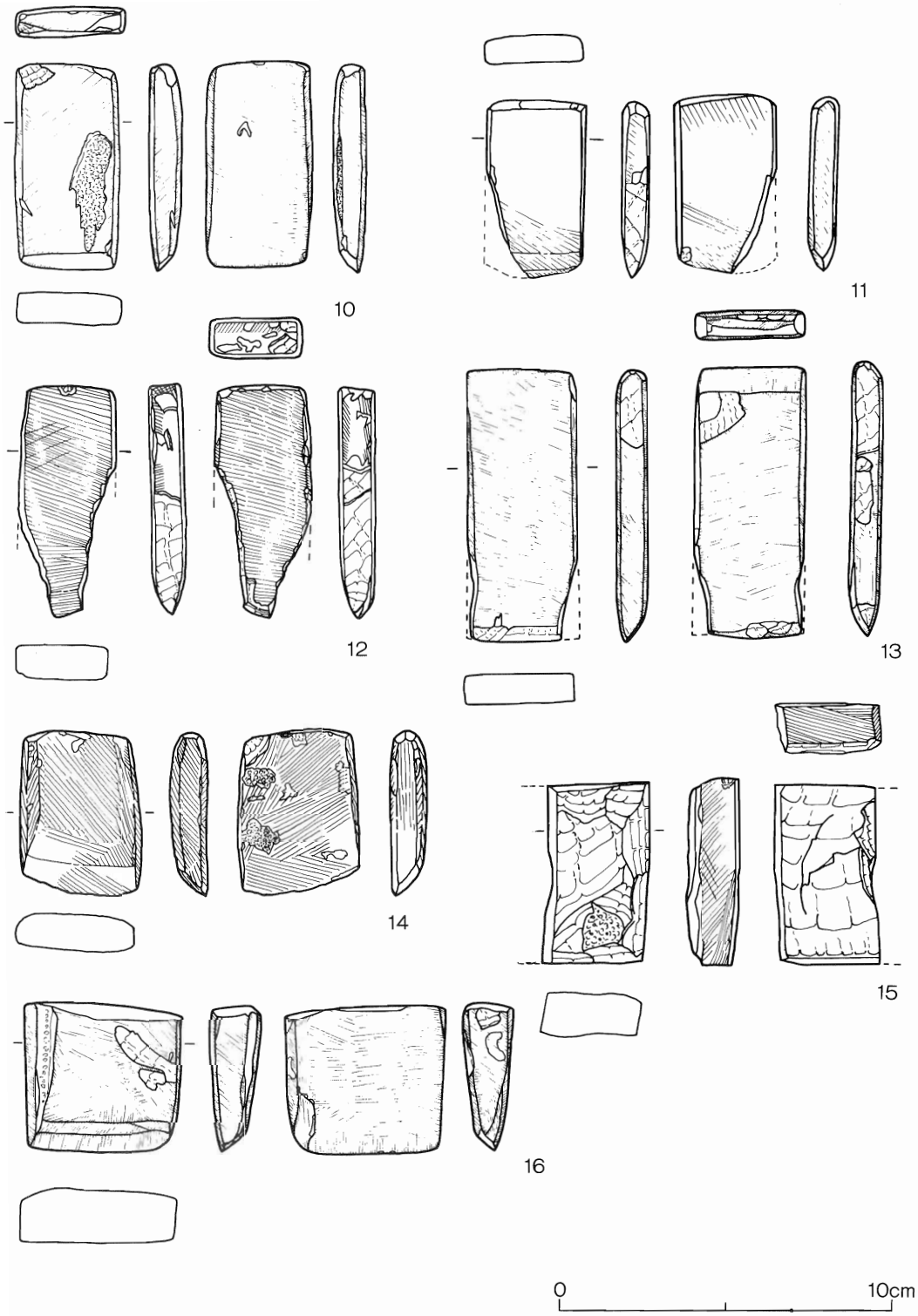
第177図　石器実測図(7)

表21　石　剣　計　測　表

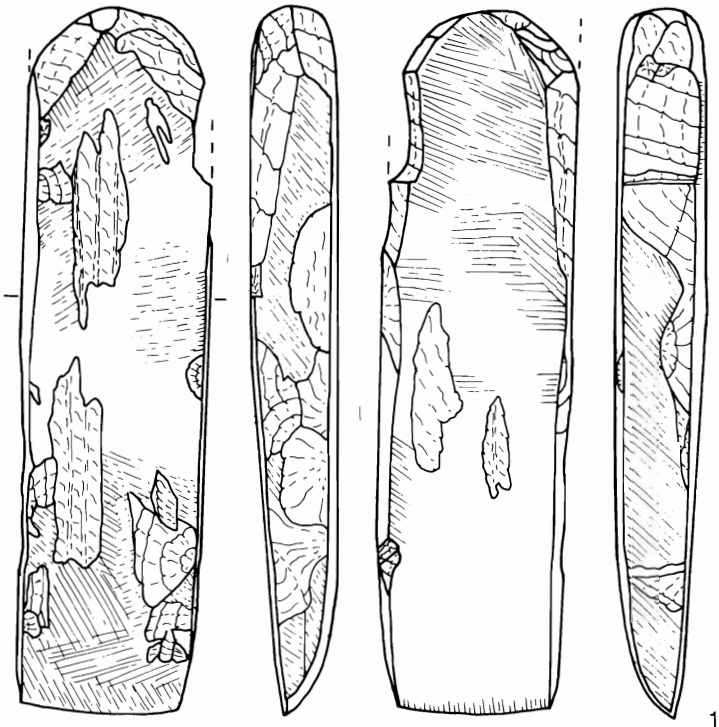
挿図番号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	特徴	重量 (g)	石材	時期
1	16.3	3.4	1.0	短剣型、完形	80	黒色片岩	弥生中期
2	16.5	3.5	1.3	〃　〃	104	〃	〃
3	10.1	4.1	1.4	〃　刃部のみ	54	〃	〃
4	8.0	3.8	1.0	鉄剣型	40	〃	〃
5	7.9	4.5	0.8	〃　2孔アリ	38	〃	〃
6	8.6	3.0	0.7	〃　〃	26.0	〃	〃
7	6.4	3.3	0.7	未成品？	24.0	〃	〃

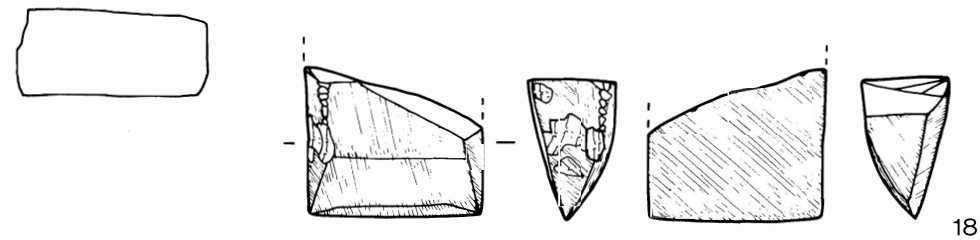


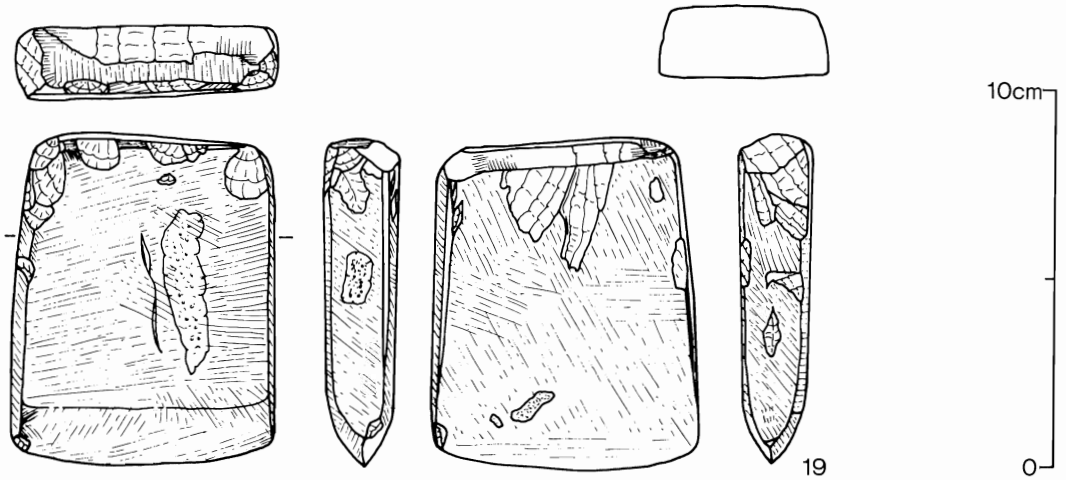
第178図　石器実測図(8)



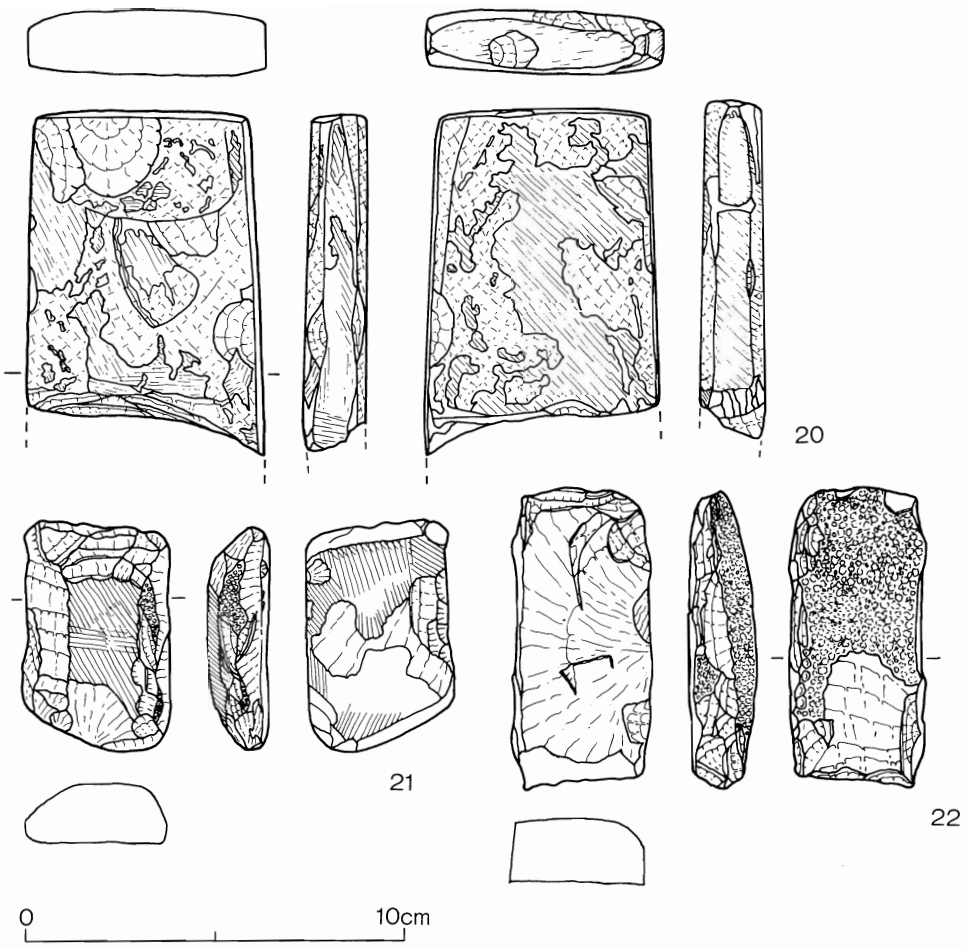
第179図　石器実測図(9)



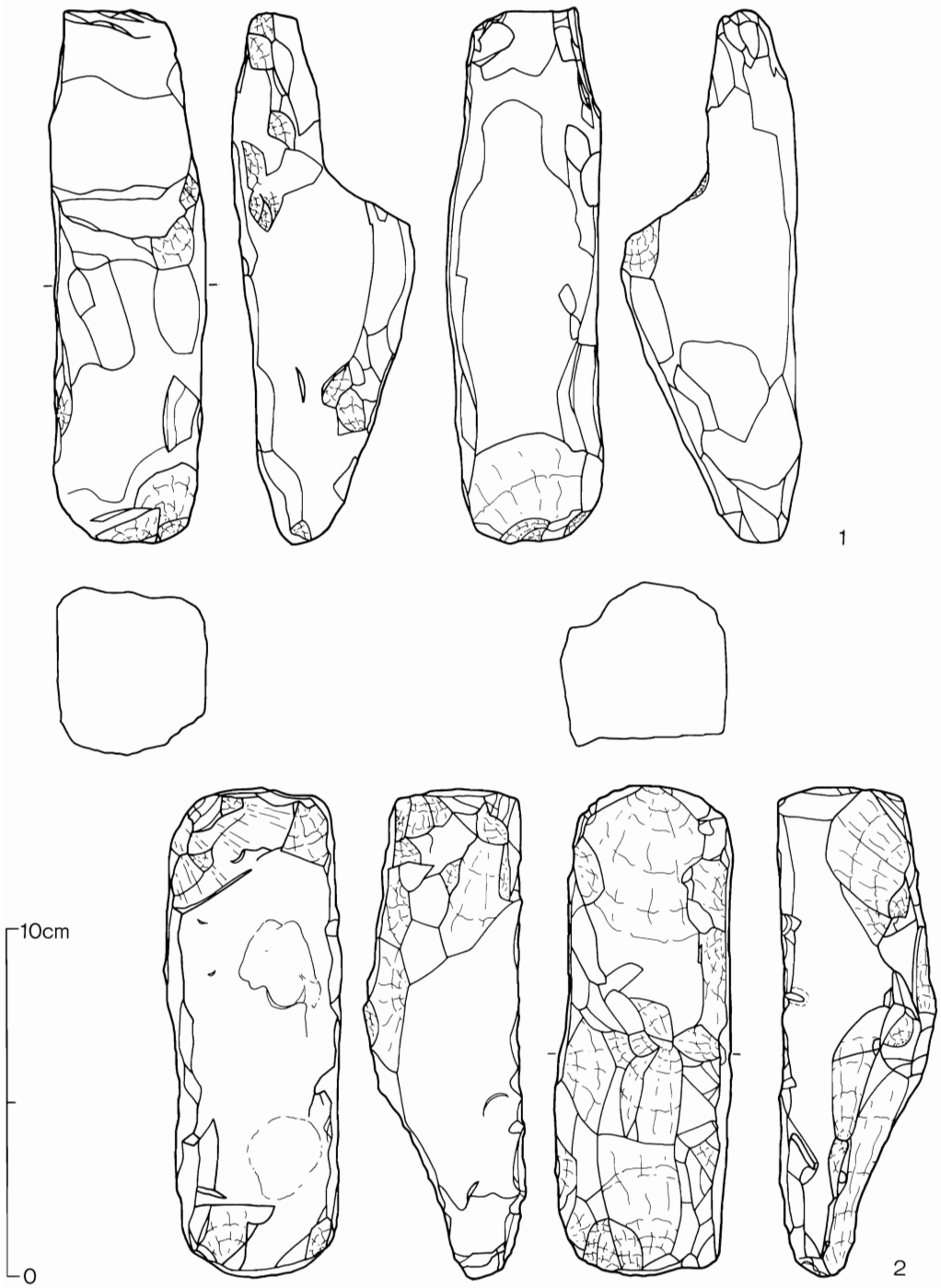




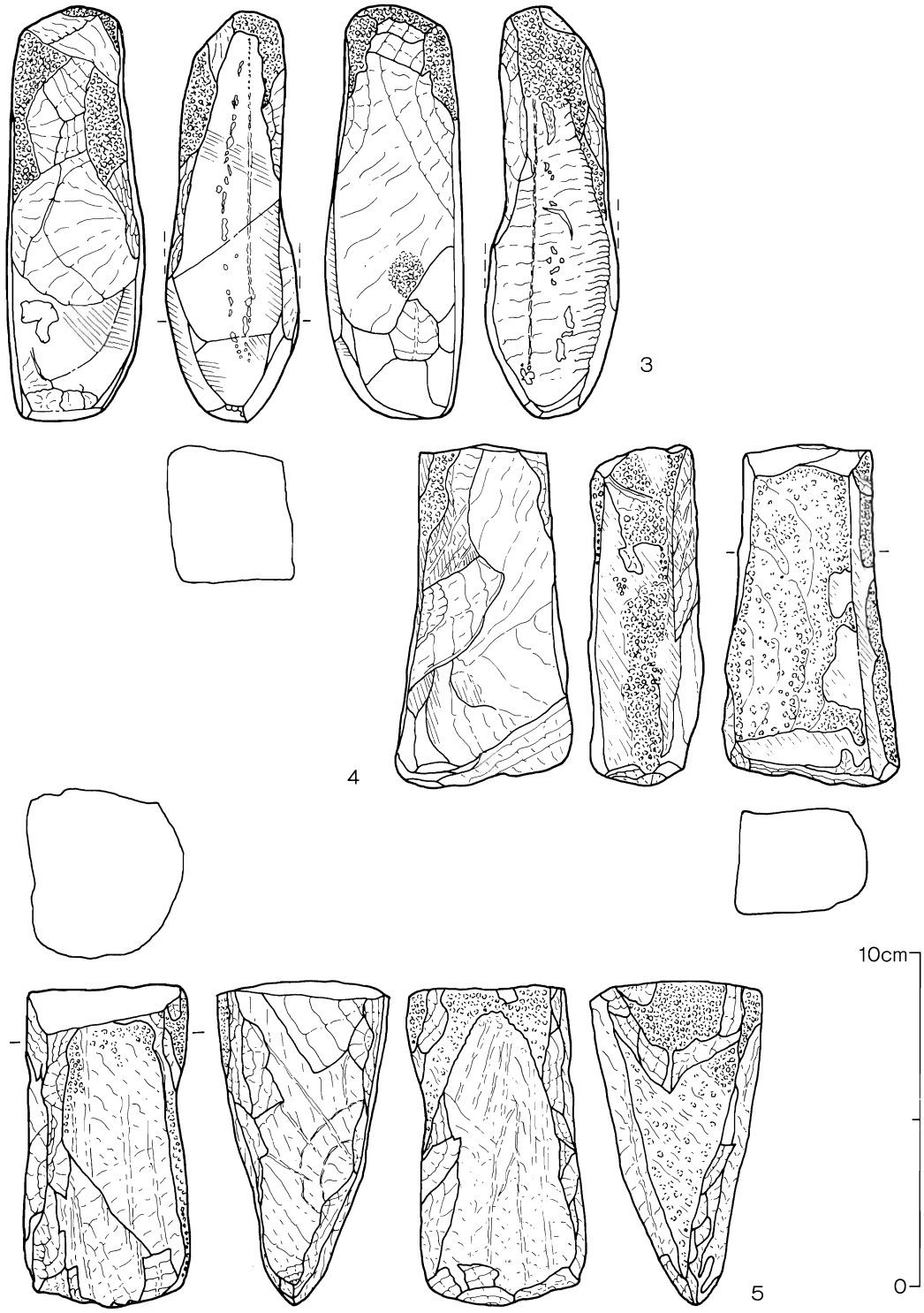
第180図　石器実測図(10)



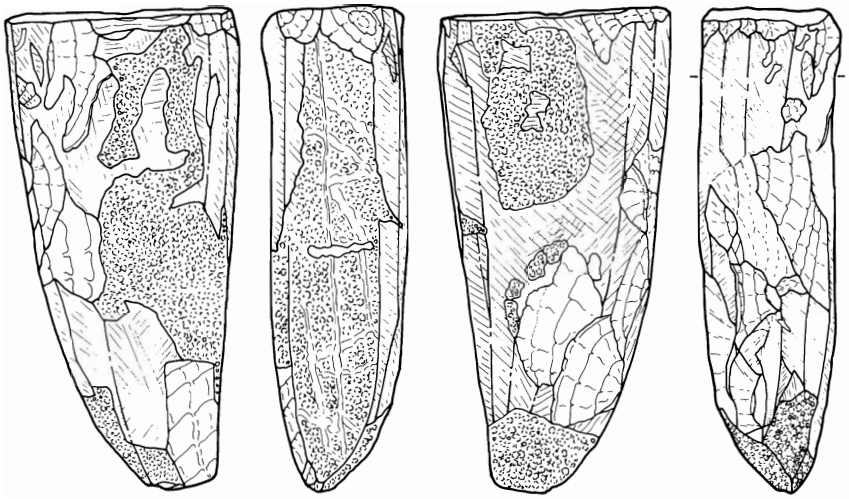
第181図　石器実測図(11)

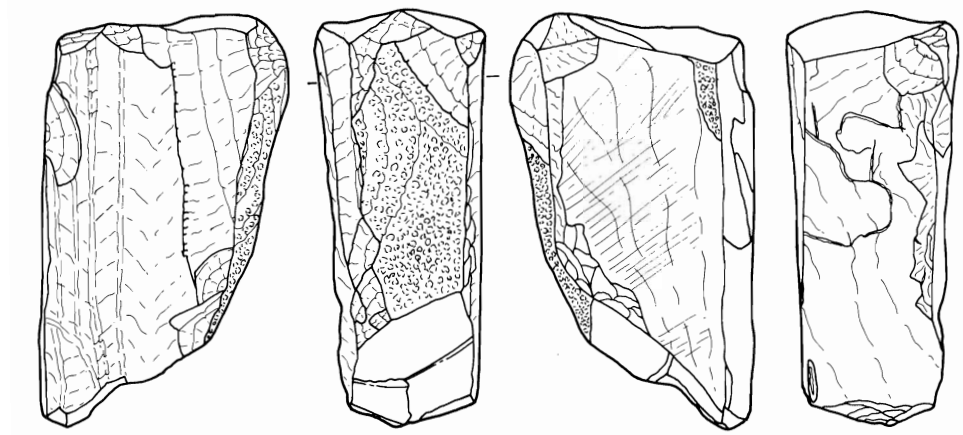


第182図　石器実測図(12)

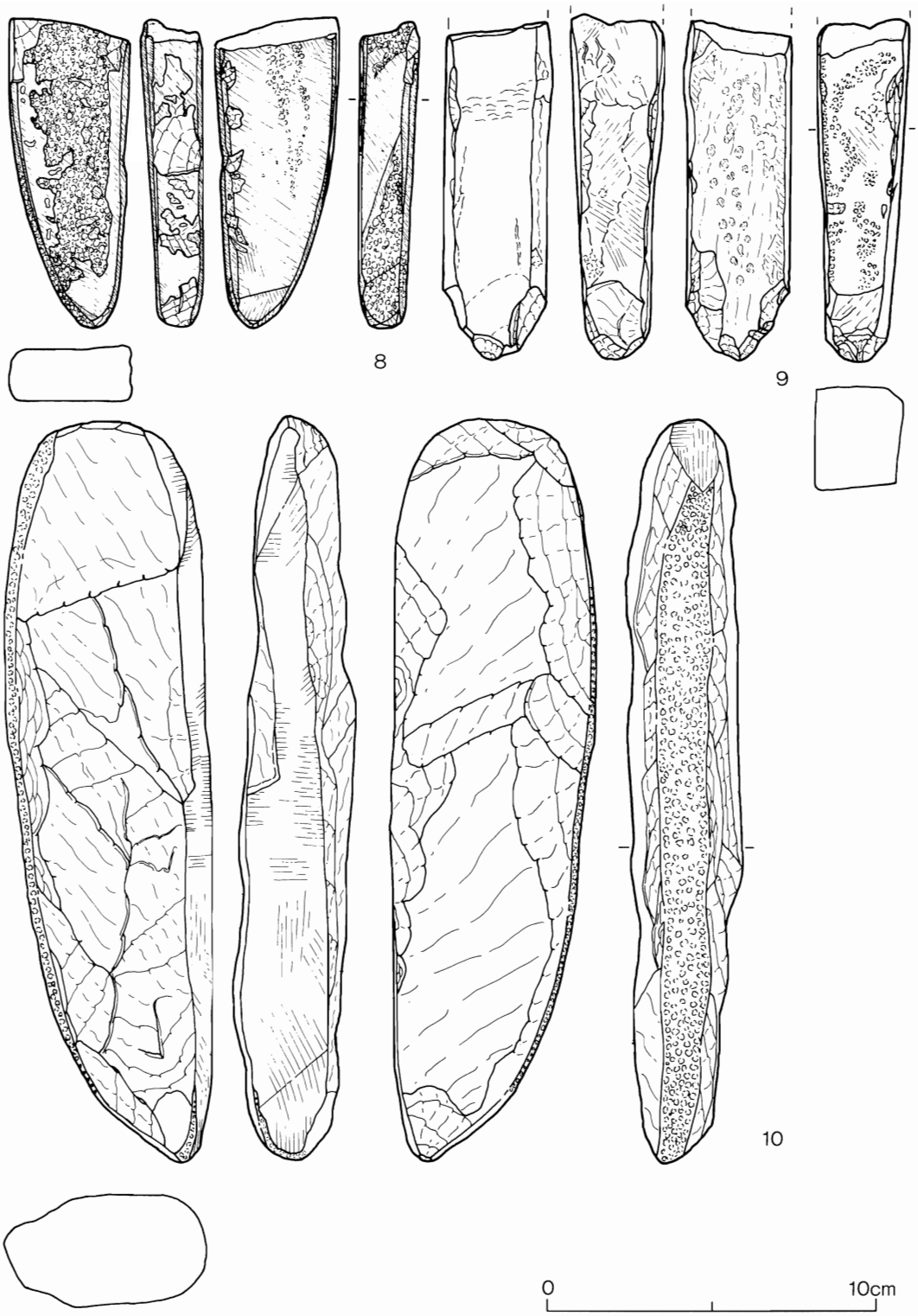


第183図　石器実測図(13)

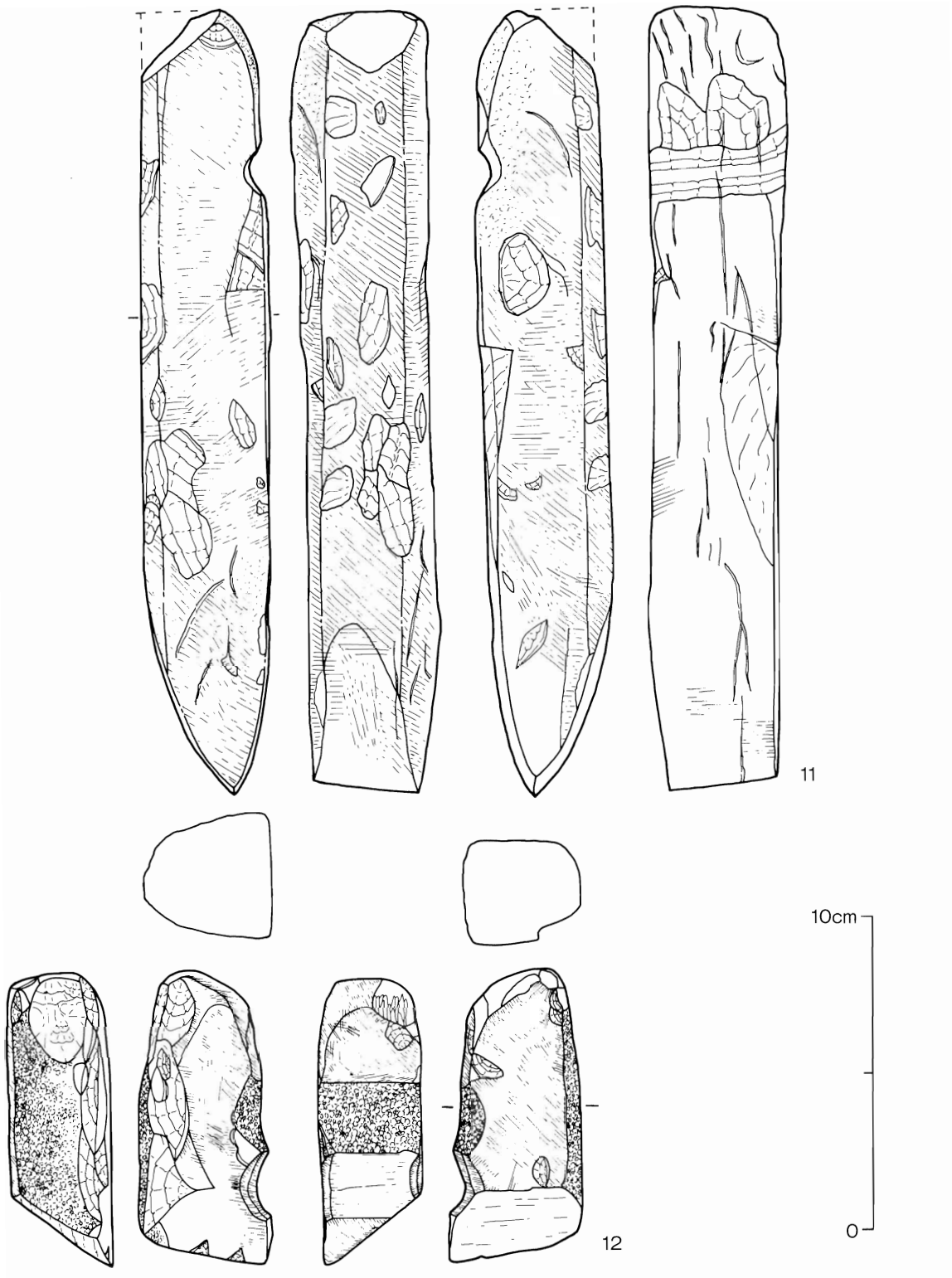




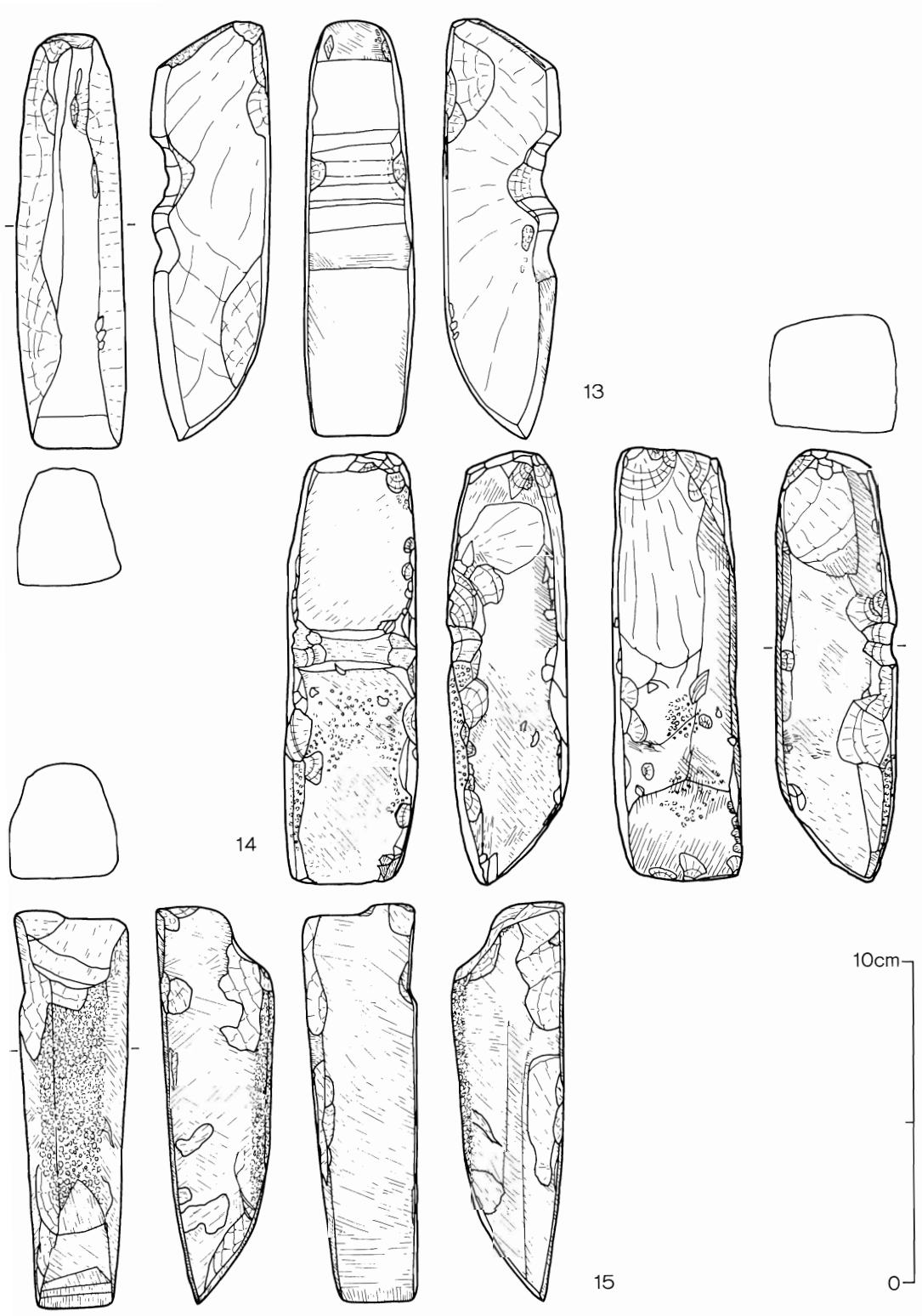
第184図　石器実測図(14)



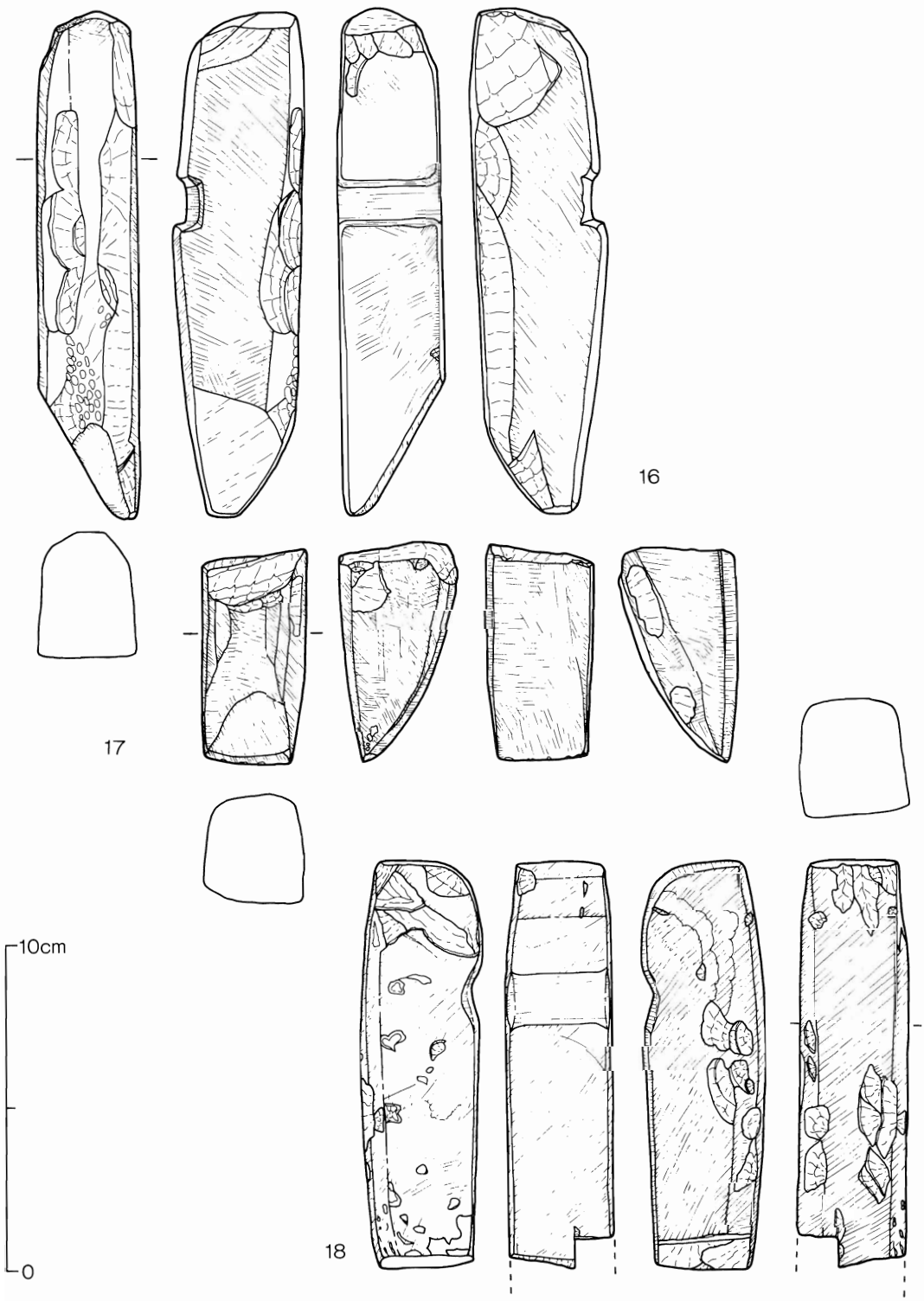
第185図　石器実測図(15)



第186図　石器実測図(16)



第187図　石器実測図(17)



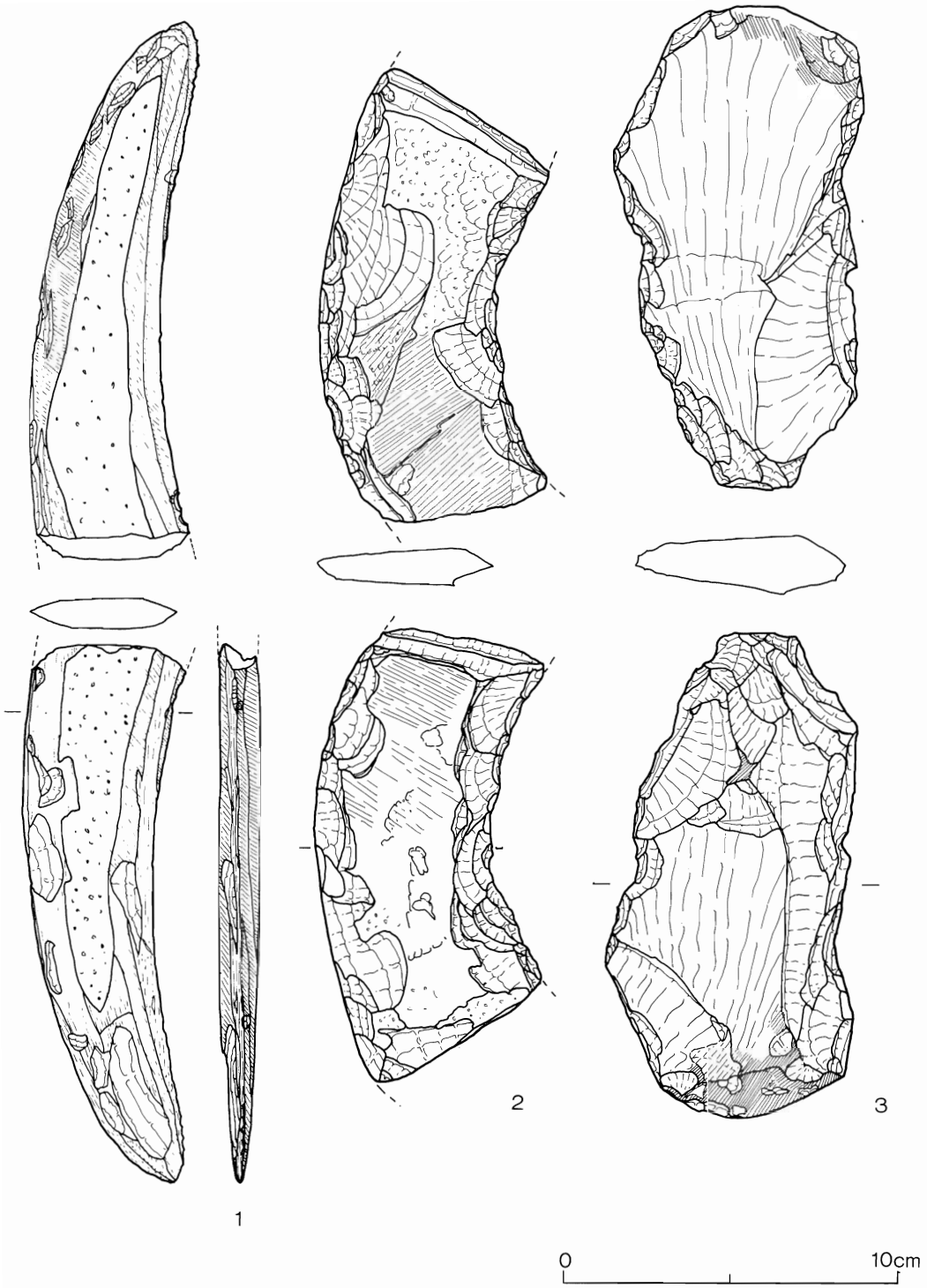
第188図　石器実測図(18)

表22 扁平石斧計測表

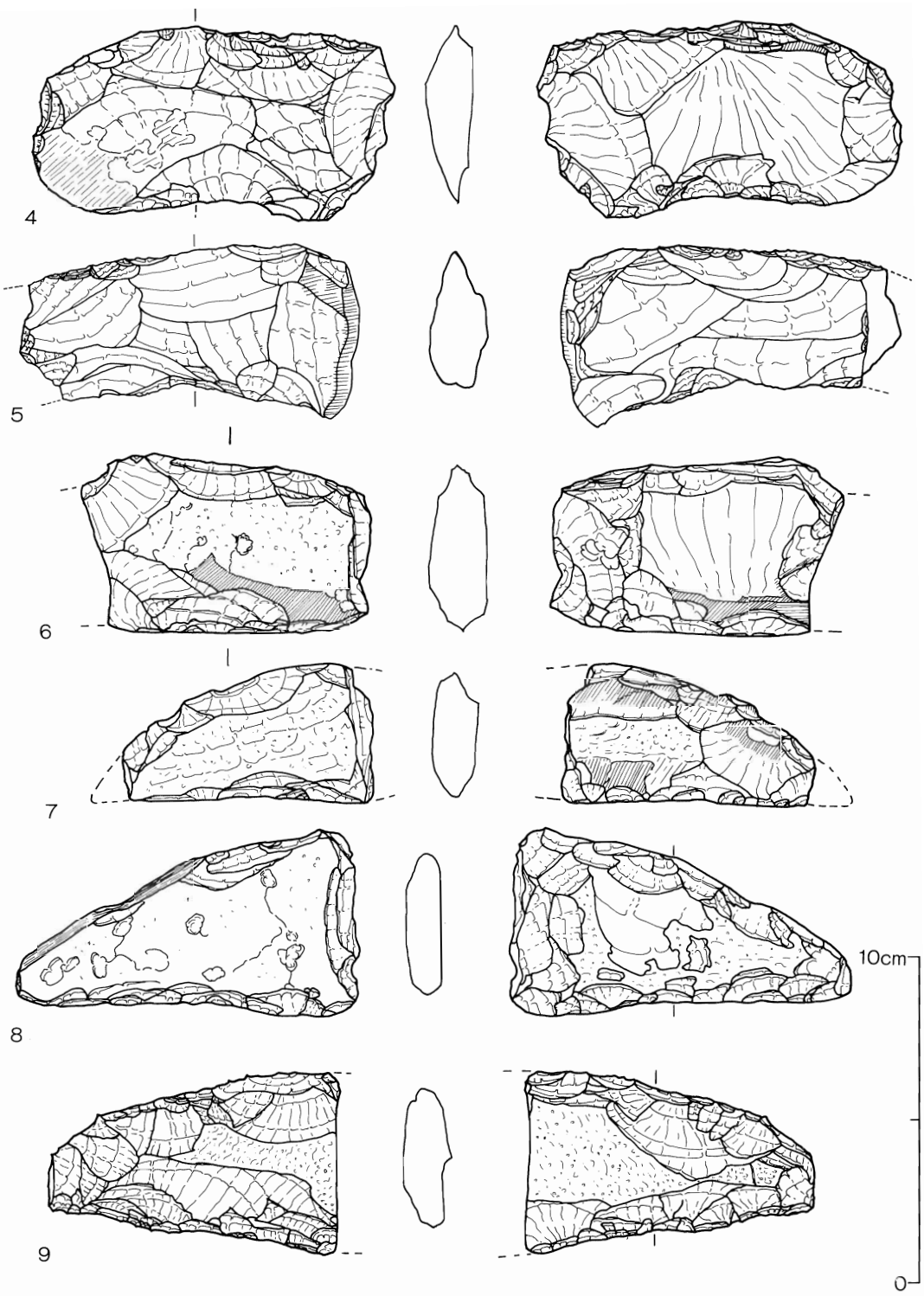
挿図番号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	刃部の特徴	重量 (g)	石材	時期	備考
1	6.6	1.1	1.0	片刃	17	頁岩	前～中期	NKW—30
2	6.5	1.6	1.0	両刃	18	〃	〃	NKW—34
3	5.8	1.3	1.6	片刃	26	〃	〃	NKW—35
4	4.7	1.2	0.6	〃	8	〃	〃	NKW—22
5	4.4	1.8	0.9	〃	14	〃	〃	NKW—18
6	7.4	2.3	0.9	〃	34	〃	〃	NKW—13
7	8.8	2.9	2.0	〃	95	泥質片岩	〃	NKW—31
8	6.6	2.7	0.8	?	27	頁岩	〃	NKW—20
9	10.2	2.5	2.7	?	120	〃	〃	NKW—33
10	6.3	3.3	1.0	片刃	42	〃	〃	NKW—15
11	5.4	3.0	0.8	両刃	25	〃	〃	NKW—23
12	6.9	2.8	1.0	〃	36	〃	〃	NKW—24
13	8.3	3.3	0.9	〃	54	〃	〃	NKW—16
14	4.9	3.7	1.1	片刃	36	〃	〃	NKW—14
15	5.4	2.9	1.3	?	46	〃	〃	NKW—21
16	4.5	4.8	1.6	片刃	59	〃	〃	NKW—17
17	18.6	5.0	2.3	〃	380	〃	〃	NKW—29
18	4.0	4.5	1.9	〃	49	〃	〃	NKW—19
19	8.8	7.0	2.2	両刃	250	〃	〃	NKW—27
20	8.9	6.2	1.7	?	168	〃	〃	NKW—28
21	6.0	3.8	1.6	?	49	砂質頁岩	〃	NKW—26
22	7.9	3.5	1.7	?	81	頁岩	〃	NKW—25

表23 抉入柱状片刃石斧計測表

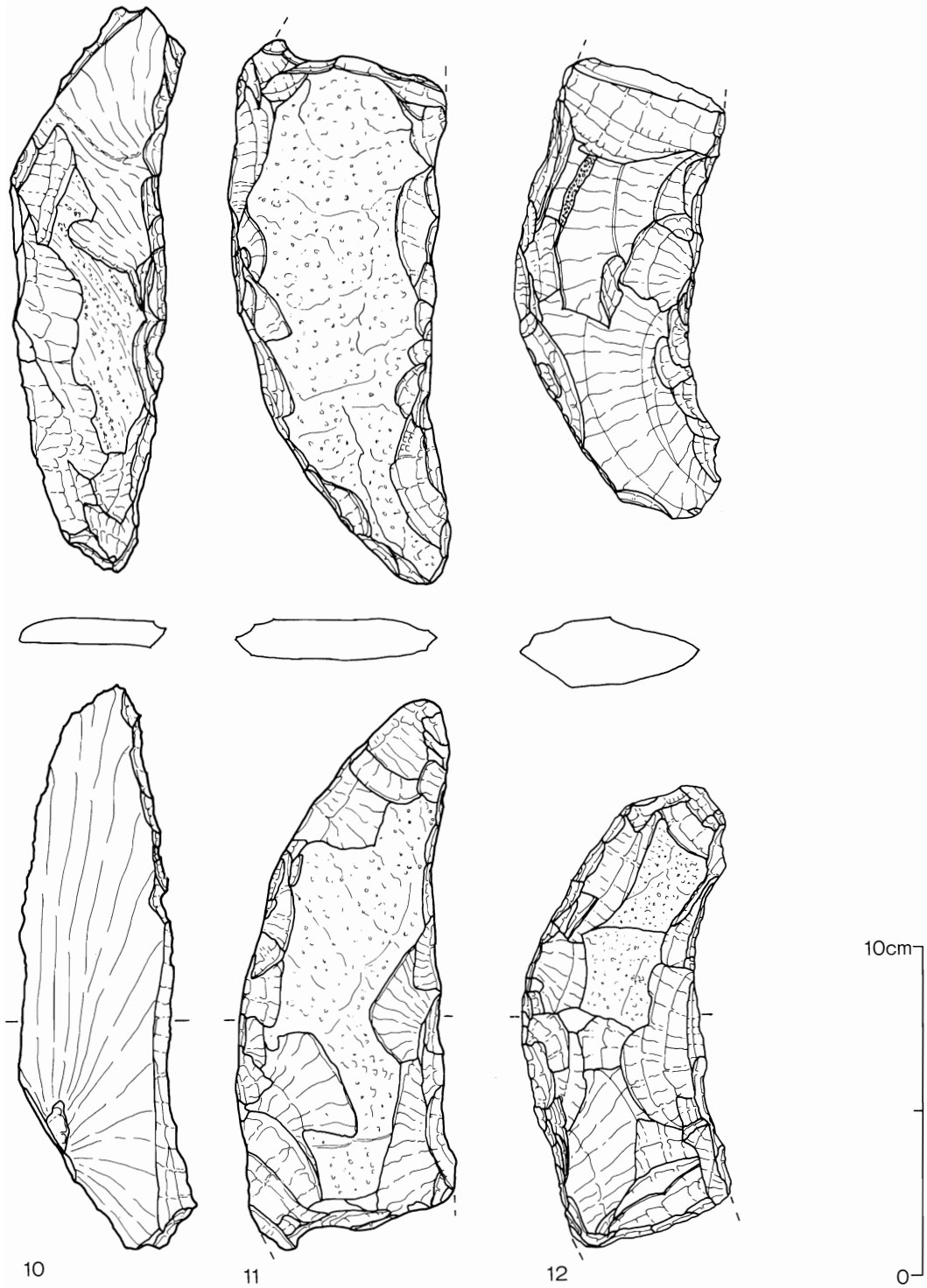
挿図番号	完成度	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	重量 (g)	石材	時期	備考
1	A段階	15.3	4.4	450	緑色頁岩	前～中期	NKT— 3
2	〃	14.1	5.0	492	〃	〃	NKT— 2
3	B段階	12.2	3.8	305	〃	〃	NKW—37
4	〃	10.2	5.1	285	〃	〃	NKW—48
5	〃	9.5	4.9	329	〃	〃	NKW—38
6	〃	12.8	3.6	475	〃	〃	NKW—44
7	〃	10.9	4.3	468	〃	〃	NKW—39
8	〃	9.4	2.7	108	〃	〃	NKW—42
9	〃	10.5	3.2	148	〃	〃	NKW—40
10	〃	22.6	3.3	765	〃	〃	NKW—46
11	C段階	24.9	4.0	590	〃	〃	NKW—36
12	〃	9.0	4.2		〃	〃	NKT— 4
13	〃	13.9	3.2	248	砂質片岩	〃	NKW—48
14	〃	13.9	3.7	364	緑色頁岩	〃	NKT— 5
15	〃	12.3	3.5	242	〃	〃	NKW—49
16	〃	15.5	3.1	334	〃	〃	NKW—47
17	〃	6.5	3.2	118	〃	〃	NKW—41
18	〃	12.4	3.2	330	〃	〃	NKW—45



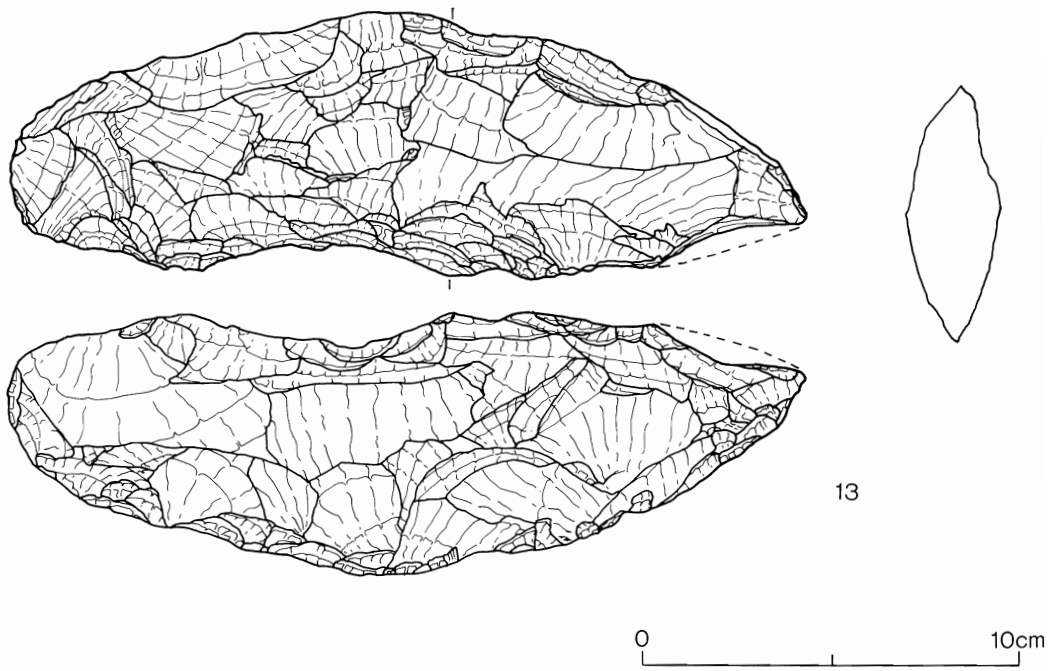
第189図　石器実測図(19)



第190図　石器実測図(20)



第191図　石器実測図(21)



第192図　石器実測図(22)

表24　石　鏃　計　測　表

挿図番号	調　整	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	石　材	時　期	備　考
1	磨　製	16.1	4.6	1.0	緑色頁岩	前　期	NKY—36
2	打製＋局部磨製	13.5	6.8	1.1	〃	〃	NKU—56
3	〃	14.5	7.4	1.8	〃	〃	NKU—57
4	〃	11.0	5.9	1.5	〃	〃	NKU—55
5	〃	10.3	4.9	1.3	〃	〃	NKY—39
6	〃	8.8	5.4	1.8	〃	〃	NKU—51
7	〃	7.6	4.3	1.2	〃	〃	NKU—52
8	打　製	10.4	5.7	1.0	〃	〃	NKU—53
9	〃	8.8	5.5	1.4	〃	〃	NKU—48
10	〃	16.9	4.6	0.7	〃	〃	NKU—54
11	〃	16.5	6.2	1.2	〃	〃	NKU—50
12	〃	13.9	5.3	2.0	〃	〃	NKU—49
13	〃	21.0	7.0	2.4	〃	〃	NKH—74

7点、打製石鎌6点である。石材は比較的剝離しやすいものが使用されており、粘板岩、頁岩、緑色凝灰岩といったものがみられる。使用された素材は、横長の剝片素材、もしくは扁平な自然石を利用したもので、一長側辺部を刃部とし、もう片方を背部とする。製作技法は刃部は直線刃（3・6）、内湾刃（1・2・4・5・11～13）とやや内湾気味（7～9）のものにわけることができる。

打製石鎌（10～13）　中央面に主要剝離面もしくは自然面を残しながら周縁部に粗い調整剝離を加えている。縁辺部の剝離痕はやや深く、ほとんどが階段状の剝離調整がなされている。縄文時代の打製石器の製作方法とほとんど変化はないようだ。10は剝片素材の腹面部を大きく残したままで、背面部に粗い調整痕を残す。11・12も自然面、または主要剝離面を残しながら縁辺部を簡単に打ち欠いている。13は大形品で、刃部中央部がやや半円状にえぐれている。

局部磨製石鎌（1～8）　いずれも粗い剝離調整の後、部分的に研磨を施している。1と7は先端部が残存している。とくに1は形状がシャープで、厚さも薄く、断面は両端とも鋭く尖る。研磨は刃部中心に念入りに磨かれている。わずかだが刃こぼれと思われる使用痕もみられる。その他の石鎌は縁辺部近くを部分的に研磨している。

西川津遺跡からは多数の石鎌が出土しているにもかかわらず、磨製のものは1点も検出されなかった。また、出土した石鎌も未成品と言ってもいいような剝離調整が雑なものばかりであった。このことは後述する石包丁についても言えることで、調整不十分の石器を成品として使用しているのが西川津遺跡の特徴であろう。

中国地方において一遺跡で最も多くの出土量を誇るのは山口県の綾羅木遺跡で、西川津遺跡はそれに次ぐものである。

Ⅱ　自然科学的分析

1．松江市西川津遺跡出土木製品の樹種について …… 渡　辺　正　巳（244）

2．西川津遺跡弥生中期相当層から検出された
動物遺存体について …… 井　上　貴　央（261）

1．松江市西川津遺跡出土木製品の樹種について

㈱ 川崎地質　渡　辺　正　巳

Ⅰ　はじめに

国内各地で低湿地に埋没する遺跡の調査が行われている。島根県では近年、松江市のタテチョウ遺跡・中竹矢遺跡・才ノ峠遺跡・布田遺跡などの低湿地での遺跡の調査が行われている。これらの遺跡においては他の立地条件の遺跡とことなり、種子・果実・葉・材などの大型植物遺体はもとより様々な種類の遺物が出土する。それらを総合的に検討することにより、当時の生活様式や環境の解明が行われる可能性を持っている。

今回、島根県教育委員会が1983年度から1985年度にかけて松江市西川津遺跡海崎地区に（第193図）おいて行った調査により出土した木製品の樹種同定を行う機会をえた。この内本編では、弥生中期を中心にした349点の試料について報告する。同時に採取された流木については、大西ほか（印刷中）において記載済みである。本編においては、筆針葉樹と、一部の広葉樹についてのみ記載を行い、不明点のあるものについては散孔材、環孔材と言う記述にとどめた。これらについては続報で明らかにして行きたい。また、農具とその用材についての若干の考察を行った。

Ⅱ　遺跡の概要

松江市の北東部を流れる朝酌川流域一帯には、低湿地遺跡が広く分布しており、上流部を西川津遺跡、下流部をタテチョウ遺跡と呼んでいる。西川津遺跡では、島根県教育委員会により1979年の試掘調査以来、2年間の試掘調査と5年間の本調査が行われてきた（島根県教育委員会、1980、1981；島根県土木部河川課・島根県教育委員会、1987a）。

これまで、両遺跡は縄文時代早期から中世に至る遺跡であり、土器、石器などに混ざって多くの植物遺物、動物遺物が出土したことが報告されている（島根県教育委員会、1974、1980、1981；島根県土木部河川課・島根県教育委員会、1987ａ、1987ｂ）。

西川津遺跡では弥生時代前期から中期にかけての期間の遺物が多く、この時代の貝塚群や堀立柱の柱穴も見つかっている。タテチョウ遺跡においても同時期と考えられる出土遺

物は存在するが、人間の生活した跡は未だ報告されていない。

これらの遺跡においては、従来から継続的に花粉分析が行われており、およそ縄文時代後半から現在に至るまでの花粉分帯が行われている（大西、1974；大西・渡辺、1987a、b、c）。

大型植物遺物については、西川津遺跡において内田（1987）が、縄文時代のものと考えられる種子、実などを、渡辺（1987）が縄文時代の銛型木製品の記載を行っている また、タテチョウ遺跡においては粉川（1974）の報告があるが、出土層準不明の試料のため時代的な考察は行われていない。

Ⅲ　試料の処理方法

樹種鑑定を行うにあたり、試料にできるかぎり損傷を与えないように注意し、横断面・接線断面・放射断面の切片を作り、サフラニンで染色した後、カナダバルサムで封入し永久プレパラートを作成した。このプレパラートを顕微鏡下で観察し内部形態的特徴から樹種の同定を行った。

Ⅳ　木材の記載及び結果

樹種同定に至った根拠を以下に示す［用語は島地ほか(1985)に準じた］。樹種同定は、小林（1957）、鈴木・能代（1986）、須藤（1959）、能代・鈴木（1987a）の記載を参考にし、現生標本のあるものについてはそれを参考にした。試料の同定結果を表26に示す。

1）モミ属　*Abies* sp.（10試料）

仮道管、放射柔細胞、傷害樹脂道からなる針葉樹材で、早材から晩材への移行はゆるやかである。放射柔細胞早材部の分野壁孔はスギ型であり、末端壁はじゅず状であるなどから、モミ属であると同定できる。モミ属にはモミ、ウラジロモミなどいくつかの種が存在するが、区別が困難なのでモミ属としておく。

2）ヒノキ属　*Chamaecyparis* sp.（12試料）

仮道管、樹脂細胞、放射樹脂細胞からなる針葉樹材で、早材から晩材への移行はややゆ

るやかで、樹脂細胞は晩材に偏在する。放射柔細胞早材部の分野壁孔はヒノキ型で2個存在するなどからヒノキ属であると同定できる。ヒノキ属には、ヒノキ、サワラなどいくつかの種が存在するが、区別が困難なのでヒノキ属としておく。

3）スギ　*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don（56試料）

仮道管、樹脂細胞、放射樹脂細胞からなる針葉樹材で、早材から晩材への移行は急である。放射柔細胞早材部の分野壁孔はスギ型で2個存在するなどからスギであると同定できる。

4）イヌガヤ属　*Chephalotaxus* spp.（14試料）

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる針葉樹材で、晩材の巾が非常にせまく年輪界はやや不明瞭である。仮道管には螺旋肥厚が明瞭であるなどからイヌガヤ属であると同定できる。イヌガヤ属にはイヌガヤ、ハイイヌガヤがあるが区別が困難なのでイヌガヤ属としておく。

5）イチイ属　*Taxus* sp.（1試料）

仮道管、放射柔細胞からなる針葉樹材で、晩材の巾が非常にせまく年輪界がやや不明瞭である。仮道管には螺旋肥厚が明瞭であるなどからイチイであると考えられるが、本地域に近い大山には同属のキャラボクが生育しており、対比標本がたいことから今回はイチイ属としておく。

6）クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.（1試料）

年輪に沿って大型の道管が単独で数列に並んでいる環孔材で、成長方向に向かって徐々に道管の軽を減じていく。孔圏外道管は火炎状配列を示し、道管穿孔は単穿孔。放射組織は単列できわめて低い同性放射組織型であることなどからクリと同定した。

7）スダジイ　*Castanopsis cuspidata* var. Sieboldii (Makino) Nakai（3試料）

年輪に沿って中庸の道管が単独で並んでいる環孔材で、孔圏外道管は火炎状配列を示し、道管穿孔は単穿孔。放射組織は単列できわめて低い同性放射組織型であることなどからスダジイと同定した。

8）コナラ節　Quercus (Sect. Prinus) Spp.（1試料）

年輪に沿ってやや大きい中庸の道管が単独で並んでいる環孔材で、角ばった孔圏外道管は火炎状配列を示す。道管穿孔は単穿孔。放射組織は単列できわめて低い同性放射組織型のものと複合放射組織があることなどから、コナラ節と同定した。コナラ節にはコナラ、ミズナラなどのいくつかの種が存在するが、区別が困難なのでコナラ節としておく。

9）アカガシ亜属　Quercus (Cyclo.) spp.（202試料）

中庸の道管が単独で配列する放射孔材で、道管穿孔は単穿孔。軸方向柔細胞は、1ないし数細胞巾の独立帯状柔組織を示すことが多い。放射組織は単列できわめて低い同性放射組織型のものと複合放射組織があることなどから、アカガシ亜属と同定した。アカガシ亜属にはいくつかの種が存在するば、区別が困難なのでアカガシ亜属としておく。

Ⅴ　考　　察

今回得られた結果より、西川津遺跡では弥生時代中期においてすでに農具その他の木製品の用材が決っていたと考えられる。このことは、伊藤ほか（1987）によりまとめられた全国のとよく一致する。しかし西川津遺跡において、どの時代にどの木製品の用材が決っていったかは、弥生中期以前の資料が不足しているために明かではない。また、現在（1987年末）までに島根県下で報告されている低湿地遺跡の内、木製品の出土が多量に報告されている遺跡には、松江市竹矢町の布田遺跡・中竹矢遺跡・才ノ峠遺跡（島根県教育委員会、1983）・西川津町のタテチョウ遺跡（島根県教育委員会、1974）と、今回の報告にある西川津遺跡（渡部、1987）があるが、何れも試料数が少ないため、比較の対照となり難い。

また、表26に示されているように、鍬とされているもののうち明らかに実用に向かない樹種で作られているものがある。これは西川津遺跡においても当てはまる。また、西川津遺跡においてこの様な農具のほとんどが小型であり実用的でないことなどから、祭祈等に使われた可能性も考えられる。

Ⅵ　ま　と　め

① 松江市西川津遺跡より出土した弥生時代前期より、古墳時代前期にかけての木製品349試料についての樹種鑑定をした。

② 樹種鑑定の結果、針葉樹5分類群、広葉樹6分類群に分けられた。

③ 弥生時代中期に、西川津遺跡では鍬・鋤の用材がほぼ決定していたと考えられる。

④ 鋤・鍬の内、明らかに実用に適さない樹種で作られたものが存在した。これらは祭祈等で使用されていた可能性もある。

Ⅶ 辞　謝

天理大学付属参考館学芸員金原正明氏には、樹種同定にあたり御指導頂いた。また、島根県教育委員会文化課主事内田律雄氏には、物心両面にわたり多くの御援助を頂いた。同文化課片山礼子氏には永久プレパラート作りに御協力頂いた。今回の報告をまとめるにあたりここに厚く感謝の意を表したい。

文　献

伊藤隆夫・山口和穂・林　昭三・布谷知夫・島地　謙、1987：日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途。木材研究・資料、№23、42—210。

建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会、1983：国道九号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅳ）本文編、21—198、199—345、346—458。

粉川昭平、1974：出土種子類の観察。朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書—Ⅰ—、180—187、p1. 72。

小林彌一、1975：本邦における針葉樹材のカード式識別法。林業試験場研究報告。№98、1—84、p1、1—16。

能代修一・鈴木三男、1987a：中里遺跡出土木材遺体から推定される古植生。東北新幹線建設に伴う発掘調査中里遺跡2、253—320。

大西郁夫、1974：花粉の分析。朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書—Ⅰ—、188—193。

——・渡辺正巳、1987a：西川津遺跡（83）の花粉分析。朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書—Ⅲ—（海崎地区Ⅰ）、252—261。

——・——、1987b：タテチョウ遺跡（85）の花粉分析。朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書—Ⅱ—、219—223。

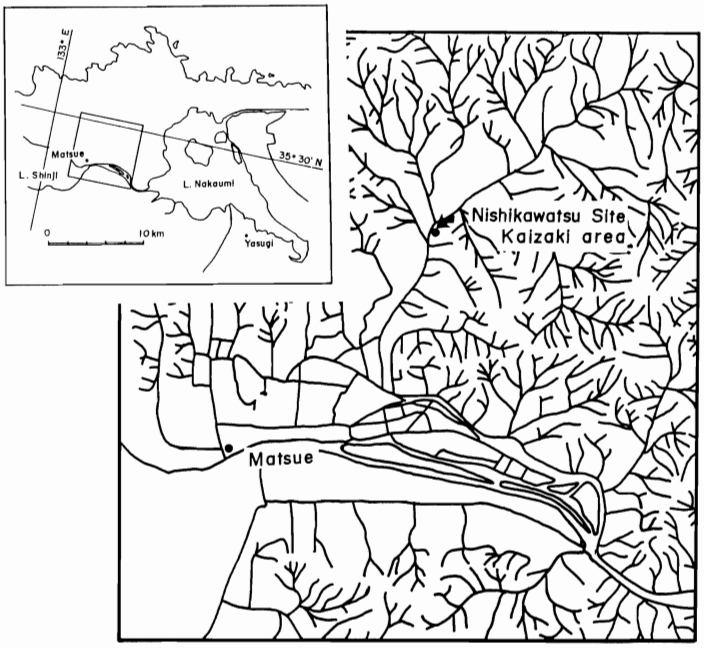
——・——、1987c：松江市西川津町、タテチョウ遺跡の花粉分析。山陰地域研究（自然環境）、№3、109—120。

——・——・内田律雄、1988：松江市西川津遺跡出土の材化石。山陰地域研究（自然環境）、№4。

島地　謙・佐伯　広・原田　広・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司、1985：木材の構造、文永堂、276p。東京。

島根県土木部河川課・島根県教育委員会、1987a：朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書—Ⅲ—（海崎地区Ⅰ）。島根県土木部河川課・島根県教育委員会、28　3p。

——・——、1987ｂ：朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書—Ⅱ—、島根県土木部河川課・島根県教育委員会、237p。
——・——、印刷中：朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書—Ⅳ—（海崎地区Ⅱ）。島根県土木部河川課・島根県教育委員会。
島根県教育委員会、1974：朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書—Ⅰ—。島根県教育委員会、204p。
——、1980：朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書—Ⅰ—。島根県教育委員会31p。
——、1981：西川津遺跡詳細分布調査報告書。島根県教育委員会、12p。
須藤彰司、1959：本邦産広葉樹材の識別（識別カードを適用して）。林業試験場研究報告、№118、1—138、p1．1—36。
鈴木三男・能代修一、1986：新保遺跡出土加工木の樹種。新保遺跡Ⅰ弥生・古墳時代大溝編—関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第10集—本文編、71—94、p1．3—19。
内田律雄、1987：植物遺体。朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書—Ⅲ—（海崎地区Ⅰ）、264、p1．136。
渡辺正巳、1987：松江市西川津遺跡出土の木製品について。朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書—Ⅲ—（海崎地区Ⅰ）、264、p1．136。



第193図　西川津遺跡位置図

表25　鍬類の用材と時代の変遷（伊藤ほか1987をもとに編集）

	縄文晩期	弥生前期	前期—中期	中期	中期—後期	後期		弥生古墳中期—前期	弥生古墳中期—後期	弥生古墳後期—	古墳	奈良	奈良—平安	平安
アカガシ亜属	2	29	19	27	36		92	91		9	32	2	14	1
クスノキ	2	2			1	2	4							
センダン				1										
ニレ				1										
コナラ亜属（クヌギ）					1(5)	1	(1)	5(40)			2(1)			
ムクロジ				1	1									
アオダモ						1								
ユズリハ						1								
クロマツ						1								
ケヤキ							1	2						
シイノキ属							1							
キハダ							1							
ネムノキ								1						
サカキ									1					
クリ										1				
イスノキ											18		3	
スギ											2			
ヒノキ											3		1	

表26 木　製　品　一　覧　表

番　号	時　代	製　品　名	樹　種	備　考
0	弥生前期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	NKM— 21
0	弥生前期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 31
0	弥生前期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 45
0	弥生前期	有頭柄	アカガシ亜属	〃 — 50
0	弥生前期	鋤？	スギ	〃 — 51
0	弥生前期	蓋 or 容器（未）	クリ	〃 — 59
0	弥生前期	有頭棒	散孔材	〃 — 61
0	弥生前期	広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 66
0	弥生前期	鍬 or 鋤の柄	アカガシ亜属	〃 — 81
0	弥生前期	下駄付広鍬	アカガシ亜属	〃 — 83
0	弥生前期	石斧の柄	散孔材	〃 — 86
0	弥生前期	石斧の柄	アカガシ亜属	〃 — 109
0	弥生前期	ヤス状木製品	モミ属	〃 — 111
0	弥生前期	ヤス状木製品	モミ属？	〃 — 112
0	弥生前期	ヤス状木製品	モミ属	〃 — 113
0	弥生前期	ヤス状木製品	イヌガヤ属	〃 — 115
0	弥生前期	ヤス状木製品	モミ属？	〃 — 116
0	弥生前期	ヤス状木製品	モミ属？	〃 — 117
0	弥生前期	下駄付広鍬？	アカガシ亜属	〃 — 118
0	弥生前期	広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 144
0	弥生前期	狭鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 159
0	弥生前期	広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 203
0	弥生前期	下駄付広鍬	アカガシ亜属	〃 — 216
0	弥生前期	切れ端	アカガシ亜属	〃 — 219
0	弥生前期	狭鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 223
0	弥生前期	下駄付広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 237
0	弥生前期	みかん割	アカガシ亜属	〃 — 247
0	弥生前期	みかん割	スギ	〃 — 262
0	弥生前期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 270
0	弥生前期	板状木製品	アカガシ亜属	〃 — 280
0	弥生前期	みかん割り	アカガシ亜属	〃 — 282
0	弥生前期	みかん割り	アカガシ亜属	〃 — 286
0	弥生前期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 291
0	弥生前期	板状木製品	スギ	〃 — 296
0	弥生前期	有頭棒（部材）	スギ	〃 — 297
0	弥生前期	有頭棒	ヒノキ属	〃 — 304
0	弥生前期	丸鍬	未鑑定	〃 — 313
0	弥生前期	やす	骨角器	〃 — 321
0	弥生前期	用途不明	スダジイ	〃 — 322
0	弥生前期	容器	環孔材	〃 — 325
0	弥生前期	板状木製品（未）	アカガシ亜属	〃 — 332
0	弥生前期	杭	ヒノキ属	〃 — 339
0	弥生前期	広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 348
0	弥生前期	広鍬 or 鋤	アカガシ亜属	〃 — 350

番　号	時　代	製　品　名	樹　種	備　考
0	弥生前期	鋤？（未）	スギ	ＮＫＭ— 351
0	弥生前期	柄	アカガシ亜属	〃　— 371
0	弥生前期	下駄付広鍬	アカガシ亜属	〃　— 372
0	弥生前期	下駄付広鍬	アカガシ亜属	〃　— 373
0	弥生前期	有頭棒	未鑑定	〃　— 374
0	弥生前期	広鍬	アカガシ亜属	〃　— 375
0	弥生前期	下駄付広鍬	アカガシ亜属	〃　— 376
0	弥生前期	下駄付広鍬	アカガシ亜属	〃　— 377
0	弥生前期	下駄付広鍬	アカガシ亜属	〃　— 378
0	弥生前期	板状木製品（未）	未鑑定	〃　— 379
0	弥生前期	鋤？	未鑑定	〃　— 380
0	弥生前期	板状木製品（未）	未鑑定	〃　— 381
0	弥生前期	丸鍬（未）	未鑑定	〃　— 382
0	弥生前期	広鍬	未鑑定	〃　— 383
0	弥生前期	柱	未鑑定	〃　— 384
0	弥生前期	鋤、鍬の柄	未鑑定	〃　— 385
0	弥生前期	下駄付広鍬（未）	未鑑定	〃　— 386
0	弥生前期	容器	未鑑定	〃　— 387
0	弥生前期	石斧の柄	未鑑定	〃　— 388
0	弥生前期	板状木製品（未）	未鑑定	〃　— 389
0	弥生前期	広鍬（未）	未鑑定	〃　— 390
0	弥生前期	広鍬	未鑑定	〃　— 391
0	弥生前期	下駄付広鍬（未）	未鑑定	〃　— 392
0	弥生前期	広鍬（未）？	未鑑定	〃　— 393
0	弥生前期	板状木製品（未）	未鑑定	〃　— 394
0	弥生前期	丸鍬	未鑑定	〃　— 395
0	弥生前期	下駄付広鍬（未）	未鑑定	〃　— 396
0	弥生前期	丸鍬（未）	未鑑定	〃　— 397
0	弥生前期	狭鍬	未鑑定	〃　— 398
0	弥生前期	有頭棒	未鑑定	〃　— 399
0	弥生前期	みかん割	未鑑定	〃　— 400
0	弥生前期	不明木製品	未鑑定	〃　— 401
0	弥生前期	杭	未鑑定	〃　— 402
0	弥生前期	容器	未鑑定	〃　— 403
0	弥生前期	田下駄？	未鑑定	〃　— 405
0	弥生前期	匙	未鑑定	〃　— 406
0	弥生前期	広鍬	未鑑定	〃　— 407
0	弥生前期	有頭棒	未鑑定	〃　— 409
0	弥生前期	有頭棒	未鑑定	〃　— 410
0	弥生前期	石斧の柄	未鑑定	〃　— 413
0	弥生前期	石斧の柄	未鑑定	〃　— 414
0	弥生前期	柱	未鑑定	〃　— 415
0	弥生前期	柱	未鑑定	〃　— 416
0	弥生前期	丸鍬（未）	未鑑定	〃　— 417

番　号	時　代	製　品　名	樹　種	備　考
0	弥生前期	下駄付広鍬（未）	未鑑定	NKM— 418
0	弥生前期	柱	未鑑定	〃 — 420
0	弥生前期	広鍬	未鑑定	〃 — 424
0	弥生前期	有頭棒	未鑑定	〃 — 425
0	弥生前期	下駄付広鍬	未鑑定	〃 — 426
0	弥生前期	柱	未鑑定	〃 — 427
0	弥生前期	柱	未鑑定	〃 — 428
0	弥生前期	柱	未鑑定	〃 — 429
0	弥生前期	栓	未鑑定	〃 — 430
0	弥生前期	弓	未鑑定	〃 — 432
1	弥生中期	みかん割	アカガシ亜属	〃 — 272
2	弥生中期	みかん割	未鑑定	〃 — 275
3	弥生中期	みかん割	アカガシ亜属	〃 — 261
4	弥生中期	みかん割	未鑑定	〃 — 276
5	弥生中期	鋤	アカガシ亜属	〃 — 252
6	弥生中期	みかん割	アカガシ亜属	〃 — 151
7	弥生中期	みかん割	アカガシ亜属	〃 — 248
8	弥生中期	鋤（未）	アカガシ亜属	〃 — 277
9	弥生中期	みかん割	未鑑定	〃 — 279
10	弥生中期	みかん割	アカガシ亜属	〃 — 140
11	弥生中期	みかん割	アカガシ亜属	〃 — 259
12	弥生中期	みかん割	アカガシ亜属	〃 — 70
13	弥生中期	板状木製品	アカガシ亜属	〃 — 236
14	弥生中期	板状木製品（未）	アカガシ亜属	〃 — 238
15	弥生中期	板状木製品	アカガシ亜属	〃 — 260
16	弥生中期	板状木製品	アカガシ亜属	〃 — 251
17	弥生中期	板状木製品（未）	アカガシ亜属	〃 — 241
18	弥生中期	みかん割切れ端	アカガシ亜属	〃 — 129
19	弥生中期	みかん割切れ端	アカガシ亜属	〃 — 209
20	弥生中期	板状木製品	アカガシ亜属	〃 — 226
21	弥生中期	切れ端	アカガシ亜属	〃 — 132
22	弥生中期	切れ端	アカガシ亜属	〃 — 125
23	弥生中期	農具の切れ端	アカガシ亜属	〃 — 9
24	弥生中期	切れ端	アカガシ亜属	〃 — 139
25	弥生中期	鋤（未）	アカガシ亜属	〃 — 36
26	弥生中期	広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 141
27	弥生中期	広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 194
28	弥生中期	広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 363
29	弥生中期	広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 352
30	弥生中期	下駄付広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 192
31	弥生中期	下駄付広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 13
32	弥生中期	下駄付広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 44
33	弥生中期	下駄付広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 12
34	弥生中期	下駄付広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 64

番　号	時　代	製　品　名	樹　種	備　考
35	弥生中期	下駄付広鍬（未）	アカガシ亜属	NKM— 6
36	弥生中期	下駄付広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 74
37	弥生中期	広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 233
38	弥生中期	広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 368
39	弥生中期	下駄付広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 67
40	弥生中期	下駄付広鍬	アカガシ亜属	〃 — 48
41	弥生中期	下駄付広鍬	アカガシ亜属	〃 — 182
42	弥生中期	下駄付広鍬	アカガシ亜属	〃 — 214
43	弥生中期	下駄付広鍬	アカガシ亜属	〃 — 3
44	弥生中期	下駄付広鍬	アカガシ亜属	〃 — 57
45	弥生中期	下駄付広鍬	アカガシ亜属	〃 — 43
46	弥生中期	広鍬	未鑑定	〃 — 327
47	弥生中期	広鍬	未鑑定	〃 — 317
48	弥生中期	下駄付広鍬	アカガシ亜属	〃 — 204
49	弥生中期	下駄付広鍬	アカガシ亜属	〃 — 105
50	弥生中期	下駄付広鍬	アカガシ亜属	〃 — 26
51	弥生中期	下駄付広鍬	アカガシ亜属	〃 — 114
52	弥生中期	広鍬	アカガシ亜属	〃 — 196
53	弥生中期	下駄付広鍬	アカガシ亜属	〃 — 107
54	弥生中期	えぶり（未）	アカガシ亜属	〃 — 17
55	弥生中期	火鑽り臼	環孔材	〃 — 92
56	弥生中期	広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 341
57	弥生中期	広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 340
58	弥生中期	広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 184
59	弥生中期	みかん割	アカガシ亜属	〃 — 263
60	弥生中期	広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 136
61	弥生中期	広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 135
62	弥生中期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 131
63	弥生中期	広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 127
64	弥生中期	広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 170
65	弥生中期	広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 119
66	弥生中期	広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 120
67	弥生中期	広鍬（未）？	アカガシ亜属	〃 — 24
68	弥生中期	広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 96
69	弥生中期	広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 15
70	弥生中期	広鍬	アカガシ亜属	〃 — 173
71	弥生中期	広鍬	アカガシ亜属	〃 — 193
72	弥生中期	広鍬？	アカガシ亜属	〃 — 245
73	弥生中期	鍬の柄	散孔材	〃 — 35
73	弥生中期	広鍬（手鍬）	アカガシ亜属	〃 — 35
74	弥生中期	広鍬	アカガシ亜属	〃 — 2
75	弥生中期	鋤の切れ端？	アカガシ亜属	〃 — 32
76	弥生中期	広鍬	アカガシ亜属	〃 — 65
77	弥生中期	狭鍬	アカガシ亜属	〃 — 212

番　号	時　代	製　品　名	樹　種	備　考
78	弥生中期	狭鍬	アカガシ亜属	NKM— 358
79	弥生中期	狭鍬	アカガシ亜属	〃 — 77
80	弥生中期	狭鍬	アカガシ亜属	〃 — 72
81	弥生中期	広鍬	アカガシ亜属	〃 — 28
82	弥生中期	狭鍬	アカガシ亜属	〃 — 95
83	弥生中期	広鍬	アカガシ亜属	〃 — 30
84	弥生中期	広鍬	アカガシ亜属	〃 — 333
85	弥生中期	又鍬	アカガシ亜属	〃 — 40
86	弥生中期	広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 18
87	弥生中期	鍬の柄	ヒノキ属	〃 — 5
88	弥生中期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 190
89	弥生中期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 367
90	弥生中期	鍬丸（未）	アカガシ亜属	〃 — 211
91	弥生中期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 185
92	弥生中期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 27
93	弥生中期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 8
94	弥生中期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 121
95	弥生中期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 1
96	弥生中期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 7
97	弥生中期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 128
98	弥生中期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 138
99	弥生中期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 90
100	弥生中期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 69
101	弥生中期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 187
102	弥生中期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 202
103	弥生中期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 14
104	弥生中期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 23
105	弥生中期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 124
106	弥生中期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 208
107	弥生中期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 22
108	弥生中期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 370
109	弥生中期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 68
110	弥生中期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 258
111	弥生中期	丸鍬	アカガシ亜属	〃 — 76
112	弥生中期	丸鍬	未鑑定	〃 — 411
113	弥生中期	丸鍬	アカガシ亜属	〃 — 188
114	弥生中期	丸鍬	アカガシ亜属	〃 — 97
115	弥生中期	鋤	アカガシ亜属	〃 — 254
116	弥生中期	鋤（未）	アカガシ亜属	〃 — 55
117	弥生中期	鋤の柄（未）	アカガシ亜属	〃 — 62
118	弥生中期	なすび形鋤	アカガシ亜属	〃 — 154
119	弥生中期	なすび形鋤	アカガシ亜属	〃 — 345
120	弥生中期	用途不明木製品	放射孔材	〃 — 201
121	弥生中期	鋤	未鑑定	〃 — 307

番　号	時　代	製　品　名	樹　種	備　考
121	弥生中期	なすび形鋤	アカガシ亜属	NKM— 232
122	弥生中期	なすび形鋤	アカガシ亜属	〃 — 34
123	弥生中期	鋤	未鑑定	〃 — 421
124	弥生中期	鋤	未鑑定	〃 — 326
125	弥生中期	鋤	アカガシ亜属	〃 — 324
126	弥生中期	不明木製品	アカガシ亜属	〃 — 4
127	弥生中期	鋤	アカガシ亜属	〃 — 360
128	弥生中期	鋤	アカガシ亜属	〃 — 343
129	弥生中期	鋤	未鑑定	〃 — 380
130	弥生中期	鋤	アカガシ亜属	〃 — 143
131	弥生中期	鋤	アカガシ亜属	〃 — 243
132	弥生中期	鋤の柄？	環孔材	〃 — 349
133	弥生中期	切れ端？	アカガシ亜属	〃 — 29
134	弥生中期	鋤？（未）	アカガシ亜属	〃 — 198
135	弥生中期	鋤	アカガシ亜属	〃 — 73
136	弥生中期	鋤（未）	アカガシ亜属	〃 — 160
137	弥生中期	鋤（未）	アカガシ亜属	〃 — 63
138	弥生中期	鍬（未）？	アカガシ亜属	〃 — 25
139	弥生中期	鋤	アカガシ亜属	〃 — 19
140	弥生中期	鋤	アカガシ亜属	〃 — 167
141	弥生中期	鋤	スギ	〃 — 225
142	弥生中期	杯	モミ属	〃 — 85
143	弥生中期	鋤状木製品	スギ	〃 — 71
144	弥生中期	鋤	アカガシ亜属	〃 — 108
145	弥生中期	杯	アカガシ亜属	〃 — 84
146	弥生中期	鋤	未鑑定	〃 — 408
147	弥生中期	鋤状木製品	アカガシ亜属	〃 — 75
148	弥生中期	みかん割切れ端	アカガシ亜属	〃 — 250
149	弥生中期	切れ端	アカガシ亜属	〃 — 249
150	弥生中期	作業台	アカガシ亜属	〃 — 213
151	弥生中期	みかん割切れ端	クリ	〃 — 137
152	弥生中期	切れ端	アカガシ亜属	〃 — 331
153	弥生中期	砧	散孔材	〃 — 142
154	弥生中期	砧（未）	散孔材	〃 — 122
155	弥生中期	田下駄？	アカガシ亜属	〃 — 244
156	弥生中期	田下駄？	アカガシ亜属	〃 — 257
457	弥生中期	田下駄	スギ	〃 — 33
458	弥生中期	田下駄	スギ	〃 — 146
159	弥生中期	田下駄？	モミ属	〃 — 199
160	弥生中期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 133
161	弥生中期	鋤（未）	アカガシ亜属	〃 — 149
162	弥生中期	みかん割	アカガシ亜属	〃 — 274
163	弥生中期	みかん割	アカガシ亜属	〃 — 265
164	弥生中期	杭 or 柱	ヒノキ属	〃 — 305

番　号	時　代	製　品　名	樹　種	備　考
165	弥生中期	柱	未鑑定	NKM一 412
166	弥生中期	鋤（未）	アカガシ亜属	〃 — 269
167	弥生中期	みかん割	アカガシ亜属	〃 — 292
168	弥生中期	板状木製品	スギ	〃 — 287
169	弥生中期	みかん割	アカガシ亜属	〃 — 293
170	弥生中期	みかん割（鍬(未)）	アカガシ亜属	〃 — 266
171	弥生中期	たも or てんびん	モミ属	〃 — 60
172	弥生中期	たも	モミ属	〃 — 455
173	弥生中期	板状木製品（未）	アカガシ亜属	〃 — 342
174	弥生中期	板状木製品	スギ	〃 — 207
175	弥生中期	板状木製品	スギ	〃 — 268
176	弥生中期	田下駄？（未）	環孔材	〃 — 217
177	弥生中期	板状木製品	スギ	〃 — 218
178	弥生中期	板状木製品	アカガシ亜属	〃 — 246
179	弥生中期	板状木製品	スギ	〃 — 369
180	弥生中期	紡織具？	散孔材	〃 — 335
181	弥生中期	部材	スギ	〃 — 255
182	弥生中期	用途不明	スギ	〃 — 353
183	弥生中期	鋤（未）	アカガシ亜属	〃 — 253
184	弥生中期	土用穴あけ道具	未鑑定	〃 — 404
185	弥生中期	土用穴あけ道具	イヌガヤ属	〃 — 301
186	弥生中期	用途不明木製品	スギ	〃 — 178
187	弥生中期	やす	未鑑定	〃 — 423
188	弥生中期	やす	未鑑定	〃 — 318
189	弥生中期	やす	未鑑定	〃 — 359
190	弥生中期	用途不明	散孔材	〃 — 338
191	弥生中期	不明木製品	未鑑定	〃 — 431
192	弥生中期	有頭棒	スダジイ	〃 — 153
193	弥生中期	有頭棒	散孔材	〃 — 38
194	弥生中期	紡織機	散孔材	〃 — 156
195	弥生中期	紡織具	アカガシ亜属	〃 — 52
196	弥生中期	鋤の柄	アカガシ亜属	〃 — 336
197	弥生中期	有頭棒	アカガシ亜属	〃 — 176
198	弥生中期	有頭棒	イヌガヤ属	〃 — 99
199	弥生中期	もえさし	未鑑定	〃 — 422
200	弥生中期	ヘラ状木製品	アカガシ亜属	〃 — 145
201	弥生中期	鳥形木製品	スギ	〃 — 152
202	弥生中期	梯子	スギ	〃 — 150
203	弥生中期	梯子	スギ	〃 — 171
204	弥生中期	柱	スギ	〃 — 162
205	弥生中期	柱	スギ	〃 — 273
206	弥生中期	杭 or 柱	環孔材	〃 — 344
207	弥生中期	高杯（未）	環孔材	〃 — 355
208	弥生中期	容器	環孔材	〃 — 110

番　号	時　代	製　品　名	樹　種	備　考
209	弥生中期	台付き容器	環孔材	NKM— 89
210	弥生中期	高杯	環孔材	〃 — 49
211	弥生中期	高杯	未鑑定	〃 — 298
212	弥生中期	高杯？	環孔材	〃 — 328
213	弥生中期	高杯	環孔材	〃 — 303
214	弥生中期	高杯（四角）	環孔材	〃 — 78
215	弥生中期	高杯	環孔材	〃 — 93
216	弥生中期	高杯	環孔材	〃 — 46
217	弥生中期	容器	スギ	〃 — 210
218	弥生中期	蓋	環孔材	〃 — 101
219	弥生中期	ひょうたん	未鑑定	〃 — 311
220	弥生中期	用途不明（浮き）	未鑑定	〃 — 310
221	弥生中期	こて状木製品	環孔材	〃 — 80
222	弥生中期	柄杓？（未）	環孔材	〃 — 278
223	弥生中期	コップ（未）	環孔材	〃 — 123
224	弥生中期	コップ（未）	環孔材	〃 — 134
225	弥生中期	コップ？	環孔材	〃 — 47
226	弥生中期	柄杓	環孔材	〃 — 104
227	弥生中期	柄杓	環孔材	〃 — 88
228	弥生中期	匙	散孔材	〃 — 98
229	弥生中期	匙	未鑑定	〃 — 419
230	弥生中期	匙	散孔材	〃 — 356
231	弥生中期	匙	イヌガヤ属	〃 — 205
232	弥生中期	匙	散孔材	〃 — 330
233	弥生中期	匙	環孔材	〃 — 130
234	弥生中期	匙	未鑑定	〃 — 315
235	弥生中期	匙	環孔材	〃 — 102
236	弥生中期	匙 or 舟形木製品	環孔材	〃 — 79
237	弥生中期	用途不明	未鑑定	〃 — 320
238	弥生中期	櫛	〃	〃 — 453
239	弥生中期	〃	〃	〃 — 239
240	弥生中期	〃	〃	〃 — 436
241	弥生中期	〃	〃	〃 — 436
242	弥生中期	かんざし？	〃	〃 — 447
243	弥生中期	釧	〃	〃 — 448
244	弥生後期	下駄付広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 10
245	弥生後期	狭鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 186
246	弥生後期	広鍬	アカガシ亜属	〃 — 221
247	弥生後期	広鍬	未鑑定	〃 — 312
248	弥生後期	丸鍬？	アカガシ亜属	〃 — 346
249	弥生後期	狭鍬	アカガシ亜属	〃 — 230
250	弥生後期	なすび形鋤	アカガシ亜属	〃 — 361
251	弥生後期	鋤	未鑑定	〃 — 221
252	弥生後期	鋤状木製品	スギ	〃 — 165

番　号	時　代	製　品　名	樹　種	備　考
253	弥生後期	丸鍬（未）	アカガシ亜属	NKM— 41
254	弥生後期	丸鍬（未）？	アカガシ亜属	〃 — 20
255	弥生後期	丸鍬（未）？	アカガシ亜属	〃 — 334
256	弥生後期	広鍬 or 丸鍬	アカガシ亜属	〃 — 362
257	弥生後期	板状木製品	スギ	〃 — 329
258	弥生後期	なすび形鋤	アカガシ亜属	〃 — 234
259	弥生後期	なすび形鋤	未鑑定	〃 — 323
260	弥生後期	なすび形鋤	アカガシ亜属	〃 — 181
261	弥生後期	板状木製品	スギ？	〃 — 222
262	弥生後期	砧（未）	散孔材	〃 — 366
263	弥生後期	砧	イヌガヤ属	〃 — 169
264	弥生後期	砧	アカガシ亜属	〃 — 42
265	弥生後期	田下駄	スギ	〃 — 357
266	弥生後期	田下駄	スギ	〃 — 228
267	弥生後期	田下駄	スギ	〃 — 365
268	弥生後期	田下駄	スギ	〃 — 664
269	弥生後期	部材	スギ	〃 — 309
270	弥生後期	部材	スギ	〃 — 284
271	弥生後期	有頭棒	ヒノキ属	〃 — 288
272	弥生後期	有頭棒	イヌガヤ属	〃 — 295
273	弥生後期	やす	未鑑定	〃 — 319
274	弥生後期	やす	未鑑定	〃 — 316
275	弥生後期	樋状木製品	スギ	〃 — 271
276	弥生後期	広鍬（未）	アカガシ亜属	〃 — 354
277	弥生後期	石斧の柄	アカガシ亜属	〃 — 239
278	弥生後期	鉄斧の柄（未）	散孔材	〃 — 82
278	弥生後期	鉄斧の柄	散孔材	〃 — 82
279	弥生後期	杭	ヒノキ属	〃 — 283
280	弥生後期	柱	イヌガヤ属	〃 — 302
281	弥生後期	柱	イヌガヤ属	〃 — 299
282	弥生後期	柱	イヌガヤ属	〃 — 300
283	古墳前期	下駄付広鍬	アカガシ亜属	〃 — 100
284	古墳前期	広鍬	アカガシ亜属	〃 — 220
285	古墳前期	なすび形鋤	環孔材	〃 — 39
286	古墳前期	なすび形鋤	スダジイ	〃 — 175
287	古墳前期	なすび形鋤	コナラ節	〃 — 174
288	古墳前期	鋤	アカガシ亜属	〃 — 206
289	古墳前期	鋤の柄	散孔材	〃 — 172
289	古墳前期	鋤	イヌガヤ属	〃 — 172
890	古墳前期	田下駄	ヒノキ属	〃 — 180
291	古墳前期	田下駄	スギ	〃 — 224
292	古墳前期	田下駄？	スギ	〃 — 240
293	古墳前期	板状木製品	スギ	〃 — 229
294	古墳前期	田下駄	スギ	〃 — 37

番　号	時　代	製　品　名	樹　種	備　考
295	古墳前期	田下駄	スギ	NKM— 242
296	古墳前期	糸巻	ヒノキ属	〃 — 161
297	古墳前期	土用穴明け道具	イチイ属	〃 — 103
298	古墳前期	用途不明木製品	環孔材	〃 — 166
299	古墳前期	琴状木製品	スギ	〃 — 264
300	古墳前期	板状木製品	スギ	〃 — 285
301	古墳前期	板状木製品	スギ	〃 — 168
302	古墳前期	建築部材	スギ？	〃 — 195
303	古墳前期	有頭棒	スギ	〃 — 179
304	古墳前期	鋤 or 鍬の柄	ヒノキ属	〃 — 189
305	古墳前期	杭	イヌガヤ属	〃 — 200
306	古墳前期	用途不明木製品	スギ	〃 — 183
307	古墳前期	用途不明	未鑑定	〃 — 314
308	古墳前期	舟	スギ	〃 — 155
309	古墳前期	盾	モミ属	〃 — 231
310	古墳前期	部材	スギ	〃 — 289
311	古墳前期	四ツ手網の腕木or部材	ヒノキ属	〃 — 258
312	古墳前期	四ツ手網の腕木or部材	スギ	〃 — 257
313	古墳前期	部材	スギ	〃 — 290
314	古墳前期	部材	スギ	〃 — 197
315	古墳前期	柄杓（未）	散孔材	〃 — 177
316	古墳前期	桶（未）	環孔材	〃 — 148
317	古墳前期	コップ	未鑑定	〃 — 147
318	古墳前期	容器	環孔材	〃 — 87
319	古墳前期	容器	スギ	〃 — 94
320	古墳前期	曲物	スギ	〃 — 91
321	古墳前期	匙	イヌガヤ属	〃 — 106
322	古墳前期	桶	スギ	〃 — 163
323	古墳前期	桶	スギ	〃 — 227
324	古墳前期	桶	ヒノキ属	〃 — 164
325	古墳前期	桶	スギ	〃 — 215
326	古墳前期	桶	スギ	〃 — 235
327	古墳前期	容器	イヌガヤ属	〃 — 126
328	古墳前期	杭 or 柱	イヌガヤ属	〃 — 306
329	古墳前期	板状木製品	スギ	〃 — 281
330	古墳前期	みかん割	アカガシ亜属	〃 — 267
331	古墳前期	弓	ヒノキ属	〃 — 294

2. 西川津遺跡弥生中期相当層から検出された動物遺存体について

鳥取大学医学部解剖学第二講座　井　上　貴　央

1. はじめに

島根県松江市西川津遺跡からは、縄文前期、弥生前期、弥生中期の動物遺存体が多数検出されている。前回の報告書では、縄文前期相当層から検出された動物遺存体を報告したが、今回は弥生中期の動物遺存体を報告する。弥生前期相当層については、現在、水洗などの処理がおこなわれており、次回に報告する予定である。

ところで、西川津遺跡は、宍道湖と中海を結ぶ低湿地に開けた遺跡で、これらの湖沼の古地理学的な変遷を考えると、この遺跡から検出される動物遺存体にも当然なんらかの変遷が認められるはずである。実際、今回報告する弥生中期から検出された動物遺存体は、その種の構成要素が縄文前期のものと著しく異なっており、このあいだをうめる弥生前期からどの様な動物遺体が検出されるか、興味深いものがある。次回の調査によって、西川津遺跡をめぐる動物相の変遷が明らかにできるものと考えているが、とりあえず、今回は弥生中期相当層から検出された動物遺存体について報告し、本遺跡の総括は次回におこないたい。

2. 遺物含有層と骨の検出状況

今回報告する骨は、弥生時代中期相当層のシジミを中心とする貝塚から検出されたものである。骨は発掘担当者によって取り上げられ水洗の後、筆者に分析を依頼されたものである。骨の検出状況等については、別章で詳述されているので別章を参照されたい。検出された骨にはほとんど水磨による摩耗痕が認められない。

検出された動物遺存体は、保存状態が良好で、細部まで観察が可能である。骨の表面には、低湿地遺跡から検出された骨によく認められる藍鉄鉱の付着を認めるものもあるが数は少ない。大部分の骨は茶褐色～淡黄褐色を呈する。火を受けて白色～黒色を呈する骨はほとんど認められない。

3. 検出された動物遺存体

本遺跡で検出された動物遺存体は次の如くである。軟体動物については別に論じられるので、これは除いてある。

哺乳動物綱　MAMMALIA

霊長目　Primates

ニホンザル　*Macaca fuscata*

食肉目　Carnivora

アナグマ　*Meles meles*

タヌキ　*Nyctereutes viverrinus*

イタチ　*Mustela sibirica*

齧歯目　Rodentia

ムササビ　*Petaurista leucogenys*

偶蹄目　Artiodactyla

ニホンシカ　*Cervus nippon*

イノシシ　*Sus scrofa*

鳥類綱　AVES

オオミズナギドリ　*Calonectris leucomelas*

ハクチョウ　*Cygnus* **sp.**

ツル科　*Grus* sp.

スズガモ属　*Axis* sp.

スズメ目　*Passeres*

両生類綱　AMPHIBIA

ヒキガエル　*Bufo bufo japonicus*

トノサマガエル　*Rana* (*Rana*) *nigromaculata*

ツチガエル　*Rana* (*Rana*) *rugosa*

ヤマアカガエル　*Rana* (*Rana*) *ornativentris*

爬虫類綱　Reptilia

蛇類　Ophidia

硬骨魚綱　OSTEICHTHYES

クロダイ　*Acanthopagrus schlegeli*

スズキ　*Lateolabrax japonicus*

カンダイ　*Semicossyphus reticulatus*

マイワシ　*Sardinops melanostictus*

ハゼ科　Gobiidae

アイナメ　*Hexagrammos otakii*

フナ　*Carassius auratus langsdorfii*

ナマズ　*Silurus asotus*

コチ　*Platycephalus indicus*

軟骨魚類綱　CHONDRICHTHYES

サメ類またはエイ類　Squali/Radji

1）哺乳動物

イノシシ

イノシシの主要検出骨リストを表27に示した。これでみる限り、最小個体数は4頭になるが、後述するように下顎骨から判断すると、最小個体数は6頭になる。今回検出された弥生中期のイノシシは幼獣が多いのが特徴である。

表27　イノシシの部位別検出個体数

		右	左
上顎骨		0	2
下顎骨		3	3
上腕骨	近位	0	0
	遠位	1	2
橈骨	近位	2	1
	遠位	0	0
尺骨	近位	0	1
中手骨	Mc Ⅱ	0	0
	Mc Ⅲ	2	0
	Mc Ⅳ	0	0
	Mc Ⅴ	0	0
肩甲骨		1	3
椎骨			
環椎		4	
軸椎		1	
寛骨		1	0
大腿骨	近位	0	0
	遠位	0	0
脛骨	近位	0	0
	骨体部	1	1
	遠位	1	2
膝蓋骨		0	0
距骨		0	0
踵骨		1	1
中足骨	Mt Ⅱ	0	0
	Mt Ⅲ	0	1
	Mt Ⅳ	0	0
	Mt Ⅴ	0	0

脳頭蓋、顔面頭蓋では原型をとどめているものは存在しない。後頭部を中心とした骨片が数10点検出されているが、接続できない。従って、先に報告したような本遺跡の縄文時代のイノシシに認められたような脳髄摘出が本遺跡の弥生中期にあったかどうかについては今回の試料からは判断できない。

上顎骨では一部の歯牙が釘植した左側上顎骨が2点検出されている。1点は第3、第4乳臼歯を伴った幼獣であり、もう1点は第4前臼歯から第2臼歯にかけての歯牙を伴った，咬耗著しい老獣である。

下顎骨では、右側が3点、左側が3点検出されている。歯の萌出程度や咬耗の具合いからみて、これらはすべて別個体のものであると考えられ、下顎骨からみると少なくとも6頭のイノシシの骨が存在している。下顎は前臼歯部で割られており、検出され

表28. 検出イノシシ下顎の年齢推定（Age Groupの基準は林ら（1977）による）

	試料番号	釘植歯牙	Age Group	推定年齢（週・月）
右側	1	M_1 p_4	I	7－8月
	2	M_3 M_2 M_1	V	55月以上
	4	p_4 p_3	I 以前	13週以下
左側	5	p_4 M_1	I	7－8月
	6	p_3 p_4	I 以前	13週以下
	7	なし（M_1 未萌出）	II	19−20月

た骨は前臼歯部から下顎枝にかけての部分が多い。各々の歯牙の釘植の様子と林ら(1977)によるAge Groupを示すと表28のようになる。左下顎骨として、下顎枝の部分のみが検出されているものが1点あるが、この骨の前方には未萌出の第3大臼歯が入っていたと思われる歯槽腔があり、これからAge Group IIのものと推定されたものである　歯牙の萌出状態でイノシシの年齢を推定すると、いわゆる「うり坊」に相当するAge GroupがI以前（13週未満）の個体が2頭、Age Group I（7～8ヶ月）が2頭、Age Group II（19～20ヶ月）が1頭、Age Group V（55ヶ月以上）が1頭含まれている　総じて若い個体が多いが、この様な現象は松江市西川津縄文遺跡（前期初頭）、米子市陰田縄文遺跡（前期初頭）米子市目久美縄文遺跡（前期）には認められなかった点であり、注目に値する。2点の下顎骨には下顎枝に横方向の解体痕が認められており、咬筋などを切って下顎をはずす際についたものであると考えられる。

環椎（第1頸椎）は4点検出されている。そのほかに、検出時にはお互いに離れたところから検出されたが、骨の同定の段階で、同一個体の連続した部分と思われる頸椎が見つかっている。それは、軸椎（第2頸椎）から第5頸椎にかけての部分である。この頸椎の並びを観察すると、第2頸椎の棘突起には破損が認められるが、発達の悪い第3～第5頸椎の棘突起には破損が認められない。また、第3～第5頸椎の横突起には両側ともに破損が認められる。これらの破損は固有背筋を切り取るために打割を受けたためによるものと考えてよいであろう。遺跡から検出されるシカやイノシシの椎骨には、犬などによってこれらの突起が咬みちぎられる場合があるといわれているが、この椎骨列の突起の破損状況をみる限り、犬の咬痕によるものとは思われない。寛骨では右側が1点検出されているのみである。

肩甲骨は右側が1点、左側が3点検出されている。上腕骨は近位端は検出されておらず、右側遠位端が1点、左側遠位端が2点検出されている。解体痕が認められるものは1点あり、遠位端の側面と後面に横方向の切痕が認められる。橈骨では、右側が2点、左側が1点検出されている。橈骨の近位端前面には横方向の解体痕が認められるものが含まれ

ている。尺骨は左が1点検出されているのみで、これは腕尺関節を中心とした部分である。

後肢骨では、大腿骨や膝蓋骨は検出されていない。脛骨では右側が2点、左側が3点検出されている。これらのうち、左右各1点が骨体部で、残りは遠位端である。解体痕が認められる骨は2点検出されており、1点は左骨体部の外側部に、横方向の解体痕をみとめる。もう1点は右脛骨遠位端に認められたもので、遠位端より約4cm上方の前面と後面に横方向の解体痕が、遠位端より約2cm上方の前面内側から外側下方にかけて斜方向の解体痕が認められる。

足根骨では距骨は検出されておらず、踵骨が左右各1点検出されているのみである。これらの骨は、遺跡から検出される場合、比較的よく保存されており、検出され易い骨であるが、本遺跡では極めて少ない。手足の骨としては、右第3中手骨が2点、左第3中足骨が1点検出されている。指骨では、基節骨が2点、末節骨が4点検出されているが、中節骨は検出されていない。

シカ

シカの主要検出骨リストを表29に示した。これでみる限り、最小個体数は5頭になるが、後述するように下顎骨から判断すると、最小個体数は9頭になる。イノシシが幼獣が数多く検出されているのに対し、シカは成獣が多く検出されている。

イノシシと同様、顔面頭蓋や脳頭蓋の原型をとどめるシカの骨は検出されていない。検出された上顎と下顎の歯牙の釘植状況、咬耗示数、及び推定年齢を表30に示した。この表に示した下顎のうち、No.5の左下顎、No.10の右上顎、No.14の左上顎は同一個体のものと考えられる。イノシシは乳歯を伴った幼獣が多いのに対し、シカは乳歯を伴った幼獣は1頭のみと少ない。ほとんどが生後2年～10年の成獣である。

表29. シカの部位別検出個体数

		右	左
鹿角		1	0
上顎骨		4	3
下顎骨		0	5
上腕骨	近位	4	0
	遠位	3	1
橈骨	近位	1	2
	遠位	2	0
尺骨		0	1
中手骨		0	1
肩甲骨		2	2
椎骨			
環椎		1	
軸椎		0	
寛骨			
大腿骨	近位	1	1
	遠位	0	0
脛骨	近位	0	0
	骨体部	0	2
	遠位	0	0
膝蓋骨		0	0
距骨		4	1
踵骨		1	0
中足骨		1	1

シカの下顎には解体痕が認められたものが多い。ほとんどすべての下顎に何等かの解体痕が認められたといっても過言ではない。これらの解体痕は頬側、舌側ともに認められるが、頬側の方が頻度が多い。解体痕は斜め前下方に向かうものと斜め後方に向かうものとの2種類が認められた。これらの解体痕の

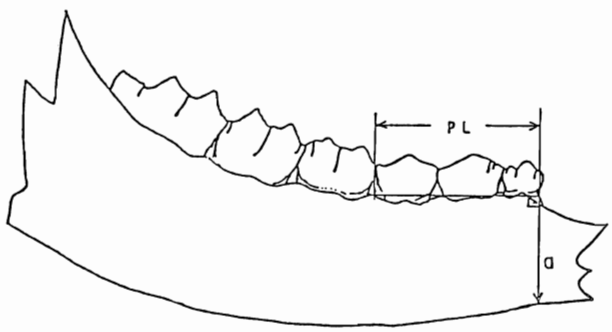
表30. 検出シカ上・下顎と推定年齢性別（咬耗示数、計測値の基準は大泰司（1980）による）

		試料番号	釘植歯牙						咬耗示数			計測値		推定年齢(年)	推定性別
									M_1	M_2	M_3	a	pl/a		
下顎	右側	1	M_3	M_2	M_1	P_3	P_2	P_1	2	3	4	23.0	63.7	6.5— 8	♀
		2	M_3	M_2	M_1	P_3	P_2		3	5	6			4	
		3	M_3	M_2	M_1	p_3	p_2	p_1	5	6				1.8以下	
		4	M_3	M_2	M_1	P_3	P_2	P_1	4	5	7	17.8	47.2	3— 4	♀
	左側	5		P_2	P_3	M_1	M_2	M_3	1	2	1	20.6	63.6	10以上	♀
		6	P_1	P_2	P_3	M_1	M_2	M_3	5	6	7	28.0	74.7	2	♂
		7		P_2	P_3	M_1	M_2		5	5		21.8	58.4	2— 3	♀
		8	P_1	P_2	P_3							(23)	(58)		♀
		9				M_1	M_2		1	2				8以上	
上顎	右側	10	M_3	M_2	M_1	P_3	P_2								
		11	M_3	M_2	M_1	P_3	P_2	P_1							
		12		M_2	M_1	P_3									
		13	M_3	M_2	M_1										
	左側	14	P_1	P_2	P_3	M_1	M_2	M_3							
		15					M_2	M_3							
		16				M_1	M_2								

線条はお互いに平行して認められることから、ある一定の角度でもって筋肉を外したものと考えられる。No. 2とNo. 8の下顎骨頬側面には細かいほぼ規則正しい間隔を有する線条が幅数*cm*にわたって観察された。この様な細かい規則的な解体痕は、これまで筆者がかかわってきた山陰各地の縄文遺跡から検出された動物遺存体には認められなかったものである。この解体痕はヘラ状の鉄器によって骨から筋をそぐようにしてはずす時についたものと考えられ、規則正しい細かい線条は刃先の微細な刃こぼれを反映したものであろう。

鹿角では、ほぼ完形の右鹿角が1点と、鹿角の破片が8点検出されている。破片には長軸と直交する方向に認められた鉄斧のものと思われる加工痕や長軸方向に走る小刀状のものと考えられる加工痕が認められるものが3点含まれている。ほぼ完形の鹿角は角座をつけており、捕獲された後、鹿角をはずしたものである。

環椎（第1頸椎）は1点検出されているのみで、軸椎（第2頸椎）は検出されていない。肩



第194図 性別査定のためのシカ下顎計測点（大泰司、1980による）

甲骨は右側が2点、左側が2点検出されている。左側の肩甲骨は関節部を欠いている。肩甲骨のうち2点に解体痕が認められた。これらはいずれも肩甲骨の肋骨面に認められ、また、肩甲骨上縁、下縁にも認められた。

上腕骨は右側遠位端が3点、左側遠位端が1点検出されており、近位端は検出されていない。解体痕では、右側遠位端の前面外側に鉄斧のようなもので横方向に叩いたような解体痕が認められるものが1点、左側遠位端の前面外側に同様の解体痕が認められたものが1点ある。これらの著明な解体痕がいずれも外側に認められたことは、当時のシカの解体様式を知るうえで興味深い。

橈骨では、左側橈骨の近位端が2点、右側橈骨の近位端が1点右側橈骨の遠位端が2点検出されている。左側橈骨のうちの一つは近位端から骨体部にかけてのものであり、遠位端を欠く。検出されたすべての近位端前面に横方向の解体痕が認められた。遠位端には解体痕は認められなかった。尺骨では、左尺骨の腕尺関節の部分が1点検出されているのみである。

大腿骨では近位端の部分が左右各1点検出されている。左側のものは大腿骨頭が存在するが、右側のものは打割を受けて欠損している。左側大腿骨頭直下の内側に横方向に走る解体痕が認められた。脛骨では、左側脛骨の骨体の部分が2点検出されているのみである。踵骨は左側が2点検出されている。距骨は右側が4点、左側が1点検出されている。

手足の骨では左中手骨が1点、中手骨の骨片が2点、右中足骨が1点、左中足骨が1点、中足骨片が2点検出されている。左中手骨には骨折治癒が認められた。この骨の骨折は骨折の種類からいえば斜骨折で骨折面がずれて癒合した後、骨折面断端の骨組織が吸収、再生され新しい骨構築をなしている。骨折面は近位関節面の内側下方4*cm*のところから外側下方6*cm*のところにかけて走っている。このため中手骨前面に走る溝が異常に弯曲している。この骨の外側面には、外側方向から叩いたものと思われる横方向の解体痕が4ケ所にわたって認められた。この様な解体痕は遺跡から検出される骨には余り認められないものである。このシカは狩猟された時点において左中足骨の部位の下肢は外反していたと考えられるが、解体に携わった弥生人が下肢が曲がっているシカを見て骨折治癒後の骨が弯曲している部位を意識的に叩いているのは興味深い。指骨では基節骨が9点、中節骨が2点検出されているが、末節骨は検出されていない。

ニホンザル

左下顎が1点、遊離歯として検出された左下顎第2大臼歯と右上顎第2大臼歯が1点づつ、左大腿骨近位端が検出されている。このうち、左下顎は下顎枝の部分を欠き、第1小

臼歯から第3大臼歯にかけての歯牙が釘植しているが、第1大臼歯を欠く。この第1大臼歯は先天的に欠けているもので、歯牙の欠損例である。左大腿骨は近位骨端から骨体部にかけてのものであるが、骨体部は Spiral fracture の断面を示し、人為的に割られたものものであることを示している。

ムササビ

上顎切歯と下顎切歯がそれぞれ2本づつ、左側踵骨が1点検出されている。

アナグマ

頭蓋骨が2点と下顎骨が1点検出されている。頭蓋骨のうちの1点は左右の上顎骨をともなった鼻部の部分であり、眼窩の前方で前額断されている。もう1点は左上顎骨で矢状方向に割られているように見受けられる。下顎骨は右下顎骨の関節突起の部分である。

タヌキ

右下顎骨が2点検出されている。一点は第1前臼歯から第1大臼歯にかけての歯牙が、もう一点は第2前臼歯から第1大臼歯にかけての歯牙が釘植している。何れも下顎枝の後部を欠いている。

イタチ

左上顎が1点検出されている。そのほかに大きさから判断してイタチのものらしい歯牙が数点遊離歯として検出されているが、確言できない。

2）鳥類、両生類、爬虫類

ハクチョウは左尺骨の骨体部が1点検出されている。解体痕は認めないが、割れ口の形状からして人為的に割られたものであろう。オオミズナギドリは右翼状骨が1点検出されている。また、ツル科の右大腿骨遠位端が1点、スズカモ属の左上腕骨遠位端が1点と右跗蹠骨が1点、スズメ目と思われる脛骨が1点検出されている。そのほか、種属を特定できない左跗蹠骨が1点と胸骨側肋骨が1点検出されている。

ヒキガエルでは左右の肩甲骨が各1点、雄の左上腕骨が1点、雌の左上腕骨が1点、右橈尺骨が2点、左橈尺骨が1点、右腸骨が3点、左側仙骨が1点、左脛腓骨が1点検出されている。ヤマアカガエルでは雌の右上腕骨が1点、右腸骨が4点、左腸骨が2点検出されている。ツチガエルでは雄の左上腕骨が3点、雌の右上腕骨が1点、雌の左上腕骨が2点検出されている。トノサマガエルでは雌の左上腕骨が1点、右腸骨が1点、左腸骨が3点検出されている。カエル類では、この他にも種を特定できない椎骨2点をふくめ、歯骨などの部分骨が数多く検出されている。

爬虫類ではヘビのものと考えられる椎骨が6点検出されている。

3）魚類

本遺跡から検出された魚種については先のリストに挙げた通りであるが、まだ未同定の骨も含まれている。今後さらに魚種の増える可能性がある。本遺跡の主要な魚骨はフナ、クロダイ、スズキであるが、なかでもフナの検出数が最も多い。

本遺跡の魚骨で最も顕著なのがこのフナの主鰓蓋骨である。この主鰓蓋骨は右側では21点、左側では23点、破片が103点検出されている。これについで数多く検出されているのがフナの下鰓蓋骨で右側が32点、左側が38点検出されている。フナでは他に第３脊椎が１点、他の部位の脊椎が２点、下顎歯骨が２点検出されている。これらの骨は現生種と比較検討したところギンブナに一番近いと思われるが、ここでは一応フナとしておきたい。

ナマズは胸鰭条が１点検出されている。各種のナマズと比較検討したが、種を同定するに至らなかった。

クロダイは左右の前上顎骨がそれぞれ５点、左下顎歯骨が１点、左右の上顎骨がそれぞれ１点、右涙骨が３点、左涙骨が１点、左角骨が２点、右前鰓蓋骨が２点、左前鰓蓋骨が１点、左右の舌顎骨がそれぞれ１点検出されている。

カンダイは左前上顎骨の一部が１点、右上咽頭骨が１点、下咽頭骨の尾方部分の破片が２点、同じく右方部分の破片が１点検出されている。

スズキは左上顎骨が３点、右下顎歯骨が１点、左右の方形骨がそれぞれ２点、左角骨が２点、右主鰓蓋骨が１点検出されている。

その他の魚骨としては、コチは右左の上顎骨がそれぞれ１点と脊椎が２点検出されている。ダツは左右の歯骨がそれぞれ１点検出されている。ハゼは脊椎が１点検出されているのみである。マイワシは腹椎が１点、尾椎が１点検出されている。アイナメの仲間と考えられる左前上顎骨が１点、ニシン科のものと考えられる椎骨が１点検出されている。

4．考　　察

これまでに知られている山陰地方の弥生時代貝塚としては、出雲地方の矢野遺跡、知井宮多聞院貝塚が知られているにすぎない。これらの遺跡から、狩猟の対象となった動物遺存体が検出されてはいるが、詳細な報告はなされていない。また、その他の弥生遺跡で動物遺存体をともなった例としては、平田市猪ノ目洞窟遺跡や美保関町小浜洞窟遺跡などが知られているが、これとても詳細な報告はなされておらず、最近になってタテチョウ遺跡などで動物遺存体の分析がおこなわれるようになってきたのが現状である。今回発掘され

た西川津弥生中期遺跡は、質量ともにこれらの遺跡を上回り、これまで資料の少なかった山陰地方の動物相や当時の動物の解体様式や食生活を解明する上で貴重な遺跡である。

今回明らかにされた動物遺存体から特徴的なことをいくつか挙げてみよう。まず、今回報告した弥生中期の西川津遺跡は、宍道湖近傍に立地した遺跡であるが、そこで営まれた漁撈活動は、当時の朝酌川～宍道湖にかけて棲息していたと思われる汽水～淡水性の魚種を中心としている。前回報告した縄文前期の本遺跡の場合は、フグ、クロダイ、マダイ、スズキなどが検出されているが、フグやマダイに関しては、島根半島北岸での漁撈活動、もしくはこの地方との交易を考えざるをえなかった。今回検出された魚種の多くは、当時の宍道湖の本遺跡周辺の環境下で捕れるものが大部分であり、本遺跡の縄文初頭相当層から検出されたフグやマダイは一点も検出されていない。当時の人々が稲作農耕をおこないながら、本遺跡に定着した生活を送っていた一つの傍証ともみることができよう。しかし、一方では、縄文時代に引続き島根半島を越えての交流がおこなわれてきたに違いない。それは、石器の原料として、隠岐島から運んできたと考えられる黒曜石の製品が数多く検出されていることに加え、カンダイ等の外洋性の魚や、ムラサキウニ等の遺跡の近傍では採取不可能であった動物遺存体が本遺跡から検出されていることにもよる。

今回明らかになった本遺跡の動物種数は、これまで知られていた山陰地方の縄文遺跡から検出された動物遺存体に比べて、極めて多彩である。検出された弥生の貝層をすべて取り上げ、水洗選別によって遺物を検出したという山陰では初めての発掘作業による事も大であるが、同様の方式でなされた本遺跡の縄文時代の動物遺存体に比べても動物種は多岐にわたっている。なかでも、ハクチョウ、カエル、ムササビの骨は山陰地方の動物遺存体としては初めて検出されたものである。

次に、動物遺存体に占めるシカやイノシシの割合が低いことも一つの特徴である。今回報告した動物遺存体は、多数のヤマトシジミを中心とした貝塚から検出されたものであるが、シジミやフナを中心とする漁撈活動によって、シカやイノシシの狩猟活動の必要性が少なくなってきたことによるものかも知れない。

イノシシとシカを比べてみると、シカが成獣～老獣を狩猟対象としているのに対し、イノシシは幼獣が多いことも本遺跡の動物遺存体の特徴といえよう。検出個体数が少ないので確言できないが、このことはイノシシの飼育がおこなわれていたことを示唆するものかも知れない。金子と牛沢（1980）は大阪の池上遺跡から出土したイノシシの年齢構成が低いことや中国の遺跡から出土したイノシシの年齢構成の類似性から、イノシシが家畜化されていた可能性があるとして記している。池上遺跡から検出されたイノシシは第3後臼歯

が萌出するかしないかの時期のものが多いが、本遺跡から検出されたイノシシは乳歯を伴うものが多く、これよりはもっと若年の個体が多い。松井（1986）によると、大阪の亀井遺跡は池上遺跡と同様なイノシシの年齢構成を示したが、シカについても若い個体が多く認められるので、亀井遺跡の場合はイノシシの飼育を考えることは困難で、農耕開始に伴う人口増加による狩猟圧が高まった結果、捕獲される動物が相対的に若令化したとみるほうが合理的であるとしている。しかし、本遺跡の場合は、シカは幼獣が多いのに対し、イノシシは乳歯を伴う幼獣が多い。検出された個体数が少ないので確言はできないが、イノシシの家畜化は念頭においておかなければならないであろう。

今回検出された動物骨で火を受けているものは極めて少ない。数100点にのぼる検出骨のうち、火を受けているものはわずかに2点である。正確な値は産出していないが、これまでの山陰地方の縄文遺跡から検出された動物依存体に認められた火を受けた骨の割合に比べると、極度に少ないと言わざるを得ない。

最後にイノシシ、シカを中心とした動物の解体様式について触れておきたい。本遺跡から検出された獣骨には、先にも述べたように数々の解体痕が確認された。その数は総じて縄文遺跡の動物の解体痕よりも多く、かつ明瞭なものが多い。これらの獣骨の検出層である弥生中期といえば、鉄器がかなり普及してきた時期であり、解体痕の中には鉄器によるものとしか考えられないものが存在している。解体様式もほぼ定型化していて、下顎骨に付着する筋肉のはずしかた、四肢の打割の方向などに規則性が認められた。この点については、再度詳細な検討を加えて、別稿で明らかにしたいと考えている。

5. おわりに

以上、本遺跡から検出された動物遺存体を報告したが、これまでに報告された山陰地方の縄文時代の動物遺存体には認められなかったいくつかの所見が明らかになった。これまでに発掘調査されたいくつかの貝塚の動物遺存体についても詳細な検討をおこなう必要性を感じている。

稿を終るにあたり、本遺跡の動物遺存体の検討の機会を与えて頂いた島根県文化課の内田律雄氏を始め島根県教育委員会の関係各位に御礼申し上げる。また、国立科学博物館の小野慶一、野刈谷保、国立奈良文化財研究所の松井章、千葉県立文化財センターの小宮孟の諸氏には動物遺存体の同定に関してお世話になった。記して御礼申し上げる。

6. 参 考 文 献

井上貴央（1984）陰田縄文遺跡の動物遺存体について。陰田、120—123
井上貴央（1986）目久美遺跡より検出された動物遺存体について。加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書。129—138　米子市教育委員会
井上貴央（1987）西川津縄文遺跡から検出された動物遺存体について。西川津遺跡発掘調査報告書 Ⅲ、266—275
大泰司紀之（1980）遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別年齢死亡季節査定法。考古学と自然科学、133、51—72
金子浩昌（1979）脊椎動物遺体。タテチョウ発掘調査報告書、Ⅰ、194—199
金子浩昌（1987）タテチョウ第2次調査出土動物遺存体。タテチョウ発掘調査報告書、Ⅱ、200—211
金子浩昌・牛沢百合子（1980）池上遺跡出土の動物遺存体。池上遺跡、四ツ池遺跡発掘調査報告書、第6分冊自然遺物編、9—25
林良博・西田隆雄・望月公子・瀬田季茂（1977）日本産イノシシの歯牙による年齢と性の判定。日本獣医誌、165—174
松井　章（1986）亀井遺跡（切り広げ部）出土の動物遺存体の分析。亀井（その2）近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書、423—465

図版説明

図版82（1～17；イノシシ。縮尺；すべて1/2）

1. 左上顎（p_3を伴った幼獣）2. 左上顎（P_4～M_2）3. 右下顎（p_4、M_1を有する幼獣）4. 右下顎（M_1～M_3、咬耗はかなり進んでいる）5. 右下顎（p_3、p_4を伴った幼獣）左下顎（下顎枝から下顎角にかけての部分）7. 左下顎（p_3、p_4を有する幼獣）8. 左下顎（P_4、M_1を有する。M_1は萌出したばかり）9.第2頸椎（軸椎）～第5頸椎（a；側面観、b；腹面観。これら4個の椎骨はそれぞれ別の場所で検出されているが、同一個体のものであり、このように交連可能である）10-13.第1頸椎（環椎）14.右肩甲骨　15-17.左肩甲骨

図版83（1～24；イノシシ。縮尺；すべて1/2）

1.右上腕骨近位端　2-3.左上腕骨近位端　4-5.右橈骨（近位～骨体部）6.左橈骨近位端　7.左尺骨　8.右寛骨　9.右脛骨骨体部　10.左脛骨骨体部　11.右脛骨遠位端　12-13.左脛骨（骨体部～遠位端）14.右踵骨　15.左踵骨　16-17.基節骨　18-20.中節骨　21-24.末節骨

図版84（1～11；シカ。縮尺；すべて1/2）

1.左上顎（M_2、M_3）2.左上顎（M_1、M_2）3.右上顎（P_1～M_3）4.右上顎（P_3～M_2）

5.右上顎（M_1～M_3）6.左上顎（P_1～M_3）7.右上顎（P_2～M_3）8.左右上顎（6と7の上顎は同一個体のものであり、これを組み合わせたもの。尚、この上顎に対応する下顎は図版85の6であって、これらを組み合わせた側面観を図版85の10に示した）9.右鹿角(角座を有しており、解体時にはずされたもの。割口は新しい）10-11.加工痕の残る鹿角片

図版85（1～10；シカ。縮尺；すべて1/2）

1.右下顎（試料番号3、p_1～p_3、M_1～M_2を伴う。M_3は未萌出）2.右下顎（試料番号1、P_1～M_3）3.右下顎（試料番号2、P_2～M_3）4.右下顎（試料番号4、P_1～M_3）5.左下顎（試料番号8、P_1～P_3）6.左下顎（試料番号5、P_2～M_3、咬耗はかなり進んでいる。図版84の6、7の上顎と同一個体）7.左下顎（試料番号6、P_1～M_3）8.左下顎（試料番号7、P_2～M_2）9.左下顎（試料番号9、M_1～M_2）10.左上下顎（上顎（図版84の6、7）と下顎（図版85の6）を組み合わせた側面観）

図版86（1～21；シカ。縮尺；すべて1/2）

1.軸椎（第1頸椎）2.左肩甲骨　3-4.右肩甲骨　5-7.右上腕骨遠位端　8.左上腕骨遠位端　9.右橈骨近位端　10-11.右橈骨遠位端　12-13.左橈骨近位端　14.左尺骨　15.右大腿骨近位端（骨頭を欠く）16.左大腿骨近位端　17.右寛骨　18-19.左寛骨　20-21.左脛骨（骨体部）

図版87（1～24；シカ，25～27；アナグマ、28～29；タヌキ、30；イタチ。縮尺；1～24は1/2、25～30は原寸）

1-2.左踵骨　3-6.右距骨　7.左距骨　8-9.中手骨片　10.左中手骨　11.中足骨片　12.右中足骨　13a，b.左中足骨（a；前面観、b；外側面観。斜骨折を起こし癒合治癒したもの。外側面には横方向に走る解体痕が認められる）14-17.基節骨　18-24.中節骨　25a，b.アナグマ上顎（a；上面観、b；下面観。眼窩前方で前額断されている）26a，b.アナグマ左上顎（a；側面観、b；下面観）27.アナグマ右下顎骨関節突起の部分）28-29.タヌキ右下顎骨　30a，b.イタチ左上顎（a；側面観、b；下面観）

図版88（1～4；ニホンザル、5～9；ムササビ、10～11；ネズミ類、12；ハクチョウ、13；オオミズナギドリ、14；スズメ目、15；ツル科、18～19；スズガモ属、14と17；鳥類種属不明、20～25；ヘビ類、26～37；ヒキガエル、38～44；ヤマアカガエル、45～50；ツ

チガエル、51～55；トノサマガエル。縮尺；1と4は1/2、他は原寸）

1a，b.ニホンザル右下顎骨（a；側面観、b；上面観。M_1は先天的に欠損している）2.右上顎第2大臼歯　3.左下顎第2大臼歯　4.左大腿骨（骨体部は意識的に割られたものである）5-6.ムササビ上顎切歯　7-8.下顎切歯　9.左踵骨　10.ネズミ類右寛骨　11.ネズミ類左寛骨　12.ハクチョウ左尺骨骨体部　13.オオミズナギドリ右翼状骨　14.鳥類胸側肋骨　15.スズメ目脛骨　16.ツル科右大腿骨遠位端　17.種属不明　18.スズガモ属右跗蹠骨　19.スズガモ属左上腕骨遠位端　20-25.ヘビ類椎骨　26.ヒキガエル右肩甲骨　27.左肩甲骨　28.左上腕骨（♂）29.左上腕骨（♀）30.左脛腓骨　31-33.右腸骨　34.右仙骨　35-36.右橈尺骨　37.左橈尺骨　38.ヤマアカガエル右上腕骨（♀）39-42.右腸骨　43-44.左腸骨　45-47.ツチガエル左上腕骨（♂）48.右上腕骨（♀）49-50.左上腕骨（♀）51.トノサマガエル左上腕骨（♀）52-54.右腸骨　55.左腸骨

図版89（1～32；フナ。縮尺；すべて原寸）

1-6.右主鰓蓋骨　7-12.左主鰓蓋骨　13-20.右下鰓蓋骨　21-28.左下鰓蓋骨　29.右下顎歯骨　30-32.椎骨

図版90（1～24；クロダイ、25～35；スズキ、36～40；カンダイ、41～44；コチ、45～46；ダツ、47；アイナメ、48；カサゴ、49；ナマズ、50；ハゼ、51-52；マイワシ、53；ニシン。縮尺；すべて原寸）

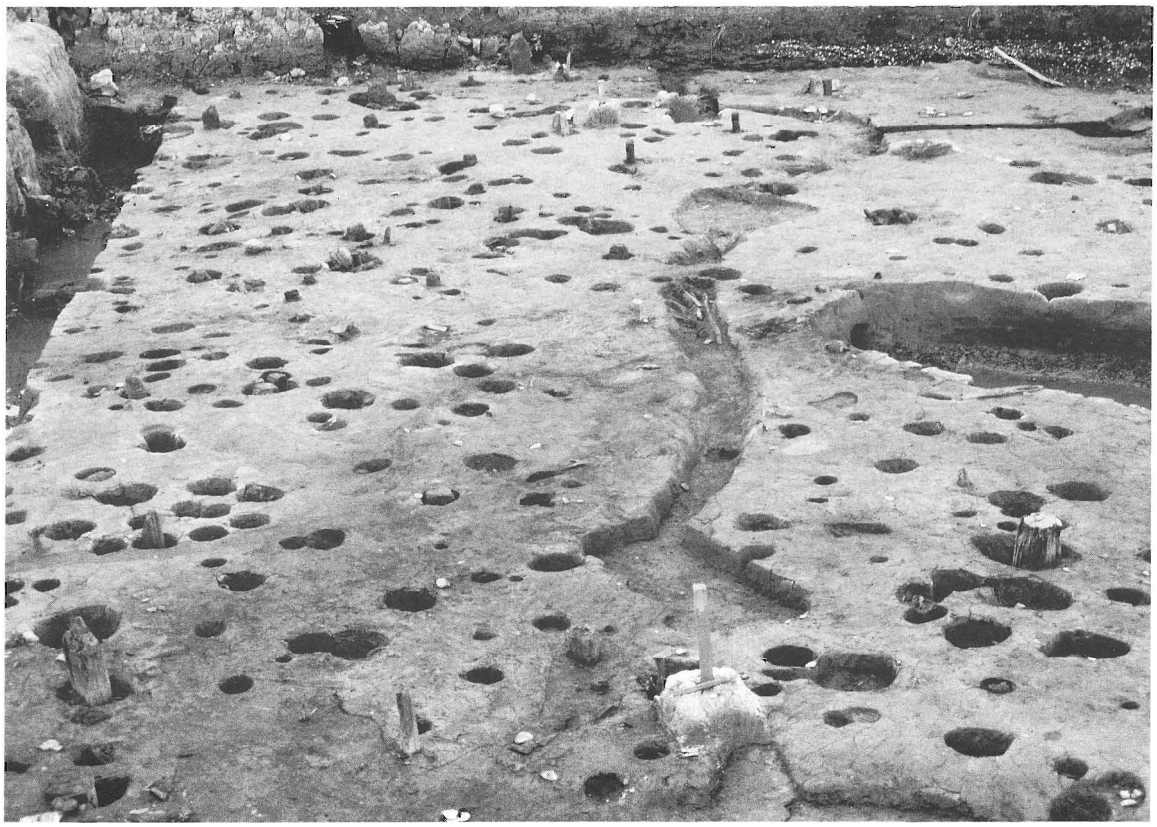
1-5.クロダイ右前上顎骨　6-10.左前上顎骨　11.左下顎歯骨　12-13.左角骨　14.右上顎骨　15.左上顎骨　16-18.右涙骨　19.左涙骨　20.右舌顎骨　21.左舌顎骨　22-23.右前鰓蓋骨　24.左前鰓蓋骨　25.スズキ左下顎歯骨　26-28.左上顎骨　29.右主鰓蓋骨　30-31.左角骨　32-33.右方形骨　34-35.左方形骨　36.カンダイ左前上顎骨　37-39.下咽験骨　40.上咽頭骨　41.コチ右上顎骨　42.左上顎骨　43-44.椎骨　45-46.ダツ歯骨　47.アイナメ左前上顎骨　48.カサゴ右前鰓蓋骨　49.ナマズ胸鰭棘　50.ハゼ椎骨　51-52.マイワシ椎骨　53.ニシン椎骨

写　真　図　版

凡　例

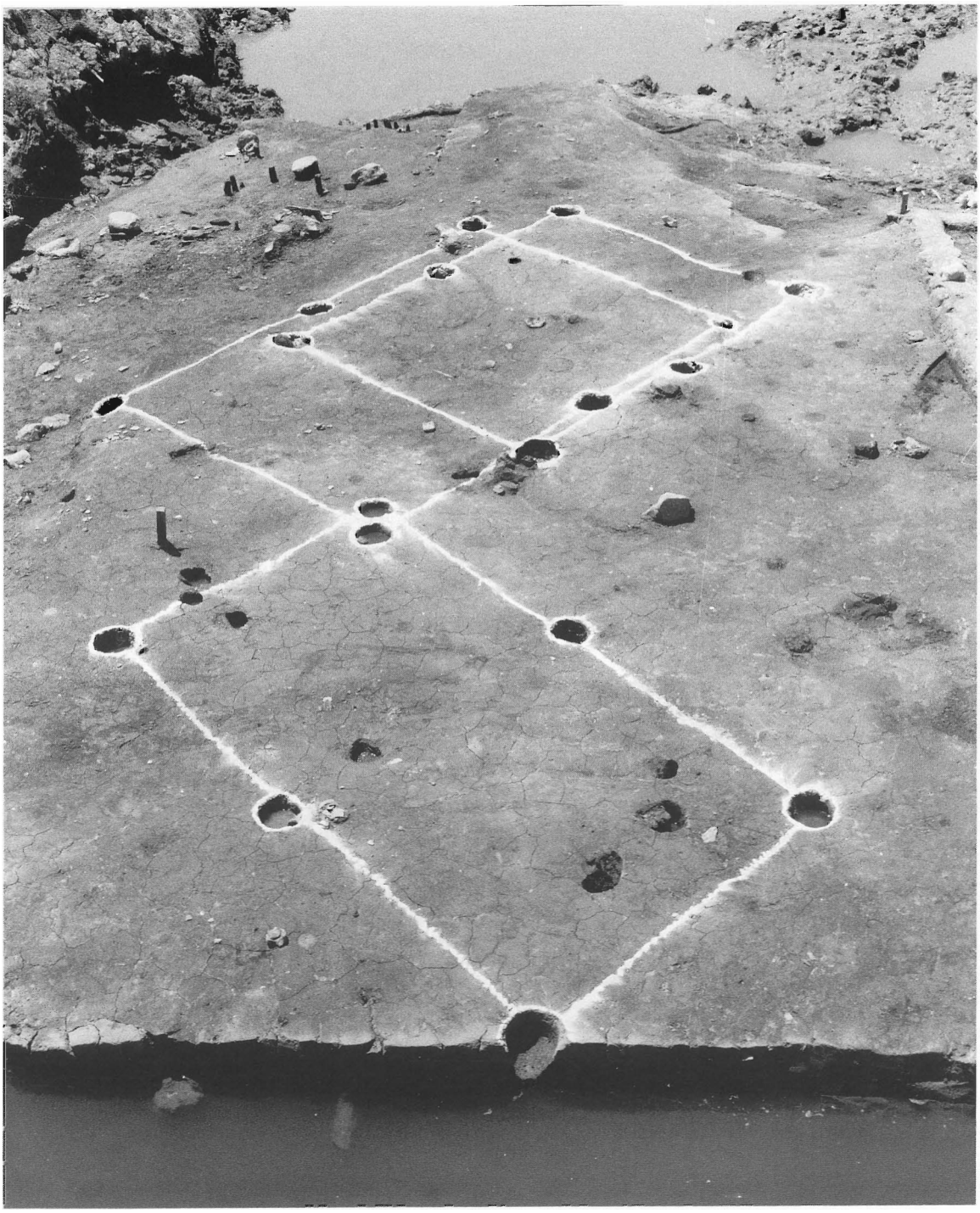
○ 158-14は本文第158図14

弥生時代中期の遺構面（西より）



弥生時代中期の遺構面（東より）

図版 2



SB・01・02・03

P21

柱穴各種

P23

図版 4

SK・02（南より）

SK・02（北より）

SK・02（西より）

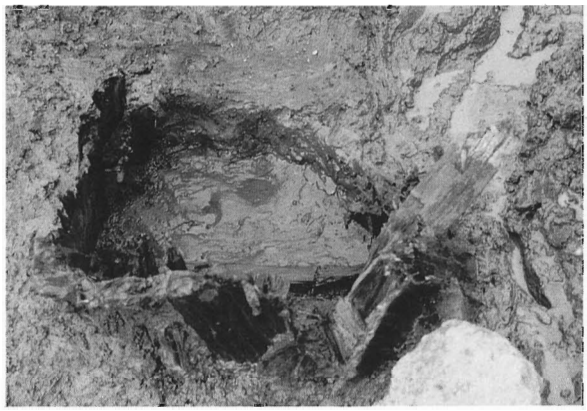
SK・02内木製鍬

SK・03（東より）

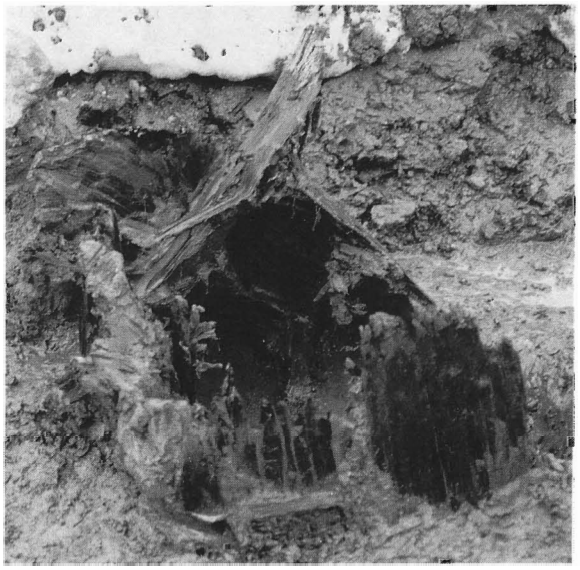
SK・03（南より）

図版 6

SK・04



SK・04



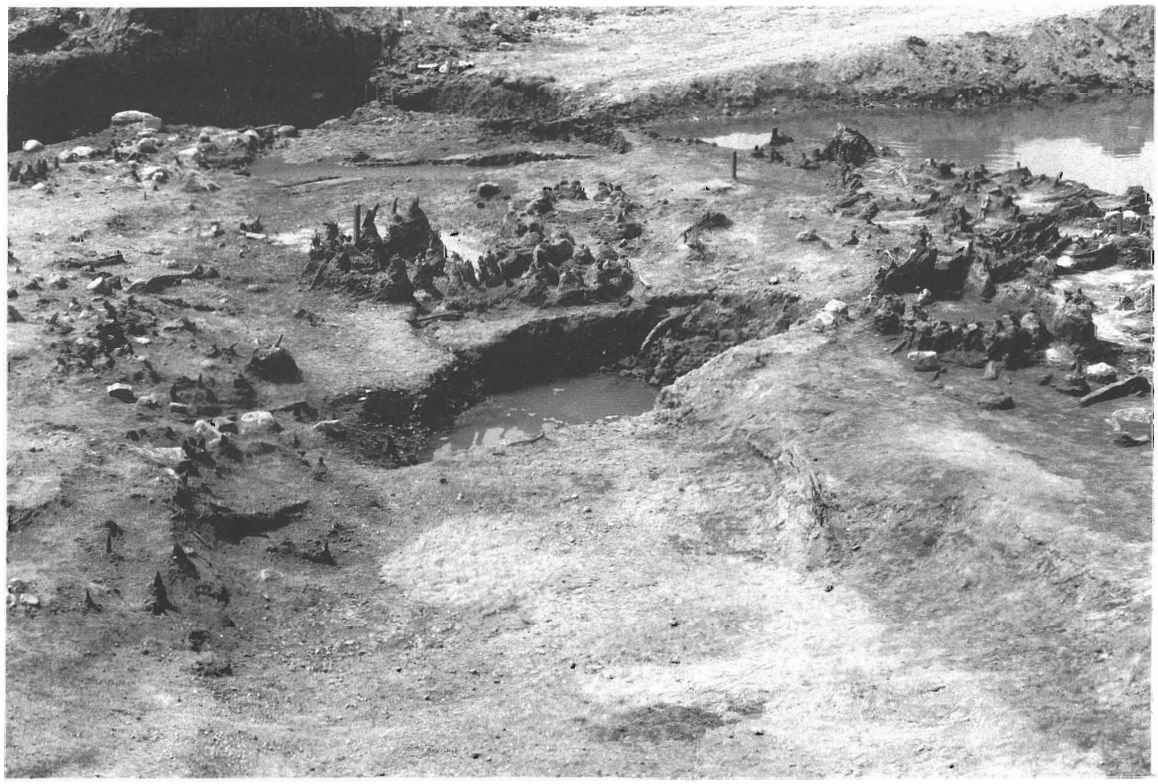
SK・04

SK・04

SK・04内 ドングリ

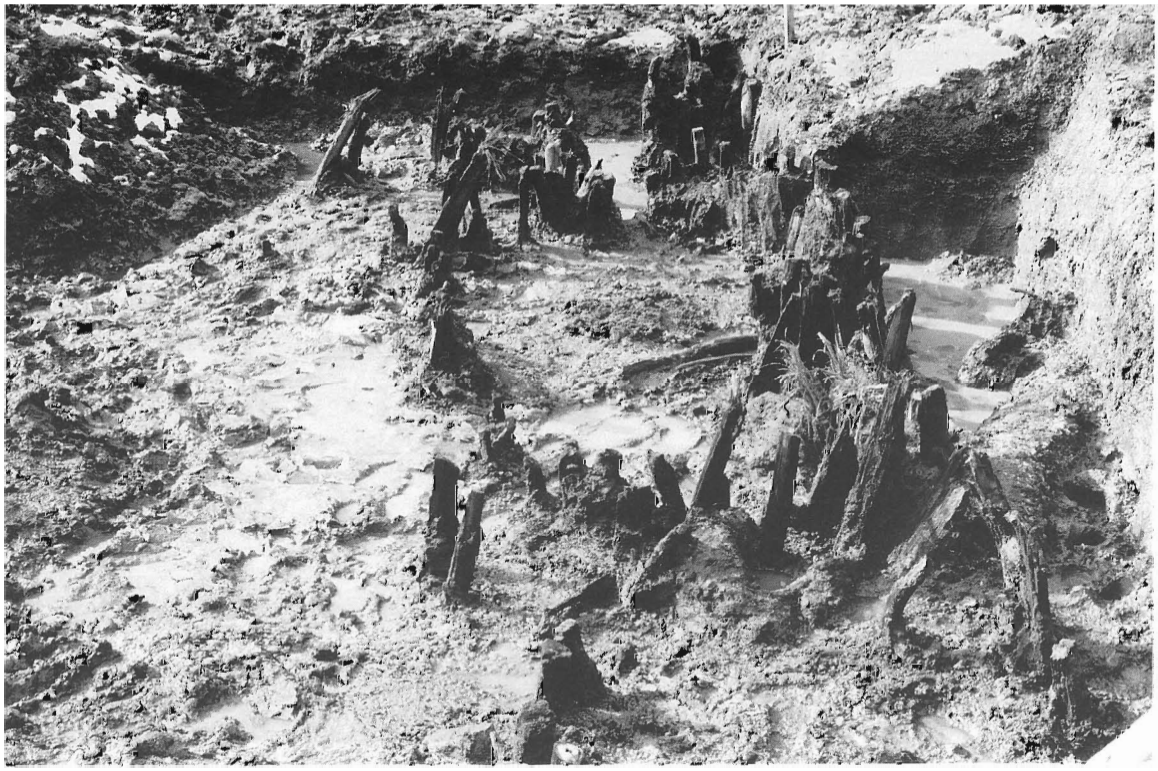
同　左

溝 状 遺 構（北より）



溝 状 遺 構（南より）

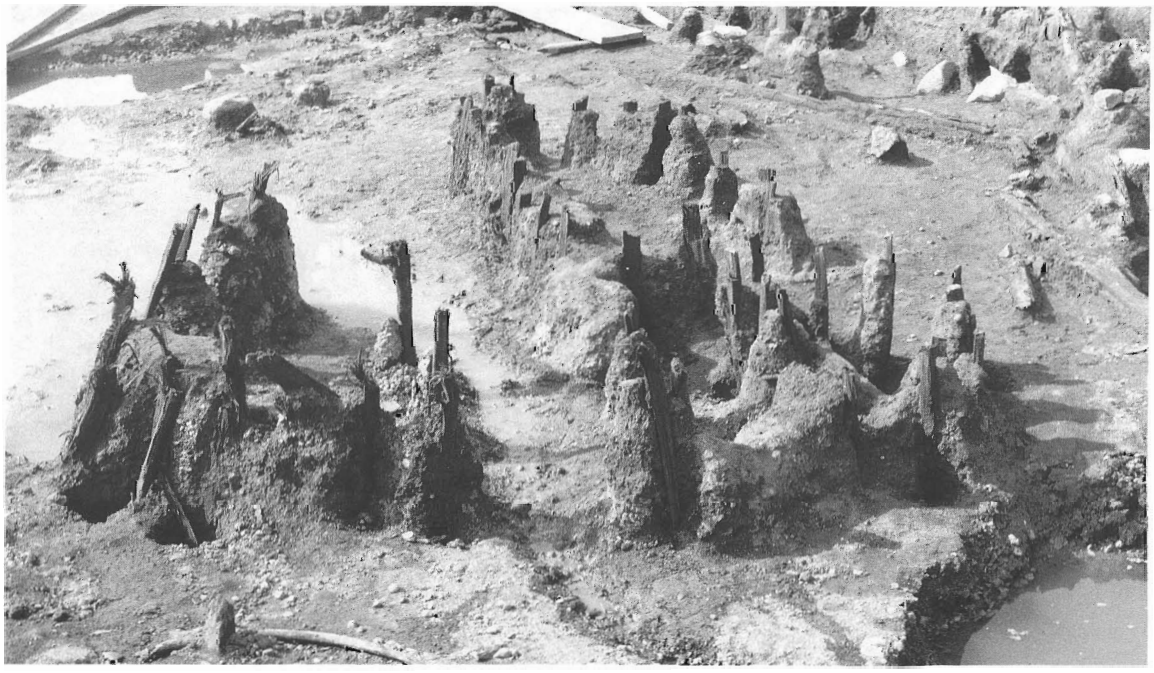
図版 8



SZ・05～09

SZ・05～09

SZ・010～013

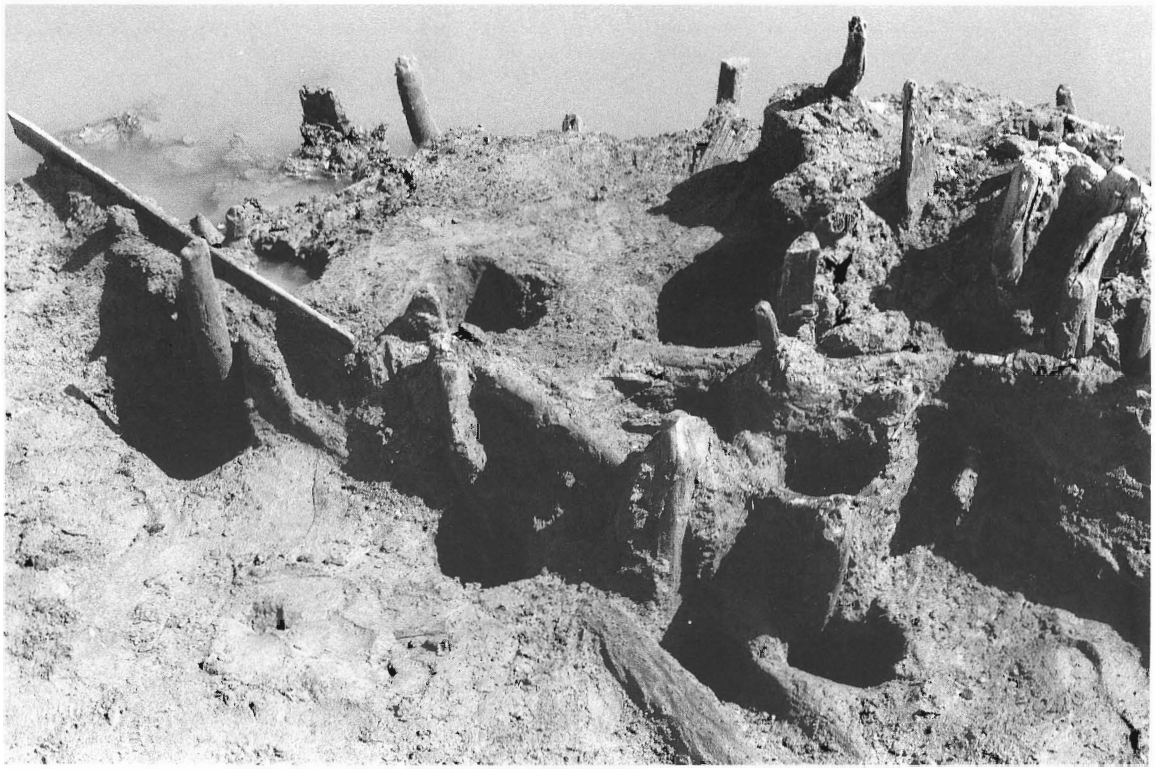


SZ・010～013

図版10

SZ・010～013

SZ・010～013



SZ・013

SZ・014

図版12

SZ・014

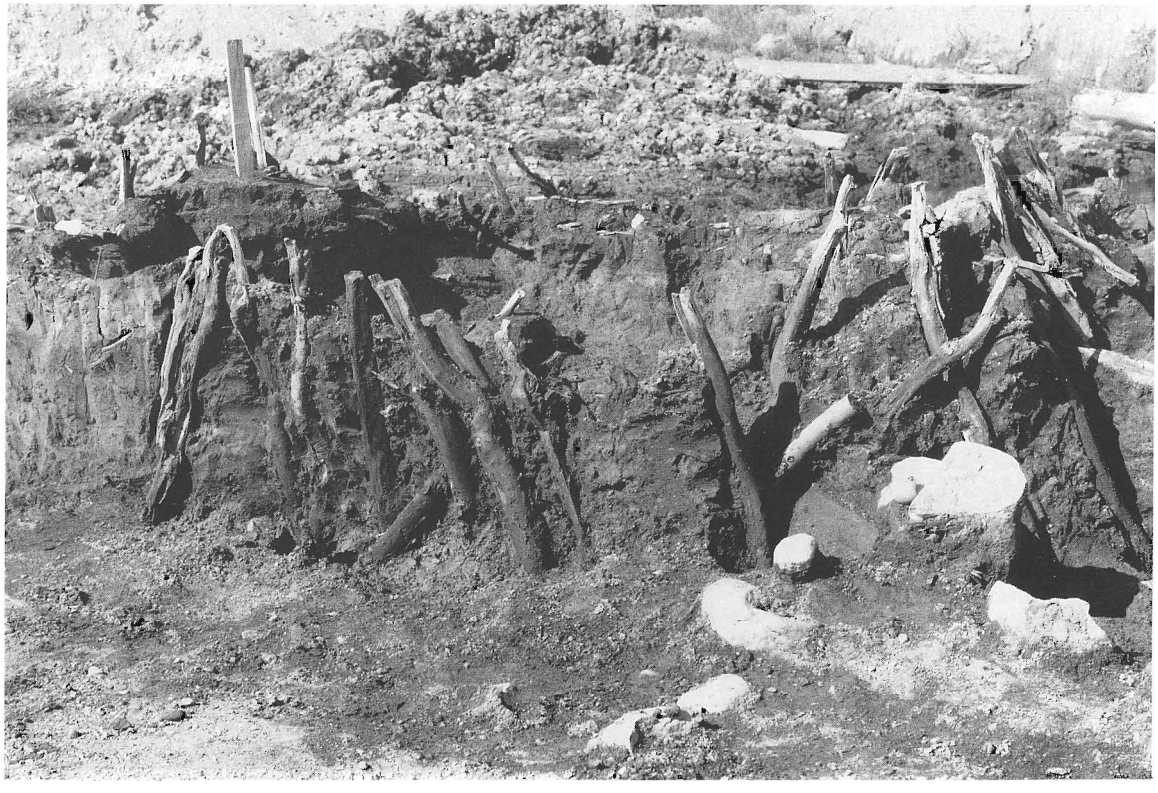
SZ・015

SZ・017

SZ・017

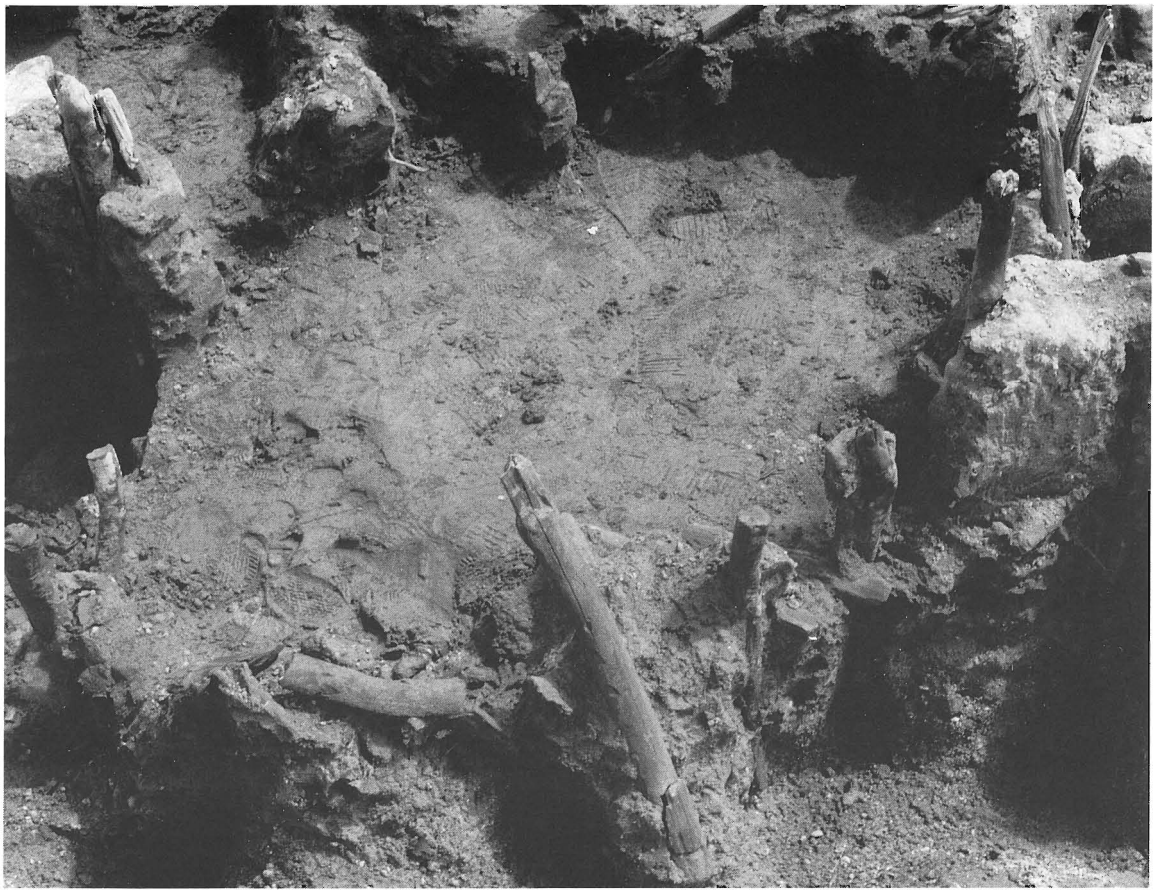
図版14

SZ・018



SZ・018

図版16



SZ・016

SZ・020～023